

デート・ア・ライブ the blue fate

小坂井

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

DEM——イギリスの首都ロンドンに本社を置くこの会社から一人の少年が日本へ飛び立った。

人には言えないいくつもの秘密を背負ったその少年は一人、一つの組織、そして一人の少女と出会い『運命』が大きく変わっていく。

オリ主のイメーজCVは中村悠一さんです。

2 3 話	2 2 話	2 1 話	2 0 話	1 9 話	1 8 話	1 7 話	1 6 話	1 5 話	1 4 話	1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
200	187	180	173	166	159	152	144	137	127	119	110	102	93	81	72	63	50	40	29	20	10	1

目
次

4 4 4 4 4 4 4 4 4 3 3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2 2
8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4
話 話

427 418 411 404 395 385 373 361 350 341 332 324 316 309 302 294 284 276 262 254 243 234 224 216 208

7
3
話

7
2
話

7
1
話

7
0
話

6
9
話

6
8
話

6
7
話

6
6
話

6
5
話

6
4
話

6
3
話

6
2
話

6
1
話

6
0
話

5
9
話

5
8
話

5
7
話

5
6
話

5
5
話

5
4
話

5
3
話

5
2
話

5
1
話

5
0
話

4
9
話

663 654 646 633 625 618 609 594 584 573 565 558 550 544 534 527 505 497 488 480 471 464 455 445 435

番外編	番外編	番外編	番外編	番外編	番外編	番外編	番外編	7 8 話	7 7 話	7 6 話	7 5 話	7 4 話
7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話						
791	783	773	766	757	748	740		717	707	692	682	675

1話

『精霊』

その存在が確認されたのは三十年前の『空間震』という出来事が始
めであった。空間震とは空間の地震と言われる。広域振動現象で
ある。

空間震が起こった場所はまるで隕石でも落ちたかのような大きな
被害が出てしまう。

そして世界で最初に起きた三十年の空間震の被害はユーラシア大
陸の真ん中を大きく抉りとり死傷者は約一億五千万人と言われてい
る。

そしてその空間震が起こった後も規模は小さいがさまざまな場所
で空間震が確認された。海上や陸上も関係なく規則性もなく…。

しかし人類もなにもしていなかったわけでない。空間震の前兆を
確認したり、地下シエルターを作ったりして空間震に対抗した。

そして空間震が発生した時、姿を現すのが『精霊』である。精霊
は全員女性のような姿をしていて、空間震と共に現れることと圧倒的
戦闘能力を持っている。

分かっているのはこれぐらいで存在理由、発生原因、どこに存在す
るかも不明で分かっている事より分からない事の方が多い。

これは精霊と邂逅する一人の少年の物語…

ある部屋の中、そこはとても広く装飾品の数々に高級そうなソファ
とテーブルが置いてある。

そして部屋には二人の男性のおり、一人は部屋の奥にある一番大き
な机と椅子に座っていて、もう一人はソファに座りながらテーブルで
コーヒーを作っていた。

「君が私に話とは珍しいじゃないか」

そう話し出したのは奥の机に座っている人物だった。

その人物は黒いタキシードに白いネクタイをしており、歳は三十代
かと思わせる。そして肌と髪がネクタイと同じ色の白で日光に一度

も当たってないかと思ってしまう。その容姿は綺麗な目に口という整った顔であった。

「まあ、ちよいと社長さんに頼み事があるましてね。」

ソファに座っていた人物は軽くそう答えた。

歳はまだ二十歳にも届いてないほど若く、こちらも白い髪をしており服装もタキシードで容姿も一人目と同じく整っていて綺麗な顔をしている

「休暇をもらってもいいですか？・・・三年ぐらい」

「随分長い休暇だね。」

「少し普通の生活を過ごして見たくありませんか？」

「正直、君に抜けられると随分困るんだが… 一体どこに行くつもりだ？」

その質問に当の本人は答えず、完成したコーヒーの香りを十分に楽しみ、そしてゆっくりコップに口をつけ飲む。少し飲んだ後満足そうに頷いた。この反応から味はとても満足いくようだ。

「うん、今度は甘い蜜を少し入れてみたけど、こつちも悪くない。」

「私の質問に答えてくれると嬉しいんだが？」

「ああ、すみません…」

こう言っているが本人には反省している様子もなく話し始めた。そこにはまるで友人…いや家族と話すような気軽さを感じる。

「行き先は日本ですよ。　そこが俺の初めての旅行の目的地ですから」

「なぜ日本なんだね？　もつと良い国はあると思うが？」

「回転している地球儀にダーツを投げたら日本に刺さったので」

「ふっ…君らしい決め方だね」

まるで呆れるような笑ってるようなそんな表情をしてそう答えた。

こんな決め方をするので彼はかなりの気分屋らしい。相手もそれに慣れていくらしくそのような反応だ。

「君が主任の部門はどうするつもりだね？　君なしで動くとは思えないが。」

「もう代理は見つけてありますよ。　この事を言ったら、泣きながら

『行かないで下さい』って言われましたけど」

「ずいぶん慕われているじゃないか」

「社長さんほどではありませんよ」

これはお世辞ではなく本心から言ったらつもりであった。それほど互いに尊敬しているのだ。

そして、彼はある意味一番の鬼門となっている事を言い出してきた。

「このことは“彼女”には言ったのかい？」

この言葉を聞いた途端、渋い顔に表情が変わった。表情から彼の言う“彼女”とはかなり苦手か嫌いな相手のようだ。

「言ってませんよ。 どうせ反対するのに決まっていますから」

「まるで反抗期の子供の台詞だね」

「たまには外に出て普通に生活したりしたくなりますよ」

「私はあまり賛成したくは無いんだか……」

顎に手を当てて考え始めた。 彼自身かなり悩んでいるらしい。

あと一押しと思ひ、トドメとばかりに大きく頼みこんできた。

「お願いしますよ。 社長さん、たまには外に出たいんですから」

「ふむ…… 三年となると休暇というより左遷という形になってしまう方がいいかね？」

「それで構いませんよ。 それで日本に行きますから」

「あとあっちに行っても指示は来るからそれで良ければ許可しよう」

「よしっ！ ありがとうございます。 社長さん！」

ソファから立ち上がり、大きくお辞儀した。 彼にとってこの言葉はまるで福音……いやそれ以上のものにも聞こえる。 もともと思いつきでやったような事だが誰かに自分の自由を妨害されるのは悔しいものだ。 まあ、無理だったら別の楽しみを彼は探していたと思うが。

「気にしないでくれたまえ。 私と君の仲じゃないか。 君はよく働いてくれるからその礼として受け取ってくれ」

相手はにこやかに言った。 この言葉から彼は結構心が広いのだろう。

「家などはこちらで用意しよう。 あと私からのアドバイスだ。 普

通に生活したいなら”君の力”には気を付けたまえ。」

「ええ、普段から気を付けてますよ。」

「あと大事な事を聞き忘れていたね。日本のどこに向かうんだい？」

その質問に笑顔でこう答えた。

「天宮市っていうところですよ」

そして彼は日本の天宮市へ… これは物語が始まる二年前の出来事…

—————

そして二年後… 日本の天宮市は四月十日で新学年を迎える学生に溢れている。

「二年——四組か…」

そして来禅高校に通う五河 士道も例外ではなく廊下に貼り出されたクラス表を確認して、新しい教室に入っていく。

「——五河士道」

教室に入り座席を確認しようとする後ろから静かで抑揚の無い声で話掛けられた。

そこには人形のような顔に肩に触れそうな長さの髪が特徴な少女——鳶一 折紙がいた。

「なんで俺の名前を知っているんだ？」

しかし士道は折紙と友達というわけではなく、話したような記憶はない。

「覚えてないの？」

「……う」

「そう……」

相手も分かっていたのか士道が言い淀んでいると窓際の席に歩いて行き大きな技術書を読み始めた。

「なんなんだ……」

自分は話したことはないのに相手は士道のことをなにか知っているようだった。

会った事がないか記憶を探っていると背中に大きな衝撃が襲った。
「いつてえ、なにしやがる殿町!」

顔を見なくても分かる。こんな事をする人物は士道が知っている限り一人しかいない。

「よう、元気そうだな。士道」

そこには士道の一年の時から友達、殿町 宏人がいた。

「お前、どうやって鳶」と仲良くなったんだ? ええ?」

ウザいほどニヤニヤしながら聞いてきた

「鳶一? 誰のことだ?」

「お前知らないのか? 鳶一折紙といたら、うちの高校が誇る超天才で超優等生なんだぜ。」

殿町はまるで自分の事を自慢するように話し出した。

「成績は優秀だし、しかも美人だし、去年あつた『恋人にしたい女子ランキング・ベスト13』でも3位だし」

「なんでベスト十三なんだ? 中途半端すぎるだろ」

「主催者が十三位だったからだ」

「ああ…なるほど…」

だったらせめてベスト二十くらいにしておけばよかったんじゃ…
そう思ったがもう終わった事なので言っても意味が無いと思い、言うのはやめておいた。

「ちなみに『恋人にしたい男子ランキング』は三百五十六位まで発表されたぞ」

「多すぎだろ! それも主催者が決めたのか?」

「ああ。 往生際が悪いよな」

「殿町は何位だったんだ?」

「三百五十六位だが?」

「お前が主催者かよ! 他人事みたいに言ってるじゃねえよ!」

「まあ、このランキングはマイナスポイントの少なさで勝負だったからなよ。」

「どんな苦行だよ…」

士道がそうツツコミを入れた途端、教室の扉が開き、生徒が入って

きた。

その姿を見た途端、教室中にぎわめきが広がる。容姿は蒼い目に整った口、白い髪と綺麗な肌をした王子のような顔をした男子生徒だった。

その生徒は土道の席がある横列の一番右側の席に座った。

「あれ？ あいつ神代かみしろじゃないか 珍しいな学校に来るなんて。」

「殿町、知っているのか？」

「ああ、名前は神代かみしろ蓮れん お前はクラスが違ったから知らなかったと思うが、結構有名だぞ」

「あれ？ その名前、どっかで見たことあるような…」

「そりゃ、いつもテスト順位で一位で名前が載ってるからな」

「マジかよ！ すげえな」

しかし殿町は敵を見るかのような目で蓮を見ていた。いや、敵を見るというよりその瞳には嫉妬の炎が渦巻いている様子だ。

「ちくしょう！ テスト以外に学校に来ないのになんで1位を取れるんだ！ しかも容姿端麗ときたか！ 神は不平等だと思わないか？

土道！」

「え？ あ、ああそうだな…」

殿町の悔しそうな顔をしながら迫ってきたのに思わず土道は引いてしまう。土道はすごいと思っても嫉妬はしない方なのでそれだけなのだが。

「そういえば神代はランキングでは何位だったんだ？」

「二位と倍以上の差をつけて一位だよ…」

「あ…そうだったのか…」

「なぜ世界はこんなに不公平なんだ！なぜなんだ！ 土道！」

「俺に聞くなよ!!」

そんなコントを繰り広げられていると、また教室の扉が開き、縁の細い眼鏡をかけた小柄の女性が出てきた。

「あれ？ タマちゃんだ。」

「やったー タマちゃんだ。」

「ラツキー タマちゃんだ」

この反応からこの先生は結構生徒から人気があるようだ。

「はい、皆さんおはようございます。これから一年、皆さんの担任を務めさせていただきます、岡峰 珠恵です。」

前の教壇に立って間延びしたような声でそう自己紹介してきた。

どうやらタマちゃんというあだ名は珠恵（たまえ）からきているのだろう。

そんな自己紹介を聞いて蓮は退屈そうに欠伸を1つした…

—————

学校が午前のうちに終わるのは始業式を除いてテストぐらいだろう。

それゆえ教室は大きく盛り上がりあっており友達と一緒にどこで昼食を食べようか話し合っている人がいる。

「五河ー、どうせ暇なんだから、飯いかねー?」

士道もその1人で殿町から昼食の誘いを受けた。

「悪い、先約があるんだ」

「マジか!」

士道は妹の琴里と一緒に食事をとる約束を今朝していたなので殿町の誘いを断ったのだ。

「もしかして琴里ちゃんとか? いいよなー、あんな可愛い妹と一緒に住めて」

「いや、それでも無いぞ、あれは妹という生物だと俺は思う。」

実際、士道は今朝、琴里に起こしてもらったがその起こし方は腹や胸や顔を踏みつけるといふ起こし方だった。

「いやいや、十分お前は幸せだとおもうぞ。俺から見たら」

「お前も妹がいればその考えは絶対変わるよ」

士道がそう言った途端…

ウウウウウウウウウー

街中に不快な音のサイレンの音が響き渡った。

「これは訓練、ではありません。これは訓練、ではありません。前震が、観測されました。空間震の、発生が、予想されます。」

近隣住民の皆さんは、速やかに、最寄りのシエルターに、避難してください」

聞きやすいように言葉を区切りながらアナウンスが流れる。

「おいおい・・・マジかよ」

殿町は汗を滲ませながら呟いた。

このアナウンスが流れるということとは来るのだ・・・空間震が・・・しかしクラスでは慌ててる生徒は誰もいない。この時のため、皆訓練を受けていたのでなにをすべきか分かっているのだ。

「シエルターはすぐそこだ。落ち着いて避難しよう。」

「お、おう そうだな」

土道の言葉に殿町は頷き、走らない程度に走り、教室を出た。

廊下では生徒たちが列を作っていたが、その中に1人だけ列から離れていく生徒がいた。それはなんと鳶一 折紙であった。

「お、おい！ そっちはシエルターじゃねえぞ！」

土道はそう注意したが折紙は一瞬だけ足を止め、

「大丈夫」

そう言い、また走って行ってしまった。

しかし土道には『大丈夫』の意味がわからない。

(もしかして忘れ物でも取りに行ったのか・・・)

別に警報が出てもすぐに空間震が発生するわけでは無いのですぐに戻れば大丈夫だ。

そしてシエルターへの列に並んでいると土道はふと、あることを思い出した。

「ん、どうした土道？」

「いや、ちよつとな」

そう言いながら土道は携帯を取り出し電話をかけた。相手は『五

河 琴里』土道の妹だ。

「繋がらないな・・・ちゃんと避難してるよな・・・ あいつ・・・」

しかし考えるほど土道は不安になる。もしかしたら・・・もしかしたら・・・とどうしても考えてしまう。

「いや・・・まさかな・・・そういえばあれがあつた。」

琴里の携帯にはGPS機能が着いていたのを思い出し位置を調べて画面を見た瞬間、土道は驚いた。

なんと琴里の位置は昼食を食べる予定だったファミレスの前を示していたのだ。

「あんの、馬鹿……！」

土道は列を抜け出し、走り出した。

「お、おいっ！どこ行くんだよ！五河!!」

「悪い！忘れ物だ!!」

殿町にそう答え、走って行った。

土道が走って行った直後、列が動き全生徒がシエルターに収まりタマちゃんが出席を取り出した。

「み、皆さん！大丈夫ですか！全員いますか!?!」

生徒以上の慌てぶりに笑い声が聞こえてくる。

しかし、ある生徒が言った言葉を聞き珠恵はさらに狼狽するのだった。

「タマちゃん！ 鳶一さんと五河君と…神代君がいません!!」

「えっ…ええええええ!!」

タマちゃんの声がシエルターに響き渡った。

2話

学校を出た土道はひたすら走っていた。目的地は約束していたファミレスだ。

「普通は避難するだろうに…」

今、土道は誰もいない街を走っているがその光景がとても不気味であった。

生活感を残したまま人がいない…これが不自然すぎたのだ。

誰かが『街は人がいて始めて街と呼べる』と言っていたがまさにその通りだ。

「はあ…はあ…」

ペース配分も考えずただひたすら走り続ける。体のあちこちが痛みを訴えて来るが、今の土道にはそんな関係なかった。

「なんだ…あれは…」

なんと空に人影のようなものが飛んでいた。土道はよく見ようと目を凝らしたが、やむ得ず中断させられた。

なぜなら土道が向かっている方向にまばゆい光に包まれたからだ。それと同時に大きな爆音と衝撃波が土道を襲った。

反射的にこらえるように全身に力を入れたがそれは無意味に終わり、土道は風圧に煽られ後ろに転がっていった。

「いてえ…一体なんなんだ…」

突然起きた出来事が理解できず痛む体を起こしたが目の前の景色を見て驚愕した。

文字通り”なにも無くなっていた” 隕石でも衝突したように目の前の景色は荒れていたのだ。

そしてその景色の中央には人影があった。

大きな剣を持ち、紫色のドレスのようなものを身に纏い長い黒髪をしている美しい少女で歳は土道と同じくらいだろう…

「あの子は…一体…」

土道がじつと見つめていると、少女は手に持った剣を土道のいる方向に向かって横薙ぎに振ってきた。それと同時に…

「伏せろ」

そう言われ頭を掴まれ、無理矢理伏せられた。そしてその直後……
土道のすぐ後ろの物体が綺麗に切り揃えられ音を立てて崩れて
いった。

「ひっ……い」

後ろの光景を見て小さく声を漏らした。
もし伏せられていなかったら土道も後ろの物体と同じく、真つ二つ
にされていただろう。

「あ、ありがー」

助けてくれた人物にお礼を言おうとして相手の顔を見て驚いた。
なぜなら相手はー

「か、神代……？なんでこんな所に……」

「あれ？　なんで俺の名前を知ってんだ？」

白い髪に蒼い目と整った顔立ち……　土道を助けたのは新しいクラ
スメイトの神代　蓮だったのだ。

土道が驚いているといつの間にか目の前に土道を攻撃した少女が
いた。

「お前は……何者だ……？」

「さあ？　誰だろうな……」

少女は蓮を睨みつけながら聞いてきたが、蓮は少し笑いふざけた様
子で答えた。

この時が、土道が精霊……そして蓮と出会った瞬間であった……

――
（学校って結構退屈だな……）

蓮はタマちゃんの自己紹介を聞き、欠伸をしながらそう考えてい
た。

（まあ……その退屈を楽しみに来たんだがな）

蓮はある事情により1年の時はテストの時以外学校に来れなかつ
た。　なので二年目はしっかり来ると決めていたのだ。

（しかし……なんなんだ……？）

蓮は先ほどからクラスメイトの視線を感じていたのだ。　主に女

子から…

(頼むからあまりジロジロ見ないでくれ… 注目されるのは苦手だからな)

心の中で願うように言った後、蓮は机に伏せて眠り出した。

そこはなにもない空間だった。 真っ白の部屋の中に蓮は縛りつけられ身動きひとつ出来ない状態であった。

(またこの夢か…)

蓮はこの夢の事を知っている。なぜなら”いつも見ている”からだ。

蓮は1年ほど前にこの天宮市に来了。しかし天宮市に来了から眠ると”同じ夢”をいつも見るのだ。

(くそ…なんなんだこの夢は)

そう思いながら待っていると部屋の入り口が開き、白衣を着た人間たちが入ってくる。

顔を見ようとすると景色と同化してるように真っ白で男か女かすら確認出来ない。

そして夢はいつも同じ所で終わる…

一人の人間がいつの間にか持っていた注射器を蓮の腕に刺し、シリンダーを押した所で蓮の意識は現実に戻る…

「はっ……いー」

蓮が目覚めると時刻はすでにお昼になっていて帰り始めている生徒が見られる。

どうやら三時間以上寝てしまったようだ。

「はあああ〜」

時計を確認し魂まで抜けるのではないかと思ってしまうほど深いため息をした。

「やっぱりいつもここで終わるか…」

いつも中途半端で終わった後のハッキリとしないモヤモヤとした感覚が蓮は不快で嫌いだった。

(まあ気にしても仕方が無い…帰るか…)

そう思い、席を立った直後：
ウウウウウウウウウー

不愉快なサイレンの音が聞こえてきた。空間震警報だ。

この音を聞いた後、残っていた生徒は一斉にシエルターに向かい、教室は蓮1人になった。

しかし蓮はこの場を動くことが出来なかった。奇妙な感覚になっ
ていたからだ。

(なんだ…？ この感覚…)

まるで誰かに呼ばれているような…そんな感じがしたのである。

耳に聞こえているわけではない…しかし誰かが自分を呼んでいる

…

蓮は周りを見渡し、誰も居ないことを確認して窓に近づき…

「よつとー」

”窓を飛び出し、近くにある家の屋根の飛び移った”

「この感覚は…あっちからか…」

感覚を感じる方へ屋根から屋根にジャンプして近づいて行く。そ
して途中で空に人影があることに気付いた。

「あれは…ASTか、結構対応が早いな…」

ASTとは対精霊部隊の略称である。

ワイヤリングスーツを着込み、CRUユニットという特別な装備で
精霊と戦闘し撃破を目的とした部隊だ

しかし一般人には精霊はおろか、ASTの存在も伏せられているた
め知っているものは一部の人間のみである。

しかし蓮はASTの存在は知っていた。蓮は”一部の人間”だか
らだ。

そして蓮がASTの姿を確認した直後、大きな光と爆音が発生し
た。

「あれが空間震…」

蓮が”大きな衝撃波の中で立ったまま”の状態で眩いた。

蓮は空間震を直接見るのは始めてなので少し驚いている。

衝撃波と光が収まった後、前を見て見ると前方が何もない平地に

なっていた。そしてその中央には1人の少女がいる。

「そしてあれが精霊…世界を殺すといわれている厄災か… 直接見るのは始めてだな…」

しかしその少女を見ていると視界の端に動くものを確認した。

「ん？ なんてあんな所に人がいるんだ？」

なんとそれはCRRユニットも身につけていないだだの人間…土道だった。

少女もその存在に気付いたようで手に持った剣を振りかぶった。

(全く…俺がいなきや死んでたからな…)

蓮は家の屋根から力を入れて大きくジャンプして土道の所に向かって行った。

助けた理由は特にない…ただ見殺しにするのも気分が良くなかったからである。

土道の位置の少し横の上空にまで来たら、落下してもうすぐで地上に着く瞬間に

「伏せろ」

そう言いながら土道の頭を掴み、無理矢理伏せさせた。それと同時に頭の上を何かを通った感覚が起きた。

そして少し遅れて何かが崩れる大きな音が響く。おそらく建物が崩れた音だろう。

「あ、ありがとう」

そこまで言われた台詞が急に止まった。

何かあったのかと思い、相手の顔を見てみたら驚いた表情をしていた。

「か、神代…？ なんでこんな所に…」

「あれ？ なんで俺の名前を知ってるんだ？」

蓮は土道の事を知らない。なので名前を知っているのが不思議だった。

首を傾げているといつの間にか土道を攻撃した少女…精霊が目の前にいた。

(この感覚は…ここいつから来ているのか)

心の中でそう考えていると、少女は蓮を睨みつけながら言ってきた。

「お前は…何者だ…？」

この言葉を聞いた瞬間、蓮は確信した。

（俺がこいつに反応しているように、”こいつも俺に反応している”のか…）

「さあ？ 誰だろうな…」

内心、動揺しているのを誤魔化すようにふざけた感じで答える。

「そうか…」

相手もまともな返事を期待していなかったらしく、手に持った剣を構えてくる。

（逃げるのは無理そうだな…）

今、どこかに逃げようとしてもさつきみみたいな攻撃をされて殺されるのがオチだ。 それにここには何も知らない一般人もいる。

（闘うしかないようだな。）

そう心に決めると、後ろにいる土道に話かけた。

「おい、今すぐここから逃げろ。」

「え…お前は どうするつもりなんだよ？」

「俺の事は気にしないでいいから。」

そう言った瞬間、蓮の背中が突然光り始め、背中には1本の剣があった。

形はとても大きく、目の前にいる少女が持っている剣と同じぐらいの大きさを刃の部分は真っ直ぐではなく、分厚い曲刀をしていた。

そして剣の刃の側面には赤いパーツに金色で綺麗な模様が書いてあった。

蓮はその剣を手に持ち、少女の方に構えた。

「さあ、来い。」

その言葉が合図になったように少女は蓮に向かって高速で剣を振りかざして来た。

しかし蓮は危なげもなく受け止め、剣同士がぶつかり大きな音が鳴った。

「お前…私の剣を受け止めるとは…人間ではないのか？」

「さあな？ こつちが知りたいよっ！」

剣に力を入れて相手の剣を弾き飛ばし、隙だらけの体に攻撃しようとするが防がれる。

「ええい！ 小賢しい！」

そう叫び、少女は強引に敵を斬ろうと力を入れて剣を振るったがそこには蓮の姿はない…

「な…どこに行った!？」

辺りを見渡すもどこにもいない

「まさかっ！」

上を見上げるとすぐ目の前に剣が迫っていた。蓮は少女が力を入れて振り払うタイミングを読んで上に飛び、攻撃を回避すると同時に敵の死角である空中から攻撃したのだ。

「くっ！」

ほぼ反射的に剣を滑り込ませるとギリギリで防御が成功した。

蓮は剣同士がぶつかった衝撃を利用して空中で回転しながら地上に着地した。その結果、少女との距離が少し空いた。

(な、なんだよこれ…)

その光景を見て土道は困惑した。

ただでさえ空間震が起きてなぜかその中央にこの少女がいるから理解出来ないのに、新しいクラスメイトがその少女と戦っているという状況がさらに土道を混乱させる。

その結果、逃げる事も出来ずにただその光景を見ていることしか出来ない。まるでゲームみたいな出来事ばかりで現実味を感じなかった。

—————

その頃、上空にいたASTの部隊は今の状況が理解出来なかった。

「だから！ 上層部の判断を仰いでって言ってるでしょ!! どつちを攻撃すればいいか聞いてちょうだいって!!」

A S Tの隊長である、日下部 遼子が大声でオペレーターと話していた。

空間震が起きた後、精霊を撃破するため現場に向かったが、自分たちより早く精霊と戦っているものがいた。

動きが激しくて顔がよく確認できないが体型から見て男だろう。

しかし状況は奇妙なものだった。

C R ユニットも身に付けず…身につけても互角にすら戦えない精霊をたった1人で互角…いやそれ以上で戦っている…

もしもう片方も精霊だったら納得がいくのだが精霊同士が戦う理由もないし、何より男の精霊など聞いたことが無い。

その光景を見て鳶一 折紙はそんな事を考えていた。

そして判断が決まったのか、日下部は通信を切り、全員に聞こえるように話した。

「上層部から判断が来たわよ!! 」男らしき方を援護して精霊の撃破をしろ”らしいわよ”

「…なぜ援護しなければならぬの?」

「わかんないわよ。 上がそうしろって言って来たの。」

この判断に折紙は疑問を抱いた。

まるで”味方だと確信している”ような判断だったからである。

(一体何者か…確かめる!)

折紙はスラスターを使いながら精霊に近づいて行った。

「ち、ちよっと、命令は”援護”よ! 折紙!」

日下部の制止の声を無視して折紙は精霊に突っ込んで行った。

幸いにも2人の距離は開いている。

相手も接近してくる折紙やA S Tに気が付いたらしく剣を構え、斬撃を飛ばして攻撃してくる。

そしてほかの隊員のミサイルなどが飛んでくるが、空中で見えない手にも掴まれたかのように停止し届かない。

ほかの隊員が攻撃している隙に地上に着陸出来たがそこにいた人物を見て折紙は驚いた。

1人は神代 蓮…いつもテストで自分の名前の上にいる人間で片

手に大きな剣を持っていた。もう1人は…

「五河士道…」

「鳶…折紙…」

自分の愛しい人間がそこにいたのだ。相手はとても驚いた顔をしていた。そしてその直後…

「ーふんっ!!」

精霊が蓮に向かって斬撃を出して攻撃して来た。蓮の後ろには士道もいる。つまり蓮が避ければ士道が攻撃を受けてしまう。

「…！ 逃げ…」

そう言うが間に合わない。そして士道の前にいる蓮に当たる瞬間…

” 右腕を前に突き出して” 攻撃を受けた。

攻撃が当たった瞬間、右手はまばゆい光を放ち折紙は目を瞑る。

しかし衝撃は殺せてなく、後ろにいた士道は思いつき吹き飛ばされ瓦礫に体をぶつけて気を失った。

そして光が収まり目を開けると蓮の右腕は今までとは違う姿をしていた。

指、手の甲から肘にかけて細いラインが水色に輝き、それ以外は赤い皮膚なようなもので覆われていた。

それはどう見ても人間の腕では無い。

少女もそれを見て驚きながらも剣で蓮を攻撃したが変異した右腕で受け止めた。

「お前…その腕は一体…」

「俺が知りたいって…言っただろが！」

イライラをぶつけるように右腕で相手の剣を弾いた。

「くっ…！」

腕に驚きながらも、少女は距離を取ろうと後ろに向かって大きくジャンプした。

しかし蓮はそんな隙すら見逃さない。

飛んでいる少女に向かって右腕を伸ばすと、” 空中に半透明の青い巨大な腕” が現れ、少女の足を掴んだ。

「なにっ!？」

流星にこれは予想出来なかったため明らかに動揺した声を漏らした。蓮は腕に持っていた剣が粒子となって消えると同時に右腕を思いつき手前に引っ張る。

すると少女はまるで吸い寄せられるかのように蓮のいる方向に足から向かって行く。しかも足から向かっているため仰向けの姿勢だ。

そしてそのまま近づいて来ると仰向けの少女を思いつきり上から殴り地面に沈めた。

その衝撃に地面にヒビが入ると同時に周りに砂煙が発生し上空からは見えなくなる。

そして上にいたAST隊員が見たのは砂煙を割くように精霊が飛び出してそのまま瓦礫に激突した所であった。

やがて砂煙が晴れたらそこには誰もいなかった…

3話

大きな衝撃に吹き飛ばされ、気を失った士道はベッドの上で目が覚めた。ただし瞼を無理矢理開かされペンライトで照らされていたが。

「だ、誰ですか…?」

「ん…? 私は村雨 令音だ。ここで解析官をやっている…まあ免許は持っていないが簡単な介護ぐらいは出来るから安心してくれ…」
令音と名乗った女性は目に隈があり、さつきから妙にフラフラしている。 介護をするのではなく逆に介護を受けるべき状態でないだろうか?

「あの…ここは?」

「ここはへフラクシナスの医務室だ…気絶してたから運んでおいたんだ…」

「え…? 気絶って… てゆうかフラクシナスってどこですか?」

士道が混乱していると令音は士道に背を向けた。

「ついてきたまえ。 君に紹介したい人がいる。私は説明下手だからその人に聞きたいことを聞くといい」

そう言って、フラフラ歩く令音の後を追いかける。

部屋を出ると狭い廊下のような作りになっており、まるで宇宙船の内部のようだ。

そしてしばらく歩き、通路の突き当たりの電子パネルの付いた部屋の前で令音は足を止めた。

そしてドアが音を鳴らしスライドして開く。

「ここだ…入りたまえ…」

そう言われ中に入ると、そこにはさまざまなコンソールを操作するクルー達とあちこちにあるモニターが目に入る。

まるでアニメの戦艦の司令部のような印象を受けた。

「…連れてきたよ…」

「…苦勞様です」

一番上の艦長席のような所の横に立った青年が軽く礼をした。

「この副司令の神無月 恭平と申します。 以後お見知り置きを」

神無月と名乗った青年は耽美小説にでも出てきそうな風貌をしている。

しかし冷音が話しかけたのは神無月ではなかった。

「司令、村雨解析官が戻りました。」

艦長席に神無月が話しかけると椅子が回転し始める。

「歓迎するわ。ようこそ、へフラクシナスへ！」

そしてそこには座っていたのは……

「……琴里？」

服装などに違いはあるが土道の妹の五河 琴里であった……

そして土道は琴里の説明を受けて土道はゆっくりと理解していった。

あの少女は精霊と呼ばれ、世界を殺す厄災と言われている存在であること……

空間震はその精霊が隣界という場所からこちらに来る時の余波ということ……

空を飛んでいた人間達はASTと言われる精霊の殲滅を目的とした部隊だということ……

それらの説明を受けてふと、気になったことを土道は言ってみた。

「それじゃあ、神代もそのASTとかいう奴らの一人なのか？」

その質問に琴里は首を傾げていた。

「神代……？ 誰の事？」

「今日、その精霊と戦っていた奴だよ」

その言葉を聞いた途端、琴里は椅子から身を乗り出してきた。

「土道!! あんた、あいつの事を知っているの!？」

「え……あ、ああ 同じクラスメイトだから……」

土道の答えにブリッジはざわざわと騒ぎ出す。

琴里は大きな声で神無月に指示を出した。

「神無月！ その神代という奴の住所を調べてここに連れてきて頂戴！」

「はい！ 司令のご命令とあればすぐに……」

そこまで言った時、琴里のキックが神無月の腹を直撃した。
「さっさと行きなさい！」

「は、はい… あと司令… あ、ありがとうございます…」

神無月は恍惚とした表情をしながら司令室を出て行った。数人のボディーガードを連れながら…

蓮は精霊と戦った後、自分の家に帰ってきていた。幸いにも空間震は蓮の家から遠い場所で起きたので家に大きな被害は無い。

「はあく…長い一日だった…」

家のソファに倒れるように座り込む。今回は結構動いたため、疲れが溜まっている。

制服のまま寝てしまおうかと思った直後、蓮の携帯が鳴った。画面の相手を確認して通話ボタンをタッチした。

「はいはい、なんででしょうか？ 社長さん」

「やあ、久しぶりだね。元気かい？」

まずは社交辞令の挨拶をしてきた。

「まあ、元気かと聞かれたら元気ですが、要件はなんででしょうか？」

『今日、君は結構派手に暴れたらしいじゃないか？』

この事は精霊と戦ったことを言っているのだろう。

それを言ってくるということは相手にも情報が伝わり、何かしらの手を打ったということだ。

「仕方が無い状況だったので、そうなっちゃったんですよ」

『今回は私が裏から手を回したから良かったが、次からは気をつけてくれ。こちらにも限界があるからね』

「分かっていますよ。反省しておきます」

反省した様子も無い明るい声でそう言った。そんな返事に電話の相手もフツツと小さく笑ったのが聞こえた。

『それと君のいる天宮市は最近、精霊の出現が多いらしい』

「そうなんですか？」

『だからそのAST部隊が増員の要請をしてきたんだ。』

「まさか…」

蓮が考えている最悪のパターンが頭をよぎる。ここに来たのはそれを避けるために来たというのに、ゆっくり休む暇すらないというのはあまりに悲しすぎるのだ。

『だから君がその部隊に行って助けてきてやってくれたまえ。』

「やっぱりか…」

『そう言わないでくれ。挨拶へは天宮駐屯地という場所に行ってくれ。それじゃあ元気でね』

言いたいことを言った後、相手は電話を切ってしまった。やりたくはないが無視することは出来ない、なんやかんや言いながらやるしか選択肢は無いのだ。

「はあ…めんどくさい」

もうそこで何をすることも分かっている。だからこそ気分が乗らない。

「まあ、頑張るか…」

そう決心した時、家のインターホンが鳴った。

「一体、誰が…」

蓮には家を訪ねて来るような仲の人間はいない。大抵、用事は電話で済んでいるからだ。

不思議に思いながら玄関のドアを開けると、そこには一人の青年とボディーガードらしき人物が合わせて三人いた。

「いきなりすみません。 神代 蓮君ですね？」

「人違いです。」

蓮はドアを閉めようとした。今までの人生の経験から言わせてもらおうと正直、面倒事の香りしかしない。

しかし青年はドアの隙間につま先を入れてドアが閉まらないようにした。

「あなたから話を聞きたいのです。 あなたは今日、精霊と戦いましたね？」

「精霊？ なんのことですか？」

知らない振りをして逃れようとするが…

「とぼけなくても大丈夫ですよ。 五河 士道君から話は聞いている

ので」

「五河 士道？ 誰ですか？」

「あなたが今日、精霊から助けた小年の名前ですよ」

「チィ…」

小さく舌打ちすると蓮はドアを開けて外に出てきた。あれだけ近くで顔を見られたから逃げるのは不可能だろう。

「話は別の場所で聞きたいのですが、よろしいですね？」

「もう好きにしるよ…」

蓮はやけくそ気味にそう言い放った。

その直後、体が無重力に包まれへフラクシナスへ向かって行った。

—————

フラクシナスに入った蓮は神無月に案内されて、ある部屋へ向かっていった。

「さあ、お入りください」

そう言われて入った所はフラクシナスの司令部だった。

「か、神代…？」

士道が蓮の姿を確認して驚きの声をあげる。

「ようこそ、フラクシナスへ 私はこの司令官の五河 琴里よ」

一番上の席に座った少女…琴里が挨拶してきた。

「へえ… 最近の空中艦って子供でも司令官になれるのか？」

「誰が子供よ!!」

どうやら相当頭にくたらしく大きな声で怒鳴った。

しかしすぐに平常心を取り戻し、神無月から新しいキャンディを貰い、口に入れる。

「…あなたに聞きたい事はいろいろあるけど、あなたは精霊を知っているの？」

「なんでも知っている訳じゃない。分かっている事はそつちとあまり変わらないよ」

首を竦め、軽い様子で答える。

「じゃあ次の質問をするわ。あなたはASTの人間なの？」

「ついさっきにそうだったがな。」

またしてもふざけたように答える。この反応に琴里は苛立ちを募らせている様子だ。

「じゃあ最後の質問をするわ。あなたが使っていた剣とあの右腕はなんなの?」

この情報こそが琴里が一番知りたかった情報だ。精霊にしては蓮は男だし何より精霊と戦っていた。

質問を聞き、小さくため息をするとなんと制服の上を脱ぎ出した。

「ちよ、ちよっと!! 何やってんのよ!」

蓮は十分イケメンの部類に入る容姿をしている。その容姿の半裸は琴里にはまだ刺激が強いようだ。すぐに顔を後ろに向けてしまう。

しかし琴里に限らず、冷音以外の女性クルーはみんな手で顔を覆っていた。

しかし数名、指の間からこっさり見ていたのはここだけの話だ。

「まあ、とりあえず見てみるよ。司令官殿。」

蓮の声が聞こえて顔をゆっくり前に向けて見ると蓮の背中が見えた。しかしその背中が異様だったのだ。

背中の中央辺りに鮮やか横棒が一つ、背骨に合わせるように上から下にも鮮やかな棒が一つ、それはまるで十字架のような形だった。

「な、なによ。それは…」

琴里はもちろん、ほかのクルー、なんと冷音までもがそれを見て驚いている。

すると突然、背中の十字架が光り始めて光りの粒子が集まり、大きな剣が現れた。それは精霊と戦うのに使っていた剣と同じ物であった。

蓮はその剣を手に持つと土道の元に歩いていく。

「おい、お前が五河 土道か?」

「え… あ、ああ 俺の事は土道でいいよ… てゆうか一応クラスメイトなんだが…」

「そうだっけ? まあ、どうでもいいや。お前のせいで面倒ごとに

巻き込まれたんだが？」

士道も蓮と同じような状態だが、自分のせいで巻き込まれてしまったので強く反論出来ない。

「ちよいと両手を出せ。」

「え？ わ、分かった。」

言われた通りに両手を出すとその上に剣を横向きに持ち上げ士道の手は落とされた。

「うお!!」

手に持った瞬間、とてつもない重さが士道の手を襲い、剣と床に手が挟まれ身動きが出来ない。

「重っ！ 神代！ お前、どうやってこんな物振り回したんだよ!？」

「俺のことも蓮でいいぞ。 どうやってって言われても普通にだよ」

答えになつていない答えを言いながら蓮は剣を持ち上げて、士道の手を救出する。

「ちなみにこの剣の名前はへレッドクイーンって言うから」

レッドクイーンの柄を掴みながらバイクのように手を捻ると剣が大きな音を立てて唸った。

「そんで、次は手だっけ？」

蓮は右手を意識すると右手の皮が崩れるように剥がれていった。皮が剥がれ終わるとあの時と同じ、青い手がある。

蓮は周りを見渡して、神無月を見るとその方向に右手を伸ばした、すると…空中に半透明の青い手が現れ、神無月を持ち上げた。

「え？ ど、どうやって!？」

周囲は驚いているが、神無月本人はまるでタイ○ニックのようなポーズをとっている。そしてある程度の高さまで持ち上げると手を離して、神無月を頭から落とした。

普通ならのたうちまわるほどの痛みだが、神無月は…

「はあく… この痛みはたまらない…ビクン、ビクン…」

と言いながら嬉しそうな表情をしている。

(後で右手を重点的に洗っておこう…)

そう思ってしまう蓮であった。

「この手はへバスター〜って呼んでる。 さあ聞かれた事は全部答えたぞ、ほかに質問はあるか？」

「あなたはなんでそんな体質になの？」

質問してきたのは琴里だ。 蓮はへバスター〜を引っ込めて…

「さあな？ 俺にもわからん」

またまた無責任な答えを言った。

「小さい頃の記憶が無いから分からん」

「記憶がない理由は？」

「親が言うには、高熱で倒れて記憶を失ったって聞いている。 さあ、そっちの質問は全部答えたぞ。 次はこっちの質問に答えてもらおうか」

ゆっくりと蓮は琴里に近づく。

「この組織はなにをするのが目的なんだ？」

「このへフラクシナスは精霊と対話して力を封じ込めるのが目的の組織なの」

「具体的にはなにを？」

「そこに突っ立っている私の兄、土道が精霊に恋をさせて力を封じ込めるわよ」

その説明を聞き、蓮は土道を半信半疑の目で見る。 土道は反応に困っている。

「本当にそんな事が出来るのか？」

「出来なかったらこんな組織をつくってないわよ。 だからあなたにも手伝って欲しいのよ」

琴里は真剣な眼差しで蓮をみる。 蓮は顎に手を当てて悩む動作をした。

「条件がある」

「何かしら？」

「タダ働きはしない。 生憎、なんの対価も無しに働くほどの善人じゃないからな」

「わかったわよ…それだけで協力してくれるなら安いものだわ」

「さっすが、司令官殿、懐が広いね、あとそろそろ家に返して

くれると嬉しいんだが…」

「マイペースね… 令音、返してあげて」

琴里は呆れたようにそう言うのと令音が蓮を連れて部屋を出て行った。

「土道、あんたは明日から訓練を始めるわよ。 精霊が出現するまで最短で一週間はあるわ。」

「え…訓練って…」

「土道も、もう帰っていいわよ」

土道はその訓練が気になりながらも、クルーに連れられて出て行った。

「ふうう…」

土道が出て行った直後、琴里は大きく息を吐いた。

「映像ではみていたけど直接見るととんでも無いわね…」

「彼に記憶が無い所も気になりますが、なんとかこちらに引き込む事が出来ましたね。 流石です！ 司令」

横では神無月が琴里に賞賛の声をかけている。

「しかしあの剣も気になるけど、右腕がおかしかったわね…」

「そうですね…あんなもので落とされたら、おかしくなっちゃいますよね…」

「ふんっ!!」

琴里のアップパーが嬉しそうにしていた神無月の顎を直撃した。

「真面目に聞いた私が間違っていたわ…」

床に倒れた神無月をみて小さくため息をついた…

4話

「精霊を救う…か」

へフラクシナスへから帰って夕飯を食べ終わり、ベッドに寝っ転がった蓮は静かに呟いた。

別にへフラクシナスへに入った事を後悔しているわけではない。

しかし蓮はASTに行く事がもう決まっている。ASTとへフラ

クシナスへ… 精霊を殺す組織と救う組織…

この真逆の目的を持つ二つの組織に蓮は身を置いた。普段の自分ならこんな状況には絶対にしないはずなのに…

「でもまあ、やることは決まっている…」

蓮は精霊を恨んでいるわけではない、救える可能性があるなら救ってやりたい程度の気持ちは持っている。

だからと言ってASTの仕事を放り出すつもりもない。ASTだって精霊に殺される覚悟があつて戦っているし、戦う理由もあるのだろう。

だがへフラクシナスへに入ったのは精霊を救う事だけが目的ではない。

「あの時の”感覚”が何か、分かるかも知れないな…」

精霊から感じた自分を呼ぶような感覚…蓮はあの感じが気になっていた。

ASTでは自分は戦闘部隊に加えられることは無いだろう。そもそも実戦部隊に入れられるなら”あの人”は裏に手を回して自分の存在を隠したりなどしない。

だから精霊と直接接触できるへフラクシナスへは蓮にとって都合が良かった。

（ゆっくり…ゆっくりと知って行けばいい…自分の事も”この感覚の正体”も…）」

そう思いながら、蓮は目を閉じて睡魔に身を委ねた…

次の日、蓮は少し早めに学校に来ていた。理由は特にない、ただ

少し早めに目が覚めてしまい二度寝する気にもならなかったからだ。
(こんな早くじゃ誰もいないか…)

そう思いながら教室のドアを開けると教室内には一つだけ人影があった…鳶一 折紙だ。

折紙は厚い技術書から顔を上げて蓮を見ると、目を細めた。

蓮は折紙を気にした様子もなく自分の席に着く。しばらくすると技術書を置き、蓮の席に近づいてきた。

「何か用か？」

蓮は少し喧嘩腰で話しかける。しかし折紙は無表情で落ち着いた声で話し出す。

「あなたは昨日精霊と戦っていた」

「精霊ってなんだ？」

「誤魔化しはしないでいい…あなたが昨日戦っていた所を見た」

「見た、と言うことはお前、ASTか？」

折紙はコクン、と頷く。

「あなたはあの精霊と互角に戦っていた…あなたは何者なの？」

「ここで言う必要はねえよ。まあ、すぐに分かるさ…」

そう言うともう何も言う気はない、とばかりに本を読み出した。

折紙はその姿を睨みつけた後、自分の席に帰る。

「私の目的は精霊を殺すこと…もしあなたも精霊なら容赦はしない…」

蓮に背を向けた状態で話す。

「いい目標じゃないか。応援してるよ」

皮肉のような言い方で蓮は言った。折紙はその言葉を背中で聞きながら席に帰っていく。

(精霊を殺す…か)

街を守るのではなく彼女は殺すと言った。おそらく彼女は過去に精霊によって何かを奪われたのだろう。

しかし蓮にとってはその恨みさえも羨ましかった。

(過去に…かわる事が出来るお前が羨ましいよ…)

この気持ちは過去の記憶がない、蓮だけにしか分からないが気持ち

であった…

学校の授業を寝て過ごして、放課後、蓮は先生に呼び出されていた。
(その呼び出し場所がなんで物理準備室なんだ?)

別に何かをやらかした記憶はない。しかし呼び出しとなれば無視は出来ない。

物理準備室のドアを開けると、そこには士道、琴里、令音がいた。

「あれ？ 司令官殿じゃん。なんでうちの高校にいるんだ？」

「士道の訓練のため来たのよ。ほら、あんたも早く座りなさい」

そう言うので蓮は傍にあった椅子に腰を落とす。そして一緒にいた令音に話しかける。

「てゆうか、なんであんたまでいるの？」

「そういえば言っってなかったね…ここに先生として来たんだ。教科は物理で二年四組の副担任の兼任する…」

「前にいた先生はどうなったの？」

「彼は遠い所に行ってしまったよ…とても遠い所へ…」

「ふーん」

蓮は去年、テスト以外学校に来ていない。なので前にいた物理の先生の名前どころか顔すら知らないのどうなろうと興味はない。

「で？ さつきから気になってたんだけど、このモニターはなんなの？」

「士道の訓練に必要なのよ。あんたも精霊と会う可能性があるから訓練を受けるとまでは言わないけど見学ぐらいしておきなさい。」

「まあ、少しだけなら」

時計を見ながら蓮は言う。

「…ちなみに君は女性と交際したことはあるかい？ …シンはないらしいが…」

「シンって士道の事か？ てゆうかお前、付き合ったことないのかよ」

「べ、別にいいだろ」

士道は悔しそうにしながら言った。

「じゃあお前はどうなんだよ？ 付き合ったことあるのか？」

「俺も交際したことはない」

「なんだ…お前もかよ…」

その言葉を聞いた途端、安心したような顔をした。人間は同じ状態の人間を見ると安心する心理が働いたのだろう。

「でも、体だけの関係を求められた事なら何度かある」

「は…」

安心した顔が急にポカンとした顔に変わった。

「抱いてくれて何回か言われたんだよ」

「え…それって何回ぐらい…?」

「何回ぐらいだったっけ？ 五回から先は数えてないからな」

「ご、五回…」

蓮は少なくとも片手の指の本数以上は言われていたのだ。

「それで…誘いに乗ったのか?」

「これから先は言えないな。俺のプライベートの関わる話だからな」

さつきまで安心していた自分が恥ずかしくなる。蓮は自分のレベルのはるか高みにいたのだ。

「ほら、士道、しっかりしなさい 訓練を始めるわよ」

琴里は喝を入れるため、士道の座っているイスを蹴る。

「あ、ああ… そうだな…」

まだショックが抜け切らないが心を立ち直す。

冷音は机の上にあるモニターの電源を押す。すると可愛らしい美少女達が次々映され、『恋してマイ・リトル・シド』と表示された。

「ギャルゲーかよっ!」

「こんなのが訓練になるのか?」

「そう言わないでくれ。これはあくまで訓練の第一段階さ…それにへフラクシナスの総監修のもので現実起こりうるシチュエーションをリアルに再現している。心構えぐらいにはなるだろう。ちなみに君はゲームは好きか?」

「別に嫌いって訳じゃないけど、普段はやらないかな」

こんな会話をしている間にも士道は画面を進めていた。

『おはよう、お兄ちゃん！ 今日もいい天気だね』

そんな台詞と同時に画面にCG シーンが表示され、妹キャラらしき人物がパンツ丸見えの状態で寝ている主人公を踏んでいた。

「ねー！ー！ーよ!!」

土道が絶叫のような声をあげた。

「そうかね？ 結構ありそうなんだが…」

「こんな事が現実である…わ…け…」

土道の声がだんだん小さくなっていき、ゲームに顔を戻した。

「もしかして本当にあつたのか？」

質問するが土道は答えない。そして画面の真ん中に文字が現れる。

「これ、なに？」

「選択肢よ、そこから1つ選んでいくの、それによって好感度が上下するの」

素晴らしい画面の右下を指すと、そこにはゼロの位置にカーソルがついたメーターらしきものがあつた。

そしてその選択肢が…

一、『おはよう。愛してるよりリコ』愛を込めて妹を抱きしめる。

二、『起きたよ。ていうか思わずおつきしちやったよ』妹をベツトに引きずり込む

三、『かかったな、アホが！』踏んでいる妹の足を取り、アキレス腱固めにする

どれも正気とは思えない。

「つて、なんだよこの選択肢は!!」

土道が大きくツツコミをいれる。

「これ、三番選んだら首から上以外の全身凍らされて、バラバラになるとかないの？」

「ないわよ、ていうかどこの吸血鬼よ、それ」

隣で蓮と琴里がなにか話しているが、土道の耳には入って来ない。

「そうそう、制限時間があるから早くした方がいいわよ」

「くそ、仕方ねえ」

土道は一番まともそうな一を選択する。

『おはよう。愛してるよりリリコ』

俺はリリコを、愛を込めて抱きしめた。

すると、リリコは途端に顔を侮蔑の色に染め、俺を突き飛ばしてきた。

『え…ちよつと、何、やめてくれない？ キモいんだけど』

好感度メーターが一気にマイナス五十まで下がる。

「リアルだったー！」

「あらあら…」

「馬鹿ね。いくら妹でも、いきなり抱きつかれたらそうなるに決まっているじゃない。もし本番だったら土道のお腹には綺麗な風穴が空いてるわよ」

そう言いながら、琴里は自分の目の前に置かれた液晶ディスプレイを点滅させる。

「なにしてんの？ 司令官」

「訓練とはいえ、少しは緊張感を持ってもらわないとね」

その画面には来禅高校の昇降口が映され、さらに制服を着たおっさんがカメラ目線で立っている。

「あれ？ そこってうちの高校の昇降口？ ていうか、そのおっさんだれ？」

「うちのクルーよ」

琴里はどこからかマイクのようなものを出して話しかける。

『私よ。 土道が選択に失敗したわ。 やってちょうだい』

画面の中の男は敬礼すると、懐から一枚の紙を取り出しそれをカメラに見せてくる。

「こ、これは…」

「なにこれ？ 『腐食した世界に捧ぐエチュード』… なにこの、だせえタイトル…」

「ぎゃあああああ!!」

「お前のかよ…で？ こんなどうすんの？」

「まあ、見てなさい」

なんとその紙を折りたたみ、適当な下駄箱に放り込んだ。 つま

り、明日来た生徒が見てしまう事になる。

「うわ…これはエグいな…」

「なにすんだよ！ 琴里！」

「うるさいわよ土道。 精霊に対して対応を間違えたらこんなもんじゃ済まないのよ。 私たちにだつて被害が来るんだから、なのでペナルティを設定させてもらったわよ」

「おい土道、 司令官は本当にお前の妹か？ こんなこと兄にすることとは思えないぞ」

「それでも…俺の妹…なんだよ…」

土道は泣きそうな顔になりながら答える。

「その選択肢つて他を選ぶとどうなつてたんだ？」

「気になるならやつてみればいいじゃない。 じゃあ一回セーブして…」

セーブした後、ゲームをリセットしてさっきのシーンに戻る。

土道は悩んでいた様子だったが3番は論外として仕方なしに二番を選んだ。

すると主人公は嫌がる妹に襲いかかり、泣き崩れる妹と父親に殴られる主人公が映され、そしてカチャリと手錠の音の次に暗い部屋で一人笑う主人公のCGシーンが表示され、悲しげな音楽とスタッフロールが流れ始める。

「なんじゃこりやああッ！」

「いきなりそんなことしたらそうなるに決まってるじゃないこの性犯罪者」

「ま、まあ ある意味正しい結果なのかもしれないな…」

蓮は苦笑いしながら言ってくる。

「じゃあ、三番が正解だつてのokay!!」

またリセットして三番を選んでみる。

するとアキレス腱固めをしようとしたが、妹に逆にサソリ固めをかけられその怪我が原因で一生車椅子での生活を余儀なくされてエンディングを迎えた。

「明らかにおかしいだろこれ！ 蓮もそう思うよな!？」

「そうだな、サソリ固めされて半身不随は大げさだろ」

「ふむ：そうかね？　じゃあ骨折ぐらいに修正しておくか…」

「そこじゃねえよ!!」

この空間で士道の味方は一人もいなかった…

「じゃあこれ、結局どうすれば正解だったんだよ」

「まったく、最後は出題者に答えるを聞くの？　情けないわね」

士道からコントローラーを奪うと、リセットしてさっきの所まで進める。

しかし琴里はなにもせずに見ているだけだ。

「…？　なにしてたんだ？　早く選ばないと…」

そう言った瞬間、制限時間が0になる。

『ん…あと十分…』

『だめー！ちゃんと起きるのー！』

なんと普通に会話が進んでいく。まさかの”なにもしない”が正解だったのだ。

「な…」

「なんという初見殺しのゲーム…」

「あんなおかしな選択肢選ぶなんて、おかしんじゃないの？」

「…こまでくると逆に感心してきてしまう。」

「あ！　そろそろ行かなきゃ…」

蓮は時計を見て言い出した。

「なにか予定でもあるの？」

「まあ、ちよいと”仕事”があつてな…」

そう言い、物理準備室を出る。するとまた士道の絶叫が聞こえてくる。

(また間違えたんだな…あいつ…)

そう確信しながら、蓮は学校を出て行った。

「今日は諸君に喜ばしい報告があるわ!!」

ASTの駐屯地で日下部 燎子は目の前にいる全ての隊員に大声

で言った。

「最近、空間震が多いでしょ？ だから上の連中に増員の要請がしたっていう事は前に話したわね？ それが了承されて今日、新しいメンバーが来たわよ！」

その言葉を聞いた途端、他の隊員はざわざわ、と騒ぎ出す。しかし折紙だけ無表情で浮かれている様子はない。

「隊長！　どんな人ですか？」

「ふふふ… あんた達、期待していいわよ」

その質問に燎子は得意気に答える。

「じゃあ入ってきて」

燎子がそう言うのとドアが開き、人が入ってきた。その姿を見た瞬間、折紙は驚いた。

入ってきたのは白い髪と蒼い目、そして綺麗な肌をして常装服である緑の服を着た。折紙と同じくらいの青年… 蓮であった。

蓮は燎子の隣に立つと、全員に自己紹介をした。

「増員として来た　神代　蓮だ！　整備類を担当させてもらうからよろしく！」

元気良く笑顔で話した。

「あれ、若くない？　しかもカッコいい…」

「あんな歳で整備を担当するの？　どう見たって折紙と同じくらいじゃあ…」

「あんな若さで仕事出来るの？」

やはり隊員は蓮の若さに驚いている。

「それじゃ俺はこれで…まだやるべきこともあるのでね…」

そう言って、部屋の出口に歩いていく。

「あ、そうそう　もし怪我をしたりC Rーユニットが壊れたら、俺の所に来てくれ。　タイムマシンに入れたみたいに元に戻してやるよ」

途中でそう言い残して、部屋を出て行く。　それと同時に折紙がそれを追いかけるように出て行った。

「隊長！　さっきの蓮…とか言う子の階級はなんなんですか？」

またまた質問が出てきた。

「それがね、私にも分かんないのよ」

「この言葉に隊員は頭の上に？マークを浮かべた。

「上の連中はどうしても教えてくれないの。ただ、『階級なんか気にせず自由に使っただけ』って言ってただけ」

「隊長！ 本当に自由に使っただけですか!？」

「あ、もちろん常識の範囲でって意味よ」

「…チィ」

隊員は悔しそうに舌打ちをした。

「まって。あなたがなぜここにいるの？」

通路を歩いてきた蓮は、後ろからの声に立ち止まる。そこには折紙がいた。

「なぜって 増員の要請を受けて来たってさっきの言っただろ？ これはすっかり正式の手続きを通してあるぞ」

「だったらなぜあなたは整備士なの？ あれだけの力があつたら精霊を殺せるはず」

「勘違いして欲しくないんだが、必ず精霊を殺せるとも限らないぞ。殺した実績があるわけじゃない」

蓮はこの力で精霊を殺せると過信したこともないし、殺そうと思っただことも一度もなかった。

「それでも、私からみたらあなたは羨ましく見える…」
”羨ましく見える”…か…俺もだよ…」

最後は小さく呟くように言ったため、折紙には聞こえなかった。

「まあ、お前がどう言おうと俺は部隊には入らない。その代わり整備をさせてもらうから、よろしく”鳶一折紙一尊”」

そう言って手を出して来た。握手したいと言うことなんだろう。
「……………」

しかし折紙はその手を握ろうとしない。

「別に、いきなり信用しろ…なんて言う気はないよ。ゆっくり信用してくれればいいさ」

その言葉を聞いて折紙は気が乗らないが手を握る。それを蓮は

微笑みながら見ていた。

5話

「どんなもんじゃーいッー!」

「ん? 全クリしたのか? おめでどう」

右手をグツと握って天高く突き出した土道に、コーヒーを作っていた蓮がねぎらいの言葉をかける。

訓練を始めて十日後、土道はようやくゲームのハッピーエンドを迎えることができた。

ちなみに蓮は三日目からコーヒーの材料を自前で持って来ていて、コーヒー作りに夢中だった。

「…ん、まあ少し時間がかかったが、第一段階はクリアとしておくか」「ま、一応やり込み要素は全部やったし、とりあえず及第点かしらね…」

画面の中の女の子に対してだけど」

「俺は笑わしてもらったから、満足だけどな」

蓮がここに来る楽しみはコーヒー作りの他に土道の黒歴史を見て笑うことであった。蓮は面白かったが、笑われる土道は黒歴史を晒され笑われるというコンボを受け本当に泣きそうな時もあった。

「しかしあれは…傑作だった…プププ」

「わあ! 思い出すんじゃねえよ!」

思い出すだけでも笑いが出てくるほど蓮はツボにハマっていた。この時点で心が折れそうなのだが訓練はまだ始まったばかりだ。

「それで土道。 次の訓練なんだけど」

「まったく気が進まないけど、なんだ?」

「そうね…誰がいいかしら…」

令音が手元でコンソールを操作して机に学校中の映像が映し出だされる。

「…そうだね、まずは無難に彼女なんてどうだろうか?」

そう言っ指したのは、蓮と土道の担任である岡峰 珠恵ことタマちゃんであった。

「で、俺にどうしろと?」

「…とりあえず、岡峰 珠恵教諭を口説いてきたまえ」

「はアっ!？」

「うわっ! つまんなそう。俺はパスで」

蓮は露骨に嫌そうな顔をした。同年代の女子を口説くならまだしも、生徒が先生を口説くのを見て誰が得するのだろうか。どうせ『私と五河君は生徒と先生なので無理ですう』とか言われるのに決まってる。まあ、余程強い結婚願望などが無ければだが。

「本番ではもつと難物に挑まなくちゃならないのよ。それに比べたらまだいい方よ」

「そりゃ、そうだけど…!」

「…最初の相手としてはいいと思うがね、彼女の性格から考えればそんなペラペラと他の人間に言いふらしたりしなさそうだ。…まあ、君がどうしても嫌なら、女子生徒に変えてもいいが…」

「…先生でお願いします…」

「決まったのか? じゃあ俺は教室で本でも読んてるから」

蓮は欠伸をしながら、部屋を出て行った…コーヒーは片付けずにそのまま。

「琴里! 俺ばっかじゃなくてたまにはあいつにもやらせろよ!」

士道は自分の黒歴史が蓮に笑われた事を根に持っているらしい…まあ、自業自得なのだ。

「やらせてもいいけど、士道。自分が惨めになるだけだけど、それでもいいの?」

琴里にそう言われて士道は思い出した。

蓮は殿町が開催した『恋人にしたい男子ランキング』で二位と倍以上の差をつけて一位になったことを…

「…やっぱしなくていいです…」

「まあ、士道にしては賢い選択ね」

—————

蓮は自分の席に座りながら本を読んでいた。

「ふう…」

本を読み終わり、ひと息つく。外は夕日が綺麗に街を照らしていた。その幻想的な美しさに目を奪われるそしていくらか時間が経つ

た時：

ウウウウウウー

あたりに空間震警報が鳴り響き、廊下を走る音が聞こえてくる。おそろく避難し始めた生徒だろう。

しかし蓮は避難せずに席に座ったままだ。

(はあ…人がせつかくリラックスしてんのに…)

蓮は内心で舌打ちをした。彼は空間震は少しも恐れていない…

今は自分の大切なリラックスタイムを邪魔されたことが気に食わなかった。

「まあ、いいか」

そう言っただけ蓮は本を読み始める。するととても大きな音が聞こえたと同時に”あの感覚”を蓮は感じた。

(来たか…)

その感覚はどんどん大きくなって行く。つまり近づいて来ているのだ…精霊が…

普通の人間ならすぐにも逃げ出すだろう。しかし蓮は逃げない、しばらくして教室のドアが勢い良く開く。

「ぬ…お前は…」

「よう。久しぶりだな」

そこには紫色のドレスのようなものを着て、手に大きな剣を持った少女がいて、蓮はその少女に久々に会った友人のような挨拶をした。

少し前に殺しあった関係とは思えない、友好的な挨拶を…

少女は相手の姿を確認すると、手に持った剣を構えてくる。

それは当然の反応だろう。前に会った時は自分が手も足も出ずにやられたので、警戒しているのだ。しかし蓮は少しも焦らない。

「落ち着けて、ここでやり合うつもりはない、まあ、とりあえず座れよ」

そう言い相手を落ち着かせると、着席を勧める。

相手も蓮に戦意はないと感じたのか、警戒しながらも机に座った。

その机は偶然にも土道の机であった。

「あと、あんまり物を壊すなよ。せつかくここは無事だったんだから

な」

「う、うむ… 分かった…」

少女も戸惑いながら頷く。

「よし、いい子だ。それでも俺に何か用か？」

「用などない。ただ変な感じがして、ここに来て見たらお前がいただけだ」

「へえ、奇遇だな。俺もそんな感じがしていたんだよ」

蓮は笑いながら答える。

「…お前もメカメカ団の仲間か？」

「メカメカ団？…ASTの事か。んー、一応仲間だけどお前のごことは攻撃する気はないし、恨んでもいないよ」

「ぬ？ なぜだ？」

「メカメカ団だってお前にやられる覚悟があつて攻撃してるんだし、お前にも正当防衛があるからな」

「セイトウボウエイ？ なんだ？ それは」

「簡単に言うと、やられたらやり返していいって言う事だよ」

本当に簡単に適当な答え方である。

「なに？ そんなのがあるのか？」

「その代わり、あの時だってお前の方から手を出して来たから、そこは認めろよ」

「た、確かに私の方から攻撃してしまつたが…」

それを聞いて少女は気まずい顔をした。

「まあ、反省したならいいよ。他に聞きたい事は？」

「では、お前のあの力はなんなのだ？」

その質問を聞いて蓮は目を細める。

「…逆に聞こう。お前は自分の力が何か知ってるか？」

「い、いや 気が付いたらこうなっていたから、分からんぞ」

「そうか…俺も自分の事は少しも分からない。”自分が誰か”すらも…」

自分と目の前の少女は似ているのだ。だからこそ救つてやりたい…

「けどな、楽しい事を見つければ自分が何かすらもどうでも良くなってくるさ。これだけは言える」

「うむう… そういうものなのか?」

「もう少しこの世界を信じてみる。損はしないさ」

そう言った瞬間、また教室のドアが開く。そこにいたのは…

「土道?」

なんと少し緊張した表情の土道が立っていた。

—————

「なんで蓮が精霊と話してるのよ!」

〈フラクシナス〉の司令部で琴里は大きな声を出した。

「彼は空間震警報が鳴ったのに避難しなかったんでしようか?」

隣で神無月が困惑しながらを言う。まあ、これはごもつともな疑問である。

しかし令音は逆にチャンスだと捉えていた。

「…だが、レンは彼女と喧嘩をしてるといっわけではなさそうだ…むしろ楽しそうに話している。これはチャンスではないかな?」

「どういう意味? 令音」

「楽しそうに話している様子を見るとレンは警戒されている様子ではなさそうだ… もしシンがレンの友達という事を言えば、少しは警戒されずにシンは彼女と話せるのではないか?」

つまり、令音は土道を蓮に紹介してもらえば精霊に警戒されずに話せるのでは? と言いたいのである。

「さすが令音! 冴えてるわ。じゃあインカムから蓮に指示を送って…」

「それが…蓮君のインカムはまだ調整中にして…まだ渡してないんです…」

「なんですって!!」

琴里はまた大きな声を出す。

「全ては彼次第…という事か…」

しかし令音は表情を崩さずに、冷静に呟いた。

士道は琴里から精霊のいる場所を教えてもらい、その教室のドアの前に立っている。

さつきから汗が止まらない。それも当然だろう、相手は世界を殺す災厄と言われている存在。緊張するな、と言う方が無理だ。

しかし、気を落ち着かせてドアを開ける。

「…ッ！ や、やあー」

挨拶をしようとした…その瞬間、

ーヒーヒュン

少女は手を振ったら、一条の黒い光線が士道の頬を掠めていった。

そしてその光線は士道がついさつき手をかけていた教室のドアと後ろのある廊下の窓ガラスが大きな音を立てて砕け散る。

「なんだ？ お前はっ!?!」

その言葉を言い終わると同時に少女は頭をおさえて悶えていた。

「物を壊すなって言っただろ」

背後で蓮が右手を平手にしていた。蓮が少女の頭にチョップを当てたのだ。

「しかし、こいつが敵だったらどうするのだ!?!」

「ま、待ってくれ！ 俺の名前は五河 士道、蓮の友達だ！」

このままだと敵と誤解を受けたままになってしまう気がしたので慌てて自己紹介をする。

「ぬ？ レン… 誰だそれは？」

「そういえば名前を言って無かったな…俺の名前は神代 蓮だ。お前の名前は？」

「…名、か。…そんなものはない…」

少女は悲しそうに下を見ながら言う。おそらく誰からも名前すらも聞かれたことも言われた事もないのだろう。

そんな少女を見兼ねて、蓮はある提案を出す。

「よし、士道、お前、こいつに名前をつけろ」

「え？ お、俺が？」

「そうそうないぞ？ 人のゴツド名付ファザー親になることが出来るなん

て」

蓮は嬉しそうに言う。まあ、確かにそうそうある経験ではない。

士道はしばし悩む動作をしたのち……

「トメー。君の名前はトメだ！」

士道が言った途端、小さな光球が出現して、士道の足元の床に向かっていった。

「……なぜか分からんが、無性に馬鹿にされた気がした」

少女は額に血管を浮かべながら言う。蓮も呆れたような顔をしていた。

「流石にトメは無いだろ……なんだそれ？ 鳥みたいな名前だな」

ちなみに少女が床を壊した件だが、これは蓮も怒る理由が分かるので黙認した。

そしてまた士道が考え出して少し経った頃……

「と、十香」

「ぬ？」

「どう……かな？」

少女はしばらく悩んだ後、

「まあ、いい。トメよりはマシだ」

この瞬間、”十香”という少女がこの世に生まれた。

「それでトーカーとはどのように書くのだ？」

「ああ、それは……」

士道は黒板まで歩いて行くと、チョークで『十香』と書いた。

十香も士道の真似をして黒板をなぞる。普通は書けないが、指が伝った後が綺麗に削れて下手くそな文字で『十香』と書かれていた。

「だから物を壊すなって……まあ、いいか」

蓮は注意しようとするがやめる。初めて名前を付けてもらえて嬉しいのだろう。その幸せに水を差すほど非道になれなかった。

「シドー、レン」

「ん？」「なんだ？」

「十香。私の名前だ。素敵だろう？」

「あ、ああ……」「そうだな。とても素敵だ」

士道は少し視線を逸らしながら、蓮は微笑みながら答える。

「レン、シドー。私の名前を言ってくれ」

「と、十香」「十香」

二人が名前を呼ぶと十香はさらに嬉しそうにした。

しかし突如、校舎を大きな爆音と衝撃が襲った。

「な、なにが…」

「士道！ 伏せろ！」

蓮は士道に覆いかぶさるようにして伏せさせた。その直後、窓ガラスが割れ、向かいの壁に銃痕が刻まれる。

「な、なにが…」

「ASTだよ、士道。さては十香が出てくるのを待ちきれずにいぶり出そうとして来たな。せつかちな連中だ」

なにが起こったか分からない士道に蓮は分かりやすく解説した。その表情からは恐怖が少しも感じられない。

しかし十香の表情は銃弾やガラスの破片が当たってないにも関わらず、ひどく痛ましく歪んでいた。

「早く逃げろ、レン、シドー。このままでは同胞に討たれることになるぞ」

「俺のことは気にしなくていいよ、自分の身は自分で守れるからな。しかし…」

心配そうな目で士道を見る。士道は自分を守る方法を持っていない。もし流れ弾でも当たったらとても危険だ。

だが、士道は十香の足元に座り込み、動く様子はない。

「何をしている？ 早く…」

「知ったことか…！ 今は俺たちのお話タイムだろ。あんなの気にすんな」

「そうだな… 気になることがあるなら士道に聞いてみる。いろいろ教えてくれるぞ」

十香は一瞬、驚くが士道の向かいに座り込んだ。

銃弾が飛び交う中、蓮、士道、十香の3人は様々なことを話し合っ

た。 十香が聞き、蓮と土道が答えるという形で。

「あの、だな…十香」

「ん、なんだ？」

「その…今度俺とデートしないか？」

ここで土道は本題を出した。ここでOKをもらえれば次に会う機会を準備することが出来る。その誘いに十香は…

「デートとは一体なんだ？」

まさかの答えを出してきた。しかし十香はこちらの世界をよく知らないの、無理はないかもしれない。

土道は気恥ずかしくなって、視線を逸らして頬をかく。

「レン、デートとはなんだ？」

「ん？ それは…」

蓮が答えようとした瞬間、教室の外から人影が飛び込んできた。その人物はなんと折紙だった。

折紙を確認すると、蓮は姿を隠した。ここでASTに見つかる少し々面倒なことになる。

折紙は手に持った機械からビームの刃を出すと、十香に襲いかかった。十香は刃を手で受け止める。

「くっ…」

「無粋！」

十香は刃を受け止めていた手を折紙ごと降り払う。その隙に蓮は土道に話しかける。

「…土道、ここは危険だ。 離れるぞ」

「蓮…琴里から指示があった。へフラクシナスで拾うから二人から離れるだって、でもどうやって…」

「どうやってだって…そんなの決まってるだろ。」

蓮は外が見えるくらいボロボロになった教室の壁を見てうつすらと笑う。

「ま、まさか…お前…」

「高い所は苦手か？」

土道の返答も聞かずに土道の腕を掴むと、蓮は三階の教室の外に飛

び出した。当然、腕を掴まれている士道も道連れだ。

「のわあああっ!!」

外に飛び出した瞬間、二人の体が無重力に包まれた…

6話

「こんの、バカっ!!」

「へぶんっっ!!」

〈フラクシナス〉に帰還した蓮を待っていたのは、琴里司令官の強烈な飛び膝蹴りだった。

「な、何をするんだよ…し、司令官殿…」

蹴られた腹をおさえながら床に突っ伏して震える蓮。

そんな蓮を神無月は羨ましそうに見ている。

「あんたバカじゃないの？　なんで空間震警報が鳴ってたのに教室にいたのよ？」

「ま、まあそれにはいろいろ理由がありました…」

気分的な問題だったとは言えなかった。次は何をされるか分からない。

「でもまあ、あんたがいたおかげでここまで上手く事を運ぶ事が出来たから、そこだけは礼を言うわ」

「ん？　どういう意味？」

「…君がシンより早く彼女と接触してくれたおかげでシンは警戒されずに話すことが出来た…という意味だ」

隣にいた令音が詳しく説明した。

「別に俺はそんな事を考えていた訳じゃないんだけどな」

「まあ、それでも君がいてくれたおかげで上手くいった…ASTの介入は予想外だったがね」

そう言いながら令音は手のひらを差し出した。よく見ると手の上に何かが置いてある。

「何これ？」

「インカムだ。これを介してこちらから君に指示を送る。でも君にはあまり必要ない物かもしれないが、一応付けていてくれ」

「こういうのってあまり好きじゃないんだけどな…」

蓮はイヤホンなどがあまり好きではない。耳に何か違和感を感じるのが嫌なのだ。

「…贅沢は言わないでくれ。相手に気付かれることなく話すにはこれが一番いいのでね」

「はいはい、分かったよ」

「インカムは受け取ったわね？　なら、もう帰っていいわよ」

「じゃあ帰らせてもらう。　…夕飯、何にしようかな…」

そんな事を呟きながら蓮は司令室を出て行った。彼が出て行ったのを確認した琴里と令音はフウ…と小さく息を吐いて気分を落ち着かせる。まさか、単独で精霊と接触するというイレギュラーが発生したりASTの介入があつたりいろいろあつたが一先ず二人が無事だった事を喜ぶべきだろう。

「…しかし、彼はすごいね…あの精霊とあんなに友好的に話すことが出来るなんて」

「それは私も思うわ…自分の身を守れることもあるでしょうけど、それを考えてもあんな対応は私は出来ないわ」

空間震警報が出ているのに避難していなかった事にも驚いたが、一番驚いたことは精霊とあんなに親しく話していたことだった。

普通の人間なら緊張してしまうだろう。土道がいい例だ。

しかし蓮にはそんな様子が少しも見られない。恐るべき会話能力の高さである。

「…彼は人と話すような事をしているのかね？」

「さあ…ASTに所属してるって前に言っていたけど…」

二人は考えてを巡らせたが、納得の答えに辿り着くことは出来なかった。

「ふああ〜…」

十香と出会った次の日、蓮はいつも通りの午前六時に起きた。

「今日、学校は…ないよな。昨日あつたことを考えると」

昨日、十香とASTの戦闘により、学校と蓮のクラスはメチャクチャになってしまった事を思い出す。あれは明らかに十香よりもASTの方が被害を多く出していた、というより十香は空間震以外周りにほとんど被害は無かつたと思うのだがこれもおそらく『精霊の被

害』として数えられてしまうのだろうか、だとしたらとても気の毒だ。
「それじゃあ課題を…そう言えば昨日、全部やったんだった」

学校は空間震が起きて、授業が出来ない時の事を考えて数日分の課題を出している。

しかし、蓮は昨日、暇つぶしとしてやったのでやることがない。

「んー、そんじやあASTの駐屯地にでも行って、ユニットの整備でもしようかな」

こんな風に言っているが、ASTに入隊しているので行くことは“義務”なのだ。蓮はまるで遊びに行くような感覚で言っている。

「さーて、やる事も決まったし準備をするか」

鼻歌を歌いながら機嫌良く、蓮は準備を始めた。

「あれ？ 蓮じゃない。学校は？」

ASTの駐屯地に行き、整備室へ向かっている途中に隊長の日下部燎子に出会った。

「昨日、隊長達と精霊の戦闘の所為で休校になりましたよ」

蓮は嫌味っぽく答える。

「そ、それは悪かったわよ…あれ？ なんであんたがその事を知ってるの？ 昨日、ここに来なかったわよね？」

その言葉を聞いて蓮は内心、しまった。と思った。

よく考えたら、昨日はここに来ていないため、空間震が起きたことは知っていても”何処”で起きたかは普通は知らないのだ。

言い訳しようにも学校から電話が来たというのは昨日に急に起きたことなので少し無理があるし、学校を見てきたというのも今は午前8時のため早すぎる。

必死に考えを巡らせていると無難な答えが浮かんで来た。

「ほ、他の隊員に聞いたから。結果はどうだったかって聞いたら教えてくれたんで」

「へえー、ま、昨日使ったばかりだから、ユニットはすっかり整備しておいて」

そう言い残して、燎子は歩いていった。蓮は燎子の姿が見えなくな

ると、大きく息をつく。精霊と話していた事はもちろん、自分の事は絶対に秘密にしておかなければならない。

（あ、危なかった…次から不用意な事を言わないように反省しなくては…）」

緊張した気分を落ち着かせながら、整備室へ歩いていく。

整備室の前の扉に来た途端、蓮はふと、思い出した。

（そういえば、まだ整備士のメンバーにまだ挨拶してなかったな…）」

この基地に最初に来た時は準備などがあり、まともに挨拶どころか顔すら見ていない。

しかも蓮は基本的に気が向いた時しかここには来ないので、仕事仲間に挨拶はまだだ。

「なんて挨拶すればいいんだろう…」

スタートダッシュからミスしてしまい、どのようにすればいいか悩みながら格納庫の扉を開けると…

「レエエンンンン!!」

叫び声と同時に誰かが腹に飛びついて来て蓮は後ろに倒された。

（…なんか昨日といい今日といい腹へのダメージが大きい気がするな）

いきなり起きた事を理解出来ずにそんな呑気な事を考えてしまう、起き上がろうと顔を上げたらそこには知った顔がいた。

「あれ？ お前、ミリイか？」

「そうですよ…ミリイですよー!」

そこには作業服に眼鏡をかけた、金髪碧眼の少女がいた。蓮はその少女を知っていた。

「あれ？お前、DEM社の整備士なのになんでこんな所にいるんだ？」

「出向できたんですよ。なのに蓮と会えるなんて嬉しいです!」

名前をミルドレッド・F・藤村と言い、蓮はミリイと呼んでいる。蓮とは仲がいい友達で天宮市に来る前からの付き合いで蓮は本来は整備士ではないが、なぜか懐かれている。

（出向って…まさか厄介払いじゃ…ないよな…）」

彼女は整備の腕はいいのだがその事しか考えていないため、結構扱いにくい人材だ。蓮の腹に乗りながら胸に顔を擦り付けるミリイの胸の感触が気になるがきつと本人はわざとやっているのだろう。

「もう、どこに行つてたんですか。寂しかったんですよ」

「まあ、いろいろあつてね…とりあえず、そこをどいてくれ」

ミリイが腹の上に乗っているせいで蓮は起き上がる事が出来ない。

「あ、それはすみません…」

そう言つてようやく腹の上からどいてくれた。

「ふう…俺も会社からの命令だよ。ここで仕事をしろつて言われたの」

「えっ…でも蓮の分野は整備ではないじゃないですか」

「整備も出来るよ。ここにはそれをするために来たんだよ」

「ううう…整備も出来るなんて…私…(プライドが)傷つけられちゃいました…もう蓮に貰つてもらうしかありません…」

「なんでそうなるんだよ」

わざとらしく萎れて嘘泣きを始めるミリイを蓮はため息混じりに答える。

蓮はミリイの服を掴み、引きずりながら格納庫に入つて行つた。

—————

「対精霊ライフルを準備しろ？」

午後5時、整備を終えてくつろいでいる蓮達にそんな指令が入つた。

「なんで準備するんだ？ 空間震警報は出ていないぞ」

「分かりませんよー。とにかく準備しろつて言われたんです」

蓮にはこの命令の理由が全く理解出来ない。精霊は出ていないのになぜ対精霊装備が必要なのか？

「はあ…まあ、とにかくそう言われたんなら用意するが…」

命令なら拒否することは出来ないし、ASTにも言えないことの一つや二つぐらいあると思ひ、作業を始める。

(空間震が起きてないのになぜ必要なんだ… まさか…)

だが蓮の頭にある可能性が浮かんたそれは普段なら考えられない事であったのだが、どうしても心配になりライフルの準備を終えると同時に蓮は格納庫を飛び出した。

「え？ちよ、ちよつと！ どこに行くんですか！ 蓮！」

「ちよいと用事を思い出した。ライフルは渡しておいてくれ」

ミリイの声を背に受けながら、駐屯地を飛び出して少し離れた人がいない所に来る。〈フラクシナス〉と連絡をとるためだ。

耳に付けているインカムから通信を出して見る。

「おい。〈フラクシナス〉、聞こえるか？」

『聞こえているわよ。どうかしたの？』

通信に出たのは琴里だった。

「まさかとは思うんだけど…今、精霊が出現してるか？」

『なんでその事を知っているのよ!?!』

これによって蓮は確信した。

「出現しているんだな。状況はどうなっている？」

『詳しいことは艦内で話すわ。今は焦るような状況じゃないから』

それからしばらくした後、蓮は〈フラクシナス〉によって回収された。

—————

〈フラクシナス〉の司令部に来た蓮はモニターを見て驚いた。

「なぜ十香がいるんだ？」

昨日会ったばかりの十香が制服を着て土道と共にいた。

今は夕日が綺麗に見える公園にいる。

「わかんないわよ。こっちだって驚いてんだから」

琴里がため息混じりに言うが、蓮が驚いているのはそこだけではなかった。

(なんで十香がいたことに気がつかなかったんだ…)

前のように十香に呼ばれるような感覚は整備室にいた時は感じなかった。

それ理由が蓮にはわからない。

「でも、まあ今の所はいい感じだから問題ないけどね」

しかし蓮はあることを思い出した。

A S Tが対精霊ライフルを持っていった事を…

「司令官！ 早く十香と士道を安全な場所に避難させろ！」

突然、蓮が大きな声で叫ぶように言った。

その言葉を聞いて、琴里は顔を顰める。

「待って。それはどういう意味？」

「A S Tが十香を狙って…」

そこまで言いかけた瞬間、士道は十香を突き飛ばしその直後に士道の脇腹に大きな穴が空いた。

(遅かったか…)

そう思いながらも、蓮の次にする行動は決まっていた。

—————

「シ…ドロー」

十香は倒れた士道に向かって話しかけた。しかし返事はない。

士道の体からは大量の血が出て来て、地面に血だまりを作っている。

「シドロー…？」

士道の頭の隣に膝を折り、頬をつついて見るが反応はない。

あたりに立ちこめる焦げ臭さを感じて十香は状況を理解していた。

士道はA S Tの攻撃から、自分を庇って打たれたのだと。

頭の中で蓮と士道が言った言葉がフラッシュバックしてくる。

『もう少しこの世界を信じてみる。損はしないはずさ』

『俺が！ お前を肯定するッ！』

十香は自分を認めてくれた人達…2人さえいてくれれば、自分はこのでも生きていけると思った。

しかし、二人は自分の事を認めてくれても”世界は否定した”

「よ…く…も…」

喉の奥から声が漏れるように小さな声で言う。

「よくも…シドローを！」

十香は霊装を纏うと地面に踵を突きつける。すると巨大な剣が収められた玉座が出現した。

収められた剣を引き抜く。もちろん相手は決まっている。士道を殺した人間：鳶一 折紙だ。

サンダルフオン「塵殺公―【最後の剣】!!」

叫ぶと同時に剣が収めてあった玉座がバラバラに砕けて、十香の握った剣に纏わり付き、10mは越すほどの巨大な剣になる。

十香はその剣を折紙のいる方向に振り下ろした…

怒った十香の力は圧倒的でたったの一振りでも広大な大地を縦に両断してしまった。

これではASTが全滅するのも時間の問題だろう。

十香の力を見て、蓮は決意した。

「…司令官。俺をあそこに降ろしてくれ」

「あそこに行つてどうするの?」

「ASTの連中を助ける…いや、十香を止めるつて言つた方が正しいかな」

「本当にいいの? ASTは士道を殺したのよ」

琴里はまるで試すような言い方をしてくる。

「それでも…見殺しには出来ない」

そう言つて司令部を出て行つた。

なので蓮は気づかなかつた。倒れた士道の傷口から炎が出てきた事に…

ASTは怒り狂つた十香を相手にしているが全く歯が立たなかつた。いくら攻撃しても十香が視線を向けるだけで霧散させてしまう。

しかし十香は始めから他の隊員になど目を向けていなかった。

目標はたった一人…鳶一 折紙だけだ。

「おおあああああッ!!」

折紙は必死に剣を避けても、剣が起こす衝撃波もとてつもなく一瞬

だけ怯んでしまった。

しかしその一瞬が致命的であった。

十香が振るった剣が折紙の随意領域テリトリを容易く切り裂き、地面に叩き落とした。

その衝撃で折紙は身体中を骨折して立ち上がる事すら出来ない。

「…終われ」

十香は倒れている折紙に向かって剣を振り上げる。すると黒い光の粒子のようなものが剣に集まって行く。

助けを求めようにも他の隊員はすでに戦闘不能状態で戦うのは無理だ。

そして剣が闇色に輝くとそれを折紙に振り落とした。

しかし剣は折紙に当たることにはなかった。なぜなら折紙の前に人影が立ち塞がり、十香の剣を受け止めたからだ。

それはヘレツドクイーンを逆手に持った蓮であった。

「レン…なぜ邪魔をするのだ!」

「十香…少しは落ち着け!」

蓮はヘレツドクイーンの取っ手の部分を捻った。

すると剣は大きな音を鳴らすと、炎のようなものが吹き出して十香の剣を弾いた。

蓮のヘレツドクイーンはグリップの部分を捻ることによって剣のスピードとパワーを上げることが出来る。

「そいつはシドーを殺したのだぞ!」

そう言つてまた折紙に剣を振り下ろす。今度は空中に巨大な手が出て剣を止めた。へバスターで防御したのだ。

「だから十香…落ち着けて言つてんだろ!」

青色に光る右手を振り払いながら叫ぶ。

すると十香は悲しそうな顔で蓮を見た。

「レン…教えてくれ!…なんでシドーは死んだ!なぜ私はこうも世界から否定されるのだ!」

十香は士道が死んだ事に責任を感じているのもあるが、何より自分が世界に認められなかった事が悲しくて仕方のないのだろう。

「十香：お前は”人間”だ！　こんな力を持っている俺なんかよりも何倍も”人間”らしい”人間”なんだよ！　だから、胸を張って堂々と生きれば良い!!」

蓮は反射的にそう叫んでいた。その言葉を聞いて十香は目にさらに涙を浮かべる。その直後、

「十おお香あああー!!」

空から土道が落ちて来て十香の肩に手を置く。

(これでなんとかなるかな…)

蓮がそう思った瞬間、十香の持っていた剣の光が雷のように漏れて地面をえぐっていく。

しかし、土道が十香にキスした途端、十香の剣にヒビが入り、バラバラに砕け散り土道と十香は地面に降りていく。

(これで一件落着かな…)

そう思い、蓮は土道と十香の元に向かう。しかし十香はなぜか半裸状態で土道に抱きついていた。

「なんでそうなったんだ？」

「そ、それが、お、俺にもさき、さっぱりで…」

目に見えて動揺している土道を見てつい笑みが出てくる。

「まったく…生きてたのかよ…」

「でも、なんで生きているんだ？まったく分かんないが…」

「まあ、生きてくれたんならなんでもいいよ」

次は十香に顔を向けて話しかけた。

「世界はお前を否定なんかしてないさ…わかつただろ？」

「うむ！そうだな！」

十香は笑顔で答えた。それを見て蓮は安心した。

すると突然、右手が十香に吸い寄せられるように触れた。

「なっ…？」

「ぬ？どうしたのだ？レン」

蓮自身まったく意識したわけではない。まるで磁石の”異極同士”のように勝手に動いたのだ。

触れた瞬間、”何か”が蓮の中に入っていくのを感じる。

「あつ…くつ…んつ…」

十香は悩ましい声を上げていているが蓮には気にする余裕はない。そして触れた右手から、腕、肩、と、何かが上がってくるのを感じる。

「いきなりどうしたんだよ!? 怪我でもしたのか?」

となりから土道の声が聞こえてくるがそれに反応できるほど今の蓮には余裕が無かった。十香も不安そうな顔でこちらを見つめている。

「二体俺の身体に何が…グアア!!」

今度は背中に痛みが走った。すると背中に突然、剣が現れた。しかしそれは『レッドクイーン』ではなかった。

大きさはヘッドクイーンと同じくらいだが、形はスリムで剣の柄の真ん中に赤色の宝石が埋め込まれて、なんとなく十香の剣に似ている。

色は銀色で夕日が反射して綺麗に輝いている。

蓮はその剣を手につくと角度を変えてよく見る。

すると蓮は試しに剣を山の方に向けて振って見た。すると…

剣から衝撃波のようなものが飛んで、”山の頂上を吹き飛ばした。

”

これには土道と十香だけでなく、蓮自身も驚いた。

〈トラウイス〉

十香の霊力によって生み出された剣。美しい見た目とは裏腹に圧倒的破壊能力を備えている。

使用者の意志とは関係なしに破壊してしまうので回りの状況に注意する必要がある。

(これは…封印だな)

今の破壊力を見て、これは必要な時以外使わないと判断した。

「なあ、レン。お前は何なのだ? お前の『腕』やその剣といい、お前は人間なのか?」

十香は〈バスター〉を見て、聞いて来た。

十香にとってはASTとは違い、『未知』という恐怖がレンに対して

芽生え始めていた。

「分からない…だけど、これだけは言える。俺はお前達の敵じゃない」
「…そうか。じゃあ、私はレンを信じるぞ！」

十香は無邪気な笑顔で答えて来た。

蓮はへトラウイスを光の粒子にして収納すると二人に呼びかけた。

「さあ、” 帰ろう ” 二人とも」

その言葉に十香と士道はお互い頷きあった。

—————

それから三日後の月曜日、復興部隊によつて完璧に修復された教室で蓮はグツタリしていた。

あの件の後でも、A S Tの仕事があり、まったく休めない土日であった。それが蓮の疲れている理由だ。

「はあ〜」

蓮がそんなため息をつくとき教室がざわついた。そこには体の様々な所に包帯が巻かれている折紙がいた。

(まだ、治ってないのか…)

やはり、十香から受けた傷は重かつたらしい。まあ、時間が解決してくれる問題なので心配する必要はないだろ。

折紙は士道に謝罪をした後、蓮に向かって来た。

「助けてくれてありがとう」

そう言つて頭を下げてきた。この行動に教室はまたざわめく。

「気にしなくていいよ」

蓮はそれだけ言つとチャイムが鳴つた。それと同時にタマちゃんが入ってくる。

「皆さん、席に着きましたね？」

タマちゃんは蓮とは逆にとても元気な声をあげる。

「そうそう、今日はサプライズがあるの。ー入ってきて！」

すると教室のドアが開いて…

「今日から厄介になる。夜刀神 十香だ。皆、よろしく頼む」

なんと十香が制服を着て入ってくる。これに士道、蓮、折紙は驚い

た。

「おお、シドー、レン！ 会いたかったぞ！」

笑顔でこちらに向かって来た。蓮は言いたいことはたくさんあるが一つだけ聞いて見た。

「十香。世界は楽しいか？」

「うむ！ とても楽しいぞ！」

その答えを聞いて、蓮は微笑んだ。

7話

「2人とも！クツキイというものを作ったぞ！」

休み時間、土道の机にいた蓮と土道に向けて容器を突き出しながら十香は興奮気味に言ってきた。

周囲の男子は蓮と土道を怨嗟に満ちた目で見ている。

「ありがとな。十香。あとクツキイじゃなくてクツキーだぞ」

そう言いながら蓮は容器に手を伸ばしてクツキーを一つ手に取った。

クツキーは焦げたりしているがそれは一応、クツキーと呼べるものだった。

蓮はそれを口に運ぶ。

「ど、どうだ？美味しいか？」

十香は不安そうな目で蓮を見る。

「うん。めちやくちや美味しい」

蓮は笑顔で言うのと十香はとても嬉しそうな顔をする。

「うむ！そうか！ほらシドー。レンもこう言っているぞ！早く食べて見るのだ！」

十香はクツキーを一つつまみ、土道の口元に持って行こうとした瞬間……

廊下の方から銀色の弾丸のようなものが一直線に飛んで来て、クツキーをバラバラに砕いた。

それはフォークであった。

わかった理由は廊下から一番遠い位置にいた蓮がフォークを人差し指と中指に挟んで”止めていた”からである。

「まったく……食べ物で粗末にするなよ……」

ため息混じりにフォークが飛んできた方向をみると、そこには折紙がいた。

「何をする！危ないではないか！」

「あなたのクツキーを彼に摂取させるわけにはいかない」

「一応、理由を聞いていいか？」

なぜそう思うのか蓮は理由を聞いて見た。

「彼女は手洗いが不十分だった。加えて調理中、舞い上がった小麦粉に咽せて3回クシャミをしている。これは非常に不衛生」

「なっ……」

「よく見てるな……」

回数まで記録してるとは、恐ろしいほどの観察眼だった。

折紙の言葉を聞いた他の男子は視線が十香のクッキーに注がれている。

「十香、もう一個クッキー、もらっていいか？」

「うむ。別に構わんぞ」

蓮は十香からもう一個クッキーを貰うと、周りに見せつけるようにも食べる。男子はそれを羨ましそうに見ていた。

なんとという性格の悪さだ。

「さあ、シドー！ 私のクッキイを食べるのだ」

「私のクッキーの方が美味しいに決まっている」

2人ともクッキーが入った容器を土道に突き出して迫ってくる。

「人気者は大変だな。 土道」

「勘弁してくれ……」

結局、土道は二人のクッキーを同時に食べたが、それがさらに大きな争いの火種となった。

—————

放課後、蓮は土道の家にいた。理由は琴里に呼び出されたからだ。

土道の家で勝手にインスタントコーヒーを作り、一口飲んでみる。

「はあ……やっぱり不味い」

「……インスタントだからね。仕方ないさ……」

向かいのテーブルにいる令音が角砂糖をカップに大量に入れながら言ってくる。

「……砂糖入れ過ぎだろ」

「そうかね？ これぐらい普通だと思うが……」

試しに一口飲ませて貰うが……

「うわっ……メチャクチャ甘いぞ……こんなの飲むのか？」

このやりとりをしている間にも令音は砂糖を入れる手を止めない。するとリビングのドアが乱暴に開いた。

「琴里い！ どういうことだ！」

入って来たのはキレ気味の土道だった。

「なんで十香が…って、なんで令音さんと蓮がいるんだよ？」

「…ああ、邪魔してるよ」

「同じく」

そう言っただけで蓮はコーヒーを飲み始める。

「どういうことですか？ 十香は今、ヘフラクシナスに住んでいるんじゃない？」

「…まあ、それについては説明するから、とりあえず体を拭いてきたまえ」

雨に濡れたせいで、床がビショビショになっていた。

「十香がしばらくうちに住む!？」

「まあ、精霊用の特設住宅が出来るまでだけどねー」

二階の琴里の部屋で土道は十香が家にいる理由を聞いた。

「…検査の結果が安定してきたし、そろそろ外部に居住を移そうと思ってる」

「それでなんでうちなんですか？」

「それはレンカシンという時が十香の精神が安定するからだ…」

精霊は精神が不安定になると霊力が逆流してしまうので、精神が安定する所で生活させたいのだ。

「レンの家でもよかつたんだが、監視しやすいという理由で君の家が採用されたんだよ…」

「はあ…なるほど」

「それと君の訓練のためでもある…」

令音の言葉に土道は首を傾げた。

「え？ でも精霊は…十香の霊力はもう封印したから大丈夫なんじゃない？」

「なに言っただよ、土道。精霊は他にもいるぞ」

「えっ…マジかよ!？」

「ここで蓮から衝撃発言が飛び出した。

「何人いるかまでは分からないが、俺は十香以外にもう一人精霊を知っている。十香を含めて二人以上は確実にいるぞ」

「彼の言う通りだ。君には引き続き、精霊と会話役をしてもらう。そのための訓練さ」

その言葉に土道は頭を抱えて、悩み出す。

「…少し、考えさせてくれ」

「土道、これだけは覚えて置いてくれ。お前は人も精霊も救う事が出来ることを…」

蓮はまるで言い聞かせるように言う。

「彼の言う通りだ。そういえば、君にはこれを渡していなかったね」

令音は懐から少し膨らんだ茶封筒を取り出して、蓮に渡した。

蓮は中身を確認すると、「まいど」と言った。

「蓮、それはなんだ?」

「ん?これは…」

そう言つて茶封筒からあるものを取り出した。それは厚さ一センチの札束…百万円であった。

「お、お、お前…な、な、なんでそんな大金を…」

百万円という大金を目の前にして、土道はパニックになる。

「俺の給料だよ。ただ働きはしないって言っただろ」

「でも…そんな大金がもらえるのか…?」

「まあ、こつちも命がけだしな。これぐらい貰わないと、釣り合わないや」

蓮は百万円を茶封筒に戻そうとした途中で手を止めた。

「土道。ちよつとこつちに来い」

蓮は手招きをして土道に近づいて来るように指示した。

「ん?どうかしたのか?」

土道が近づいた瞬間、”百万円で土道の頬を叩いた”

「いほっ…!」

そう言つて床に倒れる。

「それが百万の痛みだ。貴重な経験だったな」

しかし、百万円も関係なしに、普通に痛かった。

「とりあえず、十香はしばらくここに住むことになるから覚えておいてくれ」

「で、でも…それは…」

すると、琴里の部屋のドアが開いて、十香が顔を覗かせた。

「シドー…。やはりダメか？ 私は…ここにいては…」

まるで捨てられる子犬のような表情で見つめる十香に否、と言えるわけが無い。

「どうする？ 十香はああ言っているぞ」

「…わ、わかったよ」

士道はこう答えるしかない。

士道がほぼ強制的に答えさせられた後、四人は一階に降りてきてくつろいでいた。

ちなみに十香は士道の答えに安心したらしく、今はゲームに夢中になっている。

「なあ、蓮。去年はなんで学校に来なかったんだ？」

蓮はコーヒーを飲んでいて、士道にそんな質問をされた。

「んー…。まあ、いろいろあつてな」

人間、そう言われると逆に聞きたくなるものである。

「教えてくれよ。そう言われたら、結構気になるしな」

「簡単に言うと、世界中を回ったのが理由だよ」

「世界中って…旅行してたってことなのか？」

「いや、旅行じゃ無いんだな。分かりやすく言うと、仕事つてところだな。まあ、士道にとって学校に行っているのと同じ風にとらえてくれればいいよ」

その言い方に士道は眉を顰める。ほとんど言っている意味が分からない。それにその言い方では、まるで自分は今まで学校に行っていなかったように聞こえるのは気のせいだろうか。

「あ、あともう一つ質問いいか？」

「答えられる範囲なら」

「蓮は日本人じゃ…ない…よな？」

土道は不安気に言ってくる。確かに蓮は白い髪に青い目という、日本人離れした容姿を見て気になっていたのだ。

「ああ、俺はイギリス出身の人間」

「お前、イギリス人だったのか！　じゃあ、その名前も…」

「上の名前は俺がつけた偽名だよ。まあ、適当に決めただけなんだが」
イギリスにいた頃はファミリーネームはなく、周りからはレンと呼
ばれていた。それが自分の名前だったし、周りも一部を除いてそう
思っていた。

「じゃあ本名はなんて言うんだ？」

「…そのうち教えてやるよ。それより、明日、俺は学校に行かないか
ら」

「え？　なんでだよ…ってそういうえば、明日、体育があったな」

土道は納得の声を出す。

蓮は背中を人に見られたく無いので、体育のある日は学校に来ない。
い。

しかし、去年のようにテストの日以外、学校に来ないのと比べれば
まだマシだと土道は思っている。

「まあ、そういうことだ。だから十香の世話は任せたぞ」

「十香をペットみたいに言うなよ…」

「まあ、鳶一との喧嘩を止めろって意味だよ」

そう言つて、コーヒーを全部飲み干してカップ持って台所に行き、
洗い始めた。

「コーヒーご馳走さん。俺は明日はASTの基地にいる予定だから、
何かあったら連絡をくれ」

洗い終わると、玄関へのドアを開けて出て行くので土道も外まで見
送る。

「邪魔したな。訓練、頑張れよ。土道」

そう言つて、自分の家に帰って行った。

翌朝、携帯を見てみると土道からメールが来ていた。

『すげえラジオあった。聞いてみてくれ。マジで心が打ち震える。人生観変わるぜこれ』

メールの中にURLが貼ってあり、サイト先に飛んでみるとよく分からない詩が朗読されていた。

しかし、蓮にはこれが何か分かった。

(あいつ…また訓練をミスしたな…)

蓮は返信を押して、内容を書いていく。

『今のは聞かなかった事にしておいてやるよ。訓練、頑張れ。』

そう、打ち込んで、メールを送った。

この内容に土道が優しさのあまり、涙を流したのは少し後の話…

—————

「蓮って、すごいですよね」

ASTの基地の整備室。整備をしていると同僚のミリイがそう言ってきた。

時刻はちょうど学校の4時間目の授業が終わる時間だ。

「何がすごいんだ？」

「だって、CRユニットにとっても詳しいことやみんなとすぐ仲良くなったり、それってとてもすごい事だと思うんですよ」

蓮はここにまだ十回も来ていない。だが装備にとっても詳しい事などが理由でメンバー全員に慕われている。

「それってすごい事なのか？ よく分かんないが」

「すごい事ですよ。それに蓮はかっこいいじゃないですか！」

整備を終えて、考え出す。

すごい、この言葉は蓮には聞き慣れた言葉であった。

そこまで長く生きてるわけでは無いが、この言葉は耳にタコが出来るほど聞いている。

しかし、蓮はこの事を誇りに思ったことはなく、自分にはこれしかない。と思っている。

「ミリイ、俺は…」

ウウウウウウウウウウウ

突然、基地内にサイレンが響き渡る。空間震警報だ。

そして、これは精霊の出現を意味している。

基地内は慌ただしくなり、次々に戦闘員が入って来てC R Yユニットを着けて出撃して行く。

(…また、精霊に気づけなかった…やはり…)

十香の時もそうだったが、蓮はまた精霊が現れることに気付けなかった。

そして半ば確信した。距離が関係していると。

このことは可能性の一つとして考えていたことであつた。

もし、距離も関係なしだったら、たとえば地球の裏側についても感じていただろう。

しかし、蓮は今までこの様な経験は無い。

蓮は心の中で今後の調査課題を考えていく。『自分を知る』これが蓮の最終目標だからだ。

(しかし…土道は大丈夫か…)

A S Tが動いたと同時にへフラクシナスも…土道たちも動き出しただろう。

見に行きたい所だが、戦闘から帰還した隊員のことを考えると下手にここを離れる訳にはいかない。

(今は待つことしか出来ないのか…)

警報が鳴り、いくら経った頃、蓮は立ち上がりどこかに歩きだした。

「れ、蓮！ どこに行くんですか？」

「ちよいと気分転換に近くの公園に行ってくる。ミリィ、留守番を頼む」

「でも、雨が降ってますよ」

「傘、借りていくよ。何かあったら呼びに来てくれ」

それだけ言って、蓮は歩いて行ってしまった。

蓮は基地の近くの公園に来ていた。気分転換と言ったが、本当はただジツとしていられなかつただけだ。

今は雨が降っている灰色の雲をボーと眺めていた。

(雨は嫌いだ…どうせなら晴れている方が良いんだがな…)

すると、公園の外から人が来て蓮の隣に並んだ。

その人物は黒い傘をさしていて、黒い髪に黒い長袖と全て黒で統一されていた。しかし、傘をさしているため、顔が見えない。

「雨が降っていますわね。あなたは雨が嫌いですか？」

いきなり、相手は話しかけてきた。声や言葉使いからして女性だろうと考えられる。

「ああ、嫌いだ。どうせなら晴れている方がいい。そっちは？」

「わたくしは嫌いではありませんわよ。特に今日のような日は」

「へえ、良いことでもあったのか？」

「ええ、とてもとても良いことが…」

そう言って傘を上げて顔を蓮に見せてきた。

その顔はとても白く滑らかでに整った顔と赤い目、髪は二つに結わえてあり、髪で左半分を隠してあるのが気になるが

『美人』という言葉が一番似合うだろう。

「自己紹介しますわ。わたくしの名前は時崎 狂三…ASTからは〈ナイトメア〉と言われていますわ」

その言葉を聞いた途端、蓮は凍り付いた。

8話

「自己紹介しますわ。わたくしの名前は時崎 狂三… ASTからは「ナイトメア」と呼ばれていますわ」

この言葉を聞いた途端、蓮は雨に濡れるのにも構わず、傘を放り投げ、後ろに大きくジャンプしながら、

右手に「バスター」 左手に「レッドクイーン」と、すぐに戦える状態になった。

(な、なぜ「ナイトメア」がここに…)

蓮は精霊にそこまで詳しく無いが、時崎 狂三…「ナイトメア」の事は知っていた。

彼女は『最悪の精霊』と呼ばれていて、空間震だけでなく自身の手によって人を殺している。

それがここまで警戒する理由である。

(一人はマズイ…ここは逃げるしか…)

蓮は一人で精霊を倒せると自惚れている訳ではない。「ナイトメア」が相手となればなおさらだ。

ここを離れようと思い、足を動かさそうと思ったが…

「なに!?!」

足が全く動かなかった。自分の足を見てみると、地面から白い手が大量に出てきて蓮の足をつかんでいた。

「その腕…フフフ…、逃げないでくださいまし。ようやく見つけたんですから…」

「くそっ!!」

焦る蓮とは逆に狂三は口に手を当てて、上品に笑っている。

(こうなったら「レッドクイーン」で…)

「レッドクイーン」を使い、足をつかむ手を切ろうと思った時…
「それでは風邪をひいてしまいますわよ」

狂三は蓮が投げ捨てた傘を拾い、蓮の頭上に持ってきた。

「フフ…少しは落ち着きましたか?」

「…お前は何がしたいんだ?」

蓮は自分の傘を右手で受け取り、質問した。

「こんな事、これから殺す相手にする行動とは思えない。すると、狂三は自分の左手を蓮の右手に重ねてきた。」

「ずっと会いたかった…わたくしの事は覚えてませんか？」

「悪いが小さい頃に一緒に遊んだ、とかだつたら記憶が無いから分かんねえぞ」

蓮は軽い冗談のつもりで言ったが、聞いた狂三は悲しそうな顔をした。

「そうですか。記憶がございませぬの…わたくしは…」

そこまで狂三が言いかけた時、近くからミリイが蓮を呼ぶ声が聞こえてきた。

「邪魔が入りましたわね。また、お会いしましょう」

足をつかむ手を消すと、公園の出口へ歩いていく狂三を見て蓮も慌てて「レットクイーン」と「バスター」を消す。

その時、ちようど狂三と入れ替わりになるタイミングで傘をさしたミリイが公園に入ってきた。

「蓮く、部隊が帰還するそうなので呼びに来ましたよ。あれ？なんでそんなに濡れているんですか？」

「え？ あ、いや、気にしないでくれ」

「まあ、とにかく、基地に帰りましょう。そのままだと風邪を引きますよ。」

蓮の手をひいてミリイは走り出した。

（あいつは…俺のことを知っているのか…）

蓮は狂三と会った記憶はない。本来ならば、蓮は狂三に殺されてもおかしくなかった。

しかし、記憶が無いと言った時の悲しそうな顔が気になってしまふ。

（だめだ…自分がやるべきことに集中しなくては…）

そう、自分に言い聞かせて気持ちを切り替えた。

蓮は戦闘後のC R ユニットの整備をするため、格納庫に来た。

中を覗くと、戦闘が終わって、C R ーユニットの随意領域テリトリーを使った反動で動けない隊員が見られる。

その中で気になる物を見つけた。

「鳶一、それはなんだ？」

なぜか折紙が手に人形らしき物を持っていた。

「現場で見つけて、気に入ったから持ってきた」

「気に入ったって…そのどこが気に入ったんだ？」

白い生地で兎という事は分かるが、なぜか右目が黒いボタンらしき物で隠れていて、まるで眼帯をしているようになってる。

これが蓮にはよく分からない。

「この良さが分からないなんて、貴方の感性はとても残念」

「イマイチよく分からん。おい、ミリイ！」

「はい。何ですか？蓮」

「この人形、可愛いと思うか？」

すると、人形を見た瞬間、ミリイの目が輝いた。

「何ですか！この可愛い人形は！ミリイは気に入りました!!」

「えっ!? マジかよ」

「はい！この可愛い目に、小さな手がたまりません！」

ミリイはテンションMAXで蓮に語りかける。

「彼女もこう言っている」

「あ、ああ…そうだな…」

それだけ言って、C R ーユニットに向かって行った。

（確か、今回は精霊はデパートに出現したんだっけ？ だったらあれはデパートの商品か… 最近のデパートは変わった人形を売っているんだな…）

少し、お爺ちゃん思考になってしまった蓮なのだった。

—————

「十香が部屋から、出てこない？」

仕事が終わわり、家に帰った直後へフラクシナスから通信があり、土道の家に来いと言われた。

結果を聞いたところ、土道は精霊の力を封印出来ず、ちよつとした

ハプニングの場を見てしまった十香が部屋に立て籠もる事態が発生したらしい。

「そのハプニングっていうのは今はあえて聞かないでおくよ。で？
どのくらい立て籠もってるんだ？」

「そろそろ5時間になる。そろそろ出て来て欲しいところなんだが…」

令音は時計を見ながら言った後、次は蓮の顔を見る。

「その事を聞いた時から、まさかとおもってたが…」

「ああ、君に十香が出て来るように…いや、シンの誤解を解くのに協力してほしい」

予想していた内容に思わず呆れてしまった。

「なんで俺なんだ？ 土道が原因なら、土道がやらなきゃダメだろ」

「こういう場合は、本人を出さない方が良いんだよ…」

蓮はあまりこのようなケースを体験したことが無いが、その方が良いらしい。

とりあえず、今は令音を信じる事しか蓮には出来ない。

「まずは十香の部屋に行って、話を聞いてやって欲しい。シンと同じくらいの信用を得ている君なら、十香は心を開いてくれるだろう」
ぬ

「まったく…十香の事を考えないからこうなるんだよ」

ため息混じりに言った後、下手くそな字で『十香』と書かれた部屋の前に来て、三回ノックした。

「ふ、ふん！ だ、誰だ！ 私の事は放っておいて…「俺だよ。蓮だ」
なに!?! レンだど!?!」

その直後、部屋のドアが爆発したかのように勢いよく開いた。

「レン！ なぜ学校に来なかったのだ！ 寂しかったぞ！」

「よしよし、事情があつてな。悪かったよ」

抱きついて来た十香を受け止めて、頭を撫でる。

「話は聞いたぞ。大変だったな」

「なっ！ レ、レンには関係無いぞ！」

「まあ、とりあえず部屋に入ろうか」

「ふむふむ、なるほど…要するに土道は十香の事を放っておいて、別の女の子とキスしてたのか」

十香の部屋に入った蓮は十香の話を聞いて、この件の元凶^{土道}について聞いていた。

「それは完全に土道が悪いな」

「そうなのだ！ 土道が他の女とイチャコラしているのが…うううう！！」

話している途中にも関わらずに十香は涙を出し始めた。

「我慢なくて良いんだ。存分に泣け」

蓮がそう言うのと十香は蓮の胸に飛び込んで来て、大泣きし始めた。そのせいで蓮の服が十香の涙と鼻水で濡れてくる。

「グスン…くそっ…シドーめ！」

どうやら十香は自分のこの気持ちがなんなのか、気付いてないようだ。

十香は蓮に抱きついて、土道の悪口や不満をずっと蓮に愚痴つてくる。

きつと酒に酔った者の相手をするのもおそらくこんな感じなのだろうと蓮は感じた。

とはいえ、このままではダメなのでひとまず十香を落ち着かせるのが先決だ。

「でも、まあ、少し十香は落ち着いた方が良く。時間をかけてな」

「グスツ…そうか…」

「ああ、それじゃあな。十香は泣くより、笑ってる方が可愛いぞ」
そう言っつて部屋から出ようとする…」

「レン…レンはどこにも行かぬ…よな…？」

十香は怯えながら聞いてくる。 さつき話した例え話が頭から離れないようだ。

「俺はどこにも行かないよ。それに土道もどこにも行っていないぞ」
そう答えて部屋を出た。

廊下には令音が腕を組んで立っていた。

「どうだったかね。上手くいったかい？」

「とりあえず、出来ることはしたって所かな。でもまだ出て来そうに無いな」

蓮は今回、十香の気持ちを落ち着かせることが目的だった。

それは上手くいったと蓮は思う。あとは十香次第だ。

「とりあえず、十香の気分転換をしてやるといい。出来れば十香と同じ、女性が良いかな」

「そうかね…じゃあ私が明日、買い物にでも誘ってみよう。それにしても、よく十香の事を分かっているね」

「ただの推測だよ。まったく、人のメンタルを見るのはあまり得意じゃ無いんだがな」

戦う事は出来るのに、一人の少女の心すら癒せないというのも変な話だ。しかし、このような事態を経験したことが無いので仕方ない。

「はあ…士道に言っておいてくれ。『頼むから、これ以上面倒なことを引き起こすな』ってな」

それだけ言って、蓮は一階の玄関に行き、五河家を出て行った。

「あく、疲れた。普通、仕事から帰って来た奴に、今すぐ家に来い。なんて言うか？」

しかし呼び出しには疲れていたのにも関わらずにしつかりと従った。

なんやかんや言いながらも、最終的には従う蓮であった。

(結局、あの事、言えなかったな…)

あの事とは狂三…ヘナイトメアと出会った事だ。空間震も無しに突然、現れたということは恐らく蓮しか知らないだろう。

しかし、この事はASTにもヘラタトスクにもまだ言っていない。(なにを躊躇しているんだ…俺は…)

何度も言おうと思っても、狂三の悲しそうな顔が蓮の脳内にフラッシュバックしてくる。

その度に話そうとする意思がなくなってしまう。

(落ち着け…焦らなくて良い。 ゆっくり考えていけばいい…)

しかし、それが自分自身に対する言い訳であることに気づかない……

「なんでこうなつたんだ……？」

次の日、蓮はファミレスに来ていた。

時刻は昼時のため、そこそこ客がいるがここに来たのは昼食を食べるためでは無い。

「ん？ 来たか……こつちだ……」

席に座っていた令音が蓮の姿を確認すると手を振ってきた。

席に行ってみると、テーブルにはハンバーグやスパゲツティなどのハイカロリーの料理が大量に置いてあった。

「解析官殿。いきなり来いって言われたから、何かと思ったら……これはなんだ？」

蓮は昼になり、昼食の準備をしようと思ったたら携帯に令音から電話があり、『今すぐファミレスに来てくれ』と言われた。

「十香が注文した料理だね。私一人では食べきれないから、君に手伝ってもらおうと思ったんだ」

「ふーん。で？ その肝心の十香はどこに言つたんだ？」

「彼女なら、さつきシンの所に向かったよ」

「へえ、じゃあ、仲直り出来そうだな」

こんな言い方をしているが、内心ホツとしていた。

やっぱり、十香には笑顔であつてほしい。悲しい顔は見たくないものだ。

「代金はこちらが出すから心配しなくていい。それに君とは前からじつくり話したかったのね」

「本当にタダなんだな？ じゃあ遠慮なく……」

普段はあまり外で食べたりはしないが無料なら遠慮する理由はない。席に座り、ハンバーグをフォークとナイフを使い切り分けていく。ナイフをいれると肉汁が溢れ出し、匂いを食欲をそそってくる。

「それで、何の用件で俺を呼び出したんだ、仲良くお話しながら美味し

い料理を食べよう。なんてのが目的じゃないんだろう？」

「君に聞きたいことがあるんだ。君はNERO^ネという人物を知っているかい？」

令音の言葉に蓮の手がピタリと止まる。NERO^ネ：その名は電子部品を開発する技術者の名前であり常に10年先の製品を作っていると言われているほどの評判である、テレビの電化製品などを見ると必ずと言っていいほど、トレードマークであるNEのロゴを見る事ができる。

「ああ、むしろテレビを見ていて知らない奴はいないんじゃないか。ニュースでも名前を出していたし」

「ふむ、その人物はどんな人間か、知っているかな？」

そんな事を知っている人間はほとんどいない。理由はNEROは社交場が嫌いであつたく人の前に姿を現さない。様々な国のテレビ局が色々な手段を使ってその姿をカメラや映像に映そうとしたのだが、すべて無駄な努力に終わった。

だが、姿は見えなくても評判は悪くなかつた。なぜならNEROはその優れた製品をまったく差別することなく、すべての企業に公平に取引しており、それこそ注文があれば大企業から近所の電気屋にまで取引する。

「いいや、有名だけどテレビに映つたところなんて、見たことないから分からん」

「そうか…、だが、一般人には知られてないがNEROは姿を現さないけどその手足と呼ばれる人物がいてね。出てこないNEROのために社交場に出たりしていて、唯一NEROの顔を知っているとさえ言われていてね、顔写真は手に入らなかつたんだが、その人間の名前は“レン”。君と同じ名前なのだが、これは偶然かい？」

令音の言葉を蓮は表情を出さないポーカーフェイスで聞いている。この事はニュースなどでは報道されてなく、知っているのは社交場に出てくる大企業の社長などのお偉いさん方だけだろう。その事を何故令音が知っているのかと疑問に思ったが、情報なんてどこから漏れるか分からない。だが、このような情報を知ることが出来る時点で令

音の情報収集力は見事だと感じた。

「ただの偶然じゃないか？その話自体初耳だし、この世界で『レン』なんて名前を持つている奴なんていくらでもいると思うが…」

少し驚きつつ興味のなさそうな顔で答える。令音は表情も変えず、ずつと見つめてくる。隈のある目だがまるで心の中まで見通しそうな雰囲気を出していて、ついつい目を逸らしたくなるがそれをジツと耐える。

「…君がそう言うならきつとそうなんだろうね…」

それを聞いて内心ホツとして食事を再開する。この後、令音と蓮の間には会話は無かった。

9話

「うーん。どこに行ったのかしらね…」

琴里は〈フラクシナス〉の艦長席で頭を悩ませていた。

その原因は精霊である〈ハーミット〉…四糸乃であった。

「まったく、どこにあるのかしらね…」

四糸乃の半身とも言える、大切なパペットの行方が分からなくなっ
てしまったのだ。

土道が探す約束をしたので〈フラクシナス〉でも調べているのだが、
まったく見つからない。

それが理由で悩んでいると、司令室のドアが開いた。

「おーす、司令官殿。元気？」

なんとも適当な返事をしながら入ってきたのは蓮だ。

「悪いけど、今は取り込み中なの。あんたと遊んでいる暇は無いの」

「時間は取らせねえよ、結果を聞きに来ただけだ。土道と十香は仲直
り出来たか？」

「それは…むしろ面倒な事になったわ…」

「え？　なんで？」

話を聞くと、また精霊と一緒にいる所を見られ十香は完全にヘソを
曲げてしまったとのこと。しかも今度は食料を蓄えての籠城らしい。

「それだけでも厄介なのに、今は四糸乃の落し物を探索中で忙しいの」

「ん？　四糸乃？　誰それ？」

「そういえばあんたには言っていなかったわね。〈ハーミット〉の名前
よ」

「へえ、今回出てきた精霊は〈ハーミット〉っていうのか」

「なんでASTに入っているあんたがそれを知らないのよ…」

「ここまで来ると、もはや呆れるしか無い。なぜこの男はここまで精
霊に無知なのか…」

「で？　その落し物ってなんなの？」

「あんたに言っても知らないに決まってるわよ」

「いいから教えてくれって」

言わないといつまでもしつこく聞いて来るだろう。琴里はそんなのは御免だった。

「白い生地ノウサギのパペットよ。ほら、どこかに行きなさい」

琴里は手をシッシと振って蓮を追っ払う動作をした。

だが蓮はその言葉を聞いた途端、固まった。そのパペットはどこかで見た事があった。

「…もしかして、それって右目を黒いボタンで隠して眼帯みたいになつてた？」

心の中でどうか違ってほしいと思つたが…

「その通りよ。まさか知ってるの？」

残念ながら神は残酷であった。

「いや…まあ、ちよつとね」

視線を逸らしながら言う蓮に琴里は胸倉を掴み、脅すように聞いてきた。

「教えなさい！ それはどこにあるの!？」

年下だと言うのにとてつもないプレッシャーを琴里から感じる…

知っていると行ってしまった以上、教えなかつたら何をされるかわかったものではない。

「分かったよ！ 言うから落ち着けて！」

仕方なしに教える事にした。それしか選択肢は無いようだ。

「そのパペットは…」

—————

週末が明けて、誰もが憂鬱な気分になる月曜日。

蓮は学校をサボって午前を自由に過ごした後、午後は駐屯地に来ていた。

しかし、そこには普段とは違う様子の人間がいた。

(あーあ、鳶一の奴、完全に浮かれちゃって)

普段から無表情で喜びを顔に出すタイプでは無い折紙が蓮に分かる程に浮かれていた。

もちろん、蓮は浮かれている理由が分かっている。

(土道が家に来るのがそんなに嬉しいのかね…)

折紙がパペットを持ってきている事を知った琴里はさっそく、奪取を試みた。

その結果、奪取は失敗して実行人の二人が病院の世話になるのだった。

(二人が病院行きって…家の中に何があるんだ?)

だが、今日、土道が『今度、家に行つていいか?』と聞いたらなんと即答でOKが出たらしい。

土道が家に来る。これが折紙が浮かれている理由だろう。

(土道が家に来るぐらいで大げさな…あ! 面白い事考えた…)

悪巧みを閃いて口元に笑みが浮かぶ。その笑みは悪魔の笑みであつた…

「なあ、鳶一。今日はやけに機嫌が良いみたいじゃないか」

訓練が終わつた後、折紙が一人で廊下を歩いている時、蓮はそう言つて話しかけた。

「あなたには関係ない」

だが、折紙はいつも通り無愛想に蓮を無視して歩いていく。

「ズバリ当ててやろうか? 土道が関係してるな」

この言葉を聞いた途端、折紙の足が止まる。

「…なぜそう思うの?」

「お前の機嫌が良い時なんて、土道が関わっているとしか思えないからな」

本当は知っていたから当てられたのだが、それを知らない折紙は少なからず驚いているだろう。

「そして…自分の家に土道が来る事になつただろ?」

「なぜ分かつたの?この事は誰にも言つてない」

「まあまあ、そんな事、どうでもいいだろ。それより…もしかしたら力になれるかもな…」

後ろを向いていた折紙には分からなかつたが、この時の蓮の顔は笑っていた。

「先に言っておく。あなたの助けは必要ない」

廊下から誰もいない部屋に移動した後、折紙はこう言って来た。

「こう言えるという事は相当秘策があるのだろう。なにかとは言わないが…」

「私は彼の好みをしつかり理解している。後は彼を部屋に連れて来て襲うだけで大丈夫」

「どうやら折紙は最初から土道を襲うつもりらしい。」

「別にそれは構わないが…その後の事を考えてるのか？」

「それはどういう意味？」

「土道がもし無理矢理襲われたって言ったら、少し面倒な事になるんじゃないか？」

その事を聞いて折紙は眉をピクリと動かした。どうやら目の前のことに目が眩んで後の事を考えていなかったようだ。

「それほど土道の事を襲いたいのか…」

「なら、どうすれば良いの？」

「逆に考えるんだ。襲うんじゃない…襲わせるとな…」

「この言葉に流石の折紙も驚きを隠せない。」

「それは…どういう意味？」

「お前が襲ったらアウトだが、もし土道が襲って来たら後はお前の好きに出来るって事だよ」

その事を想像した折紙はペロリと唇を舐める。しかも、その顔は無表情なのでとても不気味だった。

「そうするにはどうすればいい？」

「それは…」

周りに誰もいないのに、蓮は折紙の耳に両手を当てて声が漏れないようにして秘策を折紙に吹き込んだ。

「…それで本当に彼は私を襲ってくれるの？」

「もちろん、お前は顔は良いからな、最後に必要なのはシチュエーションだよ」

すると折紙は「ありがとう」と言うと部屋を出て行った。蓮の教え

た作戦に必要な物を買に行つたのだろう。

折紙が完全に出て行つたのを確認すると蓮は…

「ふう、嘘をつくのは気分がいい」

笑顔でそう言った。

それから数日後、蓮は五河家に来ていた。来た理由は十香に会うためだ。

ちなみに家の鍵は冷音に『十香に会いたい』と言つたらすんなりと貸してくれた。

(はあ…なんでこうなるんだろうな…)

誰も答えてくれない問いを心の中で言うと、十香の部屋をノックした。

「十香、いるか？ 蓮 (ry)」

そう言い終わる前に十香の部屋の扉が開いた。

「レン！レン！」

十香が部屋から飛び出して来て、蓮に勢いよく抱きついた。

「う、ううううう！ シドーめ！」

十香は蓮に抱きついて大きな声で泣きはじめる。

今、2人は部屋のベッドに座っていた。

「よしよし、落ち着けて」

とりあえず、目標を下げて『土道と仲直り』より先に『十香を落ち着かせる』を実行した。

「くうううつ！ レン！レン！」

十香は普段から土道と蓮にベツタリだが、今日はいつもよりも重傷のようだ。

おそらく、土道に会えない寂しさを蓮に当てているのだろう。

(土道…頼むから早く仲直りしてくれ…)

だが、この状態はあまり良くない。もし、蓮が離れたら十香は何をするか分かつたものではない。

それこそ、下手をすれば冷音から聞いたような『靈力の逆流』とい

う現象も発生しかねない。

(そういえば、今日だったな…土道が鳶一の家に行くのは…)

今頃、土道は折紙の家に着いているだろう。そして折紙は秘策を実行してゐるだろうか。

(あいつ…まさか本気でやってないよな…?)

あれはちよつとしたイタズラ心で言っただけなので本気で信じてるとは思えないのだが…

(ま、いつか。あいつがどうなろうと関係ないし)

そんな自分勝手な事を考えていると、部屋が静かになっている事に気が付いた。

十香を見ていると蓮の体に抱きついたまま眠っている。どうやら泣き疲れて眠ってしまったのだろう。

(まったく、すっかり…しろ…よ…)

抱きつかれている状態なので、十香の肌の温かさが服越しに伝わって来て心地よい。

(俺も…少し…寝ようかな…)

蓮は十香の頭を抱き枕のように腕に抱えて、重くなってきた瞼を閉じた。

白い空間、動けない自分、またあの夢を蓮は見ていた。

(くそー。またこれかよ)

動こうとしても動けず、『バスター』か『レッドクイーン』を出そうとしても、夢だからか、まったく出てこない。

(なんなんだ！この夢は！)

何も出来ないこの状況に苛立ちばかり募る。

そしていつもと同じ、白衣を着た人間が部屋に入ってくる。ここまではいつもと同じだがここからいつもと違った。

(…? いつもと様子が違う…どうしたんだ?)

普段は注射器を取り出すのだが、今回は様子が違った。

顔が見えないので表情が分からないが体の動きから見て、相手は狼狽したような様子であった。

(お、俺は何を忘れてるんだ…)

自分でそう思った瞬間、蓮はハツと気が付いた。

(忘れてる…なぜ俺は何かを忘れてると思っただ…)

自分で言いながら、自分は理解していない…そんな不思議な感覚を感じた。

(グツ…頭が…)

すると突然、頭痛が蓮の頭を襲った。だが、同時に何か頭がボンヤリと浮かんできた。

(あと少しで…思い出せそうなんだが…)

あと少しで思い出せる…その時…

ドカアアアアン

突然、聞こえた爆発音で蓮は目を覚ました。

それと同時にあの感覚が蓮を襲う。

(まさか…)

ガラガラツと窓を開けると、冷たい風が蓮を襲った。

外を見てみると景色一面が銀世界へと成り果てていた。

一瞬、雪が降ったのかと思っただがよく見てみると建物が…いや、街が凍っていたのだ。

「ん…レン…さっきの音はなんなのだ…？」

さっきの爆発音で十香も目が覚めたらしい。しかしまだ寝ぼけている様子だ。

「十香、しっかりしろ。非常事態だ」

そう言つて十香をしっかりと立たせた直後、蓮は窓の外に弾かれるように視線を向けた。

その瞬間、窓の外をウサギみたいな形をした三メートルほどの人形のような物とその背に乗った、緑色のコートを着た少女が通り過ぎて行った。

「あれは…あの時の…」

「十香、知っているのか？」

だが、そう聞くと十香は顔を俯けてしまった。

(もしかして、さっきのが司令官殿が言っていたへハーミットで四糸

乃とか言う名前の精霊か…)

四糸乃と士道が一緒にいた所を十香が見てしまい、このような状況になったことは琴里から聞いている。おそらく十香も複雑な心境なのだろう。

「十香、どうする？俺と一緒に士道を探しに行くか？ それとも避難するか？」

その問いに十香は…

「私も行くぞ。シドーに…シドーに謝りたい」

その答えに蓮は満足したように笑うと、

「そうか…じゃあ行くぞ」

十香の手を掴み、窓の外へ飛び出して行った。

—————

十香と共に街へ出た蓮は凍った道路を走っていた。しばらく走っていると開けた道路に、士道、四糸乃、そしてASTが確認できた。

(チィ…ASTも一緒か…)

心で舌打ちをすると、四糸乃の人形が大気を吸い込むように人形が仰け反った。それを見た瞬間、十香が手を強く握った。

「十香、どうした？」

「あれは…危ない感じがする…」

十香も精霊だ。その事が直感的に理解出来たのだろう。しかし今、ここで飛び出して行く事は出来ない。

(クソッ！ どうすれば…)

そう考え始めた時、十香が地面に踵を突き立てた。

十香の天使、〈サンダルフォン塵殺公〉を使用しようとしているが何も起きない。士道に霊力を封印された今、十香はただの少女なのだ。

その瞬間、人形の頭が元の位置に戻った。

(くっ…！ こうなったら…)

後のことを考えず、飛び出そうとしたその時…

士道の目の前に巨大な玉座が現れて、人形の口から出た冷氣から士道を守った。

(あれは…まさか!?)

十香を見てみると、制服の上に紫色の膜が揺れていた。霊装を発現したのだ。

(そうか…十香の精神状態が不安定になったから…)

四糸乃は突然現れた玉座に驚きながらも、すぐに人形を操り逃げに行った。周りにいたASTも四糸乃を追って飛んでいく。

蓮はASTがいなくなったのを確認して士道に近づいた。

「士道！大丈夫か？」

「蓮！どこにいたんだよ！心配したぞ」

「十香の部屋で寝て…て…」

そこまで言つて蓮は気が付いた。

(あれ…どんな夢だったっけ…?)

普段は夢の内容を覚えているのだが、なぜか今回はまったく思い出せなかった。

まるで記憶がスッポリ抜けているかのように…

「どうしたんだ？」

「い、いや…なんでもない」

だが、今はそんな事より、重大な事がある。即座に気分を切り替えた。

「シドー！」

十香も士道の事が心配で近づいて来る。だが、士道は十香の姿を見て驚いた。

「十香、それは…？」

「ぬ？ おお!? なんだこれは！ 霊装ではないか!？」

十香も士道に言われて、初めて気が付いたらしく、自分の姿を見て驚いた。

「そんな事より…シドー、怪我はないか？」

「あ…ああ、おかげさまで」

目の前にある玉座を見上げながら言うと、十香はばつが悪そうな顔になり、声を震わせながら後を続けた。

「その…なんだ、わ、悪かった…いろいろと」

「え…？」

「お前に謝ってんだよ。あの事で」

土道はキョトンと返したので、蓮がコツソリ補足説明をした。そのおかげでなぜ謝っているか分かったらしい。

「い、いや…あれは俺が悪いんだし…」

丁重に謝りたい所だが、今は時間がない。土道はその場で膝を突くと頭を下げた。

「二人とも…俺に力を貸してくれ…俺はどうしても四糸乃を救ってやらなきゃならないんだ…っ！」

「俺は始めから手を貸すつもりだ。それが仕事だからな、十香はどうする？」

十香は少し無言になった後、小さな声で話し出した。

「レンとシドーはあの娘の方が大切なのだな…」

「それは…それは違うぞ、十香」

土道が言おうとした所を割り込んできたのは蓮だ。

「あの子もお前と同じだ。自分の意思とは関係なしに人を傷つける、そんな力を持っている。」

「俺は四糸乃を救うって約束した！ だから、十香！ 力を貸してくれ！」

2人の言葉に十香は無言になった後、小さく笑い出した。

「ふふ…そうだな…お前はそういう奴だったな…あの娘を追えばいいのだな？」

「…ッ！ 十香！」

「それ以上は言うな。時間が惜しい」

十香はその場にあつた〈サンダルフォン塵殺公〉をガン！と蹴った。

すると、形を変えて行き玉座から、不格好な舟のような形になった。

「2人とも乗れ。急ぐのだから？」

その言葉を聞いて、蓮と土道は戸惑いながらも上に乗る。

「速度を抑えては見失う。しっかりと掴まっついろ」

その瞬間、〈サンダルフォン塵殺公〉は猛スピードで地面の上を滑り始めた。

土道は咄嗟に背もたれにしがみついたが、十香と蓮はこのスピードの中で悠然と立っていた。

移動する〈塵殺公〉サンダルフオンに乗って移動し始めて少し経った頃、奇妙な光景が見えた。

地面に吹雪が渦巻き、綺麗な半球形をしていてその周囲にASTが確認できた。

「あれはなんだ?! シドー!」

十香が驚きの声を上げた直後、猛スピードで移動する〈塵殺公〉サンダルフオンの前に巨大な氷の壁が出現した。

周りに何か変化があったわけではない。こちらの移動先のピンポイントの位置に現れたのだ。

(やっぱり、こつ^俺ちの事に気づいているか……)

蓮も分かるように四糸乃も蓮の事が分かっているのだ。

正体が分からなく、ただ近づいてくる事だけが理解出来る事は、今の四糸乃にとってどれだけの恐怖か予想出来る。

「くっ……!」

仕方なしに進路を変更しようとする十香だが、

「そのまま進め! スピードを緩めるな!」

「だが目の前に……」

「俺を信しろ! このまま進め!」

今から道を変えている時間はない。蓮は〈塵殺公〉サンダルフオンの先頭に行くと、〈レッドクイーン〉を出しグリップを捻り、パワーを溜め始めた。

「蓮……何を……」

「怖かったら、目を閉じてな、土道」

そして氷の壁にどんどん近づいて行き、当たる瞬間、

「ふんっ!!」

最大までパワーを溜めた〈レッドクイーン〉で氷の壁に思いっきりぶつけた。

〈塵殺公〉サンダルフオンの推進力を乗せた〈レッドクイーン〉のパワーに壁は耐え切れず……

バリーイイイイイイ!!!!!!

バズーカでも撃ち込んだ! するような音を立てて壁は壊れた。崩れてバ

ラバラになった氷の破片が空気中に綺麗に飛び散る。

「フウ… ん？どうしたんだ？ 土道」

「お前…本当に何者なんだ…？」

「ただの…お前の同級生だよ」

軽く放心気味な土道にそんな軽い言葉を蓮は言うのだった。

10話

氷の壁を壊した直後、次は前方の光景が変化した。

なんと折紙が近くのビルの先端をむしり取り、四糸乃の結界の上に運んで行ったのだ。

「おいおい、精霊よりASTの方が周りに被害を出してんじゃないか？」

「シドーは四糸乃とやらをなんとかする方法は考えてあるのだな？」

「あ、ああ：絶対になんとかしてみせる」

だが、それには結界の周囲に居るASTが邪魔だ。どうにかして注意を逸らすことが出来れば：そう考えたらある蓮に案が浮かんだ。

「十香、結界の周囲にいるASTが邪魔だ。ちよいと注意を引いて来てくれるか？」

「む？ 私がやるのか？」

「本当は俺がやりたい所なんだが、見つかると面倒な事になるからな。

もちろん、タダとは言わないぞ」

蓮は得意げな顔をしながら言葉の続きを言った。

「もし、やってくれたら、きな粉パンをお前の好きなだけ食わせてやるよ」

「なぬ!? それは本当か!？」

「ああ、もちろんさ。少しの間だけでいいから」

しかし、十香は答えを言わずに玉座に生えている柄を握り、剣を抜き取ると嬉しそうな顔をしながら折紙の所に飛んで行った。

「これでASTはなんとかなるかな」

「きな粉パンで釣るって：いいのかよ：」

「気にするなよ。十香の腹をきな粉パンで満たせるぐらいの金はあるさ」

だが、十香が注意を引いてくれたおかげでASTと入れ違いになるような形で四糸乃の結界に辿り着けそうだ。

しかし、もう少しという所でまた地形に変化が現れた。

なんと四糸乃の結界を囲むような形で大量の氷の壁が出現したの

だ。

「これでは結界に近づく事すら出来ない有様だ。

「な…あれは…」

「土道！ 降りるぞ！」

蓮は土道を掴み、移動する〈塵殺公〉サンダルフォンから飛び降りた。

その直後、氷の壁が突きさつきいた場所に出現した。あと少し遅かったら確実にやられていただろう。

（なるほど…とことん拒む気だな）

だが、この行為が蓮の闘志に火をつけた。

（なんとしても土道（とパペット）をお前の所に連れて行ってやる…）
そんな蓮の隣で土道は〈フラクシナス〉と連絡をとり、必死に四糸乃の元に向かう方法を探っていた。しかし、表情を見る限り、有効な策が浮かんではないようだ。

「四糸乃の所に向かうのに、何か方法は…」

「方法ならあるぞ。少し荒っぽいけどな」

そう言うと、背中に背負っている〈レッドクイーン〉は光の粒子と消え、次に現れたのはなんと〈トラウイス〉だった。

「お、おい…それは…」

「大丈夫だ。出来る限り加減するよ」

土道は〈トラウイス〉がどれほど危険か分かっている。その威力は十香の〈塵殺公〉サンダルフォンにも劣らない程だ。

蓮は〈トラウイス〉を右手で逆手に持ち、左足を一步踏み出し逆手で剣を空に掲げるようなポーズをした。

「蓮…何を…」

「まあ、見てな」

やがて、刀身に光が帯びてきて輝き始めた。そして十分に光り輝いた時、蓮は〈トラウイス〉を思いっきり前の方に振った。

すると、刀身から光の斬撃が飛び出して氷の壁を次々と破壊していく。そして見事なまでの一本道が出来た。

「これでよしと…土道、パペットはしっかり持ってるな」

「あ、ああ…ちやんとあるぞ」

士道はポケットからパペットを取り出して見せた。

「蓮…ここまで手伝ってくれてありがとな。ここからは俺が行く」

「正気か？この中は危険だぞ」

「琴里にもそう言われたよ。だけど、俺があいつを救うって約束したんだ」

「お前は馬鹿正直だな。じゃあ俺ももう少し手伝ってやるよ」

そう言うとき空中に巨大な青い手が出現した。蓮の右手を見てみるとへばスターが青く輝いている。

手は士道と蓮に覆いかぶさるようにして2人を包みこんだ。

「これで大丈夫だ。あまり俺から離れるなよ、防御範囲があまり広くないんだ」

「本当にすまない…」

「気にするな。ほら、さっさと行くぞ」

へばスターに包まれた二人は四糸乃がいる結界に歩いていった。

—————

結界の中の猛吹雪をへばスターに包まれて怪我なく進んで行く。

しばらく進み、吹雪の勢いが弱くなった時を見計らい蓮はへばスターを解除した。

「ここからはお前の出番だ。ちやっちやと四糸乃の霊力を封印してこい」

「もちろんだ。ここまでありがとう」

「俺はここで待ってるから、いい結果を期待してるぞ」

士道はパペットを手に持ち、先が見えない暗闇に向かって歩いていった。

士道の姿が見えなくなると、フウと息をついた。

（誰かのために…か…）

十香も士道も誰かを助けるために戦っている。もしかしたら、自分是谁かのためにこの力を使用したのは初めてかもしれない。

しかし、どうしても考えてしまう。自分の事も分かっていないのに誰かを助ける資格があるのだろうか…

（もしかしたら、今こんな事をしているのは、ほんの少しの良心を満足

させたいだけかもしれないな)

だが、今はそれでも構わなかった。自分のしたい事を好きにだけすればいい…。その良心が満足するまで…

そして、この時、周りがだんだん明るくなっていつていることに気付いた。

周囲を見渡すといつの間にか吹雪は収まり、空の雨雲の間からは太陽が顔を見せている。

(土道の奴…封印出来たらいいな)

称赞の言葉を掛けようと後ろを振り返ってみた瞬間、蓮は固まった。

土道が水色の髪をした人形のような綺麗な少女の両肩に両手を置いていたのだ。

しかも、なぜかその少女はほぼ裸に近い状態である。

「……………」

蓮は土道を汚物を見るかのような目でジッと見ていると、土道も蓮に気付き視線が交わる。

蓮はポケットから携帯を取り出すとどこかの電話番号を打ち始めた。

「ま、待ってくれ！ どこに電話をかけているんだ!？」

「安心しろ。土道。お前の手首にちよいとオシャレなブレスレットがつくだけだ」

この状況で電話をしても、相手は^{警察}ここに来るとは思えないが、このままでは人としての何かが終わってしまうような気がした。

「冗談だよ。それで君が四糸乃…だね？」

名前を言われた四糸乃はビクツと震えた。どうやら怯えているようだ。

「怖がらないでくれ。俺は神代 蓮 土道の友達だ。よろしくな」

怯えさせないように自己紹介をして、右手を差し出して握手を求めた。だが、四糸乃はまだ戸惑っている様子だ。

「大丈夫だぞ 四糸乃。蓮はいい奴だから四糸乃ともきつと友達になれるよ」

士道がそう言うのと、ゆつくりと手を出して来た。

「よろしく…お願い…します」

小さな声で言いながら小さい右手で蓮の手を握った。

その時、十香の時と同じあの感覚が蓮を襲った。

「ぐう…ぎい…」

四糸乃に触れている右手の手のひらからだんだんと登ってくるのを感じる。

「あつ…うう…はあ…」

四糸乃も同じように十香の時と同じ反応をしていた。また、四糸乃の触れている右腕から何かが伝ってくる感覚を感じる。正体も分からないこの感覚は蓮にとつてとても不快な感覚だった。

「はっ！ はあ…はあ…」

「大丈夫か？ 十香の時といい…どうしたんだ？」

心配そうな顔でそう聞いてくる士道。四糸乃も同じ気持ちのようで不安そうな顔をしている。

「大丈夫だ…少し目眩が…うっ！」

そこまで言いかけた時、背中に痛みが走る。そして背中から溢れ出た光が両腕に向かって行き、光が消えた時には両腕に何か装着してあった。

形は籠手という表現が正しいだろう。鋼のような籠手に一定間隔で水色の綺麗な色をした線が横に入っている。

肘まで覆った籠手には白と輝く水色でそれ以外は鉄のような鈍い輝きを放ち、形は全体的に機械味が帯びている。

蓮は両腕の籠手を見た後、右腕で思いつきり地面に殴った。

すると、まるでさつきまで透明だったかのように突然現れた氷の壁が士道達を囲った。

「なっ…!?!」

「ひっ…!」

いきなり現れた壁に驚く四糸乃と士道。それを見た後、蓮はもう一度地面を殴った。

すると、壁は空気に溶けるかのように消えていった。だが、その壁

の形に空中が光っていた

ダイヤモンドダスト…そう呼ばれる現象が起きたのだ。

〈ウイトリク〉

空気中にある水分を強化し操る事が出来る籠手。

空気に含まれている水分を一瞬で凍らせる事や蒸発させる事が可能。

しかし、砂漠などの水分が少ない地帯では能力が下がるので注意が必要である。

籠手には近接武器が隠しており、不意を突くことやある程度の接近戦に対応できる。

「蓮…さん…貴方は…一体…」

『いやー、蓮君、君、何者なのかなー。ちよつとよしのんに教えてよー』

四糸乃は混乱した様子で、よしのんはケラケラ笑いながら聞いてきた。

2人はさっきの感覚や人間には到底出来ない技を見て驚いたのだろう。だが、蓮は…。

「あいにく、今自分探しの旅の途中でね。質問にはお答え出来ません」

軽い冗談を返した後、スタスタと歩き出した。

「おい、どこに行くんだよ？」

「後始末だ。お前は四糸乃と一緒にヘフラクシナスに拾ってもらえばいい」

その直後、2人は無重力のように浮かび上がり、ヘフラクシナスに回収された。

それを見届けて、蓮は駐屯基地に向けて歩き出した。

(さて、これから残業の時間かな)

蓮には精霊を助けた後でも、自分が現場にいた証拠を消す仕事が続いていた…

その日、蓮が自宅に帰ってこれた時間は午後の一十一時であった。

「あく疲れた。風呂に入っさつさつと寝るか」

作業は今日だけでは終わらず、明日もやるのが山積みだ。本当はさつさと寝たいが風呂を抜く事は出来ない。

早速、浴槽にお湯を溜めて息を吐きながらお湯に体を沈めた。

「ふう…やっぱり風呂は良い。疲労が回復していくな」

蓮はイギリスで育ったが、風呂は好きだった。シャワーだけでは何か物足りないからだ。

15分ほど身を沈めて、浴槽から出た。体と髪を洗って汚れを落として風呂場から出ようとした時、

「な…？…これは…」

壁にかかっていた鏡を見て驚いた。今鏡には蓮の背中が写っている。

その背中には十字架が刻んであるのだが、最後に見た時と違ってさまざまな模様のような装飾が足されていた。

「一体、いつの間に…」

日常生活で自分の背中を見る機会などほとんど無いので変化に気付かなかったようだ。

いつ刻まれたのか、考えているとある場面が浮かんで来た。

「十香と四糸乃の霊力を封印した時か…」

あの時は背中に痛みを感じた、その時に増えたと考えると納得できる。

試しに『レットクイーン』を出そうと意識して見ると、装飾と十字架が光り輝き剣が現れる。

「なんなんだ、この体は…」

精霊の霊力を取り込むだけでなく、自分の体にも大きな変化をもたらしている。

これは明らかに人間の体では無いだろう。

「まあ、今はいいか。ゆっくり調べればいい」

風呂場を出て体を拭いた後、パジャマに着替えた蓮はすぐにベッドに入り込んだ。

土道が四糸乃の霊力を封印してから2日後、駐屯基のブリーフィングループにASTのメンバーが集まっていた。

前に立っている隊長の燎子が全員に呼びかける。

「さて、皆集まってるわね？ 今日知らせが…」

「隊長、まだ蓮が来てないんですが…」

隊員の一人が空席を指しながら聞いてきた。

「いいのよ。別に蓮がいないのは珍しい事じゃないだし」

蓮は毎日必ず来るというわけでは無い。だが、居て欲しい時には必ず居るため、文句があるわけでは無かった。

「知らせっていうの…蓮に続き、また補充要員が充てられる事になったの」

「補充要員…ですか？」

「ええ…『少しは戦い方を学べ』とか散々嫌味を言われた後でね…」

この時から燎子の顔がだんだん暗闇に染まっていくのを隊員たちは感じていた。

「た、隊長…!」

「おっと、自己紹介をさせなきゃね。トップエースらしくて実際に精霊を殺したこともあるそうよ。」

精霊を殺した、この言葉に隊員たちはざわめき始めた。たった一人で精霊を殺したとは一体どれほどの腕の持ち主なのだろうか。

「入ってきて」

「はっ」

燎子の声に応じて可愛らしい声が響いた。

そしてドアが開くと中学生ぐらいの姿をした少女が部屋に入ってくる。

「崇宮 真那三尉であります。以後、お見知り置きを」

真那と名乗った少女がメンバーに自己紹介をした時、また扉が開いた。

「すいませーん。遅れましたー」

そう言いながら入ってきたのは蓮だ。しかし、蓮の顔は真那を見た瞬間、驚きの表情になった。

「真那…？
なんでお前が…」

11話

(十香達の住宅も完成してこれで安心できるな)

蓮は自衛隊常装着に着替えながら思っていた。

土道の家の隣に十香達、精霊の家であるマンションが完成した。これで十香達はヘフラクシナスの窮屈な空間から解放されるだろう。蓮もついさつき見てきた。ていうか見てきたから遅刻しているのだが。

(隊長さんに何か言われるかねー?)

着替え終わり、少し駆け足でブリーフィングルームへ向かう。

「すいませーん。遅れましたー」

遅刻した者とは思えない程の軽い言葉を言いながら扉を開けて、部屋に入った。しかし、入った瞬間、驚きの表情になった。

「真那…? なんでお前が…?」

真那も相手の姿を見て驚きながらも無言で蓮の元へ歩いてきた。だんだん部屋の中を緊張感が支配していく。

真那は蓮の目の前にまで歩いてくると…

「蓮じゃねえですか!! 今までどこに行ってやがったんですか! 心配してやがったんですよ!!」

いきなり笑顔になり、蓮の両手を握り、ブンブンと大きく振り始めた。

「お前もその喋り方は相変わらずだな」

「じゃあここの連中は蓮が手伝ってんのに成果を挙げられてねえんですか!」

「ちよ、ちよつと待つて! あんた達、知り合いだったの!」

事態を理解出来ない燎子が2人に聞いてきた。

「知り合いつていうか、元同僚みたいな感じ…なのかな?」

「まったく、蓮が手伝ってんですからもうちよつと頑張りやがってくださいよ」

「なんであんたはそんなに蓮を押ししてんのよ?」

「え? 知らねえんですか? 蓮は…」

そこまで言いかけた所で蓮が真那の口を手で塞いだ。

「はいはい、それ以上はダメだ」

「隊長！ あんな子が本当に精霊を殺せるんですか？」

隊員の1人がそう聞いた。どうやら真那に言われた事が相当気に障ったらしい。

「大丈夫でやがりますよ。少なくともあんたよりは強いんで」

明らかに挑発と受け取れる言葉に、隣にいる蓮は頭に手を当ててはあ…とため息をついた。

「無駄口叩くんじやないの。前のへハーミット戦の映像を流すから空いてる所に座りなさい。ほら、蓮、あんたもよ」

燎子に言われて真那は渋々席に座った。その場所は偶然か蓮の座る席のすぐ横でその隣には折紙が座っている。

「さて…と」

燎子が壁際のボタンを操作すると天井からスクリーンが下がり、部屋の照明が落ちた。

へハーミット戦の映像が流れていく中、蓮だけは他の隊員と映像の方向が違っていた。

(よし、ちゃんと誤魔化せているな)

自分が映っている面倒なので、ちよいと映像に細工をしたのだ。これで蓮が映ることはない。

映像が進んで行き、カメラが結界に入っていく土道を映した時、

「……………」

隣に座っている真那がいきなり立ち上がった、すると小さな声で

「兄様…？」

そう呟いた。その言葉を聞いた蓮は…

(はあ…？)

間抜けな声を心の中で出してしまった。

「おい、真那、お前は土道と知り合いなのか？」

映像を見終わった後、蓮は真那にそう聞いた。

「え？ 土道？ 誰の事ですか？」

「お前が『兄様』って呼んだ奴の事だよ。友達だからな」

「その話、私も聞きたい」

途中に入ってきたのは折紙だ。折紙も真那の隣に座っていたので声が聞こえたらしい。

「ほお：鳶一一曾と蓮は兄様とお知り合いなのですか？ ふむ：それじゃあ今度の演習に一曾が参加してくれるんなら詳しく話します」

今度真那の実力を確かめるという目的で演習がある。折紙にそれに出ると言ってきたのだ。

「どうするんだ？ 鳶一」

「：わかった。参加する」

折紙はそう答えるしかない。

そして演習の結果は十対一という真那がとても不利な状況で始めたにも関わらず、真那が最後の一人である折紙を倒して勝利した。しかし：

「あ・ん・た・ら・ねえ：」

隊長の燎子が額に血管を蠢かせていた。

「模擬戦なのに、何貴重な装備を潰してくれてんの！」

実践でも無いのに貴重なユニットを壊してしまっただけは大損害ではない。こんなのが続いたらASTは精霊を討伐するより、破産が先となるだろう。

「蓮！ 修理出来そう？」

「修理出来ない事は無いけど、新しく作った方が金も時間も少なく済むレベルかな」

鉄屑となったCRユニットを調べながら蓮は答えた。

「まったく、予算だって無尽蔵にある訳じゃ無いんだから二度とやるんじゃ無いわよ」

そう言った後、燎子はどこかに歩いて行った。

「まったく、隊長殿にも困ったものですね。そんなみみっちいから精霊にいいようにされちまいやがるんですよ」

「同感」

「あ、そうそう。このユニットの弁償代はお前らの給料から引いて…」
蓮がそこまで言いかけた時

「え、えええ!! そりゃねえですよ! 蓮!」

「それは困る」

さつきまでの威勢はどこにいったのか、そんな事を言ってきた。

「…おこうと思っただが、今回は特別に俺が払っておいてやるよ」

はあ…とため息をした後、蓮はずっと気になっていた事を聞いた。

「それで土道が『兄様』って呼んだけどあれはどういう意味なんだ?」

「うーん。正直私もあんまり覚えてねえんですけど…」

真那はワイヤリングスーツの胸元をまさぐって、銀色の小さな口ケツトを取り出した。

そこには小さな男の子と女の子の写真があり、男の子は土道に、女の子は真那に似ていた。

「これが生き別れた兄様の、唯一の手掛かりです」

「確かに…似てるな…」

写真を見ると確かに土道に似ている。蓮にはこれが他人の空似とは思えない。真那が普段、このようなものを身につけているのは知っていたが、そこに写っている人物と自分が親しくなるなど、人生は奇妙なものだ。

「それで…二人は兄様の事を知っていやがるんですよね? よかったら教えてくれねーですか?」

「名前は五河 土道。年齢は十六歳」

質問に答えたのは折紙だ。

「家族構成は父・母・妹。両親は現在海外出張で家を空けている。家事全般が得意」

「うむ…」

土道の事を真那に教えていく折紙。ここまでは良かった。
ここまでは

「血液型はA O型のRH+。身長は百七十センチ。体重は…」

いきなり折紙は土道の身体の情報の話してきた。血糖値などの細かい所なども全てを。

「はい…?」

真那もポカンとした顔をしてきた。蓮はやれやれといった顔を
して

(ストーリーカーめ)

心の中で吐き捨てるように言った。一体、どこでこんな事を知った
のだろうか、この女は。

「す、ストップストップ！　そこまでは聞いてねえーです」
「そう」

さすがにそれを見兼ねて真那はストップをかけてきた。

「…鳶一曾は兄様とどのような関係でいらっしやるのでしょうか
?」

「恋人」

折紙は迷う事なく即座にそう答えた。

「え!!　そうなんですか?　蓮!?!」

「え?　それは…」

真実を言おうとした時、折紙は無表情ながら蓮をジッと見つめてき
た。

その目は語っていた。『YESと言え』と

「…土道のプライベートはそこまで知らないから分かんないけど、本
人がそう言ってるんだからそうなんじゃないか?」

そう言った時、蓮は自分の心がチクリと痛むのを感じた。

—————

六月五日　月曜日

来禅高校は制服が夏服に移った頃だ。

(ふう、やっぱり動きやすい服は良い)

教室で蓮は夏服の着心地の良さに感謝していた。

蓮はブレザーなどの動きにくい服装はあまり好みでなく、半袖など
の開放感がある服が好みであった。

なので夏服となるこの季節は蓮は結構好きだった。

(土道と十香はまだか…)

普段ならもう来ている時間を過ぎても2人は学校に来ていなかっ

た。

(十香は初めての夏服だし、何か手間取ってるのか?)

そう思った時、教室のドアが開いて十香となぜか疲れた様子の上道が入ってきた。

「よう、遅かったな」

「ちよいと朝からハプニングの連続だったもんで…」

「例えば？」

「十香が…ブ、ブラジャーを付けて無かったり…」

「それはハプニングだったな」

顔を真っ赤にしながら言う上道に同情の言葉を送った。

「ていうか十香。お前、今までブラしてなかったのかよ」

「うむ…しかし、動きにくいぞ」

「夏服が似合ってたんだから我慢しろよ」

不満そうにしている十香の頭を撫でて説得する蓮。ここでちやっかり夏服が似合っていると褒めるのだった。

十香の頭を撫でているとスピーカーからチャイムが鳴り響く、ホームルームの時間だ。

立っていた生徒が次々に着席して、少しした後教室のドアが開いて小柄な女性が入ってきた。みんな大好き(?) タマちゃんだ。

「はい、みなさんおはようございます」

ほわほわした挨拶をした後、出席をとろうとしてその手を止めた。

「あ、そうそう。今日はみんなにお知らせがあるんですけど…なんとねえ、このクラスにまた転校生が来るんです！」

この言葉にクラス中に地鳴りのような声が響いた。だが、蓮は疑問を抱いた。

(転校生…? このクラスにか…?)

少し前に十香が転校して来たばかりだというのに早すぎる。

「ぎ、入って来てー」

タマちゃんがそう言うと、教室のドアが開いて女子が1人入ってきた。

暑い中、冬服のブレザーを着込み、黒い網タイツを穿いている。

髪は黒で右目を隠す程長く伸びており、上から下まで全てが黒で一
一されている。

だが、そんなのが気にならない程、少女は美しくクラスの唾液を飲
み込む音が聞こえる。

そんな中、蓮だけはみんなと反応が違った。

(なんであいつがここに…)

少女の姿を見た途端、心臓が一瞬、止まったような錯覚に陥った。
蓮がその少女の顔を見たのは二度目だったからだ。

少女は黒板に『時崎 狂三』と美しい字で名前を書くと、クラスに
自己紹介をした。

「時崎 狂三と申しますわ」

そしてこう続けた…

「わたくし、精霊ですよ」

この言葉に反応したのは士道、折紙、十香、蓮の四人だけだ。他の
生徒には意味が理解出来なかった。

「ええと…はい！ 個性的な自己紹介でしたね！」

タマちゃんは両手を叩き、自己紹介を終わらせる。

「それじゃあ、時崎さんは空いている席に…」

だが、タマちゃんが全てを言い終わる前に狂三は移動していた。

「え？ ち、ちよつと？ 時崎さん？」

タマちゃんの声を無視して歩いて行き、狂三の足は蓮の席の場所で
止まった。

(まさか…ここにやる気か…?)

いつ攻撃されても大丈夫のように心の中で準備した瞬間…

狂三は蓮の右手の指の間に自分の左手の指を入れて手を握る…い
わゆる『恋人つなぎ』をして、手を壁に押し付けて動けないようにし
た後、

空いている右手で蓮の右頬に手を添えた後、顔を近づけてきた。

だが、クラス中は金縛りにあったかのように動く事が出来なかつ
た。

黒い髪と白い髪、赤い目と青い目、狂三の目には蓮が 蓮の目には

狂三しか映されていない。

この光景は言葉に出来ないなにかを放っていた。

「わたくしと…一つになりませんか…？ 身も心も…」

そしてクラスの面前にも関わらず、とんでもない爆弾発言をした。

『えええええー！！！！』

クラス中に驚きの声が響く中、蓮本人の表情は変わらない。

「そういうのはお互いの事をよく知ってからの方がいいんじゃないのか？」

「いえいえ、あなたの存在はよく知っていますの…細かい事はこれから知っていけばいいですわ…」

第3者から聞けば少し個人的な会話に聞こえるだろう。しかし、この質問の答えを聞いて蓮は確信した。

(間違いない…こいつは俺の事を知っている…俺以上に…ツ！)

「ダダ、ダメですよ!! 高校生なのにそんな事をしては!!」

タマちゃんが大慌てで止めに入ってきた。これほど慌てるとは一体何を想像したのだろうか。

「フフフ…すみません。とても素敵な方がいらっしやっただので、ついつい悪戯をしたくなりましたので…」

蓮の手を解放してクスクスと、男女共に見惚れるほど上品に狂三は笑った。

「も、もう…時崎さんは空いている席に座ってくださいますか？」

タマちゃんにそう言われて狂三はクラスメートの視線の中、軽やかな足取りで席に座った。

だが、蓮は見逃さなかった。狂三が席に座る直前、自分の方に向いた後、一瞬妖しい笑みを浮かべていた事を…

12話

ホームルームが終わり、タマちゃんが教室を去ると同時に狂三の周りには人だかりが出来た。

さらに他のクラスからも狂三の姿を一目見ようと生徒が集まっている。

「ねえねえ、時崎さんって神代君の事を狙ってるの？」

「神代さん…もしかして彼の事ですか？」

狂三は席で本を読んでいる蓮を指した。狂三のホームルームでの行動は他の生徒、特に恋愛に興味がある女子からはまるで求愛行動のように見えるだろう。言い方を変えればそのような意味にしか聞こえなかったという事に繋がるのだが。

「そう、もしかして一目惚れしちゃった？」

「まあ、そんな所ですわ。彼はとても素敵なものですから」

その言葉に周りにいた女子がキャーと大きな声を出す。

「でも、神代君はハードル高いよ？ みんな告白してるけど全員断られちゃってるらしいから」

「なら、わたくしも頑張らないといけませんわね…フフ…」

そう言つて席を立ち上がると蓮の席に向かった。近くに来ても蓮は顔を狂三に向ける事はせず、視線はずっと本にしか向けていない。

狂三の突然の行動に他の生徒の目は2人に集中する。

「少し、よろしいですか？」

「何か用か？」

「いえいえ、少し頼み事がありました」

警戒した所為か冷たい態度で返したのにも関わらず狂三は微笑んだ。

「放課後、よかったら学校を案内していただきたいですが…」

「放課後は用事がある。他の奴に頼んでくれ」

「そうですか…残念ですわ。では、土道さんにしてもらいましょうか…彼にも用事がありますので…」

蓮に聞かせるように言つた後、次は土道の席へ向かつて行った。冷

たく狂三を追い払った蓮には他の男子生徒の恨みの視線が向けられる。

まだここに来て一日すら経過していないのにこのような反応をされるという事は他の生徒に狂三の容姿やお淑やかな性格がそれほど高く評価されているということでもある。

(たった数分でこのような反応をされるとは、人間の相手に良く慣れているな。それに土道に用事とは一体何を…)

その疑問は授業開始のチャイムによって中断されるのだった。

時刻は午後三時、帰りのホームルームの時間だ。前ではタマちゃんが連絡事項を伝えている。

そんな中、土道はそんな事が気にならないほど考え込んでいた。

狂三の『自分は精霊だ』と言った事や放課後、校舎内をどのようにして案内しようかなど考える事は山ほどある。

だが、一番気になる事は今朝からの蓮の様子であった。

(一体、どうしたんだよ…)

蓮は今朝から…いや、狂三を見た時から様子がおかしい。

普段は寝ている授業も今日はずっと起きていたし、一日中狂三に鋭い視線を向けていた。

それが気になってどうかしたのか。と聞いて見ても、

『なんでもない…気にするなよ』

そう答えるだけで何も教えてくれなかった。

「なあ、シドー。なんだがレンの様子が妙ではないか？」

隣にいる十香がそう聞いてきた。どうやら十香も蓮の様子がおかしい事に気づいていたらしい。

「やっぱり十香もそう思うか？」

「うむ、今日はレンが全然遊んでくれんだ。狂三とかいう奴を見てから変だぞ」

十香がそう言った時、タマちゃんは出席簿をボタンと閉じた。

「連絡事項はこんなところですかね。あ、そうそう、最近この辺りで失踪事件が頻発してるらしいので気をつけて下さいね」

そう言った後、起立の号令が響き、タマちゃんは「はい、さよなら」と言つて教室を出て行った。

これからは士道の仕事の時間だ。ポケットからインカムを取り出して右耳に装着する。

『士道、聞こえる？ まさか狂三が本当に精霊とはね…正直、今でも信じられないけど』

インカムから琴里の声が聞こえてくる。朝に狂三の観測を依頼したがその結果は精霊だった事がまだ信じられないらしい。

「俺だつて信じられないよ。まさか精霊が転校して来るなんて」

『まあ、またデレさせてキスして霊力を封印すればいいのよ。今回は相手からお誘いをかけてくれたんだしね』

「…ツ、ま、まだ抵抗がない訳じゃ無いんだが…」

『しつかりしなさいよ。あと、十香の感情値がまた不安定なんだけど、あんた、また何かしたの?』

「何もしてねえよ。…もしかしたら蓮が関係してるかも…」

『はあ!? 蓮が?』

士道と比べて蓮は女の心がよくわかってるから、何かやらかす事は絶対無いと琴里は思っていたのだが…。

「狂三を見た時から様子が変なんだよ。なんかやけに狂三を警戒してるっていうか…」

『そりゃあ、蓮はASTにいるんだから「私は精霊です」なんて言った奴を警戒するでしょうね』

「まあ、そりゃそうだけど…」

『で? その蓮本人はどこにいるの?』

「放課後に予定があるって言つてすぐに帰つたけど…」

『まあ、詳しい事情は後で聞く事にするわ。そろそろ雑談している暇もなさそうよ』

琴里が言った直後、士道の肩がちよんちよんと、つつかれた。

「ん? 誰が…つて時崎…」

驚いて振り返るとそこには狂三がいた。

「学校を案内してくださるのでしよう? あと、わたくしのことは狂

三で構いませんわ」

「え？　じ、じゃあ狂三…」

そう呼ぶと狂三は嬉しそうに微笑んだ。

しかし、隣を見ると十香が腕組みをしながら睨んでいた。

(こういう時に蓮がいてくれれば…)

士道は心の中で願うように言った。

もし、蓮がいてくれたら十香を優しく宥めてくれるだろう。だが、無いものをねだっても仕方がなかった。

「あ、いや、これは…」

「さー！　早く参りましょう。ふふ、楽しみですわ」

十香に何か言おうとしたが、狂三が軽い足取りで廊下へ歩いていく。

『士道、今は狂三よ。十香は帰りに好きな物を買ってあげれば大丈夫だから』

「く…スマン！」

十香にそう言い残して、狂三を追って廊下へ出た。

「それで、最初はどこに連れて行ってくれますの？」

教室を出てすぐの場所にいた狂三がそう聞いてきた。

「あ、ああ…そうだな。じゃあ最初は…」

こうして、士道のデート戦争が始まった。

狂三を校舎案内をして、隙があればデレさせようと頑張る士道であつたがそれは全くうまくいってなかった。

なぜなら狂三がデレるのではなく、士道が逆にデレさせられているからである。

今も狂三の手を握るはずが、逆に狂三に手を握られて士道はとても狼狽していた。

それもそうだろう。士道は今まで自分からアプローチをかける事はあつたが、相手からかけられる経験は全くなかった。

しかも、狂三には見る人間全てを引き込むようなそんな魅力があり、それが士道をさらに混乱させる。

「ねえ…土道さん」

手を握った狂三は小さな唇を動かしてそういった。

「な、なん…だ？」

「わたくし、土道さんにお問い合わせがありますの。聞いてくださいますか？」

土道は頼みの内容を聞く前からつい、首を縦に振ってしまいそうになる。

だが、その瞬間、近くにあった掃除用具入れから二人の生徒が飛び出してきた。…折紙と十香だ。

「え？　なんで二人共…」

「狂三！　なんで土道と手を繋いでおるのだ！」

「時崎 狂三。学校案内で手を握る必要は無いはず。今すぐ離すベキ」

二人は狂三と土道が手を繋いでいる事が不満のようだ。それを聞いて狂三は微笑んだ。

「あらあら、ずっと隠れていたんですか？　そろそろ、あなたも出てきても良いんじゃないですか？　蓮さん」

「え…？」

土道が驚いた声を出すと同時に後ろの曲がり角から蓮が姿を現した。

「お前…用事があるって言って帰ったんじゃない？」

「その用事がこれなんだよ」

土道の質問に答えると、蓮は十香の所に向かい頭を優しく撫でると、十香は気持ちいいのかとても愛らしい仕草をした。

「十香、ごめんな。今日は構ってやれなくて」

「にゆう…今日はどうしたのだ？　体調でも崩してたのか？」

「んー。まあ、そんな所か」

適当に答えて、十香の頭を撫でていると…

「わたくしにもしてくださいまし」

十香を押し退けて、狂三が割り込んできた。

「何！　貴様、何をするのだ！」

「いいではありませんの。とても気持ち良さそうでしたので気になつて…」

狂三が割り込んできて、蓮は驚いたが手は止める事はしなかった。「ああ…これは…いいですわね…」

恍惚とした表情で撫でられる狂三。しかし、それで面白くないのは十香だ。

「ええい！狂三、それは私の席だぞ！」

狂三を撫でている手をとると、十香は自分の胸元に抱え込んだ。それはまるで子供がオモチャを取られないようにしているかのようにも見えてしまう。

ちなみに手が胸元にあるため、とても柔らかい感触を感じるがそれは黙っておく。

すると、突然折紙の携帯のバイブ音が鳴り響く。電話に出た折紙は淡々と相槌を打ったのち、

「急用が出来た」

そう言つて、走り去つて行つた。去り際に土道の耳元で何か言つたらしいが蓮には聞こえなかった。

「な、なんだあ…」

「土道さん？参りませんか？ お二人もよかつたら一緒にどうですか？」

「じゃあ、同行させてもらおうよ」

蓮は自分の用事の為、そう答えた。

午後六時、校舎内の案内を終えて、四人は校門をくぐり夕日の照らす道を歩いていった。

「まあ、大体あんなところだ。わかつたか？」

「ええ、感謝しますわ。蓮さんもありがとうございます」
「どういたしました」

投げやりに答える蓮を見て、土道はついつい苦笑いをしてしまう。

蓮と十香がいてくれたらお陰でロマンチックな雰囲気にならないで済んだので、そこを考えると二人の存在はともありがたかった。

「それでは、士道さん、十香さん、蓮さん、わたくしはここで失礼いたしますわ」

十字路に差し掛かった所で狂三は礼をしてそう言った。

「え？ お、おう……」

「うむ、また明日だ」

「……………」

士道と十香が声を掛ける中、蓮だけが無愛想に何も言わなかった。そんな蓮を見て、狂三は嬉しそうに微笑んだ後、夕日の中に消えて行つた。

「ふふ…優しい方でしたわ。士道さんは…そして蓮さん…ですか…」

士道たちと別れた狂三はとても興奮していた。

「今はそういう名前なんですわね。変わらずとても素敵でしたわあ…」

狂三の心は蓮を求めてとても疼いていた。

蓮と一緒にいたい。蓮に愛されたい。蓮の力を見てみたい。蓮の力になりたい…

そんな気持ちで狂三を完全に支配している。

「やつと…やつと見つけましたわあ…もう絶対に逃がしませんわ…絶対…」

狂三の中にある何かが蓮を求めているような錯覚に陥る。だが、それがとても心地よい。

「ああ…ダメですわ…こんな顔を見られたら蓮さんに嫌われてしまいますわ…」

緩みきつて恍惚とした顔を変えようとしても頭に蓮の顔が浮かんでできてしまいどうしても上手くいかない。

「いけませんわあ…あくまで目的は士道さんなのですから…でも、蓮さんと少しくらいなら…」

考え事をしながら歩いていると不意にドンと何かにぶつかってしまった。それは男の背中ではガラの悪い男達…いわゆる『不良』が道端にたむろっていた。

「あらあら、申し訳ありませんわ」

狂三はペコリと頭を下げて立ち去ろうとしたが、
「待てよお嬢ちゃん。そっちの不注意なのにそれで終わりはねえだろ」

相手は狂三を逃がすつもりは無いようでニヤニヤしながら言うと、
狂三の周り男の仲間が囲ってくる。

その時、狂三は相手は何をしたいのかが分かった。

「お兄さん方…もしかして、わたくしと交わりたいんですの？」

妖しい笑みを浮かべながら言う狂三に男たちは笑い始めた。

「きゃー、露ツ骨ー。いいね、気が合うね俺たち」

「話が早くっていいね。そういうの君も好きなの？」

「ええ、人並みには。するなら場所を移しませんこと？　ここでは人目についてしまうので」

その言葉に男たちは色めき立ち、狂三を囲う状態のまま、暗い路地裏に入っていく。

そして狂三を追い詰めるような格好になり、男が手を伸ばすが、手は段々と下に下がっていく。

「おい、どうしたん…」

仲間の一人がその事に気づき、男の方を見て始めて気づいた。

男の体が狂三の足元から広がり、伸びた影から白い手が男の体を影に引きずり込んでいる事に…

「ひっ…！　な、なんなんだよっ！　これは…」

「うわあああつ!!」

叫び声を上げるが全員の足元に白い手が伸びて、足元の影に引きずり込んでいった。

「近いうちにメインディッシュが控えていますし、これぐらいにしておきますわ…それにわたくしの初めては彼に捧げる予定ですし…」

笑いながらお腹をさすっている狂三だったが、その狂三に近寄る人影があった…

「ふうふう…」

家に帰った蓮は深く息を吐いた。やはり、学校より家の方が落ち着けるのだ。

夕飯を何にしようか考えながら携帯の電源を入れると…

(あれ?・着信が一件?)

そう携帯の画面に映っていた。蓮は学校では携帯の電源は切っているのが付かなかったようだ。

おそらく、折紙に電話が来た時と同じようなタイミングで着信が来たのだろう。

蓮は着信相手に電話をかけてみると…

『あつ、蓮。あんた、やっと出たわね』

『あれ?隊長さんじゃん。なんか用があつたのか?』

なんと出てきたのは駐屯基地の隊長である燎子だった。

『こつちが電話したんなら早く出なさいよね。用事っていうか、今となっては報告ってところかしら。ついさつき終わったからね』

『で? その報告とは?』

『街に出現していた。へナイトメア<の討伐が終了した。これが報告よ』

『はあ!?!』

蓮のそんな声が家に響き渡った。

13話

「ヘナイトメア」を討伐したってどういう事だよ!？」

さっきの報告の電話を受けた蓮はすぐに駐屯基地に向かった。この事の詳しい事情が気になったからだ。

隊長である燎子の部屋のドアを凄まじい勢いで開けたので中にいた燎子がとても驚いていた。

「そんなに力強く開けなくても大丈夫よ。どういう事って聞かれても…そのまんまの意味なんだけど…」

とても慌てている蓮を燎子はとても不思議そうに見ている。

「ちよつと前に部隊を編成して、街中にいたヘナイトメア」を討伐したの。あんたのクラスに転校して来たって聞いた時は驚いたけどこれでよかったじゃない」

「いや、それは…そうだよな…これでよかったんだよな…悪い、隊長さん急に押しかけて…」

「どうかしたの? あんたらしくくないじゃない」

「いや、なんでも無いんだ…じゃあな」

そう言って蓮は部屋を出て行った。

(よく考えたら、隊長さんは正しい事をしただけなんだよな…)

蓮は自宅への帰り道を歩きながら思っていた。

狂三は…ヘナイトメア」はどれほど危険な精霊なのかは蓮はよく分かっている。それをどうこう言うのは完全に蓮の私情だ。

燎子のしたことは間違っていない…むしろ正しい行いだということに。

(しかし…これでまた最初からか…)

狂三は蓮の記憶の事を知っている様子だった、その狂三が死んでしまっってはもう何も聞く事は出来ない。

『死人に口無し』とはよく言ったものだ。

(自分自身の事を知ることが出来るチャンスだと思っただけが…)

人間、少しでも可能性が出てくると、たとえ1%でもその可能性に

絶ってしまうものだ。

今の蓮にもやはり諦めきれない気持ちがあった。

(すっかりしろ。もう終わったことを悔やんでなんの意味があるんだ！)

自分にそう言い聞かせて蓮は歩いて行った…

――――
次の日の学校。

時刻は八時三十分、教室内には聞き慣れたチャイムが鳴り響いている。朝のホームルームの時間だ。

蓮はチラリと狂三の席を見てみる。当たり前だが狂三は来ていない。死んだのだから

「はい、皆さんおはようございます。じゃあ出席を取りますね」

出席簿を持ったタマちゃんが教壇に立って、出席を取り始める。

「時崎さん」

狂三の名前を呼ぶが返事はない。

「あれ、時崎さんはお休みですか？もうつ、欠席する時はちゃんと連絡をくださいって言っておいたのに」

ブンブンと怒って、狂三の所にペンを走らせようとした時、

「はい」

教室の後方のドアから返事が帰ってきた。

(なっ…！)

蓮は驚き、声が聞こえてきた方向に目を向けるとそこには狂三がいた。

「遅刻ですよ。時崎さん」

「申し訳ありません。少し用事があったので遅れてしまいましたの」

「遅れるなら連絡を下さいね」

「はい、覚えておきますわ」

そう言って狂三は自分の席に座る。

(な、なんで…あいつが…)

一瞬、戦闘隊員が狂三を殺した時、死んだか確認しなかったのではないかと思ったがその考えはすぐに捨てた。

戦いにおいて、殺した相手の死亡を確認するなんて基本中の基本だ。それを忘れるような奴が戦闘隊員になれるはずがない。

だとしたら、狂三は死亡した状態から蘇生したくらい考えしか今の蓮には浮かばなかった…

午後十二時二十分、四時間目の授業終了のチャイムが鳴り響き昼食の時間が始まる。

普段、士道は普段は昼食を食べるメンバーは十香、折紙、時々蓮というようになっていたが朝のホームルームが終わった直後、昼休みになったら物理準備室に来るように言われているのでそこに向かわなければならぬ。

「ぬ？ どこに行くのだ？ シドー」

「悪い、今日はちよつと行く所があるんだ。先に食べててくれ」

十香にそう言って士道は廊下を走って物理準備室に向かって行った。

士道が教室を出て行ったのを確認し、折紙も死んだはずの狂三に話しかけてどこかに向かつて行く。

そして、折紙が狂三を連れて教室を出て行った瞬間、席で寝ていた蓮がパチリと両目を開いた。

狂三を誰もいない屋上前の扉まで連れてきた折紙は相手の目を見て問い詰めた。

「あなたはなぜ生きているの。昨日、あなたは確かに死んだはず」

昨日、狂三を殺したのは真那だが折紙は狂三が逃げた時の為に周囲を固めていた。

あの時、狂三は真那によって確かに殺されたはずだった。

「ああ…ああ、あなたは昨日真那さんと一緒にいらつしやった方ですの」

そう答えた狂三の顔は笑っていた。

「なっ…」

それを見た折紙は反射的に後ろに飛び退く。

だが、折紙の足元にまで伸びた狂三の影から白い手が生えてきて折

紙を拘束する。

「これは……」

「ふふふ……お一人で……しかもこんな人目のつかない場所まで、わたくしを連れてくるなんて少々迂闊過ぎるのでは？」

狂三から伸びた影は折紙の足元から壁に這い上がって行き、そこからまた白い手が生えてきて折紙を壁に磔にしてきた。

「ぐっ……あ、あなたは何が……目的」

喉を押さえ付けられながらも声を出す。この質問に狂三は唇の端を上げる

「学校というものに通ってみたかった……というのがありますが一番の目的は……」

「土道さんと彼……ですわね」

土道の名前が出てきた事に折紙は驚いたが、狂三が言ったもう1人の存在にも驚愕した。

「わたくしは土道さんを手に入れるため……土道さんの力を手に入れるためわたくしはここまで来たんですわあ」

狂三はとても興奮した様子で折紙に語りかけてくる。

「彼を……土道を……どうするつもり……」

「簡単ですよ……土道さんはわたくしと一つに……わたくしが食べて差し上げるのですわ……彼は一体どんな味がするか……ああ、とても楽しみですわあ……」

「じゃあ、あなたは土道以外の……もう一人もあなたの言う『食べる』つもり……なの」

狂三にそう聞いた途端、狂三の様子が急に変わった。

「いえいえ……彼は……蓮さんはそんな事したりしませんわよ……彼は特別ですから……」

急にウツトリとした表情に変わり、頬が赤くなったのだ。

だが、今の折紙はそんな事より、狂三が出した名前の方に驚いた。

「なっ……なぜ神代 蓮が出てくるの」

「あら、あなたは蓮さんとお知り合いですの？……ああ、そういえば、彼、今はASTにいるのでしたわね。だったら折紙さんが知っていますも

おかしくないですわね」

狂三は笑いながら折紙に近づいて身体に指を這わせてくる。

「蓮さんはわたくしにとつて、とても特別な方ですの…それこそ、彼が今のわたくしの全て…と言つてもいいほどに…」

この時の狂三は笑つていたがこの笑いはさつきまでとは違う…

これだけが折紙には理解できる。

「折紙さん…あなた、すごくいいですわ…ああ、士道さんの前に折紙さんを先に頂くといいのも…」

その言葉に折紙の背筋にゾツとしたものが走った。おそらく蛇に生きたまま呑み込まれるカエルも同じような気持ちなのだろう。

だが、その瞬間、折紙と狂三の間に割り込むように青い半透明な巨大な手が現れた。

手は狂三を掴み、そのまま後ろの壁に狂三に覆いかぶさるような形で拘束した。その結果、折紙とちやうど向かい合うようになる。

「っ…これは…」

「あらあら…か弱いわたくしに対して、少し乱暴過ぎるのではありませんか？蓮さん」

狂三は視線を階段下に向けた。折紙もそれにつられて下を見てみると、青い手…『バスター』を狂三に向けている蓮がいた。

「か弱い奴は少なくとも、影から手を出現させて相手を拘束したりは出来ないと思うぞ。…鳶一、大丈夫か？」

「神代 蓮…なぜここに」

この時、視線を狂三から折紙に変えた、この瞬間。

「フフフ…でも、このままではわたくしの体が…」

「壊れてしまいますわよお」

耳元からそう聞こえると同時に、首筋に生暖かい感覚が走った。

「なにっ！」

ほぼ反射的に後ろを振り向くと、そこには舌を少し出した狂三がいた。

この時、あの生暖かい感覚は首筋を舐められたのだと理解した。

「バカな！ さつき拘束したはず…」

狂三を拘束した場所に目を向ける、しかしそこに狂三の姿はなく、ただ『バスター』が壁を押さええているだけだった。

「わたくしはここで失礼しますわ。まだお昼も食べておりませんので…折紙さんは次に会う時にはもっと美味しくなっていてくださいまし…」

狂三はお辞儀をして折紙を拘束していた白い手を消した後、階段を降りて行った。そして狂三の姿が見えなくなると同時に蓮はその場に膝をついた。

(俺は…夢でも見ているのか…確かに拘束したはず…)

いっそのこと夢であった方がまだ納得出来る。それほど信じられない事であった。

だが、首筋に手に触れてみると手には狂三の唾液がついていた。これが夢ではないと語っている。

そして、何よりもゾツとした事は狂三が自分を殺す事が出来た状況だった。

あの時、蓮は完全に不意をつかれた。もし狂三に殺意があつたら絶対に殺されていただろう。

今、蓮が生きているのは狂三の気まぐれのおかげだ。

「あなたと時崎 狂三はどのような関係なの」

声が出た方に顔を向けるとそこには狂三から解放された折紙がいた。

「どんな関係ってどういう意味だ？」

「…質問を変える。あなたと時崎 狂三は仲間？」

「生憎、俺の友達に影から手を出せる奴はいないよ」

蓮の事をよく知らないが、この言葉に嘘をついている様には折紙には見えなかった。

「なんなんだよ…これは…」

昼休み、物理準備室に呼び出されてそこに向かうとそこには令音と琴里がいてある映像を見せてきた。

それは狭い路地裏での映像でそこには黒と血のように赤い色をし

た膜で出来たドレスのような霊装を身に纏った狂三と土道の妹を自称した少女：真那が映っていたのだ。

だが、真那の身体には白い機械の鎧：C R ユニットを装備していた。これは真那がA S Tに関わっている事を示している。

そして、真那の両肩から光の線が放たれたかと思うと狂三の腹を撃ち抜いた。

だが、狂三も反撃しようとかかしらの行動をしようとするが：それより先に真那は狂三に光の剣で攻撃してダウンさせた。

そして、真那は倒れている狂三の元に近寄ると、刃を狂三の首に突き立てて息の根を止めた。

しかし、真那はこの事に対して無関心：まるで道を歩いていて虫を踏み潰したかのように何も思っていないかったのだ。

「で、でも：狂三は今日、学校に：」

「それが分からないんだ。映像を見る限り、あれで生きている可能性は限りなく0%だ。考えられる事といたら：あの状態から蘇生した事はぐらいだろう」

令音が難しい顔をしながら土道に解説してきた。確かに、土道の目から見てもあれで生きているとは到底思えない。

「まあ、なんであろうと作戦は続行よ。相手からもグイグイ来てるし、明日、狂三をデートに誘ってキスして霊力を封印しちゃいなさい」

琴里が言ったこの言葉を一瞬土道は理解できなかった。

「え？ でもこんな事が起こったのに：」

「こんな事態だからよ。狂三が生きている事は鳶一 折紙や真那にも知られているわ。もし、もう一度狂三が殺されたらもう生き返れない可能性を考えると、出来るだけ早い方がいいわ」

「うっ：確かに：それじゃあこの事を蓮に：」

伝えようと、物理準備室を出ようとした瞬間、

「待ちなさい。土道」

琴里が土道を引き止めてきた。

「なんだよ、琴里。何か問題でも：」

「今回の作戦は蓮に伝えないで。いや、狂三をデレさせるのに蓮は参

加させないわ」

「はあっ!? なんでだよー!」

つまり、琴里は今回は蓮に作戦はもちろん、狂三に関する事を何も教えるな。と言いだしたのだ。

「十香の時も四糸乃の時も、蓮がいてくれたから上手くいったようなもんなのに、なんで…」

「落ち着きなさい。これには理由があるの」

琴里は言い難そうな顔をしたの土道には分かった。どうやら琴里もこの決断をするのにだいぶ悩んだようだ。

「…ほんの僅かな可能性なんだけど…蓮が私たちより先に時崎 狂三と会っている可能性があるわ…」

「なっ! それって…」

「そう…蓮は狂三と繋がっているかもしれないってこと」

その言葉に土道はまるで脳を揺さぶられたような感覚を感じた。確かに、狂三が来てから蓮の様子はおかしかったが。

琴里はそれからわずかでも裏切りの可能性を感じたらしい。悲しいが僅かでも可能性があったら、疑わなければいけないのが琴里の立場だ。

「…あんまり彼女を責めないでやってほしい。琴里もとても悩んでいたんだ…そして、最終的には司令官としても判断を出したんだ」

令音が琴里をフォローする発言をする。だが、土道には琴里を見ればその事が十分理解出来た。

そして土道は悔しかった。違うと言いだせない事…そして、蓮を信じ切れない自分自身が…

14話

昼休みが終わる頃、教室にいる十香はまだお昼を食べずにずっと待っていた。

土道は昼休みが始まると同時にどこかに行ってしまった、ならば蓮と…と思っただが、蓮もいつの間にか居なくなっていた。

「シド…レン…どこに行ったのだ…」

ずっと二人を待ち続けているが帰ってこない。次々に教室に生徒が帰ってくる中で、十香の心に孤独感が募る。

(もしかして…私は嫌われてしまったのか…)

そんな考えてが頭をよぎる。だがすぐに頭を振って違うと自分に言い聞かせた。

(違う！ そんなはずない…はずだ…)

どんなに言い聞かせても、もしかしたら…と考えると自信が無くなってくる。気が付いたら目が熱くなり、涙が溢れていた。

「あれ？ どしたの十香ちゃん」

「何、まだご飯食べてないの？」

「もう授業始まっちゃうよー」

そう声が聞こえてきて、顔を向けるとそこには亜依、麻衣、美衣の3人コンビがいた。

「え？ 十香ちゃん！なんで泣いてるの!？」

「もしかして、男子に泣かされたの!？」

「誰がやったあ!?! ギロチン台にかけてやる!」

十香を囲んで、三人は教室にそう言い放った。その言葉にクラスの男子が恐怖に震える。

「ち、違うぞー！ 別に何もされてないぞー！」

このままでは誤解を生んでしまいそうなので、十香は慌ててそう言った。三人も一応、十香の事を思っているのだがこの様子では本当にやりかねないほどの剣幕だ。

「ええ？ そうなの？」

「じゃあ何、どうしたの？」

「もしかして花粉症とか？」

ちなみに今は制服が夏服になるような季節なので、花粉の季節はもう過ぎているだろう。

十香は三人の質問に涙目で悲しそうな顔をしながら途切れ途切れに答えた。

「シドーとレンがな…戻ってきてないのだ…もしかして、嫌われてしまったのかと思うと…なんだか…ウウ…」

そう言いながら十香は目から大粒の涙をポロポロっと溢れ出した。そんな十香の痛ましい姿を見て、三人は十香をガシツと抱きしめた。

この瞬間、三人は十香を助ける事を心の中に誓う。

「ああ！もう泣かなくていいのよ！」

「私たちが力になってあげるから！」

「十香ちゃんに涙は合わないわよ！」

もしこれがドラマであつたなら、感動的？なシーンであつただろう。

亜衣は自分のスカートのポケットを探り、二枚の紙切れを十香に差し出した。

「ぬ？ これはなんだ？」

「明日は開校記念日で休みよ。これは天宮クインテッドの水族館のチケットだから、これで明日五河君か神代君を誘って行ってらっしゃい」

「十香ちゃん、ごめんね。本当はもう一枚あればいいんだけど、今は二枚しかないの…」

麻衣が申し訳なさそうに言ってくる。

しかし、十香にとって三人の気遣いはとても嬉しかった。それだけでとても暗い気分が晴れていく。

「分かった！これでレンかシドーを誘ってみるぞ」

元気を取り戻して、笑顔になった十香は嬉しそうに言う。

その台詞を聞いて亜衣は前から気になった事を十香に聞いてみた。

「そういえば前から気になっていたんだけど…十香ちゃんっていつも

五河君と神代君と一緒にいるけど、もしかして…二人の事が好きなの？」

「うむ！私は二人の事が大好きだぞ！」

十香はとてもいい笑顔で言った。だが、この言葉に三人の心にとても大きな動揺が走った。

3人は互いに目を見合わせて、コクリと頷く。三人は開けてはいけないパンドラの箱を開ける決意をした瞬間だった。

「じゃあ…もし二人のどちらかと結婚することになったら…十香ちゃんはどうつちを選ぶの？」

亜衣はまるで時限爆弾を解除する工作部隊のような真剣の表情で聞いた。

他の二人も亜衣と同じく十香の言葉を聞き逃さぬように真面目の顔で聞く。

「ケエコン？一体それはなんだ？」

だが、十香の解答は三人の予想の斜め上をいった。

亜衣麻衣美衣の三人娘はそれを聞いた途端、え？そこから？と心の中でツツコミを入れてしまった。

「え？十香ちゃん、結婚の意味を知らないの？ま、まあ世の中にはそういう人もいるわよね…」

言葉の後半は自分に言い聞かせるように亜衣は言った。

そんな人も世の中にはいるだろう…十香以外に…多分…

「結婚というのは…えーと、簡単に言えば好きな人とずっと一緒に居られる事…かなあ」

麻衣が結婚の内容を分かりやすく言ってくれた。

ここで十香に法律やらの小難しい事を言っても分からないだろう。これを考慮しての事だ。

「そうかー！じゃあ私はレンとシドーの二人とケエコンするぞ！」

十香は笑顔で言ったが、その内容は何も知らぬ第三者が聞いたら百%誤解を受けるものであった。

これを聞いた三人のテンションは急激に上がる。

「え！十香ちゃん、将来はそうするつもりなの!？」

「一夫多妻制ならぬ一妻多夫制ってこと!？」

「マジ引くわ!マジ引くわ!」

三人がわめいていると、教室の扉が開き蓮が入ってきた。

「ほら!十香ちゃん!行ってらっしゃい」

「う、うむ…」

十香は手に二枚のチケットを持ち、蓮の元に向かって行った。

—————
(すっかり遅くなったな)

蓮は自分の教室に向かいながらそう思っていた。昼休みももうすぐ終わりそうで廊下にはあまり生徒が見られない。

その後、折紙は蓮と狂三の関係についていろいろと質問をしてきた。だが蓮は狂三の事を詳しく知っているわけではないのでほとんどの質問に『知らん』と答えた後逃げるように場を離れたが。

(この時間じゃあもう昼食は無理だな…ああ腹減った)

蓮にとって昼食が抜きなのは砂漠に水を持たずに行くようなものだ。まあ午後は寝るつもりなのでそれで空腹を誤魔化すのだが。

(十香は昼食はしっかり食べたかな?)

そう思いながら教室の扉を開ける。もう昼休みの終わりが近いからか教室内にはかなりの生徒がいた。

そして、蓮が教室に入ると同時に一人の生徒が近づいてきた、十香である。

「十香、昼食はしっかり…」

「レン!ちよつと来てくれ!」

蓮が全て言い終わる前に十香は手を掴んで廊下に連れ出した。あまりに突然の事に理由を聞くことが出来ない。

「ど、どうしたんだ?いきなり…」

蓮がそう聞くと十香は緊張気味に二枚の紙切れを差し出した。それが何かのチケットだということは一目見ただけで理解できた。

「あ、明日!わ、私とデエトに行かないか!」

十香のその言葉を聞いた時、一瞬何を言っているか理解出来なかったが頭の中でリピートしてやつと理解できた。十香が自分をデエト

(デート)に誘っていることを。

「あ、明日か…明日はえーと…」

十香には悪いが、今の蓮には狂三の事やASTの仕事などで遊んでいる時間などほとんど無い。

なのでどのように断ろうか必死に頭の中で考える。

「十香、悪いな…明日には予定が…」

そこまで言いかけた瞬間、十香はいきなり蓮に抱きついて胸元に顔を埋めてきた。

十香のいきなりの行動に蓮は理解が出来ずにただ混乱するだけだ。

「え?と、十香?いきなりどうしたんだ…」

周囲を見渡して周りに人がいない事を確認して十香に問いかける。

「ひっ…うう…ぐう…」

よく耳を澄ますと十香の嗚咽が聞こえてくる。それと同時に自分の胸元が濡れていくのを感じた。

ここで蓮は気づく。十香は泣いているのだと

「やはり…そうなのだな…レンは…」

「十香、な、なんで泣くんだよ…」

そう聞くと十香は涙でグシャグシャになった顔で蓮を見上げて言い出した。

「私の…私の事が嫌いならそう言っても…構わぬのだぞ…」

「い、いきなりどうしたんだよ…」

蓮は十香の事を嫌ってなどでいない。それどころか自分の家族…妹のように大切に思っているのだが、なぜ十香にそのように思われているのが全く分からない。自分は十香に対してそんなに冷たく接しているだろうか…

「べ、別に十香の事は好きだけど…」

「だったら…だったらなんで昨日から私を避けるのだ!」

それを聞いて蓮は分かった。なぜ十香なぜ泣いているのかが。

昨日から蓮は狂三の事で頭がいっぱいで十香をないがしろにしてしまっていた。

(はあ…これじゃ土道の事を笑えないな…)

心の中でそう反省した蓮は泣いている十香を力強く抱きしめ返した。

「俺は十香を嫌ってなんかいないよ。今は少し大事な用件があつて忙しいだけなんだ」

「グスツ…私より大事な事とは一体なんなのだ？」

「それは…だな…悪い、今は言えないんだ…」

ここで『狂三が危険だからあいつの事を調べなければいけない』と言えなかった。

そう言つて十香が狂三に対して妙な先入観を持つて欲しくなかったのだ。

この時、蓮は心の何処かである期待を抱いていたのだろう。『狂三と十香が仲の良い友達』になることを。

「でも、十香の事は大好きだよ。もし、この言葉が信じられないなら…」

そこまで声が聞こえると十香は自分の額になにやら柔らかい感触を感じた。

その感触は前に自分は体感した事があつた。その時は確か士道と…

「なっ…い」

それがなんなのか思い出した瞬間、十香は顔を真っ赤に染まった。

そして蓮を思いつきり突き飛ばして距離を離す。

「うおつと…いきなり突き飛ばすなよ。危ない…」

いきなり突き飛ばされた事に驚きながらも、蓮はバランスを取つて倒れないように踏み留まる。

蓮はキスしたというのにその表情は羞恥は一欠片もなく平然としていた。

「いいい、いきなり何をするのだ！ おおおお、お前はっ!!」

顔を赤く染めて明らかに狼狽した様子の十香の姿が可愛らしく、笑みが出てくる。

「これでお前を嫌ってないことを信じてくれるか？今は話せないけどいつか必ず話すから…」

「ふ、ふんっ…お前がそこまで言うなら…」

「ありがとな。そのチケットは土道と行ってくればいいさ」

「べ、別に言われなくてもそうするつもりだ。ばーか」

そう言っただけで十香は急ぎ足で教室の中に入って行ってしまった。

この時、蓮は十香を怒らせてしまったと思いい心配したが彼は気づかなかった。

教室に入っていく十香の口元に笑みがあったことを。

—————

その日の夜、蓮は寝室の机に向かい調べ物をしていた。

「ふあ…もうこんな時間か…」

欠伸をして時計を見ると短針はもう右側に傾いており、窓から外を見てみても電気がついていない家は少ない。

机の上には精霊の…特に〈ナイトメア〉に関する資料が大量にあり、何を調べているのかがすぐに分かる。

「結局、書いてあった事はどれも同じようなことばかり…」

全ての資料に目を通して特別目に留まるようなものはなく狂三に関しての大雑把なことばかり。

蓮は昼間に体験した狂三のあの謎の力の事を知れたら嬉しかったのだが、うまくはいかなかった。

「まあ、こんなもんかな。精霊の…特に狂三に関しては」

よく考えれば、あの狂三が他の誰かに感じられるような能力の使い方をしているとは考えられない。

それでも今はこれだけが蓮にとって頼りなのだ。土道や十香を守るための…

しかし、今はもう夜遅く集中力も散漫になってきたのでこれ以上続けても意味はないだろう。

蓮は机の電気を消して、ベッドに向かう。

「続きは明日にして、もう寝るか…」

ベッドの前まで来て独り言でそう呟いた瞬間、

『あらあら、夜はまだまだこれからですよ…』

薄暗い寝室に声が響き渡った。当然だがこの声を出したのは蓮で

はない。

周りを警戒し見渡してもこの部屋には蓮しかいないのだ。

(誰だ…どこにいる…)

神経を研ぎ澄まして警戒しているとベッドと反対側にある部屋の入り口の前に真つ黒な影が現れ、その影の中から狂三が現れた。

その姿は黒と赤い膜で出来たドレスで士道が物理準備室で見た映像と同じ…狂三の霊装姿であった。

蓮はすぐに右手を『バスター』に変えて狂三に向ける。

「どうしてここに俺がいるって知ってるんだ？住所は教えてないはずだ」

「今日の朝、あなたの個人情報調べてきましたの。結構住所は簡単に知ることができましたわよ」

「どうやら狂三が朝のホームルームに遅れてきたのは蓮の事を調べていたかららしい。」

これは蓮自身にとってかなりまずいことになった。さすがの蓮も二十四時間警戒出来るわけでは無いので、自分が寝静まった頃に狂三が現れていつ首を刈られてもおかしくない。

「それで、なにしに来たんだ？寝ているところを殺すのなら少し早いわんじゃないか？」

「いえいえ…あなたを殺すなんてわたくしはしませんわ。それに今日は士道さんと駅で待ち合わせがありますので」

狂三は普通に答えたが蓮はさつきから狂三の態度に内心驚いていた。

『バスター』がどのような力かは狂三も昼間の経験から知っているはずだ。つまり、今は銃口を向けられているに等しい。

しかし、狂三はさつきから笑みを浮かべて平然としている。「…とても綺麗な腕ですわね…あなたにとても似合いますわ…」

そう言うとき狂三は両腕を広げて蓮に一步踏み出してくる。「そうかよ。俺はあんまりこの腕は好きじゃないんだけどな」

その間も狂三はウツトリとした目をしてまた一步近寄ってきた。「それ以上近寄るな！これ以上近づいたらお前を殺す！」

「この姿で来てもダメとは本当に記憶が…」

蓮の忠告を聞かずに狂三は何かをつぶやいた後、また一步接近する。

(こいつ…本当に恐れてないのか…)

せめて立ち止まるぐらいはするかと思ったが狂三は全く恐る事なく歩を進める。予想外の行動をする狂三には全て見透かされているような恐怖が心に積もっていく。

「くっ……くっちに来るな…」

狂三が一步進めば蓮は一步後ずさるだけだ。狂三は蓮の反応を見て笑みを深める。

蓮はベッドの上の一番奥に追い詰められて、狂三も蓮のいるベッドに乗りかかって来る。

逃げ場はどこにもなく、蓮の背筋にゾクリと冷たい感覚が駆け巡った。

狂三が目の前に迫り、殺されるのを覚悟して蓮は目を瞑る。

だが、次に感じたのは痛みではなくとても心地よい温もりだった。

狂三は蓮をまるで包むかのように抱きしめたのだ。

「そんなに怯えなくても大丈夫ですわ。わたくしはあなたを傷つけたりしません…」

そう言っても狂三は蓮を優しく落ち着かせる。それはまるで母が子供を安心させるかのように…

(なんで…俺は振りほどかないんだ…ヘナイトメアに触れられているんだぞ…!)

自分自身にそう言い聞かせても、狂三に抱きしめられているのが気持ち良く、ずっと調べ物をしていた疲れもあり瞼がだんだん重くなり意識が遠くなっていく。

蓮が眠ったことを確認した狂三はこっそり背中に触れていた左手をゆっくり離す。すると光り輝いていた背中の十字架の光が収まっていた。

狂三は蓮をベッドにしつかりと寝かせた後、布団をかけ蓮の頬を微

笑みながら優しく撫でて影に吞まれて消えていった。

15話

「う……ううん……ん……」

朝日が部屋に差し込む中、蓮はそんなうめき声を出して目覚めた。気分はお世辞にも良いとは言えない。

（あれ……いつの間に寝てたんだ……確か、昨日は夜遅くまで狂三の事を調べて……）

そこまで思い出した時、蓮は素早く自分の身体を動かしてどこかに痛みや妙なところはないか確認する。しかし、両腕と両足はしつかりあるし、強いて言えば身体がだるく頭に軽い頭痛があるが時間が経てばすぐに収まるだろう。

（どこも傷ついて無い……狂三の言った事は本当だったのか……？）

もし、狂三が自分を殺すつもりがあったなら寝ている時など大チャンスだったはず。なのに殺すどころか傷一つつけていないという事は狂三の言った事は真実だったという事だ。

そして、狂三が言った事の中に気になる内容がもうひとつあった。

「今日は土道さんと馱で待ち合わせがありますので」……狂三は確かにそう言った……）

偶然口を滑らせたかは分からないが、今日に土道と待ち合わせ……つまりデートがあるという事だ。しかし、蓮は「フラクシナス」からそんな事をするとは聞いていない。だとすると考えられる可能性は一つ……

（知られたくないって事か……）

自分の心の中でそういう結論が出てくる。何故知られたくないのかは分からないが、今思えば、昼休み後の土道の様子が少し妙だった。土道自身は出来る限り違和感なく接してきたつもりらしいがその感じが蓮に違和感を持たせたのだった。つまり、土道の行動は裏目に出たということだ。

しかし、流石の琴里もまさかターゲツト^三から蓮にデートの事が伝わると思いきなかつただろう。

（はあ……なんか、ややこしい事になってきたな）

たとえば、ヘフラクシナスの作戦に参加出来なくても今回は狂三が関わっているのでこのまま放置する事は出来ない。こうなったら蓮単独で行動するまでだ。幸いにも今の時刻は朝の7時でデートを始めするにはまだ早いだろう。

(狂三は駅で待ち合わせと言ってたな…：ここのら辺で駅と言ったら：きつと天宮駅だろうな…：)

狂三と土道が待ち合わせに使用しそうな駅をすぐに頭の中で検索してそこで張り込むことを決める。

そして、重い身体に鞭を打ちベッドから這い出す。ここで蓮は少し…いや結構重要な事をふと思いつ出した。

(あれ？狂三とデート…：確か、十香も土道をデートに誘いにいったよ
うな…：)

—————
午前十時を少し過ぎた頃、駅前に待っていた狂三になぜか息を切らした土道がやってきた。

「ま…：待たせたな…：」

「いいえ、わたくしも今来たところですよ」

約束の時間を過ぎていたというのに狂三は微笑みながら土道を迎える。

そんな2人を少し離れた電灯から見つめる者がいた。

(少し遅刻するとは土道らしくないな…：狂三の霊力封印が目的のはずだが…：)

黒色のジーパンと黒色のワイシャツ、そしてパーカーという服装で携帯電話を弄るフリをしながら横目でそれを見つめている。その人物とは蓮である。

十香とのデートの件も気になったが今優先すべき事はとりあえず狂三と思いい駅前ですつと待っていたのだ。

(しかし、やっぱりこれを被ってきてよかったな…：)

蓮は自分の頭にある帽子を見てつくづくそう思った。家を出る前に自分の白髪が尾行をするのに目立ち過ぎる事に気付いて急いで髪を隠す物がないかと探し回ったら偶然にもこれを見つけたのだ。

(役には立っているがやっぱり邪魔だな、けど今は我慢だな…)

普段はあまり帽子を着ける事はなく、頭を押し付けられる不愉快な感覚に後先考えずに帽子を外したくなる衝動に襲われるがこれのお陰で目立つ髪だけでなく顔まで隠すことができるので仕方なしに我慢する。こういう事は実践するのは始めてだが尾行は基本的に『根気』と『我慢』が大切だと教えられていた。

頭の中でそんな事を思い出していると、土道と狂三が何かを話した後どこかへ歩き始めた。しかし、歩き出す瞬間、土道が狂三ではなく別の方向に視線を向けた。何かと思つて土道が見ている方向に視線を向けると道路を隔てた広場の噴水の前に微動だにせず立っている折紙とナンパらしき3人組の男が折紙に話しかけているのが見える。

その光景を見て、いろいろとツツコミたい所があるのだが蓮が一番気になったのは何故こんな所に折紙がいるのかだった。噴水の前にずっと立っている事と折紙の服装から察するにおそらく誰かと待ち合わせをしているのだろう。そして折紙がデートに誘うと思われ人物は一人しかない。

(なんでこんな所にあいつがいるんだ？あいつが土道以外の誰かとかけるとはあまり考えられないし…)

この瞬間、頭の中に一つの可能性が出てきた。それは土道は絶対にしない…するはずのないことである。だが、土道ではなくあの無茶ぶりの妹司令官だったら本当にやりかねないような事でもあるのだ。た。

(いや、まさかな…そんな事より今は狂三の件が優先だ)

自分にそう言い聞かせて頭を切り替える。結局、折紙に話しかけていた三人組は警察に連れて行かれて、折紙は何も無かったかのようにさつきと全く同じ姿勢で立っていた。人を見る目が無かった3人組が悪いのだが、やはり心の中で少し同情してしまう。ただナンパをしただけなのにこんな事になってしまう事…

(おいおい…そう言えば二人は…)

はっ…と本来の目的を思い出した蓮は近くのビルの中に入っ

く土道と狂三を見つけてこっさり後をつけていく。

この時、蓮は気づかなかった。狂三が蓮のいる方向を一瞬見て微妙に笑っていた事を。

ビルの中に入った狂三と土道はエスカレーターで3階のランジェリーショップ：いわゆる下着売り場の店へと入っていった。

土道が自分からのような所に誘うとは思えないのでおそらくヘフラクシナスからの指令によってここを来たのだろうと想像できるが正直、何故ここを選んだのかが蓮にはまったく理解出来なかった。

二人が店に入っていくのを見てどうしようかと頭を悩ませる。蓮は女性の下着を見て顔を赤らめるほどウブでは無いのでそこは大丈夫なのだがあの店には客はもちろん店員も全員女性だろう。1番面倒なのは不審者として警備員などを呼ばれる事なのだがそのリスクを抱えても店の中に入らなければ狂三を見張る事は出来ない。

(ハア…面倒な事をさせるな…)

こんな事をさせる土道を心の中で恨みながら仕方なしに店の中に入る事を決める。店に入った瞬間の周りからの視線を感じながら店の中を見渡して2人を探す。途中に何回かセクシーな下着が目に入ったがそんなものを気にもせずキョロキョロと辺りを見渡していると試着室の前で何故か亜衣、麻衣、美衣の三人にいろいろと何かを言われている土道を発見出来た。蓮はこっそりと相手からは見にくいであろう位置に身体を移動させる。

(なんか…本当に大丈夫か?このデート…)

最初からここまでといういろいろと心配する所がありすぎるデートに思わずはあ…とため息が出てしまう。まあ、狂三にキスして靈力を封印することが目的な時点でよく考えたらまともなデートとなんか言えないのかもしれない、その時、

「あの…すみません」

「え?」

隣から控えめに声をかけられて顔を向けてみるとそこにはまだ二十代であろう気弱そうな女性がいた。何の用かと思ったのだが彼女

の服装がこの店の服である事が分かり、だいたい相手の言いたいことがすぐに理解出来た。

「ここは女性の方の下着売り場なので：男性の方はちよつと…」

「え、ええ…：そうなんですけど…」

どうしたものかと必死に考える。よく考えたら自分は女性を連れてくる訳ではなく一人、しかもさつきからコソコソとした行動をしていて顔は帽子で隠している。他の人間から見たら明らかに怪しい人間にしか見えていないだろう。しかし、いきなり警備員を呼ばれてない辺り、そこは彼女の優しさなのだろう。

(どう言ったらいいものか…)

狂三が土道の側にいる以上、あまり目を離すのは望ましい事ではない。かと言ってこのままここに居続ければ今度こそ警備員を呼ばれかねない状況だ。本当の事を言おうにも『あそこにいる少年が殺されるかもしれないので自分が見張ってる』なんて言えば警察の前に救急車で病院に連れて行かれるだろう。

(やるしかないか…)

ここはなんとか誤魔化すしか無いようだ。時間が無いこともあるのだが男性が1人で女性の下着売り場に居ていい理由なんてどう考えても思いつく訳が無い。せめて少しでも怪しさを無くすことが出来るように土道たちがこつちを見ていないのを確認した後、頭にある帽子をとる。

帽子によって押さえつけられていた白髪が空気中にバサツと広がった。

「ええ…それは分かっているのですが私にはどうしてもここにいないければ用事があります…：ここを離れる訳にはいかないのです。ああ、でも、いかがわしい事をしているのでは無いのでどうか分かってくれたらとても嬉しいのですが…」

警戒心をなくすように申し訳なきように言った後、深くお辞儀をして頼み込む。離れる訳にはいかないと言いながらもその理由すら話していない…：話せないのに相手は納得してくれるはずがないだろうと蓮自身そう思った。ダメと言われると思っていたのだがいつま

でたつても相手から反応がなく不思議に思い女性を見てみると、頬を赤く染めながらボーと放心状態でフリーズしていた。

「…？　どうかしたんですか？」

「ひゃい！　な、なんででしょうか！　私に出来る事であればなんでもどうじよー！」

心配して顔を近づけると店員はハッと我に返り、やたらパニックになっってしまった。

「あ、いや…少しだけここに居させて欲しいと…」

「わ、わかりました！　しゅ、しゅきなだけここにいてくださって結構です!!」

「ありがとうございます！　お陰で助かりました！」

その答えに蓮は嬉しくて蓮は相手の手を取って顔をさらに近づける。すると店員の顔がさらに赤くなり、もう真っ赤だ。

「~~~~!!」

すると、突然手を蓮から逃れさせた後、両手で赤くなった顔を隠しながら全速力で走って行ってしまった。いきなりの行動に蓮はなぜそうなったか分からず、あれ？　潔癖症だったのか？　と勘違いをしていた。

(…ってそんな事より土道と狂三は…)

視線を戻すとやたらセクシーな下着をつけた狂三がカーテンに開かれた試着室にいて、腹を押さえながら狂三に何かを言った後店を出て行った。まあ、亜衣、麻衣、美衣の三人が走っていく土道の背にものすごい怒声を放っていたのだが。

結局、狂三は試着室で身につけていた下着を買って三人組と何かを話した後店を出て行った。

~~~~~

午後三時三十分、狂三と土道がデートを始めて五時間ほど経過したのだが現在、狂三は一人で公園のベンチ腰掛けている。

なぜなら土道はまた腹を押さえながらどこかに行ってしまったからだ。ここまでくるとなぜ土道がこんなにデートを抜けているのか

が薄々分かり始めてきた。昨日、土道をデートに誘いに行った十香、何故か駅前ですつと待っていた折紙、ここまでくると何しているか想像する事はそう難しくない。

(もう3時…土道はまだ帰って来てこないか…)

蓮は携帯で時間を確認して退屈そうに欠伸を一つする。狂三から土道が離ればそれほど土道の安全が大きくなるので蓮にとっては嬉しい事なのだが、流石に狂三を放置し過ぎだろうと思う。土道が抜けた回数はもう十回から先はもう数えてすらいないがおそらくもう二十回ぐらいは超えただろうか。

ここまでくればもう何も無いだろうと思い、狂三に視線を戻して驚愕した。

ついさつきまでベンチに座っていたはずの狂三の姿がどこにも見当たらなかったのだ。

(なっ!?! ど、どこに行ったんだ!?)

一瞬でも目を離れた自分を恨みながら周りを歩き回って狂三の姿を探索するもどこにも居なかった。

蓮に冷や汗が流れる。これは油断してしまった自分のミスだった。

(どこだ…まさか土道を殺しに…)

その恐怖が頭を横切った時、近くの路地裏から大きな音が聞こえてきた。何事かと思い、中を覗いてみると。

(うっ…なんだこれは…)

路地裏には大量の血がぶち撒けられており、異様な臭気に思わず鼻を手で覆う。だが、奇妙な事に血の量に比例して死体は一つしか無かった。その一つの死体はついさつき土道とデートしていたはずの狂三で地面に力無く横わっている。

そして、狂三の死体の近くには一人の少女が立っていた。その少女は…

「お前は…真那…?」

「蓮?…なんでこんな所にいやがるんです?」

蓮の同僚であり、友人である崇宮 真那だったのである。

## 16話

「蓮？　なんでこんな所にいやがるんです？」

「偶然、近くを通りかかっただけだよ」

「ここで『土道と狂三がデートしていてそれを監視していた』なんて言えず、そう言つて誤魔化す。」

「そんな事よりそれは…」

「ああ、ヘナイトメアでやがりますよ。いくら蓮でも名前ぐらいは聞いた事ぐらいはあるでしょう？」

真那はまるで物を見るような視線を狂三に向ける。蓮は狂三に近づいて首筋に指を当てる。脈はない、完全に死んでいる。

狂三の死亡を確認すると手を目に被せ瞼を閉じさせた。

「お前が殺したのか？」

「ええ、兄様が襲われそうだったので。本当に危機一髪の所でしたよ」この言葉を聞いて、前に狂三を殺したという報告を思い出した。きつとその時も狂三を殺したのは真那だったのだろう。

蓮は真那がとても優秀な魔術師ウィザードだという事は知っていたがまさかこんな事をしていたとはまったく知らなかった。

「真那、お前は狂三を殺すのに抵抗は無いのか？」

「蓮、ない事だと思えますけどこの女に同情してるわけじゃねーですよね？こいつはついさつきも人を殺しやがったんですよ。まさか蓮も兄様のように『こんな事はもうやめてくれ』だなんて言わねーてくださいよ？」

「まさか、お前にも狂三を殺すだけの理由があるんだろう？そのことに口出しする気は無いよ」

たとえ間違えた事をし続けても本人がそれを正しいと信じ続ければ少なくとも本人にとつては正しい行いになると蓮は思っている。

ただ不安なのは真那は間違いに気付いた時、正しい道に入れるかどうかなのだがそれはまだ先の話だ。その時に真那が考えればいい事だ。

そう言った時、蓮は物陰で小さく動く影が目に入った。それは野良

だろうか、生まれて間もない小さな仔猫だ。

ただの仔猫だったら気にも留める事は無かったのだが、歩き方が妙で足を引きずるようなぎこちない動きだったのだ。

それが気になり仔猫の元に行き、身体を調べてみる。

(こいつ…足を怪我をしているのか?)

さらに調べてみると、足以外にも胴体に痣がたくさんある。だが、痣の形は自然に怪我をしたというより、小さく硬い球体がものすごい速さで当たったような形をしていた。

(狂三が殺した奴らは…まさか…!)

近くにあつたモデルガンを見て、なぜ狂三が殺したかを理解し真意を感じ取ると、蓮は仔猫を抱えて狂三の死体の所まで戻ると、その頬を手を添えるように優しく撫でる。

「…真那、後は頼む」

「え、ええ 分かっちゃがりますが…」

その返事を聞いて、蓮は仔猫を抱えたまま路地裏を出て行く。真那はそんな蓮を不思議そうに見ていた。

「蓮が猫好きだったなんて意外です。ていうかよくその女の死体に触られるなんてスゲーですね。私なんて生理的に無理ですよ。…まさか、死体愛好にでも目覚めちまったんじゃないやねえですよね?」

顎に手を当ててブツブツと何か独り言を言い始める真那。それほど、自分の中の蓮とのイメージからかけ離れた奇行だったのだ。

「…?…なんですかね?…これは」

ふと下を見た時、真那は地面に転がっていた、あるものを見つけた。

—————

家まで帰った蓮はそのままりビングまで行き、腕に抱えた仔猫を優しく床に下ろす。すると、仔猫は痛みを誤魔化すようにちるちると毛づくろいをし始めた。

「今…楽にしてやるからな…」

そう言うと、右手が青く光り始めてへバスターへ変化する。そして右手を仔猫に触れて意識を右手に集中させる。

波一つない水面を思い浮かべて、小さな波が立つように少しずつ力

を右手から送り込むのをイメージすると「バスター」から青い光が溢れ始め、青い光は仔猫の身体に吸い込まれるように入っていく。

すると、仔猫の身体にあつた痣はだんだん薄くなっていき、やがて完全になくなつた。足の怪我也同様に完全に完治する。

「ふう…あー、疲れた」

だが、仔猫が完治すると同時に蓮の全身にもものすごい疲労が襲つてきて倒れるように仰向けに寝転がる。これは一見すると便利な力なのだが、終わると全身がものすごく疲労してしまう。普段はあまりしたく無いのだが今回は特別だ。

床に寝転がっていると、右手の指先に何やらくすぐったい感覚がして視線を向けてみるとそこには仔猫が指先をペロペロと舐めていた。

「よしよし…よく頑張つたな…」

右手を元に戻し、仔猫の頭を撫でると気持ち良さそうに目を細める。身体の疲労が消えるまで撫でてなんとか立てるようになりまで回復すると、仔猫がニャア、ニャアと鳴いて何かを訴えてきた。

「ん？ 腹が減っているのか？」

なんとなくそう言っているような気がしたので台所に行き、小皿を二つ用意して片方に牛乳を、もう片方に小さく切つたソーセージを入れて仔猫の目の前に置くと仔猫は嬉しそうに牛乳を飲み、ソーセージを頬張り始める。

仔猫が食べ終わつたら元の場所に返しに行こうかと思つたのだが時計を見ると時刻は四時、現場には狂三の死体などを後始末をしている隊員がいるだろう。それと鉢合わせして面倒な事にはなりたくないで夜になつたら返しに行こうと考える。

(さて、俺も夕飯の準備をしなくちゃな)

—そう思い、少し身体をよろめかせながら立ち上がった。

夜八時、夕飯を食べ終わつた蓮は上着を羽織り外へ出掛けた。腕の中には拾つた仔猫を抱えあの時の裏路地へ向かつたのだ。

目的地へ着いて裏路地を覗いてみると大量の血も狂三の死体もしつかり片付けられて綺麗になつておりここで人が死んだなど誰も



思わないだろう。

蓮は裏路地の入り口の所に仔猫を下ろして名残惜しそうに頭を撫でる。

「じゃあな、元気で暮らせよ」

そう言つて家に帰ろうとしたのだが仔猫は甘えるように蓮の脚に身体を擦り付けてくる。出会つて四時間ぐらいいしか経過してないのによく懐かれたものだと思ながら思う。

「残念ながらここでお別れだ。お前ならすぐにいい飼い主が見つかるさ」

再び持ち上げて仔猫をさっきの場所に戻して今度こそ裏路地を去る。寂しくないと言えば嘘になるが飼おうと思うとなんだか自分が勝手にそうしたいのではないかと思いきやあまり気乗りがしないのだ。

そんな事を考えながら歩いていると家に着き、ドアを開けようとした時、

「ニャー…ニャー」

そんな鳴き声が聞こえて後ろを振り向くと、あの仔猫が尻尾を振りながら首を傾げてちよこんと座っていた。

あの裏路地から蓮の家にまでずつとついてきていたようだ。

「…はあく、まったく…」

何かを諦めたように深くため息をすると仔猫の前足を両手の親指と人差し指の間に挟むように持ち上げる。つまり、蓮にはお腹が丸見えなのだが少しも嫌そうな動作をしない。

「うちに住みたいなら、風呂に入る事が条件だぞ」

野良だったせいなのか身体は汚れだらけで清潔とは言い難い。この状態で家の中を歩き回られたら掃除に苦労する事になるだろう。すると、分かったのか仔猫はニャアと小さく鳴いた。

「いい子だ、よく大人しくしてくれたな」

仔猫を風呂に入れてドライヤーを使って乾かした後、蓮はベッドに寝転がりながら仔猫を愛でていた。

普通のネコは水を怖がるので入浴させるのは苦労すると思ったの

だが、意外にもお湯に入れて乾かすまで大人しくしてくれたので清潔にさせるのはそんなに大変な事では無かった。

「もうこんな時間か…お前はどこで寝るんだ？」

時間は十一時になり、そろそろ寝ようと思うのだがまだ仔猫の寝床を用意してないのでどうしようかと考える。

すると仔猫はベッドの上をちよこちよここと移動して枕元まで来るとそこに寝転んだ。どうやらそこで寝るつもりらしい。

まあ、本人が選んだのなら…そう思い部屋の明かりを消して自身もベッドに寝転がる。

「明日はお前の生活用品を買ってきてやるからな」

顔を仔猫に向けそう言った後、蓮は瞼を閉じた。

朝日が部屋に差し込み、雀のさえずりが聞こえてくる。そんな中、蓮は目が覚めたがのだがすぐに目を開ける事は出来なかった。

なぜなら顔に奇妙な感触のものが触れているのを感じたからだ。なんだか濡れていて柔らかく表面がザラザラしていてとてもくすぐったい。

(なんだ？…この感触…？)

不思議に思い、ゆっくりと瞼を開けると目の前に猫の顔がありペロペロと自分の顔を舐めていた。この奇妙な感触の正体はこれのようだ。

「お前だったのか…」

そう小さく呟くと仔猫はビクツと少し身体を震わせたが、何も無かったかのようにまたペロペロと顔を舐め始めた。

このまま舐め続けられる訳にはいかないし、そろそろ起きる時間なので仕方なしに起き上がった。

起こしてくれるなら他の方法が良かったのだが、朝っぱらから猫パンチで目覚めるよりはマシだったので我慢する。

「次からは起こさなくていいぞ」

仔猫にそう言った後、腕の中に抱えて蓮は寝室を出て行った。

(そう言えば、まだ名前を決めて無かったな…)

朝食を食べている時、まだ名前を決めていないことに気づいた。昨日は風呂に入れたりと忙しくて考えている暇が無かったのだ。

(どんな名前にしようか…)

チラリと床で牛乳を飲んでいる姿を見てみる。毛の色は茜赤色と白のミックスで性別は雌だという事は分かっているのだがどうもピンとくる名前が浮かんでこない。そんな事を知る由もない(当然だが)本人は牛乳をすべて飲み終えて呑気に毛づくろいをしている。

(あー、そうだ、あいつの名前を借りるか…)

その時、蓮の頭の中にある人物が浮かび上がってきた。その人物は自分とこの猫を巡り合わせた重要な人物である。

少し考えた後、毛づくろいしている仔猫と視線を合わせるようにしゃがみ、言い聞かせるように蓮は言い出した。

「よし、今日からお前の名前は…」

「ふあ〜…」

休み明けの学校というものはやはり気分が憂鬱になってしまうものだ、蓮も例外ではなく自分の教室のドアの前で欠伸を一つ漏らす。

ドアを開けて最初に狂三の席を確認する。席にはすでにやはり狂三が座っており、昨日の事を知っている蓮からしたら少し不気味に感じる。

そして、一番気になる事は土道の事だ。自称、自分の実妹である真那と狂三との関係を知った事は土道の心境に少なくない変化をもたらしただろう。その変化が両者を救いたいという希望の思いになる事を蓮は願っている。

「あら？ 蓮さん、おはようございます」

蓮の姿を確認した狂三は席を立ちこちらに向かって来るとそう言っただけ挨拶をしてくる。少し前の自分だったらこの挨拶は無視して自分の席に向かっていただろう。…だが今は違う。

「…ああ、おはよう。狂三」

そうとだけ言い席に歩いていく。一般人から見たら、とても素っ気

なく感じるだろうが狂三は違った。席に向かう蓮の背中を少し驚いたような表情で見た後、誰にも見られないようにコツソリと嬉しそうに微笑んだ。

天宮市の南端に位置する廃ビル、普段は無人のここの屋上に二人の少女の姿があった。一人はヘフラクシナスの艦長の琴里でももちろん今はリボンは黒色の司令官モードだ。

そしてもう一人は自称、土道の実妹の真那で二人共表情はとても不機嫌そうに見える。

「お待ちしてました、琴里さん」

「まったく、こんな所に人を呼び出しておいて何の用なの？ 雰囲気から察するに楽しい事……って訳じゃなさそうね」

「とりあえず、話を始める前にこれを返しておきますよ」

そう言っただけ真那はポケットから何かを取り出して琴里に放り投げる。それをキャッチして琴里は驚いた。それはヘラタトスクで使っている超高感度の小型インコムだったのだ。

「ヘラタトスク機関……噂で聞いてました。精霊を武力ではなく対話で懐柔する事が目的の組織がある事を。正直、都市伝説かと思っていやがったのですが……まさか、あなたと兄様が……」

「なるほど……昨日、妙な通信があったけどあの通信はあなたの仕業だったわけね」

「随意領域テリトリの中でなら声を変えるくらい造作もねーですから。……琴里さん、私はこの事を上に報告するつもりはありません。そのかわり、兄様を今すぐヘラタトスクから解放しやがってください、武器を何も持たせずに精霊と相対させるなんて正気とは思えねーです」

真那にとっては琴里は自分の兄の命を軽々と扱っている悪魔にしか見えないだろう。精霊と戦っているからこそ、その行為がどれほど危険なのかがよく分かるのだ。

「相手に銃を向けたまま話し合えるはずないでしょう。それにヘラタトスクから土道を解放して、あなたはどうしたいの？」

「琴里さん。あなたの様な人に兄様は任せておけねーです。兄様の身

柄は私が引き取ります」

「冗談じゃないわよ。DEMみたいな悪徳企業に土道を預けろっていうの？」

琴里のこの言葉を聞いて真那は驚愕した。まさか、自分の事をここまで調べられているとは予想出来なかった。だが、ふうと息を吐いて心を落ち着かせる。

「どこでそれを…とは聞きませんよ。そこまで割れているなら隠す必要はねーですね。あなたの言う通り、私はもともと自衛官ではなくDEMインダストリー社から出向してくる当たって必要だったから適当な階級を得ただけです」

だが、真那はまた琴里を睨むような鋭い視線を向ける。

「しかし、DEMが悪徳企業というのは聞き捨てならねーですね。あそこは記憶喪失の私を受け入れて、存在理由を与えてくれました。それにDEMは蓮の家なんですから蓮の事を侮辱するのは私が許さねーです！」

今度は琴里が驚愕する番だった。蓮はASTに所属しているのは知っていたが、なぜDEMの話をしている時に蓮の名前が出てくるのかがまったく分からない。

「ちよつと待って！なんで蓮の名前が出てくるのよ？」

「ああ、そう言えば蓮は兄様の友人でしたね、なら妹のあなたが知っていても妙な事ではねーです。蓮は…」

そこまで真那が言いかけた時、二人の携帯電話が同時に着信音を鳴らした。

## 17話

真那と琴里が話し合っている時と同刻の四時三十分、士道は狂三に放課後来る様に言われていた屋上にいた。

この事は蓮には言っていない。まだ容疑が晴れていない事もあるのだが何より真那と狂三の悲しい関係を知った今、もう真那には狂三を殺して欲しくないし狂三にももう人を殺して欲しくない。これを自分の力で叶えたいと思ったからだ。

「お前のやってきた事は許される事じゃねえよ。一生かけて償わなきゃならねえ！でも…お前がどんなに間違っていようが、狂三！俺がお前を救っちゃいけない理由にはならない！」

今、人間を衰弱させる広域結界が学校を中心にこの辺りを覆い尽くしている。これを解除してくれるように…そして狂三自身を救うため士道は必死に狂三に語りかける。

「わ、わたくし…わたくしは…」

士道の言葉に狂三は混乱したかのように目をぐるぐると泳がせ、狼狽している。

「士道さん、わたくしは…本当に…」

そう言いながら狂三は戸惑うように右手を士道へ伸ばした時、

「駄ア目、ですわよ。そんな言葉に惑わされちゃあ」

その声が聞こえると同時に目の前にいる狂三の胸から一本の赤い手が生えた。正しく言えば狂三の後ろにいた狂三が体を貫いたのだ。狂三が胸から手を引き抜くと胸を貫かれた狂三は崩れるように地面に倒れる。

「まったく、彼という人が居ながら惑わされるなんて…この頃のわたしは若すぎたかもしれませんね」

反省気味に呟き、血塗れの右手を払うと死体となった狂三は影から出てきた手によって影に引きずり込まれる。そんな光景を見ていた士道には何がどうなっているのかがまったく分からず、



手に収まる。きっとこれが狂三の『天使』なのだろう。

「何をするつもりかしらねーですけど、またいつもみてーに殺してやりますよ」

「きひひひ、残念ながら今回は絶エエエツ対にわたくしを殺すことは出来ませんわ」

「すぐにそんな事すら言えなくしてやりますよ！」

そう言っつて剣を構えて真那は狂三に飛び込んでいく。天使によって攻撃される前に狂三本体を倒すつもりなのだろう。だが、狂三は動こうとせず、切断された右腕を前に差し出した。

「士道さん、あなたにとても素晴らしいものを見せて差し上げますわ」

ニヤリとした表情をしながら狂三がそう言うと同時に目の前に真那の剣が迫ってくる。当たると真那が確信した時、狂三の体が急に眩いほどの赤い光を放ち始め反射的に目を瞑ってしまふ。そして、次に真那が感じたことは巨大な拳に殴られたような凄まじい衝撃だった。

「がはっ…一体、何が…」

原因不明の衝撃に思いつきり吹き飛ばされ、屋上の床に転がった真那はクラクラする頭を押さえて視線を狂三に戻す。だが、もう一度見た狂三には視線を引く異様なものがあつた。

「くっ…一体何が…」

狂三から放たれた光に真那と同様に士道も目を瞑ってしまう。光が収まったのを感じてゆっくりと目を開けた士道は狂三の姿を見て自分の目を疑つた。

狂三の右腕が黒っぽい皮膚のようなものになっており、ルビーのような赤いラインが輝きながら刻まれていた。

それは色に違いはあれど間違いなく蓮の「バスター」を右腕に宿していたのだ。

「く、狂三…な、なんでお前が…それを…」

「フフ…どうですか？士道さん、とても…とても美しいでしょう？少し彼から失敬させてもらったのですが、ああ…イイですわ…」

狂三は自分の右腕を士道に見せつけるように前に差し出した後、恍



惚とした表情で「バスター」を優しく撫でながら自分の頬を摺り寄せる。

「なんですか…その気味の悪い腕は？」

「あらあら、彼のことをそんなに悪く言うものではありませんわよ。ひひひ」

立ち上がった真那は嫌味つたらしくそう言ったが、狂三は余程機嫌がいいのか真那のそんなに言葉を少しも気にした様子を見せない。

「さあ、真那さん。こちらからいかせてもらいますわよ。

〈刻々帝〉<sup>ザフキエル</sup>ー<sup>アレフ</sup>【一の弾】

狂三が左手の短銃を掲げると時計の文字盤の『I』の部分から影が染み出し、短銃に吸い込まれていく。そしてその短銃を自分の顎に当てて引き金を引く。その瞬間

「ぐっ…ッ!？」

狂三の姿が消えると同時に真那の体をとつもない衝撃が襲い、横に吹き飛ばされた。

「あッははははは！わたくしの動きが見えましたかしらア？真那さん！」

しかし真那は空中で方向を転換して虚空を蹴るように狂三に猛進する。あと少しで狂三に剣が届く、その時。

「なっ…!？」

真那の体が空中で止まった。いや、正しく言えば止められたという表現が合っているだろう。

なぜなら真那の体を赤い、半透明な手が掴んで空中で止めていたからだ。

「きひひひひッ！甘いですわよッ!!」

「がはっ！」

赤い手は掴んだ真那をものすごい力で屋上の床に叩きつける。いきなりの出来事に<sup>テリトリ</sup>随意空間を展開して衝撃を和らげる暇すら無かったように叩きつけられた瞬間、真那は口から赤い血を吐血した。

「真那！」

土道は叫ぶと地面に倒れた真那に駆け寄る。吐血したということ

は真那の臓器にかなりのダメージが襲ったのだろう。

「兄…様…危険…です…早く離れ…やがって…ください…」

「馬鹿、何言ってるやがる！」

これほどの重傷を負っても真那はゆっくりと立ち上がるがフラフラとして今にも倒れてしまいそうだ。

それにこの状態の真那がそのまま狂三に挑んでも、勝てないとは士道にも分かった。

「素晴らしい!!素晴らしいですわ! 彼がわたくしの身体の中で一つになっていくのを感じますわ!!」

勝ち誇ったかのように興奮し空を仰ぐ狂三を真那は睨みつけながら見る。蓮の強さは士道もよく知っていた、その力は精霊である十香と戦い圧倒したほどだ。その力が狂三に渡った今、止めることができるのは誰もいないとさえ思えてしまう。それこそ蓮以外の者には…

その時、士道の後方からバン!と扉を開け放つ音が響き、

「シドー!」

「士道」

霊装を纏った十香と、ASTのワイヤリングスーツを着た折紙が姿を現した。

2人とも士道を見て無事を確認した後、真那と狂三の姿を見て驚きを露わにした。

「なっ!? 狂三! 貴様がなぜその腕を持っているのだ!」

「時崎 狂三 なぜあなたがその腕を?」

やはり、狂三の腕のへバスターについて二人は問いかける。だが、狂三は答えずただ妖しい笑みを浮かべるだけだ。

「…狂三! 答えないのなら容赦はしないぞ! 貴様、レンに何をしたのだ!」

「士道に危害を加えるなら時崎 狂三、あなたを排除する」

二人は鋭い視線を狂三に向ける。だが、狂三は敵意など感じてないかのように楽しげに身体を回転させる。

「ああ、怖いですわ、恐ろしいですわ。こんなか弱いわたくしを相手に、こんな大勢で襲いかかるなんて」

だが、本人は恐れているどころか負けるとすら思っていない様子でくすくすと笑う。そして、自分の右腕の「バスター」を撫でて何かを語りかけ始めた。

「ですが、あなたは負けませんわ。あなたは絶対に…。負けませんけど、ここはあなた達に任せましたわ、わたくし達」

狂三が奇妙なことを言った瞬間、屋上を覆い尽くしていた狂三の影から白い手が大量に顔を出した。だが、今までは肘程度までしか姿を見せなかった手が徐々にその本体を現していった。

その白い手の正体は全て『狂三』であり、何人もの狂三が広い屋上を覆い尽くさんとばかりに影から這い出してきた。

「こ、れ…は…ッ」

真那はこの信じられない光景を目を見開いて見ている。

「これはわたくしの過去、履歴。様々な時間軸のわたくしの姿ですわ。とはいえ彼の力はおろか、わたくしほどの力すら持ってない再現体なのでご安心下さいまし」

狂三は土道達に分かりやすいように説明してくる。おそらく真那が狂三を殺し続けていたのもこの能力が原因だったのだろう。

「さあ…終わりにしましょう」

狂三がそう言うのと分身体の狂三が群がってくる。必死に抵抗しようとして、もがくが実力以前に数が違いすぎる。土道、真那、十香、折紙の四人は五分も満たずにその場で押さえつけられて制圧された。

「ああ、やつと土道さんをいただくことができますのね。ああ、そうですわ」

何かを思い出したかのように呟くと、左手を天に掲げる。すると一度は解除された空間震警報がまた鳴り響いた。

「狂三ッ！ 何を…」

「先ほどとまったく同じ事をして差し上げますわ。眠っている皆さんはこのままじゃあ…たくさん死んでしまいますわねえ」

「や、やめろー！ やめないならこのまま舌を噛んで…」

そこまで言った時、土道を押さえていた狂三が口の中に指を突っ込んで舌を噛めなくさせた。これは自殺を防ぐためでもあったが、分身

体の狂三のように誑かされるのを防ぐためでもあったのだろう。

「これでもう自殺出来ませんわねえ。さあ、絶望しなさい、土道さん」  
その瞬間、来禅高校の周囲が地震のように空気が大きく震えた。

だが、それだけだった。

耳障りな音が響き、空気が震えたがどこにも被害はなく、周囲にはいつも通りの街並みが広がっている。

「これは…どういう事ですの…？」

「空間震は発生と同時に同規模の空間の揺らぎをぶつけると相殺できるよ。もしかして知らなかった？」

空から凜とした声が聞こえてきて、その方向を向いて見ると炎の塊が浮遊していてその中に和服のような格好をした女の子がいた。

風になびく袂は半ば炎と同化しているかのように揺らめき、腕に絡みつく炎の帯はまるで天女の羽衣のように見えて頭部には無機質な角が2本生えている。

そして、その少女は…

「琴、里…？」

土道の妹にしてへラタトスクの司令官である五河 琴里であった。

「少しの間、返してもらおうよ、土道」

琴里がそう言うと、彼女の周りに炎が生まれ、巨大な棍のような円柱形のようなものを作った。そして、その棍を手を持った瞬間、その側部から真っ赤な刃が出現して戦斧となった。

「さあ…私たちの戦争を始めましょう」

## 18話

「どなたですのオ？せつかくいいところだったのに、邪魔しないでいただけませんか？」

左手に銃を持ち、赤と黒で出来た《バスター》を右手に宿した狂三は眉を歪めて不機嫌そうにしながら琴里に言った。あと少しで上手くいったところで横やりが入ったのだ、そうもなるだろう。

「悪いけど、そういうわけにはいかないわね。あなたはやりすぎたわ、罪には罰をあたえなくちやいけないわね」

「く、くひひひッ：面白い方ですわねえ。まさか、あなたがわたくしと”彼”に勝てるっても？」

狂三は琴里に右腕を見せびらかすように前に差し出した。美しい見た目とは裏腹に圧倒的なまでの力を秘めているこの腕の力を持った自分をもう誰も止められない。この腕の本来の持ち主である彼以外には。狂三はそう思い自分の勝利を疑わなかった。

「何が『わたくしと彼』よ。あなたがただ盗んだだけじゃない。その腕もオリジナル運のと比べたら色も悪趣味だし、まあ、ある意味あなたにはピッタリでしょうね」

琴里の挑発的な言葉に狂三の頬がピクリと動く。屋上を埋め尽くしていた狂三の分身体が上空にいる琴里を睨めつける。そして屋上に苦悶の音が響いた。分身体が折紙と十香を気絶させたのだろう。

「イイですわ！・力の差を教えて差し上げましてよオツ!!」

狂三が叫ぶと他の分身体が一斉に琴里に飛びかかってきた。琴里一人に対して圧倒的物量の差、これほどの差では1人や2人を倒しても焼け石に水だろう。

だが、琴里はこれほどの差があっても余裕そうな表情を少しも崩さず、手に持った巨大な戦斧をゆっくり持ち上げる。

「灼爛カマエル穢鬼！」

狂三の大群が目の前に迫った瞬間、赤い軌跡を残し輝きを増した戦斧を思いつきり前方に振り抜いた。同時に飛びかかってきた狂三の身体の部位が一斉に宙を舞い、地につく前に燃え尽きた。この光景を

狂三は信じられないものを見るような目で見ている。

分身体を葬った琴里は視線を土道の方に落とし、もう一度灼爛殲鬼を振る。すると焰が蛇のように動いて土道に群がっていた狂三を燃やし尽くした。そして琴里は狂三と土道の間に降りて土道を守るかのように狂三に向かって灼爛殲鬼を構える。

「こ、琴里…これは一体…」

「質問は後よ、土道。出来るなら狂三の隙についてここから逃げてください。今のあなたは…簡単に死んじゃうんだから」

琴里の言っている意味が分からず困惑していると、前方から狂三の笑い声が聞こえてきた。

「ひひひひ…ッ！ やるじゃありませんの。でエもオ…まさかもう勝ったと思っっているんじやおられませぬわよね？」

その言葉で土道は息を詰まらせた。まだ狂三には天使の〈刻々帝〉と〈バスター〉があるのだ。

狂三は〈刻々帝〉の『I』から漏れ出した影を装填した短銃を自分のこめかみを撃つ。〈刻々帝〉の『一の弾』、この弾は撃った対象の間を早める効果がある。

「さあアー、わたくしについて来られますでしょうかア!？」

そう言うと同時に狂三の姿が一瞬で消える。それと同時に琴里は手に持った〈灼爛殲鬼〉を頭の上にやる。すると〈灼爛殲鬼〉から甲高い音が鳴って震えた。

圧倒的スピードで琴里を一方的に攻撃する狂三。だが、琴里もただやられていくわけではなく狂三のスピードに反応して焰の刃で攻撃をことごとく防ぐ。

「あッはははは！身体中から力が溢れてくるッ！この感覚、素晴らしいですわッ!!」

「鬱陶しいわね。もう少し落ち着かなきゃ蓮に嫌われるわよ」

琨を薙ぐように振り抜き狂三を吹き飛ばす。狂三は琨が当たる瞬間、右手を構えてガードしたが衝撃までは無くせずそのまま吹き飛ばされた。吹き飛ばされた狂三は不安定な姿勢のまま銃を構えて叫びを上げる。

「あらあら、それはとても悲しいですわ。では、そのご忠告通りに淑やかに殺らせていただくとしましよう。〈刻々帝〉——【七の弾】！」

〈刻々帝〉から飛び出した影は狂三の持つ銃に吸い込まれて、それを琴里に向けて発射する。

今の琴里には姿勢などの関係から回避できる状態ではないが〈灼爛殲鬼〉で撃ち落とす。

だが、弾に触れた瞬間琴里の身体が停止して動かなくなった。髪の毛なども空中で静止してまるで琴里の周囲の時間が止まってしまったかのように。

「琴里!? どうしたんだ!？」

急に動かなくなった琴里に土道が声を掛けるもやはり反応がない。

琴里のそんな姿を見て狂三は大きく笑い出した。

「ふふ、あはははッ! どんな強靱な力を持っていようと止めてしまえば意味がありませんわよ?」

動きが止まった琴里に周りに残っていた狂三の分身体が一斉に銃弾を放ち、琴里の肌に弾痕を刻んでいく。最後にオリジナルの狂三が〈刻々帝〉からもう一丁の銃を右手に収め、琴里に向けた。

「それでは、ごきげんよう」

とどめとばかりに弾丸を琴里に撃ち込む。その瞬間、琴里が動きを取り戻して撃たれた傷から血が吹き出す、そして最後に狂三が撃った箇所：正しく言えば撃った弾が爆発して琴里を吹き飛ばした。

「琴里!!」

「フフッ、こんなことも出来るだなんて本当にこの腕は素晴らしいですわね。」

〈バスター〉の万能性に酔いしれる狂三。そんな狂三を気にもせず土道は倒れた琴里の元へ駆け寄るが全身を弾丸で撃たれ血の海に沈んだ琴里はもはや生存は絶望的な容体だ。

だが、次の瞬間、琴里の身体の銃痕から全身を舐めるように焰が噴き出して広がっていく。

「まったく…随分派手にやってくれるじゃない」

琴里はまるで何も無かったかのように立ち上がる。焰が通ったあ

とには傷も無く琴里自身も痛みなども感じていない様子でありこれを見てさすがの狂三も動揺を隠せない。

「さて…まだ続けるの？これを見てあなたが戦意を無くしてくれたのなら嬉しいのだけど…」

「くっ…」冗談を、この腕がある限りわたくしに敗北はあり得ませんわ!! 〈刻々帝〉「一の弾」

狂三はそう言うのと片手に持った短銃を自分自身のこめかみに向ける。これから狂三が何をするのかを察した琴里は近くにいた士道を蹴飛ばして遠くに飛ばすと戦斧を前に向けて防御の体制をとる。

「一の弾」の力によって高速化した狂三達は琴里が士道を逃がした隙に周りを取り囲み、容赦の無い銃弾または打撃を加えていく。特にオリジナルの狂三による〈バスター〉の力を加えた弾丸が琴里を苦しめる。

「切り裂け！〈灼爛殲鬼〉」

すると戦斧の刃の部分が大きくなりリーチを伸ばし、焰の刃は周囲を飛び回っていた狂三達を薙ぎ払い消滅させていく。

「くっ…蓮さん！」

狂三は願うかのように呟くと右手が大きく輝き出し、巨大な赤い手が現れ狂三自身を包み込む。そうやって焰から身を守りながら離脱するが、他の分身体はそうはいかず燃やし尽くされ消えていく。それを見て狂三は歯を噛みしめる。蓮の力を使いながらここまで苦戦する事は狂三のプライドが許さなかった。

「よくも…よくもわたくしをここまで…後悔させて差し上げますわ！」

〈刻々帝〉

「させるかっての…!!」

そこまで言った時、いきなり琴里は膝をつき苦しそうに頭を押さえ始めた。その姿を見て、狂三は悪運が尽きたと思いい手に持った歩兵銃を向ける。それを見て士道は最悪自分が盾になってでも琴里を助けるつもりだったが。

「〈灼爛殲鬼〉【砲】」

琴里が〈灼爛殲鬼〉を高く掲げると刃の部分が消えて琨のみになり、



それは蠢動して琴里の右腕の肘まで包み込むように着装されてその先端を狂三に向ける。そして琴里の周囲にまわりついていて焔が先端に吸い込まれる。

「わたくしたち!!」

それを見て良くないものを感じた狂三は自分の影から分身体を二人の間を遮るように出し、〈バスター〉を自分の周りに纏い防御の体制を作る。それと同時に〈灼爛殲鬼〉から凄まじい炎熱の奔流が吐き出されて狂三に向かつていき〈バスター〉と衝突した。

しかし、熱線とぶつかった瞬間、〈バスター〉はガラスが砕けるかのような音を出し砕けて消滅してしまい〈刻々帝〉<sup>ザフキエル</sup>の時計の『I』『II』『III』のあった箇所と狂三の左腕を消滅させて空へ消えていく。

屋上を覆う煙が晴れ、その事実を見た狂三はがくりと膝をついた。

「そ、そんな…こんな事が…」

すると狂三の心を表すかのように右手の〈バスター〉が赤く輝いて消滅し本来の腕に戻る。この力の源は狂三が生み出しているのでは無く蓮から吸収したものであるためその力が尽きてしまったらもう一度分けてもらうしかない。だが、今の狂三にはまるで見捨てられたかのように感じた。

「…銃を取りなさい。まだ闘争は終わってないわ」

琴里はもう戦闘を続ける事が出来ない状態の狂三を見ても大砲となった〈灼爛殲鬼〉を向けたままだった。もしもう一度あの攻撃を狂三が受けたら間違いなく焼き尽くされて狂三は消滅してしまうだろう

「それ以上やったら死んじまうぞ! 精霊を救うのが〈ラタトスク〉なんじゃないのかよ!」

土道もそうさせないため琴里に必死に呼びかけるがまったく耳を貸さず再び砲門に焔が引き込まれていく。だが、狂三は膝をついたまま動かない。

「そう…じゃあ死になさい」

まるでオモチャに飽きたかのように興味なく言った後、砲門から紅蓮の咆哮が放たれて狂三に向かつていく。その焔が狂三を呑み込む

瞬間…

狂三の目の前に突如氷の壁が現れて焰とぶつかった。壁は白い煙を出しながら受け止めて焰を消滅させる。

「一体何が…」

突然の出来事に土道や琴里はもちろん狂三すらも驚いている様子だ。すると空から剣が落下してきて氷の壁の正面の床に突き刺さる。

分厚い曲刀に側面の赤いパーツに刻んである綺麗な金色の模様…その剣はヘレツドクイーン<だった。

「あの剣は…」

土道はこの剣を持っている人物を一人しか知らない。その人物は空から降りてきて剣の柄頭に立った。

「やれやれ、最近では落ちて買って買物すら出来なくなるとは…物騒な世の中だと思わないか？土道」

「蓮!!」

制服の姿で両腕に青い色をした籠手へウイトリク<を装備した蓮がやってきた。その姿を見て土道の心に安心感が出てくる。

蓮はピョンとジャンプして床に立つと狂三の背後にある<刻々帝><sup>ザフキエル</sup>をチラリと見る。

（あれが狂三の天使か…どうやらこの狂三は今までは違うらしいな）

天使を使っている様子からこの狂三は特別ということを探した蓮は狂三を守るように前に立つ。今は狂三を死なせるわけにはいかない、自分の真実を知るたった一人の存在なのだ。そして…

（まさか、精霊だったとはな…司令官殿）

砲口を構えている琴里を見て心の中で呟く。この事を知った以上、詳しい話を本人から聞く必要があるようだ。とりあえず今はこの場を収める事が先決でそれは終わってからだが。

「聞きたい事はいっぱいあるが…とりあえずその物騒なものを下ろしてくれないか？狂三に死なれるのは困るんでな」

「蓮さん…なぜあなたは…」

「安静にしてろ。ここは俺がなんとかしてやるから」

狂三にそう言つて琴里の方を向くが、本人は砲口を下げずにずっと向けたままだった。目を細めて見ていると琴里の周囲を漂っていた焰が砲口に吸い込まれていく。

「やはりあなたは狂三の仲間だったようね。なら、今ここでその女と共に死になさい」

愉悦のような恍惚のような表情を浮かべて言う琴里に思わずため息が出てしまう。流石にこうなるとは予想出来なかったが、まあ確かにそう思われても仕方ないことをしたのだ。

「違つて言つても信じてくれそうにもないな」

諦め気味に言つた後、両腕を構えて戦う準備をする。だが蓮自身、こうなつたら以上ただで終わらせるつもりなどなくなつた。

「ただ…司令官殿。自分の言葉に責任持てよ？」

そう言つた蓮の表情は…笑つていた。それを見た士道は背筋がゾクリとするのを感じていた。

## 19話

仕方なしというような表情で両腕を構える蓮。しかし、先に動き出したのは琴里の方だった。

右腕の肘までを包み込む大砲のような砲口から熱炎の奔流が放たれて避ける暇すら与えずに蓮を呑み込んだ。

「蓮さんっ!!」

氷の壁に守られている狂三は凄まじい光に目を覆いながら悲痛の声を上げる。奔流が止んだ後、蓮がいた場所は煙に包まれていて無事かすら確認出来ない。

もしかして：そんな考えが狂三の脳裏に浮かんだ時、煙を裂くように何かジャンプして飛び出してきた。

その正体は蓮であり、その手には身長よりも長い青色の槍が握られていた。この槍はへウイトリクゝの能力で空気中の水分を集め、槍の形に凝縮したものだ。その槍を空中でクルクルと回したあとそれを思いつきり琴里に向かって投擲した。

「ふんっ。なめられたものね!」

琴里は鼻で笑うとへ灼熱殲鬼を【砲】から戦斧に変えて飛んでくる槍を叩き斬る。槍は当たった瞬間、バラバラに砕け散り空気に溶けるように消えていく。だが、蓮にとってそんなことはどうでもよく、むしろそうしてくれなければ困る。

床に着地した蓮は一気に加速して琴里との距離を詰める。その途中、両腕の籠手が稼動し剣の柄のようなものが出てくる。それを左右の手で抜刀すると、長さ四十五センチほどの小さな刃が姿を現し、それで琴里に斬りつけようとするがその寸前でへ灼熱殲鬼とぶつかり刃は届かなかった。

だが、そんなことは構わない。この状況こそが目的だったからだ。

相手は遠距離の高火力の武器を持っているに対して自分は強力な遠距離の武器は持っていない。なので最初の目標は得意の近距離戦に持ち込むことが大切だった。そこで役に立ったのは先ほど投げた槍であり、それで琴里に近接武器を使用させる事が目的であった。

一応避けられる可能性もあったのだが、今の琴里の状態ではその確率は低いと考えていたし、相手は精霊なのでもしかしたらあれほどの破壊力の攻撃を連射してくることもありえたが幸いそんな事は無かった。

懐に潜り込む事に成功した蓮は二刀流の剣を駆使して琴里に連続で攻撃する。琴里も〈灼熱殲鬼〉でガードして、隙あらば反撃しようとするが短剣二本の攻撃の方が戦斧より速く、腕などに素早く切り傷を刻んでいく。蓮も攻撃を身体を駆使して避ける事により剣と戦斧の力比べになる事を避けている。

「くっ…切り裂けー 〈灼熱殲鬼！〉

自分が劣勢だと感じた琴里は戦斧を構えてそう吠える。その言葉に不吉な予感を感じ取り琴里の頭を踏み台に後方に大きくジャンプして身を引く。その直後、刃が何倍にも大きく膨れ上がった〈灼熱戦鬼〉が琴里の周囲を薙ぎ払う。もしあのままだったら真つ二つにされた拳句、焰で灰にされていたかもしれない。

（ふう…なんてギリギリな…。ん？あれは…）

小さく息を吐き出す蓮だったが、琴里の傷口から舐めるように噴き出す焰を見て目を細める。焰が通った所は完全に完治しており傷痕すら残っていない。

（小さな攻撃はいくら重ねても無意味ってことか…。なら…）

〈ウイトリク〉の近接武器はあくまでおまけのようなもので、本命は水を強化して攻撃できる力なのだがその能力もあの焰の前には有効とは思えない。他には〈トラウイス〉を使うという考えもあるのだが周りは住宅街が広がっているので誰かを巻き込んでしまう恐れがある。だとしたら残された武器は一つしかない。

〈ウイトリク〉を引つ込めて蓮は歩き出す。そして屋上の床に突き刺さった〈レッドクイーン〉の前で止まると剣の腹を凄まじい脚力で蹴飛ばして空中に弾き飛ばす。回転しながら落ちてくる剣を空中でキャッチして剣先を琴里に向けた。

（徹底的に叩くまでだ…）

「蓮、待ってくれ！ 琴里は…」

それを見た士道が蓮に制止の声をかける。士道にとっては大切な妹が傷つく所をこれ以上見たくないし、この戦いも誰が勝利しても何もない無意味な戦いなのだ。だが、琴里はそう思っていないようで今も敵意を孕んだ瞳で睨みつけてくる。

「安心しろよ。俺は司令官殿を殺すつもりはないさ。この後聞かなきやならない事がごまんとあるんでなッ！」

言い終わると同時に一気に加速して琴里との距離を再び詰めて斬りかかる。それに反応した琴里も〈カマエル熱殲鬼〉で振る。二つの武器の軌道は互いにぶつかり合うコースであったが剣に限らず物がぶつかった場合、よりスピードがあり、重量がある方が押し勝つのが現実だ。速さはほぼ互角だが、この勝負は蓮の方が不利だろう。

〈レッドクイーン〉も重い剣なのだが、〈カマエル熱殲鬼〉の戦斧ほどの重さには敵わないしスピードが同じとなるとやはり負けてしまっだろう。だが、『女王』はそれを覆す。

剣と戦斧がぶつかる瞬間、〈レッドクイーン〉のグリップを素早く捻る。すると剣からエンジン音らしき音と炎のようなものが噴き出して〈カマエル熱殲鬼〉を弾き飛ばした。〈カマエル熱殲鬼〉に手を取られた琴里の身体は隙だらけだ。

その後、コマのように身体を一回転させ、剣で琴里の腹部を捉えるときもう一度グリップを捻ってパワーとスピードを底上げると、琴里は屋上の端まで一気に吹き飛ばされる。

「これで…って、まだやるのか？」

あれほどのダメージを受けても腹部の傷口に焔を纏わせながら琴里は立ち上がる。その根性は呆れるほどのものだ。

「生憎、俺はそろそろ飽きてきたんでな…悪いが終わらせてもらう」

蓮の右手が青く光ると〈バスター〉を纏う。そして、何を考えているのか左手に持った〈レッドクイーン〉を床に突き刺して前に出てきて手招きをし出した。琴里を挑発しているのだ。

それを見た琴里は歯を噛み締めると猛獣のような声を出しながら一直線に突っ込んでくる。その反応を見て蓮はほくそ笑む。

〈灼熱殲鬼〉を力の限り振り、蓮を焼き払おうとするが、身体を僅かに動かし紙一重の差で回避する。攻撃が空振り隙だけを晒す琴里の喉を右手で掴むと、床に叩きつける。

そのまま力の限り琴里をぶん投げた。なぜか土道の方向へ。

「え？」

いきなりの事に土道は理解出来ず、そのままボウリングのように衝突した兄妹は仲良く気を失った。

「悪い、土道。手が滑った」

謝っているとは思えない口調でそう言うと、狂三に向かって歩いていく。狂三を守った氷壁の前まで来ると壁をトントと軽く叩くと壁は空気に消えるように消滅して姿を消す。

壁が完全に消滅するのを確認したら、右手の〈バスター〉を狂三に向かつて差し出すと青い光が溢れて狂三の身体に吸い込まれていく。その光に触れた狂三は自分の身体に力が戻ってくるのを感じる。

「蓮さん…なぜわたくしを…」

「大人しくしてろって。すぐ終わる」

十秒程経過して光が治まった頃には狂三は完全に回復していたが、次の瞬間は蓮がいきなり倒れてきてしまい、狂三は慌てて抱え込むようにして支える。

「おおっと…悪いな、狂三。これをした後はいつもこうなるんだよ」

「なぜこんなことを…あなたは…」

「しばらくすれば立てるようになるさ。それよりお前はすぐにここを離れた方がいい。ASTが向かってくると思うからここは危険になる」

それを聞いて狂三は蓮を丁寧に床に降ろし、ペコリとお辞儀をした後影に吞まれて消えていった。狂三が逃げたのを確認して小さく安堵の息を吐いて、〈バスター〉と〈レッドクイーン〉を引っ込め土道達を見る。二人はまだ気を失って床に倒れている。

「これは…少しやり過ぎたかな…」

自分でもそう思うのだが、あの時はなんだか身体中に力が溢れて止めようと思ってもなかなか止める事が出来なかった。おそらく琴里

が精霊だと知ってある事を聞けると思い興奮していたがからだと思うが、それだけが理由だろうかは分からない。

だが、もう過ぎた事だと思い、蓮はその疑問を捨てゆっくりときちなく立ち上がった。

夜十時、蓮は自分の家の寝室のベッドの上で仔猫を優しく撫でていた。

あの後、琴里、士道、十香はへフラクシナスへ折紙、真那はASTに回収されたのを確認して仔猫の日用品を買った後ここに帰ってきた。できればすぐにでも会いに行きたい気持ちがあるのだが、今日一日で多くの事が起こり過ぎた為、会いに行くのは明日以降にすべきだと判断した。

だが、蓮の一日はまだ終わらないようだ。

「居るんだろ？狂三」

ベッドから降り、自分以外人影がない部屋にそう呼びかけた。すると電気も点けず月明かりだけが照らす部屋の中に真っ黒な影が現れて中から黒と赤の霊装を身につけた狂三が姿を現す。

「あらあら、なぜわたくしが居ると分かったのですの？」

「お前の性格から考えると、このまま放置ってのはないと思ってるな。今日の夜にでもまた来ると思ってたんだよ」

家の場所も知っているしな。と付け加えて説明する。狂三はそれを微笑みながら聞いている。この状況は前に狂三が夜に来たのとまったく同じだが蓮の心境はまったく違うというのが不思議な所だ。

蓮が説明を終えるとベッドの上に居た仔猫が狂三に気づいて鳴きながら足元へ擦り寄って来た。狂三が抱え上げるとペロペロと顔を舐め始める。

「ふふっ、くすぐりたいですわ。この子は？」

「うちの飼い猫。捨て猫だったんだけどお前のおかげで出会えた。名前は『クルミ』からとって『ミルク』って名前だよ」

「わたくしのお名前とは、それはとっても嬉しいですわね」

狂三舐め続ける仔猫改めミルクを狂三から受け取った蓮は、寝室の



ドアを開けて外にミルクを外に出す。あとは勝手に自分の寢床があるリビングに行つて眠るだろう。仔猫なのにとっても賢いのだ。

「で？ 何かあるからここに来たんだろ？ 何をしに来たんだ？」

さつきまでの雰囲気から変わり、真剣な表情で言うと、狂三は歩き出して蓮のすぐ前で停止する。室内が月明かりだけなので表情がよく見えないがなんだか顔が赤い気がするのはいのせいだろうか。

「…実は昼間のお礼をしたくて参りましたの。この件で蓮さんに渡したいものがあるのですが…どうか受け取ってもらえますか？」

「え？ まあ、もらえるものはもらう主義だが…」

「そうですか…ではわたくしが良いと言うまで目を瞑っていて欲しいですわ」

やや緊張気味に狂三は言うど、目を瞑っていて欲しいと頼んで来た。いきなりの頼みに疑問を持ったが、少なくとも至近距離で顔に銃弾を撃ち込まれることはなさそうなので言われた通りに目を瞑る。

それから三十秒ほどの時間が経ち、ただ渡すだけなのになぜこんなに時間が必要なのが気になり始めた頃。

「…め、目を開いても構いませんよ…」

そう聞こえ、目を開いて狂三を見るがすぐに顔を別の方向に向けて目を逸らしてしまう結果になった。

その理由は目を開いた時、狂三は霊装を解いて一糸纏わない姿で目の前に居たからである。つい反射的に顔を逸らしたが一瞬だけ見た狂三の姿は網膜に完全に焼きついていて頭から離れない。

真っ白な肌が月明かりに照らされて幻想的な美しさを放ち、綺麗な曲線美のくびれ、そして恥ずかしい表情をしている狂三の人外とも言える容姿。このような状況は初めてというわけではないが相手とい、この見せ方といい不意打ちもいいところで、ついこんな反応をしてしまった。

「ど、どうしたんだ…いきなり…」

できる限り動揺を出さないように話すがそんな考えが無意味と言わんばかりに落ち着いて言葉が出てこない。当の狂三はその問いには答えず蓮の顔の両頬を両手で添えるように掴み、無理矢理正面に向

かせると…

その唇にキスをしてきた。

「……………ッ!!」

突然の狂三の行動に目を見開いて驚くが、唇が塞がれている事と頭の中が混乱している事が重なり言葉がまったく出てこない。不思議なことに身体には力が入らず狂三のされるがままになりベッドに押し倒される。だが、数秒もすると蓮は目を閉じて狂三に身を委ねた。

それから一分以上の長いキスを終えて、唇を離れる頃には二人とも息が乱れていた。

「ハア…ハア…これがわたくしの渡したいもの…ですわ」

うつとりとした表情で言う狂三。その狂三を見て蓮は気になったことを問いた。

「狂三…なんでそんなに…俺にこだわるんだ…？いつから…こんなに思いを抱いたんだ？」

「それは…一目惚れ…だったと思いますわ…」

「一目惚れ？」

一目惚れ…特定の異性を見た時、夢中になる事だがそんな意味は蓮も知っている。分からない所はいつ一目惚れしたかだが、あの時の公園での出会いでは狂三は知っている口調だった。

「わたくしも女ですもの…一目惚れぐらいしてしまいますわよ」

狂三はベッドに倒れた蓮に抱きついて来る。狂三の柔らかい感触を感じながら静かに目を閉じる。初めての出会いは異常だったがたった今、それを覆して蓮も狂三を抱きしめる。

そして、この部屋に嬌声が響き渡ったのはこれから数分後であった。

## 20話

時計の短針が右側に傾いた時間。

蓮と狂三は同じベッドに入っており共に服は来ていない。蓮は昼間の疲れからかぐつすり眠っており、狂三はそんな蓮を微笑みながら見つめていた。

改めて見ると本当に綺麗な顔をしている。もし、呼吸による胸の上下が無かったら人形だと言われても誰も疑わないだろう。そんな蓮の首元に腕を回して自分の胸元に抱き寄せて優しく包み込む。

ずっとこの時を待っていた。ただ思い出すだけではない、こうやって見て、触れて、触る事ができる。それだけの事が狂三はとても嬉しかった。

「刻々帝」…」

蓮を抱きしめながら小さくそう呟くと部屋の中に巨大な時計が出現して空中に留まる。そこから短銃を取り出して宙に掲げた。

「刻々帝」…」【十の弾】

すると時計の『X』の部分から影が滲み出して短銃の銃口に吸い込まれる。それを確認した狂三はその銃口を寝ている蓮のこみかみに当てて少し躊躇いがちに引き金を引く。

だが、銃に撃たれたというのに蓮から血は出なく、それどころか銃痕すら無かった。

狂三が撃った「刻々帝」の【十の弾】、その性質は撃った対象の過去の記憶を狂三に伝える力があり、それを蓮に撃ったということは今までどのような人生を送ってきたかが分かるのだ。

撃った瞬間、今までの記憶が狂三に流れ込んで来る。彼の今までの喜び、悩み、そして…悲しみもすべて。

そして、一番最古の記憶…蓮にとっては始まりとも言える時間が見えてくる。そこには三十代ほどのくすんだ銀髪の男性がベッドに座った幼い少年の頭を微笑みながら撫でており、その男性はこう言った。

『今日から君の名前は…』だ。そして、私も君の家族の一人

になろう』

まるで洗脳のようにも聞こえる言葉にそれこそ少年は“神”でも見るかのように目をして、こくりと頷く。それが始まりの記憶であった。

「これは…ッ！」

その記憶を読み取った狂三の目に涙が溢れ出す。ASTにいる時点でまさかと思っていたが、蓮はもう人間の持つ欲望にすでにとらわれていた。本人すらその事に気付かずに。

「遅かった…ようですわね。でも…必ずあなたを救います…必ず…」

改めて蓮をしつかり抱きしめる。始めは敵意を抱かれても、今は心と身体は一つになり通い合わせる事が出来た。その奇跡が再び起こることを強く願いながら狂三は目を閉じた。

「しかし…蓮さんはわたくしと会う前から、随分と女性に好かれていたようですわねえ」

「う…ん…」

いつも通りの朝。普通、蓮は自分でゆっくり起きるか、ミルクに顔を舐められながら起きるかだったが今日はどちらでも無かった。

なんだか暖かい熱が伝わってきて、誰かに包まれているような感覚がする。今までは感じた事はない感覚だが悪くないと思う。

この正体がなんだと思ひ、目を開ける。すると目の前には肌色が広がっており、視線を上に向けていくとそこには幸せそうな顔で眠っている狂三の顔があった。

(狂三…!? なんでもこんな状況に…?)

冷静に考えてみると狂三は自分を抱きしめながら眠っていた。蓮は寝相が悪くないのでそのせいで狂三の腕の中に飛び込んだとは考えにくい。となると狂三が寝る前に自分を抱きしめたとはしか考えられない。

前から思っていたのだが、狂三は自分に対して過度な愛情を抱いているように感じるのだ。まだ出会って半年も経過してないというのにこんな感情を一目惚れで抱くものなのだろうか。まあ、欲望を孕ん

だ考えて近づいてくる人間と比べれば狂三の方が何倍も嬉しいし気持ちに応えてあげたくなるものだ。

「ううん…蓮さん…ダメですわよお…そこは…」

寝言だろうか、狂三がやたら色っぽい声で呟いた言葉に、夢の中で何をされているんだと思っただがそれを確認する手段はない。改めて考えると朝、起きたら隣で一糸纏わない美女が自分を抱きしめながら寝てたというのは男の願望の一つとも思えてくる。

もし、クラスメイトの男子に向かって『朝、起きたら狂三が自分を抱きしめながら全裸で寝ていた』なんて言ったら相手は血の涙を流すレベルではないほど悔しがつてくる事が予想できる。まあ、言うつもりなど微塵もないが。

狂三の腕から逃れ、周囲に散らかっていた自分服を着て、寝室を出る。リビングに到着するとミルクが出迎え、ニヤーと小さく鳴く。

「よしよし、ちよいと待ってろよ」

ミルクのエサ皿の中に昨日ペットショップで買ってきたフードを入れて床に置く。すると一直線に向かってきてガツガツと勢いよく食べ始める。その光景に小さく笑い、水の入った皿も用意したあと、蓮はカップを二つ用意してコーヒーを作り始める。

コーヒーを二人分作り、カップを持ち、寝室へ向かう。寝室では狂三が上半身を起こして眠たそうに目を擦っている。ついさつき起きたようだ。

「おはよう、狂三」

「ん…おはようございます。蓮さん」

狂三は眠たそうな顔をしながら蓮の差し出したカップを受け取り一口飲む。

「あら、とても美味しいですわ」

「そうか…それは嬉しいな」

この世に自分の作ったものに対して良いと言われて嬉しくない人間などほとんどいないだろう。当然、蓮もその例に漏れない。嬉しそうにしながら自分もコーヒーを飲む。お互いのカップが空になった頃、狂三はある事を蓮に言ってきた。

「蓮さん…よかったら、わたくしとともに来てくれませんか？」

それは蓮と狂三の駆け落ちを意味していた。愛する人とともにこれから生きる…。人間にとって幸せの一つと言えるだけの価値はあるだろう。

「来てくれないかって…狂三はどこに行くつもりなんだ？」

「あなたと二人で居られる場所ならどこでも構いませんわ。誰もいない自然の中で二人だけでずっと、ともに生きていくような事でも…」

自分を愛してくれる人二人きりで生きていく…。蓮もこの事はとても幸せな事だと思う。だが、すでに答えは決まっている。

「…残念だが、俺は自分の正体を知って、やるべきことを終えるまで逃げるわけにはいかない。それに…俺が消えたら十香達が悲しむ」

その答えを聞いて残念そうに顔を俯ける狂三。狂三にはこの答えがどうしても理解できなかった。

「あなたは…あなたは何故、そこまで人との関わりを続けるのかがわたくしには分かりませんわ。その身体や心は誰からも理解されず、ずっと孤独を味わい、本当の名前さえ、自分から他人に話したことすらないというのに…」

「狂三…まさか、俺の本名を…ッ！」

「はい…失礼を承知であなたの記憶を見せてもらいましたわ」

「そうか…どうやったかは聞かないが、その通りだよ。でも、そんな俺にも”守りたいもの”ができた。それらを見捨てることは出来ない」

「そう…ですか…」

「でも、俺のやるべきことが終わったら、狂三とそうなってもいいかな…」

今はダメだが、いつかそのようになるのも悪くない…そのような意味を込めて蓮は言う。狂三は俯いていた顔をゆっくり上げる。最初はポカンとした表情をしたがやがて嬉しそうな笑顔になる。

「約束ですわよ。もし、嘘だったら承知しませんから覚悟してくださいまし」

「約束さ、そんでこれが…」

そこまで言い、狂三のところまで行くと両手で頬を包み、キスをす

る。

「これが指切りの代わりだ。これで信じてくれるか？」

狂三は答えず、身体を蓮に預けるようにもたれかかってきた。お互い理解されない者同士の傷の舐め合いとは思いたくない。蓮にはこの感覚はただ心地良かった。

「蓮さん…最後にお聞きしたいことがありますわ、あなたはここに来て、妙な事はありませんでしたか？」

「妙なこと？」

狂三の奇妙な質問の意味がよく分からず、ついオウム返しで答えてしまう。

「妙な事ならたくさんあるが…そうだな、強いて言うならここに来てから毎日同じ夢を見ていた時があっただよな」

「同じ夢…ですか？」

約一年ほど前、初めてこの天宮市に来て、この家を見た後、すぐに世界へ飛び立った日から毎日寝ると気味の悪い夢を毎日見たことを狂三に説明する。だが、この夢もいつの間にか見なくなっており、詳しい時まで覚えないが確か十香の霊力を封印した四月頃から見なくなった気がする。

「そう…ですか…そんな事が…」

狂三は話を聞いた後、そう小さく呟いた。その時の狂三はまるで何かの確信を得たような様子に見える。

それから数時間後、蓮の携帯にメールが来た。その相手は令音からで、その内容は『琴里が目覚めたから会いに来てくれ』とあり、お見舞いに果物を入れた袋を持ち、狂三と別れてへフラクシナスへ向かった。

「ん…来たか…」

〈フラクシナス〉に入って最初に出迎えたのはメールを送ってきた張本人である令音だった。

「司令官殿が目覚めたって書いてあったから、会いにきた」

「私について来てくれ。案内するよ…」

そう言つて令音は歩き出す。琴里を痛めつけたので、何か言われるのではないかと少し気にしていたが令音の様子を見る限りそんな怒っている様子ではなさそうなので少し安心した。まあ、令音が怒っているところなどまったく想像出来ないのだが。

しばらく歩き、あるドアの前で止まり、横にあつた電子パネルに番号を打ち込み、手のひらをかざし、最後に声紋認証を終えると左右にドアが分かれて開く。

その部屋は手前と奥がガラスで仕切られており、奥は普通の部屋のように内装が整つていて琴里は家具の椅子に座つていた。こちらが入つてきてもなにも反応しない所から推測するところからはガラスに見えるが琴里側から見るとだだの壁にしか見えてないのだろう。「…琴里が君と話したがつていてね。呼んできてくれつて頼まれたのさ」

令音は琴里のいる部屋への入り口のようなところに立ち、さつきと同じ手順をして扉を開ける。

「…やつと来たわね。まったく、女性<sup>レディー</sup>を待たせるなんてマナーがなつてないわ」

「そいつは悪かつたな。お詫びに果物を持ってきたから許してくれよ」

蓮は琴里の向かいに置かれた椅子に座り、袋からオレンジと果物ナイフを取り出して皮を切り始める。

「……………」

「……………」

蓮が作業を開始するとお互い沈黙してしまふ。琴里は聞きたいことがあるはずなのに喉に小石が詰まったように言葉が出てこないのだ。しかし、意外にもこの沈黙を最初に破つたのは蓮だった。

「どうしたんだ、俺に言いたい事があるから呼び出したんじゃないのか?」

「あら、女性に言われるなんてそういう趣味でもあるの?」

「俺も言いたい事があるけどレディーファーストだよ」

そう言つて皮に包んだオレンジを差し出してくる。皮は上から半



分ほどしか切っていないが実はしつかり切り分けてあり、食べると言いたいのだろう。琴里は実を一つ摘み取る。

「じゃあストレートに聞かぬわね。あなた、何者なの？」

「あんたの兄貴の同級生」

「誤魔化さないで。真那から話は聞いているの」

真那の名前を聞いた途端、蓮の視線が鋭くなる。琴里はこの反応を見て蓮と真那はなにかしらの関係があると予想した。

「へえ…真那と会ったのか、それで何を聞いたんだ？」

「昨日、真那と話してた時、相手がうっかり口を滑らせたのよ。DEM社は蓮の家だ…つてね」

そこまで聞いたのならもう誤魔化すのは無理のようだ。そんな諦めな気持ち心が心に浮かぶが同時に自分の本当の事を琴里に話すことが出来るということに喜びを感じている自分がいた。何故そんな気持ちが出てくるのかは分からない、だがきつともう自分を偽らなくていいという嬉しさなのだろう。

「…分かった。これからその言葉の意味を話すよ、ただ、これだけは頭に入れたい欲しい。これから話す相手はヘラタトスクじゃない、五河琴里と村雨令音の二人だけだ。それだけ理解して欲しい」

組織に向かって話すのではない。これから二人の人間…琴里と令音に話すと蓮は言う。この理由はまだヘラタトスクには知っていることよりも知らないことの方が多いので、まだ完全に信用できるとは言えないのだ。

「…分かったわ。令音もそこについて聞いているでしょうし、話を始めて構わないわよ」

「OK、まずどこから話そうか…そうだな…」

少し悩んだが、自分自身について知ってもらおう必要があると思いい、まずは生い立ちから話す必要があると考えた。

「…俺は、幼い頃、DEM社に拾われたんだ…」

## 21話

「DEM社に拾われたって…あんた何があったのよ…」

「さあな、俺の一番最初の記憶は白いベッドで寝ていたところだったから分かん」

自分の最初の記憶は白いベッドの上で寝ていたところからであった。起き上がり、周りを見てみると何処かの医務室のような場所か何か自分は病衣らしきものを着ていて、こんな所にいるのか思い出そうとしても、まるで記憶がスッポリと抜けてしまったように全然思い出せなかった。

「あんたの記憶って…いきなりそんなところからなの…？」

頬を引きつらせながら琴里は言う。確かに急な話だと思いかもしれないが本当の事なのでそれは仕方のない反応だと思う。

「まあな。それで、しばらくベッドにいたら部屋のドアが開いて女性が入って来たんだよ。相手は俺を見て結構驚いてな。なんで自分はここにいるんだって聞いたら道端に倒れていたらしい」

帰る場所が無いので、蓮の身柄は一時的にDEM社預かりになった。倒れていた時、体温が四十度もあり丸二日間目覚めなかったらしく、その患者が起き上がったのが女性の驚いていた理由らしい。念のため、様子を見るためにしばらくはベッドの上での生活になった。

だが、ベッドの上であったが退屈はしなかった。言葉を通じていたため、何か欲しいものを頼めば持つて来てくれたし、落ち着いた頃には同行者がついていて外に散歩することも許してくれた。外に出た時、ロンドンの町並みがとても綺麗だったのを今でも覚えている。「それから二週間経過したんだけど、結局、俺の親は見つからなかった。DEMも努力してくれたらしいけど…」

当時の蓮はまだ十歳にも満たない子供、親も家も無い状況でどうやって生きていけばいいかすら分からず、普通だったら孤児院送りにされていただろう。だが、捨てる神いれば拾う神いるとはよく言ったものだ。

「そんな時、DEMから俺に提案があったんだ。それは…よかったら

「ここを家にしないか、っていう提案だ」

「DEMがそんなことを…?」

琴里は顔を顰めた。DEMは身元が分からない子供を引き取り、育ててあげるなんて善意溢れる会社などではない。それに、入院してた時の話を聞くとかなり蓮を不自由させないようにしていたようだ。繰り返すが身元が分からない子供を、である。

「その提案を受けてDEMでの生活を始め、戸籍上での親も出来た時、俺はあるものに興味を持ったんだ。それは司令官殿、あんたも知っているものだ」

「まさか…それって…」

蓮がASTにいること、そして、DEMは表向きは電子部品の開発と製造をしているが裏では何をしているのかを知っていると答えは出てくる。

「そう…CRユニット、リアライザ顕現装置と呼ばれているものだ」

それを見た時、心の中に孤独の寂しさを吹き飛ばすほどの興味が生まれた。何故、それほど興味を引いたのかは分からない。ただ、CRユニットについて知りたい、その思いだけが心を満たしていた。「知りたいって言ったら、優秀な先生が仕組みについて教えてくれてね。すべてって訳じゃないけど、自分で満足するものを設計出来るほどのレベルまでは」

「……………ッ!」

もはや言葉が出ない。もしかしたら目の前にいるこの男はもしかしたら、とんでもない存在なのではないかと琴里は考え始めた。

「その頃だったかな。自分の体の異変に気づいたのは…」

ある日、自分の背中と右腕に異変を感じた。なんだが背中と右腕が重く、違和感を覚えたのだ。これがなんなのか集中して考えているといきなり赤い剣…のちにヘッドクイーンと青い右手…へバスターと名付けるものが突然現れた。

「いきなり出てきた時は驚いたよ。まあ、幸いにも周りには人が居なかったんだが、一人で抱えきれない問題じゃなかったから、嫌われるリスクを背負って、この事を自分が最も信用出来る人達に言ってみた。

すると相手は驚きながらも、『大丈夫。気にしなくていいんだよ』って笑顔で言ってきたね。その時は嬉しかったよ」

懐かしそうに語る蓮。だが、琴里はその話を聞きDEMが蓮を拾った理由を推測だが分かった気がする。

まるで気にするような感じもない言葉…DEMは最初から蓮の体のことを知っていたのだろうか。

やたら優遇した処遇をしたのも蓮が消えては困る理由が何かあるのだろうか。

「でも、せっかく教わった顕現装置リアライザは今出来るだけ関わるのを控えているんだけどね」

その理由は簡単だ。十香達…精霊という存在を知ったからだ。自分は他人に優しい性格などではないと自覚しているが、自分の欲求を満たすためだけに何も知らない者を傷つける事は嫌だった。それを知った後は顕現装置リアライザではなく別の物を使い、DEMに奉仕し始めた。

「そして一年前、日本に休暇と世界を見るっていう理由で来たんだが…予想以上に様々な経験を俺に与えてくれたよ。例えば…」

蓮は食べ終わったオレンジの皮を摘み、自分の後ろに放り投げた。すると皮は空中で一瞬で凍りつき、バラバラに砕け散って空気中に消えた。これには琴里だけでなく、外で見ていた令音も目を見開いて驚く。

「こういう事とかな」

「い、今…一体何をしたの…？なんでそんなことが…」

「なんでかは分からない。土道が四糸乃の霊力を封印して、四糸乃に触れたら出来るようになってた」

琴里とは対照的に冷静な顔で言う蓮。今思えばとてもおかしな事になったと自傷気味に思う。最初は自分が精霊と接触するためだけに利用しようと思ったのだが、土道、琴里、十香、四糸乃と自分にとって大切と思える人と出会い、そして今、秘密の一つである過去について話している。それがとても可笑しく…そしてとても面白く感じた。

「それで、真実を知った上で俺をどうする？DEMはヘラタトスクとは違い、精霊の殲滅に積極的な組織だ。もしここで死ねって言われて

も反論する事が出来ないんだが…」

「いいえ、あんたはもうヘラタトスクの一員よ。それならもう家族も同然だから、殺したり、追放したりする気は無いわ。それにあんたはもう、二人の精霊を助ける手助けをしたじゃない」

琴里の真っ直ぐな言葉に甘いな、と思ったがそれが琴里の良さでもあるのだろう。そんな所が本当に羨ましく見えてくる。

「…最後に聞きたいことがあるんだけど、あなたはどのようにして学校の屋上に来たの？」

蓮にはある容疑がかかっていた為、狂三の攻略の事を教えてはいなかった。なのになぜ屋上で戦っている事が分かったのかが分からなかった。

「…四月十日、この日、俺は士道、ヘラタトスク、そして…精霊である十香と初めて出会った。そつちもその瞬間を見てたらしいな。だが、俺がああ場所にいたのはただの偶然ではなかったんだ。空間震が起こる少し前、誰かに呼ばれる感覚がして、その方向に行ったら十香と出会った」

「…ッ！ つまり、あなたはこう言いたいのか？」

精霊の存在を感じる事が出来るよ」

「それが、あの屋上に来れた理由だよ」

嘘を言っているのかと考えたが、それが本当であれば十香の所に居た事も屋上に来た理由もすべて納得がいく。

「俺は最近、精霊と呼ばれる存在について、詳しく調べている。すべては自分を知るためだ。だから、精霊であるあんたに問う。精霊とは一体なんなんだ？」

普段とは違う。真っ直ぐに琴里を見つめ、真面目な表情で聞く蓮。だが、琴里は顔を横に振った。

「残念だけど、私は最初から精霊じゃないわ。五年前、なったという表現があっているわ」

「それは…どういう意味だ？」

「細かい事は覚えてないわ。ただ、その事だけは覚えているのよ」

「そうか…」

そう言うと、席を立ち、入ってきた扉へ向かう。これ以上聞いても何か聞き出せそうになく、自分の聞きたいことだけはしつかり聞くことが出来た。結局真相は不明のままだった。それが仕方ない事だ。「手荒かったけど、一応言っておくわ。私を止めてくれてありがとう。あの時の私は自分で自分を止められない状態だったから…。あとD E M社をあまり信用しない方がいいわ。これは警告よ」  
帰ろうとする蓮の背にそう言い放つ琴里。振り返りどういう事だときいても「さっさと帰りなさい」といって疑問に答えることは無かった。

部屋を出るとそこには令音が待っていた。

「…君は普通の人間ではないと思っていたが、そんな過去を持っていたとはね…」

相変わらず隈だらけの目で見つめてくる。いつも思うのだが、令音はどうも表情というか何を考えているのかがよく分からない。今も驚いているのか、そうでないかすら不明だ。

「自分の過去をこうやって話したのは初めてだよ。まあ、信用されていると受け取ってもらいたいね」

「そうか…琴里とシンのデートはこれから二日後にしてもらう予定だ。場所はまだ未定だが…決まり次第、連絡させてもらおうよ。君も気になるだろうからね」

令音の言葉に「了解」と答えるとこのまま部屋を出て行く。出て行く蓮の背中を令音はジツと見つめていた。

蓮の家はそこその大きさである。大きいといってもあくまで一般人から見たら”という意味であり、金持ちの持っている屋敷ほどの大きさはなく、高校生の子供一人と猫が一匹住むには十分過ぎる大きさがある。

そんな家の地下室、隠し部屋とも言える場所に蓮はいた。その部屋は部屋の大きさ自体はたいしたことないが、部屋中に機械や電子機器が散乱しており、その部屋の光景はお世辞にも普通とは言えない。

蓮はそんな部屋の机に座り、パソコンのキーボードをカタカタと叩

いている。画面には何かの設計図らしき物が映っており、キーボードを叩くたびに設計図に新たな文字が加わっていく。

「ふう…こんなもんで十分か…」

小さく呟くと設計図のデータを保存したUSBメモリを引き抜き、近くにあったPDA（携帯情報端末）を手に持ち、画面を見ると、最初に現れたのは『着信あり』という通知だった。その数、なんと二十件。

蓮は小さく舌打ちすると、纏めてすべてのメールを削除、消去する。だが、今日来たのはメールだけではないようだ。

友好的ではない赤い通知、それは今まで通り自動で対処され、相手のサーバーに反撃を与えた証だった。それを見るたびにため息のしかたなる気分だ。

そんな気持ちでPDAにUSBメモリを挿入してデータをDEM本社に送る。これで、後はあつちの人間が勝手に開発を進めてくれるだろう。

仕事が終わりに、身体を伸ばしてリラックスする。

そして、椅子にもたれかかり、意味もなく部屋の天井を見つめる。

その顔は僅かに笑っていた。

「…いつか、なくなってしまうのなら、最初から何もいらぬ…。そう思ってたんだけど…それでもなかつたかな…カレン」

ふと漏らした独り言は、他の誰かの耳に入る事なく消えていった。

「ああつもう…忙しい…」

次の日、駐屯地を訪れた蓮は大量の端末と格闘していた。

その理由はDEMから配備される試作機、〈ホワイト・リコリス〉についてやるのが山ほどあるからだ。普段のCRユニットの整備ですら決して楽とは言えない苦勞をしているが、それよりも大きく、複雑な機体となるとどれほど苦勞するのかは想像に難しくない。

「大変そうですねー。蓮はー」

笑顔でそう言ったのは、近くにいた整備主任のミリイだ。主任なのだ、ミリイは蓮と比べて明らかに負担が少なく、楽そうに見える。

「お前はここの主任だろうが！なんで俺より楽そうなんだよ!？」

「そりゃあ、ミリイがやるより蓮がやった方が効率良い作業があるからですよー。いやあ、もうすぐ一家に一人、蓮の時代が来るかもしれないよ」

「お前…後で覚えてろよ…」

蓮がそう言うのと、ミリイはハツとした様子で俯き、何かブツブツと呟き始めた。なにを言っているのか気になり、耳を傾けて見ると…

「まさか…後で物陰に連れて行かれ…無理矢理組み伏せられ…『さあ、お仕置きの時間だ』…蓮はそう言うのとミリイの首筋に舌を這わせて…服の上から優しく胸を揉んでくる…初めは恐怖によつて出た声は…いつの間にか色っぽい声に変わっていき…ミリイの身体をある程度堪能した後、指をズボンにかけて…誰にも見せたことのない乙女の秘所を…：…ああ…ダメですよ蓮！ミリイは初めては優しく！ベツドの上でえ！あ、でも蓮になら激しくされてもお!!」

勝手に盛り上がるミリイ。一人でそこまでテンションを上げることが出来る彼女を、蓮は呆れを通り越して羨ましく思いながら、手に持った端末に視線を向けた。



## 22話

結局、琴里と士道のデートの場所は「ヘフラクシナス」の隊員で話し合いをして、士道の意見である琴里の行きたいと言っていたオーシャンパークが採用されたと言音から連絡が来た。

蓮も気になるかと聞かれればそうなのだが、もし誰かに背中を見られ暴力団と間違われてしまったらデートどころではないし、プール側にも大きな迷惑がかかってしまうのでついて行くのは辞退した。

（だからってデートしている日になんでこんな事してんのかねえ）

デート当日、蓮は「ホワイト・リコリス」の整備をしていた。周囲には整備士は一人もいない。自分の集中の邪魔になるので休憩してもらっている。

「ふう…これで大丈夫かな」

作業が終わり、小さく息をもらす。動ける状態にしたのはいいのだが、使う筈の真那は狂三との戦闘により、今は病院の世話になっているので動かす人間は誰もいない。もともと真那以外にここにはこれを動かすことのできる人間などいないだろう。

作業を終えた直後、ドアが開いて人が入ってきた。その人物は…

「ん？ 鳶…？？」

「神代…蓮…」

入ってきたのは鳶一 折紙だった。狂三との闘いで怪我を負って入院していたと聞いていたが、退院したようだ。折紙は「ホワイト・リコリス」の前まで歩いて来て機体を見つめる。

「これは稼働が可能な状態？」

「ん？ まあ、さっき作業が終わって動かせる状態だが、お前には動かす資格もないし、技量的にも無理だぞ」

理解していると思うが、一応警告気味に言う。仕事はもう終えたので自分も休もうとした瞬間。

「ぐううっ!!」

急に身体をとてつもない重力が襲い、床に這いつくばった。蓮にはすぐに分かった。これは「随意領域」によるものだ。

顔を折紙の方向に向けると、そこにはワイヤリングスーツを着ていた。さつきまでは私服だった事を考えると、緊急着装デバイスを使用したのだろう。

「ぐっ…：一体なにを…」

「あなたにはすまないと思う。だけど、私はこれで五河 琴里を…：ヘイフリート」を殺さなくてはならない…。それが私の生きてきた意味であり…：私の両親の仇…：！」

折紙の言葉に目を見開く。確かに折紙は言ったのだ、ヘイフリートと。その名前は精霊である琴里の呼ばれている名称だ。それに両親の仇とはなんなのか聞きたいが、凄まじい重力により動くどころかまともに喋ることすら出来ない。いくら蓮であっても随意領域テリトリイの中を動くことは不可能だ。

結局、蓮が動けるようになったのは折紙が「ホワイト・リコリス」を随意領域テリトリイを使って出撃準備を整え、飛びだった後だった。

やっと自由になった身体を起こし、じっくり考える。琴里を殺すと折紙は言っていた。だとしたら向かうのは土道とデートしているオーシャンパークだろう。そう考察した蓮は基地の廊下を走りながら、ポケットから携帯電話を取り出して電話を掛ける。幸いにも相手はすぐに電話に出てくれた。

『はーい。蓮大好きのミリイですよー。どうしたんですか、蓮。あつ！もしかしてミリイをデートに誘って…』

「ミリイ、よく聞け。〈ホワイト・リコリス〉が強奪された。お前は現場の後処理を頼む」

『ええ!?それってどういう…』

蓮はミリイがすべて言い終わる前に通話を切った。とりあえず自分のやって欲しい事だけはしっかり伝わったなら、それで十分だ。携帯電話をポケットにしまい、基地の出口に向かっていく。

（復讐か。そんな事、前にも言ってたな。どんな想いを抱いてようと、言葉にすれば軽いもんだが…）

基地内の廊下を走りながら、まったくとばかりに顔を顰める。ここからは時間との勝負だ。琴里が折紙に殺されるのが先か、それとも自

分が駆けつけるかの…。

「折紙！止めろ！止めてくれ！」

「ーッ、土道。邪魔しないで」

オーシャンパークの遊園地の敷地内で、〈ホワイト・リコリス〉を装備した折紙と土道は対面していた。土道の後ろには霊装を纏った琴里が随意領域テリトリに閉じ込められていて、苦しそうに身を振っている。

「あなたには、言ったはず。私は両親の仇を討つために生きてきた。五年前、あの炎の街を駆け抜けてから、私の人生は…命はこのためだけにあった…炎の精霊、〈エイフリート〉を…五河 琴里を殺すことが私の存在理由」

「そんなの…そんなのダメだ！その引き金を引いたら…お前はもう戻って来れなくなる…！俺は…そんなお前を見たくない！」

「それでも構わない…両親の仇を討てるなら…！」

土道の説得を聞かず、鋭い視線を琴里に向ける折紙。

その時、どこからか飛んできた巨大な氷の氷柱が〈ホワイト・リコリス〉にぶつかり、機体を大きく揺らした。

「くっ！一体何が…!？」

折紙がそう呟くと同時に、土道の前に空から人影が降りてきた。その格好は折紙の見慣れたASTの作業着を着て背中に大きな赤い剣を背負った蓮だった。

「よっと。土道、悪いな。デートの邪魔して、すぐに終わるから少し我慢してくれ」

「来てくれると思ってたよ…でも、琴里を守ってくれるのか？」

蓮はAST。精霊を殲滅するのが目的の組織の一員だ。本来なら折紙の味方としても土道の味方になることはないはずなのだが…

「まあな。〈エイフリート〉は妹思いのお兄ちゃんと近親相姦ギリギリなデンジャラスなデートをしているところを、攻撃された可哀想な被害者…ってことにしておくよ」

「ブウツ…！お、お前！なにを言って！」

「土道、お前はどうしたいんだ？この現場をどのように収めたい？」

顔を見せず、背中を見せながら蓮は士道に問いかける。もちろん、士道はどのような答えを出すかなど、当然分かっている。だが、蓮は実際に士道の言葉でそれを聞きたいと思ったのだ。

「くっ…俺は…琴里に死んで欲しくない…そして、折紙に琴里を殺して欲しくない…だから頼む！俺に力を貸してくれ!!」

「いい答えだ！五河 士道!!」

蓮は琴里の周囲の随意領域テリトリの温度を下げていくとやがて凍りついていく。凍った空間を強く殴るとバラバラに砕け散って消滅する。士道は琴里を抱えてここを離れていく。

「神代…蓮…!」

「無駄だと思うが忠告しておく。お前がしている事は立派な軍記違反だ。今すぐリコリスを止めろ。これ以上動かせば、お前の脳は耐え切れない」

最後の所は神代 蓮、個人として言わせてもらったのだが、折紙の答えは蓮を睨みつけながら左右の砲門を構えて来ることだった。

「あなたにも言ったはず。私はこの瞬間のためだけに生きてきた…邪魔をするならあなたも殺す!」

「そうか…忠告はしたぞー!」

折紙はその言葉を聞くと、一切の躊躇いもなく、砲門から魔力の奔流が発射され蓮のいた場所を一瞬で砂煙で見えなくなった。だが、蓮は煙を裂くように飛び出してきた。その腕には機械質な籠手、ヘウイトリックを装備して、さらに左手にはヘレッドクイーンを握っている。

（いくらなんでも容赦が無すぎだろ！いきなりヘブラスタークを撃ってくるとは…）

折紙とは装備の整備などをしている仲なのだが、いきなり容赦のない攻撃にショックというより驚きの感情の方が先に出てきてしまった。飛び出した蓮はそのまま折紙の方に向かい、剣を構えて斬りつけようとするが、折紙は手にある巨大なレイザーブレイドヘグリーンリーフを前に出して防御する。

「チッ!」

舌打ちをした後、折紙は腕を思いっきり振り払い、蓮との距離を空ける。

〈ホワイト・リコリス〉は性能から見れば、精霊を倒すことができるほどの力を秘めているが、その性能ゆえ使用者の脳にとっても大きな負荷がかかってしまう。それはDEMの専属魔術師ウィザードを三十分で廃人にしたほどだ。そのデメリットを理解している蓮は時間を稼ぐ：すなわち折紙の活動限界を狙っていたのだが…

(どうも、それが有効とも思えないな)

まるで雨のように降ってくるミサイルを避けながらそう考える。折紙は初めて動かしとは思えないほど〈ホワイト・リコリス〉を使いこなしていた。この調子で三十分は流石に厳しいかもしれない。

(それなら…攻めるかっ！)

そう考えた蓮は、急に回避を止め、大量のミサイルの爆発の中に消えていった。倒したかと思い、攻撃を止める折紙だがその考えは煙が晴れた瞬間、すぐに消え去った。氷のような壁に囲まれて無傷でいる蓮を見て。

「っ！その能力は…」

折紙は過去に似たようなものを見た事があった。四紙乃：〈ハーマット〉の見た力に酷似している。そう思ったのだ。

壁に囲まれている蓮は籠手が装備されている右手を折紙の方に伸ばす。すると、折紙の周囲の空間から、ナイフのように鋭く尖った氷が大量に現れて、折紙を囲った。

伸ばした手を握った瞬間、周囲の氷が一斉に折紙に向かった行き、衝突して、視界が白い煙で埋め尽くされる。一つ一つは大した事ないのだが、これだけの数になると大きなダメージとなり折紙を襲う。

(くっ…ここから離れなければ…)

この場に留まるのは危険と判断し、煙を裂いて飛び出す。だが…「遅すぎるんじゃないか？そう行動するのは」

いつの間にか〈ホワイト・リコリス〉にしがみついていた蓮を見て、折紙は目を見開いた。

右手で機体を掴んでしがみつき、左手に持った剣を逆手に持って振

り上げている。

「防性随意領域展開！」

折紙がそう言ったのと蓮が剣を振り下げたのはほぼ同時だった。当たる瞬間、随意領域が折紙と〈ホワイト・リコリス〉を包み込み、〈レッドクイーン〉を中程にまで侵入させた所で止まった。

だが、それだけでは終わらなかった。蓮は剣のグリップを捻る。すると、エンジン音のような音が鳴り、炎が吹き出すと、

随意領域を削り、折紙の脳に大きなダメージが襲ってくる。

「うっ……くっ……うう……」

「うおっ！無茶苦茶だな、うわっ！」

取り付く蓮を落とそうと、全速力で機体を動かす。すると、偶然にも電灯にぶつかり、その衝撃で振り落とされた。

「これで……」

すぐに機体の向きを変えて、〈プラスターク〉の砲門を向ける。今は振り落とされ空中で姿勢が崩れているので避ける事は出来ないだろう。砲門に魔力の光が集まり始めた時、

「させるかッ！」

紫の水着の上に薄く光る霊装を纏った十香が手に持った塵殺公サンダルフオンで右の砲門を切断した。折紙は十香の姿を見ると顔を歪める。

「夜刀神……十香……！」

「ナイスだ！助かったぞ。十香」

落下中に姿勢を整え、着陸すると別の方向から光線が放たれていた。折紙はそれを上空に飛び立ち、回避する。誰が撃ったのかと思い、その方向に顔を向けると。

「蓮さん……大丈夫……ですか……？」

『うっひゃー。危機一髪だったねー？』

そこには兎のような形をした天使、〈氷結傀儡〉とその背中に霊装を纏った四紙乃が張り付いた。四紙乃も十香と同様、精神が不安定になった事により、霊力が逆流したのだろう。

「レン！……ここは私達に任せてシドーと琴里の所に行け！二人が心配だ！」

「そうしたいが…でも…」

十香と四紙乃は完全な力を取り戻していないのに対して、折紙は理論的に精霊を殺せる兵器を装備している。それがどうしても心に引かなかってしまふ。

「私達なら…大丈夫…です。だから…早く…!」

「くつ、すまない。あとで二人の好きなものを買ってやるよ!」

『蓮くん。よしのんの分も忘れたらダメだよ?』

よしのんの言葉苦笑いしつつ土道が琴里を連れて逃げた方向に走り出す。二人は少し離れた所にある、無人のアトラクションの陰にいた。琴里はまだ、苦しそうに身を振っていた。土道は蓮の姿を見ると、驚いた顔をする。

「蓮?、折紙は…」

「十香と四紙乃が抑えてくれている。司令官殿の様子は?」

「さつきからずつと苦しそうにしているんだ。一体どうすればいいのか…」

蓮は苦しそうにしている琴里をじつと見つめる。まだある…まだあるのだ。自分が、この仲の良いい兄妹にしてやれる事がまだある。そう考え、無言で右手の籠手を解き、へバスターを纏う。

「これから、お前達にしてやれる最後の事をする。だから…頼むぞ。土道」

「頼むって…まだ、好感度が封印出来る所にまで達しているかすら不明なのに…」

「俺には妹はいないが、お前達二人は仲の良いい…愛し合っている兄妹っていう事は見ているだけで分かった。だから、妹を救え!土道」  
へバスターが琴里に触れると青い光が溢れ出して、琴里の身体に吸い込まれていき、琴里は落ち着きを取り戻す。だが、蓮は地面に手をついて今にも倒れそうになってしまった。

土道は思わず駆け寄りたくなるが、蓮はそれを手で制した。土道には大切な妹を救わなければならない。そのためには自分は放つておけ、そう言いたいのだ。

「琴里！お前は俺の妹だ！この世で一番の、大切な妹だ！もうどうしようもなく…愛している！大好きだ！琴里、お前は俺の事は好きか!?!」

琴里は土道の言葉に目を丸くし、顔を真っ赤にしながら聞いている。蓮も今は大笑いするような体力はないが、力無く笑っている。土道も顔が真っ赤だ。

「ええつと…急にそんな事を言われても…」

だんだん背後の音が大きくなっていき、隠れているアトラクションに鉄の礫が当たる。そろそろ十香達も限界のようだ。蓮はなんとか立ち上がろうとするが、足が命令を拒否してるかのようにうまく立たない。そんな足の状態を見て舌打ちを漏らした。

「ああつもう！私も好きよ！世界で一番愛している！おにーちゃん大好き！」

それを聞き届けると土道は琴里の唇に自分の唇を合わせる。すると、琴里を包んでいた羽衣や帯が光の粒子となって消えた。封印が成功したのだ。安心して小さく息を吐く。そしてまた、右手が自分の意思とは関係なしに動き、琴里の肩に触れる。

「ギイツ…クツ…い…」

意識がどこかに飛んでいくような衝動に襲われるが、歯を食いしばり、必死に耐える。今、ここで意識を失う訳にはいかないのだ。それと同時に身体に力が溢れてくるのを感じる。まるで、乾いた砂漠に大雨が降り、大地を潤していくように。

「つー三人共！そこから離れろ!!」

十香の声が聞こえると、こちらに向けて小型のミサイルが飛んでくる。おそらく、折紙の発射したものがこちらに飛んできたようだ。

蓮は身体を動かし、土道達の前に立つと、左手がいきなり燃え出した。燃え出した炎は掌に集まっていき、火の粉を散らしながら一つの剣に姿を変えた。

剣は日本の薙刀状のフォルムをしており、それが柄頭が接続し、両剣のような形の作っている。刃の部分は焼いたように茜色に輝いており、その周囲には炎が回っていた。



〈トナティウ〉

熱と炎を操る事が出来る剣。

刃の部分に熱を集めて鉄すら簡単に切り裂ける温度を出せたり、炎で周囲を包む事も可能。

剣の柄を分離させ、両手に持つことが出来る。

蓮は手に持った〈トナティウ〉を手首で回転させながら上に振り上げる。すると、土道達を中心に炎で出来た竜巻が発生して、ミサイルを絡みとり、上に吹き飛ばして爆破させた。

折紙、十香、四糸乃はこれを食べい入るように見つめていた。

「あなたは…その能力は〈エイフリート〉の…一体なのが…」

「…十香、四糸乃、よく頑張ってくれた。あとは俺がやる。下がっていでくれ」

折紙の質問には答えず、十香達にそう頼む。二人は互いに目を見合わせたが、任せて大丈夫と判断して折紙から離れる。

「もう五河 琴里は〈エイフリート〉じゃない。これ以上の戦闘は無意味だ」

「…あなたが〈エイフリート〉とだとも言いたいの？」

折紙は蓮の奇妙な発言に眉を顰めるが皮肉を込めてそう言い返した。だが、蓮は顔を横に振り、自分は違うと言った。

「なら、そこを退いて」

「そいつは聞けないなっ！」

蓮は折紙の正面から懐に一気に潜り込んでくる。ほぼ反射に近い反応で蓮に向かって〈クリーヴリーフ〉を斬りつける。蓮はそれを受け流し、身体を前に一回転させて、折紙の頭を踏み台にさらにジャンプして機体の上に乗る。

機体に取りついた後、手に持った〈トナティウ〉を両手で持ち、大きく振り上げると、刃の部分が茜色になり、熱を放ち始める。そして、熱を蓄えた剣を〈ホワイト・リコリス〉へ突き刺す。刃は装甲を熱で切断して機体に大きなダメージを与えた。

これを見た折紙はせめてもの抵抗とばかりにウエポンコンテナか

らミサイルを一気に発射する。ここで〈随意領域〉<sup>テリトリー</sup>を使用しなかったのは、折紙の頭を頭痛が襲い始めて、それを使うほどの余裕がなかったのだ。

発射されたミサイルは辺り一面に着弾し、その1発が士道と琴里の隠れているアトラクションの上部に被弾した。

「士道！そこから逃げて！」

それを見た折紙はそう叫ぶ。崩壊はしなかったが、当たった衝撃により、飛び散った鉄屑が士道と琴里に降り注いだのだ。しかし、士道は逃げようとはせず、琴里を守るように覆い被さる。降り注いだ鉄屑は士道の背中に突き刺さり、真っ赤に染め上げる。

それを見た折紙は顔を真っ青にして士道の元に移動する。蓮はそんな折紙を攻撃しようとは思わなかった。

「士道……く、医療用ではないけど、何とか……」

その台詞は途中で中断された。その理由は士道の背中を焰が這い、傷を治癒させ、刺さった鉄屑が地面に落ちる。これには折紙だけでなく、蓮も驚愕したが、同時に理解した。四月にほぼ即死の傷を負っても自分の目の前に現れた理由を。

士道は背中に手をやり、肌があるのを確認してゆっくり立ち上がる。

「……さつき蓮は言ったよな。もう琴里はヘイフリートじゃないって。

今は……今は俺がヘイフリートだ！狙うなら俺を狙え！」

「そんな……一体これは……」

「でも、その前に話を聞いてほしい！五年前の火災。これは琴里が……ヘイフリートが引き起こしたものだ、思い出したんだよ……あの場には琴里をこんな目に遭わせた精霊がいた！琴里は人を殺してなんかいなかったんだ！」

「そんな言葉を……信じろというの？」

「もし信じられないなら、俺を……ヘイフリートを討てばいい。だけど琴里は……琴里はもうただの人間なんだ……」

士道の言葉に迷うような反応をする折紙。だが、次の瞬間、折紙にとてつもない頭痛が襲い、〈ホワイト・リコリス〉が重力に従い地面に

落下する。活動限界がきたのだ。

「ぐっ…こんな…ところで…」

顔を苦悶に歪めつつ左足のホルスターから拳銃を抜こうとするが、抜く前に蓮が取り押える。

「これ以上はもう止めておけ。話し合いなんて、これから納得するまで出来る。ここでの戦闘は本当にもう無意味だ」

その言葉を聞いて、折紙は蓮を強く睨みつけた後、気を失った。

—————

夕日が沈み、闇夜が街を包む込む。その中には屋上の縁に腰を掛ける黒髪の少女がいた。ただ、その少女の背後には数名の人間が倒れており、左目の瞳の中にある黄金色の時計がくるくると逆回転に回っている。

「ふう…まだまだ足りませんわね…刻々帝<sup>ザフキエル</sup>」

気怠そうに少女…狂三は眩くと背後に巨大な時計が現れ、時計の短針である短銃が手の中に収まる。

「八<sup>ハ</sup>の弾<sup>ト</sup>」

狂三の声と同時に左目の時計が少し回転して、『Ⅷ』の場所から影が滲み出し、銃口に吸い込まれていく。狂三はその銃を自分のこめかみに突きつけて、躊躇いなく引き金を引く。すると、狂三の身体が二つに分かれてもう一人の狂三が生まれ、狂三の影に吸い込まれる。

「まったく、燃費が悪いですわね。…まあ、蓮さんの力を使わせて頂いているだけ文句は言えませんが」

今の狂三はへばスターへは発現できなくなつたが、狂三の身体には蓮の力がまだ残っている。それを分身体の生成に使つたため、狂三の時間の消費が少なく済んだのだ。

狂三はそれを使い、琴里との戦いで使用した”時間”の補給を行っていた。

「わたくしの目的のためにはまだまだ時間が必要ですよ…土道さん、次こそは絶対にいただきますわよ。そして…蓮さん、待っていてくださいまし。わたくしがあなたの呪われた運命を壊して…自由に差し上げますわ…」

狂三にはある目的がある。その目的の為に精霊の力を有する土道を『喰べる』必要があった。そして、蓮の力もその例外ではなかったのだが、狂三は力ではなく対話を選んだ。目的にチェックメイトをかけるために、蓮は特別な存在だったからである。

そこで狂三は背後に気配を感じ、後ろを振り向く。その正体を確認して肩をすくめる。

「ああ、あなたですよ」

そこには映像を見ている訳ではないのに、実像を見取るのが困難なほど解像度が粗いモザイクのようなものがいた。それは男か女か分からない声で狂三に話しかけてくる。

「…どうだった？彼は」

「教えてもらった時は信じられませんでしたけど… 素晴らしかったですわ。彼は」

【そう…それで、あの子は見つかった？】

そう聞かれると狂三は不機嫌…というより露骨に嫌そうな顔をすする。この事はあまり他の者の教えたくない事であった。特に素性も分からない者には。

「…それはどうしても言わなければいけませんこと？」

【これは約束だったでしょ？君の探しているあの子がいると思われる場所を教えるから、その結果を教えるってことは】

「…ええ、あなたの言葉通りに彼はここにはいませんわ。場所が分かっていたのならご自分で探せば良かったのではありませんこと？」

【私は今は派手に動けないからね。利害の一致で君に教えただけだよ】

実際、狂三にとってこの情報は貴重な手掛かりだった。それゆえにその約束を承諾し、土道を喰べるのと蓮を探すためにこの天宮市に来た。

【時間遡行の弾…君はそんなものを使ってどうするつもり？】

「なぜその事を知っておられますのか気になりますが…わたくしの目的はそれを使い、三十年前に飛び、全ての精霊の根源となった『最初の精霊』をこの手で殺す事…それがわたくしの悲願であり…彼の救済

ですわ」

「そう…君は意外と優しいんだね。だけど、君のしている事はあまり人道的とは言えないんじゃないかな。その目的にあの子を利用するつもりなんですよ？あの子の正体は…」

そこまで言いかけたところで手に持っていた短銃を『何か』に向けて引き金を引く。しかし、その弾丸が届く前に『何か』の身体は闇夜に溶けるように消える。

(…わたくしの悲願を達成した後、最後は彼と共に…)

狂三は目を閉じて夜空を見上げる。それはまるで何かに祈りを捧げるかのように…

## 23話

天宮駐屯地の一室をに緊張した空気が支配していた。

数名の男が居並び、中央に立っている折紙に厳しい視線を向ける。その中、折紙の弁護人である燎子だけは不安そうな目をしている。

今、この部屋で行われているのは、〈ホワイト・リコリス〉を無断で使用した折紙に対する査問だ。査問などと言ってもそんなものは形ではないのをこの部屋にいる人間は誰もが理解しているだろう。

「鴛一 折紙一曹を懲戒処分とする。顕現装置リアライザに触れる事はもう無いと思え」

正面に座った桐谷陸将が折紙に処分を言い渡す。それを聞いても折紙は表情を変えずに小さく息を吐く。

〈ホワイト・リコリス〉を無断で使用したのもあるが、そもそも顕現装置リアライザ自体一般人に目撃されてはならない技術だ。このタブーを犯した罪は重い。

折紙もそんな事は覚悟の上だったが、これで自分の家族を殺した精霊を探す道筋が途絶えることにもなる。それだけが後悔だった。

その時、ドアが開かれ視線がそこに集中した。

「なんだ、査問中だぞ。誰も入れるなど…」

「ああ、お取り込み中だったかな。これは失礼」

ドアを開けたのはくすんだアッシュブロンドに鋭い目元が特徴的な男が秘書と思われる従えて立っていた。

：サー・アイザック・レイ・ウエストコット。世界で唯一顕現装置リアライザを製造出来るDEM社のトップだ。

「ミスター・ウエストコット…？なぜあなたが…」

「ダウンしたマナの激励とお見舞いにと思ってきたのですが…あの〈ホワイト・リコリス〉を動かしたて精霊と戦った隊員がいると聞いて来てみれば、こんな可愛らしいお嬢さんとは思いませんでした」

「その事については後に正式に謝罪をさせていただきます。一曹にも処分を与えるつもりだ」

桐谷陸将は必死に動揺を押し殺しているつもりらしいが、隠しきれ

ていない。

〈ホワイト・リコリス〉はDEMの実験機であり秘匿技術の塊だからだ。

「私はこの件を責めるつもりも要求を通すつもりもありません。それにアレを扱える魔術師ウィザードなんて、そういませんよ?」

「ミスター、これは隊の規律の問題だ。一曹には記憶処理を施した上での懲戒免職が妥当という決断が出た」

「オオウ…おわかりいただけませんか。私がこれだけ言っても。なら、私は伝言をあなた達に伝える必要がありますよ?」

この瞬間、ウエストコットの雰囲気が変わった。

「伝言?誰からの…」

「それは…NEROからのメッセージですよ」

それを聞いた途端、折紙と燎子以外の人間の顔に動揺が走った。

今まで沈黙していた人物が自分達に向けて何か言ってきたとなればそうなるだろう。

「あなた達も知つての通り、NEROは電子機器開発だけではなく、リアライザ顕現装置技術でも我が社に大きな利益をもたらしてくれています。今回の〈ホワイト・リコリス〉にも”彼”の技術が使われています、それを考えると、この場では椅子に座っているだけの我々よりも発言力が一番あると言つても過言では無いと思いますよ。まあ、これを見てください」

ウエストコットは秘書の少女から書類を一枚受け取り、それを渡す。それを見た瞬間、桐谷陸将が目を見開いた。

「それが本人からの言葉というのは彼が所属している企業の人間である私が保証しますよ」

「…確かにこれはNERO本人からのものだ…だが、今まで何も意見が無かったのに今回だけというのは都合が良すぎるのでは無いか?」  
顔も知らない人間に自分の下した判決を覆される。

その事が桐谷陸将のプライドを強く刺激した。NEROは優秀な人間だが、向けられるのは友好的な目や言葉だけではない。

顔を見せない事に対する不満や、もしNEROがいなかったら…そ

んな良からぬ事を考える人間もいるのだ。

「今まで何も言ってこなかったのは、あなた達の判決が正しいと思っ  
てたからですよ。ですが、今回は優秀な魔術師ウィザードを失うのが惜しいと  
思ったんでしょう。まあ、私も同じ考えですが」

「くっ……舐めるなよ民間企業が……貴様らの飼っている飼犬ごとき  
に我らが屈すると思うな……」

ここでNOと言うのは簡単だ。だが、そうしてしまつては最悪、天  
才技術者に喧嘩を売るといふ結果になってしまう。

それでも、今は後の事よりも、すべてお前達の思い通りになるなど  
いう気持ちの方が勝つたのだ。

「ご立派……なら、これもあなたに渡した方が良さそうだ」

ウエストコットは次に薄型の液晶タブレットを秘書から受け取り、  
桐谷陸将に渡す。その画面を見た途端、驚きのあまり声を漏らした。

「なっ……なぜこれをお前達が知っている!?これは自衛隊幹部しか知り  
得ない極秘情報だぞ!!」

「それについては私は目を通していませんのでご安心を。その反応か  
ら見ると、どうやら堂々と見せられる内容ばかりでは無いようです  
ね」

これは無言の脅迫だ。NEROはいつでも自分達を見ているとい  
う事をこの場にいる全員は思い知らされたのだ。

桐谷陸将は恐怖と悔しさの混ざつたような顔をし、手に持ったタブ  
レット端末を床に叩きつけた。その衝撃で画面にヒビが入る。

「鳶一 折紙一曹を、二ヶ月の謹慎処分とする……」

悔しげに歪んだ唇から、その言葉が漏れた途端、この場にいる人間  
全員が驚く。

二ヶ月顕現装置リアライザに触れられないだけというのはあまりにも軽すぎ  
る処分だ。

折紙は自分の事にも関わらず、異議を申し立てようとするが、それ  
を見て慌てた燎子に手を掴まれて部屋を出て行く。

ウエストコットはそれを怪しげな笑みを浮かべて見ていた。



「見たかエレン、あの場にいた者は誰も事の重大さを理解してない。そんな無能が一人の天才を糾弾しているのだからおかしなものだ」  
「そうですね」

廊下を歩きながら、ウエストコットがそう言うと、数歩後ろを歩く少女、エレンが返答する。

「しかし、彼がこういう事に口を出してくるとは珍しい。普段は我が社の軍事情にもあまり興味を示さないというのに」

ウエストコットの独り言を聞いていたエレンは何かを思い出したように手にしたファイルを開いた。

「そう言えば精霊、〈プリンセス〉について一つ報告が」

「〈プリンセス〉？確かに三ヶ月前から確認されてないと聞いたが、別に珍しくはないだろう？」

「そうなんです、これを見てください」

そうやってエレンは一枚の写真を見せる。そこにはさつき見た折紙が写っていたが平時は学校に通っていると聞いていたので驚きは無い。

問題はそれではなく、折紙と一緒に写っていたが少女だ。

腰まである長い夜色の髪、美しい面、幻想的な水晶の瞳。一目見たら忘れないであろうその顔は、ウエストコットの知っている精霊〈プリンセス〉と全く同じだった。そして…

「これは…なぜ彼が…」

二人をやれやれといった顔で見ている少年…白髪と蒼い目、整った容姿と、こちらも一度見たらなかなか忘れる事のできない印象だが、ウエストコットが彼を見るのは初めてではなかったのだ。

「〈プリンセス〉と思われる少女と親しい仲であると報告されていますが、この子がこの容姿だけが理由で仲がいいとは考えられません。何かしらの理由があると思われます」

「ほう…それをもう少し見せてくれるかな…なるほどグッドタイミングじゃないか」

エレンから受け取ったファイルを見て、ウエストコットは口の端を歪める。

「この件は君に任せよう、エレン。へプリンセスと思われる少女の正体を……それと、彼を連れ戻してきてほしい。子の躰をするのは母親の役目だからね」

エレンは表情なく『分かりました』と答える。ウエストコットはそんなエレンを見て小さく笑いながら、手に持ったファイルを返して再び歩き始めた。

「さて、休暇は終わりだ」

七月、この月は学生には夏休みが始まる月だ。しかし、その夏休みの前にある敵が立ち塞がる。

そう、悪い点数を取れば夏休み中に呼び出される期末テストだ。

どの学校にも苦戦する生徒が多いがここ、来禅高校には特にその生徒が多い。

その理由は精霊、狂三のせいではほとんどの生徒が数日前まで病院にいたからだ。そんな事があったにも関わらず、テストは予定通りに行われた。

どの生徒も唸り声を上げる中、土道は狂三の件のほかに、妹の琴里の灵力封印などもあり、普通の生徒以上にテスト勉強などする暇は無かったののだが、さほど苦戦する様子もなくペンを走らせている。

その理由はテスト前に開いた勉強会でとても優秀な友人が分かりやすく解説してくれたからだ。

土道はチラリとその優秀な友人であり、テストを開始して、五分足らずで夢の世界へと旅立った蓮の姿を見る。

土道は蓮の事を全く知らない。以前にイギリス出身である事と今の名前が本当の本名では無いと聞いたが、それだけであり、好きな食べ物も彼の家がどこにあるのかすら分からない。

学校でも土道や十香と話してない時は、席で英語の本を読んでいて、土道にはそれが自分の事を必要以上に知られたくないから、他人と関わらないように見える。

それが気になり、少し前に琴里に聞いてみたところ……

『土道、あんた、自分の事を教えようとしてもしないで他人の事を知りたい

なんて都合が良すぎるんじゃない？そうね…じゃあその一歩として、中学の時、鏡の前で変なポーズをとっている写真を…』

そこまで思い出して土道は考えるのをやめた。それでは自分の事というより弱みを握られるという表現が正しいような気がしてくる。

しかし、琴里の言う事ももつともだ。土道も知られたくないような事を無理に知ろうとは思わない。そう結論付けてテストに集中した。

テスト終了のチャイムが鳴り響く中、蓮はパチリと目を開ける。

(やつと終わったか…暇な時間だったな)

手元の問題用紙には八割ほど解答されている。

去年はほとんど出席していなかったため、そのマイナスを補うため、全テストを満点にしていたが、今年はそれがなくなったので適当に書いただけだ。

答案を前に送り、担任のタマちゃんが全科目終了の声を上げると放念や歓声が聞こえてくるが、その喜びがイマイチ分からない。

そこまで学生にとってテストというのは嫌な存在なのだろうか、今まで学校に通った事のない蓮には分からない。

テストが終わると十香はやけに疲れた様子で教室を出て行き、土道も折紙と一緒にどこかに行ってしまったが、どうせ琴里の件で女子トイレにでも連れて行かれていているのだろう。

それを横目で見て、大きいため息をする。

普通じゃない自分が普通の学生を演じているのを、もし、昔の自分が見たらなんて言われるだろうか。

きつと、嘲笑をした後、皮肉の一つや二つ言われるだろう。それほど自分が丸くなったという自覚がある。

これもヘラタトスク…土道や十香、琴里達の影響だろう。

数分後、その土道が教室に帰ってきたのだが、十香も加わり、修羅場と化していたが、どうせ女子トイレを出るのを十香に見られたのが原因なのだろう。こんな事、もはや珍しい事ではないので興味を持つ事もないのだが、純粋な十香を泣かせるのはあまり感心しない。

(帰るか…)

そう思った時、前に立ったタマちゃんが手を叩いて注目を集める。「帰りのホームルームを始める前に修学旅行の部屋割りと飛行機の座席を決めますよお」

それを聞いて、クラスに『あ…：そういえば…：』みたいな声が漏れる中、蓮だけは『え？修学旅行？え？何それ？』と言った反応をする。前に読んだ本にそれに関する事が書いてあった気がする。たしか、一年に一度、学年で宿泊の旅行をするという行事だったはずだ。

前でタマちゃんが修学旅行の行き先が変更になったなど、説明をするが蓮はある事とを考えるのに頭を使っていた。

集団で、という事は風呂も温泉などで一度に多人数の生徒が入浴するだろう。

それはマズイ、かなりマズイ。

そうなつては自分の背中を必ず見られるだろう。それだけは何としても避けなければならぬ。

部屋にあるシャワーを使う…いや、これだけの人数が泊まるのだ、ホテルではなく旅館だろう。これは期待できない。

クラス中が部屋割りのメンバーを作る中、蓮の元には誰も来ない。去年は学校にほとんど来ていないのに加えて、普段もクラスメイトと関わっていないので親しい友達はほとんどいない。(まあ、来られてもそれはそれで困るのだが)

最悪、修学旅行を欠席するという考えが頭を浮かんだ時、「レン…その部屋割りとやらを一緒に組むぞー」

土道の腕を掴んだ十香が蓮の元へとやって来る。

それを聞いて一つの閃きが浮かんだ。十香と土道ならこの身体の事を知っているので部屋割りのメンバーとしてはベストだ。

風呂の件はとりあえずあっちに行つてから考えればいいだろう。

土道は本来なら『男女は別部屋でなくてはダメ』と言わなければならないのだが、蓮も場合は事情が事情だ。

それに蓮なら十香を襲ったりなんて無いので大丈夫と考えている自分がいるので不思議だ。

だが、三人が一緒の部屋になるのを許さない女がここにいた。

「二人が一緒の部屋となるなら、私は士道と同じ部屋になる」

折紙は士道を引つ張り十香から士道を奪う。当然、十香はそれに黙っていない。

「おい！私は二人と一緒にがいいのだ！貴様なんぞに渡す気はないぞ！」

「心が狭い女。それでは士道と同じ部屋なんて生まれ変わっても無理」

「なんだと貴様!!」

喧嘩を始める二人にタマちゃんが間に入る。

「け、喧嘩はダメですよお、それに男女は別々じゃないとお」

「むう…なぜ別々でないとダメなのだ？タマちゃん先生よ」

「ええ？そ、それは…その…」

顔を赤くしてごにごによごによと口ごもるタマちゃんを見て、蓮は思わず『しつかりしろよ担任』と言いたくなるのをなんとか堪える。

すると、タマちゃんは急に思い出したような顔をして蓮に話しかけてきた。

「あつ、そういえば言い忘れてたのですけどお、神代君だけは別部屋で一人なんですよお」

「別部屋？何故？」

「旅行会社から、何故か神代君の部屋と入浴時間などを普通の生徒と別にするように言われていました…すみません…」

「いえいえ、全然構いませんよー！」

理由は分からないが、蓮にとっては破格の待遇だ。これを拒むなんて選択はない。

士道もそれを聞いて折紙と同部屋となるのもチャラとなった。だが、十香は悲しげな顔をする。

「普通じゃ男女一緒にダメなんだよ。我慢しろって」

「う、うむ…残念だぞ…」

少し不満そうだが、なんとか納得したらしい。

これで不安の芽を摘む事もできて安心して満喫できると思ったが、それは容易く碎かれるのを、蓮はまだ知らない。

## 24話

「んー…なんで乗り物に乗るとこんなに気持ちよく寝れるんだろな。これは世界七不思議の八個目に入れてもいいと思わないか？土道」  
「いや、それじゃ七不思議にならないだろ」

「おおっ！これが海か!？」

十香が初めて見る海にとても興奮している様子だ。

飛行機に揺られること三時間、沖縄から変更になった目的地は或美島と呼ばれる観光地だった。

青い海に綺麗な砂浜、世界を旅行していた蓮から見ても、これは十分に美しいと言えるレベルの光景である。やはり、この国にも世界と渡り合えるほどの絶景があったらしい。

蓮は日光が降り注ぐ空を見上げる。琴里が当日は〈フラクシナス〉を同伴させると言っていたのを思い出したからなのだが、当然ながらその姿は見えない。

数日間、家を空けるため、飼い猫であるミルクは世話も頼んであるのでは心配ない。

――〈フラクシナス〉内部――

『ニャー！ニャー！』

『ああつ！ちよつと！そんなに引っ張つちやダメだからあ!!』

『あわわ…よしのん…』

――

「ぬ…?」

いきなりはしやいでいた十香が周りをキョロキョロと見渡し始めた。

「どうしたんだ、十香?」

「むう?誰かに見られている気がするのだ…」

誰かと言われても、大声を出したのだから少なからず目立つものだが、その視線とは違うといった様子だ。

「あれだけ大声を出したら目立つだろ。それか一緒に随行してきたカ

メラマンぐらいしか…」

「へえ、カメラマンなんてついてきていたのか」

正直に言ってしまうと、カメラマンどころか出発する前に、先生方がどのような話をしていたかすら記憶にない。それを聞いて士道は呆れた様子だ。

「まったく…旅行記録を付けるのが目的らしいぞ。確か名前は…」

「やはり誰かに見られているぞー!」

十香は士道の言葉を遮るように言うと、その正体を確かめるべく駆け出した。士道は驚き、蓮はやれやれと言った様子で後を追って行く。

それを随行カメラマン、エレン・メイザースはジツと見つめていたのを三人は知らない。

「ああもう、置いてかれちゃったじゃねえか」

十香の言い分に付き合い、しばらく十香の感じるその視線の正体を探索していたら、いつも間にか三人は学校のグループに置いていかれてしまっていた。

結局、その視線の正体も分からず、十香は申し訳ないと言った顔だ。

「十香、本当に誰かに見られている気がしたのか?」

士道は十香の気のせいだと思っっているらしいが、蓮にはどうもスッキリしない終わり方だ。蓮は特に何も感じなかったが、十香の言い分も気になる。

「た、確かに感じたのだ!嘘ではないぞー!」

「そう言われてもな…」

蓮は困った様子でふと空を見上げると、さっきまで青色だった空が灰色の雲に埋め尽くされている事に気が付いた。

山の天気は変わりやすいと言われているので、それと同じようなものかと思っただが、ここは山ではないし、それに、幾ら何でも一変し過ぎだ。

「なんだよ…こりゃあ…」

どうやら士道もこれに気が付いた様子だ。そして、一分もしないう

ちに大型台風レベルの風が吹き荒れる。

もはや、歩いて進むどころかまともに立っている事すら困難なほどだ。

「うわわっ!!」

突如、前方から吹いた大きな風に士道の身体が煽られ、バランスを崩して後ろに倒れそうになる。

だが、蓮が後ろから支える事により、それを防ぐ。

「しっかり踏ん張れよな」

「わ、悪い、助かった」

「大丈夫か、シ…ドオツ!!」

士道の無事を確認するために振り向いた十香の顔に、どこからか吹き飛ばされてきたであろうゴミ箱がクリティカルヒットする。

それにより倒れる十香の身体を蓮が空いている腕で支える。

「お、おい！大丈夫か、十香！」

士道が声をかけるが返事はない。今ので完全に目を回してしまっているようだ。

この突風の中を、十香を背負って進むのはかなり困難だ。最悪、へバスターで風を防ぎながら進む事を視野に入れ始めた時。

荒れ狂う雲の中に、二つの影らしきものが見えた。

「あれは…まさか、ASTか…」

士道もそれに気づいたらしいが、蓮は言葉にせず、心の中で『違う』と否定する。

ASTがこんな嵐の中で演習などしているなど考えられない。

飛び交っていた二つの影が一番大きくぶつかると、大きな風を巻き起こしながら地面へと落下する。

ちようど三人を挟んだ形に。

それと同時に、落ちてきた二人を中心に風がやんだ無風状態となった。

二つの落ちてきた影は蓮達と年齢を変わらないであろう少女だ。

燈色の髪に水銀色の瞳と、整った容姿をしているが目を引かれるのはその姿だった。



暗色の外套に身体の各所に拘束具のようなものが装着してあり、もしこんな姿で街中を歩いたら警察のお世話になるのは確実だろう。

「さすが夕弦、我が半身、やるではないか。我と五分の成績を分けているだけでもある。だが、それも今日で幕を降ろす運命なのだ！」

片方の少女が髪を結び上げやけに芝居かかった様子で言う。

なぜ本人はそのように話しているのかは不明だが、蓮には思春期をこじらせた子供のように見える。

「反論。この戦いを制するのは耶俱矢ではなく夕弦です」

夕弦と名乗った少女は片方の耶俱矢と見た目が似ている。

ただ、髪型と気怠そうな半眼であるなどの違いがあるほか、つけている拘束具が耶俱矢と比べて逆の位置にある。

「長き戦いも今日で終止符<sup>ピリオド</sup>を打とうぞ！ 我の必殺、颯風<sup>シユトウルム・ラン</sup>を司りし漆黒の魔槍<sup>ツェ</sup>でな！」

「疑問。颯風<sup>シユトウルム・ラン</sup>を司りし漆黒の魔槍とはなんですか？」

夕弦の質問に耶具矢は得意げに笑うと、右手で顔を覆う。覆った指の隙間から覗いた目が夕弦を見つめる。

：ハッキリ言ってしまうと、とてつもなく痛々しい。

「くくく…その名を軽々しく口にせぬ方が良くぞ。名前だけでも凡人でも耐えられぬような凄まじい瘴気を発しているうえに…」

「結論。つまり、また耶具矢の勝手な妄想ですか。あまり口任せな事は言わないようにと…」

「う、嘘じゃないし！ 今までは手加減して使わなかったただけなんだからね！」

さつきまでの態度はどこにいったのか、急に素に戻った様子で反論する耶具矢。

話が見えないが、どうやらいきなり天気が変わった元凶は彼女達らしい。

「ぐぬぬ…よくも我を愚弄してくれたな…」

耶具矢が両手を広げると、周囲に荒れ狂う嵐が一層と強くなった。

夕弦もそれを見て応ずるように構えをとる。

「漆黒に沈め！」

「突進。えいやー」

その声と共に、同時に地を蹴る。

こんな近くで精霊同士の戦いに巻き込まれたらひとたまりもない。

士道が二人の気を向けるため、大声を出そうと息を吸い込み始めた瞬間。

風の音を消し去るほどの大きなエンジン音らしき音が、周囲に響き渡った。

その音に士道はもちろん、耶具矢と夕弦の視線もそちらに向けられる。

そこにはヘレツドクイーンを地面に突き立てた蓮がおり、剣からは赤い炎らしきものが吹き出している。

「ふう…士道、喋ろ」

剣を背中に背負い、そうとだけ言って蓮は気絶した十香の介抱をし始める。残された士道はもしかしたらとんでもない状況に放り出されたのだと、改めて理解した。

「人間が我らの戦場に足を踏み入れるとは…何者だ」

「質問。それにそのあなたの持っているその剣はどのような仕組みなのですか?」

やはり、二人からは士道達がなぜここにいるのか、何者なのかという質問が飛んでくる。

二人で戦っていたのに、あのように止められてしまえばそれももったもな質問だ。

「我らの決闘に横槍を入れるとは、一体何のつもりだ。答えによつては我が…えつと…」

「颯風を司りし漆黒の魔槍?」

何やら忘れてしている様子だったらしいので、蓮は十香を介抱しながら、耶具矢がさつき言っていた必殺技らしき技の名前を言ってみる。

どうやら、それで合っていたらしく、耶具矢は引つかかっていたものが取れたような顔をした。

「そう!それ!…颯風を司りし漆黒の魔槍が貴様を貫くことになるぞ」

「指摘。それは常人では名前すら耐えられないのではないのですか？あと、今、確かに耶具矢は名前を忘れていたと思うのですが」

「うっ…いいから、夕弦は黙っててよ。あと少して決着がつくところだったのに…」

何やらブツブツと独り言を呟いて思考する耶具矢だが、急にクツクツと笑い始めた。

「夕弦！せっかくの決闘も水を差されて興ざめとなってしまうた。だが、百戦目の戦いが幾度も行った殴り合いとはどうかと思っておっただろう」

「首肯。確かに夕弦もそう思っていました。耶具矢には何か考えがあるのですか？」

夕弦の問いに耶具矢は土道、そして蓮を見てさらに笑みを深くする。その視線を受け、土道は嫌な予感を感じた。

「さあ、土道、貴様を選べばよい。この八舞耶具矢を選び、身も心も捧げると言えば良いのだ」

「否定。耶具矢を選んでもいい事はありません。是非夕弦に清き一票を」

修学旅行、最初の行き先である資料館の奥の事務室で土道は現在、学校の制服姿の夕弦と耶具矢に両腕を絡みつかれていた。

そんな状態の土道は照れているというより、疲れているといった様子だ。

そんな土道を壁に背中を預け、腕を組んで立っている蓮と、他の教師に二人を転校生だと説明してきた令音が見ていた。

「どうだ蓮、貴様も我の元に下るといいぞ。お前の心の器を満たしてやれるのは我しか居らぬからな！」

「誘惑。夕弦を選ぶととてもいい事してあげます。蓮は耶具矢のような貧相な身体には興味がないと目が語っています」

「だっ！誰が貧相な身体じゃあー！」

そんな二人に、蓮は苦笑いを浮かべる事しか出来ない。

なぜこんな事になったのだろう。そんな自問をして、答えるように

その時の事を思い出し始めた。

「我らが勝敗を決していないもの。それ即ち『魅力』！そして、人を引き寄せる『カリスマ性』！」

格好いいポーズを決めながら、耶具矢は宣言するかのようそう言い放つ。

「真の精霊、八舞には森羅万象を嫉妬させる魅力、そして、他のものを束ねるカリスマ性がなければならぬ。そう思わぬか、夕弦？」

「回答。確かにと思います。今まで勝敗を第三者に委ねた事はありませんでした」

夕弦がなるほど、と言った様子で答える。それを聞いた耶具矢は士道と蓮を低い笑いを漏らしながら見る。

「その二人、名はなんという？」

「え？いい、五河…士道だけど…」

「神代 蓮」

「士道に蓮…か。よろしい、士道！貴様を『魅力』の裁定役に、そして、蓮、貴様は『カリスマ性』の裁定役に任ずる」

耶具矢の突然の発言に、士道は狼狽えるような声を出す、二人は気にした様子はなかった。蓮もため息をつくしかない。

「さあ、どうする夕弦。力ではなく、人格が試されるこの勝負、私の勝ちが決まっているゆえに、貴様に応じる勇気はないだろうがな」

「否定。勝つのは耶具矢ではなく夕弦です。そんな性格の耶具矢には男など一生寄ってくるはずありません」

「んだと、ゴラァァ！」

夕弦の一言に耶具矢はさつきまでのキャラも忘れて吠える。だが、すぐに二人の目の前だという事を思い出し、気持ちを落ち着かせるかのように咳をする。

「と、とにかく、これが最後の勝負よ！勝負の方法は先に二人を引き寄せた方の勝ちだ！」

「承諾。その勝負、受けて立ちます」

「ちよつと待てえええ！」

辺り一帯に土道の声が響き渡り、蓮はこれから起こる面倒ごとの予感に頭痛を感じていた。

蓮はその時の出来事を思い出し、また一つため息をつく。

耶具矢と夕弦は、令音の手回しにより、転校生といった形で落ち着いた。

(ワクワクの修学旅行が、失敗は許されない精霊攻略にチェンジ…映画だったら、展開が早すぎるとかいうコメントが来そうだな…)

そんな文句を思いつつも、残念ながら、このまま何もしていないという選択肢はない。

令音に事情は伝えてあるので、すぐにいい手立てを考えてくれるはずだ。

「…厄介な事になったようだね」

「…はい」

「やっぱり、解析官殿にはそう見える?」

令音の言葉に、土道は重苦しく、蓮は自傷気味にそう答えた。

## 25話

「なるほど、お前たち別れた二人はやがて一人になる時の主人格を決まるために戦っていたと」

「首肯。その通りです、蓮は理解が早くて助かります」

時間が経過し、少し落ち着いた頃、二人からなぜあそこで戦っていたのか理由を聞いてみた。

その答えは驚くべき内容であり、耶具矢と夕弦は最初は八舞という一人の精霊だったらしいのだが、幾度目の現界の時、二人に別れてしまい、それが耶具矢と夕弦となったらしい。

そして二人は元に戻る時、どちらが主人格となるかを争い、勝負をしているという話だ。

「つ、つまり、あの嵐もお前達の喧嘩…って事になるのか…」

二人の勝負により、あのレベルの嵐が発生したと考え士道は汗を滲ませた。

あれほどの被害を出しながら、二人が戦っているのだ。士道の気持ちもなんとなく分かる。

「…つまり、君たち二人は主人格となるのを決めるために争っている。という事だね」

先ほどまで端末を弄っていた令音が立ち上がり、二人にそう問う。だが、二人にはあまり友好的とは言えない視線が向けられた。

「その通りだが、貴様は何者だ？もしこの勝負の邪魔をするなら容赦はせぬぞ？」

「…私はただの学校の先生さ。君たちにはシンとレンの攻略のアドバイスをしたいとおもう。ついてきてくれ」

だが、二人は士道から離れず、テコでも動かん。といった様子だ。それを見ても、令音は眉一つ動かさない。

「…シンはともかくレンは強敵だ。彼は自分の中の条件が満たされなければ、どんなに顔が良くても絶対について来ない。それを教えたいと思っていたのだが…私は最悪どちらか片方だけでも構わないがね」

令音の言葉に耶具矢と夕弦はピクリと耳を動かし、我先にと令音に

ついでいく。

なんというか、令音は人の心の扱いが上手いと感心してしまった。

「士道…長い二泊三日になりそうだな」

「だけど、弱音ばかり言ってられないよな」

士道は自分に喝を入れるように、頬を両手で叩いた。

午後六時五十分、夕食が終わり、自由時間となっている。

その時間、蓮は令音と共の一室で過ごしていたのだが、当然ながらそこには少女が夢見るような恋愛の雰囲気など欠片もない。

「あの二人が〈ベルセルク〉ねえ…」

チェス盤を挟んで座っている蓮が、小型端末を操作している令音に、面倒くさいような信じられないような言い方で呟く。

「…まあ、いきなりそう言われても信じられないのは分かるが、本当だよ」

令音は小型端末を閉じて困ったような仕草で腕を組む。そのせいで令音の着ている浴衣の胸元の大きな果実が押さえつけられて目に毒だ。

だが、今の蓮にはそんなのを気にする余裕は無かった。

令音はチェス盤にある白の兵士ポーンを動かして、黒の王キングの前に置く。

「…チェックメイトだ」

「あー！負けた！」

令音のチェックメイトの言葉を聞いて、蓮はイスの背もたれの寄りかかり天を仰いだ。

「…話を戻すが、あの二人は移動範囲と移動速度が原因で今まで接触出来た者はいない。つまり、彼女達と接触出来たのは千載一遇のチャンスだ。絶対にこの機会を逃さないでもらいたい」

「そう言われても、何をすればいいのやら…」

今までは士道が精霊を攻略する時は、対話できる状況やそこに連れて行くのを仕事としていた。

そのため、このように精霊と直接関わるのは初めてと言ってもいいだろう。

「…幸いにもアプローチは彼女達の方からしてくれる。君はそれに乗っかってくれればいい」

簡単に言ってくれる。そんな文句を心の中で思いながら身体を元の状態に戻す。

「精霊攻略になるんだったら、へフラクシナス」からの意見も聞いた方がいいんじゃないのか？」

「…今、へフラクシナス」とは通信が繋がらないんだ」

「繋がらない？理由は？」

「…それは分からない」

頼みの綱だったへフラクシナス」に通信出来ないとなると、精霊攻略を三人だけで行う事になる。

今までにないハプニングに不安で蓮の表情が歪んだ。

「…大丈夫だ、私も協力する。それに、君とシンならきつと出来るさ」

蓮も不安を察して、令音がポジティブな言葉をかけてくるが、その表情は笑顔ではなく、いつも通りの眠たそうな目だったので気持ちが明るくなつたかと聞かれれば微妙なところだ。

「…一つ気になったのだが、君はどのような人を尊敬…いや、どんな女性が好きなんだい？」

令音が話題を変えるように質問をしてきた。だが、その質問に蓮は少し頭を悩ませる。

「好みのタイプね…まあ、とりあえず頭のいい奴かな」

本気で言っているような、適当に答えているような曖昧な言い方で答える。

その返答に令音は首を傾げる。

「…頭がいい、ということとは君にチェスで勝った私も好み…ということになるのかい？」

「残念ながら、解析官殿攻略ルートは無いから」

そんなどうでもいい会話をしていると部屋の外からペタペタという足音が聞こえてきた。足音はこの部屋の前で止まり、続いて扉をコンコンとノックする。

「…どござ」



令音がそう言うと、扉が開く。

そこにはなぜか腰にタオルを一枚だけ巻き、全身びしょ濡れで寒そうにガタガタと肩を抱いて震えている土道がいた。

なぜそんな状況になったのか理解出来ない蓮を置き去りに令音は何やら考えを巡らせて、ポンと手を打った。

「…夜這いには、まだ早いのではないかな？」

「いや、いろいろとおかしいだろ」

令音にそうツツコミを入れ、蓮は指をパチリと鳴らす。すると、温かい空気が土道を包み込んだ。

土道は令音に任せて自分の部屋に帰った蓮は、本を読みながら時間を潰していた。

読んでいる本は、芥川龍之介あくたがわりゆうのすけの羅生門らしやうもんだ。

「善と悪か…」

この本は仕事がクビになった若い男が主人公だ。夜にその男は羅生門という門の下で真面目に生きるか、悪い事をして生きていくか悩んでいた。

その時、酷く痩せた老婆と出会う。その老婆に男が「こんな所で何をしている」と尋ねると、死人の髪の毛でカツラを作っているという。

当然ながら、そんなのは許される行為ではない。さらに老婆は蛇の切身を魚だと偽って売っているなどの悪事を告白する。

「生きるためには仕方ない」と言う老婆に、男は「ならば、その通りに生きさせてもらおう」と考え、その老婆の着物を奪い、暗闇に消えていった。という内容だ。

この話は、悩んでいた時に老婆と出会ってしまったから、男は悪の道に進んでしまった。なら、もしここで善人と出会っていたなら男は真面目に生きていったのだろうか。そんな疑問を持ってしまう内容だ。

本を閉じ、そう考えているとドアをコンコンとノックされた。一体誰かと思いい、ドアを開くとそこには意外な人物がいた。

「ほほう、自ら我を出迎えるとは、礼儀をわかっておるな」

「訪問。蓮に会いに来ました」

そこには浴衣を着た耶具矢と夕弦がいた。令音の言う通り、二人からのアプローチがきた。だが、二人ともやけに自信があるように見えるのが気になる。

「まあ、とりあえず部屋に入れ。ただお話しに来たってわけじゃないんだろ？」

「ふん、部屋に入れるからには存分にもてなすのだぞ」

「謝罪。耶具矢は初めて男性の部屋に入るので緊張しているのです。どうか多めに見てください」

「べ、別に緊張してないから！全然いつも通りだし！」

「失礼。お邪魔させてもらいます」

耶具矢を無視して、夕弦は部屋に上がりこむ。とりあえず、お菓子をを出してやり、机を挟んで座る。

「令音から聞いたぞ。蓮、貴様は知溢れる者を求めているそうだな？」  
笑みを浮かべながら耶具矢は言うが、正直な所、そう聞かれれば少し頭を傾げる問いだ。

それよりも令音のいつの間二人に教えたのかが気になる。

「なるほど、つまり俺と知恵比べがしたい…という意味か？」

「首肯。主が眷属よりダメでは話になりません。簡単なものでいいのでどうか勝負してくれませんか？」

まあ暇潰しにはなると思い、その勝負は受ける事にした。

だが、簡単なものでいいと言われても、どういった勝負をするか悩み、部屋に視線を泳がせているとある物を発見した。

「よし、じゃあアレで勝負するか」

そう言っ指差す先には、八×八のマス目で行われるゲーム。部屋に備え付けられていた『オセロ』のコマがあった。

二人の承諾を得て、勝負はこれに決まった。このゲームはシンプルだが、だからこそ頭を使うゲームだ。

最初の相手は耶具矢で、蓮がクロ、耶具矢はシロで勝負をスタートする事、十分後…

「ば、ばかな……この我が……」

耶具矢は信じられないといった様子で盤面を見ていた。

そこはクロのコマで埋め尽くされており、シロなど一つもない。

「残念だったな。コマを積極的に取りに行くのは良いんだが、もう少し細い所を見なきゃな」

最初は一度に二個取るなど調子が良かったものの、後半に入ると取れる数が減少していき、挙げ句の果てにどこにも置けないなどという状態にハマり、詰んでしまった。

「溜息。耶具矢は目の前の事ばかり見ているから負けるのです」

試合を見ていた夕弦はやれやれと呆れている。耶具矢はそんな夕弦に悔しいと様子の顔を向ける。

「ぐぐぐ……じゃあ夕弦は勝ってるっていうの？」

「解説。耶具矢は基本がなってます。オセロで重要なのは四辺の角。ここだけは自分が取ってしまえば相手に取られない安全地帯なのです」

コマがコロコロ変わるオセロだが、盤面の角だけはどんなに頑張っても取る事が出来ない箇所……つまり、ここを取れるかで試合の流れが大きく変わってくる。

「勝負。次は夕弦の番です。耶具矢のように簡単にはいきません」

耶具矢と場所を入れ替えて、自信満々で勝負を挑んでくる夕弦。この時の夕弦は自分は耶具矢のように惨敗はしない、そう信じていた。

さらに十分後……

「衝撃。これは……」

そう漏らす夕弦の目の前には、角の四つ以外、全てクロに染まった盤面があった。

勝負前に言った通り、夕弦は角を意識し、取れるチャンスは逃さずに確保したが四つ目の角を取った頃には盤面のほとんどがクロに染まっており、抵抗らしい抵抗は全く出来ずに終わってしまった。

「鬼ごっこで足が速いと確かに有利にはなる。だが、それは必勝法

じゃない。それと同じように角を取ったからって必ず勝てるって訳じゃないんだよ」

そう言って蓮は立ち上がり、旅行バッグの中を漁り、服を取り出していく。

「そんじや、俺は風呂に入ってくるから。オセロで勝ったら次はチェス。それに勝ったら下につくつもりだから、そういう事で」

サラツと絶望的な事を告げて、蓮は部屋を出て行く。扉が閉じた後、耶具矢と夕弦はガクツと肩を落とした。

—————

海に太陽が沈んでいく時間、巨大な浴槽はたった一人の貸切状態だった。

「ふう…悪くないな…」

肩まで湯に浸かり、蓮は小さく息をつく。

他の生徒の姿が見えないのは、普通の生徒が入浴するのとは別の特別な時間だからだ。言い方を変えれば蓮専用の時間とも言える。

誰もいないのは都合がいいのだが、この時間を用意したのはヘフラクシナスではないと令音が言っていたのが気になるところだ。

「まあ、どうでもいいか。そんな事は」

結果よければすべてよし。この時間があつたからこそ、修学旅行に行けたといつても過言ではない。

目の前には綺麗な夕陽が見える。蓮は周りに誰もいない事、誰も見ていないのを確認すると、右手に「バスター」を纏い、夕陽に伸ばした。

当然だが、太陽はこんな手に収まるほど小さくなどない。だが、今は確かに手に収まっていた。

(今、あの人は何をしているのか…)

ふとそんな事を考えてみた。あの人とはイギリスのDEMにいるとある人間だ。

DEMに拾われた時、蓮には一人も肉親がいなかった。もちろん母親も。

今の時代、親がいなくなれば行動に支障が出る。そこで一人の女

性が蓮の戸籍上の母親となった。

しかし、その女性とは幼い蓮にまともに構ってくれた事も遊んでくれた事もなかった。きつと、この関係は戸籍上だけのものだと、蓮以上に彼女が一番分かっていたのだろう。

ある程度大きくなると、DEMに興味を持つようになり、出来る範囲でこの会社の手伝いをするようになった。そこでその女性がDEMのとても優秀な魔術師ウィザードであると知った。

これを知った時、『だから自分に構ってくれなかったんだ』と勝手に解釈した。その時はもう一緒に遊んで欲しいとなんて考えてなかったし、そんな考えはその人が母親となって一週間もしないうちに消えて去っていた。

基本、蓮の事は放置していたが、別に彼女は蓮の事を鬱陶しがっていたわけではないし、欲しいと言ったものは用意してくれる。

それ故分からなかった。自分はどう思われていたのかが。

(まあ、あの人の事だ。元気にしてるだろ。最強最強うるさい人だったし)

その言葉で考えを終わらせ、目を閉じて何も考えないようにする。だが、彼は知らない。嵐がすぐそばまで迫っている事に。

## 26話

風呂を堪能し、疲れが取れた後、令音から土道の世話をするように頼まれた。なんでも海にダイブした所為で風邪を引いてしまう恐れがあるそうだ。

それでは今後の耶具矢と夕弦の攻略に支障が出てしまうため、土道を休ませてやってほしいとの事だ。

「海にダイブって何があったんだ？」

「いや…まあ、いろいろとあつてな」

感染を防ぐという理由で教員用の部屋で寝込んでいる土道の横で、蓮はリンゴや梨などを切りながら土道に問うが歯切れの悪い答えが返ってくる。どうやら深入りされると困る様子だ。

「しかし、あの二人はどうするんだ？解析官殿が言うには、もしどつちかの靈力を封印したらもう片方が気づくって話だが」

二人は元は一人の精霊だったため、片方に異常が起きれば、もう片方にもそれが伝わってしまうらしい。

だが、土道は絶望的と言った顔はしていない。

「それは令音さんに策があるって言っていたが…」

「ふーん、ま、他に手は思いつかないし、それを信じてみるしかないか」  
蓮はオレンジを差し出すように持った手を土道の前まで持つてくる。オレンジは皮が切っているわけではなく、あくまで普通に売っているのと同じだ。この行動の真意が理解出来ず、土道は頭ん？を浮かべる。

「まあ見てろよ」

そのままオレンジを潰れない程度の力で握りしめる。すると、シャリシャリと音が聞こえてきた。

その音は十秒ほど鳴り続いて消えた。土道は何の音かと疑問を持ったが、まるで心を読んだかのように、蓮は手に持ったオレンジの上の部分を切り落とす。

「えっ…これって…」

オレンジの断面図に光が反射する果肉はなく、その代わり、冷気を

放つシャワーベッドが存在していた。これには士道は驚きの声を漏らす。

「風邪を引かれたら困るからな。これを食べて元気出せよ」

そう言つて蓮はスプーンと一緒にシャワーベッドとなったオレンジを差し出してくる。驚きながらもお礼を言つてそれを受け取る。

やはり、出来立てで新鮮なものもあり、味はとても良かった。

「思つたんだが、なんで解析官殿は俺に看病をさせるんだ？自分でやればいいのに」

「ああ、それは…」

士道の言葉の途中でいきなり、部屋の扉が開き、浴衣姿の耶具矢と夕弦が姿を現した。

「くく…士道。貴様、どうやら風邪を引いたらしいな。あの程度で身体を病むとは貧弱な」

「看病。夕弦が助けに来てあげました。これでもう安心です」

何やら自信満々の二人が部屋に上がってくるのを見て、何故自分が呼ばれたか理解出来た。

令音は二人の行動パターンを調べられる、耶具矢と夕弦は士道と蓮にアプローチ出来るとお互い得する事になる。

「ほう、蓮もいたか。知略の遊戯では負けたが、今回こそ我の魅力の虜にしてやろう！」

別に蓮は病人でないのだが、これは二人に何かをされるといふふうを受け止めていいのかと悩んでしまった。

「否定。蓮は夕弦の虜となるのです。そして、夕弦にひざまずき、忠誠を誓うのです」

「ほう、かなり自信があるようだな。ならその理由を見せてもらおうぞ！」

こうして、士道の看病対決？の火蓋が切つて落とされた。

突然だが、蓮は記憶にある限り、ほとんど風邪や病気になつた事が

ない。

病気になるに難い体質であるからなのかは分からないが、とにかく、健康そのものの身体だ。

なので、もし、『風邪や病気になった人がいたら、どう看病する?』と質問されれば少し頭を悩ませてしまうかもしれない。

「ちよ、ちよっと待て!なんで布団に入ってくるんだよ!」

「くく…風邪の時はこのように温かくするのだろうか?」

それでも少なくとも、病人と一緒に布団に入って温かくすると考えた事も、それが正しいと思っただ事は一度もない。

「我が眷属の話によると、朝起きたら御主が布団にいたと聞いたぞ」

「ほお…後で詳しい話を聞こうじゃないか、土道」

耶具矢の言う眷属が十香であるとすぐに気づいた蓮は、指をポキポキと鳴らしながら土道に冷たい視線を向ける。

「ま、待って!それにはちゃんと理由があるんだよ!」

普段、蓮は十香を実の妹のように可愛がっているのを土道は知っている。もし十香に何かしたと知られたら、それは龍の逆鱗に触れると言っても過言ではない。

そんな土道の気持ちも露知らず、耶具矢は布団への進行を止めずにいる。

そんな攻防戦が繰り広げられる中、夕弦はゆったりとした動作で土道に近づくといきなり布団を剥ぎ取った。

「うわっ!いきなり何するんだよ!」

夕弦の突然の奇行に土道は驚きの声を上げるが、それを無視し、夕弦は土道の胸元を凝視する。

「指摘。土道は発汗しています。それでは気化熱により、体温が奪われます」

ここで夕弦はやつとまともな事を言ってくれた。当たり前のはずなのに蓮はそれに少し感動している自分がいるのを感じる。

タオルでも使って拭うのかと思ったが、夕弦はそれらしいものを持っている様子はない。

そして夕弦は何を考えたのか、土道の浴衣の胸元をはだけさせ、そ



ここに舌を這わせ始めた。そのせいで土道から女の子のような声が出る。

「ちよちよちよ、ちよつと！あんた何してんのよ！」

「疑問。汗を拭うにはこの方法が一番だと師に教わったのですが…」  
(…あの変態女か)

看病のほずが、カオスな現場となる布団。言いたい事はいろいろとあるのだが、二人は善意で行っているのでそこに口出ししようとは思わない。

すると、夕弦が何やら考えるような仕草をすると、立ち上がり自分の浴衣の帯を解いた。

『なっ…い！』

「おー、大胆」

解いた浴衣からはお揃いの下着が覗き、それに土道と耶具矢は狼狽の声を上げる。夕弦は土道のその反応に満足したらしく、次は蓮に向かって浴衣の裾を上げたりなどの誘惑するような仕草をしてくる。

しかし、蓮は驚きの声を上げるどころか、視線も逸らさずに真っ直ぐに夕弦を見つめてくる。

そのせいで、最初は何ともなかったが段々と夕弦に羞恥心が追いつき始めた。

「しゅ、羞恥。それほど見られるとこちらが恥ずかしくなってきました。まいます」

「ん？あー、綺麗で刺激的だと思うよ。まあ、感想はそれだけかな」

「傷心。夕弦の女の子としての部分が少し傷付きました…」

シヨボンとした様子で布団に潜り込む夕弦を見て、耶具矢は完全に後手に回ってしまった。

その状態を理解し、悔しいそうにぐぐぐと歯ぎしりをする。

「な、舐めんなああ！」

そして勇気を出して、自分の浴衣の帯を取り去る。

「な、なんで裸なんだよっ!!」

夕弦は下着とブラを着けていたが、耶具矢は何もつけていなかった。土道は慌てて目を瞑る。

「え？浴衣ってこういうものじゃないの？ていうか、蓮は驚くぐらいはしなさいよ！女としての自信が無くなるじゃない！」

なぜか怒りの矛先がこちらがに向いてきたのだが、ここまでくると反応するのも面倒くさくなつた。

蓮はリンゴを一つ手に取ると、皮切り三等分に分けた実を土道、耶具矢、夕弦の口に押し込んだ。

「むぐ…」

「はぐ…」

「咀嚼。モグモグ…」

リンゴを渡した後は、そのまま歩いて行き、部屋を出るドアに手をかける。

「それじゃ、もう帰るから。後は仲良くやつといて」

「ま、まさか、この状況を放置していくのか…」

「土道なら何とか出来るよ。グツバイ」

「やめてえ！置いていかないでええ!!」

叫ぶ土道だったが、無情にもそのまま出て行ってしまい、ドアがパタンと音を立てて閉じた。

—————

二日目は自由時間として、海の時間だ。この修学旅行で最大の楽しみとも言える事だが、土道には気楽に遊ぶことなど出来ない。

そして、今は令音が手配したプライベートビーチの砂浜に元氣無く座っていた。

「はあ…海は綺麗だな…」

「そんなもうすぐ死ぬ人間みたいに言うなよ」

まるで老人のように力なく呟く土道の独り言に後ろからツツコミが入り、後ろを振り向くと呆れた様子の蓮がおり、その格好は海なのにもかかわらず、水着にパーカーを羽織り、出来る限り、肌の露出を避けていた。

普段はあまり肌を出さないせいで、体つきなどは分からなかったが、こう見てみると土道と同じような体型で筋肉があるようには見え

ない。

だとしたら、この身体のどこにあんな重い剣を振り回す力があるのかとても不思議だ。

「どうしたんだ？人の身体をジロジロ見て」

「あ、いや、別になんでもない…」

「まあいいや。解析官殿から話は聞いてるぞ。昨日は随分と騒いだらしいな」

そう言う蓮の視線は土道の胸元の引っ掻き傷に向いている。嫌味と言うより、同情といった様子だ。

「これじゃ海にも入れねえよ。はあ…どうすればいいんだか…」

「まあ、俺も本来なら海に来る予定はなかったんだが、解析官殿がプライベートビーチを借りたって言ったからさ、人目を気にせずに遊べて気が楽だ」

まあ、頑張れと応援の言葉をかけて、蓮は海へ歩いていった。

土道はそれを特に理由もなく眺める。だが、蓮は海水が足首の高さまで来てもパーカーを脱ごうとはしなかった。

何を考えているのかと思った瞬間、蓮はいきなりジャンプして宙に舞う。

しかし、あくまで普通のジャンプであり、約一秒ほど飛んだ後、再び海面に向かって落ちていく。

だが、海水に足を突っ込む事は無く、まるで見えない板でもあるかのように水面に立つ。

それを見て、我が目を疑う土道だったが、よく見ると、波打ち際だというのに蓮の足元の海水が動いていないのに気がつく。凍りついているのだ。

へウイトリク…蓮が持つ武器の一つであり、水と氷を操れる能力がある。

この力で凍らせれば、泳ぐどころか濡れる事もなく沖まで行くことも可能だろう。

しっかりと足元が凍っているのを確認した蓮は、そのままスケートを滑るように沖の方に向かっていった。もし一般人に見られたなら

大パニックになる行為だが、ここは令音が借りたプライベートビーチ。人目は気にする必要はない。

お世辞にも普通とは言えない海の楽しみ方を見て、土道は開いた口が塞がらない思いをするのだった。

ある程度、砂浜から離れた場所まで歩いてきた蓮は、ふと立ち止まり空を見上げた。綺麗な青色の空と白い雲が漂っている。

イギリスにいた頃は海になど一度も行った事は無く、軽い感動を覚えていた自分がいた。

ある程度空を見た後、ヘウイトリクスの能力を操作して自分が立っている足元を自分ごと海に沈めるが、海水が蓮を濡らすことはなく、周りは透明の膜に覆われて海の中が断面図のように見える。

周りには泳いでいる魚の姿が見える。蓮はポケットからソーセージを取り出すとそれを千切り、海の中に放る。

すると、魚が群がり、小さな口でソーセージを啄んでいく。そんな光景を見て、小さく微笑んだ。

—————

ある程度時間が経過して砂浜に帰ると、令音、土道、耶具矢、夕弦。そして何故か十香、折紙がビーチバレーコートにいた。

令音がいるという事は、何かあるのだろうと考え軽い興味心で近づく。

「解析官殿、なーにしてるの?」

「おおーレンではないか!今までどこにいたのだ?」

蓮に気がついた十香が近づいて来たので頭を優しく撫でて落ち着かせる。

令音は手で影を作り、こちらに振り向くがフラフラとしておりいつ倒れてもおかしくない状態だ。

「…ああ、君か。ちょうどビーチバレーをしようと思ってチーム分けが済んだところなんだ」

「まあ、ここにいるって事はそうだろうと思ってたけど、チームはどうなったの?」

「…シン、耶具矢、夕弦が向こう側で後はこつちだ」

「あの二人がねえ…」

不安要素の塊のチームを伝えられ渋い顔をするが、あの二人に士道という組み合わせも令音の仕組んだ事なのだろう。

「…せっかく来たんだ。君にも参加してもらおうかな」

「え？でも俺がどつちかに入ったら、人数に偏りが生じるんじゃないか…」

「…ふむ、じゃあこうしよう。君は運動神経がいいからシン達のチームで助っ人をしてほしい。ピンチの時入ってくる切り札のような感じだ」

つまり、普段はコートに入っていないがいざという時にプレイできる。という意味だろう。だが、耶具矢と夕弦はそれにあまり納得していない様子だ。

「ふん、我にそんなハンデなど必要ない。蓮は貴様らにくれてやるぞ」「拒否。そんなものは必要ありません」

「…ふむ、一応、その間だけはレンは君たちの”手下”という事になるのだがね」

令音のその一言に耶具矢と夕弦は耳をピクリと動かす。

「ほ、ほう。そこまで言うならその条件で勝負してやらないこともないぞ」

「受託。そのルールでやりましょう。今すぐ始めましょう」

さつきまでとは百八十度態度が変わり、その条件で試合を始めようとする二人。蓮は文句を込めた視線を送るが、令音は隈の出来た目で見つめ返してくるだけだった。

「よし…ではいくぞっ！」

まずは十香が始まりのサーブを放つ。意外と普通の始まり方のため思ったより、苦労は少ないのではないかと予想して蓮は肩の力を少し抜くが…。

「なっ!?!」

十香の放ったボールがネットを簡単に突き破り、砂浜の上でコマのように踊って停止したのを見て、その考えはすぐに捨てた。

それを放った当人である十香はガッツポーズをしている。

「ふふん、二人ともへたっぴーだな！」

「そう思うのはルールを理解していないあなただけ」

折紙のいう事に耳を貸さず、嬉しそうにする十香だが、その一言が  
耶具矢と夕弦の対抗心に火をつけた。

「ほう：我が眷属といえど今の一言は見過ぎすことは出来んな」

「対抗。こちらにも手はあります」

そう言つて二人は同時にコートの外にいる蓮に視線を送る。当然  
だが、自分がこんなに早く呼ばれる事になるとは流石に予想出来な  
かった。

しかし、拒む事はせずに士道と交代でコート内に入っていく。その  
時、士道が安心したような顔をしたのを見逃さなかった。

「ようやく来たか、今だけとはいえ我と契約を交わせることを誇りに  
思うが良いぞ。クク…」

「期待。蓮が来たからにはもう負けはありません」

よく分からないが、二人からやたら頼りにされていることだけは伝  
わってくる。

試合はもう一度十香のサーブからスタートだ。

「む、レンが入ってくるとは。だが、手加減はせぬぞ。おりや!!」

十香の言う通り、さつきと同じの手加減無しのサーブが繰り出され  
る。だが、それに耶具矢がそれに滑り込みボールを上に乗ね上がる。

「おりや！夕弦!!」

「賞賛。ナイスです、耶具矢」

耶具矢が上に飛ばしたボールを夕弦がレシーブして、そこそこの高  
さまで上げる。

そこで蓮がその高さまでジャンプすると、まるで某超次元サッカー  
に出てきそうな強烈なオーバーヘッドキックを繰り出し、ボールを砂  
浜に叩きつけた。

ボールは砂浜に半分ほど埋まり、煙を出して止まった。

「うっひょー！あんたやるじゃない！」

「絶賛。とても素晴らしかったです」

「うむーやはりレンは凄いな！」

蓮が繰り出したスマッシュ（？）を耶具矢、夕弦。そして敵チームであるはずの十香が褒める。

「あれ？バレーってこういうスポーツだったっけ？」

いくらルールを気にしないお遊びの試合だとしても、土道はその疑問を抱かずにいられなかった。

## 27話

お世辞にも普通とは言えないバレエが終わり、蓮は人気のない砂浜に座り、目の前に広がる青い海を眺めていた。

海は大きな変化をしないのに、不思議と蓮を退屈させることはなく、彼をここに留める。

そこで蓮はある事に気がつく。自分に誰かが向かってこくる気配に。

「蓮よ。こんな所で何をしておるのだ？ もしや、貴様も”奴ら”の気配を感じたのか？」

話しかけてきたのは白レースに飾られた黒いビキニを着た耶具矢だ。

相変わらずの耶具矢に、蓮は苦笑いを浮かべ立ち上がり視線を合わせる。

「生憎、感じたのは耶具矢お前の気配だよ。それで、何の用だ？ こんな人気のない所に来たんだから、襲ってほしいのか？」

「ちよー！ 違うし！ そんな理由じゃないんだから！」

耶具矢は顔を真っ赤にし、身体を守るように腕で隠す。それを見て、蓮はやれやれと言った顔をする。

つついっ話を曲げてしまうのは自分の悪い癖だと反省し、改めて耶具矢に顔を向ける。

「それで、こんな所に来たからには何か理由があるんだろ？」

「わ、私があんたに会いに来たのは明日までに決着がつく、この勝負に話があつたからよ」

「ここで耶具矢が『自分を選んでくれ』なんていう賄賂紛いな事をするのかと予想したが、その予想があつさりと裏切られることになる。

「あんたさ、夕弦を選んでよ」

一瞬、声を上げそうになるが、それに耐え目を見開く程度に留める。

蓮はあまり驚いた様子を見せたつもりは無かったが、動揺は耶具矢に伝わったらしく溜息をするように軽く微笑んだ。

「あんたもそんな顔するんだ…。いやさ、夕弦つて超美人じゃん。胸も大きいし、少し無愛想な所が玉に瑕だけどそれ以上に可愛い所や良



い所がたくさんあるのよ」

そこまで言った所で耶具矢は『それに…』と言ってさらに言葉を続ける。

「夕弦だって、土道や…あんたみたいな良い男が付いていたら、しっかりと自信が持てると思うのよ」

ただ夕弦相手の事を考えている耶具矢に言いたい事はたくさんあった。しかし、蓮が聞いた事は一つだけだった。

「耶具矢、この勝負で負けた方は相手に取り込まれて消えてしまうんだろ？お前は死ぬ事が怖くないのか」

それを聞いた耶具矢は、肩を竦めて少し笑った。

「そりゃあ怖くないって言ったら嘘になるけど、夕弦が幸せにこれからを生きれるって思うと平気よ。…我との盟約はしかと伝えたぞ。これを違えた時、この代償は命で払ってもらおうぞ！」

最後に思い出したようにポーズと台詞を言った後、耶具矢は去っていく。その背中を見て、蓮は小さく呟く。

「この世で死を克服できる生物なんていないんだよ、耶具矢。」

耶具矢との会話のせいでも海を見る気分が無くなってしまったので、気分転換とばかりに飲み物を買に行く事にした。

浜辺から少し離れた自販機でお金を入れ、スポーツ飲料を購入し、戻ろうとした時。

「制止。止まってください」

声を掛けられそつちに顔を向ける。そこには耶具矢とは白黒が反転した水着を着た夕弦がいた。

「夕弦か…こんな所にどうしたんだ？飲み物が欲しいなら買ってやるぞ」

「否定。夕弦は飲み物が欲しくてここに来たのではありません。蓮にお願いがあつて来たのです」

夕弦の”お願い”という言葉にわずかに眉をピクリと動く。しかし、夕弦はそれに気づかず言葉が続ける。

「請願。この勝負、是非耶具矢を選んでください」

「耶具矢を…か？」

「復唱。夕弦ではなく耶具矢を…です」

声も出ない…とはまさにこの事だろう。耶具矢と夕弦は、相手を救うため、全く同じ事を頼んで来たのだ。それを分かっているとしても蓮はこの質問を夕弦に言った。

「そうしたらお前は消えるんだぞ、それで良いのか？」

「首肯。それでも耶具矢が生きてくれるならそれでも構いません。耶具矢にはこの世界の事をもっと知って欲しいのです。そのためなら恐怖はありません」

耶具矢と全く同じ願いを言い、同じ返答をする夕弦に何も言えなかった。これほどお互いを大切に思っているのに、生き残るのは片方だけという定めがとても残酷に思えてしまう。

「念押。明日は耶具矢を選ぶと言ってください。さもなくば蓮には一生太陽を拝めない人生が待っています」

最後に何気に恐ろしい事を言つて夕弦は去っていく。蓮は手に持った飲み物を強く握つてその背中を見つめていた。

—————

時が経過し、夕食後の自由時間。外は夜の帳が下りて暗闇となっている。蓮は部屋に寝転がり、意味もなく宙を眺めていた。

すると、部屋のドアがコンコンとノックされる。誰が来たのか確認するためにドアに向かうが、蓮には誰が来たのか、おおよそ検討はついていた。

ドアを開けると、やはりそこには暗い顔をした土道がいる。

「少し、話したい事があるんだ」

その顔に似合うほど暗い様子…というより悩んだ様子でそう言う。土道がこんなのも耶具矢と夕弦に言われたあの事が原因なのだろう。「言いたい事は大体分かるよ。あの二人の勝敗に関してだろ？」

その言葉に土道の顔が沈んだ感じから、驚愕といった様子に変わる。

「まさか…お前も二人から言われたのか？」

「…場所を変えよう。あの二人には聞かれたくない話だ」

旅館の中での話は聞かれる恐れがあるため、少し手間がかかるが外に抜け出して話すのが安全そうと判断する。

外出は許可されていないが、令音に言えば何とかなるだろう。それに言い方を変えれば人がいないという考え方も出来る。

「だいたい話は分かっているよ。あの二人がお互いを生かすために相手を選べって言うてきたんだろ」

夜の砂浜を歩きながら蓮は話を切り出す。土道はそれを聞いて首を縦に振って首肯する。

「…蓮は明日、あの二人のどっちを選ぶんだ？」

もしここで蓮が片方を選ぶと、土道もその方を選ぶと直感的に分かった。土道は今、悩んでいる。そのためその判断を他人に委ねようとする。その行動はのちに後悔しか残らない事を蓮は知っていた。

「…俺は精霊を救う組織、ヘラタトスクの一員で、司令官はお前の妹である五河 琴里だ。その司令官殿から『無茶する兄貴を助けてやってくれ』っていう命令をされている」

土道の質問には答えず、自分の現状を言い聞かせるように説明してくる。

「だから、その質問に答えると、『お前の答えに従う』だな」

「はは…なんだよそりゃあ…」

予想した答えのはるか斜め上をいく答えに呆れた声が土道の口から漏れる。しかし、蓮はさらに言葉を続ける。

「土道、お前は どうしたい？ 耶具矢を救いたいのか？ 夕弦を救いたいのか？ それとも…。俺はそれに協力するだけだ」

「どうしたいって…それは…」

よく考えてみると、どちらかを選ぶという言葉に惑わされ自分なりの答えを考える暇が無かった。その答えを考えると、後ろから声が聞こえ、振り向くと浴衣姿の十香がこちらに走ってくる。

「十香？ なんでこんな所に…」

「二人が居ないから、どこに行ったか知らないかと令音に聞いたら外

に出かけたと聞いて、追いかけてきたのだ。何やら話し込んでいたようだがどのような話をしていたのだ？」

「ああ、実はな…」

土道は十香に勝負の内容は伏せながら、耶具矢と夕弦が精霊であり、お互い生き残りをかけた勝負をしている事。そして二人が相手を選ぶように頼んできた事を説明する。それを聞いた十香は難しそうな顔を浮かべている。

「ふむ…そうなのか…。それはレンにも同じ事をしてきたのか？」

十香の問いに首を振って首肯する。それを見て十香は考え込むように唸る。その時。

「しっ!!」

蓮がいきなり足を止め、土道達に静かにするような仕草をする。何事かと思い、蓮の視線の先を見て土道は息を詰まらせた。

「なっ！耶具矢！」

そこには顔を俯けた耶具矢が立っていた。一瞬、もしかしたら聞かれてなかったかと淡い希望を抱くが、次に耶具矢が発した言葉でそんな考えては捨てた。

「私を…選べですって…何言ってるのよ…」

憤怒を孕んだ声音に思わず顔が強張るのが分かる。土道がそんな耶具矢を落ち着かせようとするが効果をあるようには見えない。

蓮はこの状況をどうしようか悩むが、運が悪い事に火に油を注ぐ事態が起こってしまう。

「なっ…夕弦!？」

後ろにいた土道からこの場に一番いて欲しくない人物の名前が聞こえ、後ろを振り向く。そこには耶具矢と同じく顔を俯かせた夕弦が立っていた。その様子から、夕弦も話を聞いていた事が分かる。

「復唱…夕弦を選べと…耶具矢はそう言ったのですか？」

「ヤバイ！二人共伏せろ!!」

嫌な予感を感じて土道と十香を掴むと、無理矢理地に伏せさせる。それと同時に凄まじい風が吹き荒れる。そして、精霊がその力を振るう時に感じる、あの不思議な感覚だ。

耶具矢と夕弦は最初出会った時と同じ霊装を纏い、耶具矢は右肩に、夕弦は左肩に無機質な翼と腕に手甲が構築されて、それぞれ巨大な槍と菱形の刃のついたペンデュラムが握られる。精霊の武器、天使だ。

二人は嵐のような風を撒き散らし、空に上がりお互いに刃を向けあう。出来るのなら、今すぐにこの戦いを止めたいのだが、今の蓮には空にいる二人の元に行き、止めさせる手段は残念ながらない。声を出そうにもこの風の中では届くかすら怪しい。

何かに手はないかと考える蓮に何やら妙な音が聞こえた。風の吹き荒れる音や何かが吹き飛ばされた音ではない。例えるなら機械音のような無機質な音だ。

音の聞こえた方向に顔を向けて、蓮は心臓が止まったような錯覚を感じる。

そこには金属の装甲を纏い、頭部はフルフェイスヘルメットになっていて顔は無く、人型をしているが腕部がアンバランスなほど大きい。

そんな人形が十体ほど並び立っていた。

「な、なんだ……いつらは……ッ！」

耶具矢と夕弦に呼びかけていた土道もこの存在に気がつき、驚きと警戒を合わせたような声を出す。だが、蓮は知っていた。この人形達の名前を……

「バンダー……スナッチ……」

その眩きは、風にかき消されて土道や十香には届かない。だが、土道の問いに蓮では無く、別の存在が答えるのだった。

「バンダースナッチ……と言っても、あなたには分からないでしょうか」

〈バンダースナッチ〉の陰から、この修学旅行の随行カメラマンであるエレン・メイザースが姿を見せた。土道と十香はいきなりのエレンの出現に驚いた様子だが、蓮だけはそれに小さく息を詰まらせ、土道の前に一歩後ずさる。

「あの二人が〈ベルセルク〉という事にも驚きましたが、あなたがこの

ような茶番をしているのにも十分驚きましたよ」

小馬鹿にするように言うエレンの見つめる先には蓮がいた。

「メイザース執行部長……」

その会話を聞いて土道は困惑の視線を向けるが、蓮は答える事無く、ずっと視線をエレンに向けている。

「あなたがそこらにいる普通の少女に心を許すとは思えません。その理由を見せてもらいます」

エレンのその言葉を合図に、〈バンダースナッチ〉が十香に向かって襲いかかる。蓮はすぐに左手に〈レットクイーン〉を展開して、これらを撃破しようとするが、それより早く十香が限定霊装を顕現させ、<sup>サンダルフィン</sup>〈塵殺公〉で薙ぎはらう。

十香にとつては自分の身を守つただけの行動だが、今の状況では一番の悪手となつてしまった。

「〈プリンセス〉、やはり本物でしたか……。十香さん、私とともに来てくださいませんか？ 最高の待遇をお約束します」

「ほざけ！ 誰が貴様なんかと！」

エレンの誘いに十香は<sup>サンダルフィン</sup>〈塵殺公〉を突きつけて拒絶する。だが、エレンは残念と言つた様子どころか、まだ手があるとはかりの顔だ。

「そうですか。ならやり方を変えましょう。命令します。〈プリンセス〉を連れてこちらに来てください。」

それは十香では無く、蓮に向けての言葉だった。それを聞いた本人は苦笑に満ちた表情だ。

「休暇はもう終わりです。〈プリンセス〉と一緒に居たとすると詳しい事情も聞かなければなりません」

「……休暇は三年の約束だったはずです……それはあなたの一存で決められる事なんですか？」

そう言いながら、蓮はエレンにバレないようにこっそり携帯端末を右手で取り出し、土道に見せるように腕を後ろに回す。画面はメール入力になっており、一切画面を見ず、素早く指を動かして文字を打ち込む。

指が止まった時、画面にはこのように記されていた。

『土道、十香を連れて今すぐにここを離れろ』

土道はどういう意味なのか、聞きたい衝動に襲われるが、知られたくないからこのように伝えているのだと思出し、何とか耐える。

文字を打っていた間も、エレンの命令に煙を巻いていたが、それも限界だ。

「あなたが〈プリンセス〉と深い仲というのは調べがついています。抜け目ないあなたの事ですから、こう話している今も逃げるように促しているでしょう」

狙いが見抜かれていた。それを知り、蓮の顔に動揺が走る。

「さあ？なんの事ですかね」

「いつものあなたなら『買いかぶりすぎです』と答えたでしょう。そのような曖昧な回答をしたのは動揺が原因です。その右手は何をしているのですか？」

狙いもその手段も完全にばれた。だが、エレンはまるイタズラの犯人を見抜き、くだらないとばかりに呆れた顔だ。

「あなたがしたくないと言うなら別に構いません。音に聞こえた〈プリンセス〉がどのようなものか興味があります」

エレンが両手を広げると身体が淡い輝きに包まれ、機械の甲冑のようなC R ユニット、〈ペンドラゴン〉を纏い、背中に装備された巨大な剣を抜刀し、十香を挑発するように手招きをする。

「舐めるな！」

「よせー十香！！」

蓮の忠告も虚しく、十香は地を蹴り、エレンに〈塵殺公〉サンダルフィンを振り下ろす。だが、エレンはそれを片手で楽々と止める。

それを見て十香は苦悶に満ちた顔をするも、攻撃を緩めず、続けるがエレンには傷一つつけられない。

「そんなものですか〈プリンセス〉。期待外れです」

ここでエレンがレイザーブレイドで初の反撃をする。十香は〈塵殺公〉サンダルフィンを構えて受け止めようとするが、ブレイドと刀身が触れたと同時に剣が砕け散った。

目の前の出来事に放心する十香に、さらに攻撃し、十香を吹き飛ば

して地面に倒れ伏す。

「所詮、こんなレベルですか。早くへアルバテルへに運び込んでください」

エレンの言葉に従うようにへバンダースナッチへが十香に向かっていく。土道も十香の元に駆け寄ろうとしても他のへバンダースナッチへに阻まれて近寄れない。

その時、十香に最も近づいていた一体のへバンダースナッチへがいきなりの火花を噴いて地面に倒れる。突然の出来事に土道もエレンもその方向に目を向ける。

「…一体なんのつもりですか?」

エレンが鋭い眼差しを向ける先には、へレッドクイーンへを持ち、十香を守るように前に立っている蓮の姿があった。



## 28話

それは自分の始まりとも言える出来事。

何年前の何月何日だったのかはよく覚えてはいない。しかし、その時の事はまるで昨日のように覚えている。

あの時、ベッドに座った自分をあの人は微笑みながら見下ろしていた。

『君がこちらに来ると決断してくれて、私はとても嬉しいよ。そうすると、君には戸籍上の親と名前が必要だね。親はこちらで何とかするが、名前となると何がいいか…』

あの人は腕を組み、考えるような仕草をして唸る。そして、一分ほど経過した頃だろうか。腕を解いて、自分の頭を優しく撫で始めた。『今日から君の名前は……だ。そして、私も君の家族の一人になろう』

その言葉に、自分は小さく……だが、確かに頷いた。

「……一体なんのつもりですか?」

風が吹き荒れる中、エレンの怒気を含んだ声が聞こえてくる。それを聞いてもなお、蓮は表情は変えずに倒れた十香を守るように立っていた。

「私の命令を拒否しただけでなく、邪魔までしてくるとは、遊びのつもりでも笑えませぬね」

「…俺はただ、自分が正しいと思っただけです」

こうは言うがその中に緊張と恐怖が混ざっていることが伝わってくる。エレンはへバンダースナッチの間を通過して蓮の前に立つ。

「やはり、アイクがあなたを外に出したのは失敗だったようです。あなたは普通の兵士として扱ってはいませんが、『精霊と出会った時は容赦せずに殺せ』と教え込んだ筈はず。それすら忘れるとは…懐柔させられましたね!」

エレンは蓮に人間離れした脚力で一瞬で目の前まで移動すると、手に持ったレイザーブレイドを振り下ろす。しかし、蓮もとても人間と

は思えない反射神経で反応し、ヘレッドクイーンでブレイドを受け止める。

(くっ…相変わらず剣が重い…)

「ほう…外に出ても鍛錬を怠っていたわけではなさそうですね。ですが、それだけです!」

力任せにブレイドで押し切られて、数歩後退する。だが、そうなくてもエレンに対して怯む事無く、すぐに反撃に向かう。

後退したことにより、開いた距離を一瞬で縮めエレンに斬りかかる。

「押されても向かってくる威勢は見事…しかし、剣筋が単純ですよ」

エレンの言葉に耳を傾けず、凄まじい速度で剣を振る。彼女相手に守備に徹していて勝てるほど甘くないと知っているからだ。その攻撃も腕だけ動かしてエレンは淡々と防ぐ。

「あなたは昔から防御より攻撃の方が好きでしたね。それでは…」

エレンがブレイドを振り上げると、ヘレッドクイーンが弾かれ、地面に突き刺さる。剣は地面に刺さると光となり消滅する。それを見た土道は信じられないとばかりに目を見開いた。

「私には勝てません」

冷静にそう言うと、エレンは左足で強烈な回し蹴りを繰り出し、それは蓮の右脇腹を直撃する。随意領域テリトリーによって強化された蹴りは蓮を吹き飛ばして地を這わせる。

「ヘバンダースナッチ隊。二人を回収してください。これだけの事をしたので、帰ったらそれなりの罰を受けてもらいます」

ヘンドラゴンを解除したエレンはそう指示した後、腕を組み、二人にヘバンダースナッチが群がっていくのを傍観する。

土道はそんな光景を見ている事しか出来ない。

「くそっ…てめえらそこをどけ!」

しかし、目の前に立ち塞がるヘバンダースナッチは全く動かない。そうしている間にも十香の苦しそうな声が聞こえてきた。

(俺は…こんなにも無力なのか…)

精霊を救ってきた事による自惚れが心のどこかにあったのかもし

れない。だが、そんなのはただの思い込みだった。

狂三の時もそうだ、あの時、土道は見ている事しか出来なかった。蓮が来なければ取り返しのつかない事になっていただろう。

そして今も蓮と十香がこんな危機的状況になっても何も出来ずにただ見ている事しか出来ない。それが無力で…歯痒く…とても悔しかった。

今だけで構わない。二人を助けられる力があればと強く願う。

「くっそおおおおおおお!!」

次の瞬間、土道が右手を振り上げると、目の前にいた〈バンダースナッチ〉と延長線上にいる十香を抑えていた〈バンダースナッチ〉が切り裂かれて地面に倒れる。

突然起きた現象に驚きながらも土道は振り上げた右手に視線を向けると、光り輝く剣…十香の〈サンダルフィン塵殺公〉と同じものが握られていた。

「これは…〈サンダルフィン塵殺公〉…?」

「シ、ドー…?な、なぜシドーが〈サンダルフィン塵殺公〉を…?」

〈バンダースナッチ〉が倒れた事により、土道の姿を見れるようになった十香も驚きの声を漏らす。だが、この中で一番動揺していたのは土道ではなく、エレンだった。

「それは天使…?なぜそんなものを…あなたは何者です…?」

「五河 土道…一応、人間のつもりだ…」

「…気が変わりました。あなたにも来てもらいましょうか」

さっきまでとは打って変わり、エレンは好奇の目で土道を見て、〈バンダースナッチ〉に指示を出す。二機の〈バンダースナッチ〉を破壊したとはいえ、他にも数機残っているうえに十香を簡単に倒したエレンもいる。まだ、助かったとは言えない状況だ。

その時、蓮を囲んでいた〈バンダースナッチ〉の間から青い光が漏れたかと思うと、まるで爆発でも起きたかのように吹き飛ばされた。その中心には右手に〈バスター〉を顕現させた蓮がいた。

すぐに状況を確認すると、一直線に十香のところに向かう。

「十香、絶対に立ち上がるな!」

地面に倒れている十香にそうとだけ言い、〈バンダースナッチ〉に

突っ込んでいく。その途中、左手に炎が噴き出し、柄が繋がっている薙刀を形作る。炎と熱を操る剣、ヘトナティウだ。

素早く十香の元までたどり着くと、蓮は自分の身体をコマのように回転させ、剣の刃を全方位に届ける。当然、周囲に立っていたへバンダーズナッチはその刃を受けるのだが、切られた箇所がまるで焼き切られたかのようにぼんやりとオレンジ色の傷痕を残し、火花を散らす事無く地面に倒れる。

「その力は…」

エレンが驚き、動きが止まっている隙に蓮は十香を立たせ手を掴むと土道の元へ走っていく。

「土道！今のうちにここを離れるぞ！」

「あ、ああ！」

この状況でエレンと戦うメリットは皆無だ。なら、急いでここを離れるのは当然の選択とも言える。三人は森の中へと走っていく。

不思議なことにエレンが追いかけてくることは無かった。

—————

森の中をしばらく走り、三人は足を止めた。後ろを確認するがやはりエレンが追いかけてはいなかった。ひとまず逃げ切れたと判断し、大きく息を吐いて気を緩める。

「くそっ…まさかあの人とこんな所で再会するとは…」

そんな中、蓮だけは今だに難しい顔をしていた。そんな蓮を見て、気になっていた事を聞いてみる。

「なあ、蓮はあのエレンさんと顔見知りらしい様子だが、どんな関係なんだ？」

それを聞いて蓮は悩むように三秒ほど天を仰ぐ。そして顔を土道に向けた時、その顔は見た事ないほど真剣な様子だった。

「…そうだな。こんな事に巻き込んでしまったんだ、二人には知る権利があるな…」

おそらく、エレンを呼び込んだのは自分が原因だろう。なら、事情も分からない二人はしっかり説明しなければならぬだろう。エレンと自分の関係。そして、自分の本名を。

「士道。前に今名乗っているこの名前が本名じゃないって話をしたのを覚えているか？」

「あ、ああ、確か、結構前にそんな事言っていたよな…」

「それを覚えているなら話は早い。十香もちゃんと聞いていてくれ。俺の本名は…」

「ジエイク・L・メイザース。あの人…エレン・メイザースは俺の義理の母親だ」

「はあああああ!?!」

開いた口が塞がらないとはまさにこの事だろう。その言葉の意味が分かるほど士道は驚愕していた。

「俺の本名は誰にも言うなよ。今まで通りに蓮って呼んでくれればいいから」

「は、母親って明らかに歳は俺たちと同じぐらいだったぞ！なのに母親って…」

「だから、戸籍上の関係だと言っていろいろだろうが」

軽くパニック状態の士道にちゃんと分かりやすく説明する。一方、十香はというと…

「ジエ、ロウ、メザス？レンは随分と変わった名前なのだな」

頭の上に？マークを浮かべてた様子だ。そんな十香の頭を苦笑いしながら優しく撫でる。正直な話、別に名前は覚えてくれなくても構わないと思っっている。大切なのは本名を話したという事実だけなのだ。

「でも…その、もし母親だったら気まずい関係にしちまったな…」

士道は申し訳なきような様子で言うが、蓮は特に気にしてないと言った様子だ。

「あの人とは親子の情なんてものは無いよ。だから、十香を守るため、あの人に剣を…殺意を向ける事が出来たんだ」

情なんてない。そう言えてしまう以上、義理という関係だけでない。蓮とエレンは普通の親子という関係とは何かが違うのだ。その言葉の重みに士道は息をのむ。

だが、凄まじい突風により、視線を空に向けられる。エレンの出現で忘れていたが、まだ耶具矢と夕弦の二人が空で相手を生かすための戦いを繰り広げている。

「どうする士道。二人は空にいる。これじゃ初めて会った時にみたいに勝負に割り込むことは不可能だ。何かが他の手を考える必要がある」

「他の手って言われても…そうだ！ここから二人の注意を向けることが出来れば、まだなんとかなるんじゃないか!？」

「なるほど、荒っぽいが、やる価値はあるか…」

そう言う蓮の右手に光が集まり、サンダルフィンへトラウイスが形成される。これならこの嵐の中、二人の注意を向けさせることが出来るだろう。

剣を構えて意識を集中させる。へトラウイスが光り輝き、それを振ろうとしたその瞬間。

「ぐっ…」

「ど、どうしたのだレンー！」

突如蓮の顔が苦痛に染まり、地面に膝をついてしまう。いきなりの出来事に十香が駆け寄ってくる。そして、右脇腹を抑えているのを見てその理由を察した。

「はあ…本当に容赦ないなあの人…。普通テリトリ随意領域で強化した蹴りを出してくるか…」

蓮は苦しい表情の中、自虐気味にぎこちない笑みを浮かべる。エレンの蹴りにより、一番下の肋骨にヒビを入れ、身体に少なくないダメージを与えたようだ。これくらいには慣れているので重傷ではな

いが、へトラウイス」ほどの剣を振るうのは無理だろう。

「悪い、土道。バトンタッチだ。お前がその〈塵殺公〉サンダルフィンで二人を止めるんだ」

「止めろって…きつきのは…」

〈バンダースナッチ〉を倒した時は無我夢中だったため、もう一度やれと言われても出来る自信など無かった。

「土道、お前がしたい事を強く願ってみろ。それは偽善だなんて誰にも言わせない絶対の思いだ」

「強く…願う…」

自身の手握られている〈塵殺公〉サンダルフィンを見つめてそう呟く。

蓮は今振る事の出来ない自分の剣を〈塵殺公〉サンダルフィンに向かって投げる。へトラウイス」はまるで磁石のように〈塵殺公〉サンダルフィンに引かれ、一体化するように消滅する。

すると、〈塵殺公〉サンダルフィンはへトラウイス」の力を取り込んだかのように大きく光り輝く。

「お、おい…一体何を…」

「十香、俺の事はいいから、土道を助けてやってくれ」

驚く土道を放置し、十香にそう頼み、蓮は近くの木の根元に座り込んで楽な姿勢をとる。今、大きな脱力感が身体を襲ってくるが、目を閉じず、土道と十香をジッと見つめる。

土道は十香に助けってもらうように〈殺公塵〉サンダルフィンを二人で握り、雄叫びのような声とともに空へ振り下ろす。

その斬撃をなぞるように光が飛んでいき、風を裂き、耶具矢と夕弦を遮るように空へ向かい、雲を吹き飛ばし、隠れていた月を出現させる。

月の顔を出すと、光は役目を終えたとばかりに破裂し、小さな粒子へととなり雪のように周囲へと降り注ぐ。月が出ているのもあり、それはとても幻想的な光景だった。

あの二人もさすがにこれを無視する事は出来ないだろう。そう確信し、安心したような笑みを浮かべて蓮は目を閉じた。

「うっ…うっ…」

苦しげな声を出して蓮は目を開ける。出来る限り身体を休ませるために目を瞑ったのだが、いつの間にか気を失っていたらしい。

目が覚め顔を上げると、十香の顔がアップで映っていた。

「おお！目が覚めたか。いつの間にか気を失っていたからビックリしてしまったぞ」

ホツとした顔の十香に支えられてゆっくりと立ち上がる。まだ身体は気だるいが動くのに支障はなさそうだ。まだボンヤリする頭を振って意識をしっかりとらせる。

「すまないな十香。…土道と八舞姉妹はどこに行ったんだ」

周囲を見渡しても三人の姿が確認できない。それを疑問に思い、十香にそう聞くと、十香を待たせて土道は耶具矢と夕弦と共にどこかに行ってしまったという。

蓮は三人がどの方向に歩いて行ったか聞き、その向きに進んでみる。すると…

「う、うきやああ！」

耶具矢の悲鳴らしき声が聞こえ、その声がした場所に行ってみると、全裸の耶具矢と夕弦が手で胸元を隠し、その場にうずくまっており、土道は何やら慌てた様子だ。こんな森の中だから良かったものの、街中では間違いなく警察へGOとなっていただろう。

「これからお楽しみか？土道」

「蓮!?目が覚めたのかって…いや！違うんだこれは！」

事情は知っている相手に言い訳するのはおかしいだろうというつつこみを心の中に止め、蓮は全裸となった耶具矢と夕弦の元へと歩いていく。二人も蓮の存在に気がついた様子だ。

「蓮、あんた気を失ってたから心配してたのよ」

「羞恥。恥ずかしいのであまり見ないでください」

蓮が二人に近づいたのは、この光景を脳に焼き付けるためではない。自分の両手が勝手に動き、二人の両肩に触れる。すると、今までと同じ、両腕を何かが登ってくる感覚を感じる。

「な、なによ…あん！この感覚…」



「恍…惚。んっ…あっ…」

勝手に動き、二人の肩に触れた手を無理やり引き離す。すると、その右手と左手に光が集まり、何かを形作る。

光が収まった時、その両手に手のひらに収まりきらない三つの刃を持った手裏剣らしき武器があった。

〈エカトル〉

風を操り、目標に自動で向かう投擲武器。風は刃だけでなく、別の目標に纏わせることも可能。

風を纏い、飛翔するその姿はまさに二つの小さな台風。

試しに両手の〈エカトル〉を投擲してみる。すると、四人を中心にまるで綺麗な円を描くように、木を切り倒しながら周りを一周する。蓮の手に再び収まったと同時に切り倒した木が音を立てながら地面に倒れる。土道と耶具矢、夕弦はそれを目を丸くしながら見ていた。

「悪くない武器だな」

そう評価し、〈エカトル〉を光の粒子にして分解させる。その直後、ここに近づいてくる足音が聞こえた。誰かがここに歩いてきているのだ。

「むう…この辺りからなにやら大きな音が聞こえてきた気がするのだが…」

そう呟いて顔を見せたのは待つているはずの十香だ。そして、全裸の耶具矢と夕弦を見た途端、顔を真っ赤に染めた。

嵐の修学旅行の最終日。帰りの飛行機に乗るため生徒達は空港に来ていた。お土産を買う生徒が見える中、蓮は頭を悩ませながら、空港内の椅子に座っていた。

「…DEMに十香の正体がばれたか。さて、どうしたもんか…」

正体を知ったのが普通の魔術師ウィザードだったらどうにかなったかもしれないが、相手がエレンというのが非常に都合が悪い。

もし、運命が実在するとしたら、ここが大きな分岐点となったのが

想像出来る。

「レン！見てくれ！こんなものを買えたぞ！」

そんな思考は、十香の元気いっぱいの声で中断させられた。声のした方向を見るとそこにはたくさんの土産店の袋を持った十香がいた。あれほどの体験をしたというのに全く気にしてないと言った様子だ。

「そうか…それは良かったな」

「レンは何を買っていくのだ？」

「そうだな…司令官殿にイナゴのつくだ煮でも買っていこうかな」

渡した途端、間違いなく絶叫が飛び出す土産を考えて十香と共に歩き出す。とりあえず、エレンの事は後で考えればいい。そう自分に言い聞かせて。

買い物を終え、クラスの集合場所に向かう途中、思わず二度見してしまった人物達と出会った。

「耶具矢と…夕弦？」

「発見。蓮を見つけました」

夕弦がそう言うと、耶具矢もそれに反応し蓮の前に立つ。二人は〈フラクシナス〉に收容されたはずなのだが、なぜここにいるのだろうか。この旅に最後まで付き合わなければ我らの面子も立たぬではないか。

「この旅に最後まで付き合わなければ我らの面子も立たぬではないか」

笑いながら、まるで心を読んだかのように疑問に答える耶具矢。本人がそう言うのなら止める理由はないだろう。

「それに、我らがお主に聞きたい事があるのだ」

「聞きたいこと？」

「勧誘。蓮は夕弦達の共有財産になりませんか？」

夕弦の発言に思わず、はあ？と変な声を出してしまう。その言葉の意味を耶具矢は笑みを浮かべながら説明した。

「土道は我らにあれだけの事をした故にこの契約は拒む事は出来ぬ。だが、お主には尊敬から選択の権利を授ける。さあ、これを受け入れれば我ら二人が貴様を満たしてくれようぞ」

ここまでくると、怪しい宗教の勧誘に聞こえるのが不思議だ。その勧誘に蓮は首を横に振り、拒絶の意思を示す。「残念ながら、オセロで自分に勝てない相手の下につくつもりはないな」

皮肉であり、高いハードルでもあるその条件に八舞姉妹の顔がギクツといった様子に歪む。そんな二人を微笑しながら横を通り過ぎていく。

その後、打倒蓮のため、二人がオセロの特訓に明け暮れたのは別の話である。

## 29話

「レンは一体どのような家に住んでいるのだ!？」

学校の終業式が終わり、明日から夏休みという浮かれた雰囲気教室で十香に突然、そんな事を聞かれて思わず目を丸くした。

「いきなりどうしたんだ? 十香に俺の家に興味を持たせるような事を言った記憶はないんだが…」

「あ、いや…その…もつとレンの事を知りたいと思ってな…。その…迷惑…だったか?」

恥ずかしそうにしながら上目遣いでこちらを見つめてくる十香。その破壊力は言葉に尽し難く、このような顔を向けられて『迷惑だ』と言える人間はそういないだろう。

だが、こんな時は土道が『あまり無理を言っちゃダメだ』などと保護者のような事を言ってくるかと思いい、十香の後ろに立つ土道に視線を向けると頬をぽりぽりと掻きながら、頼むと言った視線を向けてくる。

本音を言うと、土道も蓮がどのような家に住んでいるのか興味があつたのだ。

「どんな家に住んでいるんだって聞かれても、普通の家なんだが…。分かったよ、明日案内するから」

お許しが出て、十香は嬉しそうな表情を浮かべる。そこで蓮は何かを思いついたかのように『あっ!』と小さく声を出し、顔を土道へ向けた。

「そうだ。司令官殿、四糸乃、八舞達も誘っておいてくれ。明日、みんなでウチに泊まりに来いよ」

その日、土道は家に帰るとその事を四人に伝えたところ、全員即答で行くと答えた。蓮はあまり自分の事を話したりしないためこのよな事ですらとても気になるらしい。それを考えると、彼が土道と十香に本名を教えたのはまさに信頼の証と言えるだろう。

全員が行くと決まると、それぞれ着替え等の準備をするように伝え

る。宿泊といっても泊まるのは一日だけなので荷物もそんなに重くない。

明日の準備を整え、忘れ物がないのを確認した士道は自分の部屋のベッドに寝転んで天井を眺めていた。

脳裏に浮かぶのは修学旅行の時に遭遇したエレンというウイザード魔術師とその息子である蓮の事だ。

「もしかして…あいつは分かっていたのか？自分がエレンに勝てない事を」

圧倒的力を持つ精霊と対峙した時でさえ、余裕の表情をして冷静に相手の動きを読む蓮だが、あの時だけは明らかに動揺して様子が違った。

それにエレンの言動から、二人が戦ったのは初めてではなかったらしい。そして、蓮が負けるのも。

間違いない。蓮は自分の帰る場所を潰して士道と十香を守るってくれたのだ。

そこまでしてくれたというのに、士道はその恩をまともに返すことが出来ていなかった。だが、そんな事を一番辛いはずの蓮に言っても、ため息を一つして、『そんな事、お前が気にする事じゃない』と強がるかもしれない。

そんなのを想像して、士道は小さく笑うのだった。

蓮の家は学校から士道の家の近くを通り少し歩いた場所にあった。下校中たまにそのまま士道の家に訪れる事があるのだが、学校からの距離として考えるとそこその距離だ。

士道の家を待ち合わせ場所として、荷物を持った六人（プラス一匹）は蓮に案内されて住宅街を進んでいく。

「琴里はどんな家に住んでいるのか知らないのか？」

談笑しながら進む中、士道は琴里にそんな質問を試してみた。琴里は〈フラクシナス〉の艦長、一応蓮の上司の関係のため、もしかしたら知っているのかと思ったのだが琴里は渋い顔をする。

「そりゃあ、調べようと思えば調べられたけど、私だって、無許可で他

人のプライバシーに踏み込みたくないわよ。多分、知り合いの中であいつの家を知っているのは、四月に蓮を連れてきた神無月ぐらいじゃないかしら」

「じゃあ、どんな家だと思っただ？」

「さあね。もしかしたら腰が抜けるぐらいの豪邸にでも住んでるんじゃない？」

考えずに明らかに適当といった様子で答える琴里を見て、土道は苦笑いを漏らす。学校から十五分ほど歩いただろうか、何回かの曲がり角を曲がった時、蓮は足を止めた。

「あれが俺の家。まあ普通の家だけだな」

そう指差す先には土道の家と比べて、二倍…いや三倍はあるであろう大きな家があった。その大きさゆえに周囲から浮き、異彩を放っている。『もしこれが普通なら、一般的な家はどうなるんだ』土道達は間違いなくそう思っただろう。

「ふ、ふん。我ら八舞を迎え入れるのに、は、恥じぬ大きさではないか」

「指摘。耶具矢、声が震えていますよ」

「ふあ…とても大きいです…」

各方面が驚く中、蓮はそれを気にせず家の門を開けて土道達に入るように促す。別に悪い事をしていないわけではないはずなのに、コソコソといった様子で門を通る六人を見て思わず苦笑いを浮かべる。

やはり、家の大きさに比例して庭もかなりの大きさだ。ここに住んでいる人間が一人だけと言うのだから驚きだ。

「別に泥棒じゃないんだからそんなにコソコソしなくてもいいぞ」

アドバイスらしき一言を言い、蓮は鍵を取り出し玄関のドアを開ける。開けた瞬間、土道達は木造の独特の香りを感じた。

イギリス出身と聞いていたので、洋風かと予想していたのだが日本独特の木造の作りらしい。

家の玄関からは木造りの長い廊下があり、その脇には複数のドアが見える。この見た目通り、部屋の数も普通の民家の何倍もあるだろう。

そして、ここにやってきた土道達を『ニャー』と声を出して出迎え

る、小さな同居者が姿を見せた。

「おお！猫ではないか！」

『あらら、ミルクちゃんじゃなーい。元気だったかなー？』

「知らない奴が多いと思うから紹介するよ。うちのペットのミルクだ。ちなみに女の子」

それを見た途端、十香が興奮したような声を出す。蓮は廊下をチョコチョコと歩いてきたミルクを抱えてまるで招き猫のように、右前脚をクイクイと動かす。その姿はとても愛くるしい。

「せっかくだから抱っこしてみるか？そんなに人見知りしないと思うから」

抱えたミルクを十香に優しく渡す。最初は緊張したような様子だったが、すぐに十香に慣れて顔をペロペロと舐め始めるとくすぐったそうにしながらも嬉しそうな顔をする。

「あら、素直で可愛いじゃない。飼い主とは大違いね」

「…まさか、司令官殿に言い返せない皮肉を言われる日が来るとは思わなかったな」

「人懐っこいんだな。俺にも抱っこさせてくれよ」

そんなに十香を見て、土道も撫でてみたくなりミルクを受け取る。土道の腕の中に収まった瞬間、ミルクはピクリと反応して土道の顔をジツと見つめる。何かと思いつめ返すといきなりスツと腕の上で立ち上がると、土道の顔に猫パンチを叩き込んだ。

「うわっーちよっーいきなりどうしたんだ!？」

強烈なパンチに目を瞑り、顔を背ける土道。両手で持っているため手でガードする事も出来ない、まさに一方的に殴られるサンドバッグ状態となっている。六発目のパンチが入ったと同時に蓮がミルクを土道の腕の中から抱き上げて救出する。

「いきなり嫌われたな。顔が気に入らなかつたんじゃないか」

笑いをこらえながら言う蓮。顔を肉球マークだらけにした土道は、家に入ってすらいけないというのにドツと疲労がのし掛かってくるのを感じた。

家に入った六人は、廊下を通り家のリビングまで案内された。リビングには人が五人は座れるであろうサイズのソファアが鎮座しており、その少し前には大きな存在感を放つ大型液晶テレビがあった。

部屋には別室に通じる入り口があり、暖簾のれんがかけられているのを見ると、恐らくキッチンに通じていると予想できた。

そして現在、土道、琴里、蓮は部屋にある六人まで座れる机に座ってコーヒーを飲み、四糸乃とよしのんはミルクと一緒にソファアに座りながら遊んでいた。そして、十香、耶具矢、夕弦はというと…。

「ぐぬぬ…、我を翻弄するとは、さすが夕弦と言っておくぞ…」

「嘲笑、このゲームの王はこの夕弦です。とう！特殊射撃でフィニッシュです」

「のわああああ!!」

耶具矢の変な声を上げると同時に、テレビの画面に『FINISH』と表示されて耶具矢の操っていたキャラが大爆発して消滅する。それを見て十香は次は自分の番だとせがんでいた。

そんな光景を眺めていると、向かいに座った土道が気になった疑問を聞いてきた。

「ええつと…記憶が曖昧なんだが、蓮は普段はゲームはしないって言ってたよな、なんでこんなにゲーム機があるんだ？」

四月、精霊攻略のために恋愛ゲームで訓練した時、『普段はゲームはしない』と言っていたのを思い出す。だというのに十香達がしているゲームを含めて四機ほど、テレビがある台に置いてあるのが見える。しかも全て最新型だ。

「これ全部送られてきたものだから買ったわけじゃないから」

「送られてきた？一体誰から？」

「いろいろな奴から」

答えになっていない回答に土道の頭上に？が浮かぶ。すると、さつきから腕を組んで考えるような仕草をしていた琴里から質問が飛んでくる。

「この家、随分立派じゃない。この家を建設する時のローンとかは今も払ってるのかしら？」



「いんや、ローンは一括払いで全部払った。借金があるっていうのはあまり気分がいいもんじゃないから」

士道は驚きのあまり『一括払い!?』と思わずオウム返しをしてしまったが、琴里は驚きの声を出さず、次の質問をしてくる。

「これは失礼を承知で聞くんだけれど…あんた個人の総資産額ってどのくらいか教えてくれないかしら」

「お、おい…琴里、さっきはプライバシーとか言ってたか…」

大きく踏み込んだ質問に士道は戸惑いの声を出す。蓮はこの質問で琴里が何を狙っているのかがなんとなく分かった。『家に来た』というイベントを機に出来る限り自分の事を聞き出そうという考えなのだろう。

この質問にはどうとでも答える事は可能だが、嘘をつく理由がない。

「総資産…つまりこの家にどれくらいのお金があるかっていう意味か。どのくらいあったかな…」

そう言いながら、そばにあった家具の引き出しから貯金通帳を取り出して琴里達に渡す。通帳のページを開けた瞬間、士道の顔が驚愕に染まり、琴里が目を見開いた。

「まさかと思うんだけど…これ、作り物じゃないわよね」

「そんなわけないだろ。それでどれくらいあったんだ？」

蓮自身も普段から通帳の残高など把握してないので琴里達が見ているのを覗き見る。そこには数えているとつい数え間違ってしまうほどのゼロが並んでおり、これが二人のリアクションの理由なのだろう。

「ふーん。まあ、そこらにしまってたものだとかこれくらいの金額か」

「いやいやいや！こんな大切なものそんな不用心な場所に置いてあったらダメだろ！」

「DEMって、こんなに給料が貰える会社だったかしら…」

これほどのものを泥棒に警戒することなく、無防備な場所にしまってた蓮に士道から説教が飛んでくる。そんな時…

「決闘、蓮このゲームで夕弦と勝負です。夕弦が勝ったら蓮には眷属となつてもらいます」

「へえ、俺に勝負を挑むとはいい度胸だ」

夕弦とのゲーム対決という建前でそれから逃げ出す。土道はやはり蓮は自分たちとは価値観などが大きくズレているのを再確認させられるのであった。

「極限の希望をくれてやるッ！」

「悲鳴、きやあああ」

ゲームで一通り遊んだ後、六人を寝室まで案内した。この家には一人しか住んでいないため当然ながら部屋は空きまくっている。

この家にはベッドが複数ある寝室があるため、十香、四糸乃、琴里、耶具矢、夕弦という部屋割りとなった。

そして午後六時半、良い子も悪い子も空腹で腹の虫が暴動を起こす時間だ。当然だが、料理を作るのは蓮だ。

その際、この人数のため夕飯を作るのを手伝うと言ったのだが、『客人に料理を作らせるのは失礼だ。テレビでも見ててくれ』と言われるて断られた。

そして、リビングにあったの暖簾のれんの掛けてあった部屋に蓮が消えて十五分後……。あたりに食欲をそそる香りが漂い始めた。

「よし、出来たぞ。この人数だから少し時間がかかったが」

そう言つて机に置いた皿には薄黄色に染まり、卵、肉などが混ざつたチャーハンが盛り付けてあった。香りの正体はこれだったらしい。

『い、いただきます…』

そのチャーハンから感じる不思議なオーラに戸惑いながら、レンゲを取り口に運ぶ。その瞬間、一同は『美味しい』という感想を言う前に二口目を口に運んでいた。

「う、うまい…なんだこのチャーハン…」

「お、美味しいです…」

「美味、手が止まりません」

一心不乱に食べる六人を見て、満足そうな顔をする蓮。先に言っておくが料理に高級食材を使用したとか、とても高い器具を使用したなどというわけではない。どこにでもある食材と器具を使って良い料理を作るのが立派なのだ。

「ほはわひい<sup>おかり</sup>だ<sup>だあ</sup>あー！」

一番最初にお代わりを要求したのは十香だった。ただ、まるでハムスターのように口の中いっぱいチャーハンを詰め込んだため顔が面白いことになってしまっている。

「はいはい、まだまだたくさんあるから、落ち着いて食べて大丈夫だぞ」

笑いながらそう言っつて、蓮は十香の皿を持ってキッチンに消えていった。

### 30話

蓮の家は夕食後に風呂に入る派だ。そのため、夕飯が終わると先に風呂を沸かして、その沸く時間を利用して食器などを洗うという無駄のない時間の使い方をしている。

当然、洗い物が終わった頃には風呂はいつでも入れる状態になっているので、浴室の場所を教えた後『風呂が沸いたら好きな時に入ればいい』と皆に伝えたのだが…。

「ってあれ？風呂が沸いたら入っていいって言ったはずだよな？」

暖簾から顔を出すとテレビゲームに夢中になっている十香、耶具矢、夕弦とミルクにおやつをあげている四糸乃、テーブルでくつろぎチュッパチャプスの棒を啜えた琴里の姿が見えた。土道は洗い物を手伝ってくれているためキッチンにいる。

「客人の私達があんたよりも先にお風呂にはいるのは流石に遠慮を知らなすぎるわよ」

「んー、まあそう言うなら、先に入るよ」

琴里にそう言われて着替えを取りに部屋を出て行く。蓮は気づかなかった、その時の琴里の口元が悪魔のように歪んでいた事に…。

「ふう…風呂を作った人間は素晴らしいな。特にお湯に全身浸かるなんて発想はそうそうできるもんじゃない」

木で出来た浴槽に腰を下ろしてリラックスする。浴室はシャワー三つに、大人が三人両手両足を広げてもスッポリ納まる大きさの浴槽という風呂場というより銭湯のように思える場所だ。

いつも思うのだが、これほどの大きさにする必要性を一人暮らしてはほとんど感じられない。

(日本には大は小を兼ねるっていう言葉があるし、小さすぎるよりはマシなだけだな…)

頭の上に乗せたタオルで流れる汗を拭いた時、いきなり脱衣所の扉が勢いよく開いた音が僅かに聞こえた。その音にピクリと耳を動かす。

次にゴソゴソと服を脱ぐような音が聞こえてくる。

(一体誰が：もしかして土道か？いや、それはそれで問題があるような…)

土道はクラスメイトからおホモだち疑惑が囁かれている。もし風呂場に入ってくるようならその噂は間違いなくクロとなってしまう。

そんなどうでもいい事を考えていると、今度は浴室のドアが開く音が響き、ヒタヒタと床を歩く音が聞こえてくる。姿を確認しようにも湯気が濃く、ドアから浴槽までの距離が開いているのもあり、確認出来ない。

もし土道だった場合、顔面にパンチでも食らわせようかと思いい右手を握る。だが、その拳が放たれることは無かった。

「んんんー。風呂場が大きいというのは素晴らしいものだな！」

聞き覚えのある声とともに視界いっぱい十香が映し出される。当然ながら、服は脱いでタオルを身体に巻いただけという無防備な姿であり、膝まではあろう美しい夜色の髪は短く結んでおり普段は見えないようなじがとても綺麗だった。

蓮から見えるという事は当然だが十香からもこちらの姿を確認する事が出来る。バツタリと遭遇した二人には声を発することも動くこともない謎の二秒の硬直が発生した。そして…

「なつななななつーー」

顔をトマトのように真っ赤に染めて脱兎のごとく素早く浴室から出て行ってしまった。正直、殴られるぐらいは覚悟していたのでこの反応は予想外だった。

「す、すすすまん！琴里が誰も入っていないと言っていたから入ったのだが、まさかレンがいたとは！」

ドア越しにこうなつた理由を説明する十香だが、これではまるで立場が逆だ。実を言えば、十香もなぜこのような行動をしているのか自分でも分からなかった。

土道の家に一時的に住んでいた時も同じような状況になったことがあるが、その時はとっさに土道を湯船に沈める事が出来た。しかし、今回は蓮が相手となるとなんだかこちらがイケナイ事をしている

気分になり、思わず逃げ出してしまった。

そんな十香とは逆に蓮は狼狽することなく、いつも通りの様子だ。「司令官殿が…ね。OK、事情はよく分かったよ。十香は悪くない、だから謝らなくていいよ」

謝る十香に慰め(?)の言葉をかける。すると、そこから何か考えるように小さく唸ると、次の瞬間とんでもないことを十香に言った。

「そうだ、十香がよければいいんだが…身体、洗ってやるよ」

まるで『手を繋ごう』みたいな軽いノリで放たれたそれに、ドア越しの十香の顔がさらに真っ赤になる。だが、それほどの羞恥を感じても十香は浴室へのドアを少しだけ開けて中を覗き込んだ。

—————

(ど、どうしてこうなったのだ…!)

風呂椅子に座り、緊張のあまり背筋と腕をピンと伸ばした十香は心の中でそう自問した。背後では腰にタオルを巻いた蓮がスポンジを泡立てている。

「それじゃあ、痒いところがあつたら言ってくれよ」

スポンジが泡立つと、そう言っただけで背中を洗い始める。最初は緊張していた十香だったが肌や相手の事を考えた優しい洗い方が心地よく、小さく息を漏らす。一人暮らしだというのになぜ他人の身体を洗うのに慣れているのかが不思議だ。

「ふう、次は後ろから前を洗わせてもらうけどいいか?」

背中を洗い出して数十秒後、その一言で十香の緊張の糸が再びピンと張りつめる。

「ま、まままま前を洗うだ?!」

「前に回らないから心配しないでいい。どうしても嫌だったらそう言っても構わないから」

恥ずかしいのに不思議と嫌とは言えずに首、肩と洗っていく。そしてお腹を洗っている時、ハプニングが起こった。

「ひゃっ!」

洗っている蓮の腕が偶然、十香の胸にペトリと当たってしまった。くぐったのと驚きから思わず妙な声を出してしまう。その事で後ろ

にいる蓮から謝罪の言葉がかけられる。

「おつとー……ごめんな十香。後ろからだど気づけなくて……」

「べ、別に気にしなくても！いい、いいぞ……」

そう言うが一番気にしているのは明らかに十香だろう。自分以上に意識している十香を見て、小さく苦笑いを漏らす。

十香の身体が泡まみれになった後、シャワーを取り出してそれを洗い流す。

「よし、洗い終わったぞ」

本音を言えば十香の髪も洗いたかったのだが、これ以上すると冗談抜きで緊張のあまり十香が気絶してしまいそうなので自重するしかない。

仕事を終わると蓮は立ち上がり、浴槽に入り十香に背中を向ける。流石に十香が浴槽に入るのを凝視するのは見られる本人も嫌だろう。

十秒ほど、気持ちを落ち着かせたであろう時間が過ぎ、チャップンと十香が湯船に入った音が聞こえる。しかし、ここで蓮の予想外の事が起きた。十香が蓮と背中合わせになるような位置で腰を下ろしたのだ。

「十香？」

「う、うるさい。どこに座ろうが私の自由だろう……バ、バーカ……」

十香の精一杯の強がりや機に二人の間に数秒無言が続く。一応言っておきたいのだが蓮も全く緊張していないわけではなく、それを隠すのが得意なだけだ。しかし、女子と二人きりで風呂に入っているというシチュエーションで話す課題など何があるだろうか。

だが、意外にもその沈黙を破ったのは十香だった。

「レ、レンよ……。ま、前にあった……シユガークリヨコ修学旅行で起きた、あの事について……聞いておきたいことがあるのだ……」

震える声で言った修学旅行という言葉で、十香が何を話そうとしているのかが予想できた。間違いなくエレンの事だろう。

「私とシドーを守るため、あのエレンとかいうカメラマンの前に立ち塞がってくれた……。それはとても嬉しいのだが……もし、そのせいで……レンは自分の帰る場所が無くなってしまった……そんな気がするのだ

…」

エレンが親だという事は十香に伝えてある。つまり、十香は蓮とエレンが戦ったのは自分が原因だと思ってしまうらしい。自分も危険だったはずなのにそれでも他人を心配するなど、士道に似てきたなと感じる。

「十香、俺には自分と同じ年齢の友達と呼べる存在がほとんどいない。十香達を除けば両手の指の本数で足りるぐらいかな」

なぜここで自分について話し始めたのか蓮本人にも分からなかった。ただ、十香に自分の事を知ってほしい、その想いだけが蓮を動かしていた。

「変な話だけど、友達の作り方っていうのがよく分からないだよ」

現在ASTにいるミリイことミルドレッド・F・藤村は彼女からの熱烈なアプローチのおかげで今の関係だし、士道の実妹である真那はDEMという会社の中で接するうちに親しくなっただけであり、自分から親しくなろうとした事もそう努力したことも記憶にある限り一度もなかった。

「そんなに…難しかったのか…?」

「十香ほどじゃないんだが、俺も一般的と言われる生活を送ってた訳じゃなくてな。ただ、人と出会う機会には恵まれてた。それでも…ダメだったんだ」

「そうか…そうだったのか…」

「でも、そんな俺を十香が変えてくれた…」

背中合わせになっている十香を左手を湯船中でそつと握る。握った瞬間、その手がビクツと震えたのを感じた。もしかしたら自分も無自覚な緊張で声がいっつもの様子と違うかもしれない

「十香の事は四月に初めて会う前から知っていたんだが、…直接会って分かった。この人も自分と同じで孤独なんだなって…」

蓮には尊敬している人間はいても、安心してこの身を委ねる事が出来る人間はその時いなかった。それゆえ直感的にそう感じる事が出来た。

「そんな十香がいろんなものを見て、感じて、素直に笑っているのを見



ていたらこんな自分が急に恥ずかしくなっただ」

一種の劣等感というものだろうか。毎日を明るく過ごしていく十香を見ていると何もない灰色の中で生きてきた自分が小さく感じ、十香に憧れをもつようになった。

そう思っても何も変わらない。そう分かっていたつもりだがその未練はなかなか断ち切れず、大きな悩みとなりかけていた。

そんな時に起きたのがエレンの一件だ。

「正直、あの人に勝てるとは全く思えなかった。それでも黙って見ているという選択肢は無かった。これは親子の情が無かったとかいう理由じゃない。ああしなきやいけない、そう信じる事が出来た」

そう言うと、蓮は十香の方に身体を向けると、十香の首に腕を回してギョツと優しく抱きしめた。

「ツッ！、ー！」

十香は抱きしめられた瞬間、自分の心臓が大きく鼓動したのを感じる。首に回された白い腕は一般的な男性の腕と比べて細いだろうがその腕の中にあると言葉に出来ない安心感が十香を満たした。

「だから…十香はそんな事心配しなくてもいい。むしろ礼を言いたいのは俺の方だよ。…ありがとう、俺に十香を守らせてくれて…」

耳元で囁くように言うと、最後に少し強く抱きしめた後、腰にタオルを巻いて蓮は浴室から出て行った。

部屋の中には顔を真っ赤にし、頭から湯気を出してフリーズした十香だけが残された。

「みんな集まったわね。これからあなた達に聞きたい事があるわ」

全員入浴を済ませて自由の時間となつている午後九時。この時間、琴里は士道と蓮を除いた精霊達四人を自分の部屋に集めていた。

ここで明るいガールズトークが始まるかと思われるかもしれないが、それにしても琴里の顔は真剣味が帯びている気がする。

「聞きたい事って…一体なんでしょうか…？」

『琴里ちゃんったら顔が怖いことになってるよー？リラックスリラックス』

「我らを呼び出したのと、お主の雰囲気からただ事ではないと感じるぞ…」

「溜息。耶具矢はなんとなくでそう言っているだけです」

四糸乃は琴里の雰囲気になんとも怯え、よしのんは相変わらないうつた様子だ。耶具矢はこのような雰囲気を楽しんでいる様子で、そう言う夕弦も心なしか声に高揚が見える。

「みんな…蓮をどう思ってる?」

「復唱。蓮を…ですか?」

「どう思ってるって言われましても…最初はちよつと怖い人かなって思いましたけど…実際は優しく気さくな人だなんて思いました」

『四糸乃は蓮くんを頭を撫でてもらうのが好きなんだよねー?』

よしのんにそう言われて四糸乃は頬をほんのり赤く染める。二人の言い方や内容から蓮の事をとても好んでいる様子だ。続いて八舞姉妹に顔を向けると、何やら悩んでいる様子だ。

「ううむ…蓮の事となるとなんとも言えぬ。あやつは見せているところよりも隠している部分の方が多い感じがするのだ」

「隠している部分?と言うとどんな感じかしら?」

「回答。簡単に言うとミステリアスです。なんか嘘を言っても一瞬で看破されてしまう気がします」

二人は出会ってあまり時間が経過していないため良いところというより、蓮自身の印象を言ったらしい。

そして、最後に残った十香はというと…

「……………」

さつきからボーっとした様子で何もかも空中をずっと眺めていた。名前を呼んでもずっと放心状態だ。仕方なしに十香の目の前で両手を叩く…いわゆる猫騙しをして意識を覚醒させた。

「はっ!なんだ!?きな粉パンは表面はカリッとしているのに中身がモチモチなのが良いところだと思っぞー!」

「誰もそんな話してないわよ。さつきからどうしたの?上の空って感じじゃない」

「どうしたと言えば…琴里よ、お主はなぜそんなに頬を腫らしている

のだ?」

間に入ってきた耶具矢の指摘にそういえば…と言った様子で目を合わせる夕弦と四糸乃。今、琴里の両頬はまるで引つ張られたかのように赤く腫れていた。当然、この家に来る前は腫れてなどいかなかったはずなのだ。

「ああ…これは気にしなくていいわ。ちよつと白い悪魔にやられただけだから…」

「し、白い悪魔…?あの…もしかしたらですけど…十香さんがこんな様子なのと何か関係が…」

「そ、そんなわけないじゃない!た、ただの偶然よ!!」  
「ひい!?!」

琴里の必死の否定に四糸乃は小さく息を漏らした。そんな様子の琴里だったがすぐに大きく深呼吸をして気を落ち着かせる。へフラクシナスの艦長である琴里はある程度の感情のコントロールが出来なくてはならない。

「ごめんなさい、取り乱したわ。本当に関係ないの。…話を戻すけど、十香は蓮の事をどう思っているの?正直に言って構わないわ」

「れ、レンだ?!あいつがどうかしたのか!?!」

「疑問。どう思うかと聞いただけなのに、なぜそんな反応をするのですか?」

やたら蓮という名前に敏感に反応する十香を不思議に思う夕弦。気を落ち着かせて考え始める十香だったがその時間が耶具矢と夕弦が答える以上に長い。しばしの時間を消費し、小さな声で十香は答えた。

「あいつは…もしかしたら一人ぼっちなのかもしれん…」

「蓮さんが一人…ですか?」

「あやつが孤独とな?ううむ…イマイチそう思えんが…」

「首肯。それを本人に言っても『レストランのメニューでそんなのがあっても、注文するほど好きじゃない』とか言うと思います」

そんなはずないと三人は否定するが、琴里だけは十香を見る目が違っていた。

(そう…十香はあいつの悲しみを知ることが出来たのね…)

心の中でそう確信すると、ワイワイと盛り上がるこの場をなだめた。蓮の印象を聞くのもあったが、四人に集まってもらった目的は別にある。

「まあ、蓮については謎が多い現状だけど、今はこうやって家に招いてもらっているわ。これはチャンスよ、今から少しだけこの家の探索に行かないかしら？」

琴里の提案に目を見合わせる四人。興味があるかないかと聞かれればあるに決まっている。しかし、ここは自分達の家ではないので調べ回っていいのかと悩むところだ。

「琴里よ、探索と言うが、蓮にも見られたくないものがあるやもしれぬぞ？それを探し回るといのは…」

「探索って言っても、部屋をかき回すってわけじゃないわ。ただ、少し気になった部屋があるから、一緒に来ないって聞いているのよ」

「参加。夕弦は行きます。蓮も男です、もしかしたらアツチ系の本の一冊や二冊出てくるかもしれません」

最初に参加したのは夕弦だった。その参加理由はどうかと思っただが、夕弦が参加する以上、耶具矢も参加すると言い、十香と四糸乃も悩んでいた様子だが、好奇心という欲望に耐え切れずに参加となった。

部屋を出た五人は、懐中電灯を持った琴里を先頭に灯りのない暗い廊下を足音を立てずにコツソリと進んでいた。

『なんか、こういうのワクワクするねー。なんか、潜入してる感じがしてー』

「まったく、部屋に向かっているだけなのにその表現は大袈裟よ」

よしのんにそう言う琴里だが、明らかに一番ノリノリなのはどう見てもその琴里だろう。ついさつきも廊下を曲がる時、手鏡で進む先を確認していたほどだ。

「それで琴里よ。我らをどこに導いているのだ？そろそろ目的地ぐらいは教えてもらいたいものだが…」

「安心しなさい。もう着いたわ、ここが私の気になったところよ」

そう言つて琴里は懐中電灯である部屋の扉を照らす。そう言うが、扉自体に気になるような箇所はなく、さつきまでいくつも通過してきたのと同じものだ。これを見ても四人は眉を顰める。

「むう？普通の部屋ではないか？」

「えつと…これのどこに…気になるところがあるのでしようか…？」

「実は明るいうちにこの家の部屋を見て回ったんだけど、トイレと玄関以外に鍵があつたのはこの部屋だけなのよ」

琴里のその言葉に、四人はドアノブ付近に目を向けると確かに鍵穴があつた。それでも普通の家ならそこまで気になるような事というわけではないのだが、ここはそこら辺の引き出しの中に貯金通帳を放置しているような家なのだ。そんなところでカギのある場所となれば当然、注意が向くだろう。

琴里は手に持った懐中電灯を夕弦に預け、懐からヘアピンを取り出すと、それでも鍵穴をガチャガチャと弄り始める。

数分後、カチツと音と共に、鍵が解錠された。そのテクニクに一同から驚きの声が出てくる。一応言っておくが、これは犯罪行為だ。

「ふう…やつと開いたわ。ほら、入るわよ」

ドアを開けると、入口付近にあるはずの電灯のスイッチを手探りで探し、スイッチをいれる。その瞬間、部屋に灯りがついたのだが、目の前に広がった光景を見て、五人は息を呑んだ。

「なによ…これ…」

「ふあ…すごいです…」

部屋にはたくさんの本棚が壁沿いにあり、書物の数は部屋の大きさと本棚の数から百冊は超えるだろう。本棚に囲まれるように部屋の中央には高級そうな机と椅子があり、机の上にはそれまた高そうな照明ランプが置かれている。

「そ、それじゃあ、手分けして探しましょう。何かあつたら教えて頂戴」

「探索。ああいう本はこのような場所に紛れ込ませるのが、ベストな隠し方だと夕弦は判断します」

これを見てもマイペースであり続ける夕弦を羨ましく思いながら、散って探索を始める。まず、目に入ったこの本がどのようなジャンルなのか確認するため、一冊抜き取って見たところ、表紙には『心理学』という単語があった。

一冊目を元に戻し、二冊目を手に取ると、『工学』と記されていた。三冊目は『経済学』だ。

(…どうも種類に纏まりがないわね。これじゃあ何について学んでいいのか分からないじゃない…)

琴里が頭を悩ませている頃、十香は本棚に注意が行かず机の上にあったランプをまじまじと見ていた。LEDなどが主流の今、昔ながらのデザインであるランプが珍しく感じたからだ。

ランプから垂れ下がった糸を引くと、パチリという音と共にオレンジ色の暖かい灯りが灯る。それが気に入り、何度も灯しては消し、灯しては消しを繰り返していると…

「な、何!? なんの音!？」

急に大きな音が部屋には響き渡り、まるで映画のセットであるかのように本棚の一部がひとりでに動き始め、地下室らしき部屋へ通じる階段が現れる。これには全員顔を見合わせて驚いた。

「十香! でかしたわ! まさかそれがスイッチだったなんて驚きだけど、よくやったわ!」

「くくく…さすが我が眷属よ、褒美はたっぷり弾むぞ!

呆気にとられる十香に賞賛の言葉が向けられる。現れた部屋は階段を降りた少し先にあり、その階段を降りて扉を開ける。

部屋には電気機器の部品やパーツらしきものが散乱しており、本来ならば驚くところなのだが、これほどの出来事が連続すると、感覚が麻痺してくるため、目を見張るだけで済む。

それでも、ここで蓮が何をしているかが気になる。探索を開始しようとした時、夕弦があるものを指差した。

「発見。あれはなんでしょうか?」

その先には机の上に置かれた立方体の透明な水晶があった。透明と言っても無色というわけではなく、若干水色が混ざっており形は手

のひらに収まる程度の大きさだ。

「これ、何かしら？部屋を飾りつける装飾品と言うには地味な見た目ですし、かと言って意味もなく置いてあるようには見えないけど…」

五人は水晶を凝視して、これがなんなのか正体判明を始める。隠し部屋を見つけた五人にこれが無意味な物だと考える選択肢は無かった。しかし、どんなに見てもただの水晶にしか見えない。

「疑問。これは一体なんなのでしょうか？」

「もしかしたらですけど…書類とかが飛ばないようにする置物じゃないでしょうか？ええつと…」

四糸乃がどうしても名前が出てこない頭を悩ませる。それを聞いた琴里は何となく四糸乃が言いたい物のことを理解した。

「もしかしたらペーパーウエイトの事？でも、明らかに必要性を感じさせないわ」

「琴里の言う通りだ。こんな室内に風などが吹くわけがない。まあ、我ら八舞には不可能ではないがな」

耶具矢の小さな自慢をスルーし、水晶を持ち上げ、様々な角度から見てみるがやはりただの水晶にしか見えない。一体何なのかと思つた瞬間、突如、琴里の背後から手が伸び持った水晶を取り上げる。

「ちよつと、見たいんなら普通に言えば…」

そう言いながら後ろを振り向くが、その瞬間、その言葉が止まる。琴里以外にも他の四人も後ろを振り向き動きを止めていた。

「さすがにこの部屋が見つかったのは予想外だったぞ。見事と言っておこうか」

「「「ぎゃあああ!!」」」

「悲鳴。きゃああ」

幽霊のように気配もなく後ろに立っていた蓮を見て、夕弦以外の面子から絶叫が飛び出す。そんな五人を見て小さくため息をつく。

「俺にだって見られたくないもの一つや二つがあるんだから、あまり詮索するような事はしないでくれよ」

「い、言い出したのは私だから、十香達は悪くないわ…」

「…まあ、そういう事しておくよ。ほら、わかったら早く部屋には帰

れ」

「待って、この部屋については何も聞かないわ。だけど、その水晶は何なのかと教えてくれないかしら？」

皆の視線が手に持った水晶に集まったのを感じる。見た目は何の変哲のない筈だが、それに感づくとは中々のものだ。ただの置物だと言いつても出来るが、その勇気免じて少しぐらいこれについて教えるのも悪くないだろう。

「…見た目は普通に見えるようになってる筈だけど…流石司令官殿つてところかな。司令官殿の言う通りこれは見た目通りのものじゃない。これは…こういうものだ」

蓮は、水晶を持った右手を軽く振る。すると、チリンという鈴のなるような音と共に水晶が淡く光り真上の空中にウインドウを展開させる。そのウインドウは蓮は左手で触れると動き、端末としての機能を果たしていた、見た事のないそれを見て五人は目を見張り、驚きの声を出す。

「おお！すごいなこれは！」

「見た目も良くて…すごいです…」

『すごいねー、あっ！もしかしてこれがCGってやつなのー？』

「こんなの見た事無いわ…このサイズでどうやって…」

「ちよつとこれ！どうなつてんのよ!？」

「溜息。耶具矢、聞くだけ無駄です。どうせ夕弦たちには理解できません」

各自が驚きの声を上げる、蓮はそれを大袈裟だとは思わなかった。なぜならこれは自分の中でも『大切』と言える物なのだから。まじまじと見つめる五人の前でもう一度水晶を振ると、再び鈴のような音を鳴らすと、ウインドウが消え変哲のない水晶へ戻る。

「そんなものを作れるとは…、もしやレンはまほーつかいというやつなのか!？」

目をキラキラ輝かせた十香がそう聞いてくる。そういえば、十香は子供向け番組などを見ていると土道が言っていた。それらの中にファンタジーものがあつたのかもしれない。



「魔法使い…魔法使いか…。残念ながら杖は持つてないんだ、だから俺が使える魔法は十香が喜ぶような料理を作ることだけかな」

余裕の表情でそう答えると、五人の背中を押して部屋の出口まで誘導する。他の面子（特に琴里）も何か気になる様子だったが水晶の正体だけでも教えてくれと言った手前、聞きにくそうな様子だ。

当然、蓮もその事に気づいていたが、聞かれた事だけを答えると言ったのでそれを見て見ぬフリをする。

五人を寝室まで送るとドアを閉め、月光が差し込む廊下を歩く。ふと窓の外を見ると満月が夜空に輝いていた。

（もし、魔法使いなんてものが本当にいるとしたら、人の心が分からず苦悩した奴もいるのかな…）

何となく思った疑問。そんなものはくだらないとすぐに考え直し、蓮は部屋の一室に消えていった。

「いやー、すごい家だったな」

次の日、午前中を蓮の家で過ごし、昼食をいただいた午後二時。帰り道の途中、土道は琴里にそんな感想を漏らしていた。

「すごい広かったし、ああいう家って本当にあるんだな」

「…そうね…私もそう思うわ…」

「…さっきから思ってたんだが、お前や十香たちは何でそんなに疲れた様子なんだ？」

土道以外のメンバーがなぜか疲れてげっそりとした様子で歩いている。あんな家だった事に対する驚きかと思っただが、それにしてもやけに疲れすぎている。気になるが考えて分かる事ではないと早々に考えるのをやめておく。

「…すごい家だったけど…あれほどの広さで一人だけっていうのは寂しくなると思うんだが、あいつは大丈夫か？」

「多分平気よ。きつと蓮なら、そんな事気にしてすらないわよ」

「だといいいんだが…」

土道は来た道をチラリと振り返る。そこそこ歩いたつもりなのだが、蓮の家の屋根がまだ見えていた。

### 31話

『諸君！時は来た！長い…長い沈黙を破り、我ら来禅が勝者となりために！勝利の結果こそが大いなる運命の証だ！今度は貴奴らに敗北の苦汁を舐めさせるため！来禅は王者として立つのだ!!』

『おおおおお!!』

夏休み明けの九月の午後、壇上に立った亜衣の言葉に体育館中が大きく震えた。それはまるで戦争に行く前に兵士の士気を高める時。また、プロパガンダの放送のように見えるだろう。

(…たかが学園祭ごときで、なんでここまで熱くなれるのか…)

生憎、日本には自衛隊という組織があっても、軍隊は存在しない。これはもうすぐ始まる十校合同の学園祭である『天央祭』の演説なのだ。

その天央祭で最優秀を手に入れるのに熱くなっているらしい。

(しかし…そろそろか…)

熱狂的になる全生徒中、たった一人、蓮だけが不安を理由にその天央祭を楽しむ余裕をなくしていた。別に面倒くさいや、やる気が無いという理由ではない。

「おい！聞いているのかレンよ！」

いきなり左耳の近くでそう叫ばれて、反射的にそちらを向く。そこには夜色の長い髪と、綺麗な容姿が特徴的な十香が立っていた。しかし、頬を膨らませ、腕を組んでプンプンと言った様子であった。

「えつと…どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないぞ！この祭の当日にメンチカツを食べに行こうと言っておるのに、さつきからずっと私を無視しおって！」

「わ、悪い…数週間前からあんまり眠れてないんだ…」

「なっ!?そ、そうだったのか…。だ、大丈夫か？」

さつきまでの様子から打って変わり、心配そうな様子で見つめてくる十香。蓮はそんな十香の頬にいきなり、右手を添えるように触れさせた。いきなりの奇行に十香は目を丸くする。

「どうしたのだ？私の顔がどうかしたのか？」

(DEMに十香の正体が知られて約二ヶ月：そろそろ何か仕掛けてくるな…)

よほど大規模な作戦でなければ二ヶ月もあれば準備は整う。そして、十香が精霊である事を知ったDEMがなにもして来ないはずがない。それを知っている蓮は自分の何かが大きく変わる。そんな予感を感じていた。

「いいや、なんでもないさ」

それを分かっているながらも、蓮は十香に微笑むのだった。

—————

放課後、蓮は久しぶりにASTの駐屯地を訪れていた。今日もきつといつも通りに装備を整備したり、ミリイが自分に擦り寄ってくるもだろう。しかし、今日は二ヶ月以上謹慎となっていた折紙が部隊に復帰してくる日なのだ。

当然ながら、同じ学校に通っている以上、折紙と顔を合わせる機会は数え切れないほどあった。それでも、蓮は六月に殺しあった事などまるで無かったかのような様子で折紙に接したところ、最初は警戒気味だった折紙もすぐにいつも通りになった。

部隊復帰祝いに土道の私物でも渡してやろうかと思っていると、前方から隊長の日下部 燎子が歩いてくるのが見えた。部隊の一員である燎子が基地内を歩き回るのは別におかしな事ではない。ただ、その腰に後輩である岡峰 美紀恵が涙目でしがみついていたのなら話は別だ。

「…基地の廊下でなにやってるんですか？」

「れ、蓮さん！丁度いいところにい…隊長を止めて下さいよお」

「いいところに来たわ！ねえ！これをどう思う!？」

蓮の姿を見た途端、美紀恵は助けを乞い、燎子は憤怒と言った様子で手に持った書類の束の一枚を渡してくる。目を通してみるとそれは補充要員に関する事だ。

ここ最近、ASTでは戦線に立っていないほどの重傷を負った者や、死亡したなどという事は発生していない。それなのに補充要員というのも奇妙だが、その内容を見て眉を顰めた。

「今から塚本三佐のところへこれに対して文句を異議を言ってるから！」

「ダメですよお…隊長お…」

腰に張り付いた美紀恵をもともせず、隣を通って歩いていく燎子。そんな燎子に後ろを振り向かず声かける。

「隊長さん、ちよつと待ってください」

「蓮さん…もしかして…」

「なによ!?もしかして、あんたまで止めるんじゃないわよね」

燎子を呼び止めた事により、美紀恵の顔にもしかしたら…という希望が出てくる。

「俺も行きます。流石にこれは目に余るものですからね」

その希望はあまりにも軽くあしらわれた。

燎子が扉をノックもなく開ける。室内には燎子が探していた塚本三佐と謹慎の終わりを告げられてたであろう折紙がいた。二人はいきなりの燎子の登場に呆気にとられている様子だ。

そんな二人をもともせず、燎子は上官の机に手を持った書類の束を落とすように置いた。

「どういう事ですか!?こんなの無茶苦茶過ぎます!」

燎子のこれほどの剣幕が理解出来ずに、理由を教えてくださいと言った視線を向けてくる折紙に、蓮は無言で手に持った書類を渡す。それを見て、眉根を寄せたのが見える。

渡した書類にはA S Tに十名ものD E Mインダストリーからの出向社員が来るという内容が書かれており、その社員は場合に依じて隊長燎子の指揮下から自由に外れられるというおまけ付きだ。これが燎子の怒っている理由だ。

「こんなの認められるわけじゃないじゃないですか!一団上層部は何を考えているんですか?ここは野球チームじゃないんですよ!!」

冷静さを失い、一方的に不満を言い続ける燎子を見かね、蓮が前に出る。さりげなく燎子を手で制しながらだ。

「塚本三佐、なぜこのような条件でD E Mからの補充要員を受け入れ

たかは分かりませんが、日下部隊長の指揮下に入らない部隊とともに作戦を行うとなれば命令系統の混乱などのハプニングを起こす可能性が極めて高いです。さらに、その社員とこの隊員とでは部隊の違いから、軋轢あつれきを生み、A S T内の士気に影響しかねません。なので、これは日下部隊長の指揮下に入ってもらうか、それがダメだった場合、最悪、この補充要員の話は断っていただけのが一番です」

無駄な事を話さずに、起こりうる事態とこの解決策をペラペラと語る蓮に誰もが呆気にとられる。塚本三佐には『そちら側でどうにか仲良くやってくれ』などという、反論(?)の余地もなく、渋い顔をして黙り込む。その時、燎子の時とは反対に静かに扉が開かれ、十人の外国人が入ってくる。

その先頭に入ってきた赤毛と釣り目が特徴的な女が燎子、折紙、そして蓮を見た途端、唇を釣り上げる。それと同時に蓮は顔を歪めて不快感を露わにする。

「あら、誰かと思ったら、勝手にへホワイト・リコリスを動かして謹慎くらったお馬鹿さんニ…精霊をまともに倒せないオママゴトチームの隊長さんじゃない」

「つーずいぶんなご挨拶じゃない…あんたは？」  
いきなりこちらを見下した発言に燎子は屈辱に震えながらも名前を訪ねる。

「今日付けでこちらに配属となったジエシカ・ベイリーです。以後よろしく」

『今日付け』という言葉に反応し、蓮は塚本三佐をチラリと見るが、気まずそうに目を逸らされる。このような知らせはせめて三日ほど前に知らせて欲しかったのだが、上層部はこれで不満が出るのも承知だったらしく、それを今日まで黙っていたらしい。

ジエシカ達が配属された以上、帰れと言う事も出来ない。

「フフ…にしてモ、墮ちたものねエ…レン」

これをジエシカは折紙、燎子、美紀恵に言ったわけでもなく、その視線は目を合わせてない蓮に対しての言葉だった。彼女は蓮の前まで歩いてくると、ニヤニヤと笑いながら、見下すように話し出す。

「前まではウエストコット様の直属の部下だったというの二、今はこんな極東の島国のオママゴトチームの整備士だなんネ」

ジェシカのその言葉に隣にいる三人から、驚愕の目を向けられたのを感じる。ウエストコット、その名は世界に名を轟かすDEMインダストリーのトップの名前だ。その人物と共に仕事をしてきた人間が、自分たちと隣にいたなど、想像すらしなかっただろう。

「自分で望んだ結果さ。お前みたいにアデプタス・ナンバーである事が幸せだと思っっている奴とは違うんだよ」

「まあ、ウエストコット様から特殊任務とあなたと仲良くしてと頼まれているからネ。私たちの装備の整備ぐらい、させてあげてもいいわヨ?」

ジェシカはそう言うと、笑いながら他の補充要員を連れて部屋を出て行く。それがいなくなったと同時に燎子が詰め寄ってくる。

「あんた…ミリイと知り合いだったから、DEMから来てたぐらいは予想してたけど…現業務執行取締役の下で働いてたって本当なの!」「…数年前の話ですよ。今はAST所属で隊長さんの部下ではない整備士です」

そうとだけ言って、ペこりとお辞儀をして部屋を出て行く。部屋には塚本三佐、燎子、折紙、美紀恵だけが残された。

「あの…もしかして、蓮さんってすごい人なんでしょうか?」

「それはわからない。でも…これは彼の見方を変える大きなポイントになるかも知れない」

美紀恵の質問に表情を変えずに答える折紙。その数分後、甲高い警報が鳴り響き折紙、燎子、ジェシカ達は出撃していくのであった。

一時間以上時間が経過し、作戦を終えた隊員が駐屯地に帰還して行く。その様子からだど、精霊を討伐する事も捕獲することも出来なかったようだ。それでも蓮は隊員達を責めたりするつもりはない。

この基地の隊員はよく頑張っているのを知っている。それでも精霊を討伐出来ないのはそれだけ士道達の行動が早いからだろう。ASTの努力を見ている自分からしたら大きく喜べないのだがまあ、誰

かが死んでしまうだけの結果よりはマシだと考えているものもあるのが。隊員が帰ってきたなら、次は自分達の仕事だ。整備や補給は第二の戦場と呼ばれるほどの場所だ。ここでの出来が次に響いてくる。

しかし、格納庫内で何やら揉めるような雰囲気を感じ、そこに足を進ませた。

「一体どういうつもり？」

そこでは折紙がジエシカと部下数人の前に立ち、そう問っていた。「なぜ士道を攻撃しようとしていたの？」

士道と聞いて、『フラクシナス』は精霊と接触する事が出来たと察する。その対話中にASTが突入してきた…という流れらしい。だが、攻撃したという意味が分からない。

「あう、知り合いだったのかしら。一般人が戦場紛れ込んでたから保護しようとしただけヨ」

「…あなたは特殊任務を頼まれていると言っていた。それと何か関係あるの？」

そう言われて、ジエシカも蓮と話したとき、自分が特殊任務を頼まれていると口を滑らせたのを認識したらしく、憎々しく折紙を睨みつける。それは凶星だったらしく、ジエシカが折紙の前髪あたりを掴もうと腕を伸ばす。

流星にそれ以上は見過ごす事が出来ない蓮は、素早く二人の間に入ると、伸ばされた腕を掴み、それを手前に引いてジエシカのバランスを崩しそのまま床に叩きつける。近接格闘術だ。叩きつけられたジエシカの口から息が漏れるのが聞こえる。

「相変わらず、随意領域テリトリに頼りっぱなしでこっち側の訓練はからつきしらしいな」

まともに受身すら取れないジエシカを見てそれがよく分かる。ジエシカは倒れた身体をゆっくりと起こして立ち上がる。その顔は唇を歪めていたが、その目は笑っていないかった。

「レンはそんな成果のないお遊びチームの味方をするのかしら？」

「お前らが何でここに来たのか知らないが、ここではお前達は余所者よそものだ。それを忘れるな」

この場を一触即発の空気が支配する。周りの隊員もそれにあてられ、見ている事しか出来ない。その空気を破ったのは騒ぎに気付いて駆けつけた燎子だった。

「あんたらー何してんのよ！」

「…チツ」

燎子の声が聞こえると、ジェシカは苛立ちげに舌打ちをした後、部下を連れて歩き去った。ジェシカの姿が消えると、傍観者だったミリイが興奮した様子で寄ってくる。

「おおお!!カッコよかったですよー!」

目をキラキラと輝かせて、拳を握っている様子はまるで戦隊もののヒーローを見た小さな子供のようだ。そんなミリイを宥めつつ、ジェシカの後ろ姿を睨みつけて折紙に顔を向ける。

「手出しは不要だったか? 一応、お前を助けたつもりなんだが」

「そうでもない。ありがとう」

そうだけ言って、折紙はどこかに歩いて行く。相変わらず愛想がないと思っていると、周りの隊員から事情を聞いてきた燎子がやって来る。

その様子は怒っているというより呆れている様子だ。

「話は聞いたわ。あんた、魔術師ウィザードに喧嘩を売るなんて、何考えているのよ」

「あいつの思考回路をよく分かっているつもりだったので、危険はありませんでしたよ。ほら、ミリイは仕事に行ってください」

自分も整備士だというのに、ミリイだけを仕事に向かわせる。これで蓮と燎子の二人だけが残った。それを確認した蓮は真面目な様子で燎子にある事を伝えた。

「隊長さん、もうすぐDEMが何か大きな事を起こす可能性があります。もしそうになったら俺はASTアストを長い間休みます」

その突然の告白に燎子は驚いた顔で蓮を見る。その様子からはジョークなどを言っているようには見えない。

「…あんたがここに来ないのは珍しい事じゃないし、それを責めるつもりもないんだけど、それとは違うの?」



「はい。理由などは話せませんが、ASTにDEMからの圧力がかかり始めている。とでも言っておきますよ」

それを聞いて蓮がDEMに関係することだと予想できる。もしかしたら、蓮にASTは狭すぎるのかも知れない。それを広げてやれない自分が情けなく思えてくる。

「…分かったわ。もしそうだったら長期休暇を許可してあげる。一応聞いとくんだけど、AST休んでどうするの?」

「知り合いに面白い活動をしているのがいましたね。しばらくはそっちの手伝いをしようかと」

起業の手伝いでもするのかと思い、それ以上深くは聞かない事にする。そもそも、もしもの話でありまだ決まったとは言えないのだ。

許可を貰い、仕事に戻ろうとする蓮だったが、足を止め再び燎子に顔を向ける。

「これはアドバイスなんですけど、この隊長はあなたです。だから、どんな時でも隊長の義務を優先してください」

「年上にアドバイスだなんて生意気な事するんじゃないわよ。あんたは早く自分の仕事場に行きなさい。サボった分、たっぷり働いてもらうんだから」

燎子の言葉に小さく笑いながら、歩いて行く蓮。燎子はその後ろ姿を見ながら小さくため息をついた。

(…あんたの目には一体何が見えてるっていうのよ…)

ジェシカ達が無茶苦茶な条件でここに来たのを見て、DEMが露骨にASTに影響を及ぼしているのは感じていたが、それでもなぜ長期休暇を取ったのが分からなかった。それは戦場に出て戦う自分には永遠に理解出来ないのかも知れない。

### 32話

次の日、ヘフラクシナスに呼び出された蓮は艦橋でライブの映像を見ていた。その中央には紫紺に輝く髪、銀色の目が特徴的な少女が楽しそうに歌っており、観客は大いに盛り上がったいる。ただ、その映像は公式に売られているものほど画質はよくない。

「ふあ…〈ディーヴァ〉…こいつが昨日出てきた精霊っていつのか？」  
「ああ…間違いない。合同会議のときに誘宵 美九つて名乗ってた」  
ライブの映像を見ているのに飽きて、欠伸びながらした質問に土道は呆然とした様子で答える。精霊〈ディーヴァ〉、その存在は知っていた。確か、半年前に始めて出現して、昨日まで一度も姿を現していなかった存在だ。

資料で見た時、普通ならそれだけだと思い、忘れるはずなのだが『一度しか姿を現していない』というのが印象に残って覚えていたのだ。  
「まさか、誘宵 美九…彼女が精霊だったなんてね」

「あれ？司令官殿はこいつの事知ってるの？あつ！もしかして生き別れたお姉さまだったとか」

「半年前にデビューしたアイドルよ。『聞く麻薬』と言われる美声と圧倒的な歌唱力で大ブレイクするも、テレビや雑誌に姿を見せないらしいわ」

琴里は見事に無視して手元の資料に目を通す。ツツコミをくれる事を期待したのだが、さすがにスルーは精神的に傷つく。

「アイドルがファンの前に姿を見せないなんて何を考えているのかしら。こんなのするのは世界中でNEROぐらいだと思っただけけど」  
「ああ、そう言えば姿を現さないって有名だよな」

琴里の言葉に土道が思い出したようには頷く。ローマの皇帝と同じ名前を名乗るその技術者も美九と同じく姿を見せない。

「あれ？土道はNEROの事知ってたのか」

「俺だってテレビぐらい見るに決まっているだろ…」

顔を引きつらせながら答える土道を小さく笑いながら、琴里に向き直る。

「話が少し脱線したが、昨日は霊力の封印は出来なかったんだろ？その理由はなんなんだ」

「それは俺にも全く分からなくて…」

「無自覚にあの立派な胸を凝視してて、『触っていいか？』とか思わず聞いたとか？」

「そんなことするわけねえだろ!!」

確かに美九は見事なわがままボディをしているが、そんなセクハラ100%の発言をするわけがない。当然だがそんなこと蓮にも分かっている。

「その事なんだけど、〈ディーヴァ〉の正体が誘宵 美九である事が分かって、ある仮説がたったの。令音お願い」

「…ああ、とりあえずこれを見てくれ」

令音がライブの映像の上に、グラフのようなものを表示させる。それは真ん中ほどで普通では考えられないほどの急降下し、底辺までいつている。だが、それはいきなり急上昇を始めた。なんとも情緒不安定なことである。

「…真ん中ほどがシンと話していた時で、そこから急上昇している時はASTが現れ、鳶一折紙に触れたところだ」

「ああ…なるほど、そういう事か…」

「ええっ？それってどういう…」

「中津川、説明してあげて」

名前を言われた中津川はビシツと直立する。なんだか、いつもより興奮しているように見えるのは気のせいだろうか。

「彗星のごとく登場したアイドル、誘宵 美九たんですが、先ほど司令が申した通り全くと言っていいほど人前に姿を現さないのです。噂では美九たんは凄まじいほどの男嫌いであるとか…」

「最近のアイドルって、男嫌いでもなれるのか？」

「うむ…そう聞かれると返答に困りますが、美九たんはCDは定期的にリリースしていますし、この女性ファン限定のライブも開催していますので、一応大丈夫かと。しかも、女性ファンをお持ち帰りしたという噂もありますし…」

「男嫌い以前に、アイドルがそういうこととして大丈夫なのか…」

色々突っ込みたい事があったが、これで士道が美九になぜ嫌われたかが判明した。つまり、この美九にどのようなようにして付け入るかが重要だ。

「今回の対応策はもう考えついているわ。要するに士道が男だからダメなのよ。…神無月！」

名を呼ぶと、なぜかずぶ濡れの神無月が来禅高校の女子の制服を持って現れる。士道はこれの意図が分からなくて困惑した様子だが蓮はすぐに理解して小さく鼻で笑う。

「頑張れ士道。お前なら性別を超えた向こう側に行ける」

「行ったらダメだろおお!!」

そのまま、クルーにどこかに連れて行かれた。これでこの場には蓮、琴里、中津川しかいない。その中津川が美九のコンサートに夢中になっているのを確認した蓮は琴里にしか聞こえない程度の音量で話す。

「今回の精霊攻略…なんだか嫌な予感がするな」

「あら、今までいい予感がした時なんてあったかしら？」

「…たぶん、今後ASTには行かなくなると思う。その分、へラタトスクで仕事させてもらうよ」

その言葉に琴里は少し驚いた顔で蓮を見つめる。今までASTをやめてへラタトスクの活動に集中してほしいと頼んだ事が数回あったのだが、その全てを断ってきた。それを受け入れたという事はそれほど理由があるのだ。

「DEMがASTに圧力を入れて、独立の部隊を入れてきた。その部隊は士道を狙ってたらしい」

「士道を!? 一体なんで？」

「修学旅行の時、DEMに十香の正体と士道が精霊の天使を使った所を見られてる。理由はそれじゃないかな」

ジツと考える、どうすればいいのか。本来なら士道と行動を共にするのが一番なのだが、男嫌いの美九を相手にそれは得策ではない。かといって離れた場所で待っているのも即時に対応出来ない。

「今、自分がどうにかしなきゃって思ってるでしょ？」

琴里は呆れたような様子でそう言う。蓮の頭を軽く叩く。

「そういうのは私たちが考えることよ。あんたは私たちが出した命令を信じてそれを実行すればいいの。そうしなきゃこのへフラクシナスは必要なくなっちゃうじゃない」

具体的な解決案を出されたわけでもない。しかし、それは蓮の心に安心をもたらした。琴里の言う通り、なんでも自分一人で抱え込み過ぎていたのかもしれない。自分にはこんな頼りになる司令官がいるのだ。

「それに、もうすぐ人生初の学園祭があるでしょ。今回は土道は私たちだけでなんとかしてみせるから蓮はそれを楽しめばいいのよ」

なんとも頼もしいことを言ってくれる琴里（中学生）に蓮（高校生）は笑みを浮かべる。

数時間後、似合いすぎる女装して出てきた土道を見て、蓮は床を転がるほど大爆笑したのは当然の結果だろう。

—————

「ふーむ、これがここでこのパーツがこと…」

家具は最低限のものしかなく、窓のカーテンが掛けられて薄暗い印象を受けるとある一室、そこは蓮の自宅に複数ある空き部屋の一つだった。家の主はそんな部屋の中央でなにやら説明書のようなものを読んで頷いていた。

「日本のホビーやゲームなどは性能が高いな。これを一般的な値段で売っているのがすごい」

そう感心する蓮の足元には百は超えるであろう小さなプラスチックのパーツが散らばっていて、部屋の隅にはカッコいいロボットが印刷された箱が置いてある。そう、これは床に散らばっているこれはプラモデルのパーツなのだ。

ただ、普通プラモデルではパーツはゲートと言われるものに固定しており、説明書を見て、必要なものを切り取るのが手順だ。そうしなければどれがどのパーツか分からなくなってしまおう。つまり、現在の状態で完成させるのはほぼ不可能と言ってもいい。

二分ほどかけて説明書の内容を読み切り、それを閉じてそこら辺に放る。そして、その手に光の粒子が集まり、手裏剣のような形をした武器、〈エカトル〉が作り出される。

それは手の上でコマのように高速で回転して、風を生み出していき部屋の中が台風のように吹き荒れた。そんな中、風で吹き飛ばされたパーツは空中でカチャカチャとひとりでに組み上がっていく。

「そのパーツをこれと組み合わせる…それはこれを組み込んだ後で…」

まるでオーケストラの指揮者のように指を振り、コントロールして組み上げていく。数分後、風がピタリと止み、前に出した蓮の手に完成したプラモデルが落ちてくる。それは部屋の隅に置いてある箱の表面に印刷されていたものと同じものだった。

それがしつかりと出来上がっているのを確認した後、ふいに時計を見してみる。今頃は〈デイーヴア〉である誘宵 美九と女装した土道が接触しているだろう。そう思うと不安だと考えてしまいが琴里に言われた事を思い出し、自分を落ち着かせるように深呼吸した瞬間。

ピシッ：

室内の数少ない調度品である鏡にいきなりヒビが入る。割れて複数になった面には歪んだ蓮の顔が映し出された。

「…不吉だな。割れた鏡ってというのは」

そうとだけ言い、手に持ったプラモデルを宙に放り出して部屋を出て行く。投げ捨てられたそれは空中で一瞬で破裂するかのように分解し、元の百あまりのパーツへ戻った後、風に乗せられてテーブルの上に積み重なった。

〈フラクシナス〉のブリーフィングルーム。そこには女の子モードの土道が蓮と琴里を始めとしたメンバーの前で申し訳なきように正座していた。

「ずいぶんと無謀な勝負を受けたなあ…土織ちゃん…」

「…面目不ざいません」

女装した土道が美九と接触して二日目。正体を知らない美九に気に入られた土道は自宅へと招かれ、二人きりで対話をした。しかし、話していくうちに美九の本性が露となり、人を人とも思わない言いように土道は激怒した。

それを見た美九は勝負をしてもし勝ったら、自分の霊力を封印させていいと言いだした。まあ、長々と話し合うよりはスカツと終われるので個人的には好みなやり方なのだが、その勝負が『天央祭の一日目で最優秀賞を取ること。音楽のステージで美九に勝つ』だったのだ。「現役のアイドルに音楽で勝負するなんて、人間がイルカと泳ぎで勝負するようなものだぞ」

「あつ、いや…その…蓮がいるから大丈夫かなと…」

「なんでもかんでも蓮に頼るんじゃないわよ。それに、今回は今までみたいに蓮が直接手助けしてあげるのは無理だからね」

喧嘩を売ったくせに本人が他人任せの発言をすることに情けなさを感じる。

意外にも蓮はインドア派だ、特にDEMにいた頃は必要最低限しか外に出ることはなく、室内では少しでも興味の持った事に満足するまで興じていた。その中に音楽関連のこともあったので知識は少しある。

「男嫌いとなるとお前と一緒にいるわけにはいかないし、残念ながら、ステージの時間にはクラスの模擬店を手伝う予定があるから無理だ」  
「はあっ!?マジかよ…」

頼みの綱だった蓮がなくなり、絶望の表情を浮かべる土道。一時の感情で動いてはならないと脳裏に刻み込まれる想いだ。しかし、琴里は冷静な顔だ。

「こうなった以上は仕方ないわ。土道は明日、ステージに出れるように手配しときなさい。準備は私たちがするから」

「あれ?司令官殿は結構やる気だな」

「かなり不利な勝負だけど、こうなったからには勝ちに行くわよ。それがヘフラクシナスの役目だし。確か土道たちの学校はバンドをやるんでしたっけ?良かったじゃない、これなら土道の得意分野よ」

土道がバンドが出来るとは聞いたことがない。それを疑問の思っている、部屋にある巨大スクリーンに映像が映し出される。そこには中学生ぐらいの土道が一人、部屋の中でギターを弾いている。それだけならまだしもノリノリの様子で自作のメロディと歌詞を口ずさみ始める。

「えっ!? ええ!? ちよっ! なんでこれが!？」

まさかの黒歴史を公開されたしは驚きと羞恥が混濁したような反応をする。琴里はもちろんよく見ると他のクルーも身体を震えさせながら必死に笑いだすのを堪えている。そんな中…

「ぎゃはははははは!!!」

隠す気すらない蓮が腹を抱えて床を転げ回る。琴里達のクスクス笑いに加え、蓮の大爆笑のダブル攻撃で土道の心はブレイク寸前だった。

さらに映像では、なにやらインタビューを受けたような気になって、一人で話し始める。

「もうやめてええ! 恥ずかしくて死んじゃう! 死んじゃうからああ!!」

涙目でそう訴えるとようやく映像が止まり、公開処刑が終わる。

「まあ、未経験よりはマシよ。当日までに最高の機材等を揃えるから。この勝負なんとしても勝つわよ!」

琴里の言葉に呼応するようにクルーから『了解』と声が出る。ちなみに蓮はまだ笑いながら床を転げ回っていた。

午前二時、良い子も悪い子も夢の世界へ旅立っている時間だ。蓮も例外でなく、自宅の寝室のベッドで寝息を立てており、その枕元には飼い猫のミルクが丸くなって眠っている。

別に珍しくもない光景だが、この日はいつもとは違う出来事が起きた。

寝室の隅に暗闇とは違う真つ黒な影のようなものが発生し、どんどん広がっていく。ある程度広がるとそこから一人の少女が姿を現わす。



しかし、その左目には時計盤が浮かんで時を刻んでおり、服装も黒と赤色のドレスのようなものとなると普通の人間ではないと理解出来る。

丸まっていたミルクは耳をピクリと動かし、少女の存在に気がつく  
とベットを飛び降り『ニヤー』と鳴きながら少女の足元に向かう。

「静かにしないでダメですわよ。蓮さんは眠っているのですから」

ミルクの頭を撫でながらそう言う少女…狂三はそのまま歩いて行き、蓮が眠っているベットに腰掛け、その寝顔をじっくりと見つめる。  
「…あなたにはまだ力がありますわ。いい加減待つものにも飽きてきたことですし、わたくし、そろそろ頬を膨らませてしまいかも知れませんが…」

寝ている蓮にそう問いかける狂三。だが、次の瞬間、寝ていた蓮が急に苦しそうに呻き始めた。まるで悪夢にうなされているような様子だ。

「うっ…ううう…ぐっ…」

「…大丈夫ですわ、あなたが苦しむ必要は何もありませんわ…」

寝ているベットに上がり、膝の上に頭を乗せる…いわゆる膝枕をした後、言い聞かせるようにそう呟く。そこで狂三はある事に気がついた。

自分の周りに青い粒子のようなものが漂っているのだ。

「あら？」

それを疑問に思い、指先を触れさせるとピリツとした感覚が走る。その元を辿って狂三は分かった。これは寝ている蓮の身体から発生しているのだと。

それを理解した瞬間、寝ていた蓮が突如目を開いて目覚める。それと同時に狂三はベットと接する壁に叩きつけられた。

「あがつ…くっ！〈刻々帝〉…」

突然の出来事に影から〈刻々帝〉の短銃を出して応戦できるようにするが、凄まじい力が両腕にかかり、壁に押し付けられたその衝撃で短銃を床に落としてしまう。見てみると、両腕を壁に固定しているのは青い巨大な二本の手だった。

右手に赤と青色の手である（バスター）で狂三を拘束したであろう蓮はベッドの上でフラフラと身体を揺らしながら立ち上がる。狂三には直感的に理解出来た。今の状態は普段と比べて普通ではないと。歩けるようになったばかりの小さな子供のように落ち着かない足取りで狂三の前まで来ると、右手を彼女の太腿ふとももに這わせ、ゆっくりと顔へ近づけていく。

太腿から腰、腰から腹を通り胸の間を抜けて手が顔に添えられる。蓮は手の終着点である顔を青い瞳でじっと見つめた後、狂三の首を絞める。

「お前は…俺の敵か？ 僕の味方か？ 私の…なんだ？」

問答されているのだと理解できた。ここで自分が害のない存在だと示さなければと分かり、狂三はぎこちなく微笑み、精霊にとつて最強の鎧であるドレスの霊装を解除する。残ったのは魅惑的な黒い下着とこれまた黒いストッキング、そして腰部に付けられたガーターベルトだけで上には何も無い。

「わたくしは…あなたの味方ですわ。その証明に…この身を委ねます…」

そう言つて、狂三は目を閉じて身体を預ける。ここで抵抗すれば間違ひなく自分は殺される、それに霊装など関係ない。ならば、敵ではない意志を伝えるしかない。

その行動は蓮も予想外だったらしく、目を細めた後、まるで動物が得体の知れないものを調べるように自分の顔を狂三の顔に触れさせる。感覚を確かめながらじっと見つめて観察する。

「……………」

十数秒かけてじっくり見ると、顔を一旦顔を離す。それからまたじっくり見つめた後、いきなり狂三の唇に自分の口を合わせる…キスをした。

「っっっっっっっっ!!」

狂三は目を見開いて言葉にならない悲鳴をあげる。それは驚きなどが原因ではなくキスした瞬間、身体に駆け巡った快楽が理由だった。

快楽は口から喉を通り、身体中に広がっていく。それに伴い、狂三は身体が痙攣するように震わせる。それは自分以外の誰かに身体を支配される感覚なのかも知れない。

いつの間にか両腕は自由に解放されて、ベッドに押し倒されるような姿勢になっていた。狂三がどんなに身体を動かそうとも口は絶対に離されることはない。

すると、狂三の脳裏にあるイメージが浮かんでくる。それは宝石のようなものの周囲に数本の細い糸が浮かんでいるものだ。

それらの先端が宝石に触れるたびに狂三の身体に大きな快感が走る。そして、糸が一齐に宝石に絡まった瞬間、一番大きな快感を感じ、大きく目を見開いて身体をベッドから浮かせる。

力尽きるようにベッドに着地すると蓮も口を離す。その時、蓮の舌から唾液が溢れるが、狂三がそれに舌を伸ばして受け止める。それは男の心臓の鼓動を大きくする光景だった。

「ザフキエル刻々帝」…時間を操る天使…この感覚どこかで…」

そこまで言って、蓮は気を失った。それはまるで身体が眠っていたことを思い出したように急にだ。狂三は息を落ち着かせる、今身体中は汗だくだ。それでも、狂三の顔には狂気の笑みが浮かんでいた。

「このわたくしを純粹な力だけでねじ伏せた…素晴らしい…素晴らしいですわ。この力が完全に目覚めればわたくしの願望は確実に成就されますわ…！」

その確信を得て小さく笑う。すると、部屋の隅に怯えた様子の子の目に入る。この突然の自体に驚いて避難したらしい。

「もう大丈夫ですわ。こちらに来て構いませんことよ」

狂三の言葉を聞いてミルクはゆっくりと近づくとベッドに乗り、様子を見るように蓮の顔を覗き込む。すると寝相だろうか、蓮がミルクを抱き枕のように引き寄せ、腕の中に収まる。

それを微笑ましく見た狂三は、蓮に布団をかぶせて場を整えた後、霊装を纏って影の中に消えていった。そう遠くないうちに来るであろう”目覚めの時”を期待しながら…。

### 33話

天央祭当日、大勢の生徒によって活気を見せるその祭りでは、士道たちのクラスはメイド喫茶をやることになっていた。そうになると、当然女子たちはメイド服を着ることになるのだがそれは女装した士道…士織も例外ではない。

「はあ…なんでこんなことに…」

女装しているだけでも男としてどうなのかと思うのに、メイド服を着るとなれば男の尊厳は無になったと言っていていいだろう。それを認識し、椅子に座りながらため息をつく。

「別にそんなに悩むことか？今更すぎるだろ」

そんなに独り言を聞いて声をかけたのは夏服の制服を着た蓮だ。女子の制服を着ているうちにそんなのは気にしなくなっていると思っただけだが、そう簡単ではなかったらしい。

「制服ならまだしも、メイド服を着るのは慣れないって。もしそうになったら何かが終わる気がする…」

「まあ、少なくともメイド服を着るのは今だけだから、我慢しろよ。ほら、客寄せしに行くぞ」

店内は十香、耶具矢、夕弦が頑張っている。なのでサボるわけにはいかずに店前に立つ。ここはメイド喫茶のため、(格好は)男である蓮が客寄せするのは奇妙に感じるかもしれないが、これは文化祭だ。

生徒であるのに関わらず、男性も女性も来るので男性は士織、女性も蓮が引き寄せるといって作戦だ。客寄せならばとにかく目立たなければいけない。しかし、蓮もずっと客寄せをしているつもりはない。適当なタイミングで厨房に入るように言われている。

そんな作戦で天央祭は始まった。開始と同時に大量の客がメイド喫茶になだれ込んでくる。店内ではさぞかし賑わっているだろう。それを他人事のように思っていると、目の前を『誘宵 美九親衛隊』と刺繍されたハッピを着た人物が通り過ぎる。幻のアイドルが姿を現わすという情報はすでに知れ渡っているらしい。

それを見て、蓮は小さく鼻で笑った。

「ああいう人間が神聖視していたものの本性を知った時、どんな顔をするのか気にならないか？」

それを聞いた土道は間違いなく美九の事を言っていると分かった。表に出ている時とプライベートでは性格が違うなどアイドルでは珍しくないが、美九のようなパターンなどそうそうないだろう。

「えっと…もしかして、蓮はアイドルとかつて嫌い？」  
「いや、別にそういう事じゃない。ただ、何かを信仰している人間の前でそれを否定するのは面白そうだろう？」

腹黒さとドSを含んだ笑みを浮かべるのを見て、ぎこちない笑みを浮かべるしかできない。すると、助けとばかりに見覚えのある人物が姿を現わす。

「…なかなか調子がいいじゃないか」

「あの…来ちゃいました」

『わーお、面白いぐらい似合ってるよー。土道くーん』

帽子をかぶった四糸乃と令音が姿を見せ、予想通り、よしのんにメイド服の事を言われる。四糸乃の純粋な瞳に見られて土道は悲鳴じみた声を出して顔を隠す。そんな土道を気にせず令音は蓮を見ている。

「…君のことだから、何かを理由をつけてサボるかと思ったのだが…  
それでもないらしいね」

「別にやる気があるわけじゃない。サボる理由がないだけだ」

蓮は令音が少し苦手だ。嫌いだからという訳ではなく、ただ、その目でじつと見られると自分の知られたくないことまで見透かされそうな気がする。それは令音もなんとなく分かっているのか、『そうかい』とだけ言い納得する。

「せっかく来たんだし、入っていくか？」

「あつ…はい、そうさせてもらいます…」

「…ではお邪魔させてもらうよ」

土道に純粋な瞳という技で精神的なダメージを与えた四糸乃は令音と共に店に入っていく。蓮はそんな土道を励まして元気を与える。

さらに数分後、店は行列が出来るほどの繁盛だ。そんな時、正面に

大きな人だかりが出来ていた。

その集団が左右に割れて濃紺のセーラー服を纏った少女、誘宵 美九が姿を現わす。

「土道、俺はこれから厨房に行く。…後は頼むぞ」

「あ、ああ…任せろ…」

美九が出てきたとなればここにはいられない。それを土道は緊張気味に答える。蓮は手に持っていたメニュー表を渡して店に姿を消す。この時、何も出来ない自分を齒痒く感じた。

そこから数時間を店の厨房で過ごしたのだが、予想以上の客により、美九との対決の音楽ステージが始まった。都合により中抜けすることが出来なかった。その事を内心焦りながら作業を続けること数分。

やっと許可が出たのは音楽ステージの結果発表がされるかされないかの時間帯だ。

「悪い、ちよつと抜けさせてもらう」

クラスメイトにそうとだけ伝えて、会場へと向かう。パフォーマンスは見れなくても結果だけは見逃す訳にはいかない。出来るだけ急ぎたい心情だが、その道中は大勢の客で溢れかえっている。

「チツ…コツチは急いでるのに…」

そんな苛立ちを吐き捨て、走りながら客の間を抜けていく。もし人目が無ければもっと素早く行動出来るのだが、生憎人間は二本の足で地を這いつくばるのが似合う生き物らしい。

そんな事を考えていると、不注意でか自分の肩に誰かがぶつかってしまう。

「すまない。コツチは急いでて…」

そうとだけ言つてそのまま通り過ぎようとするが…。

「いえ、お気にせず結構ですわ。蓮さん」

その声と言葉に素早く顔を向けるが、そこには誰も居ない。そのまま数秒が経過した後、何も無かったかのように再び走り始める。

「さて…勝つていてくれよ。土道…」

ステージに通じる扉の前にたどり着き、祈るようにそう言い扉を開ける。その時、凄まじい音が蓮の耳を襲った。

「よくも…よくも私を騙してくれましたね…！後悔させてあげますっ！やっちゃってくださいっ！私の精霊さんたち！」

今、士道の目の前には顔を憤怒に染めた美九とその天使〈破軍歌姫〉、そしてそれによって操られた四糸乃、耶具矢、夕弦が限定解除した霊装を纏っていた。全員、士道に敵意の籠った目を向けている。

「お姉様は…私が…守ります…」

『四糸乃の言う通り、お姉様を守らなきゃー』

「我らの姉上様に楯突こうとは、身の程を知ると見えるの」「守護。お姉様には指一本触れさせません」

美九を守るように立つ巨大なうさぎと人形の背中に貼りつく四糸乃、そして風を纏い、美九の上空に静止する耶具矢と夕弦。この陣営では士道が圧倒的に不利だ。しかし、ここでさらに士道を追い詰める出来事が起きる。

ステージに白い髪と日焼けを知らないような肌が特徴的な蓮が青い手：〈バスター〉と赤い剣〈レッドクイーン〉を手に士道の前に立ち塞がった。

「ま、まさか…お前まで…」

顔は俯いていて口元しか見えないが、自分の前に立ち塞がったという事は美九の演奏を聞いた…つまり、美九の支配下になったという事だ。

「あれえ？もしかして、あなた男ですか？なら、あなたがその男を始末してください。私の可愛い精霊さんたちに男なんてものを触れさせるわけにはいかないので」

予想外のイレギュラーの出現に少なからず驚いた美九だったが、それが自分の支配下だと理解して、命令を飛ばす。蓮は顔を俯け、剣を床に引きずりながら、一步一步士道に近づいてくる。その度に士道は

一歩後ずさる。この状況は絶体絶命のピンチだ。

「ほらほら、早くして下さい。これからやる事が沢山あるんですから！」

美九はそう言うが、明らかに追い詰められた土道を見て楽しんでいゝる。それを聞いた途端、蓮は足を止め、唇を半月のように歪めた。

「じゃあ、それは全部キャンセルだなっ!!」

剣をステージの床に垂直に立てた後、まるでコンパスのように身体を回転させながら、剣を美九達に向けて振る。それによって突風が発生し、それは空中にいた八舞姉妹のバランスを崩しよろめかせ、美九と四糸乃を数歩後退させる。

「蓮！貴様、姉上様を裏切るつもりか!？」

「裏切る？何言ってるんだよ耶具矢。最初から味方じゃない奴の攻撃は裏切りだなんて言わないんだよ」

馬鹿にするようにそう言うのと剣を肩に担いで土道に向き直る。こんな状況だが、怪我はない様子だ。

「精霊攻略の最後は結局、こうなるのかよ。初めて平和的に終われると思っただのに……」

「美九の演奏を聞いたなら四糸乃達はあんなったのに、なんで蓮は平気なんだ……？」

「ああ？これが守ってくれた」

そう言っつて右腕……へバスターを土道に見せる。演奏が聞こえた途端、蓮の意志とは関係なしに勝手に顕現して、美九の支配から守ってくれた。

「ここは俺がやる。十香！頼む!!」

「うむ！分かったぞ！」

そう叫ぶとそれに呼応して霊装を限定解除した十香が土道を抱えと、大きくジャンプしステージの天井際に沿って伸びたキャットウォークで着地する。

美九が天使の音を聞いた者を支配下に置いていゝるとすれば、十香は両耳にイヤーマニターをつけているため、問題ないと考えられた。

ちなみに、なぜその事を知っているかという、蓮は十香に演奏の



アドバイスをしていたからだ。

なぜか十香の楽器はタンバリンだったので楽器に慣れる練習は必要ない。その代わりリズムに乗る練習をした時、両耳にイヤーマニターをつけたら十香が『これがしつくりくる』と言っていたのを覚えている。

土道を十香がひとまず安全なところに退避させたのを確認した後、蓮はポケットからインカムを取り出し、通信をへフラクシナスへ繋ぐ。

「司令官殿、聞こえるか？ちよいとハプニングが起きたから、土道をそっちに…」

『はああ？なんでお姉様に楯突いたあんた達を助けなきゃいけないのよ？』

「…やっぱりそうだったか…」

琴里の罵倒が飛んでくるインカムを耳から外し、指先で握りつぶす。まあ、これは何となく予想出来た事だ。今、へフラクシナスの艦橋はさぞかし世紀末状態になっている事だろう。それでも自分がコツチを制圧すれば済む話だ。

「こりゃあ、いつもの倍くらい貰わなきゃ釣り合わないな」

ため息混じりにそう言って美九に向かって歩み始める。しかし、それを見過ぎささない者達がいる。

「姉上様に近づくのを我らが許すかと思うたか！」

「制止。そこで止まってください」

空中にいた八舞姉妹が風圧の塊を蓮に向けて放ってくる。そうなるも蓮は慌てる様子はなく、左手に持ったへレットクイーンを引込め、手の上に風を操るへエカトルを二つ出現させる。

へエカトルは二人の放った風を吸収して高速で回転する。刃が見えなくなるほど回転した後、凄まじい速度で二人の元へ飛んでいく。

「くっ！これは…！」

「注意。気をつけてください、とても素早いです」

二人の意識は蓮からへエカトルへ向けられる。風の精霊である二人でも周囲を飛び回る刃に対応出来ず、四苦八苦している。封印前な

らまだしも、限定解除した程度の能力で飛翔する二つの剣を捌くのは楽ではない。

これで二人の足止めは出来た。あとは美九以外に残った四糸乃だが、どうやら彼女もやる気らしく蓮を睨んでいる。

「お姉さまは…私が守りますっ!」

『ちよつとお痛が過ぎるんじゃないかなー』

水分を凝結させた氷柱のような物をこちらに発射してくる。しかし、これは蓮から言わせてもらえば八舞姉妹より対処が楽なのだ。飛んでくる氷柱に手のひらをかざすと、炎が吹き出し、それを呑み込んだ。

「今、司令官殿からの好感度は最悪だけど…使わせてもらおうか」

炎は手のひらに収縮され、薙刀の刃をしたへトナティウが姿を現わす。その剣を横に軽くなぎ払うように振ると、四糸乃の前に炎の壁が形成される。

「これでよし」

四糸乃とこちらと分別させただけで再び歩き出す。当然四糸乃もそれを見過ごすはずなく、壁越しに氷柱を発射する。しかし、それは炎に触れた途端、一瞬で蒸発し壁を突破する事が出来ない。

「なんなんですか…こっちに来ないで下さい!」

こちらに歩いてくる蓮を見て、恐怖を感じ〈破軍歌姫〉で心酔の演奏を何度も飛ばす。それでも蓮は歩みを止める事なく進んでくる。

「勝手に…人の中に入ってくるなっ!!」

人の価値観の中に入り込もうとする美九に苛立ちを感じ、それをぶつけるかのように怒鳴る。すると、〈バスター〉が輝きを発し、音すら掻き消すほどの衝撃が蓮を中心に発生する。それに驚き美九は尻餅をつく。

あとはそのまま近づき、美九の首元に刃を添えるだけで制圧は完了だ。その時、突如天井が切り裂かれ、そこから白金のCRユニットを纏った魔術師が入ってきた。それを見た途端、美九の事は頭から消え去った。

「冗談だろ…なんであの人が…」

それは蓮の血の繋がらない母親であり、DEM最強の魔術師<sup>ウイザード</sup>、エレンだった。エレンは美九や蓮に視線を向ける事なく十香と土道に一直線に向かっていく。

(やっぱり狙いは土道か……)

「エカトル」に八舞姉妹への攻撃を中止させ、素早く回収。ステージを飛び出し、美九によつて操られた観客の頭を踏み台に最短ルートで二人の元へ向かう。今、エレンは十香と交戦してこちらに気づいていない。ならば、不意打ちで攻撃するしか勝機はない。

十香は蓮に気づいたようである限り自分に注意を向けるように剣を振るう。それを心の中で称賛しつつ、大きく飛び、ヘトナティウをエレンの背後で振り下げる。しかし、それは見えない力によつて止められた。

「あなたの事です。そう来ると予想してました」

エレンはそう言う<sup>テリトリ</sup>と随意領域を操作、蓮をステージから見て右側のキャットウォークに吹き飛ばす。ぶつかった衝撃で肺の中の空気を吐き尽くし、意識が朦朧とする。

「貴様あ！よくもレンを！」

「あなたを連れて帰れば、アイクはさぞかし喜ぶでしょう。ですが、今はあなたはターゲットではありません」

事務的にそう言う<sup>テリトリ</sup>と十香との戦闘に意識を向ける。こつとも簡単に自分は足なわれてしまうその実力差に絶望する

(俺は…無力だ…)

そうぼんやりと思いつつ意識を失った。最後に見えたのはエレンが十香に向かつて剣を振りかざしたところだった。

### 34話

「うっ……うっ……」

そんな声を漏らしながら蓮は気だるそうに目を開ける。そこは天宮祭が行われたステージで、今、自分はその椅子に座っている。

ボンヤリとする意識の中でエレンと戦って気を失ったのを思い出す。とりあえず頭を手で押さえて意識をハッキリさせようとするが、不思議なことに腕が全く動かない

「あなた、こんな状況で呑気に気を失ってられるなんて、頭の中が空っぽなんですかあ？」

正面のステージから特徴的な声が聞こえて顔を上げると、その中央に八舞姉妹と四糸乃を左右に立たせた美九がおり、その顔は鬼の首をとったかのような表情で蓮を見下している。

美九はそれを始めに耳を塞ぎたくなるような言葉を飛ばしてくるが、それを気にすることなく自分の状況の把握に意識を向ける。

（両手を後ろに回して拘束…手首には手錠がかけてあるな。その上半体にはロープを巻かれている…ご丁寧なことでは…）

そんな皮肉を内心思いながら、ホール内にある時計を見る。時間は最後に見た時から一時間以上経過していた。思っていたより長く気を失っていたようだ。

「ちよつとー聞いてるんですか!？」

勝手に自分から言い出したくせにそれを聞いてないと不満らしい美九は、周りを見渡していた蓮に声を上げる。いろいろな意味で面倒くさい状況だ。ため息をつくとそんな美九に顔を向ける。

「お前、黙ってる方が美人だな」

その一言で場の空気が一瞬で凍る。美九はその言葉を聞いて、顔を真っ赤にし、プルプルと拳を震わせる。そんな美九を見て、八舞姉妹と四糸乃は息を詰まらせた。

「今…なんて言いましたか…?」

声音は大爆発寸前という事を物語っている。それ以上は放置するのはマズイと判断して耶具矢と夕弦が動いた。

「姉上様！お、落ち着くのだ！」

「叱咤。今の言葉、お姉様に失礼過ぎます」

耶具矢は美九に語りかけ、夕弦は蓮を怒るというコンビネーションで落ち着かせる。四糸乃はそんな怒りに震える美九を見て怯えてしまっている。

「そ、そうだ！これは罠なのだ！あやつは姉上様を挑発して何か企んでいるに違いないぞ！」

「わ、罠…そ、そうですね。その可能性がありましたあ…」

少し前に絶体絶命のところまで追い詰められていたのが脳裏に刻み込まれているのか、耶具矢の言葉を聞いた美九は落ち着きを取り戻す。それを見て内心舌打ちをする。乗ってきたら面白かったものを。「ふう…少し休んできますう。あの男から目を離さないでくださいあーい」

美九は三人にそう言うのと舞台の袖に戻っていく。蓮の居場所はステージから一目で分かる目立つ場所だが、そもそも自分で手綱を握れないものを自分の陣地の中に置いてある時点でどうかと思ってしまう。

もしかしたら美九は、自分を含めた精霊四人で正面から戦えば勝てると思っっているのかもしれない。

（こつちも少し休むか…。少なくともあつち側から手を出してくる事はなさそうだ）

藪をつついて蛇を出す事をするつもりは無いらしい。そう判断した蓮は目を閉じた。

ホール内に大きな音が響きわたる。ステージでは美九が自身の天使である〈破軍歌姫<sup>ガブリエル</sup>〉の曲を演奏しており、それに観客（全員女子）は感激している。そんな中、一人だけそれらと違う反応をしている人間がいた。

（暇だ…。何か面白い事はないかねえ）

美九のステージを正面から観れる席に座っているというのに、退屈そうに欠伸をしている蓮に対して、他の観客は殺気を込めていると

言ってもいい目で睨みつける。

そんな中、美九の演奏は終わり、大きな歓声で包まれる中、美九は観客に笑顔で手を振った後、蓮をキツく睨みつけて舞台の袖に戻っていく。

美九にとって蓮はこの楽園にあるたった一つの異物なのだ。不思議な事に真っ白なシーツにわずかな汚れがあると、人間はその汚ればかりを気にする。九十九%の純白があるのにも関わらずだ。当然、本人も自分は邪魔者だと理解している。

「ミルクを触りたいな。あいつを撫でてたらこんな状況でも少しは楽しめると思うのに……」

普段はしない無いものねだりをしてっていると、四糸乃、耶具矢、夕弦がこちらに歩いてくるのが見えた。てつきり、美九の相手をしているのかと思っていたが違うらしい。しかし、三人の表情を見ると楽しいお喋りをしに来た訳では無いようだ。

「いい加減しろ！姉上様に不敬であろうぞ！」

こちらに来て最初の台詞がそれだった。予想を裏切らない展開に小さく笑ってしまう。だが、三人はそれに気付かず次々の叱咤の言葉を飛ばす。

「首肯。お姉様の歌声をあんなに近くで聞けるといふのに、今のあなたの態度は万死に値します」

「お姉様の歌を……ちゃんと聞いてください……！」

「君さー、ちよつと不真面目だよー？」

どいつもこいつも口を開けばお姉様お姉様と、ここまで来ると苛立ちを通り越して呆れてくる。

「世界一美しく、素晴らしい姉上様の姿と歌を近くで見ると、お主が何を捧げようと叶わぬ事なのだぞ！」

「……あいつのどっこが素晴らしいんだよ」

小さく愚痴ってしまうのも仕方が無い。男嫌いで土道を捕まえる為に他人の事を考えないでこんな大暴動を起こす人物が素晴らしいなど、辞書で『素晴らしい』の意味を調べてこいと言いたくなる。

「縄と手錠で拘束させられて、無理矢理見させられてるのを楽しめる

訳ないだろ。それでも楽しめると思うなら、あいつの感覚がズレているとしか言いようがないな」

「ぐぐ…それ以上姉上様を侮辱するものなら…!」

怒りに拳を震わせる耶具矢。他の二人も怒りの目で蓮を見ている。このままだと感情のままにパンチが飛んでくる可能性がある。そこで持っていた手札の一つを使うことにした。

「殴りたければ殴れ。だが、もしそうしたら次のテストの対策に手伝ってやらないぞ」

「えっ!?ちよっ!それはズルいわよ!」

急にいつもの耶具矢に戻り、泣きそうな目で見つめてくる。勉強が苦手な耶具矢は蓮に手伝いを求めていたのだが、それを断られるのはバンジージャンプで命綱を切られるのと同様なほどピンチなのだ。

「次の数学の範囲は証明だったっけ?あれは難しいぞ。一人でやるのはだいぶ厳しいだろうな」

まるでカエルを絞め殺す蛇のような言い方に、さつきとは別の意味で耶具矢は震える。それを見かね、夕弦が乱入してきた。

「説得。落ち着いてください耶具矢。八舞たるものそんなので狼狽えては…」

「そうだな…夕弦と四糸乃には家で作るスイーツの喪失ルートなんてのもあるぞ?」

「衝撃。それはとても困ります」

「もうケーキが食べられなくなるのは…嫌です…!」

この土道達六人は時々蓮の家に来るのだが、その度に蓮が作ったスイーツと紅茶、コーヒーを幸せそうに食べている。それらがいわゆる絶品というやつで見たことがないような見た目のケーキでも一口食べるといつもその甘さと美味しさの虜となってしまう。

「次はハロツズスのホワイトダーズリンとリングゴとレーズンのデューブパイを用意してたんだが、どうする?」

その問いに三人の喉がゴクリと動く。蓮も出会って一日に満たない相手に対する忠誠心と我が身の可愛さ、どちらが上なのか興味があ

「ぐぬぬ…よかろう。今の発言は私の寛大な器により無かったことにしてくれようぞ…」

かなり悩んでいた耶具矢だったが、結局我が身の可愛さの方が勝つたらしく、二人もそれに頷く。それでも来る場合は連帯責任にしようかとも考えていたが必要無かつたらしい。

美九は自分の天使の力を過信しているようだが、所詮こんなものだ。力で他人をねじ伏せる事は出来る。だが、そいつに忠誠を誓わせるとなると途端に難易度は跳ね上がる。人を操るというのも簡単ではないのだ。

それを知らない美九に憐れみを感じながら目を閉じる。実に充実した暇つぶしとなったのがとても喜ばしく思うのだった。

（退屈だ…今日はよくその言葉が出てくるな…）

それから数時間後、時間を見る限り外は夕日が沈み月が姿を現わしているだろう。そんな時間になっても相変わらず状況に変化はなく、欠伸をする。だが、その時は急に終わりを告げる。

どこからか黒い影がホール内に侵食してくると、観客達が次々に倒れていく。しかし、倒れた者は苦しそうに呻いているのを見ると死んではないらしい。

（やつと来たか…土道！）

一日千秋の思いで待ち続けた成果がようやく出た。そう考えると小さな笑みがこぼれる。この非常事態は美九達にも伝わっているはずだ。彼女達がどのような対応をするか楽しみでほくそ笑んだ。

「ここだ…開けるぞ」

精霊である狂三の力を借りてセントラルステージの扉の前まで来た土道はその扉を一気に押し開ける。観客席にいる少女達はその場に蹲っているが、最奥のステージには天使（破軍歌姫）と霊装を身に纏った美九がおり、脇にはメイド服を来た耶具矢、夕弦、四糸乃がいる。



そして、その一番右には人質のつもりだろうか、両手を後ろに回され、ロープで巻かれている蓮が立っている。しかし、当の本人は緊張した様子はなく、呑気に欠伸をしていた。

「私の前に姿を現わすとは…随分と甘く見られたものですねえ…五河士道！」

「美九、頼む！そいつを離してやってくれ！俺はそいつと一緒に十香を…あの時さらわれた女の子を助けなきゃならないんだ！だから…」  
「うるさい！うるさいですう！黙ってください！さもなければこの男が…」

そう言つて蓮に視線を向けるが、その瞬間、美九は目を見開いて驚愕した。

「あの男は…あの男はどこにいったんですか!?!」

さつきまでいたはずの蓮の姿がまるで幻のように消え去つていたので。美九と一緒にいた三人も気づかなかつたようで周りをキョロキョロと見渡している。

「あ、あやつはどこに行ったのだ!?!」

「狼狽。さつきまでここにいたのですが…」

これには美九達だけでなく、士道も驚いた。ステージ上に立っていた蓮を見てから今に至るまで十秒あつたか無かつたかの時間だ。そんな僅かな間に姿を消したのだ。

「一体どうなつてんだ…？蓮はどこに…」

「おい、誰をさがしてるんだ？」

「誰つて、そんなの姿を消した蓮に決まつて…」

そこまで言いかけて士道は言葉を止めた。今、自分は誰と話した？近くに狂三はいるが、喋り方といい声といい明らかに違う。むしろ男っぽい声だった。

ゆつくりと首を動かして声が聞こえた方に顔を向ける。自分の右隣…そこにはステージにいたはずの蓮が立っていた。

「ぎゃあああ!!」

それを見た途端、士道はそんな声を出して驚愕した。その声を聞いて美九達も視線を向けて驚愕している。

「そんな幽霊でも見たような反応をするなよ。さすがに傷つくぞ」

「い、いつの間に…ここまで来たんだよ…」

「お前が俺を開放してくれって言った直後に行動を開始した。視線がお前に集中してたから動きやすかったよ」

そう解説し終わると驚く土道を無視して、狂三は蓮の前まで歩いてくると、霊装のスカートを摘み、上品にお辞儀をする。それはまるで王に頭をたれる家臣のような光景だ。

「蓮さん、お迎えに参りましたわ」

「やつぱり、お前が土道を連れて来てくれると思ったよ。この礼は後日たっぷりさせてもらおうぞ」

「ふふ…そのお言葉、確かに聞きしましたわよ」

嬉しそうな様子でそう言う狂三。とりあえず落ち着きを取り戻した土道は蓮のロープ等を外そうかと考える。だが、突如、蓮の目の前に青色のナイフのような刃物が出現すると、それはひとりでに動き、身体に巻かれているロープを切断する。

「よし、次は手錠か…」

そう呟くと、右手首にある手錠をギュツと握る。すると、その部分が火に炙られたかのように赤くなり、まるでチョコレートが溶けるかのように崩れ落ち、手錠の役目を果たさなくなる。

「ふう…両手が自由っていいもんだな」

そのまま左手首にも同じ事を繰り返して両手首が完全に自由になる。脱出トリックでこれが出来たらとても楽になる手順だ。これに土道は啞然とするしかない。

「一人で解けるのなら、なんでわざと捕まっているような事を…」

「そりゃあ、勝手に出て行ったら今みたいに合流出来ないだろ。ここに来るのは予想出来たから、待ってるだけで楽だしな」

手首や首を回しながらその理由を土道に解説する。ある程度身体をほぐしたら美九達に身体を向ける。ずっと座りっぱなしでエネルギーは有り余っている。それを今からたっぷり消費するつもりだ。

### 35話

一人脱出ショーを披露した蓮は顔をステージにいる美九に向ける。これで彼女には自分がどのような危険度で思われていたのかが伝わった。自分の能力にプライドを持っている彼女がどのような心情かは大体予想出来た。

「よくも…よくも私を馬鹿にしてえ…!!」

奴隷として見下していた男に、逃げられる力を持ちながら逃げることなく、自分の城の中で退屈そうに過ごされていた。その事実が美九を完全に激昂させた。周りにいた四糸乃達はそんな美九に戸惑いつつも、自分達が舐められていたという事を認識し、少なからず美九と同じ気持ちらしい。

「もう許しません!! 〈破軍歌姫〉<sup>ガブリエル</sup>——【行進曲】<sup>マーチ</sup>!」

美九が両手をバツと広げると、その軌道をなぞるように光の鍵盤が現れ、それを演奏するように指を動かす。すると、会場内に力が湧き出るような勇ましい曲が響き渡り、観客席に倒れていた少女が立ち上がる。

「こ、これは…」

「あらあら、ただの人間がわたくしの影を動けるだなんて」

「味方の強化とは、なかなか面白い力だな」

それは本心からの感想だった。てつきり、他人を操るか、音で攻撃するぐらいしか出来ないと思っていたが、他人を強化するなどといったことも出来るらしい。

「さあ!もう捕まえろだなんて言いません。私の目の前でその男共を殺しちやってください!」

相変わらず、慣れた口調で命令を飛ばす美九。それに従い、少女達が士道達に顔を向ける。

(さて…どうするべきか…)

ターゲットは美九とはいえ、邪魔をしてくるならこの少女達を排除するのも視野に入れとかなければならない。一番手っ取り早いのが足を凍らせて動きを止める。足を切って動けなくさせるなどだが、数

千人はいる少女達の足だけを狙って凍らせるのは骨が折れるし、後者はお優しい土道が黙っていないだろう。

何をすべきか悩んでいると、狂三が笑みを浮かべながら一步前へ出た。

「あなたが動く必要はありませんわ。ここはわたくしにお任せくださいまし」

そう言うと、会場全体が真っ黒な影で塗りつぶされ、そこから何人もの狂三が出現して少女達の身体を拘束する。これで終われば楽だったのだが、現実はそのままで甘くないらしい。

いきなり、会場内に轟音とともに凄まじい突風が吹き荒れる。まともにも食らったなら土道など余裕で吹き飛ばしてしまうものだったが、当たる瞬間、それとは別の風が土道達三人を包み込むように吹き、守ってくれる。

土道は一体何が起きたのかと思い、蓮に視線を向けると彼の手のひらの上で「エカトル」が高速で回転し風を生み出していた。そして、当の本人は呆れた様子で上を見る。

視線の先にはメイド服の上に霊装を纏い、天使を顕現させた耶具矢と夕弦がいる。狂三も美九陣営全員の動きを止めるのは叶わなかったらしい。

「これ以上の無礼は許さぬ！それでも来るといふならその代償、命を持って償うことになろうぞ」

「憤怒。これ以上は見過ごせません。お姉様に害をなすというのなら本気で排除します」

怒りを孕んだ言葉を向けられても蓮は気にした様子もなく、目をステージに向ける。そこには四糸乃のウサギ型の天使「氷結傀儡」に守られた美九がいる。それでも数千いた敵を四人まで減らした狂三の成果は素晴らしいと言えるだろう。

「そ、そうですう…私には可愛い精霊さんが三人もいるんです…。今度は油断しません。確実にあの男も…」

狂三の分身体に驚いていた美九はまるで自分に言い聞かせるように言う。相手が三人に対して自分は圧倒的力を持つ精霊四人。まあ、

自分を落ち着かせるにしては悪くない言い聞かせだ。だが、それを聞いた本物の狂三と分身体は一斉に笑い始めた。

「きひっ…ひひひひひ。油断しなければ、そうするだけで蓮さんに勝てるとお思になるだなんて、身の程を知らなすぎますわねえ！おいでなさい〈刻々帝〉」

その瞬間、地面から針が短銃になっていて金色の巨大な時計が現れる。時を操る狂三の天使、〈刻々帝〉だ。それを顕現させた後、狂三は蓮の目の前でまで足を進めた。

「このまま戦うだけじゃ面白くありませんわね。蓮さん、戦つてほしいとおねだりして下さいまし。わたくしはそれに応えますわ」

おねだり、こんな時に狂三の言ったその言葉の意味が分からず、土道は眉を顰める。しかし、そう言われた蓮は困惑しているというより何やら呆れている様子だ。

「今、ここでするのか？人が見てるんだぞ」

「ふふ、わたくしは気にしませんわよ。そんな事、気にならないほど良いことですので…」

そう言うと、狂三は目を閉じて唇を突き出す。蓮はそんな狂三の右頬に手を添える。

「お、おい。二人とも一体何を…」

土道がそう言い終わるより早く、蓮が狂三の唇にキスをする。それを見て、思わず『はあっ!』と声が出てしまう。

驚愕したのは美九達は同じで、美九と耶具矢、夕弦は驚きで目を見開き、四糸乃は顔を赤く染め、顔を背けていた。

顔を赤く染め、うつとりとした顔でキスを受ける狂三。土道はそんな狂三を見てある事に気付いた。放心気味に開かれた狂三の左目にある時計がとてつもない速さで逆回転していたのだ。

「んっ…はあっ…っ…ふあっ…」

数秒、口づけが続き狂三のそんな声と共に唇が離れる。離れた時、二人の口元に銀色の細い糸が架かっていて、狂三は色っぽく唇を舐めてそれを断つ。すると、狂三は恍惚した顔のまま身体を震わせた。

「ああっ…来ましたわ…この感覚が…。さあっ！今夜は特別ですわ、

わたくしたち！蓮さんの要望にキッチリと応じませんと」

その言葉に呼応するように狂三の右手が赤と黒い光が包み込み、おぞましい雰囲気を持つ赤と黒の〈バスター〉が現れる。それは六月に土道の実妹である真那と精霊として姿を現わした琴里を苦しめた悪魔の手だった。

それを見て凍りつく土道の背中を蓮はバンッと叩く。

「しっかりしろ。どんな出来事があったかは知らないが、今の狂三は味方だ。なら、信用してやれって」

「あ…ああ。そうだな、今は狂三の力が必要なんだ…」

そう言う土道の目には覚悟と勇気が宿っている。そうだ、DEMに攫われた十香を救うためには、美九は無視する事は出来ない。そのために狂三が協力してくれている、ならば信じてやらなければダメだ。

狂三が両手を広げるとその手に〈刻々帝ザフキエル〉から切り離された二つの短銃が収まる。それと同時に会場内に同じ短銃を持った狂三が次々に姿を現わす。

「狂三、耶具矢と夕弦の注意は俺が引き寄せる。土道のお守りは任せろ」

「分かりましたわ。蓮さんもお気をつけて」

その言葉を背中で受け、蓮は耶具矢と夕弦の正面まで移動する。宙に浮いている二人は蓮を見下しながら何やら得意顔の様子だ。

「かか！地に縛られた者が我ら颯風の御子に勝てると思うているのか！」

「警告。慢心を身を滅ぼします」

慢心しているのはどっちだと呆れつつ、右腕の袖を捲り、肌を露出させると腕が光を発し青い輝きを放つ手〈バスター〉現れる。

複雑な事情があるとはいえ、これは互いの力関係を決めるいい機会かもしれない。ずっと見下されるというのもストレスが溜まるものだ。

「地に縛られた…ね。じゃあ、お前達は…天に縛られる！」

そう言うのと同時に、床を蹴り、二人との距離を縮める。耶具矢と夕弦は接近してくる蓮を吹き飛ばそうと風の塊を飛ばす。しかし、そ

れは蓮が二人の真下という死角に入る事により、直撃する事なく外れる。

真下に入ると、耶具矢と夕弦が視線を向けるより早く、〈バスター〉で夕弦の足を掴み自分の方に引き寄せる。その行動に夕弦は女の子らしい声を上げ、耶具矢は驚きの顔をする。

「くっ！卑劣にも我が半身を人質にするつもりか！」

「そうか、じゃあ返してやるよ！」

その返答はまさに予想外のものであった。引き寄せた夕弦を腕で直接掴むと、そのままぐるりと一回転し遠心力を加えて耶具矢に放る。

投擲された夕弦は耶具矢の腹部に直撃し、そのままホールの天井に姉妹揃って衝突した。

その同時に二人の手足が氷に覆われ、天井に貼り付けられる状態となった。

「ちよ、ちよつと！何よこれ!!」

「抵抗。くっ…」

もがく二人を無視して、蓮はステージに目を向ける。そこには土道を抱えた狂三が猛スピードで美九に向かっていく。四系乃は狂三達から美九を守ろうとして、氷の壁を出現させるが狂三の放った銃弾はそれを突破し、〈氷結傀儡〉の右前脚に命中する。

命中した銃弾は命中から二秒後の時間差で爆発し、〈氷結傀儡〉のバランスを崩す。

『わわわっ！なんなのよこれはーッ！』

「よしのん！大丈夫!？」

〈氷結傀儡〉ほどの巨体を四本の脚で支えているならば、一つでも使えなくなると全体のバランスが崩れてしまう。そもそも身体が大きいならば、それに釣り合うような大きさの脚をつければ何が起きても大丈夫などという簡単な話ではないのだ。

四系乃を突破した狂三は土道と美九を影の中に引きずり込んでいく。美九は音を飛ばして攻撃しようとしたが、もう一体の狂三によって口を塞がれそれは叶わない。そのまま二人は仲良く影の中に消え

ていく。荒っぽい方法だが、『結果良ければ全てよし』だ。

ターゲットである美九と土道は二人きりになったが、これで全て終わりというわけにはいかない。そのタイミングで耶具矢が自分の右腕を覆っていた氷を砕いたのだった。

「くっ……うう……」

土道は身体が引き上げられる感覚にそんな声を漏らす。チカチカした目が落ち着くと、自分はステージの上にいることが認識出来る。

美九も土道と同じくステージの投げ出されたようので四糸乃たちが声を上げている。

「立てまして？土道さん」

「狂三……一体何が……」

「土道さんのいた影の中の空間が傷つけられ、壊れてしまいましたわ。わたくし達も出来る限り時間を稼いだつもりですけど……」

狂三がそう説明すると、土道が帰ってきたのを確認したのか、蓮も駆けつける。その腕には途中で助けたのか狂三の分身体を一体お姫様抱っこしていた。

「土道、結果はどうであれここを離れるぞ」

「待ってくれ！もう少し……」

まだ対話を試みようとする土道に、正面から巨大な氷柱が飛んでくる。しかし、それは土道が驚きの声を出すより早く、炎の渦に包まれて消滅する。氷柱を飛ばした犯人であろう四糸乃は敵意の籠った目で土道たちを見ていた。

「いや、ここまでだ土道。これ以上は死人が出る」

そのハッキリとした物言いに息を飲む。狂三も同感とばかりに頷く。

「蓮さんの言う通りですわ。さあ、行きますわよ……」

狂三が短銃を掲げたのを見て、蓮は抱えていた分身体の狂三を下ろし影の中に逃げさせた後右手で狂三の肩を掴む。

「刻々帝」――「一の弾」

高速化の弾を自身に撃ち、ステージ天井に開いた穴から飛び出す。



その強烈なスピードに土道は声を漏らす。蓮は片手だけ狂三を掴み、その表情には苦悶といった様子は見られない。

このまま逃げるつもりだったが、美九はそれを見過ごすつもりはないうのでその手先として八舞姉妹が後を追ってくる。こちらは高速で移動しているとはいえ、相手は風の精霊だ。もし追いつかれてしまうと市街地での戦闘となり、建物等に被害が出てしまうのは出来る限り避けたい。

「あらあら、困りましたわね。ここはわたくしが…」

「いや、狂三は気にせずまっすぐ進んでくれ。まったく、しつこい女は嫌われるぞ」

そう言う蓮の左手にはいつの間にか冷気を放つ球体が握られており、それを追ってくる八舞姉妹に向かって投げる。ボールのように回転して、八舞姉妹の目の前まで到達した瞬間、爆弾のように爆発し白い霧を吐き出して周辺を白く染める。

「おのれ！小癩な真似を…」

「狼狽。前が見えません」

爆発に驚き停止してしまう耶具矢と夕弦。破裂し、散った欠片がまた破裂し霧を吐き出すという連鎖で自分たちの目の前に何があるかすら分からなくなる。このまま進み、霧を抜けた瞬間目の前には建物が…そんな事態を想像して二人は立ち止まった。

「煙に巻かれて頭を冷やしてろ。バカ姉妹どもめ…」

蓮はそう呟いて目を閉じる。結局、霧が晴れた頃には三人がどの方向に向かったかすら八舞姉妹には分からなかった。

### 36話

八舞姉妹の追跡を振り切ったのを確認した狂三はビルとビルの間に入り込み二人を下ろす。土道は下ろされた後、気分を落ち着かせようと頭を抑えていたが、蓮は路地裏から顔を出して周りを警戒していた。

(とりあえず、逃げ切れたか…)

あの霧の中でこちらの姿を視認出来たとは考えられないが、相手が精霊である以上警戒し過ぎて困るといふ事は無いだろう。ひとまず逃げられたと判断し、安堵の息を吐く。

「それで…土道さん、説得はどうなりましたの」

「悪い…二人がせっかく頑張ってくれたのに、ハッキリとした答えがもらえてない。しかも最後は怒らせちゃった」

申し訳なきような悔しそうな顔をしながら土道は答える。まあ、それは耶具矢と夕弦が追いかけてきたのを考えると大方予想出来る答えだった。

「はあ…今日一日がこんなに苦労する日になるだなんて予想もしてなかったな。家でミルクも腹を空かせてるだろうし…」

「ご安心くださいまし、あの子にはわたくしがご飯をあけておきましたわ。今頃ベットの所で眠っているかと思えますわ」

こんな状況だというのに、緊張感を感じられない会話をする蓮と狂三。ただ単に神経が凶太いだけか、それともこんな話が出るほど自分の強さに自信を持っているかのどちらなのだろう。どちらにしろ、こんな話ができるほどの余裕は今の土道には無かった。

無かったのだが、土道には聞いておきたい事があった。

「なあ、二人はホールでなんであんな事をしたんだ？」

「あんな事？…なんの事だよ」

「あっ…いや…その…なんでキスしたのかなと…」

自分も何回もキスしてるくせに、言い難そうに恥ずかしがる土道に疑問を感じながらあの事を聞いていると理解する。

「ああ、あれね…。あれはえーと…。狂三、説明よろしく」

説明が面倒になったのか、解説を狂三に丸投げする蓮。説明を丸投げされても狂三は「分かりましたわ」と微笑み、役を引き受けてくれた。

「わたくしがキスをお願いしたのは、力の譲渡”をしてもらうためですわ」

「力の…譲渡？」

「蓮さんには自分の持つている力を他者に分け与える事が出来ますの。分け与えられた者は傷の治癒や、彼の武器を擬似的に使う事が出来るようになりますのよ。土道さんはそのような所を見た事はありませんか？」

そう言われて思い出すのはオーシャンパークで琴里とデートした時だ。蓮は苦しんでいた琴里に右腕を触れさせて体調を回復させたのを土道は見ていた。

「ちなみにですが、六月に学校の屋上でわたくしがあの腕を出せたのは、数日前に蓮さんからちよいと失敬させてもらいましたからですわ。あの時は少しだけ罪悪感のようなものがありました。今回はそれもなく気持ちよく使えましたのよ」

目を細め、熱っぽい息をする狂三を見て土道は引き攣った笑みを浮かべる。あれだけ容赦なく真那や琴里を攻撃したというのに本当に罪悪感などがあつたのだろうか。気になるところだが、深入りしても得はなさそうだ。

「時間を操るわたくしから見ても素晴らしいと思うのですが、力を渡す時、渡す力以上に負担がかかってしまいますの。それは蓮さんが少しの間動けなくなるほどですわ。そこで先ほどのようにキスをして力の通り道を作りますの」

狂三は説明しながら自分の唇に触れる。例えば一つのコップの中身を水で満たしたいとする。しかし、それを一度に大量の水が落ちる滝に突っ込むとすると、中身は満たされるだろうが無駄となる水も多くなってしまう。そこで蛇口から水を注ぐとなれば無駄は無くなるだろう。

「えつと…つまり、その無駄を無くす渡し方がキスって事なのか？」

「ええ、そういう事ですわ」

キスで力のやり取りをする…。それを聞くと何だかキスで精霊の力を封印する自分と似てると感じる。その説明が終わると同時に狂三の足元の影が広がり、そこからもう一体の狂三が姿を見せる。土道はそれに驚いて小さく声を出してしまふ。

そんな土道を気にすることなく、本物の狂三に耳打ちで何かを伝える。

「ふむ、なるほど…下がって結構ですわよ」

狂三がそう言うのと、優雅にお辞儀をして影の中に消えていく。

「お喜びくださいませ、十香さんの居場所が判明しましたわ」

「ほ、本当か!? 一体どこに…」

その言葉に食らいつくように反応する土道を見て、狂三はクスクスと笑いながらチラリと蓮を横目で見た後にその場所を言う。

「DEM社の日本支社、第一社屋に十香さんは囚われていますわ」

「DEMか…」

そう小さく漏らしたのは蓮だった。拳を握り、自傷気味に笑いながら空を見上げている。

「そういえば、日本支社はここからそんなに離れていなかったな。ここなら精霊<sup>十香</sup>を拘束出来る設備もあるだろうし…悪くない判断だな」  
「…やはり、ご自分の家と戦うというのは抵抗がありますか? どうしても嫌と言うのなら、わたくしだけで…」

「いや、俺も行く。十香を攫ったなら誰であろうとそいつは敵だ。それ以前に…あそこ<sup>DEM</sup>はそんな迷いがあつて勝てるどころじゃない」

自分の覚悟を二人に語る。心の中で自分に巣立ちの時が来たのだと言い聞かせる。それに相手はあのエレンだ、下手をすれば自分の命すら危ういほどの強敵に対してそんな迷いを持って挑むのは間違っている。

蓮は自分の頬を張って気合いを入れた。白い肌がほんのりと赤く腫れたのが見える。

「よ、よし…それじゃあ行こう…」

「待て土道」

移動を開始しようと立ち上がった土道を蓮は呼び止める。今度は何かと思いつつ顔を向けるが、蓮から耳を疑うような事を言われた。「もし、次に四糸乃や耶具矢、夕弦。そして誘宵 美九が邪魔をしてくるのなら、容赦はしないって先に言っておくぞ」

「なっ！待ってくれ！美九はともかく、四糸乃達は操られてるだけなのにそんな事は…」

こんな状況でもこんな事を言う土道に思わずため息が出る。しかし、それが土道の長所であり、短所である事は十分に理解しているつもりだ。

「今の俺たちにもう回り道している余裕はない。俺も邪魔するなどは言ってみるつもりだが、それを聞きれないとなるとやはりそういう事になる。それとも土道はどっちを優先するか数で決めるのか？」

その質問に言葉に詰まった。十香を救うのを優先して四糸乃達を後回しにするか、四糸乃達を救うのを優先して十香が手遅れの事態となってしまうか。十香を救うのに、それを邪魔してくる美九達を切り捨てられない自分がいる。

「別に邪魔をしてきたら殺すって訳じゃない。動けない程度の怪我を負わせるだけだから、そこは安心していいぞ」

どこを安心しろと言うのか疑問が出てくるが、蓮の言う事は正論だ。そもそも美九を説得出来なかった自分に非がある。それを蓮に押し付けるといふのもとんでもない話だ。土道は理解はしたが、納得できないと言った顔を頷いたのだった。

—————  
(まさか、こんな形でここを訪れる事になるとは、予想もしてなかったな…)

目の前の空に突き上げるビルの群れを見て、そう思う。現在の時刻は深夜二時、外を出歩いている人間はほとんどいない。DEMの日本支社を訪れるのは初めてで、そもそも数年間、DEMとは表向き関わらないようにしていたので日本支社とは無縁だと思っていた。

「それで…どれが第一社屋なんだ？」

そう言う土道の声には僅かながら恐怖が感じられる。これを見て、

これから戦うのが世界に誇る大企業なんだと認識したのだろう。それでも後悔を感じさせないのが土道らしかった。

「ビル群の中央にある大きな建物ですわ。残念ながら、分かったのはそこまででしたけど…」

土道は狂三の指差す大きな建物に視線を向ける。DEM：あそこが蓮の家だというのが改めて認識出来た。そうになると、蓮は大企業の御曹司…という立場なのだろうか。そう考えたらとある疑問が浮かんだ。

「蓮はDEMに深く関わっていて…エレンが母親なんだよな？」

「ん？まあ、戸籍だけの関係だけだな。それがどうかしたか？」

そう聞き返すと、土道は何やら困ったような顔をするが困った顔とどうか何やら聞きにくそうな事を聞く、そんな顔だ。

「エレンが母親ってことは…父親もいるんだよな？」

その質問に蓮は一瞬だが表情を変えた。

「おっ、土道にしては鋭いな」

そんな褒め言葉（？）を言うがそれはその質問の答えでもあった。こんな状況だというのに土道はそれがとても気になってしまった。

「やっぱりいるのか、嫌じゃなければその…どんな人が教えてもらってもいいか？」

「うーん、どんな人って言われてもな…不思議な人っていうか、多分土道も知っている人だぞ」

「えっ…」

その時、周囲に甲高い警報…空間震警報が鳴り響く。それを聞いた住民は慌てて避難を始め、地下シェルターなどに急いで逃げ込んでいく。

「空間震警報…！精霊が現れるのか!？」

「俺たちが突入しようとしたタイミングで、偶然にも新たな精霊が出てくる…。いくら何でも出来すぎてるだろ」

空間震警報の意味をそのまま受け止める土道にそんなツツコミをいれる。となりにいた狂三も同じ考えらしく、目を細めながら頷いた。

「これはDEMが故意に鳴らせたものでしょう。それで考えられる可能性は…ッ！」

「狂三!!」

蓮の自分の呼ぶ声を聞いた狂三は土道の襟首を掴み、素早く右側に飛び退く。蓮も狂三と反対側の左側に飛び退いた瞬間、ついさつき三人がいた場所に光の奔流が突き刺さり、爆発を起こす。

「ずいぶんと大胆な事をするな、あの人はッ！」

蓮は爆発で少しバランスを崩されながらもなんとか着地した後、攻撃が来た方向に顔を向けると空にはCRユニットを纏った銀色の人形が何体も浮遊していた。それを見て、小さく舌打ちをする。

「あれは…へバンダースナッチ?! あんなにたくさん…」

土道のその言葉を合図に手に持ったレイザーカノンを一斉に発射してくる。相手は機械で当然の事なのだが、その行動に全くの迷いはない。

蓮はその攻撃を避けながら、地面を強く踏みしめ大きく飛び上がる。

「日本は平和の国じゃなかったのかよ。へエカトル！」

その言葉に応じて、両手には三つの刃を持った武器が握られ、それをへバンダースナッチの群れに向かって投擲する。大量のへバンダースナッチに対してたった二つのへエカトル、数の差は歴然だ。

しかし、へエカトルはへバンダースナッチに向かう途中、細かく分裂していきそれに比例して大きさも小さくなる。その結果、数え切れないほどの数になり、その一つ一つがへバンダースナッチに命中し、まるでピラニアが肉を喰いちぎるかのように装甲を削り胴体を貫通し空には大量の花火を発生させる。

へバンダースナッチを撃破したへエカトルは再び二つに戻り、主の手の中に戻って来た。それを見た土道は「すげえ…」と小さく呟く。「もうこっちの事は分かっているらしい。すぐに魔術師ウィザードの増援もくるだろうし、どうする?」

「こうなったら仕方ありませんわ。『わたくしたち』をぶつけてその隙に突破いたします」

狂三がそういうと、足元の影が広がり、そこから短銃を持った狂三が何体も這い出てくる。それと同時にDEMの施設から大量の魔術師<sup>ウィザード</sup>が姿を現わす。

「たった三人の侵入者相手に豪勢だな」

「それだけ十香さんを奪い返されたくないという事なのでしよう。さあ、行きますわよ、〈刻々帝〉——【一の弾】」

蓮が自分に掴まったのを確認した狂三は、短銃をこみかみ押し当てて撃つ。高速化した狂三は分身体とへバンダースナッチのぶつかり戦場を一気に駆け抜ける。爆発などが響き渡る中を高速で突破するのは中々精神的に来るものがあつた。

高速でそこを突破した狂三は【一の弾】が切れたタイミングで地上に降りた。

「おい、しつかりしろ土道」

「うう…蓮はよくあの中でも平気でいられるよな…」

「ふふ、まあ、あまり乗り心地がいいとは言えないのは許してくださいまし」

気分が悪そうな土道が回復するのを待つ。蓮は別になんとも無かったが、土道にはそうともいえないようだ。

「それで、第一社屋の入り口はどこなんだ？」

「ああ、それはこちらで…」

そこまで言いかけた狂三の首が突如宙を舞った。これには土道はもちろん、蓮も一瞬何が起きたか理解出来なかった。肩から上が無くなった狂三の身体は血のシャワーを噴き出しその場に力無く倒れる。

「うわああああ！狂三！狂三！」

土道は倒れた狂三の身体に駆け寄るが当然返事はない。蓮は瞬時にへバスターを顕現させたあと、素早く背後を向いて戦闘態勢をとる。もし、【一の弾】を使った狂三を視認してここまで来たなら、その魔術師<sup>ウィザード</sup>は間違いなく強敵だ。

だが、目の前にいた人物を見た途端、それを忘れて目を丸くしてしまった。

「真那…？」



一つに括られた髪と、左目の下にある泣き黒子が特徴的な少女…D  
EMの同僚であり、蓮の親友である嵩宮 真那がそこに立っていた。

### 37話

「ふたりとも…よくぞ(無事で)！」

狂三を殺したばかりとは思えないような笑顔を浮かべ、真那は喜びを露わにする。真那は六月に狂三との戦いで重傷を負ってからずっと入院していたはずだった。その真那がなぜここにいるか、今、装備している蓮も見た事のないそのC R Yユニットは何なのか、疑問が山ほどあった。

「お前…真那なのか？怪我はもう大丈夫なのか？」

「妹の顔を忘れるなんてひでえですよ！怪我はすっかり完治してます。そうそう！私、D E Mを辞めまして今は(ラタトスク)で世話になつてます！」

士道と再会したからだろうか、やけにテンションの高い真那に呆気にとられてしまう。しかし、今の真那は敵ではないという事は理解出来た。

「ラタトスクから借りてきたこの装備で、急いで駆けつけたら二人が(ナイトメア)に襲われていたのでいてもたっても…ん？その腕は…」

真那の視線が蓮の右腕に向けられる。身体の影に右腕を隠していたが今の時刻は夜中だ、その暗闇の中で光る腕は目立ってしまう。

「あつ、いや、違うんだ。これは…その…」

珍しく狼狽する蓮。知り合いで腕の事は知られたくない人物はたくさんいるが、その中でも絶対に真那にだけはバレたく無かった。この腕を知られた時、どんな顔をするか、どんな言葉を言われるか。一番長い付き合いである彼女に『気味が悪い』などと言われるのが恐ろしかった。

しかし真那は、そんな蓮を見て小さく笑った。

「大丈夫ですよ。蓮がそういう体質だつてことは琴里さんからいましてから」

琴里はこのような事態になると予想していたらしく、あらかじめ真那に伝えていたらしい。おまけにこれは体質ということにしておく抜かりのなさだ、伊達にあの歳で(フラクシナス)のボスはやってい

ない。

「聞いた時はとても信じられねーと思いましたけど、この腕はどうなってるんですか？」

真那は蓮の右腕を手の甲で叩くとコンコンと音が鳴る。普通ならいきなり触る事など出来ないはずだが、これほどの度胸と勇氣は流石真那と言うべきだろう。

真那がへバスターをジロジロ見ていると、背後の壁に影が広がり上半身だけの狂三が姿を見せると蓮の首に腕を回して抱きしめる。真那はそれに素早く反応して距離をとる。

「きひひ、相変わらず手荒な歓迎をしてくださいますわね」

「チツ、まだ生きてましたか。やっとその不愉快な笑顔を消せたと思いましたが…。蓮から離れてもらいますよ。大切な友人にあなただけの悪女が触れてるのは我慢ならねーもので」

真那から見たら、今の狂三は蓮を人質にしているようにも見えたらしく離れるように言うが当然狂三はそれに従うはずもなく、逆に蓮にもつと自分の身体を近づける。

「きひひひひ！彼の事を何も知らないあなたが、よく彼の事をそのように言えるのですわね。相思相愛のわたくし達にあなたが入る隙間は微塵もありませんことよ？」

「そんな事をいう女に限って自分がそう思っているだけって事がよくあるもんです。ここまできると哀れみも感じねーもんですね」

その言葉に狂三は殺意を孕んだ視線を真那に向ける。下手すればここで戦闘が起こりそうな雰囲気だ。このままではマズイと思った士道は怖すぎる会話をする二人の間に入る。

「お、落ち着けて…二人とも…」

士道の仲介で興奮ぎめとなったのか、狂三は小さく息を吐いて肩をすくめた。

「まあ、わたくしもDEMに別件がありますし、ここで別行動といたしましよう。真那さんと蓮さんもいれば十分でしょうし」

「別件？こんな時に？」

「あらあら、女に秘密は付きものですわよ。ちゃんと陽動は続けます

のでご安心くださいませ。それではごきげんよう、蓮さんもお氣をつけて…」

士道のした質問も煙に巻かれ、最後に蓮の頬に口づけをした後、狂三は影の中に消えていく。用事というものがこの場を離れるだけのブラフのように聞こえなかった。

「ふん、あんな悪魔とは早々に手を切っちまった方がいいに決まっています。それより、私の方が何倍も信用出来ますよ」

自信ありげに話す真那に『悪魔は嘘は言っても契約は破らない生き物だ』と言いたかったがわざわざ水を差す必要もないだろうし、狂三が離脱しても真那が代わりに協力してくれるなら文句はない。

「あ、そうそう。二人にはこれを渡しておきます。回線は繋がってまずので」

そう言つて真那が取り出したのはインカムだった。それを耳につけるとしばらくして琴里の声が聞こえてきた。

『…二人とも、聞こえるかしら?』

「なんだよ司令官殿、今は忙しいんだ。罵倒したいのなら後でに…」  
『ちよ!ちよつと待って!もう正気に戻ったから大丈夫よ!』

慌てた様子の琴里の声にそれを聞いた真那と士道は苦笑いを浮かべる。当然ながら蓮もそれが分かっていたのだが、言われっぱなしというのもなんか嫌だったのだからかったのだ。

『その時の映像が残ってて…その…悪かったわよ。いろいろと酷い事いってたから…』

「まあ、まだ言い足りないなら、副司令官でも代わりに罵倒してくれよ」

『おお!なんとありがたい!感謝しますぞ蓮くん!さあ司令、この神無月を好きだけ罵ってください!もちろん踏みつけるのもかまわ…ギャフン!!』

神無月の嬉しそうな声が聞こえてきたが、鈍い音が聞こえたと同時に苦悶の聲が響き静かになる。どうやら琴里が神無月の腹部に蹴りを入れたらしい。

『あなたは黙ってなさい神無月。通信設定が滅茶苦茶になって復旧

に時間がかかったけどもう大丈夫よ。それで、なんで狂三と一緒にいるのよ?』

琴里からの質問には答えずに蓮はインカムを外す。琴里には悪いがもう自分がすることは決めていたからだ。

「土道は真那と一緒にDEMの第一社屋に行け。魔術師相手に真那は適任だからな」

「えっ?それじゃあ蓮は一緒に来ないのか?」

「俺は戦っている狂三たちの援護に行ってくる。魔術師相手なら真那一人でお釣りがくるさ」

「あの女の加勢に行くなんて、変に義理堅いのは相変わらずですね。いいですよ兄様は私が守りますんで」

真那の了承がとれたところで再びインカムを耳につける。

『ちよつと、いきなりインカムを外さないでちようだい。これからのことはなんだけど…』

「ああ、これから土道は真那に任せて、狂三の援護に行くつもりだから」

『はあ!?いきなり何言ってるの…』

そこまで言いかけたところでインカムを外し、強制的に会話終了となる。蓮はインカムをポケットにしまい、左手に籠手のへウイトリクを纏い、その手を伸ばすと手のひらの箇所からアンカーのようなものが飛び出しビルの屋上付近に引っかかる。

「それじゃあ、土道を頼むぞ。終わったら昔みたいに飯を奢るよ」

「お、言いましたね。そこそこの値段のところにするつもりですから、覚悟してくださいよ」

真那がニヤリと笑ったのを見た後、アンカーを巻き戻し、その推進力を使用して屋上に上がる。せっかく運んでくれた狂三には悪いがどうも分身体の狂三も捨てられないと人間臭い気持ちを感じ、小さく笑いながら夜空を見上げた。

――――  
狂三の分身体とヘバンダースナッチ、魔術師のぶつかる場所はまさに戦場という表現が一番似合っていた。暗い夜空に大量に爆発の光

が浮かぶ。その中に分身体の血飛沫も舞っている。こんな光景が日本にオフィス街で起きていると言っても誰も信じないだろう。

蓮はそんな中をへバンダースナッチを踏み台に突き進んでおり、機体から機体へとジャンプして飛び移っていた。さらに移る前にはへレッドクイーンをへバンダースナッチに突き刺して撃破するのも忘れない。もともとDEMに勤めていたため、へバンダースナッチのどこが弱点かはよく理解している。とにかく効率を重視して最低限の攻撃で済ませていた。

そのようなスタイルで撃破し、そろそろ数えるのが面倒になってきた頃、半壊状態のへバンダースナッチが狂三の足にしがみつき手を頭部に向けて伸ばしているのが見え、今乗っているへバンダースナッチに剣を突き立てたあと、空中に飛び出すと同時に自分に風を纏わせその場に急行する。

「汚い手で狂三に触るな。ガラクタが」

胴体部を切り裂いたあと、へバンダースナッチの頭部を直接掴み、狂三から無理矢理引き剥がす。そのまま捨てるように手を離し、落下していく機体は虚空に現れた氷の氷柱が大量に突き刺ささって爆発四散する。助けた狂三はお辞儀をしたあと、再び戦闘へと戻っていった。

（土道と真那は大丈夫か…）

DEMのビル内にも魔術師ウィザードがいるだろう。それを見越して真那に土道を任せただが、やはり自分も行くべきだったかと思ひ始めた瞬間幾つものミサイルが自分の方に向かってきた。

「今度はなんだよ!？」

苛立ち混ざりにそう叫ぶと、蓮の周りに三枚の氷の盾が出現してミサイルを全て受け止める。盾はミサイルを受け止めても傷一つつかず、その隙間から攻撃が来た方角に目を向けるとエレンと赤いへホワイト・リコリスを装備し、全身が包帯に巻かれたジェシカに追われている真那が見えた。

どうやらさっきのミサイルは蓮に向けて撃たれたものではなく、流れ弾だったらしい。

そんな状態の真那を確認すると浮遊する盾に指令をだし、それを受け取ると逃げる真那の元に飛んでいきミサイル等の攻撃を受け止める。突然の乱入者(?)に真那は目を丸くしていた。

「モテモテだな、真那は」

「こんな面子に追われてもちつとも嬉しくねーですよ」

そんな軽口を叩き真那と合流する。近くでジェシカを見てみるとどのような状態でへホワイト・リコリス∠∠いや、へスカーレット・リコリス∠を動かしているかが分かる。今すぐにも稼働を止めなければ命に関わるだろう。

そしてもう一人、ジェシカの隣で圧倒的存在感を放つ女がいた。

「真那だけでなく、あなたもいるとは意外です、それはへベルセルク∠の真似事ですか。ここを襲撃して来たということは私やアイクを裏切るという事ですね？」

「…っ！」

大声で怒鳴られた訳でもないのに関わらず、大きな威圧を掛けられているのを感じる。それに怯み声が出せなかったのだが、エレンは沈黙は是也と受け取ったようだ。

「まさか、DEMの優秀な人員であるあなた達二人に揃って盾突かれる日が来るとは思ってませんでした」

「はっ、よく言いますよ。人の身体を勝手に弄つといて」

「なるほど、そこまで知ってしまいましたか。ですが、それを向けるのはこの場で私だけだと思ってますか？」

そう言つてエレンの視線は蓮に向けられる。真那もそれにつられて蓮を見る。だが、当の本人は何の話をしているかが全く見えなかった。ただ、自分は真那に疑われている。なんとなくそう感じた。

「あなたはその可能性は考えなかったのですか？自分の装備に関わっていた者も怪しいと…」

「いや、それはありえねーですね」

エレンの言葉を遮る形で真那は答える。蓮と真那は昔の記憶がない者同士初対面でもすぐに打ち解ける事が出来た。別に恋人という関係では無かったが、装備の無茶な要望にも完璧に応じてくれたし、

プライベートではたまには食事を奢ってくれたりと深い付き合いがあった。

潔白という証拠がある訳ではない。それでも蓮は信用できると信じる事が真那には出来た。

「それより、敵であるあんたの言葉の方が何千倍も信用できねーですよ。よく考えたら分かることですが」

「…そうですね、期待してたわけではありませんがそういう言い切られてしまつてはこれ以上何を言つても無駄ですね」

「えーと、話が見えないんだが、真那に信用されたつてことでもいいのか？」

置いてけぼり状態の蓮の質問に真那は言葉を発さず笑顔で答えた。その後、すぐに真剣な表情に戻り、エレン達を睨む。

「真那、あの二人のどっちを相手にする。俺はやっぱり、真那はジェシカの相手をしたほうが…」

「いえ、二人は私が引き受けます。蓮は第一社屋にいる兄様の助けに行つてください」

「…分かった。真那、死ぬなよ」

あの二人相手でも心配ないと割り切り、この場を離れる。その直前に浮遊していた氷の盾の防衛対象を真那に切り替える。

「マアアアアアアアアア！逃がさないわヨオオオ！！」

蓮が離脱したのを見て、真那も逃げると思ったのかジェシカが一斉にミサイルを発射する。それを見た直後、真那は蓮が向かった方角とは逆の方向へスラスターを駆動させる。

しつこく追尾してくるミサイルを随意領域テリトリーを使って防ごうとした瞬間、三枚の盾が自らミサイルにぶつかり防ぐ。

「気が利くフォロー、ナイスですよ蓮！」

蓮が風を纏いながら進み、第一社屋まであと少しというところで二つの影が蓮の前に立ち塞がった。

「待つがよい。これから先は通さぬぞ」

「制止。待つてください。これ以上は進ませません」



そう言つて前に出てきたのは耶具矢と夕弦だった。相変わらず二人は美九に操られた状態らしく、これだけ続くとため息が出てくる。「我らは姉上様はここに誰も近づけるなという命を承った！今すぐここから去るがよい」

「首肯。お姉さまからの命令は絶対です。誰も通しません」

態度も相変わらずだ。こんなところでグダグダと討論するつもりなどない、蓮は真剣と睨みを混ぜたような顔で二人の顔を見る。

「今の俺にはお前達の身を案じて戦うような時間的余裕も精神的余裕もないんだ。邪魔をするなら手足の二三本を折ることに今は躊躇いはない。それが嫌ならそこを退け」

それが脅しなどではないと二人は一瞬で理解出来た。もし、これを聞かなかつたら今述べた内容の行動を実行するだろう。精霊だろうと人間だろうと『恐怖』という感情は平等に感じるのだ。

「し、質問。あなたはお姉さまに危害を加えるつもりですか？ならば、見過ごすことは出来ません」

「俺の目的は土道の救援だ。それを信じるかはお前達の自由だがな」

そうとだけ言うと、蓮は二人の隣を通り過ぎて第一社屋へと向かう。すれ違ふとき、耶具矢達は背筋に氷を当てられたような感覚を感じた。結局、耶具矢と夕弦は美九の命令を守れず、蓮を見過ごす形となった。

社内に侵入した蓮は月明かりだけが差し込む暗い廊下を歩いていた。その目の前には四人のDEM隊員がおり、蓮が一步進む度に一步後ずさるというのを繰り返していた。

彼の後ろには血だまりを作り、床に倒れている数名の隊員がおり蓮が装備している籠手に血が付いているのを見ると誰か殺したかは一目瞭然であり、蓮自身が死者の世界への境界のようにも見える。

誰も向かってこないことに焦れて、蓮は加速して、隊員達の間合いを縮めにかかる。それを見て息を詰まらせた隊員は大きく後退するが、とある隊員が右手にレイザーブレイドを持って前に出る。

「この…化け物がアアア!!」

蓮が目の目に来るとそう叫びながらブレイドを振り下ろす。しかし、それは腕ごと掴まれて届かない。敵の攻撃を防いだ後、空いた右腕の籠手が稼働して手首から隠しナイフが迫り出し、それを少しの躊躇いなく隊員の脇腹にねじ込む。

「がっ…!!」

そうとだけ発し、隊員は力なく人形のように蓮に寄りかかる。命を奪ったという罪の意識は全くない。殺したのは自分に立ち塞がる『敵』だからだ。

「い、今だ！奴は隙だらけの状態だ！撃て撃て!!」

隊長らしき人物がそう指示し、三人は手に持った銃器で射撃してくる。蓮はさつき殺した隊員の身体を盾にして銃弾を防ぐ。暗い廊下をマズルフラッシュの光が瞬くが、すぐにそれは止まり、代わりにカチツカチツという音が響く。

「ッ！急いでマガジンを交換しろ！」

感情のままに撃つため、銃の弾薬切れに気づくのが遅れた。急いでマガジンの交換に取り掛かるがそんな隙を見過ごすはずが無い。盾にした隊員の死体を投げ捨て、今度こそ接近戦に持ち込む。

マガジン交換に夢中の隊員に即座に切り替える余裕などあるはずなく、頭部の下顎部に籠手のナイフを突き刺し絶命させ、もう一人の

隊員にもいつの間にか左手に持っていた剣で斬り、床に伏せさせた。  
「ひいひい!!」

最後に残った隊長は、手に持った銃器を投げ捨てホルスターからハンドガンを取り出して銃口を向ける。そこから弾が発射されるより早く、その腕にアンカーが絡まり無理矢理、前に移動させられ二人はすれ違うように交差した。

その直後、隊長の肩から上が無くなり、大量の血を噴き出して床に倒れる。噴き出した血は蓮の顔に触れるより早く、凝結し顔を濡らさない。

蓮は立っているのが自分だけとなった廊下を歩いていくのだった。

「そう言えば、十香がどの部屋に囚われているか、把握してなかったな」

侵入したはいいものの具体的な場所を知っているわけではない。そんな事を忘れるだなんて土道のうっかりでも移ったかと思えば反省する。その足元では数名の隊員が苦しそうな声を出して倒れていた。

蓮は一番自分の近くにいた二十代の女性隊員の首を掴み、壁に押し付ける。尋問の開始だ。

「少し前に俺と同じぐらいの年齢の女の子がここに運び込まれたはずだ。その子は何処にいる?」

「うう…し、知らない。何の話…なの…?」

「嘘をついても良い事は無いぞ」

「ほ、本当に…知らない…」

口を割らない隊員を見て、少し考える。考えてみると『く室に精霊を監禁するから、侵入者を近づけるな』などと馬鹿正直に説明されているわけがない。せいぜい『く室に侵入者を近づけるな』と言えば済む話だろう。これも土道のうっかりが移った所為だろうか。

「分かった、質問を変えよう。お前達は侵入者を何処に近づけるなど命令された?」

「ッ!誰が…そんな事を言うと…」

そう言った途端、蓮の雰囲気が変わった。彼女は敵に屈したくない

という意地から言ったつもりだろうが、それは賢い選択では無かった。知っていると分かった瞬間、話してる途中にも関わらず右手で隊員の顔を掴む。

「俺にも事情があるとはいえ、お前達同僚を殺すはあまりいい気分じゃないんだ。大人しく教えてくれると助かるんだが…」

指の隙間から見える蓮の顔に隊員はいきなり恐怖を覚えた。その顔はまるで死神のように感じて、今首に鎌をかけられている感覚がする。地面に倒れていた他の隊員もその雰囲気呑み込まれ、痛みすら忘れて息を詰まらせた。

「どうしても話したくないなら、それでも良い。俺は質問しているわけであって命令してるわけじゃないからな。ただし、話さないお前に用はない。そういうわけだ」

恐怖のあまり身体が震える。彼女の足元には水たまりが出来た、恐怖のあまり失禁したのだ。

「う、うわあああ!!」

その時、床に倒れていた隊員の一人がこの空気に耐えられず逃げ出す。叫び声だけでそれを察した蓮は氷のナイフを生成し、それを逃げた隊員の足に突き刺して逃亡を阻止する。

「逃げるな。もし誰も話さなかったらお前にも聞かなきゃいけないからな」

それを聞いた彼女は理解した、自分が話さなくても困るわけではない。今、生かされているのは言うかも知れないという可能性があるだけというのを。

「じゅ、十八階の…隔離エリアに…近づけ、るな…と…」

「そうか、よしよし、素直な奴は嫌いじゃないぞ」

顔を離し、掴んでいた手で彼女の頬を撫でる。尋問で大切なのは厳しい言葉からの優しさ、いわば飴と鞭という言葉のかけ方なのだ。

「ふふっ…ふふ…ひひひひ…」

褒められた事で隊員は壊れたような出す。蓮は隊員を床に降ろした後、上にかかる場所を求めて歩き出す。その直後、尋問した女性以外の隊員の身体から紅い水晶のようなものが飛び出し即死させる。

一人二人だけならまだしも、これだけの人数に見られたなら生かして帰すわけにはいかない。

廊下には女性隊員の壊れた笑い声だけが響き渡っていた。

その後、エレベーターを見つけたがそれは当然のごとく稼働していなかった。その事に舌打ちしつつ、階段を使って十八階の隔離エリアを目指す。その途中、士道と合流したのだが、その手には修学旅行の時見た〈サンダルフォン塵殺公〉が握られておりそれでウイザード魔術師を倒してきたらしい。だが、それ以外に予想外の存在があった。

「誘宵 美九……何でお前が……」

士道の隣には四糸乃達を操った張本人、美九が立っていた。耶具矢と夕弦が来ていたので美九も来ているだろうと予想はしていたが、まさか士道と共にいるとは考えられなかった。

「大丈夫だ、今の美九は協力してくれてるから警戒しなくていい」

「だから！私はあるあなたに協力しているわけじゃありませんから！十香さんを軍門に加えたいだけなんですう！」

士道と一緒にいるとはいえ、ツンツンモードはそのままらしい。それでも剣を向けるほどの存在ではないと認識し士道の元へ駆け寄る。重傷を負っているようには見えないが、十香の〈サンダルフォン塵殺公〉を使用したせい、苦しそうな様子だ。そんな士道に肩をかしてやる。

「無理するな士道。これからは俺が前に出るからあまりその力を使うな、それと十香の監禁されてる場所は……」

「十八階の隔離エリアだ。そこに入るための鍵も手に入れている」

「お、そっちも場所を知ってたか。お陰で入り口をぶっ壊す手間が省けたよ」

「場所を知ってるあたり、誰かさんよりは頭がいいらしいですねー」

美九のその言葉にまさか……という視線を士道に向けると気まずそうに目をそらす。それで美九の言う誰かさんが誰のことか理解出来た。

「こっちは美九のおかげで場所を聞き出せたけど、蓮はどうやって聞き出したんだ？」

「精神的に追い詰めたってどうか、まあ、人に言うことを聞かせるのは忠誠心だけじゃないってことだよ」

忠誠心を使って聞き出した事を意識してか、そんな事を言うと美九は『ふんっ』と言い不貞腐れたようにそっぽを向く。そんな美九に苦笑いを浮かべつつ階段を上り、通路を少し歩くと前方に武装したウイザード魔術師が出てきた。

「言っておきますけど、私は必要最低限しか動くつもりはありませんから」

「はいはい、わかったよ。お姉さま」

自分の支配下にいない者に支配下においた時の呼称を言われ、美九は悔しそうな顔を浮かべる。そんな事を気にもせず蓮は敵に突っ込んでいく。

「なんだこいつはアアア！」

突っ込んでくるとは馬鹿めと思ったウイザード魔術師は天井や壁に素早く移動して狙いをつけさせない動きに驚きの声を上げる。そのまま敵の懐に潜り込むと左手に持ったヘレツドクイーンで敵を薙ぎはらう。

その直後、ヘウイトリックを装備した右腕を士道達に向けてくる。一体何かと思った瞬間、籠手からパシユツという音と共に小さな先端が尖った槍が発射され、それは士道と美九の顔の間を通り背後にいた隊員の額に突き刺さる。二人が背後を振り向いた時にはその隊員は倒れていた。

「うわっ！」

「ちよ、ちよつと！当たったらどうするんですかー！後ろにいたならそう言えば…」

「言っても良かったけど、そうしたら多分撃たれてたぞ」

呆れ気味にそう言う蓮。すると、その廊下の奥から増援が出てきて小銃を構える。

「美九！」

それに士道が素早く反応し、手に持ったサンダルフォン鑿殺公を振り抜く。剣筋をなぞるように斬撃が飛び出し、ウイザード魔術師を吹き飛ばすが、その直後、士道は苦悶の声を上げる。

「ぐあーッ！」

「まったく、だから無理しないで後ろにいろと…」

「それでも…十香を助けなきゃ…ならないんだ。こんな痛みで立ち止まってる暇なんか…」

また肩を貸してやりながら通路を進むが、必要となれば土道は痛みなど気にせず再びこの力を使うと分かった。土道に力を使わせないようにしなければと気をつける必要があると改めて感じる。美九は傷つきながらも進む土道を哀れそうな目で見ていた。

「あーあー、まさか、そんなボロボロになりながらも戦う自分に酔ってるんですかー？自分は正しい事をしてるって思いながらあー」

後ろを歩く美九が小馬鹿にするような事を言うが、二人はそれを無視して進む。土道は単純にそれに反応する余裕が無いのかも知れないが、蓮はただ単純に相手にするのが面倒なだけだった

「ちよつとー何無視してるんですかあー！」

自分が無視されている事を不満に思ったのか、前に回り込んで強制的に自分に注意を向かせる。ホールの時も思ったのだが、自分から勝手に話しておいてそれが無視されると文句を言うのは如何なものか。

「はあ…、そこを退け。俺たちは十香を助けに来たのであって、お前のお喋りの相手をしに来たんじゃ無いんだ」

「あ、あなた達の『好き』とか、『大切』だとかなんて安いものでしょう！あなただってその力があるのなら、十香さんのような綺麗な女の子を何人も好きなようにする事だって出来るでしょうに！」

「それは、お前がそう思ってるだけだろう？俺たちとお前はその考え方からして違う、なら議論するだけ無駄だ」

野生動物と人間は例え言葉が通じ合っても話し合いは不可能だ。片方は弱肉強食の世界で生き、もう片方は社会を作って生きている。そんな考え方が違う双方がまともな対話を出来ないのと同じで美九と蓮も人を見る目から違うということだ。

それに加え、今の美九は友情など自分の持っていないもの、知らない事を否定するばかりの幼稚な考えしか出来ない状態だ。そんな彼女との会話に意味はない。

「ま、また別の子を探せばいいじゃないですかあ！何でたった一人の人物にそこまで執着して…」

「美九！お前も人間なのにつ！何でそんな事を言えるんだ！」

そう叫んだのは土道だった。その言葉に美九と蓮は驚愕で目を見開く。

「人間だったお前に、へフアントム…：ノイズのような姿をした『何か』が、精霊の力を与えた…：そうだろ！」

「へフアントム…：？何だそれは？」

「人間を精霊にする何かだ。琴里もそのへフアントム…によって精霊になっただ」

六月に琴里から自分は元は人間だったと聞いていた。その時は自分が人間でなくなる時の事を思い出させたく無いという思いがあり、追求はしなかったがまさか、人間を精霊に変える存在がいたとは驚きだ。どうやら土道の推理は正解らしく、美九は鋭い目で睨んでくる。

「どうして…：あなたがそれを…」

「知り合いに情報通がいてな」

土道はそう言うが、蓮はその情報通が狂三だとすぐに分かった。前に一晩を共にしただけで自分の全てを知ったという出来事があり、その時と同じ方法を使ったのかも知れない。

「同じ人間じゃないか…：だったらもつと…」

「ふぎけないでください…：男は奴隷！女の子は可愛いお人形！人間にそれ以外の良い所がどこにあるって言うんですかあ！」

人間の素晴らしさについて説いてほしいなら、どこかの情報屋にでも頼め、と言いたかったがこの場ではそれは土道の役目だろう。

「美九、お前に一体何が…」

「ふんっ、何で私がそんなこと…」

そこまで言いかけた所で、美九は自分をジツと見つめている蓮の存在に気づく。土道と同じで気になると言った様子であり、それを見た美九は吐き出すように話し始める。

自分はかつてテレビで見たアイドルに憧れ、十五歳の頃に念願だったアイドルとしてデビューした事。その頃は男女関係なしに観客を



大切に思っており、自分の歌を多くの人に聞いてもらえるだけで喜びに溢れていた事。

所属する事務所から枕営業を勧められ、それを断ったところ身に覚えのないスキヤンダルを流され、ファンだと思っていた者たちからも手のひらを返すように裏切られた事。

そして、それが原因で大切な声を失った事…。

「だから、私は男が大っ嫌いなんですよ！醜くて、下劣な…見てるだけで吐き気がします！女の子だって、私の言う事を聞く子だけいればいいです！」

「そうか…お前は美人だからな。それが理由で事務所の目にとまったのか…」

それは蓮の心からの悲しみの言葉だった。嫌味しか言わなかった男の心からの言葉に美九は少し動揺した。

「それは…違う！違うぞ美九！手のひらを返したファンやプロデューサーは腹が立つが、全ての人間を嫌いになる事は無いだろう！」  
「うるさーい！人間なんて信用出来ません！」

意見を譲らない美九。普段はそれを個人の考え方と捉える蓮は、士道のようにその考えを否定したり心の中に踏み込んでいくような事はあまりしないのだが、さすがにこれは放置出来なかった。

「…お前はもう十分悪夢を見たんだろ？だったらもうそろそろ夢から覚めて良い頃だ、人を知ろうと一步を踏み出してみる」

その言葉に美九は何も言えなかった。士道は美九の考え方を否定したが、蓮は『人を少しで良いから知ってみろ』と言ったのだ。

「そうだな、まずはそこにいる士道を少しで良いから信用してみたらどうだ？お人好しが服を着て歩いてるような存在だぞ。きつとお前が危ない時でも助けてくれると思うが」

「そんなの当たり前だ！」

蓮の質問に迷いなく答える士道の気迫に息を飲む美九だったが、思いついたようにさっきの人間不信状態に戻った。

「ふ、ふん。私を騙すような人間を信用出来るわけないじゃないかですかあ」

「まあ、確かにそうだよな。女装してすり寄ってくるような変態は信用出来ないよな」

「お前はどつちの味方なんだよ!!」

自分の黒歴史は言われて堪らず声を出す土道。二人は気付かなかった、美九が僅かだが笑っていた事を。しばらく通路を進んでいると今までとは雰囲気が変わり、窓一つない隔離施設のような感じた。

その通路の奥に頑丈そうな扉が設えられている。

「まさか……ここか?」

土道が手に持ったカードで開けようとした時、歩いてきた通路から足音が聞こえてくる。足音から見て五六人というところだろう。

「ちっ、最後の増援か。二人はこのまま行け、俺は敵の相手をしてくる。このまま中まで追ってこられても面倒だ」

「く、悪く」

土道の礼を聞いた後、蓮は歩いてきた通路を引き返して行く。その後、すぐに銃声が鳴り響いたが、数十秒で沈黙へと戻ったのだった。

### 39話

土道と美九の二人に少し遅れ、隔離部屋に入る。入室して最初に目に入ったのは部屋を仕切るように設置された強化ガラスで、土道と十香はそのガラス越しに出会っており、十香は蓮の姿を見ると土道に向けてた顔をこちらにも向けてくる。

「すまない十香、少し遅れた」

『二人が…二人が来てくれると信じてたぞ！』

土道と並ぶところまで近づき、そう言うのと十香は泣きそうな顔でそう答えた。そんな十香に優しい顔を見せた後、蓮は十香のいる場所より奥の空間にいる一人の人物に顔を向ける。長身にくすんだアツシユブロンド、鋭い双眸が特徴的なDEM社の長。アイザック・ウエストコットだ。

その人は蓮の姿を深い笑みを浮かべながら見ていた。蓮はウエストコットへ身体を向けると腰を曲げお辞儀をした。

「…最後に会ったのは一年以上前、話したのは今年の四月でしたね。お久しぶりです、見た感じお元気そうな様子ですね」

見た事がないほど丁寧な言葉を言う蓮にこんな状況だということに呆気にとられる土道。ウエストコットは笑みを浮かべた顔から小さな笑い声を出した。

「くく…君は相変わらず他人行儀だ。家族と話すのだからもう少し気楽にしてくれていいんだよ」

土道はウエストコットの言った『家族』に小さく声を漏らしてしまった。今、聞き間違えでもなく確かに『家族』と言ったのだ。

『不思議な人と言うか、多分土道も知ってる人だぞ』

ここに来る前に蓮が言ったその言葉が脳内でリピートされる。土道はまさか、という目をウエストコットに向けた。

「君も元気そうな様子だ。さて、エレンから話は聞いているよ、帰還を拒否したそうじゃないか。なぜそんな事をしたんだい？」

「いわゆる反抗期って奴ですよ。これぐらいの年齢になるとなるものですからね」

「そうか、昔は私の後ろをついてきたりしていたのだがね。それが嬉しくもあり悲しくもあるよ」

こんな状況だというのに、それが見えてないかのような会話をする二人。だが、ウエストコットの質問に答えながら綺麗に煙を巻いて誤魔化していた。

「普段はあなたのやる事に文句等は言いませんが、さすがに十代の女の子を拉致ってというのはどうかと思いますよ」

「ふふ…はっはっは！そう言われると何も言えないじゃないか。こちらの弱いところを突いてくるのも相変わらずだ」

ウエストコットは一本とられたとばかりに笑い出す。その質問に暗に十香を攫った事を咎めているということを分かっているからだ。

「あなたは無駄な事をするような人ではないと十分に理解しています。なぜこんな事をしたのですか？」

修学旅行の時もそうだったが、DEMは十香を殺すのではなく、捕獲にこだわっていた。そうなるのと難易度が跳ね上がるのも分かっていたはず。せっかく捕獲しても今の十香を見てみると何かをされたようには見えない。

その質問にウエストコットは大きく両手を広げた。

「それは単純さ…世界の理をひっくり返すため。そのために精霊の力が必要なのだ、それは君にも出来る事だがね」

「世界の…理…？」

「ッ！もうあなたの話には付き合ってもらえない！」

そう苛立ちの声を出したのは土道だ。十香を目の前にしてそう意味のわからない話をされればそうなるのは当たり前だろう。その怒りをぶつけるように十香とを隔てるガラスに拳をぶつける。

「おい…ここを開けろ」

「そんな立派な獲物を持っているんだ。自分で切り裂いてみてはどうかな？」

要するに自分からこのガラスを開けるつもりはないという事だ。それを理解し、後ろにいる美九に視線を向ける。

「…美九、頼んでいいか？」

「ふん、あなたに指図されるのは気に入りませんが、特別に乗ってあげましょう。ここの責任者ならそのうち『声』を聞かせるつもりでほしい」

美九の答えはイエスらしく、これで問題は何もない。美九の声は精霊すらも心酔させるほど強力だ。

「社長さん、悪い事言いませんから大人しく従ったほうがいいですよ。この場の戦力差は圧倒的でしょうに」

ウエストコットには育ててもらった恩もある。できる限り手荒な真似はしたくないのが本音だが、ここに来たのは十香の救出が目的だ。その邪魔になるなら覚悟もある。それでもウエストコットは悠然とした笑みを崩さない。

「おや、勝利を確信するにはまだ早いのではないかな？…イツカシドウ、そこにいると…危ないよ」

『ツ!?シドー!後ろだ!』

十香の悲鳴じみた声と共に土道の胸からレーザーブレイドの刃が生え、口から大量の血を吐きながら床に倒れる。その背後には白金のCRユニットを装備したエレンが立っていた。その胸元から腹部にかけて痛々しい傷痕が刻まれており、普段の蓮ならそれに大変驚いただろうが今はそれに反応する余裕すらなかった。

「アイクに向けられる剣は、全て私が折ります」

「え、レ、ン…」

「い、いつの間に…」

一瞬で現れたと言っても過言でない出現に刺された土道はもちろん、蓮も驚きを隠せない。目の前では十香が泣き叫びながらガラスを叩いていた。

「がつ、ガハッ！」

「喋るな土道!今、治療を…」

吐血する土道を見て、右手にへバスターを纏いそれを傷口に近づける。後の事など考えず咄嗟の行動だった。しかし、エレンはそれを遮り、蓮の首を掴むと十香とを隔てるガラスに押し付ける。

「グッ…く…そ…」

「あなたはいつも予想外の行動で私たちを驚かせましたから。余計な事はさせません」

この腕の治癒の事はエレンに話してはいなかった。なのにこうしたという事は何かしらの手段があると読まれたのだろうか。首を掴む腕から逃れようとしても凄まじい力で握られ苦しそうな声を漏らして、もがく事しかできない。

「さて、精霊へプリンセスへヤトガミトオカ。これから君の大切な人である二人を殺そうと思う。しかし、それを止めるのを私は邪魔しない」

「何を…言っている…」

「ジェイク、君はこのままでは世界に飲み込まれて消えてしまう。それではいけない、生きるには秘められたものを吐き出したまえ」

ウエストコットが何かを言っているが首を絞められている苦しきで蓮の耳には届かない。土道には琴里の治癒の力があるはずだが、傷口を小さな炎が舐めるだけでなかなか回復しなかった。後ろにいた美九も美しい声を発するが随意領域テリトリーで防いでいるのか効果があるようには見えない。

エレンはゆっくりとブレイドを蓮の胸に近づけてくる。土道と違って琴里の治癒の力がない蓮は心臓を刺されたら間違いなく死ぬ。後ろでは絶叫を発しながら十香が塵殺公サンダルファンを顕現させ、ガラスを斬るが、傷をつけるだけで壊すには至らない。

(くそ……)までかよ……)

どうにならない絶望的なこの状況にそんな言葉が浮かぶ。エレンのブレイドが胸部を貫く、その瞬間。背後から強大な粒子の奔流によって吹き飛ばされた。

「うう…一体何が起きたんだ?」

エレンに刺される直前、まるで濁流にでも飲み込まれたかのような凄まじい力で吹き飛ばされた。蓮は何が起きたのか理解できず、頭を抑えながらゆっくりと立ち上がる。

「れ、蓮、大丈夫か?」

隣にいた士道が心配するような声をかけてくる。エレンに突き刺された傷は完治しており、痛みなどはない様子だ。その側には美九もおり、怪我はないらしい。

「まったく、お前の方が重傷だったくせに何言ってるんだよ」

それを聞いて大丈夫と判断して安心した顔をした。問題ないと返した蓮だったが、吹き飛ばされた衝撃で軽い耳鳴りが発生しており、正直近くにいた士道の声を聞き取るだけで精一杯だった。何が起きたのかと思い、顔を前に向けた蓮は息を詰まらせた。

そこには十香がいたのだが、その霊装は黒い闇色を放っており胸元と下半身をベールで覆っており、初めて見る形をしていた。その表情は無表情でさつきまで泣き叫んでいたとは思えない雰囲気だ。

(なんだ…アレは…?)

その十香を見て感じたことは大きな違和感だった。顔は自分の知っている十香だが、中身はまったく違うと瞬時に理解できるほどだ。そして、その手には塵殺公サンダルファンではない巨大な黒い剣が握られており、それは圧倒的威圧を放っていた。

ふと自分の足元を見てみると右足が一步後ずさっていた。それは今の十香から禍々しい感覚を感じ、怯んだ証拠だった。

(無意識に後ずさった…この俺が…)

それほどの雰囲気を放つ十香を見て、ウエストコットは凄絶な笑みを浮かべて何かを言っている。しかし、耳鳴りのせいでそれは聞き取れない。だが、ウエストコットにとっては今の十香は予想外の存在ではないという事だろう。

状況がまったく理解出来ない。あの十香は一体何で、ウエストコットの目的は何かすらもだ。

そんな蓮を無視して、エレンは十香にレイザーブレードを振り抜き、十香はそれを自身が手にしていた剣で受け止めた。本来ならここで十香の助けに入るべきなのだが、まだ耳鳴りは治っていない、そんな万全ではない状態でエレンに勝てるとはどうしても思えなかった。

それに、今の十香は助けるべき相手なのかすら判断出来ない。

そのまま二人は目にも止まらない速度で剣をぶつけ合う。その中

でエレンの斬撃を避けるため十香は大きく上に飛んだ。

「そこっ！」

その瞬間、エレンのCRユニット、〈ペンドラゴン〉が可変し、脇の下から銃口のようなものが十香に向けられる。

「貫け、〈ロンゴミアント〉！」

「やばい!!伏せろ！」

可変とその言葉が聞こえた途端、蓮は土道と美九を掴み無理矢理地面に伏せさせる。その瞬間、銃口から凄まじい魔力が放たれビルの天井、十香を飲み込む。

「そんな…十香…十香！」

天井が吹き飛び、満月が見えるようになった光景を見て土道は狼狽する。

「まさか、十香は…」

「いや、違う…上を見ろ土道」

蓮にそう言われ、土道は上を注視する。すると、満月を背にして浮いている十香の姿が見えた。その姿に傷は見えない。十香はエレンを見下ろしながら手に持った剣を振り上げ、それをエレンではなくウエストコットへ振り下ろす。

エレンは顔をしかめると急いでウエストコットの前に行く。それと同時に凄まじい衝撃波がこの場を震わし、それは蓮達三人にも向かってくる。

(くっ…こうなったら〈バスター〉で…)

それで護ろうとするが、この衝撃波に対して三人を守る障壁を作るとすると明らかに効果は落ちてしまい、完全に防ぎきれぬ保証がない。それでも何もしないわけにはいかなかった。その時。

「アアアアアアアアアアアアッ!!」

突如美九が大声を発し、音の壁を構築して衝撃から二人を守った。その行動に二人は目を丸くしてしまう。

「ふ、ふん。これで『貸し』はなしですからねー！」

美九は不本意ではないと言った様子でそう言う。『貸し』とはエレンの〈ロンゴミアント〉から守った事を言っているらしい。蓮からし



たら当然の行動をしたただけだったが、もしかしたら、『貸し』は男嫌いの美九が蓮と士道を助けるための自分に対する言い訳だったのかもしれない。

そんな事を考え、苦笑いを浮かべているとエレンとエレンの随意領域テリトリによって守られたウエストコットが瓦礫の陰から姿を現わす。

「すまない。助かったよ、エレン。それで、どうだい〈プリンセス〉は？」

「以前戦った時とは比べものになりません。これならAAAランクとこのも納得です」

「ほう、それで…勝てるのかね？」

「無論です。私に勝てる生物はこの世に存在しません。…万全の状態であれば、ですが」

エレンの胸元から腹部の傷痕から血が流れており、今まで随意領域テリトリで止血していたのが十香の攻撃が原因で再び開いたらしい。それを聞いたウエストコットはふむとあごに手を当てる。

「ならばここは退こう。〈プリンセス〉を反転させられただけでも収穫だ」

エレンはそれに分かりましたと言つて応じる。ウエストコットは蓮達の方に視線を向けてきた。

「我々はここで失礼させてもらうことにするよ。生き延びたならまた会おう、ジェイク、タカミナ、いやイツカシドウ」

「タカミナ？」

それは士道の実妹を名乗る真那の姓だった。それを聞いた士道と蓮は眉をひそめる

「待て…あんた、俺のことを知っているのか!？」

士道のその問いに答えず、エレンの肩に手を置いた途端エレンは随意領域テリトリを凝縮させ、ウエストコットを浮遊させるとそのまま凄まじいスピードで夜空を飛んで行ってしまふ。これでこの場には士道、蓮、美九。そして十香だけが残された。

「あとは、貴様らか…」

飛んで行ったウエストコット達を目で追っていた十香だったが、どうやらこちらを見過ごすつもりはないらしくゆっくりと降りてくる。そんな十香を見て、蓮はある決断をした。

「…土道、あと誘宵 美九、今すぐここから逃げろ。今の十香は普通じゃない」

その言葉に土道は驚きの視線を蓮に向けるがそれに一番反応したのは意外にも美九だった。

「に、逃げろって、あの子を助けるためにここまできたんじゃないんですかあ！というか、私たちが助ける必要がないぐらい激強じゃないですかー？」

「反論できないな…。でも、とにかく急いでここから離れろ！」

状況が理解出来ないのは自分も同じだ。だが、このまま平和的に終われないことだけは分かる。蓮は意識を集中させると、左手に粒子が集まり、銀色の輝きを放つ刀身に柄の真ん中に赤い宝石と綺麗な装飾が施された剣、ヘトラウイスを形成する。土道はその剣が蓮にとっての切り札だというのを知っていた。

「ここを離れて、ヘフラクシナスに回収してもらえ。いいな！」

一方的にそう言うと、爆発的な瞬発力で十香に斬りかかる。土道は剣の動きどころか蓮自身の姿が見えないほどのスピードだったが、十香は驚くこともなく平然と受けとめる。その瞬間、とてつもない衝撃が付近に走る。

「…この妙な感覚の元はお前か。貴様は何者だ？」

「俺のことを忘れちゃったのか？学校の帰りによくきな粉パン奢ってやっただろ」

「…何を言っている」

呼びかけてみるも冷たく返されるだけだ。人格、あるいは記憶そのものが変化しているかもしれないが、そんな事を考える余裕はすぐに無くなった。ヘトラウイスを振り払い、容赦のない斬撃を繰り出してきたからだ。蓮はそれを受けとめるので精一杯な状態となる。

（一発が重すぎる…！）

四月に十香と剣を交えたことがあったがその時とは比べものにな

らない威力だ。ひたすらそれを防ぐのが限界だった。それでも一瞬のタイミングを見切り、それに合わせて十香の剣を大きく弾き、反撃のチャンスを作る。

「悪いが全力で行く！へトラウイス！」

そう言うと、柄の中央にある赤い宝石が輝き、刀身から光が溢れ出す。そのまま隙のある十香へ剣を向かわせる。これは間違いなくとつたと確信する。しかし…

「…〈暴虐公〉」

十香が小さく言うと、手に持った剣…〈暴虐公〉は黒い輝きを放ち、へトラウイスとぶつかる。その瞬間、へトラウイスの刀身が砕け散り、銀色の破片が宙を舞う。

（うそ…だろ…）

その光景に一瞬だけ思考が停止する。十香はその一瞬の隙に〈暴虐公〉で蓮の腹部を突き刺す。その行動に全くの迷いは無かった。

「がっ…ああ…ああ…」

〈暴虐公〉は蓮の身体を貫通し、背中から先端を見せ、血によって黒い刀身は濡れていた。蓮は意味のない言葉が口から漏れた。

「…ふん」

十香は興味を失ったかのように剣を振り、〈暴虐公〉から蓮の身体を抜く。解放された蓮は力なくうつ伏せの状態に倒れ、血だまりを作っていく。土道はそれを信じられないといった様子で見ている。

蓮が刺された瞬間も叫び声すら出なかった。十香の変異、蓮の死…短時間に多くのことが起こりすぎて思考が追いついていないのだ。

「あの男…まさか…」

「いや、違う！あいつが…死ぬはずがない！」

怯えた様子の美九の呟きに、土道は無意識にそう反応していた。今まで何度も危機的状況を共に乗り越えてきた、そんな蓮が死ぬはずがない。急いでへフラクシナスに連れて行けばきつと目を覚ます。何より…十香に蓮を殺させるわけにはいかないのだ。

だが、十香の視線は次に土道を捉えていた。

## 40話

暗い空間だった…。

まるで無限に続くと思ってしまうほどに底が見えない暗い空間を、ゆつくりと引きずり込まれるかのように落ちていた。そんな空間を虚ろな目で見つめていた蓮は直感的に感じた。これが”死”というものなのだ。

先の見えない闇に無限に沈んでいく、そこには言葉に出来ない冷たさがある。

自分はこのまま無限に落ちていくとまるで他人事のように考えた時、一面が闇なのにも関わらずあるものが目に入った。それは自分の方に漂ってくる”日本刀”だった。

鍔の色は金色で、白色の柄と見た感じでは特に目立つような印象はないが、その刀に魂を引かれるような感覚を感じ、力なく右腕を刀に向けて伸ばす。

すると、刀はまるで磁石のように右腕に引かれて手の中に収まる。その瞬間、闇すらも塗り潰すほどの青白い光が空間を支配した。

「司令！観測器が新たな靈力反応を捉えました!!」

「<sup>セファイラ</sup>靈結昌の反転の事で一杯だというのに…今度は何よ?!」

「それが…データにない新たなパターンです！出処は…っ！土道君達がいる建物の屋上から…!」

「何ですって…！まさか、これがウッドマン卿が言っていた…」

琴里はある確信を得て、拳を強く握りしめた。

「これで終わりだ…人間!」

空に浮かぶ十香は土道を見下ろしながら冷たい声でそう言う。その手には<sup>ナヘマール</sup>暴虐公が変貌し、さらに禍々しい姿となった【<sup>バイヴァーシユヘレウ</sup>終焉の剣】が握られ、振り上げられている。

「美九！俺から離れろ！逃げるんだ!」

土道がそう言っても美九は十香に背を向け、土道を守るように抱き

しめて離れない。美九には霊装があるが、そんなものはあの剣の前にはなんの役にも立たないだろう。それでも美九は十香を救ってほしいと心から願った。

その時、美九は視界の端に青い光が見えた。こんな状況だ、自分は幻覚を見ているのかと思ったがその光はどんどん強さを増していく。光の光源は倒れた蓮の身体だった。

倒れた身体から青い光が放たれて、この場を照らしている。

「蓮の身体が…何が起こってるんだ…?」

士道もそれに気がつき、疑問の声を出す。すると、倒れていた蓮がゆっくりと動きその場に立ち上がった。

士道は蓮が目覚めた事を喜びたかったが、その様子が明らかにおかしい。立ち上がったものの、足取りはゾンビのようにフラフラとしており、顔は俯いていて見えないが腹部に穴が空いて、出血しているというのに苦痛の声も出さないのは普通ではない。

「貴様…まだ生きていたか…」

この闇夜の中だ、士道と美九が気づいたように十香も気がつく。それに士道はハツとなり、声を出す。

「蓮！早く逃げろ！」

「……………」

声が出せない美九だったが、もし声が出てたなら士道と同じような事を叫んでいただろう。男に逃げろと言うなど、少し前の美九なら絶対にしなかった行動だ。

「……………」

士道がいくら叫ぼうとまるで聞こえてないかのように反応しない。そうしてる間にも、ベイヴァーシユヘレヴ【終焉の剣】から霊力が溢れ出す。もし振り下ろされれば蓮は蒸発して消え去るだろう。

「消えろ…人間！〈サヘマ暴虐公〉——ベイヴァーシユヘレヴ【終焉の剣】!!」

十香が剣を振り下ろした瞬間、圧倒的な黒い霊力の奔流が放たれそれは蓮へと向かっていく。士道達を狙ったの攻撃とはいえそれでも吹き飛ばされないようにするので精一杯で動けない。

闇の奔流は蓮を飲み込み消滅させる…そうなる瞬間。

顔を伏せていた蓮が、向かってくる攻撃に視線を向ける。すると、霊力の奔流があり得ないV字の角度を描き夜空へと飛んでいく。まるで夢の中にいるような現実味を感じさせない光景に土道と美九は目を見開く。

土道達には蓮が何かしたようには見えなかった。そんな土道を尻目に床に広がっていた血だまりの淵部分が淡く発光すると、まるでビデオを巻き戻しするかのように血そのものが蓮の傷口へと戻り、治癒させた。傷が無くなった蓮の身体を青い光が包み込む。

その光が晴れた時、さつきまでとは違う深い青色の服装を身に纏い身体の関節部には金色のラインが刻まれ、服の表面はまるで生きてるかと思わせるように綺麗に煌めいていた。

背中には目を引き寄せるような美しい模様が十字架を中心に刻まれているが、それは虚空から出現した青色の外套が羽織られる事によって隠される。土道はそれが何なのか分かっていった。

「まさか…あれは霊装!？」

精霊が持つ絶対的な鎧、それが蓮を包んでいた。その事に驚きを隠せない土道だったが、すぐに別のものに注目が行った。

「なんだ…これ…？」

それはこの辺りを漂っている青い粒子らしき物体だった。周囲を見渡すといつの間にかそれに囲まれており、それは蓮の身体から出現している。

「………？」

美九はそれにゆっくりと腕を伸ばして指先に触れさせる。すると、手が吹き飛ばされるような勢いで弾かれ、霊装が破られて指先から血が流れる。

「…?!なあ…に…い…」

「これは…蓮が生み出しているのか…？」

その粒子は一斉に蓮に向けて集まり、四〜五メートルほどの上半身を構築した。集まった粒子が人間で言う細胞の役割を果たしており、全身はその巨人と同じ青い光を放ち続け右手には刀のような剣と右

腕に折りたたむように剣がマウンドされ、左手には巨大な弓と腕と十字になるように細長い盾が装備されている。

そして、その上には鬼神を思わせる禍々しい頭部が作られる。二つ穿いた闇の中に浮かぶ青い双眸、口は大きく裂けそこから鋭い歯が並んでおり、その隙間からは青い息が機械の排熱のように溢れ出る。

「……………ッ!!!」

出現した魔人は剣を握った右腕で床を突いて、空に見える満月へと耳の奥まで響かせるような甲高い声を上げる。それは産声のようにも聞こえた。

「なんだ…それは…」

空に浮かぶ十香の顔に驚きと動揺が現れる。そんな十香を蓮の背後に存在する魔人はジツと見つめる。その瞬間、蓮の周りに青く光る剣が無数に出現し、十香に飛んでいく。その速度は土道がそれを視認した時、十香のいた場所に噴煙が舞っていたほどだ。

舞う煙の中から十香がぐったりとした様子で飛び出し、土道達のいるフロアに落ちてくる。避けられなくとも剣でとっさにガードしたらしく剣は「暴虐公」へと姿が戻っていた。

「貴様…私を引きずり下ろすとは…死して償え！」

十香は人を殺せると思うほど鋭い目で睨みつけると、蓮に「暴虐公」を振り下ろし、斬撃を飛ばす。しかし、それはいつも以上の輝きを放つ右腕に簡単に払われ消滅する。よく見ると右手には土道が見た事がない「日本刀」のような剣が握られ、そこから凄まじい霊力を放っている。

「ッ！貴様っ!!」

自分の一撃が軽くあしらわれた事が許せなかったのか、十香自らが接近して「暴虐公」で斬りかかるが右手に持った刀一つで受け止められる。

「その力…貴様は…一体！」

十香が信じられないとばかりに目を見開くがそれを気にした様子もなく、蓮は受け止めた「暴虐公」をそのまま力尽くで押して剣を下

向きにさせると、十香の首元に左腕を伸ばして締め上げた。

「があっ!!ぐっ…」

苦しい表情を浮かべ力が抜けると〈暴虐公〉<sup>ナヘマー</sup>を持つ手にも抵抗がなくなる。そのまま左腕だけで十香を持ち上げた。

「…お前は敵だ…死ぬ」

感情を感じさせない冷たい声でそう言うと、右手の剣の先を十香に向ける。もしあの剣が十香を貫けば間違いなく死んでしまう。土道が我に返り、それを止めようと動き出そうとする直前、上空から突風が吹き荒れた。

「かか、私の従僕に手を出すとはいくらお主でも見逃せんな」

「制止。十香を殺してはダメです」

それは美九の洗脳が解けた耶具矢と夕弦のものだった。だが、上空にいる二人に反応したのは蓮では無く背後に立つ魔人だった。二人のいる位置を見るとまるで蚊でも払うかのように右手に持った剣を振る。すると、まるで〈塵殺公〉<sup>サンダルフォン</sup>のように斬撃が出現して二人へと向かっていく。

「ちよー!何よそれ!」

「回避。耶具矢、早く!」

二人は左右に分かれて斬撃を避けるが周囲に発生した衝撃波が二人を吹き飛ばす。邪魔者が消えたかと思った瞬間、冷気の奔流が襲いかかり左腕にある盾で防ぐ。それは〈氷結傀儡〉<sup>ザドキエル</sup>に張り付いた四糸乃の姿があった。

「それ以上は十香さんが死んでしまいます!蓮さん…一体どうしたんですか!」

その言葉に蓮は反応すらしない。その代わりとばかりに攻撃する四糸乃に魔人が咆哮を飛ばす。右手に持った剣が形を崩し揺らめく光を放つ”矢”と変化し、それを左腕に持った弓へとかけ、弦を引いて狙いを四糸乃へ向ける。

「えっ…」

『四糸乃!危ない!!』

四糸乃が回避を開始したのと矢が放たれたのはまったく同時だった



た。四糸乃のすぐ横を矢が通り過ぎ、少し遅れてトルネードのような風が吹き荒れて四糸乃は吹き飛ばされる。外れた矢は暗い空へと消えていき、最後は核のような大爆発と光を生み出して消えた。もし直撃していたなら肉片すらも残らなかつただろう

精霊三人を簡単に撃退するその力はまさに、圧倒的という言葉に尽きるだろう。

「蓮！それ以上は十香が死んじまうぞ!!」

士道が呼びかけても反応は無い。ならば力尽くでも止めようと一步を踏み出すが、それを合図としたかのように蓮は士道に顔を動かして視線を向ける。

それを見た途端、士道の身体はかなしぼりにあつたかのように動かなくなつた。いや、正確に言えば心は進もうとするが身体はそれを拒否しているのだ。

(なんで…身体が動かないんだ…)

何かをしたようには見えなかつた。だが、士道の身体には理由が分かつていた、それは潜在意識にある”本能的な恐怖”を刺激されたからだ。

まるで巨大な恐竜に睨まれるような恐怖…それを『十香を救う』という使命で士道の意識は気づかなかつたが、美九はそれを直接感じ、泣きそうな顔で士道の手を握る、握つたその手はガクガクと震えていた。

「……………」

蓮は士道が動かないのを確認すると、視線を十香に戻す。士道を排除するほどの危険性はないと考えたらしい。邪魔者がいなくなり、右手に持つた剣の狙いを十香に定める。そのまま突き立てれば彼女の身体を貫くだろう。

「っ！十香あああ!!!」

貫く瞬間、そう叫ぶことが士道に出来たせめてもの抵抗だつた。それもこんな状況では何の意味もない、そう思った。しかし、十香を貫く直前に剣は動きを止めていた。まるでその叫びが物理的な力となつたかのように。



「…順番に説明しよう。土道と誘宵 美九にも大きな傷はない。十香も今はもう元に戻っている。問題は君のほうだよ」

「そういえば、十香に腹を貫かれて…あれ?」

今は病衣姿に着替えさせられ、点滴をうたれている状態なのだが服を脱いで腹部を見てみても傷跡が無く、何もなかったかのような状態だった。

「医療用顕現装置リアライザでも跡ぐらい残ると思うんだが、技術は進歩してるんだな」

「…君は何も覚えてないのかい?」

令音がそう聞いても頭上に『?』を浮かべる。それは惚けているようには見えなかった。

「…そうか。調子はいいいようだが、検査をしなくてはならない。かなり大掛かりになるが我慢してほしい」

「検査?別に悪いところは何も無いんだが…時間はどれぐらいかかる?」

「…今日一日は潰れると思つてほしい。準備に時間がかかるからもう少し休んでいてくれ」

そうとだけ言つて、令音は医務室を出て行つてしまふ。普段から不思議な雰囲気を持つ彼女だったが、いつも以上に読めない様子だった。その事を気になりながらもベッドに再び寝転がった。

天央祭三日目。二日目の日をへフラクシナスでの検査で終えた蓮は現在、セントラルステージ：美九達精霊陣営と狂三と土道と共に戦つた場所で美九のステージを聞いていた。

別に特別な意味があつたわけではない。ただ美九のその後の様子が気になつただけなのだが見た感じ特に変わった様子はなく、今も霊装を身に纏い、霊力の籠つた声で観客を熱狂させている。

(やっぱり、そのまんまだな)

いや、本音を言えばもしかしたら霊力の籠つてない声で歌っているのではないかと期待していたが、やはり人は変わるの簡単ではない

ということだろう。美九の歌は靈力の効かない蓮が聞いても素晴らしいと感じるのだが、彼女はそれを信じられないのだろうか。

演奏は終わったのにも関わらず、会場は大盛り上がりだ。美九は感謝の言葉を述べてからステージを去る。ステージも終わったことだし、もうここにいる理由はない思い、会場を出て行こうとした時。

「あつーやつと見つけたぞー！ここにいたのか」

肩を上下させた土道がこちらによつてきた。別に何かを約束したつもりはないのだが、何やら自分を探していたらしい。

「どうしたんだ土道、女をナンパするのを手伝ってほしいのか？」

「ち、違うに決まってるだろ！美九からステージが終わった後、俺と蓮に控え室に来てほしいって手紙が届いたんだよ」

「俺とお前が？」

正直に言つて怪しさ満点だ。もし行つてみたら大量のマスコミが待つて『この男共は私の控え室に忍び込んで私物を盗もうとしたんです』とかいう展開があるかもしれない。考えすぎかと思うかもしれないが、相手は大の男嫌いの美九なのだ。

「そうか、じゃあ先に行つてくれ。俺はトイレに寄つてから行くから」

そう言つて土道つちみちを先に行かせる。もちろん、想像した事が起きたなら助けてやるつもりだが一緒に行って罠に嵌つたら意味がない。少し時間を潰してから関係者用の入り口を使って裏手に入ったのだが、そこで重要な事に気がつく。

「あれ？控え室ってどこだ？」

別にこの建物に詳しいわけではないため、どこが控え室かが分からない。迷いながら適当に目に入った扉を開けてみる。すると…

そこには一糸纏わない美九が土道に抱きついていた。

「…マジかよ」

いろいろな可能性を考えていたがこれだけは予想してなかった。とりあえず、こんな状況を他の誰かに見られるとマズイのでドアを閉める。

「何がどうなってんだ？どつちが被害者で…」

「あ、いや…これは美九の霊力を封印したからで…」

士道の言葉に思わず小さく驚きの声を上げてしまう。すると、美九は士道を離して蓮の前まで来ると左手を両手で握る。その顔は満面の笑みだった。

「私…心を入れ替えますう！言われた通りに人を信じてみたいと思つてそのけじめのためにダーリンにキスしたんです！」

前までのツンツンモードが終わり、今度は驚くほどのデレデレモードだった。美九の言う『ダーリン』が誰なのかと思ひ、予想の人物に顔を向けると士道は力なく笑う。

「人間にも誰かを心から思える人がいるって分かりましたから！それこそダーリンやえつと…」

「別に男って呼んでもいいんだぞ？」

「もうっ！意地悪な事言わないでくださいー」

美九は不満そうに頬を膨らませる。なんというか、人間はこんなにも短時間で変わるのかと逆に驚かされてしまった。

「蓮…神代 蓮だよ。誘宵 美九」

「蓮さんですか！じゃあ私の事も美九って呼んでください！じゃないと怒っちゃいますから！」

グイグイと来る美九に翻弄されっぱなしの状態だ。あと、美九は今全裸の状態のため目のやり場には困る。別に狼狽えるわけではないが、蓮が今見てる視線はテレビだと間違いなく修正されてるような光景だ。

その時、右腕が勝手にへバスターへへと変化し蓮の意思とは関係なしに美九の肩に触れた。

「あっ…なんだか変な気分ですう…」

肩に触れた瞬間、腕から何か登ってくる感覚がする。しばらくすると手は自然と離れ。すると、光の粒子が集まり白銀の盾と剣が出現する。蓮の腕が余裕で隠れるほどの大きさの盾は表面には金色の綺麗な模様が刻まれ、剣もそれに負けないほどの装飾がされており、芸術品として通用すると思ってしまうほどだ。

その二つは勝手に宙に浮くと剣の刃の側面が盾の表面を擦る。す

ると、不思議な事にそこから音が出て室内に響き渡る。そのままバイオリンのような動きで曲を奏でる。

〈マクイル〉

片手で扱え、様々な効果のある音を出す事ができる盾と剣。

敵を切り裂く事のできる武器でありながら楽器でもある。

「なんだかりラックスする音楽ですう…」

「そうだな、不思議な曲だ…」

美九と士道はこの曲ですっかりリラックスしてるらしい。演奏が終わると剣と盾は粒子となって消える。音楽の専門的な知識は無いがこの武器は手足のように扱えるのがなんとなく理解出来た。その時、

「美九さん！アンコールが凄くて次に進めません！もう一曲…」

控え室のドアを美九と同じ学校の制服を着た生徒が開けた。そして、そこには全裸の美九と見知らぬ男が二人…。

その瞬間、絶叫が響き渡る。結局、いくら考えても偶然を予想するのは不可能なのだと言った瞬間だった。

## 41話

夏ももうすぐ終わるといふのにそれを感じさせない暑さ、雲一つ無い青い空にはジリジリと太陽が地上を照らしている。そしてその地上には照りつける太陽に負けないほど大勢の人々が熱気を放っていた。

本日は天宮祭の予備日、本来なら雨などの事情により開催出来なかった場合の時の日なのだが、とある事情によって潰れてしまった二日目の開催日になるという前代未聞の日となっていた。

「特殊な幻覚剤が散布されたテロ事件：ねえ…」

出店が並ぶ通路を一人で歩く蓮は小さくそう呟く。精霊の美九が起こした二日目の事件はそう結論出された。痛々しい中学生が考えたような事件だが、美九に操られた者は何も覚えてなかったうえに、分からないで有耶無耶にするより無茶苦茶でもそう発表するほうが良かったのだろう。

まあ、そんな事があつた後でも訪れている人の人数はざつと見て、一日目と二日目以上の人数であることは一目で分かるのだが。

そんな神経の凶太い人々の中を歩く蓮だが、さつきから誰かに見られている感覚を味わっていた。別に自意識過剰などではない。試しに顔を右に向けてみるとその先にいた数人の女子のグループが慌てて顔を逸らす。

注目を集めている理由は分かっている。黒目黒髪が一般的な日本では白の髪は目立ってしまう。視線を向けられるのが大の苦手というわけではないが、珍獣のように見つめられていい気分がするわけでもない。

一瞬、いつそ髪を黒に染めてみようかと考えるが、それを琴里にも見られたら笑われる未来が想像出来た。

「髪の色が違うだけで、日本人はどうしてそこまで気になるんだか…」

せめてもの救いは珍しいからと言ってむやみやたらに話しかけられない事だろ。視線が集まっているのもあるが、今の自分が話しかけやすい雰囲気を出しているとは思えない。

視線を感じるだけなら我慢すればなんとかなる。そう考えてたこ  
焼きの屋台の前を通り過ぎようとした瞬間。

「その綺麗なお方。よろしければわたくしとご一緒しませんこと？  
エスコートしてくれる殿方が欲しいと思っただころですの」

屋台と屋台の隙間の影になっているところから、聞き覚えがある女  
性の声が聞こえてくる。それを聞いた蓮は顔は向けずに足を止める。  
「こんな不良みたいな髪の色をしている男を誘うなんてやめとけよ。  
人気のない場所まで連れて行って襲うかもしれないぞ」

「フフ、するつもりのない事を言っただ女性を怖がらせるのはあまり感  
心しませんわよ」

可笑しそうに笑ったのを感じ、顔を横に向けるとそこには左目を髪  
で隠した妖しい雰囲気を持つ少女…そして、自分に思いを寄せている  
存在である狂三がいた。服装は六月に見た来禅高校の制服を着てい  
る。

「なんでこんな所にいるんだ？まさか、またここで何か良からぬ事で  
も起きるんじゃないやあ…」

虫の知らせのように、何かの諜報活動にでも来ているのかと思っ  
たが、狂三は首を横に振る。

「いえ、わたくしの目的はあなたと共にいる事…デートする事ですの」  
このような場で恋人とデートするという行為は別に珍しくないの  
だが、人外の存在の狂三がそう言うのと妙な違和感を感じてしまう。正  
直な話、ただ遊びに来ていたと言うほうが納得出来る。

「実はわたくし、オリジナルに命令されてここにきましたの。『もしか  
したら、蓮さんは一人で寂しく歩いているかもしれないわね。もし  
そうだったらご一緒してあげてくださいまし』オリジナルは苦笑いを  
浮かべながらそう言っただわ」

現状、土道と十香達とは別行動をしており、一人なのは間違ってい  
ない。しかし、そこまで読んでいたというのなら悲しいような嬉しい  
ような複雑な気持ちになってくる。

「あと、伝言も預かっていますわ。『後日、これとは別にわたくしとも  
ちゃんと付き合ってもらいますわよ』」



「なるほど、土道に手を貸してもらった時の話か…」

狂三には土道に手助けしてホールまで連れてきてもらった時、礼を  
すると言っていたのでそれがオリジナルの狂三とのデートなのだ  
という意味だろう。姿は全く同じ…だが、人物が違う女性と付き合う  
というのは浮気となるのか悩むところだ。

「でも、今はオリジナル<sup>他</sup>のわたくし<sup>女</sup>の事なんて忘れてわたくしだけを  
見てくださいまし」

狂三は蓮の右腕を甘えるように抱きしめる。他から見たら間違い  
なく愛し合う恋人同士にしか見えないだろう。いきなりの行動に呆  
気にとられたが、せっかくの好意を無下に扱うこともなくそのまま二  
人で歩き出すのだった。

狂三と一緒にになった事でさつき以上に視線が集中するようになった  
のだが今はほとんど気にならなくなった。狂三はニコニコと嬉し  
そうな表情をしながら右腕を抱きしめている。

それを見て、考えるのが自分は狂三の事をどのようにおもっている  
のか。そして狂三は自分をどのように思っているのかだ。

蓮は狂三の事を自分の良き理解者だと思っている。何かを隠しな  
がら生きていくと、少しでも自分の事が知られるのが恐ろしくなる。  
そして、蓮は文字通り人外<sup>人外</sup>の存在である狂三、十香に逃げるように愛  
するようになった。

「狂三、お前は俺のどこをそんなに気に入ったんだ？どうして…俺を  
愛してくれる？」

「あら、ご自分の好きな所をわたくしに言わせるなんて恥ずかしいで  
すわ」

煙を巻いて逃げられそうな感じがしたのだが、狂三は微笑みながら  
蓮の顔を見つめる。どうやらこの質問から逃げるつもりはないらし  
い。

「…わたくしは他の誰でもない、あなたを見た瞬間、心を奪われました  
の。そして、何もないあなたの中身をわたくしの色で染め上げたいと  
いう欲望を抱くようになった…」

蓮の胸元に手を這わせながら狂三は色っぽく語る。なんとも反応に困る台詞だ。狂三の言う事に共感出来る部分が皆無である。

「蓮さん！わたくし、あれが欲しいですわ！」

そう言つて狂三が指さした先には模擬店の一つである射的があり、その台の上に景品の一つである猫のぬいぐるみがあった。大きさは二十センチほどでそこそこのサイズだ。

「狂三は猫が好きだな。オーケー、分かったよ」

蓮は店の前まで行き、経営している生徒に百円を渡して、コルク銃と三発の弾が渡される。

(たったの三発か…)

猫のぬいぐるみの大きさから考えると三発だけでは心許ない。百円という値段で客に何回も挑戦させるといのが狙いなのかもしれない。

それでも文句を言わずに弾をコルク銃に詰め、狙いを定めて一発目を撃つ。

弾はぬいぐるみの右耳に当たったが、ほとんど位置に変動はない。

「ふうむ…」

そう小さく唸ると、すぐに二発目の弾を銃に詰め発射。今度は左耳に命中したが一発目と結果は変わらなかった。残りはあと一発だ。

生徒は何も獲得されないと確信して余裕の表情だ。蓮はそれを横目で見ながら三発目を銃に詰めて狙いをつける。

そして、それを撃つ瞬間、銃口を右に大きくズラす。そのままぬいぐるみの横を通過する弾だったが、それは店の奥にある壁を二回反射してルートを変える。弾はぬいぐるみを背後から強襲して弾き飛ばす。それは蓮の手の中に収まり、最終的に狂三の腕の中へと行った。

「あうえい!？」

あまりに現実を感じさせない出来事に、生徒の口からそんな声が飛び出す。嬉しそうな狂三を見た後、蓮はさつきまで生徒が浮かべていた余裕そうな表情を浮かべる。

「文句はありませんよね？ちゃんとコルク銃で手に入れたんですか

ら」

『残念ながら、台の奥に落とさないと景品獲得にならない』そんな反論（？）を言う事もできず、歩いていく蓮と狂三を生徒は見ている事しか出来ないのだった。

「さっきのお店の方、とても驚いていましたわね」

「何回も挑戦するようなカツタリイ事は嫌いなんでな。何をしようがバレなきやイカサマじゃないんだよ」

「悪い人：だけど、そういう所嫌いじゃありませんわよ」

現在、二人はベンチに座りながら栄部西高校のドネルケバブを片手にまったりとした時を過ぎしていた。今食べているケバブは普通の高校生が作ったというのにとても美味しい。もしかしたら金をごっそりと取っていく高級レストランよりも美味かもしれない。

人間が時に高い値段の料理より、このように気軽に食べられる食べ物を美味しいと感じる謎はおそらく一生解き明かせないだろう。

「あら、蓮さん口元についていますわよ」

そんな無駄な事を考えながら食べていた所為で口元にケバブのソースが付いているらしい。そんなミスをするなんて自分らしくないと思いつつ、それを拭こうとした瞬間。

狂三は自分の顔を寄せてそれを舐めとった。どんな時も冷静の蓮でも、不意にされたその行動をそのまま受け流すことは出来なかった。

「く、狂三、家ならまだしもこんな所でそれは…」

「ふふ、こんなところ、オリジナ<sup>本</sup>ルのわたくしに見られたら殺されてしまいますわね」

クスリと笑いながらも何気に恐ろしい行動をする狂三。もしかしたら目の前にいる狂三はそういう狂三なのかもしれない。

恥ずかしさを誤魔化すように急いでケバブを食べる蓮。なんだか今日は狂三のペースに乗せられっぱなしのような気がする。

「さて、次はどこに行きたい？」

狂三が食べ終わったのをみて、次に行く目的地の提案を聞く。その

直後制服のポケットに入っていた携帯電話が震える。一体何かと思  
い、画面を見ると『解析官殿』と映っていた。

「…来たか。いきなり呼び出してすまないね」

令音からのメールにはセントラルホールの関係者入り口に来て欲  
しいとあり、そこに行ってみるとメールの差出人であり、眠そうな顔  
をした令音が立っていた。

「経験上ではいきなり呼ばれる時はロクでもない事しか起きないんだ  
が、何の用なんだ？」

気怠そうに聞く蓮だったが、そのロクでもない予感というのが見事  
に的中する事となった。

「…今、ステージでミスコンを決める大会を開催していてね」

「そういうばそんな事を放送で言ってたな。それで？」

「…その大会に十香、耶具矢、夕弦が出たいといいだしてね」

「ふーん、それは大変な事になったな」

十香達がミスコンに出る事自体に何か思う事は無かった。例え三  
人の誰かが優勝しようとそれ以外の参加者が一位になろうと、十香達  
はそれを結果として受け止められると信じているからだ。

しかし、そのような他人事でいられたのはこの時までだった。

「…三人の内誰かが優勝すると、他の二人の感情が乱れて靈力が逆流  
してしまう可能性がある。だから、君が出て優勝してもらいたい。」

「ふあっ!？」

令音の驚きの一言にそんな声が漏れる。とはいえ、それも無理がな  
い事だろう。だが、当人は表情を変えずにそのまま話し続ける。

「…シンが審査員として出て、点数をコントロールしようとしている  
が上手くいかなくてね。そこでへフラクシナスのコンピューターに  
相談したところ、君を変装させて優勝させるのがベストだと出たん  
だ」

「なんで俺が女の姿をしなきゃならないんだ！第一、十香達もミスコ  
ンで勝てなかったからって感情が不安定になるほど子供じゃないだ  
ろ」

「…君の言う事も分かるが、もし本当に被害が出た時も君は同じ事を言えるのかい？」

なんとも痛いところを突いてくる。令音の言う通り、蓮がそう信じているだけであり確証はどこにもない。それでもすんなりと受ける事は出来なかった。蓮にもプライドというものがある。

「だ、だったら、解析官殿がきわどい水着でも着て出ればいいじゃん。スタイルが良いんだから…」

「…出場出来るのは生徒だけで、教員の私は無理なんだよ」

せめてもの抵抗とばかりに言うが、冷静に返されてしまった。急いで次の手を考えるが状況が状況だけに、有効な手が何も浮かばない。

「…もう良いかい？時間に余裕があるというわけではないんだが…」

「あーもう！分かったよ！出て優勝すればいいんだろ！」

「…君のそういうところ。私は結構好みだよ」

嬉しくもない告白を受け、蓮は大きくため息をするのだった。

「…ここが控え室だ。大会はもう始まっている、素早く準備をしてほしい」

令音に連れられて来た場所は、ステージ裏手の控え室だ。蓮はついさつきまでここで女子達が着替えていたという事を思い浮かべて興奮する事なく、室内を見渡す。とりあえず鏡などはあるので準備に不自由することはなさそうだ。

「…これがステージの衣装だ。三人に勝つためにはどうしてもこのようなものになってしまうのだが、我慢してほしい」

「まさか…これってドレスか？」

令音が見せたのは生地が白色と派手なドレスで、所々に銀色の装飾がある。何とも派手な服装だが、十香達三人に勝って優勝となるとインパクトが重要となることは分かっていた。

「…ドレスの着付けと、女性らしく見せる化粧などやる事が沢山ある。まずは…」

「あーもう、とりあえず解析官殿は部屋を出て行ってくれ。そうしな

きや着替えられないだろ」

「…一人だといろいろキツイとおもうのだが…」

ドレスを着るのもそうだが、化粧をするのに蓮一人だけというのは難しいと思つて手伝おうとしたが、それを拒否される。

「もし、何かあつたら呼ぶから早く出て行つてくれって」

背中を押されて、令音は強引に部屋を出される。それに疑問を感じるが、男がドレスを着る瞬間を他の誰かに見られたくないという心理も理解できる。そうだろうと結論づけた。

—————

「…狂三、もう出てきていいぞ」

蓮は自分以外誰もいない控え室でそう小さく呟くと、足元の影が広がつていき、そこから狂三が出てくる。狂三も、蓮と令音の会話をこつそり聞いていたのだ。

「大変な事になりましたわねえ。十香さん達のためにドレスを着るなんて…」

面白がつているのがよく分かる口調だ。それを咎める気はない、自分も土道が女になった時は笑つた故にその気持ちはよく分かる。だが、文句を言うのはここまでだ。何事もやるからには勝つ。それが座右の銘だ。

「ふう…よし、準備を始めるか。手伝つてくれるな？狂三」

「わたくしを…手伝わせますの？」

「この事を口外するとは考えられないしな。ドレスの着付けと化粧は出来るか？」

助けを請われた事に軽く驚いた様子の狂三だったが、すぐに嬉しそうな表情を浮かべる。

「ええ、もちろんですわ。衣装の着付けはお任せ下さいまし。蓮さんは素がよろしいので、お化粧は薄めがいいですわね」

ノリノリの様子でプランを考える狂三に、多少の不安を感じつつ制服のブレザーを脱ぎ、ネクタイを外すのだった。

『一以上で全候補者の審査が終了しました！結果、八舞 耶具矢さん、

八舞 夕弦さん、夜刀神 十香さんが二十五点を獲得し、同点一位となりました!』

司会者の宣言に会場が大きく盛り上がる。そんな会場とは逆に、審査員の士道の気持ちは大きく沈んでいた。三人が同じ点数で一位という土道が最も恐れていた事態になり、後は決戦投票となる。審査員が一人一人候補者の名前を挙げるという方式のため、どうしても土道が選ばない二人が出てしまうのだ。

『では、三人に登場していただきま…えっ!?何?どうしたの?』

司会者が三人の登場を宣言する直前、おそらくスタッフであろう女子生徒が司会者に耳打ちで何かを伝える。それを聞いた司会者は何やら驚いたような表情を浮かべる。

『えつと…すみません。ついさつきエントリーしてきた生徒が一人います!…決戦投票の前にその方のパフォーマンスを見たいと思います!』

会場に動揺が広がるが、土道にとっては救いの言葉だった。それは細い蜘蛛の糸かも知れないがまだチャンスは残されていた。もはや祈ると言っても良い気持ちでその生徒を待つ。

『それでは登場してもらいましょう!エントリーナンバー二十五番! エリスさんです!』

突然の乱入者に会場の期待が高まる。その期待の中に現れたのは『白』だった。

肩に届くほどの長さの白い髪、白い肌、そして白いドレスに身を包んだ中性的な顔の少女は、視線が集まるステージの中央に恐れる事なく歩いてくる。

ドレスの上半身の部分には白と合うような薄い銀色に包まれており、首にはチョーカー。動きやすさを考えてか下のスカート部は右足だけが見えるように縦に深く裂けている。女性らしいふくよかな胸元と、右足の太腿の中程まで見えるのが眩しい。

右手には自分の身の丈以上の長さの槍を持っている。先端部には矢じりが付いて、その下には布のようなものが巻かれ太さが違う。

ステージ中央まで堂々と歩いてくると、観客に向けてお辞儀をして

パフォーマンスを開始する。まずは右手に持った槍を慣れた手つきでクルクルと回し始める。そのままダンスでもするようにステップを踏みながら華麗に舞う。

手元を全く見ず、身体の一部のように操るそのテクニクに会場が呑み込まれる。エリスは優しい笑みを浮かべ、パフォーマンスを続ける。そしてフィニッシュに両手を大きく広げ、槍を大きく掲げると、先端部の布が解けてまるで旗のようになる。それと同時に会場のボルテージがMAXとなる。

『素晴らしい演技でした！では、審査員の皆さん！点数をどうぞ！』

土道は迷わず十点札を掲げる。十香達の事を考えて高い点数をあげたいという気持ちもあったが、あの演技にこの点数分の価値はあったと感じる。そして土道以外の審査員である美九はというと…。

「はあ…はあ…イイデスワ…眩しいほどの白い肌…チラリと見える綺麗な太腿…触ってみたいですわあ…」

口から涎を垂らし、瞳孔を限界まで開き、まるで狼が獲物を狙うような血走った目でエリスを見つめており、掲げた点数札には十の0の部分塗り潰して代わりに一と書いた『十一点札』となっていた。

『出ました！七点！一点！十点！じゅ、十一点！合計二十九点！エリスさんの優勝です!!』

司会者の宣言に会場に大きく歓声が響きわたる。土道も一先ず最悪の事態だけは回避できたと胸を撫で下ろした。司会者はトレーを持ちながらエリスに近づく。その上には二枚の紙切れが乗っていた。

『エリスさんには高級温泉旅館一泊二日宿泊ペアチケットが贈呈されます。ちなみにエリスさんは誰かと行く予定は…』

司会者の質問の途中にも関わらず、エリスは二枚のチケットを手にとってそれを観客席の方に放る。読めない動きで空中を漂うそれを求めて、会場は一瞬にして無法地帯と化す。

『ちよ、ちよっと！何やってるんですか!?!皆さん！落ち着いて下さい!!』

司会者が必死に宥めるも当然ながら焼き石に水だ。パニックとなる会場を無視して、エリスはステージ裏手へ戻っていくのだった。



大パニックとなった会場を去り、エリスは控え室へと戻ってきた。騒動のせいか室内に他の選手は見られない。その代わりに笑顔の狂三が出迎える。

「宣言通りの優勝でしたわね。とてもお綺麗で美しかったですわ」  
「こんな事…二度とやらないからな…」

エリスは壁に頭を当てて大きくため息をする。その声は女性だったが、話し方は男のものだった。首には巻かれたチョーカーを外すとそこには絆創膏が貼られている。

「はあ…早く着替えて忘れるか…」

優勝した以上、もうこんな姿でいる理由はない。さっさと着替えようと後ろを向いた瞬間、凄い力で壁に押し付けられる。いきなりの出来事に何が起きたのか一瞬理解が遅れたほどだ。そして、目の前には狂三の顔がアップで映っている。その目には、欲望が揺らめいていた。

「綺麗ですわよ…蓮さん…。すぐに着替えてしまっだなんて勿体無いこと、しないでくださいまし…」

狂三は自分の膝を蓮の足の間に入れ、左右の手で蓮の手首を掴んで壁に押し付ける。動けないように完全に拘束すると、蓮の首筋の白い肌に舌を這わせ始めた。

「く、狂三!?何を…ひっ…!」

その行動に思わず情けない声を上げてしまう。そんな事を気にする事なく恍惚とした顔で狂三は自分の証をつけるかのように白い肌を汚していく。その後、控え室に百合の花が咲き乱れた。

「おおーレンではないかー今までどこにいたのだ!」

会場が落ち着き、夕陽が街を照らす時間に蓮は土道達と合流した。元気な様子で迎える十香とは反対に蓮は何やら様子がおかしい。

「よお…ミスコンに出たんだって?美を競い合うだなんて、女は大変なんだな、土道」

「いや、なんで俺に話しを振るんだよ」

急に話を振られた土道が思わずそう言い返す。土道の気のせいか蓮がとても疲れているように感じる。精霊とぶつかつてもケロツとしているというのに珍しい。

「そうだーその『みすこん』でえりすとかいう奴が一位だった私たちから優勝を奪っていったのだ！」

「エリスとかいう女…凄まじいオーラを放っていた。あれでは土道や凡人が魅了されるのも無理はない」

「称賛。パフォーマンスも素晴らしかったです。良いものが見れました」

優勝を逃したというのに十香達には悔しさは感じられない。それほどに姿やパフォーマンスに夢中になっていたのだろうか。

「もう一回あやつの姿が見たいと思っているのだ！レンは見えないか？白い姿をしているのだが…」

「いいや、見てないな。きつと縁があつたらまた会えるだろ。それまで待って」

何も知らない十香に、小さく笑いながら蓮はそう言うのだった。

## 42話

暗闇が支配する一室。日の光は窓から差し込む事なく、ボンヤリとしたオレンジ色のランプの光が頼りなく室内を照らしている。場所は蓮の自宅のベッドルーム、部屋に設置された大きなベッドの上で家の主人は眼鏡を掛け、ランプの光だけで本を読んでいる。

普段は文句や皮肉ばかりを言っている蓮だが、眼鏡を掛けると真面目そうで知的な雰囲気を放っていた。

「サラミス海戦、ハンニバル、スパルタ、衆愚政治：」

口からは古代ローマに関する単語が呟かれる。それは今読んでいる本の内容であるのだが、別に古代ローマの事について勉強している訳ではない。一言で説明すれば“暇つぶし”：というものだ。

ある程度、読書をしていたがため息をした後、飽きたと言わんばかりに本をパタリと閉じる。その瞬間に時刻は深夜十二時になり、それと同時に部屋に暗闇とは別の黒い影が出現した。

「約束通りの十二時：時間を守る奴は好きだぞ」

それを見た蓮は感心するようにそう言う。床に広がった影からは黒と赤のドレスの霊装を身につけた狂三が姿を現わす。深夜十二時に寝室で：という約束を狂三は一分のズレもなくに守った。寝室に降り立った狂三はゆっくりと歩いてベッドまで来ると、擦り寄るように蓮にもたれかかる。

「約束を取り付けたのはわたくしですもの、遅れる事など許されませんわ」

「昔はやたら時間にルーズな奴ばかりに会っていたから、その言葉に癒されるよ。：それで、狂三は俺に何をして欲しいんだ？」

まるで試すようにそう問いかける。九月の美九との戦いの最中に助けてくれた狂三に後に借りを返すと言っていた。今日、狂三が来たのはそれを伝えるためだった。

これに関しては、余程の無理難題でも無ければ叶えるつもりだった。いい意味でも借りたものは倍にして返すというのが蓮の考え方だからだ。

「…わたくしの望みはただ一つ、それは…」

そこから数秒沈黙が支配する。もしかして悩んでいるのかと思っただが、狂三は蓮の顔を真つ直ぐ見て、その沈黙を破った。

「…わたくしと一日デートしてくださいまし」

雲一つない晴天。残暑というには高いこの気温から考えると、地球温暖化の問題も笑えないところにまで来ているのだと理解出来る。

日曜日の休日、天宮駅から電車に乗って数分。とある場所で降りた後、現在人が賑わう街中を歩いていた。

人々の活気と温度に暑苦しきを感じるのだが、それだけが理由では無いという事は理解していた。

「ふーんふーんふふふーん☒」

この温度だというのに蓮の右腕に抱きつき、嬉しそうな表情を浮かべてご機嫌にも鼻歌を歌っている狂三が原因だった。文化祭の時もそうだったが何故か狂三は自分に身体を預けたがる傾向がある。

その理由は謎だが、ここまで密着しなければ歩けないという状況では無いため『少し離れてくれ』と言いたい状況なのだがこんなご機嫌な狂三を見て言える人間などいないだろう。

そして、その二人は周囲からも注目の的になっていた。休日の都会となれば蓮達以外のカップルも当然おり、彼氏が狂三に見惚れていると彼女が背中を抓り、彼女が蓮に夢中になると彼氏はつまらなそうに舌打ちをする。

そんな状況を作りながら歩く二人を数十メートル後ろにある黒いワゴン車から覗く瞳が見つめていた。

「目標の様子はどうか？」

「今のところ不自然な行動は特に」

昼間だというのに日光が差し込まない暗い車内。席に座る三人の男の中で一番年長らしき男の問いにパソコンを操作する男が簡潔に答える。

もう一人はその横でハンドガンの整備を行っていた。

「そうか…もう少し様子を見よう。このままターゲットの動きに合わせて車を動かしてくれ」

命令に運転席に座る四人目の男が『了解』と応える。その言葉や装備から彼らが一般人などでは無い事は誰にでも分かる事だった。

「隊長、やはりこんな人目が多いところで実行するなんて無理ですよ！もう少し作戦期間を延長出来なかったのですか!？」

弱音を吐いたのはパソコンを操作していた若い男であった。彼の悲痛の叫びに隊長の男は反論出来ないとはかりに呻く。

「人がこれほどいる場所で目標の捕獲だなんて！当初は一人でいるところを狙うはずだったのにどうして…」

「…これはメイザース執行部長から直々の任務だ。任務期間を長引かせるのはあまり良く無い。目標が一人で…しかも暗い夜道を歩く時を待つ余裕は無かったんだ」

「しかも、隊長はこのレンとか言う名前の少年をイギリスに連れて行く理由すら聞かされて無いだなんて…」

声にこそ出さないものの他の二人も同じ気持ちだったのだろう。満足に目標を調べる時間すら与えられず、知らされた事といえば名前と住所、顔写真ぐらいの最低限のデータだけだ。

「私だって不満が無いわけじゃ無い。だが、執行部の中で厄介者扱いされている我々にとつてこれは起死回生のチャンスなんだ」

そう言うとう隊長は前に座る二人に頭を下げた。それに二人は迷うように目を合わせるが、小さくため息をして微笑を浮かべる。

「…分かりましたよ。ただし、任務が終わったら一杯奢ってくださいよ」

納得出来ない事はある。それでも彼は目の前の隊長を信じてみようと思った。それを聞いた隊長は『すまん』と小さく応えた。

(いつその事、彼がマフィアのメンバーとかならこの後味の悪さは無くなるのに…)

そんな願望を抱きつつ、再びキーボードを叩き始める。どんな決心をしようか一般人と思える少年に危害を加える気分の悪さは消える事は無いのだった。

「それで、今日はどこに行きたいんだ？」

様々な視線を感じながら蓮は狂三にそう問いかける。わざわざこんな風に散歩したいという理由で自分を連れ回しているとは考えられない。狂三には何が行き先があると考えた。

「蓮さんをデートにお誘いした実の理由は次の季節のお洋服を選んで欲しいと思いましたの。女は先を見越して行動しなければなりませんのよ」

秋物の服を選ぶだけなら自分には必要ないのだが、男に『似合う』と言われる服を買いいたいという心は理解出来る。この暑さでも次の季節の事を考えて行動しなければならぬとは厳しい世界だなと感じる。

「そうか、じゃあ行き先はブティックだな。狂三の気に入った店を選んでいいぞ」

狂三はそれを聞いてハツとなる。彼女はその台詞を見栄を張った言葉と感ぜず、『オシャレをした自分を見るには金の糸目はいけない』と脳内で勝手に変換されて思い込む。実際、蓮はそういう意図も含めて言ったのかは謎なのだが。

「わ、分かりましたわ！蓮さんあなたの心を奪う至高のお姿を見せてご覧にいれましょう！」

緊張と決心の混ざったような様子でそう宣言する狂三。そう言われても蓮はオシャレに対して専門的な知識を持つてはいる訳ではなく、現在着ているこの服も似合ってはいるものの何か細かいポイントを意識しているというわけでもない。

「え？あ、ああ期待しておくぞ？」

急に張りきり始めた狂三に困惑しつつも楽しみにはしていると答える。それを聞くと満足そうな様子で周囲を見渡し、店を探す。買い物というのは店を探すところから…そんな言葉が脳裏に浮かんだ。

じつくり歩いた結果、最終的に狂三が選んだ店は大きなビルにある

店でそれほど大きくない場所だった。だが、店の名前が金色に縁取られていたところや、店頭に並んでいる服を見れば高級感を感じる事が出来る。

入店してみると高そうな服が綺麗に並んでおり、それには店の商品に対する心遣いが感じられた。

店内には蓮と狂三以外の客もいたが、二人とは年齢が違う大人ばかりで同年代など一人もいない。全ての店というわけではないが、ブティックはこのような高級商品を扱う店でそこがただの服屋との違いであり、成人も迎えてないような子供が来る場所ではないのだ。

思いがけない小さな客の入店に店員はもちろん、他の客からの視線が集まるが狂三はそれを気にする事なく好みの洋服を探し始める。

「では着替えてきますわ。楽しみにして待っていてくださいまし」  
気に入った洋服を見つけた狂三はご機嫌な様子でそれらを持って試着室へと入っていく。数分後、着替えた狂三が姿を現わす。

トップスは濃い青でその上に生地綺麗な薄茶色のトレンチコートを着ており、太もも位置のフレアスカートと色を合わせる黒タイツ、そして膝上までのニーハイブーツと秋らしさが見事に表現されていた。

「季節感を表したつもりですが似合っていますか？」

「ああ、似合ってるよ。そんな服を着ていたら裏路地に連れ込んで襲いたくなるぐらいにな」

「ふふ、似合っていると受け取っておきますわ」

見せつけるようにその場で一回転する狂三。純粹に楽しんでいる彼女を見ると最悪の精霊『ナイトメア』だなんて考えられない。

褒められて嬉しくなったのか、狂三は着ていたら服を側にいた店員に預けて次に着る服を探しに行く。

狂三にもこのような女の子らしいところがあると感心していると、視界の端に二人の定員がいるのに気がつく。顔を向けてみるとこの店の店長らしき三十代の女性とその後ろに控えている二十代の女だった。

「何か自分に用でしょうか？」

何かを言いたそうな顔をしていたため、会話の始まりを自ら開く。それを聞いた店長の女性は申し訳なさそうな、言いにくそうな様子で話し始める。

「その…とても申し上げにくいのですが…当店は…」

それだけ聞いて店長が何を言いたいかを理解できた。この店はそのらにある普通の服屋とは違い、商品洋服にかけてある値札には安いとは言えない額が書いてある。そのため金を持ってなさそうな少年少女に遊びの感覚で商品に触ってほしくないのだろう。

海外ではストレートに言われることだが、お人好しの日本人には言いにくい内容だ。それを察した蓮は懐からブラックカードを取り出す。思わぬ物の登場に二人は目を丸くした。

「彼女が気に入った物はちゃんと買うつもりです。それ以外に何かを不安なことはありませんか？」

「す、すみません！あのレディに似合いそうな秋物の服を全て持って来て！」

後ろにいた店員にそう指示すると、彼女は慌ててどこかに行ってしまう。それを見て少し罪恶感を感じていると狂三が新たな服を持って帰ってくる。その後、狂三のファッションショーはしばらく続き、結局試着した全ての服を購入しカードにある住所に送ってもらう手筈となった。

ブティック以外に幾つかの買い物をし終わった時の時刻は丁度昼頃だった。昼食をとるために二人はレストランへと向かった。そこは街やビル群の景色が広がるテラスに座席があり、食事をしながら景色を見れるという計らいになっていた。

「いい景色にいい料理…素晴らしい場所を見つけましたわね」

「俺もそう思うよ」

向かい合って座る二人のテーブルには洋食が並んでいる。それをマナー良く上品に食す狂三だが、それに対して蓮の腕は止まっていた。

「あら？…どうか致しましたか？」



「いや…プライベートでこんな風に誰かと食事するなんて真那と士道たち以外ではそうそう無いと思って」

心配そうに聞いてくる狂三に苦笑いの顔でそう答える。すると、狂三は不満そうに頬を膨らませる。

「もう…わたくしの前で真那さんのお話はしないでくださいまし」

「ああ、そういえばずっと追われてるんだっけ？」

思わぬ地雷を踏んだせいで拗ねる狂三。そんなに狂三を可愛いと思いつつ腕を動かしていく。この時間がもう少し続く…そう思っていた。

「よし、仕掛けるぞ」

車内で執行部からの刺客である部隊の隊長が隊員にそう指示を出す。それを聞いた隊員は少なからず動揺している様子だ。

「確かに今は目標の動きは止まっていますが…今ですか？」

「顔を隠し、強盗を装って二人を連れ去る。車はここに停車させていつでも出れるように準備しておいてくれ」

その他の細かい計画を伝えると、整備の終わったハンドガンを手を持ち軽く構える。その時、拳銃のセーフティーをオンにする。

「銃にはセーフティーを掛ける。万が一にも死傷者を出すなよ」

「目撃者も多くなりますが、大丈夫なんですか？」

「後始末は執行部がしてくれる。俺たちは死人を出さない事に気を付けていればいい」

命令の内容に異議がない他の二人はせつせと準備を進めていく。言われた通りに銃は発砲出来ないようにした後に出し帽をかぶる。

「準備が出来たな？行くぞー！」

運転手以外の三人は車のドアを素早く開け、統率の取れた動きでレストランに突入していった。

—————

「全員そこを動くな!!」

優雅な昼食はその怒鳴り声で中断させられた。レストランに目出

し帽をかぶった三人の人間が拳銃を持って入ってきたからだ。それを見た一般客は恐怖の声を上げ、その場に大人しくなる。それは店員も同様だった。

三人の内の一人が銃口を店員に向けて『金を出せ』と脅す。他の二人は客が妙な動きをしないか見張っているがその視線は蓮と狂三の二人に集まっていた。普通の客は怯えていたのに対して、二人は食事を中断していたものの恐怖など欠片も感じさせない様子で浮いていたからだ。

「お、おい!!そこの男と女!こつちに来い!

それに不気味さを感じつつ、仲間が金を奪ったのを確認した二人はあくまで偶然を装って蓮と狂三の腕を掴んで連れて行く。抵抗らしい抵抗をせずにされるがままに連れて行かれる二人。彼らが座っていた席に置かれた料理の皿に万札が数枚挟まっていた事に気付いた人物はこの場にはいなかった。

車に詰め込まれた蓮と狂三は少しの間揺らされた後、廃ビルへと連れてこられてその一室に両手を縄で後ろに縛られていた。現在、目の前では自分を拉致した四人の男が疲れた顔をして休んでいる。

蓮のすぐ隣には自分と同じく、腕を拘束された狂三がいるがやはり恐怖を感じている様子もなく目を閉じ身体を自分に預けていた。

「この後、別部隊に彼を引き渡して任務は終わりだ。みんな良くやつてくれた」

隊長が他のメンバーに労いの言葉をかける。それを聞いても蓮は欠伸をするなど余裕の様子だ。それを見た隊員の一人が眉を顰める。別に痛に障ったという訳ではない。この状況でそんなに余裕でいられる事に疑問を感じたのだ。

その隊員は蓮の前まで歩いてくると、しゃがんで話しかけてくる。

「君は…この状況でどうして余裕でいられるんだ?」

「俺はあんたらが別に怖くないからだよ」

投げやりといった様子で答えられる。それを聞いてさらに疑問が深まった。先ほどの隊長の言葉で殺されないということは分かるが、

それでもその余裕は異常だった。

「その具体的な理由を教えてくださいませんか？」

「もう、お前たちは詰んでいるから」

それを言うと同時に巻かれた縄が千切れて両腕が自由となる。その手には半透明のナイフが握られており、それを目の前にいる隊員の太腿に勢い良く突き刺す。

「うぐあああっ!!」

不意をついた痛みに叫び声を上げてその場に膝をつく。その声で視線が一気に蓮に集まる。蓮はそのまま相手の首に腕を回して盾にするように拘束した。

「こいつーよくもっー!」

それに一番早く反応した隊員がホルスターから銃を取り出して隠れてない顔に狙いを定めて引き金を引く。だが、弾丸は発射されずに引き金の重い感覚だけが指先から伝わってくる。彼らは拳銃のセーフティー安置の解除をこの状況で忘れていたのだ。

そんな決定的な隙を蓮が逃すはずなく、拘束している隊員のホルスターから銃を奪い慣れた手つきでセーフティー安置を解除、銃を構えている隊員の足元に二発の弾丸を撃ち込む。

「うぐあー!」

手に持った銃を床に落とし、その場に蹲る。それを確認した後、拘束した隊員を他の隊員に投げ飛ばして床に倒す。当然、その隊員は自分ののしかかる隊員を退かして立ち上がりとするが、床の影から生えた白い腕に手を掴まれてそれは叶わなかった。

「な、なんなんだ…これは…」

目を見開いて自分の異様な状況を把握する。だがすぐにそれと同じ大量の手が顔、腕、足を掴んで床に押し付けられる。他の二人も同様で身動きが取れなくなり、三人は地面に広がった影の中に沈んでいく。

「な、ナイトメア…最悪の精霊がなせ…」

その腕の正体である赤と黒の霊装を纏う狂三を見た隊長は、信じられないとばかりに数歩あとずさるがすぐに壁に背中が当たる。目の

前には霊装を纏う狂三と彼女に甘えられる蓮の姿があった。

「なんだ…お前は…何者なんだ…」

うわ言のように呟く隊長も手足を掴まれて、影の中にゆっくり沈んでいく。そんな彼を真っ直ぐ見据えた蓮は静かに言った。

「エレン・メイザースからのメッセージはしつかりと受け取った。俺に平穩はないという言葉。…ご苦労だったな」

それが彼の最後に聞いた言葉だった。

「…」

「すまないな。俺のせいで狂三まで巻き込んでしまつて」

「いいえ、気にする必要はありませんわ。わたくしも時間を補給出来ましたし」

夜十時、室内をオレンジのランプが照らすこの状況で蓮は狂三に謝罪を述べた。狂三は黒のランジェリーとブラだけの悩ましい悩殺姿でベッドに寝転がっていた。蓮も下にズボンを履いているだけで上半身は裸で白い肌を堂々と見せている。

「わざわざこんな島国にいる俺に部隊を差し向けるなんて、ご丁寧なことです…」

呆れたと言った様子で自身も狂三のいるベッドに寝転がって添い寝する形となる。今日一日は色々とおつて精神的に疲れた。だが…

「あら、今日はまだ終わってませんことよ…」

妖艶に微笑む狂三が指で顔をくいと上げると、自分の唇をゆっくりと近づけてくる。今日はまだ終わってない…つまり、これからは夜のデートだという事だろう。

互いの唇が近づいていき、一つになる…その瞬間。

近くに置いてあった携帯端末の着信音が雰囲気壊す。それが不快だと分かる顔をする狂三を優しく撫で、腕を伸ばして端末を手中に収める。しばしの間、ランプ以外の白い光が室内を照らす。画面を数秒見た蓮はため息を一つした後に端末の電源をオフにして元の場所に返す。

「…また、何も知らない凡人からの厄介ごとですか？」

「一緒に食事しただけで何が契約相手だよ…」

話の内容を隠すつもりは無かった。彼女は全てを知っているのだ、今のメールも何が書かれていたかなど予想出来ただろう。蓮はそんな人間の汚さに悲しいののような悔しいような表情を浮かべる。狂三はそんな蓮を胸元で優しく抱きしめた。

「狂三…？」

「もう隠す必要はありませんわ。わたくしはあなたの心を知っているのですから…」

女性の身体の柔らかさと甘い香りを感じる。そして狂三のその言葉は抗う意志すら起こさせない誘惑と魅力に満ち溢れていた。その空間にいる蓮の両目から涙が溢れ出す。

「う…うう…ああああ…!!!」

一度溢れ出す出した涙は止まらなかつた。まるで今まで流さなかつた分が今出てくるように…。

「もう…一人は嫌だ…孤独はもうたくさんだ…！力が…力が欲しい…何も失わないで済むほどの力が…」

「なら…わたくしを愛してくださいまし…」

その一言に蓮は涙で濡れた顔をゆっくり上げる。狂三はその顔の頬を優しく撫でて心を奪うような笑みを浮かべていた。そこから継がれる言葉は洗脳のように頭に響き渡る。

「あなたの孤独はわたくしが埋めましょう…癒しましょう」

「狂三が…癒す…」

「あなたとわたくしが組めば…この世に勝てない存在はありませんわ。全てが…わたくし達にひれ伏します…」

「狂三がいれば…全て守れる…」

その反応に狂三は笑みで唇を歪める。今、自分は土道や十香よりも彼の心に一番近い存在だと確信したからだ。ただ同じ時間を過ごしただけではなくしつかりと心を理解して上げなければ依存させる事は出来ない。

「さあ…わたくしと一つになりましょう…」

狂三はさつき水を差されたキスをするため、再びゆつくりと近づいていく。そして、暗闇の中二つの影は一つとなった。それは二人の心

の何かを現したものだっただけのことも知らない。

## 43話

「うふふー。もつとこつちに来てもいいんですよお？だーりん」

「お、おい…美九…」

戦艦、ヘフラクシナスにあるとある一室。そこには美九が隣に座る士道の腕にしがみつきラブラブなアプローチを行い、狼狽させていた。

そして、机を挟んだ反対側には不機嫌そうな様子でそれを見る琴里と、呆れたとばかりの様子の子の蓮が机に頬杖をついて座っている。

「相変わらず仲がよろしい事だ。見てるこつちも疲れてくるよ」

「ふふー、もしかしたら蓮さん、嫉妬してますう？一番はだーりんですけど、ほつぺにチュウウぐらいならオーケーですよお！」

「…気持ちは嬉しいけど、遠慮しておくよ」

何があつたのかと思うほどの上機嫌な様子の子の美九に思わずため息が出る。これが『黙っている方が美人』などと言われた人間に向ける顔とは思えない。横目で隣を見ると隣に座る琴里の堪忍袋の緒は切れる寸前だった。

「…そろそろいいかしら、美九」

「はいー？そろそろって何ですかあ？」

能天気な美九のその一言に、琴里の中の火山が大爆発するのを感じた。どうやらそれは正解らしく、琴里は机をバンッと叩く。

「だからっ！あなたがだーりんと一緒じゃなきゃ嫌って言った事情聴取よ！ちゃんとその条件を呑んであげたんだから、こつちに集中しなさいー！」

溜まっていた不満を吐き出すように吠える琴里を宥めて落ち着かせる。それを聞いた美九は『ああ、そういえばそうでしたねー』と目的を思い出してくれた様子だ。それが演技に見えないのが恐ろしい。「今から司令官殿がする質問は結構重要な事で、俺も気になるんだ。分からないところや言いたくない事は答えなくていいからちゃんと答えてくれよ」

「蓮さんも気になる事ですかあ？分かりましたー、遠慮なくどうぞ」

「あなたの天使の事とか気になる事はたくさんあるけど、聞きたい事はあなたを精霊にした存在の事よ。あなたはもとは人間だった…これに間違いは無いわね？」

琴里の質問に美九の顔が苦しげな顔を浮かべる。その頃は美九のファンや事務所の人間に裏切られて失望していたのだ。それを思い出させる琴里の質問は褒められた行為では無いが、それを理解していても聞かないやいけない事がある。

「だ、大丈夫ですよー。もう過去も含めて前に進むって決めたんですから」

美九は蓮の顔を見た後、そう言ってぎこちない笑みを浮かべる。どうして自分にそんな笑みを向けられたか理解出来なかったが、もしかしたら自分も気付かないうちに彼女を心配するような顔をしていたのかも知れない。

大きく深呼吸して美九は自分が精霊となった瞬間を話し始めた。すべてに裏切られて自殺しようとした瞬間、姿にノイズのかかった謎の存在が現れて紫色の宝石のようなものを美九に与えたという。

それで美九は誰にでも言うことを聞かせられる声を手に入れたらしいのだが、琴里とは違う箇所が一つあった。

「美九、あなたは精霊の力を手に入れてから破壊衝動に襲われたりしてない？」

「破壊衝動…ですかあ？いえ、あまり記憶にありませんけどお…」

琴里は精霊の力を使いすぎると強い破壊衝動に襲われるという。人間から精霊になった美九も同じなのかと思っただがそれでも無いらしい。その質問を聞いた土道は琴里の顔を見る。

「琴里、それは…」

「もしかしたら、私と同じ事が起きているかと思っただけどどういう事かしらね。適性の問題か…それとも私は実験体モルモットだったか…。どちらにしろいい迷惑よ」

忌々しげに言う内容に土道も強く拳を握る。しかし、そんな中で蓮だけは感情的にはならなかった。

別に琴里の身に起きた事に無関心というわけでは無い、そのへファ



ントム」という存在に不思議と敵意を抱けなかったのだ。

人間を精霊にする謎の存在：なぜ人を精霊にするのかも不明だが、そのおかげで人間への見方は歪んだものの美九はそれを乗り越えて今日まで生きてくる事が出来たというのも事実なのだ。

（いや、結果論で考えるのは止めよう。司令官殿の存在を軽視された事を怒らなきゃな…）

美九の時はそうだったが、琴里の時にはそのようなパターンが当てはまるとは思えない。そもそも本人の意志を無視して人間を辞めさせる事もかなり外道の行いなのだ。

「ちよつとお！私を無視して考え込まないでくださいよお」

置いていかれている状態を察して、美九は不満の声を上げる。それを聞いて三人は意識をこちらに戻した。士道は苦笑いを浮かべながら美九に謝り、琴里は仕切り直すように小さく咳払いをする。

「ごめんなさいね。でもまだ始まったばかりだから、これからしっかりと話を聞いていくわ。さて、手始めにどんな検査をしていこうかしら」

ニコツと微笑む琴里。その笑顔を見た美九はぎこちない笑みを浮かべるのだった。

美九の検査中、蓮は通路にある長椅子に寝転んで意味なく天井を見ていた。脳裏に浮かぶのは先月の出来事であるDEMとの衝突の一件だ。あの時、自分は間違いなく十香に腹部を貫かれて殺された、その痛みは忘れられない。

だが、次に目覚めたのはあの世ではなくヘフラクシナスの医務室であり物事が解決した後だった。琴里に聞いたところ、変貌した十香は士道が再びキスした事で元に戻ったという。

その時の映像を見せてくれと言っても、『あら？他人が接吻をしているのを見る趣味でもあるの？』と言われ煙に巻かれる。

（一体何を隠しているんだ？みんなは…）

士道にも聞いたのだが、おかしな様子で『悪いけど、琴里からその事を言うなって言われてて…』と言われて分からなかった。さすがに

そんな士道に無理を言っただけで聞き出そうという気持ちは出てこない。

「あんたがそんな顔するなんて、何考えていたのかしら？」

樽をすればなんとやら。聞き慣れた声が聞こえて、目を開けると寝ている長椅子の横に腰に手を当てた琴里が立っている。無防備なところを見られたなと思いつつ身体を起き上がらせる。

「随分と早かったな。もう美九の検査は終わったのか？」

「それに関しては令音達に任せてあるわ。私はそんな専門的な知識を持っていないから」

身体を伸ばしながらふーんと適当に返事をする。艦長も大変だが、解析官も大変なんだなと思っていると琴里はある事を切り出してきた。

「…一応聞いておくんだけど、あんた、もう隠している事はない？」

その一言に眉をピクリと動かした。コソコソ探るならまだしも、本人の目の前で『隠し事はないか？』と聞くとは随分と大胆な行動だ。

「隠し事って言われても、俺についてはもう話したと思うが…」

「あんたの事もそうだけど、もう敵となったDEMに関しては何か有力な情報はない？こうなったらもう会社の守秘義務とかは関係ないでしょ」

正直に言ったならば、この回答はNOだ。例を挙げるなら琴里達には自分の本名とエレンとの関係も話しておらず、この事を知っているのは士道と十香だけで二人は約束をしっかりと守っている。だが、ここでの回答は…

「…ああ、もう隠している事はない。DEMについても普通の社員だったから極秘情報とかも知らなくて」

嘘をついた。琴里の事は信用しているが、ここは組織へラタトスクのヘフラクシナスでありこの戦艦すら組織の一部分に過ぎない。組織全体の事を知らずに話すのは危険だった。

「…そう、分かったわ。悪いわねそんな生臭いことを聞いて」

「気にしなくていいって、敵の仲間だった人間から情報を聞き出すのは正しい行為だし」

そう言う蓮は立ち上がり、欠伸をしながら通路を歩いて行く。琴里はその背中を悲しそうな目で見て言った。

「…人が人を信じるって…どうしてこんなに難しいのかしらね」

夕日のオレンジ色が暗くなる空を照らしていた。そんな空の下で人気のない住宅街を蓮は歩いていった。その後、美九と土道、それに十香達を加えてワイワイと騒いだ後、自分の自宅への道を一人で進む。

蓮が足を止めた時、目の前には家というより屋敷と表現するのが正しいと言える自宅が建っていた。しかし、暗くなりかける空と明かりが一つもない光景では小さな子供が見た時に『お化け屋敷』…なんて言われてしまいそうだ。

そんな我が家の門を通り、玄関のドアの鍵穴に鍵を挿入しガチャリと鳴らして解錠する。ドアを開けると目の前の通路に暗闇が広がっている。その暗闇から小さな獣が姿を現わした。

獲物を狙うのに重宝する二つの鋭い目、歩くたびに鳴る鈴の音は自分の存在の強調であり、その両手足には鋭い凶器が仕込まれている。「出迎えてくれたのか。ありがとなミルク」

その言葉に応えるように『ニャー』と鳴くと、ちょこちょここちら側に走ってくる。その際の振動で首につけた鈴から音が出るのが愛くるしかった。

ミルクを持ち上げ、頭を撫でると心地よさそうに目を細める。それを見て小さく微笑みながら闇が広がる廊下を見つめた。

目の前の闇を見ていると心の底から何かがこみ上げてくるのを感じる、それはイギリスにいた頃は感じた事のないある想いだというのは理解していた。

「寂しくなんかないさ…一人は慣れてる…」

まるで意地を張った子供のような口調でそう呟く。抱えられているミルクは蓮の頬を伝う一筋の水をペロペロと舐めた。

十月の半ば、街中はすっかりハロウィンムードで染まりきっている。そんな街を歩きながら蓮は、日本人の宗教観について考えていた。

海外のキリストやイスラム教などは唯一神などと言って、一つの神様を信仰するのが多いのだが、日本人は初詣（仏教）、クリスマス（キリスト教）と様々な行事を祝い多くの神様を信仰している。

「真面目な日本人なのに、なんでそういうところは雑把なのかねえ」そんな疑問を考えていると、ある事に気がつく。今、自分が立っているのは街中の一本道、周りに人影はなく次の曲がり角は約二百メートルほど先だ。

「…そういえば最近、本気で走ってないな」

ポツンと小さな独り言を呟くと、その場で足を伸ばしてアキレス腱を伸ばす準備運動を行う。それを六秒ほどすると、まるで爆発のような瞬発力で走り出した。フォームは競技に出ている選手ほど美しくないがもしその道のトレーナーが見ていたらな話しかけてくるであろう速度だ。

そのスピードであつという間にゴールである曲がり角に到達するのだが、その瞬間に右側から何かが飛び出してくる。

「ちいっ!!」

走っているのは自分で、もし怪我をさせた場合、非があるのもこちらだ。それに素早く反応した蓮は地面を強く蹴り宙を舞いそれを飛び越える。

そのまま空中で二回転し、今度は体操のスカウトが来そうな見事な着地で地に降り立つ。後ろを見ると車椅子に座った五十代ほどの外国人男性とそれを押す二十代半ばの女性だった。車椅子を押す女性はサングラスをかけているため顔全体を見る事は叶わない。

「おやおや、急に出てくるからビックリしたよ。君、怪我はないかい？」

（日本語…？）

驚いたというわりには落ち着いた様子の男性の口から出てきた言葉は意外にも流暢な日本語だった。英語で謝ろうとしたのだが、面を

食らってしまった。

「あ、ああ、こつちが飛び出してきたのにすみません」

「いやはや、驚いたよ。この国では君ぐらいの若者はあんな身のこなしが出来るのか。若いとはいいものだな」

さっきのジャンプを見ても不思議に思わずにいてくれたらしい。その事についてはどのように弁明すればいいか分からなかったのでもとも助かった。男性は次に車椅子を押す女性に視線を向ける。

「リサ、君も怪我は無いかい？」

「はい、問題ありません」

簡潔に答える淡いノルマンデックブロンドのリサと呼ばれた女性。その顔を見た瞬間、蓮の脳裏にある人物が浮かんだ。その人物とリサの面影が重なったのだ。

「エレン…いや、カ…レン？」

無意識にその名を呟く。だが、すぐにそんな筈がないと頭を振って考えるのを止める。自分の記憶の女性と目の前の彼女を重ねるなど失礼過ぎることだ。

「ふむ、もしかして彼女が君の知り合いの誰かと似ていたのかい？」

そんな大きな声のつもりは無かったがどうやら聞こえていたらしい。立ち話もどうかと思うので歩きながら話を始める。

「えっと…俺の母親の妹さん…関係上は叔母つてなるのかな。その人の名前がカレンっていうんだけど、その人と似てるって…」

もう一度見てみても本当に良く似ている。だが、この世には同じ顔の人間が三人か四人はいるというし他人の空似だろう。

「血は繋がってないし、結構変な人だったけど…色々な事を教えてくれて、大好きな人だったかな。『大きくなったらカレンと結婚する！』なんて事も言ったことあるぐらい…」

思い出のエピソードを語り小さく笑う。自分でも不思議なぐらい言葉が出てきた、自分の事を語るのは余程信用した相手だと決めている筈なのだ。話を聞いた男性は『そうか』と目を伏せた。

「そのカレンという女性は今も元気なのかい？今はどう思っている？」

「今は…どこか知らない遠い場所に言ってしまったから分からない。出て行く時も何も言ってくれなかったけど…現在も大好きって気持ちが変わってないし…寧ろ恋してるって言ってもいいぐらいに…」

そこまで言いかけた時、今歩いている道の曲がり角から人影が飛び出してぶつかる。蓮は踏みとどまり尻もちをつく事はなかったが、ぶつかった相手はそうはいかず姿勢を崩す。

その瞬間、一瞬だけ「バスター」を展開して相手の倒れる時間を遅らせ、その隙に背中に腕を回して支える。

「ふう…危なかったって十香!？」

「おお!こんなところでレンと会うとは、すごい偶然だな!」

なんと腕に支えられている人物は、クラスメイトであり妹のように可愛がっている十香であった。まるで計画されていたような出会いに互いに目を丸くする。

「ん?もしかして知り合いだったのかい?」

「学校のクラスメイトっていうか、それ以上の関係というか…」

車椅子の男性になんと説明したらいいか迷っていると、十香が飛び出してきた道から追いかけてくるように土道が走ってくる。彼も蓮の顔を見て驚いた様子だった。

「蓮、なんでこんなところに?後ろにいる人達はもしかして知り合いか?」

土道のその一言でハッと気付く。十香を受け止めるために「バスター」を一瞬とはいえ使ってしまった。ほんの一瞬だったが、この至近距離だと自分の腕が変わったのと、十香を支えた青い手を見られた危険があった。

チラリと後ろを見ると男性と目が合う。すると、男性は優しく微笑みを浮かべる。なんとも言えない反応だが、セーフだったと考えていいだろう。

「ついさっき、十香みたいに道に飛び出したらぶつかりそうになっただけ。それが縁でここまで一緒に歩いてきてた。車椅子を押している人はリサって名前で、この人は…えつと…」

一緒にいた理由を説明し、紹介も行おうとするがよく考えると男性

の名前を聞いていなかった。その事を話している時に思い出しフリーズする。それを察した男性はクスクスと笑いながら自己紹介をした。

「私の事はボールドウィンとでも呼んでくれ。君たちは随分と仲が良さそうだがどのようなにして出会ったんだい？」

「それは四月の入学式の時に」 「半年前に私が起こした空間…」

せっかく蓮がどこにでもあるありふれた出会いを言おうとした時、十香は正直に語ろうとしてしまい、二人は慌てて十香の口を塞ぐ。十香もそうなつてタブーだと気が付いた様子だ。

「あついや、十香が言おうとしてるのはシエルター内で出会ったという事でっ！」

「そ、そうだ！初めて会った時、投げ飛ばされたとかなど絶対でないぞ！」

士道と十香は必死に弁明(?)をするが、はっきり言って隠し事がある雰囲気を感じさせるものだ。それを聞いてもボールドウィンはニコニコと微笑ましいものを見るような表情のままだ。

追求してこないのは助かるが、ここまで来ると気味の悪さを感じてくる。

「なるほど、さぞかし運命的な出会いだったようだね。…十香さん、君は今幸せかい？」

なんとも急な質問に目を丸くする十香だったが、蓮の右腕と士道の左腕を掴むと自分の胸元に引き寄せて笑顔を浮かべた。腕を掴まれている二人は十香の元に寄せられる。

「うむ！強くて優しい二人のおかげで私は幸せだ！」

少女漫画の一コマにありそうな光景で十香はそう答える。幸せなのは嬉しいがこうはつきり言われるとんだか気恥ずかしさを感じる。どうやら士道も同じ心情らしく嬉しいような恥ずかしいような顔だ。

その時、町中に不快なサイレンの音が鳴り響いた。空間震警報…それは精霊の出現を示しており、士道と蓮は互いに目を合わせた。

「えつと…ボールドウィンさん、ここは危険です！すぐに避難を…」

「ああ、そうしよう。君たちは?」

〈フラクシナス〉と合流しようとする時に何とも返答に困る質問がきた。さすがに真相を言うわけにはいかずに土道は言葉に詰まる。しかし、それを蓮がフオローするように答えた。

「彼の自宅にある三百万の高級ソファアを運んでからシエルターに逃げますのでお気にせず」

まさかの返答に空いた口が塞がらない思いだ。こんな命に関わるという時に何を言っているのだろう、そもそも普通の一般人の家に三百万のソファアなどあるわけがない。

それを聞いたボールドウインはさも可笑しいように笑う。

「フッフ、そうか、では気をつけて。また会える幸運を祈ってるよ。蓮くん、十香さん、土道くん」

そう答えるとりサに命じてきた道を引き返していく。それを見ながら蓮はある疑問を感じていた。

(あの人の前で土道の事を名前で呼んだか…?)

別に意識していたという訳ではないが、土道の事を名前で呼んだか覚えは無かった。しかし、意識していたわけではないのもしかしたら名前を呼んでいた可能性はある。

「おーい、何してるんだよ」

声の聞こえた方を見ると、少し先に土道と十香が立っておりいつまでも来ない蓮に声をかけていた。それを見て疑問を抱えながらも二人の元へ行く。



## 44話

「それで、彼らに異常は？」

「見る限り、今のところ問題ないかと。あの子も含めて……」

三人と別れてすぐに交わされた車椅子を押すリサとポールドウィンとの会話。それはここに二人以外の他者が居ても、空間震警報のサインレン音に飲み込まれて聞こえないだろう。リサの報告を聞いた「そうか」と呟きポールドウィンはふうと息を吐く。

「私は近いうちに世界中のヘラタトスク支部に彼の搜索を命じるつもりだったが……彼を確保したのがヘフラクシナスで……五河司令で良かったと思っている。もちろん、彼女が幸せそうだったことも……」

心から安心したように言うポールドウィンの示す“彼”が誰を示しているのかりサは理解していた。かつて自分の子どものように愛し、知識を与え……惜しくも救えなかった存在だ。

「カレン、彼に挨拶していなくていいのかい？ 私の言った通り、君を憎んでないなかっただろう」

「……今のあの子に私は必要ありません。すでに私を乗り越えて先に進んでいます」

無表情に機械的に分析するリサ……いや、カレンを見たポールドウィンは、それが照れ隠しだとすぐに看破するが、何も言わずに笑みを浮かべる。そして、脳裏に先月の出来事がフラッシュバックする。

霊結晶<sup>セフィラ</sup>が反転した十香、複数の天使を顕現した土道、そして、青い破壊の光に包まれたれジェイク……。それを見た途端、背筋が凍りついたような感覚を感じたのは今でも覚えていた。反転した十香をねじ伏せた有無を言わせぬ圧倒的力と死ぬ瞬間までその者を見惚れさせる破壊の光。

ポールドウィンは拳を強く握る。あの瞬間は自分にとって決定的瞬間だったのだ。

「私は精霊達を救うため、アイクとは別の道を進んできたつもりだったが……彼にとっては私もアイクと同じ、自分を傷つける害ある者なのだ……。結果、私はアイクの『手助け』をしただけだった……」

救いたいと思っても、戦わせる事しか彼を活かしてやれない。ポールドワインはそんな自分がとても悔しかった。

「なんか、雰囲気出てるな…」

「……………」

（フラクシナス）に回収されて、空間震の発生現場に送られた二人は現在、廃園となった遊園地を歩いていて。今の時刻が暗くなり始める時刻というタイミングもあってなんとも言えない不気味さがあった。

そんな雰囲気当てられて怯んでいる土道に対して、隣を歩く蓮は周りをキョロキョロと見渡している。自分と違ってこんなのに怖がるとは思えなかったが、その反応も妙だった。

「さつきからどうしたんだ？周りを見渡して…」

「いや、懐かしいと思つてな。今年の六月辺りに来たことがあるんだよ」

土道の質問に”懐かしい”と返す。当然だが、土道は蓮を連れてこんな廃園の遊園地などに来たことがない。それを疑問に思っていると本人がある方向を指差した。

「土道、あれを見てみる」

言われて見てみると、そこにはアトラクションの一つである観覧車があつたのだが、錆びて脆くなった所為だろうかそれは崩れて、なんとか元の形が何なのか分かる程度の物だった。そんな残骸を示して小さく言う。

「俺が暴れた痕跡だ」

「……………」

意味の分からない土道には、そんな言葉しか出てこない。そんな反応をされても十分に承知とばかりの顔をする。

「詳しいことは話せないけど、まあ、大きな世界の裏で起きたとある事件とだけ言っておこうか」

「意味の分からない事ばかり言っておいて、結局話せないのかよ…」

『お喋りの時間はそこまでよ。そこから先に霊波反応があるから、蓮は……までね』

耳につけたインカムから琴里のストップの声がかかり足を止める。対話は士道の仕事である事と精霊の警戒心を解くため接触は士道一人となる。もし、精霊が好戦的な性格だった場合を考慮して、蓮は付近で待機となっていた。

「それじゃあ頑張れよ。お前の腹の風通しが良くなりそうになったら助けてやるから」

「いつも思ってたんだが、もうちょっとマシな励ましはないのか…？」  
頬を痙攣させ、そんな悪態をつきながら一人で進んでいく士道には見た感じ緊張などを感じさせない様子だ。それを見て内心ほくそ笑みながら近くのベンチに腰を下ろす。もし、士道が危機的状況となったら琴里からGOの命令が来るためそれまで暇な状態だ。

しばらく待っていると、空から風をきる音と、V字に展開された編隊の影が見える。精霊を狩るため、ASTの部隊が到着したのだ。

それでも蓮は動かず、琴里からも何の連絡も来ない。それから少しして、銃声のような音も微かに聞こえてくる。

そうなっても、蓮は世界から切り離されたかのように動かず、ベンチに座って目を閉じてじっとしている。だが、突如目を開き、ベンチから立ち上がった。

そして、暗くなりかける空をじっと見つめていると、その視界内に箒に跨った女性が入ってくる。

橙色と黒で作られた霊装、髪と瞳は宝石のような翠色で頭の上にはつばの広い先端の折れた円錐の形をした帽子を被っている。そんな魔女のような格好と、スラツと伸びた手足、豊満なバストと女性の理想を現したようなプロポーションが特徴的だった。

その”精霊”は高速で飛んでいたため、すぐに視界から出て飛び去ってしまい、その後を追ってASTも同じ方向に向かっていく。

「随分とムードに合っていた精霊だったな」

一度見たら忘れられないであろう姿を見て、出てきた感想はそれだった。その後、帰ってきた士道と合流してこの場を去った。結局、霊力の封印は失敗、嫌われた理由は本人すら不明との事だった。

DEMインダストリー、英国本社ビル。世界各国に支部のあるDEM社の脳とも言える場所の一室に、一人の男が椅子に腰掛けていた。サー・アイザック・レイ・ペラム・ウエストコット、このDEM社の長の人物で、彼の前にはDEM社最強の魔術師<sup>ウィザード</sup>、エレン・メイザースが立っていた。

「それでエレン、例のものは出来たかな？」

「はい、ただ、衛星カメラの映像から現像したので画質が落ちてしまいました……」

そう言つて持つていた資料から、数枚の写真を渡した。写真を見たウエストコットは唇の端を上げる。

「なんだ、しっかりと綺麗に撮れてるじゃないか。彼が」

その写真には巨大な上半身だけの青い巨人と、その前に立つ少年の姿が映っていた。九月に反転した十香に腹部を貫かれ、瀕死の状態から蘇生した蓮の姿だ。

「エレン、これは我々が彼に命を与えた時から望み、求めていた姿だ。それをエリオットは……あの裏切り者はしてくれたよ！」

顔に手を当て、笑い出すウエストコット。エレンも顔には出さないものの恐らくウエストコットと同じ気持ちだろう。気持ちを落ち着かせたウエストコットはニヤリと笑いながら続ける。

「枯れ木に実った果実は熟し始めている。もう少して完成するだろう」

「今、あの子身柄はヘラタトスク＜が確保しています。本人の意志を無視しても奪還すべきと私は考えますが」

ウエストコットは喜んでいたが、現在、ジェイクの身柄はDEMではなく敵であるヘラタトスク＜機関にあった。まずは身柄を確保せねば取らぬ狸の皮算用となってしまう。だが、ウエストコットは顔を横に振る。

「いや、ヘラタトスク＜は我々にも都合よく力の成長を促してくれている。しばらくはそれを邪魔する気はないさ、まあ、我が社の”皇帝”が居なくなるのは少なくない損害だが、それは何とかしよう」

今のヘラタトスク＜のおかげでこの姿に至つたと予想したウエスト

コツトは、身柄の奪還を急がないと決めた。エレンもそれには異議なしと伝える。

「いいかいエレン。最後に勝ち、全てを得るのは我らだ。その時をゆっくりと待とうじゃないか」

危ない橋を渡らずに勝利する。そのタイミングをウエストコツトは濁った瞳で見極めていた。

「ふあああ…」

次の日の学校の教室で、蓮は無防備な欠伸をしていた。今の教室に士道の姿はない。昨日の夜遅くまで新たに出現した精霊、『七罪』について緊急対策会議が開かれており、それに出席した士道は遅れてくるとの事だった。

「それで…シドーはいつ来るのだ？」

一緒にいる十香が不安そうな様子でそう聞いてくる。十香は朝からこんな様子で蓮の側を離れずにいた。今までずっと共にいた人間が居なくて落ち着かないらしい。そんな十香の手を握って優しく微笑む。

「十香、俺だけじゃあ…不安か？」

「い、いや、そんな事は無いぞ！ただ…二人と一緒に居ないと、何とも言えない気持ちになるのだ…」

優しさと少しの悲しさを混ぜたような顔を向けられた十香は、慌てた様子で内心を吐露する。どうやら士道と蓮は二人で一セットとして十香の精神安定の役目を果たしているらしい。どちらが欠けてもダメとは、不安定なことだ。

そんな十香を後ろから抱きしめて包み込んだ。十香は顔を赤くして驚いていたが、暴れることなくすぐに身を委ねる。

「こういう風にされるの、好きだったよな。大丈夫、俺がいるから…」  
その言葉が不安の氷を優しく溶かしていく。なぜか十香はこのようハグされるのが好きだと理解した上の行動だ。それだけを見れば微笑ましい光景なのだが、ここは教室で当然ながら他の生徒もいる。

現在の季節は秋で、これから寒くなっていくのと逆のアツアツの会

話にクラスの男子生徒は、手のひらから血が出んだかりに強く拳を握る。

「おうおう、アツアツだね！お二人さん！」

「公衆の面前で見せてくれるねえ！」

「歩いている時、後ろに気をつけなよ！」

チンピラのように絡んできたのは、亜衣麻衣美衣の三人娘だ。この三人は十香と仲が良いのは知っていたが、このタイミングで来るのは驚いた。

「てゆうか、今日は五河くんは一緒じゃないの？」

十香と一緒にいる土道が居ないのは、やはり気になるらしい。やはり、この教室では自分、十香、土道はセットで見られているのだろう。

「ああ、土道はかなり遅れて…」

亜衣の質問にそこまで答えたところで、教室の扉が開いて鞆を持った土道が入ってくる。それを見た蓮は眉を顰めた。琴里から土道が遅れてくるとメールが来たのは数分前、それから準備を整えて来るとしたら早すぎる。

一応、〈ヘフラクシナス〉を使ったという可能性はあるが、学校に向かわせるために使うなど、あの小さな司令官は許可しないだろう。

「おおー待ってたぞシドー！用事はもういいのか？」

土道の姿を見た途端、十香は笑顔で寄っていく。すると、土道はにっこり微笑み何かを言った後、手にした鞆を放って目の前の十香の豊満な胸を鷲掴みした。

『はっ？』

これには見ていた蓮も、十香も一瞬、土道が何をしたのか理解出来なかった。しかし、十香はすぐに顔を真っ赤に染める。

「な、なななっ！何をするのだーっ！」

パニックになった十香は、土道の顔面に向けて拳を放った後に逃げ込むように蓮の腕の中で戻ってくる。まあ、放った拳は、素早く避けられてヒットはしなかったのだが。

「い、いきなり何をするのだ！その…ビツクリするではないか…」

言葉の勢いが後半弱々しくなったが、抗議の言いながら蓮の身体に

抱きつく十香。密着しているせいで、今度は蓮が大きな果実の感触を味わう事になるのだが慌てたり、動揺することは無い。そして、土道はというと…

「いやー、やっぱり天然物は揉み心地がちがう」

反省してる様子皆無で、手をワキワキと動かしていた。そんな土道の前にあの三人娘が立ちはだかる。

「ちよつと五河くん、何してんの!」

「犯罪なんだけどそれ!」

「ムシヨで臭い飯を食う覚悟は出来てるかあ!」

セリフだけで分かるほど、ブチ切れた状態の亜衣麻衣美衣が出てくるが、土道は亜衣の手を取ると、彼女を壁に押し付けて至近距離で耳に息を吹きかける。亜衣は気の抜ける声と共に床に崩れ落ちる。

続いて、麻衣と美衣のスカートの裾を掴むと、そのまま捲り上げてその中身を晒す。二人は悲鳴を上げながら慌ててスカートを押しさえて無力化された。

「ははっ、二人共良い下着じゃないか。今度は俺が選んでやろうか?」  
セクハラ百%の発言に二人は顔を真っ赤に染める。ファーストキスを済ませているとはいえ、チェリーボーイの土道にしてはあり得ない行動だ。いつそ他人だと言われた方が納得出来る。

奇怪な行動をする土道を見ると、偶然目が合い、こちらを値踏みするようにジロジロ見た後に向かってくる。蓮は十香を逃がすように自分から離れさせる。

周りが注目する中土道は蓮と対面するほど近くまで来ると、右手の中指で蓮の顎をくいと上げて、顔をジロジロと観察する。そして、一言放つ。

「へえ、よく見ると綺麗な顔してるな。俺好みだ」

まさかの発言に朝の教室に驚きの声が響き渡る。その声の元は見ていた生徒のものだった。

「五河くんって両方いけるタイプだったの!」

「尾木ちゃん!!まさかの新カップル誕生よ!!」

「いやー!私の…私の神代くんがああ!!」

一瞬にして世紀末な状況となる教室。しかし、当の本人である蓮は、狼狽を顔に出すことなく『こいつ、何言ってるんだ？』と理解出来ない心境だった。

とりあえず、顎に触れる土道の指を払い、小さくため息をした後に土道を見る。

「聞かれたくない会話をしたいなら、普通に誘え。まったく…」

自分はそう解釈したと言わんばかりにそう吐き捨てる、土道と共に教室を出て行く。十香と折紙はその二人を最後まで見つめていた。

—————

教室を出た二人は、蓮が先を歩く形で誰も居ない校舎の端へ歩く。今の時刻がホームルーム開始五分前というのもあり、他の生徒とすれ違う事もない。

「……………」

二人の間に会話はなく、コツコツと足音だけが聞こえる状態だ。蓮は目的の場所への曲がり角が見えた瞬間、チラリと背後を見て土道がついてきているのを確認すると、全力ダツシユでその曲がり角に入る。

土道はそれに驚きつつ、蓮に遅れて角を曲がる。それと同時に首を掴まれ壁に押し付けられる。

「きゃっ！」

土道の口から女っぽい悲鳴が漏れる。目を開けると、蓮の顔が近くにあった。その表情は十香に向けていた優しげなものとは違う、敵意の籠ったものだ。

「どういうつもりだ五河、十香に手を出すとは覚悟してると受け取っていいな？」

「ず、随分と積極的な行動だな。とりあえず手を離してくれないか、神代」

答えた瞬間、土道の顔の右横に何か突き刺さる。目を動かして見るとそれは光が反射する短刀で、金属質な籠手に覆われた蓮の腕がその剣を持っていた。

「ダウトだ。普段お前は俺土道の事を下の名前で呼ぶんだよ。この状況の



せいで俺の言った名前をそのまま受け止めたな」

どんなに嘘をつこうとしても、予想外のハプニングが起こると素で反応してしまうものだ。蓮は追いつめるこの状況と嘘を餌に相手の素の反応を誘った。すると、土道は何かが可笑しいように笑い始める、やはり土道本人では無いと確信すると、手を離して距離を取る。「ははははっ！嘘を使って相手を見抜くだなんて、賢いところも”私”好みだわ！」

笑い声は土道だったが、その後の声は土道では無い女性の声だった。蓮は右手に持つ剣を逆手に構えて戦闘の態勢をとる。だが、偽士道はそれを見ても余裕の笑みを崩さない。

「いいわ、あなたには”私”を見せてあげる」

その瞬間、土道の身体が光り輝きその形を崩す。光が収まった頃、目の前には魔女のような特徴的な帽子を被り、豊満な身体と橙色と黒の霊装を纏った二十代過ぎほどの女性が立っていた。その女性を見て、蓮は目を見開く。

「ふふ…もしかして、お姉さんに恋しちゃったあ？」

甘ったるい言葉と共に、まるでグラビアアイドルのように前かがみになり豊かな胸を強調させる。十代後半の少年ならば、動揺させるのに十分な威力のある光景だが、蓮が驚いたのはそこではなかった。

「お前は…昨日見た…」

思わず出たその言葉を聞いた女性は、さつき浮かべていた顔と違う憎々しい表情でこちらを見ていた。

「昨日見た…じゃあ、あなたも見たのね…私の…本当の…ッ！」

「…何の話をしてるんだ？」

「あなたの人生も滅茶苦茶にしてやるわ…！タダじゃおかないんだから…！」

蓮の質問に答えずに女性の身体が光を放ち、反射的に目を瞑ってしまう。次に目を開けた時、女性の姿は幻のように消えていた。

「名前、七罪…だったっけ。厄介な事になりそうだな」

それを予測するのに、コーヒー一杯分の時間も必要なかった。

## 45話

「どこに行ったんだ、七罪は…」

蓮は授業中の校舎内を駆け抜けて七罪を搜索する。なぜあのよう  
な敵意を抱かれているかは不明だが、『人生を滅茶苦茶にしてやる』と  
言った。もしかしたら、土道の時のように自分の姿を真似られて暗躍  
やれたら最悪だ。

「もう昼時か…」

常時動き回ったら相手も派手な行動を起こしにくく、あわよくば七  
罪本人を発見出来ればと思ったが残念ながら上手くいかなかった。  
手元の端末の時間を見ると、あと五分も経たずに昼食時にチャイムが  
鳴り響く時間だった。

「一人にしちやっただけど、十香は大丈夫か…」

朝に七罪の化けた土道と共に教室を出てから、一度も教室には戻っ  
ていない。七罪の事も重要だが、十香を放置しておく事も出来ず一旦  
様子を見に教室に帰ってみる事にした。

弁当やお金を持った生徒と数回すれ違い、目的地の教室のドアの前  
まで来ると、中から言い争うような声が聞こえてくる。ドアを開ける  
と、土道が亜衣麻衣美衣の三人プラス十香、折紙に言い寄られて困っ  
ている状況だった。

「れ、蓮！一体どうなってんだよ!?俺は今来たばかりだったのに…」

訳のわからないと言った様子で、状況説明を求めてくる土道を見  
て、一瞬七罪の可能性を考えるがそれをすぐに捨てる。彼女が自分の  
撒いた問題の中に戻ってくるとは考えられないし、自分の姿を見て問  
う様子に”怯え”や”動揺”を感じなかったからだ。

「お前の言いたいことは分かっている！とりあえず一緒に来い！」

蓮は土道の腕を掴むと、無理矢理教室から連れ出す。それを見たク  
ラスの女子の数名が歓声を上げていた。

「逃げんなゴラアあああ!!!」

土道が教室を出る瞬間、女の声とは思えない怒気の籠った声が背後  
から聞こえてきた。教室を出た後、しばらく走りある程度離れたとこ

ろで腕を離す。本人は相変わらず困惑した様子だ。

「どうなってんだよ…。俺は今来たばかりだったのに…」

「簡潔に説明すると、それはお前に化けた七「発見。土道です」

会話を遮って乱入してきたのは、隣クラスの耶具矢と夕弦だった。二人は何やらご立腹の様子だったのだが、それは二人が学校指定のスクール水着を着ているという前では霞んでしまいそうなものだった。「ようやく見つけたぞ！早く我から奪い取ったパンツを返すがいい！」

「えつと…耶具矢、夕弦もだけど、何でスク水なんだ？今、十月の真ん中だぞ」

怒りの理由も気になるが、とりあえず一番気になる二人がスク水の理由を聞いてみる。すると、二人とも蓮が奇怪な事を言ったかのような反応で互いに目を合わせた。

「先ほど説明したであろう！いきなり土道に私のパンツを奪われ、夕弦は『透けブラフェチなんだ』と言われて水をかけられたのだ！」

「説明。その後、蓮が来て『エロっぽくて良い』と言った後に耶具矢の太腿と、夕弦の胸を中指でなぞって行きました。本音を言うと、少し嬉しかったです」

「何言ってるのよ夕弦!?!」

夕弦のまさかの発言に声を上げる耶具矢だが、すぐに敵は土道だと思いついてキツと睨む。当然だが、蓮はそんな事してないし、さつきまで校舎内を駆け回っていたためそんな事する時間もなかった。

「無視。体育着が無くて焦りましたが、置きっ放しにしていたプールバックのおかげで命拾いしました」

「さあ…この恨み、今度は御主らが受ける番だ！土道！まずは貴様のパンツを脱がす！」

「呼応。その上、夕弦が霧吹きで全身をしつとりさせた後、蓮の全身を二人で擦ります。泣いても辞めてあげません」

復讐の炎を瞳に秘めて、ジリジリと迫ってくる耶具矢と夕弦。とりあえずこの場を離れようとする土道の袖を一人の女性が掴む。それはクラス担任である岡峰珠恵、通称タマちゃんて親しまれてる人物

だったのだが、彼女は今にも泣き出しそうな顔をしていた。

「い、五河くん…あ、あんな事しておいて…もうお嫁にいきません…せ、責任とつてもらいますからあ…!」

「え、ええ!」

数段ステップを飛ばした発言に土道は驚きの声を上げる。続いて、『ひっ』と近くの曲がり角から怯えた声が聞こえた。今度は何だと思いなながら顔を向けるとそこには土道の友人の殿町が顔を出していたのだが、まるで怯える小動物のように身体を震わせていた。

話を聞かずとも面倒くさい香りがプンプンする。

「まったく、人の姿でやりたい放題だな…」

「お、おい!あれ!」

小さく愚痴を吐き捨てた途端、土道が廊下のある方向を指差す。何だと思い、視線を向けると、そこには土道が立っていた。普通の人間なら混乱する状況だが、蓮にとっては蛇の尻尾を掴んだ気分だ。

偽土道は二人を挑発するようにニツと笑うと廊下を歩いていく。

「ま、待て!何なんだお前は…」

それを見た土道は、耶具矢と夕弦を振り切って偽土道の後を追って走り出す。しかし、そんな事情を知らない八舞姉妹は大人しく逃してはくれず、逃げる土道を追って走り出す。

「逃がさぬぞ土道!自分自身の愚行を悔いるがいい!」

「追跡。人は自分の罪から逃げられません」

全速力で走る土道だったが、相手は風の精霊だ、その差はぐんぐん縮まる。このまま捕まって振り出しに戻るのは面倒だと判断した蓮は、二人が踏むであろう廊下の床のポイントに、氷の膜を張らせた。二人はそれを見事に踏む。

「ぬわっ!」

「きやつ!」

漫画の効果音で表現するなら『ツルツ』というのがピッタリな見事な転び方をした二人は、姉妹仲良く床に倒れる。その二人に内心謝りつつ、蓮も土道を追っていく。

スタートダッシュが遅れてしまったため、逃げた偽土道は捕捉出来

ないが、追いかける土道を追いかけて追跡した。まるで二人を弄ぶかのように校舎内を逃げた後、最終的に逃げ込んだのは逃げ道のない屋上だった。

「何がどうなってんだが…」

屋上に通じる扉の前で苛立った様子で言う蓮。話が見えないのは自分も土道も変わらない。そんな状態でマラソンをさせられたのだから愚痴りたくもなる。だが、それはこの扉を開ければ分かる事だ。

イライラをぶつけるように勢いよく扉を開ける。広がる青空の下、目の前には目の前には土道が立っている。ただ、問題点を上げるとしたら彼が二人並んでいたことだろう。

(どっちが偽物だ…?)

偽物を追ってきたので、どっちかが本物だというのは分かっているが、こう並べられると違いがまったく分からない。まるで鏡から抜け出してきたような姿に迷ってしまう。

「蓮…！聞いてくれ！偽物はこいつで…」

「違う！本物は俺だ！俺達が今まで追って来たのはこいつだ！」

土道が言う台詞をもう片方が被せて相手が偽物だと主張する。二人とも姿だけでなく、仕草、声までも土道だった。両方とも自分の事を本物だと言い張る。

「こいつの言う事は信じちゃダメだ！本物の五河土道は俺だ！」

「何言ってやがる！本物は俺だ！」

七罪がボロが出る事なく、平行線を辿るこの状況。そんな時、蓮が腕を組んで何か悩むような声を出した後、二人の土道を中心に円を描くように周りを歩き始めた。

これには本物も偽物も頭上に？を浮かべる。そして、二周ほど二人の周囲を回った後、蓮は口を開いた。

「この世界は腐っている。俺がそう気づいたのはいつだっただろう…いや、俺はその世界に生まれ落ちる運命を選んだ時、すでに理解していたのだ…。我が手中に眠る…」

訳の分からない事を言う蓮を見て、片方の土道が驚いたような表情をしていたが、隣にいたもう一人の土道がその台詞をかき消すような

大声をあげ、それを聞いて身体をビクリと震わせる。声を出した土道は頭を押さええて慌てた様子だ。

「何でお前がそれを知ってるんだよ?! 処分したはずなのに!!」

土道のその反応を見て、蓮は小悪魔のような笑みを浮かべるとその手に青色のナイフを出現させ投擲する。それは、声を上げた土道とは違う、もう一人の土道の足元に突き刺さる。その土道は驚いて数歩後ずさった。

「お前が七罪だな。ようやく見つけたぞ」

「な、何言ってるんだよ…。俺は本物の…」

そこまで言いかけたところで、蓮は指をパチリと鳴らした。その瞬間、音響手榴弾に匹敵する音が屋上に響き渡り、その土道を黙らせた。二人の土道が、耳を塞ぐほどの音だったのだが、蓮本人は苦にも感じてない様子だ。

「言い訳なら後で聞いてやる。お前が偽物だと思った理由は俺が最初にここに来た時の反応だった。その時の第一声から、お前が偽物じゃないかと思っただよ」

それを聞いて、七罪は最初の行動を思い返す。あの時、仕草も声も完全に本物を真似ていた。そんな自分にミスなどある筈がなかった。

「あの時、お前は土道の台詞に被せるように本物だと主張した。それが不自然だったんだよ」

そう言われ、土道はその時を思い出す。あの時は、自分の声で本物だと言っただからとても驚いたものだ。だが、それ自体に特別おかしなところはなかった。その疑問の答えるように蓮は続ける。

「姿だけでなく、声までも同じだった土道はさぞかし驚いただろう。そんな土道が、相手の言葉に被せて自分が本物だと言えるはずが無いと思っただよ」

それを聞いた七罪は何も言い返せず、土道は『あつ!』と納得したような声を出す。あの時の土道には姿が同じという状況で少なからず動揺しており、声までも一緒という驚きを超えて何かを言えるような精神的余裕は無かった。

それだけでも十分すごいと思った土道だが、蓮はまだあると言わん

ばかりに人差し指を立てた。

「ただ、それだけじゃイマイチ確証が無かったから、もう一つ”検査”をしてみた」

「ああっ…そうだ、お前、あれをどうして知ってるんだよ！高校に入る時に捨てたのに！」

七罪に自分の声を出された時以上に動揺する土道を見て、プツと笑ってしまう。あの時話した文章は、思春期をこじらせた土道が勢いのまま書いた内容の一節だったのだ。前に琴里にコツソリ教えてもらい、それを覚えていた。

「七罪、お前はこの文の事を知っていたか？もし、知っていたとしても、さっきの土道のように叫びたくなるタイミングを理解していたかな？」

凶星とばかりに七罪は息を詰まらせる。土道はこれ以上言つて欲しくないところで声を上げた。だが、自分はそれが分からず、ただ驚いた顔をするしか無かった。まあ、蓮から見たら、いつ叫んでもおかしくないような内容なのだが。

言い換えると、蓮は七罪の『他人完璧に真似る』という自身の能力のプライドの高さを利用したのだ。

「まさかと思うが…蓮、他に知ってたりとかしないよな」

「…さあ、どうだろうな」

それを聞いた瞬間、土道は絶対に蓮を敵に回してはいけないと本能的に理解した。蓮は身体をクルリと回して、七罪の化ける土道に身体を向ける。

「まあ、言いたいことはこんなもんだ。他人を真似るのは一流でも、役者としては二流だったな。…さて、反論を聞こうか”七罪”」

そう問う蓮の雰囲気は、カエルを絞め殺す蛇の雰囲気似ていた。七罪は拳を握り、歯を噛み締めて言い返せない悔しさを味わっていた。しかし、そんな七罪の内心の最も多くを占めていたのは憎しみではなく、『すすすぎる』という感想だった。

「あり得ないわ…。私の完璧な変身をそんな風に見破るなんて…！」

手で顔を覆い、女性の声でそう言い空を仰ぐ土道。指の隙間から壊

れたような笑みが見え、その言葉には怒気が感じられる。それでも、姿ではなく、言葉で本物を見極めた蓮を評価している様子だった。

「七罪……どうして俺たちに変身してこんな事を……」

土道がそう聞いても、まるで聞こえてないかのように無視をする。七罪は顔を前に向けると、蓮の事をジツと見つめる。土道の姿で見られている事と、瞳孔が開き、狂ったような瞳に少なからず恐怖する。「私の秘密を知った者を、放っておくわけにはいかないわ……。でも……あなたを私の物にして……あなたの姿で街を歩いたら……さぞかし気分が良いと思うわ……」

「何を言ってる……?」

七罪は右手を掲げると、虚空から箒型の天使が現れて手に握られる。握られると同時に箒の先端が放射状に開き、輝きを放つ。すると、七罪が土道の姿から、朝見た見事な美女に変貌した。

「このまま終わると思わないで……!絶対にあなた達に一泡吹かせてやるわ!」

睨みながらそう言うと、箒の先端から再び光が発せられ、それに二人は目を瞑る。次に目を開けた時、七罪の姿は当然のように無かった。土道と蓮は互いに目を合わせ、これから来る嵐を予感した。



## 46話

七罪が学校に現れてから五日後の土曜日。七罪の存在を知る土道と蓮は現在、土道宅でソファに座り、暇を持て余していた。

あれ以来、七罪は姿を現わす事はなく、へフラクシナスの観測に引っかけたないのが理由だ。

「こうも何もないと、かえって気味が悪いな」

「相手から何もなくても、警戒はしておいて損はないぞ」

それだけ聞けば、おかしい箇所は何もないのだが、言った本人が猫じやらし片手に飼い猫と遊んでいるのでは力など抜けてしまうだろう。

緊張感のない様子に土道はため息をつく。

「なんでそんなに余裕でいられるんだよ、七罪は何かするって宣言していったんだぞ」

「俺たちは姿を自由に変えられるという七罪の能力を知っている。となると、五日前のように派手な行動をしてくる可能性は低い。美九の時のように手下や仲間がいるとは思えないし、それでも何かしてくるというのなら…」

蓮は猫じやらしを操り、ミルクを自分の膝の上まで誘導すると、そのまま捕まえて腕の中に収める。ミルクは暴れることなく大人しく捕まった。

「何か小細工を挟んでくるはず、その策を破れば後は楽だ。七罪を地面に這わせることが出来る」

表現は物騒だが、確かに、七罪には十香や狂三のように強大な戦闘力があるとも考えにくい。姿を隠しているのがその証拠だ。ただし、その能力を生かした作戦で来ると考えるのが予想だ。

「そうは言っても、そもそも、七罪が何かしてくるって決まったわけじゃあ…」

土道がそこまで言いかけたところでリビングのドアが開き、我らの司令官、琴里が入ってくる。ここは琴里の家でもあるため、彼女がリビングに来るのはおかしい事ではないが、その表情がいつもと違う、

緊張したもものなら話は別だ。

「可愛い顔が台無しだぞ。学校の男に告白されて、それを教えに来たのか？」

「…ええ、そんなところよ。ただ、相手は女で、七罪って名前なんだけど」

その名を聞いた途端、土道の顔が驚愕に染まり、蓮は目を細める。琴里は手にした封筒を差し出す。それには住所や郵便番号は綴られておらず、直接投函したらしい。そして、封筒の下部には七罪と記してある。

「朝、ポストに入ってたわ。七罪からのラブレターよ。へフラクシナスで調べてみたけど、危険物の類ではないわ。まあ、絶対の保証というわけではないけどね」

「相手が人外である以上、そうなるか。…俺が開けるよ」

そう名乗り出たのは、右腕をへバスターに変貌させた蓮だった。差出人が物体を変化させる精霊である以上、へフラクシナスの検査結果を過信するのは危険だ。そのため、封筒を開けた瞬間に爆発などが起こる事を考えて、この腕で開封することにした。

この腕なら開けた瞬間に、指先が吹き飛ぶ程度の爆発であれば問題は無い。

左手で封筒を持ち、右腕で開封する。封筒中に入っていたのは数枚の写真だった。十香や琴里を始めとした、精霊六人、さらに、折紙、亜衣、麻衣、美衣、殿町、そして担任である珠恵ことタマちゃん。合計十二枚。

そして、短い文章が書かれたカード。それにはこう記してあった。『この中に、私がいる。誰が私か、当てられる？誰も、いなくなる前に。』

七罪』

「…これは、七罪からの挑戦状かな？」

新たに呼んだ令音とともに、十二枚の写真を囲む。どの写真も被写

体の目線がこちらを向いてなく、盗撮だと一目でわかる。

「このメッセージは、この十二人の中に七罪がいるって意味か？」

「そのまま受け取るとそうなるわね」

そうになると、七罪は姿形を天使で変えて潜んでいるだろう。なるほど、自分の能力を利用した勝負内容だ。そして、気になる文がもう一つ。

『誰もいなくなる前に』どういう意味なんだ？」

土道が蓮の疑問を、そのまま言葉にしてくれた。この中に七罪が潜んでいるのは分かったが、この文の意味が理解出来ない。

「…多分、何らかの方法で復讐するって意味じゃないか？俺たち、だいぶ恨まれてたし」

「だからって、みんなを巻き込むのは…」

自分が辛い目にあうのはまだいい。それは自業自得ということでも納得がつく。だが、関係無い十香や折紙たちを巻き込むのは土道の心に、言葉に出来ない苦しみを生み出した。

「…こうなった以上は仕方が無い。シン、君はここにいるメンバーとデートをして、違和感が無いかチェックしてもらおう」

「え？ここに…全員と…ですか？」

「見た目で判断できない以上、そうするしかないか。頑張れ土道」

そう言った途端、土道が『えっ？』という声と共にこちらを向いてくる。そんな反応をされると、何か変なことを言ったか不安になるが幸い、土道がすぐに理由を話してくれた。

「俺一人でやるのか？二人でデートするんじゃないか？」

「…お前一人だよ。その弱々しい雰囲気で、相手の油断や言い間違えを誘うんだ」

土道は自分に強そうな雰囲気があるとは思っていないが、男である以上、そんなにはつきり言われて受け流すことが出来るわけでもない。ムツとした土道は、何か言い返してやろうと考えるが、蓮はさらに続ける。

「俺一人ならまだしも、二人一緒だなんて七罪から見たら『警戒してる』と言わんばかりだろ。だから、土道一人で、この手紙の事すら忘

れた気分で接してくれればいい。会話や映像はヘフラクシナスが記録してくれるだろうし、思いついたように、昔話でもすればいいよ」「え？そ、そりゃあそうかもしれないけど……」

「繰り返すようだが、この手紙の事を本気にしてないって様子を相手に見せる。ボロを吐かせるっていうより、掠めとる気持ちでな」

土道に会話術をレクチャーし始める蓮。土道もさつきまでの気持ちを忘れて頷いている。それを見た令音は、隈だらけの目でジツと見つめた後、何か感じたように話した。

「…もしかして、今、君は楽しんでるのかい？」

それを聞いた途端、蓮は土道への言葉を止め、令音の方へ顔を向ける。その後、肩を竦めて小さく笑った。それは、まるで自虐のようにも見える。

「そう見えた？こんな状況で不謹慎だ、とでも説教する？」

「…いや、そんな事は無いさ。この状況で君はとても頼りになる存在だからね」

どうやら本当に気になっただけらしい。令音のその質問を聞いて、無意識に自分が高揚していたのを感じ気分を落ち着かせる。すると、腕を組んでいた琴里が茶々を入れるように会話に入ってくる。

「それにしても、ずいぶんこういうのに慣れてるわね。あんたの腹黒さが伝わってくるわ」

「よく『嘘はダメだ』って言う人間がいるが、それは大間違いだ。嘘は社会で生きていくのに必要不可欠なものなんだよ。そんな社会に生きていくんだったら、それを見破る術を身につけるのは当然だよ」

それを聞いて、目の前にいる蓮は元DEMの人間だった事を思い出す琴里。あのような会社で生きていくのだったら、嘘の一つや二つを見破る能力を身につけねばならないだろう。

「とにかく、七罪はこの中の誰かに入れ替わっているだろうな。その一人を当てるには、会話でボロを誘うしかない。その入れ替わった奴の安否も気になる。土道、頼むぞ」

「ああ…絶対に見つけ出してやるよ」

今の状況をまとめ、これからやるべき事を示す。その途中、横目で

琴里の姿を見てみる。一応、琴里も写真に写っている人物……つまり、七罪の可能性のある人物でもあるのだが、見ている限り、いつもと違う様子は感じない。

とはいえ、七罪の変身能力に関しては、まだ分からない事が多い。姿形だけでなく、過去の記憶や癖という所まで真似る事が出来るというのなら、思い出話で見つけ出すのも絶望的となる。

それでも、何もしないよりマシだと信じている。行動しなければ何も生み出さないからだ。

「…今はそのようにするかなさそうだ。七罪の発見はシンに任せるしかない。琴里も、七罪の正体が分かるまで〈フラクシナス〉には入れられるわけにはいかない」

「まあ、当然の処置ね」

自分も容疑者の一人だと自覚しているため、異議なしと答える琴里。その潔さも怪しいと思わない訳ではないが、今ここでそんな事を考えても無意味だろう。

このようにして、七罪への挑戦は始まった。十二人から、たった一人の偽物を探し出す戦いが……

夕日が沈み、闇が支配する空。もう秋となり太陽は夏の時ほど、長く輝くことは無くなった。その空の元、蓮は精霊たちの住むマンションの廊下を歩いていった。

昨日届いた七罪からの手紙、その調査のため、士道はいつも作っている精霊達の食事が作れなくなってしまうた。なので、士道に変わり、蓮が夕飯係を引き受けたのだ。

精霊達の食事を作るのが仕事なのだが、これには容疑者である十香達と接触出来るメリットもある。こうすれば、いきなりデートに誘ってきたというほどの唐突感もなく、自然に接することも出来る。

しばらく歩き、ある部屋の前で足を止める。その部屋のインターホンを押して数秒後、ガチャリという音と共に扉が開く。

「くく……よくぞ参ったな！我らの部屋へ！」

「歓迎。待ってました」

そこには、可愛らしいパジャマを着た耶具矢と夕弦が、左右非対称のポーズをとりながら立っていた。

「悪いな、急にこんな事になって」

「気にするでない。我への奉公と供物を忘れぬのは感心するぞ」

「期待。どんな料理か楽しみです」

キッチンに立ち、包丁で食材を切る蓮と、ソファに座りテレビを見ている二人とそんな会話が交わされる。料理に使われる食材については、ヘフラクシナスに料理と必要なものをすでに伝えてあり、冷蔵庫の中に用意してもらっていた。

着々と料理が出来ていくなか、耶具矢がテーブルの方を見てみると、皿に盛り付けてあるキュウリの浅漬けがあつた。どうやら、今回の料理は和風のものらしい。そして、それを見た途端、耶具矢の心に悪魔が囁いた。

ソファを音を立てずに立ち上がると、足音を立てずにそっとテーブルに近づき浅漬けに手を伸ばす。いわゆる『つまみ食い』と呼ばれる行為なのだが、それを見ている夕弦は注意する事なく見守る。

耶具矢の指が一つのキュウリを掴む瞬間、まな板と包丁がぶつかるトントンという音が止まった。耶具矢も指先がビクツと震える。

「…すぐに出来るからな」

そうとだけ言うと、再びその音が再開する。それは意味もなく放たれた言葉とは思えなかった。耶具矢はどうすれば良いか助けを求めるように夕弦に視線を送る。その意図が伝わった夕弦は顔を横に振った。

それを見た耶具矢は、まるでさっきの動きを巻き戻すようにゆっくりとソファに戻っていった。

「ムシャムシャ、何これ！すごく美味しいじゃない！」

「美味。とても素晴らしいです」

二人は白米を食べながら賞賛の言葉を送る。テーブルには浅漬けを始め、アサリの酒蒸し、鶏の照り焼きなど白米が進む料理が並んで

いる。その料理をおかずに口に白米を頬張り続けており、喉を詰まらせないか心配になるほどだ。

とはいえ、作った料理に美味しいと言ってくれるのは素直に嬉しい。だが、悲しいことに今日はそれを見守ってられない。七罪を暴くため、色々と揺さぶらなくてはならないのだ。

「食事中に悪いが、耶具矢、前に出した数学の課題はやったな？ノートを持ってきてくれ」

その瞬間、耶具矢の箸の動きがピタリと停止する。続いて、困ったように視線が宙を泳ぐ。この反応を見て、大方察しがついた。

「えっと…そんなのあったっけ？」

「連立方程式のやつだよ。この時間で採点するから早く」

『えっと…』や『その…』など、必死に言い訳を考えている耶具矢。そんな彼女を見ている夕弦は必死に笑いを堪えている。この反応もいつも通りでおかしな点は無い。

「まあ、やってないのなら仕方が無い。デザート抹茶ケーキは無しに…」

「ストローップ!!違うの!サボったんじゃないやなくて、忘れてたっていうか…事故なの!!」

「指摘。忘れてたのは事故とは言わない気がします」

「夕弦は黙ってて!!」

慌てる耶具矢、それを掻き回す夕弦といつもと違う様子はない。容疑者は十二人とはいえ、七罪は一人なのだ、一心同体のこの姉妹の片方と入れ替わったのなら、もう片方がその事に気付く可能性がある。

そのリスクを考えると、七罪はこの姉妹のどちらかは避ける確率は高いだろう。

「分かったよ。提出期限をもう少し伸ばしてやるから。次はちゃんと出せよ」

必死な耶具矢に苦笑いを浮かべつつ、デザート抹茶ケーキをテーブルに置く。それに耶具矢は大喜びだった。

結局、七罪である証拠等を見つけて叶わなかった。だが、いつもとは違う夕飯の時間は楽しく流れていく…。

## 47話

七罪の調査を開始した二日目の朝、士道と琴里のいる五河家に令音と蓮が訪れていた。そこには朝の爽やかな会話など無く、重苦しい空気だけが漂っていた。

「…耶具矢の話によると、入浴し、ベッドに入るところまでは一緒だったらしい。そうになると、夜から朝にかけての数時間だろう。夕弦が姿を消したのは…」

令音の言う通り、夕弦が姿を消した。朝、起きた時にとなりのベッドで夕弦がいない事に耶具矢は気がつき、いくら探しても居ないらしい。

そして、消えた夕弦について何か分かった事があり、令音は尋ねてきたとのこと。

「令音さん…夕弦はどこに消えたんですか？」

「…これを見てくれ」

令音はテーブルの上に端末を展開させる。そのモニターには耶具矢と夕弦の寝室が映し出され、二つあるベッドにはそれぞれ姉妹が眠っている。

「いつの間にこんなものを…」

「…彼女たちに限らず、容疑者全ての部屋に自律カメラを飛ばしてある。誰もいない場所でなら尻尾を出すと思ってね」

「手段を選ばないそんなやり方、いいね。嫌いじゃない」

そうか、とだけ答え、令音は手元のキーを操作し、映像を倍速させる。映像を通常の数度の戻したのは、日が変わる直前だった。

「…そろそろだ、よく見ててくれ」

ほどなくして、時計の長針と短針が十二のところまでぴったりと重なる。それと同時に部屋の中央が歪み、そこから箒のようなものが姿を現した。

「これって…」

「まさか…〈贗造魔女〉…」

「あの箒みたいなものが…」



突如現れた七罪の天使、〈贗造魔女〉<sup>ハニエール</sup>は、先端の鏡の部分を開く。そこが光ったかと思うと、夕弦の身体が光となり、鏡の吸い込まれていった。

「マジかよ…」

今まで様々な精霊の力を見てきた蓮も、驚きを隠せなかった。音も無く夕弦を消した〈贗造魔女〉<sup>ハニエール</sup>は、先端を閉じ虚空に消えていく。七罪からの手紙にあった、『誰もいなくなる前に』という文の意味が理解出来た。

「…このように夕弦は七罪の〈贗造魔女〉<sup>ハニエール</sup>によってさらわれてしまった。おそらく、七罪が入れ替わった『誰か』も同じように…」

「夕弦は…夕弦は無事なんですか!? 七罪に化けられた『誰か』も…」  
そんな事、令音が聞かれても分かるわけがない。よく考えれば分かる事だが、今の土道はその事を聞かずにいられなかった。令音は難しい顔をして、目を伏せるだけだ。

「…無事だと思いたいが、現状はなんとも言えないな」

今のところはそう言うしかないだろう。七罪の天使に関しては分からない事が多い。消された夕弦がどこに行ったのかすら不明だ。その映像を見た蓮は、ため息と共に頭を押さえる。

「…正直に言つて、俺は七罪を甘く見過ぎていたよ。追われるのはあつち<sup>七罪</sup>、追うのは自分たちだと考えていたが、まさか、こんな風に追い詰められるとはな…」

これは、自分のミスだ。大した情報もないのに憶測だけで判断し、夕弦を犠牲にした。気落ちしていると、琴里が仕方ないとばかりに首を横に振る。

「いいえ、これは七罪の天使について詳しい情報を得て、伝えられなかったへ<sup>私</sup>フラクシナス<sup>たち</sup>のミスよ。少ない情報の中でよくやってくれるわ」

その言葉に目を丸くする。琴里はそんな反応に眉を顰めた。

「な、なによ? 変な事が言つたかしら…」

「いや、普段、あまり司令官殿に褒められた事が無いから、妙な気分…」

「ちよつと！人聞きが悪いこと言わないでほしいんだけど！」

強気の状態の琴里からは、このようにストレートに賞賛された事はあまり無い。ただ、されたはされたで違和感を感じるようにもなってしまった。年齢は下でも、立場的には上の琴里からの褒め言葉は複雑な気分させる。

「まるで、私が血も涙も無くこき使ってるみたいじゃない！」

「いや、文句を言う気は無いけど、人類の敵に俺や自分の兄を突撃させてることは冷血非道に見えるだろ」

それに対しての反論が見つからない琴里は、『ぐぐぐ…』と悔しそうにする。それを聞いている士道は、顔を背け必死に笑いを堪えている。そのような状況が、琴里の顔を赤くさせる。

そんな顔を見て、楽しんでいたがある事に気がつく。それは物事の根本的な部分だった。

「なあ…なんで俺と士道は七罪に恨まれてるんだ？」

夕弦の事で頭がいっぱいだったが、それを聞いてそう言えばと思いつく。士道も、出会った十五日の時になぜ怒らせてしまったか分からなかった。

「…初遭遇の時の機嫌数値の下がり方は異様だったね。シン、もう一度聞くんが、何か心当たりはないかい？」

「はい…正直、全くって言っつていいほど…」

「士道はともかく、俺なんて会話をして一分も経たずに激怒されたぞ。言っつとくんが、怒らせるような事は話してないからな。神に誓っついでい」

一分足らずとなると、あれほど怒らせるのは逆に難しいだろう。少し話ただけでここまでの行動に至らせるとは、どのような理由なのか気になる。だが、結論が全く見えてこない。

「それも気になるけど、今は七罪を見つける事に集中しなさい。ちゃんと相手が喜ぶデートをするのよ」

「あれ？確か次は司令官殿の番じゃあ…」

「十一時三十分に、場所は天宮東公園ね！遅れるんじゃないわよ！」

一方的に伝えた後、琴里はリビングを出て行ってしまふ。素直じゃ

ないなど思いつつ、蓮は消えた夕弦の事を考える。七罪は容疑者の一人を消した、これは隠れる七罪からしたら自ら首を絞める行為となる。だが、それをただのミスとは思えなかった。

(何か理由があるな…)

七罪の奇行の理由を今は説明する事が出来ない。だが、それだけで流す事は不可能であった。

その日の夕飯時、精霊マンシヨンの廊下を歩きながらさつきまで一緒にいた耶具矢の事を気にしていた。様子こそ普段と変わらなかつたものの、明らかに無理をしている空元気だとすぐに分かった。

耶具矢には、夕弦は、検査のためヘラタトスク本部に行ってもらっていると言ったのだが、あまりにも苦しい言い訳だ。

「しつかりしろ…俺が動揺してどうするんだ…。それじゃあみんな不安になるだろうに…」

いつもはヘラヘラとしてるくせに、そうしたい時に限って何をしていいか分からなくなる。その事に四苦八苦していると、偶然目に入った部屋番号に足を止める。その番号こそが目的の部屋だったのだ。

その部屋には、海のような青い髪とキラキラした双眸を持つ少女と、その左手に装着された一匹がいた。

「よーし、出来たぞ。昨日は日本食だったから、今日は洋食を作ってみた」

「ふああ…美味しそう…です…」

『相変わらず料理が上手いねー。これはもう一家に一台のレベルだよー』

机に並べられたポークビーンズ、鮭のムニエル、マカロニグラタンなどを見て、四糸乃は目を輝かせ、よしのんは小さな両手を可愛らしくこすり合わせていた。

「い、いただきます…」

『いいなー、よしのんも食べたいよー』

四糸乃は両手を合わせてそう言い、よしのんは羨ましがる。ここま

でに気になった点は特にはない。さらに反応を見るため、もう少しアクションを起こしてみる。

「あと、最近、この部屋に泊まったりと頑張ってるって聞いたぞ。そんな四糸乃とよしのんにご褒美だ！」

そう言つて、お手製イチゴのショートケーキを見せる。精霊とはいえ、女の子らしく、ケーキを見た瞬間まるで神でも見たかのように目を見開いた。よしのんは『そ、それは、女の子を虜のさせる禁断の果実っ！』とリアクションしていた。

「デザートに作つておいたから、楽しみにな」

「あの…いつもすみません…」

いつも蓮の自宅で、甘い物をご馳走になっている四糸乃は、申し訳なさそうにする。とはいえ、蓮自身は甘いものが大好物というわけではないため、特に何も思わないのが真実だ。

「気にしなくていいよ。ほら、冷めないうちに」

申し訳なさそうにお礼を行った後、フォーク、スプーン等を使って料理を口に運ぶ。一口食べるごとに『美味しい』と口癖のように連呼する。そんな四糸乃を、微笑みながら見守る。

「やっぱり、自分の作った料理を美味しいって食べてくれるのは嬉しいな。昔はそうも言ってもらえなかったから…」

「えっ…誰からも言われなかったんですか…？」

『んー、少し違うんだな』と口にして昔の思い出を四糸乃に話し始める。『冷めないうちに』など、言っておいて、食事を妨げているのは自分じゃないかと内心思いつつだ。

「俺のはお…いや、知り合いにとにかく完璧主義な人がいてな。その人に『料理を作れ』って言われて、言われたように作ったんだけど、店に出せる程度の料理を作ったら満足する人じゃなかったんだよ」

「とても厳しい人…だったんですか？」

「…多分、あの人のにとっては“惜しい”や“二番”は失敗や最下位と同じだったんだと思う。結局、文句を言われない程度の料理は作れるようになったんだけど、『美味しい』って言葉は聞けなかったな」

「もしかして…お料理の評論家さん…だったりするんですか？」

普段からそのような仕事をしているのだったら、プライベートでもその手にうるさくなってしまうと予想して、四糸乃は言ったが、蓮は小さく笑いながら首を横に振った。

「いや、どうもそういう仕事をしていたとは思えなかったな。多分、その人も料理は得意じゃなかったと思う」

『何よそれ！自分にも出来ない事を蓮くんにさせて文句を言うなんて酷いじゃない!!』

四糸乃の手に装着されたよしのんがポンポンと怒り出す。そんなよしのんを『もう過去の話だから』といって宥める。

「もし、四糸乃みたいに謙虚に…素直に生きてくれば良かったのかな…」

それは独り言とも言える呟きだった。それを聞いた一人と一匹は顔を見合わせ、四糸乃が気恥ずかしそうに言った。

「えっと…今の蓮さんもカッコよくて…魅力的だと思いますから…その…今のままで良いと思います…」

今の自分を褒められたのは初めてな気がする。そう思い、自分の生きてきた環境の劣悪さを理解できた。それを気づかせてくれたお礼とばかりに四糸乃の青い髪を撫でる。

『ああん、四糸乃だけズルい！よしのんもー』

気持ちよさそうにしている四糸乃を見て、羨ましがるよしのん。苦笑いしながらよしのんの頭も撫でる。

(今のままで良い…か)

この世界で変わるのには難しい、だが、変わらずに在り続けることもまた難しい。なんとも複雑なものだと深々と感じるのだった。

「つ…疲れた…」

「まあ、よく頑張ったな」

深夜となった時刻。土道は力尽きるようにソファにうつ伏せになる、そんな土道を同じソファで雑誌を見ていた蓮が労う。今日、土道は容疑者の一人である亜衣の調査だったのだが、それに麻衣と美衣が加わり長話へ発展してしまった。

土道を忘れたように、三人娘のトークショーが展開され終わった頃には土道の体力と精神力を大きく消費させた。ボロボロの状態で帰宅した土道を待っていたのは、熱い風呂と蓮お手製の食事（デザート付き）であった。

「なんか…：食事の有り難さをもう一度理解した気がする」

「まったく情けない…：とは言わないであげるわ」

キッチンにいた琴里は冷蔵庫から炭酸飲料の缶を二つ取り出すと、ソファに向けて放った。飛んでくる二つの缶を両手でキャッチした蓮は片方を土道に渡し缶を開けて呷る。

「それで、どうだった？七罪だと思っただ奴はいたか…」

「うーん、疑おうと思えば出来る奴はいたけど…：なんとも言えないな」  
やはり、七罪だという確信を得ることはなく、違和感を感じた程度のものらしい。それには、一日に三人の調査をするというハードスケジュールの所為もあるかもしれないが。

その事を考えると、すぐにでもベッドで横になるべきだが、まだ一日は終わってない。

「…時間だ」

蓮のその呟きとともに、リビングにかけられている時計が午前0時となった。おそらく、今回も誰かが消える。辺りに緊張が走る。土道も琴里も、真面目な顔でジツとしている。その空気を壊したのは蓮だった。

「土道!!司令官殿!!」

突如、そう叫んだ蓮は、土道を掴み琴里の側へと移動し、二人を守るように背中に隠れさせる。いきなりどうしたと思った二人だったが、その理由をすぐにでも理解する。

リビングの中央の部分の歪み、そこから箒の形をした天使が姿を現わす。

「天使…：なんでここに…?!…：ッ！まさか!」

容疑者が消えていくなら、琴里もその例外ではない事に土道は気がつく。蓮も鋭い目つきで〈贗造天使〉を睨む。夕弦を吸い込んだ時と同じ、箒の先端部が開き、鏡のような内部を晒すがいつまで経っても

琴里を吸い込もうとはしなかった。

『ふふっ、久しぶりね。二人とも』

その代わりに、鏡の部分に七罪の顔が映りこちらに語りかけてくる。どうやら、本体がいなくとも天使を通して会話などを出来る能力もあるらしい。安全圏から話している七罪はひらひらと手を振り余裕の表情だ。

「七罪……夕弦をどこにやったんだ！」

『あら、せっかく会いに来たのに別の女の話なんて酷いじゃない。彼女は私が預かっているわ、見事私を当てる事が出来たら返してあげる』

「つまり、夕弦は無事なんだな？」

蓮は簡潔に答えろと言わんばかりに声を低くして聞く。七罪はそれに肩を竦めながら『ええ、そうよ』と答える。

『だけど、このゲームで私が勝った場合、消えた容疑者はもう戻らないわ。その代わりに同じ姿、声でそちらの世界を楽しんであげる』

七罪は視線を土道、琴里、最後に蓮で止める。蓮を見つめるその瞳には鳥肌が立つような欲望が渦巻いていると感じた。

『いいわ……その姿で街を歩いたら、周りからどんな目で見られるんでしょう……。男からは嫉妬の眼差し……女からは羨望の目で……かしら？』

「お前、俺と同じ匂いがするな」

その言葉に七罪はもちろん、土道と琴里も不思議そうな目で蓮を見る。だが、本人はそんな事を気にした様子もなく言葉を続ける。

「自分を偽り、ずっと自分自身を騙し続ける。やがて、自分がどちらなのかすら分からなくなり、その重さで闇の底に沈んでいく。俺はそれに片足を突っ込んでいる身だからな」

七罪、土道、琴里には何を話しているのか分からなかった。だが、その言葉に確信と説得力があるのを感じる。

『ふ、ふうん、面白いことを言うわね。けど、今は私が誰かが当てる方が重要よ。さあ、私は誰？制限時間は……一分あれば十分かしら』

「回答……！今答えるのか!？」

『だって土道くんだったら、結局、一日目は誰も指定してくれなかったん

だもの。だから、私がナビゲートしてあげなくちゃって思ったのよ』  
よく言う、と文句が心に浮かんだが、今の士道はそんな事を言うより誰が七罪か判断しなければならぬと考えられる程度は冷静だった。目の前にいる蓮が、こちらを見ているとなると回答が一任されていると考えて良いだろう。

悩んだ末、士道は七罪に向き直り、怪しいと思った名前を告げた。  
「怪しかったのは…四糸乃だ？」

「四糸乃？何でだ？」

今日話した相手の名前を出され、蓮は士道に理由を聞いた。士道は苦しそうな表情を浮かべて話す。

「なんか…四糸乃らしくない感じがしたっていうか…」

何とも曖昧な理由だった。だが、そんな事はどうでも良く、気になるのは正解か間違いかの結果だけだ。それを問うように七罪の顔を見る。

『ふうん…そう…』

短くそう言うと、〈贗造魔女〉は空間に溶けるように姿を消す。当然、箒の先端部の鏡から顔を見せていた七罪も消える事となる。

「どうなの!? 正解だったのかしら…」

「…だと良いんだがな」

琴里の声に、蓮は願うような返答をする。だが、嵐が過ぎ去ったようには感じられない。その日、二人の少女が姿を消した。



## 48話

「四糸乃、山吹…」

四糸乃が七罪だと指定したその夜、亜衣と四糸乃が〈贗造天使〉によって消された。これは、土道の回答が不正解だったと捉えるべきだろう。ソファに座った土道は、二人の消失に対する苦しみの表情を浮かべるが、隣に座る蓮はそれを気にした様子も無く、土道に話しかけた。

「二人の事は仕方がない。それより、次に怪しいと思った奴の…」  
「…ッ！なんでそんな風に受け流せるんだよ!!」

五河家のリビングに土道の怒声が響き渡る。その怒りの矛先である蓮は眉ひとつ動かす事なく、怒りに震える土道を見ていた。疲れや責任感の所為か今にも殴りかからんとした様子だ。そんな土道の胸元に、ペットボトルの飲料水を押し付ける。

「まずはお前が落ち着け」

その一言に我に返った土道は、ペットボトルを受け取り、『悪い…』と謝罪した後にペットボトルを叩いた。蓮は怒鳴られた事に関しては気にしてない、毎日の調査で疲労などでイライラが募っているのだろう。むしろ、怒鳴られてそのイラつきが無くなるなら安いものだ。「消えた三人に関しては気の毒だが、その事に囚われていると…この勝負、負けるぞ。そうになると、どうなるかは分かるな？」

大声を出していないというのに、有無を言わせない迫力を感じる。その前には土道の怒りは冷水をかけられたように鎮火し、緊張や恐怖で喉をごくりと動かす。そして、自分はこの勝負のたった一夜に囚われているのに対し、目の前にいる蓮は勝負全体…勝ち負けまで見据えていると理解出来た。

「どうやら、この勝負に引き分けは無いらしい。そうになると、全てを奪われて敗北するか、全てを取り戻して勝利するかだ。分かりやすいと思わないか？」

「本当に…なんでそんな余裕でいられるんだか…」

ここまで来ると、怒りすら湧いてこない。目の前にいる友人が、い

ろいろな意味でまともでは無いと理解していたが、もはや狂気のレベルだ。

「七罪が誰かは俺にも分からない。だが、気になる点が二つほどある」  
見せびらかすように、自分の二本の指を土道に向ける。その内の一本を折り、話し始めた。

「まずは一つ目。これは大した事じゃ無いんだが、お前が指定した四糸乃がその日に消されたのは偶然か。という話だ」

その事を口にされると、消えた四糸乃に対して申し訳ない気持ちが出湧いてくる。しかし、まだ不明な事が多いこの勝負で、それを認識して置かなければならないのも事実だ。そして、続いて二本目の指を折って話を続けた。

「そして、これが一番気になっっているんだが…、なぜ夕弦、四糸乃、山吹 亜衣は消されたかだ」

「なんでって…そりゃあ…」

理由は分からないが、自分達は七罪に恨まれている。自分が指定した四糸乃が消えたのも含めて、こちら側を精神的に追い詰めるためではないかと土道は言おうとした。実際、精神的苦痛を受けているのは本当の事なのだから。

「確かに、俺たちを心理的に追い詰めるためというのもあり得るだろう。だが、本当にそれだけが目的でしているか…、そこが重要だ」

土道は、イマイチ蓮の言っている事が分からなかった。そんな土道を見て、ため息をしつつも仕方なしと言った様子で解説してくれた。

「写真にいる十二名…いや、誰かに化けている七罪を除外して十一名か。この十一人は七罪を隠す”**囿**”だ。その囿を自ら消していくのは自分の首を絞めているとしか言いようがない。さっき言った一つ目の事がその通りだとしても、夕弦と山吹 亜衣の二名を消す理由が分からないんだ」

つまり、土道が四糸乃を指名し、それが七罪で無かったにしても、亜衣まで消す理由が分からない。それに加え、初日には夕弦も消えている。夕弦と亜衣、この二人が指定されれば、二夜を凌げるというのに。「じゃあ…七罪が他の理由でそうしたって事か？ 一体どうして…」

「それが分からないから悩んでるんだ。とりあえず、これからは容疑者の言動だけでなく、七罪自身の動きにも注目した方が良さそうだ」  
士道と違い、体力を消費していない蓮には、そこまで考えつくほどの余裕があった。とはいえ、肝心な事はまだ分からず、誰が七罪かも分からない。だが、あまり時間が残されていない事だけはなんとなく感じていた。

一人だけの部屋となった八舞姉妹の部屋の次に、誰もいない四糸乃のいた部屋の前を通る。こうしてみると、七罪の影響が出てきていると嫌々ながらも実感してしまう。ここまで来ると、もう精霊達に七罪の事を黙っているのは限界かもしれない。

それでも、蓮はやれるところまではやってみるつもりだ。たとえば、それが現実から目を背けていると笑われようとも。

次の行くべき場所は、あの腹ペコモンスターがいる部屋だった。

「十香、出来たぞ。今日は中華料理だ」

「おお！美味そうだな！」

机に並べられたラーメン、チャーハン、麻婆豆腐など輝いた目で見ると十香。結構重いラインナップだが、よく食べる十香には丁度いいメニューだろう。早速、座った十香は『いただきます』と高らかに言った後、麺を啜り、レンゲで米を口に運んでいく。

「どうだ、美味しいか？」

「うむ！レンが作る料理はなんでも美味しいぞ！」

予想していた返答とは、少し違うものが返ってきたが、幸せそうに食べる十香を見て『まあ、いいか』と思う。ある程度食事が進んだところで質問タイムの開始だ。

「そういうえば、俺と十香が初めて会った時も結構フレンドリーだったよな」

「む？そうか、確か、初めて会った時、レンに顔を殴られたような気がするが…」

頬をさすりながら、不満げに言う十香。真実と合っている事を確認

すると同時に、嫌な事を思い出させてしまったと申し訳なく思う。

「そうだっけ？あの時は悪かったな、お詫びに杏仁豆腐をデザートに作ったから」

「なぬ!?それはさいきよーの組み合わせではないか!」

相変わらず、食事に対する反応や言動もいつもの十香と同じだ。次にする質問の内容を考えながら、机に杏仁豆腐を置いた。

食後の休みの時間、次にする事がない蓮は、部屋にあるソファに座っていた。その左隣には十香が並び、蓮に身体を預けて座っている。テレビをつける事もなく、室内は沈黙が支配していた。

「…最近、土道はどうしたのだ?レンも、学校を休んでばかりではないか…」

その小さく、弱々しい言い方に、思わず十香の顔を見る。その顔には、さっきまでの元気がなく、寂しさやわずかな恐怖が浮かんでいた。「もしや…私は二人に嫌われてしまったのか…?もし、何かしたというのならちゃんと謝るぞ…」

「そんなわけないだろ。最近、俺も土道も忙しくて学校に行けないんだ。あと数日だけの辛抱さ」

嫌われてないと言われた十香は、安心したような表情をし、蓮の腕を抱きしめる。パジャマ越しに十香の体温と、柔らかな膨らみを感じる。今の蓮には、それがとても心地良かった。

「レンに触れていると…とても安心する…何かに…包まれ…て…いるよ…うに…」

言葉が途切れ途切れになっているのに気付き、十香を見てみると、寝息を立てて眠っていた。満腹になった事と、この静寂が原因だろう。眠っている十香の頬を優しく撫でた後、お姫様抱っこをし、ベッドまで運ぶ。

ベッドに寝かし、風邪をひかぬようにしつかりと布団をかけてやる。そうした後、蓮はすぐには退室せず、無邪気な十香の寝顔を眺める。

「あと数日だけさ。その後は全て元通りだ…全て…」

そして、十香の額にキスをし、部屋を出て行く。あと数時間で事の元凶との勝負があるからだ。

今日の予定が終わり、家に帰った土道を出迎えたのは待ち構えていたように仁王立ちしていた琴里と、眠気覚ましのためか、コーヒーを飲んでいる蓮だった。

「遅い、何してたの?」

「お疲れさん、今日も頑張ったねえ」

琴里の厳しい一言と、蓮の労いの一言に土道の心はブレイク寸前だ。とはいえ、琴里も土道の苦労を理解しているらしく、それ以上は何も言わないでくれた。

「しかし、そろそろ時間だったからな。ギリギリ間に合ってよかった」  
「間に合うって、何に…」

そう言い終わる前に部屋の空間が歪み、そこから箒型の天使が姿を現わす。

「〈贗造魔女〉…!もう時間なのか!」

出現した〈贗造魔女〉はその場で停止し、先端部にある鏡のような内面を晒す。そこには昨日と同じ、七罪の姿が映し出される。

『この楽しいゲームも、三日目が終わったわ。ふふっ、どう?楽しんでもらってるかしら?』

「今の土道を見て、そう思うんならそうかもかもしれないな」

鏡の向こうから微笑みながら言う七罪に、蓮は、苛立ち混じりに吐き捨てる。そんな蓮を見ていて楽しいのか、七罪はさらに笑みを深くする。

『せっかく考えたゲームなのに、楽しんでもらえてないだなんて、お姉さん、悲しくて泣いちゃいそうだわ』

目元に指を当てて、『えーん』とわざとらしいウソ泣きの演技をする。それを見た土道は怒りで震えながら手から血が出んばかりに握りしめる、後ろにいて顔は見えないが、琴里も同じような心境だろう。だが、二人とも、拳を出すことなく耐える。

『ああ…いい目。私だけを見ているその青い目を、私だけのものにし

たいわ…』

七罪は、怒りに震える土道や琴里を無視し、感情を丸出しにする事なく、冷静な蓮だけを見ていた。そんなねっとりとした視線を感じながら、どうして自分に近づいてくる女は、狂三や七罪といい危険な奴が多いのか考えたくなくなる。

『容疑者の調査は終わった？さあ、答えてちょうだい。私はだあれ？』  
そして、今日も回答の時間がやってくる。だが、土道はすぐに答える事は出来なかった。一応、今日で全ての容疑者と会話はしたが、七罪という証拠を掴めてなく、考えれば考えるほど、『もしかしたら…』というループにハマっていく。一方、七罪は、楽しみに微笑む余裕の表情だ。

数秒経過しても、土道は答える事なく、苦渋な表情だけが広がっていく。

「土道、お前が七罪だと思った奴を言えればいい。深く考えようとするな」

「でも…もし七罪じゃなかったら…」

「失敗した時の事を想像して何になる!!そんな考えに甘えるな!!」

それは、蓮から初めての叱咤だった。蓮もこんな極限な状況で、かなりの無茶振りを言っていると自覚している。それでも、制限時間がある以上、今は迷っている時間すら無いのだ。

「っ！七罪は…」

その叱咤に動かされ、七罪と思わしき人物の名を言おうとした瞬間、消えた四糸乃の顔が土道の脳裏にフラッシュバックした。もし、外れてた時の責任の重さと恐怖が蘇り、言葉を止めてしまう。

「ー！土道ー！」

『ブー！時間切れよ。残念でした』

琴里のその声と七罪が両手で大きなバツを作り、時間切れを告げるのは同時だった。その声で我に返った土道に残ったのは、とてつもないほど大きな後悔と、忠告をもらったというのに、それを学べなかった自己嫌悪の気持ちだけ。

「悪い…本当にすまない…俺は…」

士道は顔を下に向け、蓮に対しての謝罪を繰り返している。失敗の原因は全て自分だ、自分を信じきる事が出来ず、後悔したくないという甘えた心が言葉を止めた。

しかし、そんな士道を励ますように頭を乱暴に撫でられ、髪を乱される。顔を上げると、『仕方がない』といった表情に小さな笑みを浮かべた蓮がいた。

蓮は〈贗造魔女〉に向き直り、七罪に鋭い視線を向ける。

「それで、今日は誰を消すつもりだ？」

無回答は許さないとわんばかりに強い言い方で問う。七罪はその質問に口元に手を当て、悩むような仕草をする。だが、手によって隠れている口には笑みが浮かんでいた。

『そうね、そろそろ、メインディッシュをいただくこうか・し・ら』

色っぽく舌舐めずりをした七罪は、そう答えると、自分の映る鏡の部分を発光させる。すると、立っている蓮の身体が光に包まれ、〈贗造魔女〉に吸い込まれ始める。

それを見た琴里と士道は驚愕の表情を浮かべた。

「なっ!?! どうして蓮が!?!」

「蓮は容疑者のうちに入って無いぞ!」

『何でって、時間はあげたじゃない』

意義があるとはばかりに声を上げる二人だったが、それに答える七罪の声が玄関に響きわたる。当人であるはずの蓮は、暴れる事なく静かにそれを聞く。

『正直に答えると、彼は私を見つけてしまう危険があったの。だから、今ここで処理しようと思うのよ。時間は十分にあつたはずよね? だったら、それを生かしきれなかった士道くん達の責任じゃない』

悔しい事にそれは正論だった。今日を含めて三日ほどの時間はあつたのに加え、毎日容疑者が消えていくとルールに示されていたわけでは無い。そうなると、七罪がここで蓮を消すのも自由となる。士道が七罪が誰か答えられなかったのは真実なのだから。

「…悔しいが、ここは七罪の言う通りだ。大人しくそれを受け入れるよ」

慌てる土道達と違い、静かな蓮は両手を上げ、自分の敗北をあつさりを受け入れた。自分はただ、屈服したのだ。このゲームの、七罪という名のルール神に。こうなった以上、何をしても変わらない。

「土道、七罪は絶対に見つからないという自信があるらしい。その理由を探せ、もしそれが見つかれば十二人の中から一人を当てるよりも確実にするはずだ。：頼むぞ、俺の命、お前に預ける」

その言葉を最後に、蓮は鏡に光となって吸い込まれる。蓮を吸い込んだへ贗造魔女ハニエルは、虚空に溶けるように消える。三人いたはずの玄関には、二人が残され、消えた一人の痕跡は、温くなったコーヒードけとなった。



## 49話

士道が誰が七罪かを答えなかった三日目は、同じ場にいた蓮と、マシヨンで眠っていた十香が〈贗造魔女〉によって消し去られた。それを知った士道は、まるで身体に罅が入ったような感覚を感じた。

傷心の士道は、現在、ヘフラクシナス艦内の廊下にある椅子に座り、頭を抱え、俯いており、目の前にある床すらも認識してない状態だった。

（失敗した時の事を考えて何になる…か。本当に…蓮の言う通りだった）

七罪がだれか、答えて外すならまだしも、何も得る事の無い無回答によつて二人を失った。それを考えると、自分に対しての自虐の笑みが浮かんでくる。蓮と十香が消えた時から、そうやって自分を責め続けていた。

「…シン」

特徴的な自分の呼び名が聞こえ、顔を向けるとそこには白衣の胸ポケットにクマのぬいぐるみを入れ、隈だらけの目をした令音が立っていた。

「令音さん…いつの間にも…」

「…さつきから呼んでいたんだがね。まあいい、隣失礼させてもらうよ」

そう断りを入れてから、士道の隣の椅子に腰掛ける。令音はしばらく士道の顔を見た後、話し始める。

「…消えた彼の飼っていた猫は、先ほどヘフラクシナスの一室に収容した。家から連れ出す際、暴れてクルーの一人が、手に怪我をしたがね」

「そう…ですか」

今の士道には、そんな受け流すような言葉しか出てこない。失礼だと分かっているけど、しつかりと返答するような元気すら無い状況だ。そんな返事をされても、令音は気にする事なく話を続ける。

「…部屋に入れられた後、食事や水を出されても手をつけようとしな

かった。今は、レンの自宅から拝借した布団に包まれて眠っているが、あまりいい状態とは言えない。…やはり、何となく分かっているのかもしれないな」

「分かっている…？何をですか？」

「…猫は、犬と違い、飼い主に対する忠誠などとは無縁だと思われがちだが、彼らにも社会性というものがあるんだ。序列が固定されているのではなく、時に応じて互いに気持ちの良い距離を確認し合う関係…。臨機応変に居住域などを確認し合うものだ」

「へえ…猫にそんなものがあるんですか…」

この時は素直に驚いた。犬は序列などを重視し、猫は社会などを作らず、好き勝手に生きてるという固定概念があつたので、その雑学はそれを書き換える内容だつた。

「…だから、消える瞬間を見ずともあの子には分かるだろう。自分にとって欠かせない存在レが消えたという事が。それによる不安と恐怖を感じている」

「…俺、誰が七罪かを答える時、外した時の事が頭に浮かんでなかなか言えなかつたんです。そんな時、蓮に怒鳴られたんですよ、『そんな事を考えて何になるんだ』って、それで分からなくても何か言おうって思つたけど、やっぱり言えなくて…」

土道は、その時の事を令音に話した。何も言えなかつた時、蓮によつて喝を入れられ、それを力に答えようとした瞬間、責任を恐れた…我が身可愛さによつて言葉が止まり、それが原因で時間切れになつた事。令音は無表情で話を聞いていた。

「今となつては、いつその事、蓮に答えて貰えば良かったと思つてます…。『無責任だ』って怒られたかもしれないけど、あいつなら、少なくとも俺みたいに何も言えないで終わるなんて無かつたと…」

そうは言っているが、こんなのはただ、責任から逃れたかつただけだ。頭の良い令音はその事はその本心を理解しているだろう。だが、その事を怒る事はなかつた。

「…レンは、消える瞬間まで大人しかつたらしいね。彼なら、ハニエ〈贗造魔女〉を攻撃したりと抵抗する事が出来たはずだ。それをしな

かったのは、囚われている彼女達の事を考慮した…。つまり、君に後を託せると信じたからだ」

蓮には、〈バスター〉、〈レッドクイーン〉と相手を攻撃出来る武器をいつでも取り出せたはずだ。しかし、抵抗し、七罪の機嫌を損ねてしまふと捕まっている夕弦、四糸乃、亜衣を危険と判断した。そして、士道はこの勝負に勝てる信じ、後を任せただろう。

「…今の君の状態は、私たちはもちろん、ヒントを残して消えた彼も望んでいるものではないだろう。君に求められている事は、自分を責める事ではなく、七罪を見つけてこの勝負に勝つ事だと思うよ」

強く後悔するなら、それを糧に七罪を見つけ出す。それがすべき事だと令音は言う。だが、今はその確証となる証拠がない。それに頭を悩ませていると、蓮が最後に言ったあの言葉が頭に浮かぶ。

「蓮が残したあの言葉、一体どういう意味なんだ…」

「…ああ、〈贗造魔女〉に吸い込まれる時、言葉を遺したらしいね。一体なんて言ったんだい？」

「確か…七罪の自信の理由を探せとか、なんとかか…」

それを聞いた令音は、顎に手をあて、ふむと考え始める。数秒後、何かに行き着いたらしく、顔を士道に向ける。

「…おそらく、シンが七罪の可能性がある十二人を見ていたのに対しての、彼は十二時に現れる七罪自身を見ていたんだ。そして、疑問を感じた、七罪に余裕がありすぎるとね」

蓮は、七罪の行動や様子に注目しそれに疑問を持っていたのは士道も知っていた。毎晩容疑者を消していく行動は自殺行為であると。その事を士道は気にしてはいたが、毎日の調査の疲れで考える余裕はなかった。

「…そして、その余裕に正当ではない理由があると考え、それを見つければと言ったんだろう。その理由を見つければ七罪の正体を暴く事が出来ると信じてね」

「な、なるほど…すごいですね。それを導き出した令音さんもそう考えた蓮も…」

士道はただ、驚嘆の言葉を言うしか出来なかった。自分以上に暇は

あつたとはいえ、たった二回のアプローチの中、七罪を注意深く観察し、その余裕に気がつく蓮。そして、彼が最後に遺した言葉を分析し、言いたい事を分かりやすく解説してくれた令音。意外にもこの二人は良いコンビなのかもしれない。

「…私もレンのその言葉がなければ、ここまで考えが至らなかつたさ。そんな彼に後を託されたんだ、自信を持っていい。君も、十分に賢い人間だ」

「…はい!!」

一つの謎と共に土道の調子も戻ってくる。ダメだった時の事を考えても意味などない、自分には出来ると信じて取り組まなければならぬと大いに学んだ。

（…は…どこだ…？）

まるで無重力のようにふわふわと漂う感覚。身体を動かそうにも全く動かず、瞼すら開けられない状態だった。もしかしたら、このようなものを”金縛り”というのかもしれない。

（たしか…七罪に吸い込まれて…それから…）

蓮はそこまでは思い出したが、そこから先は思い出せない。なぜ自分がいつから空間にいて、どれほどの時が経過したかすらも。七罪によつて消された容疑者はどこに行つたのか気になつていたが、『この空間に身動きできずに囚われる』というのが正解だったらしい。

（土道の奴…最後に言った事の意味をきちんと理解したかね…）

時間が無く、言葉足らずな部分があつたと今となつては思う。そうになると、言いたい事が伝わつたか不安になる。しかし、こうなつた以上、もう自分出来る事はもうないだろうし、結果がどうであれあとはゲームの終了を待つだけだ。

（しかし、こうなつた以上何をすればいいんだ…。身体が動かないんならどうしようも…！）

蓮はすぐにその思考を中断した。その理由は簡単だ、何かに触られた感覚を味わつたからだ。それを感じたのは右手の甲の部分、そこから身体を上つてきて、顔の頬に触れられる。感触からして指先

で触られている可能性が高い。

そこから無抵抗なのをいい事に、まるでぬいぐるみのように好き放題触られ始める。初めは肩や腕など比較的常識の範囲だったのだが、時間が経つたびに、顔に好き放題触れたり、服の隙間から侵入し胸筋部を撫でたりとエスカレートしてきた。

極め付けは頬に舌を這わせる、蓮の身体に腕を回して抱きしめるときた。しかし、その時、腕に大きく、柔らかな二つの膨らみを感じた。つまり、自分を抱きしめている人物は女性だろう。さらに腕の長さから、年齢は自分より上だと予想出来る。

(この空間で自由に行動出来て…女、俺より年上となると…まさかな…)

前半の部分で範囲がかなり絞られ、犯人が誰か予想出来るレベルまで行ったのだが、だからと言って自分に出来る事は何も無い。こんな身動き出来ない状態なのは、誰か分かったところで意味などないだろう。

ひとまず、安心した事は触っている人物が男で無かったところだった。

(二日…いや、三日目にもう入っているか…)

それが、今の体内時計の感覚だった。現在、蓮は相変わらず無重力な空間を漂っている。ここで起きる事といえば時々謎の存在がぬいぐるみのように自分を弄りに来るぐらいだ。

この空間では、不思議な事に食欲や喉の渇きなどが起こることはなかったが、これ以上、この暗闇の空間にい続けると精神に以上をきたす危険もある。幸いな事に、目を閉じていれば眠ることはできたため、身体の眠たくなる時間で照らし合わせると、三日目に入っているかの時間だ。

(そろそろ終わりの時間か…勝ってくれよ士道!)

強く祈っていると、指先が不意にピクリと動いた。さつきまで身体が脳からの命令拒否しているかのように動かなかったはずなのにだ。

指先が動いているのを確認した後、ゆつくりと瞼を開ける。

そこには暗闇の空間が広がっていたのだが、ちょうど蓮の目の前の空間がガラスにヒビが入るかのようには割れ、その隙間から、光が入ってきている。

数日ぶりの光…それを見た蓮は、右手に〈バスター〉を顕現させると、強く手を握り、それを殴りつけた。

「七罪は——お前だ。そうだろう、よしのん」

とある部屋の一角。〈ラタトスク〉が所有している施設、そこはダンスホールのようなスペースで、ところどころに背の高いテーブルが置かれている。

その場にいたのは土道、琴里、美九、の三人。それがこの七罪とのゲームで残った人物だった。今の時刻は十一時、五十九分、三十秒。

ラストチャンスとなる指名の時、土道は目の前にある〈贗造魔女〉…七罪に対し、人差し指を向け、七罪はよしのんだと言った。

その言葉に、七罪は今までの浮かべていた余裕そうな表情から変わり、真面目な顔となる。

『よしのん…四糸之ちゃんがつけていたパペットのことね…。理由を聞かせてもらえるかしら』

「今、そう考えたのは、蓮の言葉を思い出したからだ。『七罪の余裕の理由を探せ』それと、『容疑者を消していく理由』を」

それは、蓮が七罪によって消される直前に言った事だった。七罪もその瞬間にいたのだから当然聞いてはいる。

「蓮は、七罪、お前の態度を見て疑問を感じていたんだ。十二分の一とはいえ、あまりにも余裕過ぎると。その自信には理由があるんじゃないかと」

『……………』

「そして、七罪は人以外にも化けられる事と、容疑者が消える時、身につけているものまで消えてしまうこと…。それを意識して考えたら、十三人目のよしのんが出てきたんだ」

七罪はその事に反論しなかった。ただ、睨みつけるような表情で土

道を見つめている。口元からは、奥歯を噛み締める音が聞こえてきそうなのな雰囲気だ。

「そこまで考えついたら後は簡単だった。一日目の時、四糸乃の目がドアの向こうにあったのにも関わらず、俺が投げた携帯をよしのんが避けたこと、四糸乃と離れ、折紙の家にいた時の事を話したりと、おかしいところが出てきたよ…」

四糸乃から離れたよしのんは、ただの人形のはずだった。天使の能力によってその時の事を知ったかは分からないが、余計な事を口走ったばかりにこのような危機に陥っているのはたしかだった。

「多分、蓮のあの言葉が無ければ、未だ俺は十二人の中から一人の名前を言っていたと思う。だけど、蓮は俺とは違って、もう見つけていたんだ。七罪、文字通りお前の二流の役者の部分をな！」

『…やっぱり、もつと早く消しておくべきだったわね…！彼の…！』

見つけていたという言葉聞いて、七罪は頬に汗を垂らす。その時、〈ハニエ造魔女〉が震え出し、七罪の姿が映された鏡の部分に細かなヒビが入っていく。

一体何が起きているのか、疑問に思った瞬間、青く光る右腕が鏡から飛び出し表面を粉碎した。

(あの手…まさか！)

瞬間、部屋中に光が溢れ、三人は手で顔を覆う。

「く…」

「な、何よ、これ…！」

「きゃあ！何ですかあ!?!」

光はしばらくして収まり、目が元の明かりに慣れた頃、前を見てみるとそこにはついさっきまでいなかった幾人もの人間が横たわっていた。それは〈ハニエ造魔女〉によって消された仲間達であり、それらの前に右手を青く変化させた蓮が頭を押さえながら立っていた。

それに土道達が反応するより早く、部屋の机に乗っていた猫が素早く駆け寄り、蓮の足に身体を擦り付ける。それは、蓮の飼猫であるミルクであり、誰が七罪を見破った時、すぐに合わせてやりたいと配慮した土道が連れてきてもらったのだ。結果、このように再開させる

事ができてとても嬉しく思う。

「お、ミルクか、数日ぶりだな。ん？お前少し痩せたか？今日からしばらくカロリー高めのお食事かな」

腕の中に抱えながら頭を優しく撫で、ミルクも蓮の顔をペロペロと舐める。その後、すぐに十香、耶具矢、折紙と、次々に意識を取り戻していく。だが、珠恵、殿町、亜衣、麻衣、美衣の五人はまだ目を覚まさない。胸が僅かに上下しているのを見ると、死んでいるわけではなく、ただ眠っているだけだろう。

「むー、どうしたのだ…ここはどこだ…？」

目が覚めた十香が、蓮にそう聞いてくる。正直、蓮もここがどこかは分からないが、気を失っていたという事は自分と同じ「贗造魔女」に吸い込まれていたと判断していいだろう。そう考えると、胸の中にこみ上げてくるものがあり、ミルクを床に下ろすと、十香を強く抱きしめた。

「な、ななな…ど、どうしたのだ!？」

「何でもないさ…、ただ、十香をこうしたくなつたんだ…」

突然抱きしめられた事に顔を赤くする十香。それを気にせず、無事でよかったと安心する蓮。その足元にいたミルクが突如走り出す。その行き先は、部屋の隅で蹲っている、大きな帽子を被った少女だった。ミルクはその少女の元まで行くと、顔に飛びかかり、ペロペロと舐め始める。

「ちよ、ちよつと…くすぐったいって…!」

顔を舐められ、声を上げる少女。その少女に近寄っていく土道を見て、蓮も十香から離れ、もしもの時を考えて自分も近くに寄る。蓮が近づくのを感じたミルクは、少女から離れ、主人の元に帰っていく。「俺たちの勝ちだ。観念してもらおうぞ、なつ…み!」

帽子のつばに隠れた顔を見た瞬間、土道の声が裏返る。声こそ出さなかったものの、それは蓮も同じだった。なぜなら、目の前にいる少女が記憶にある七罪とはまるで違った姿だったからだ。

小柄で細い腕、不健康そうに見える生白い肌、髪だけは同じ色であったが、髪の高さと形などは違う。今の七罪に、自信溢れていたあ



の表情などは無く、ただ、愕然とした様子で帽子のつばを握り、自分の姿を隠そうとしている。

「…今までの姿は、〈贗造魔女〉で変身した姿だったのか」

「あ、そうか！」

隣にいる蓮の言葉を聞いて、なるほどと言った声を出す。

「〈贗造魔女〉!!」

震えていた七罪は、帽子で自分の姿を隠しながら、右手を高く上げる。すると、部屋の中央に浮遊していた〈贗造魔女〉が、七罪の手に収まる。蓮が砕いた鏡の表面は、自動的に修復され光を反射している。

「ーっ！土道、下がれ！」

天使が精霊の手の中に収まった。この状況でそうなると報復の危険が高い、それを考えた蓮は、土道を下からせ七罪の様子を見る。七罪は再び大人の姿へと変身すると、土道達を殺せるのではと思ってしまうほどの目と表情で見てくる。

「見たな…見たな見たな見たな見たな！私を…見たなアアア！ゆゆ許さない！絶対に許さない!! 〈贗造魔女〉!!」

七罪が叫んだ瞬間、〈贗造魔女〉の先端部が輝き、部屋が光で埋め尽くされる。土道は、反射的に目を閉じてしまいが、閉じる時、〈贗造魔女〉のとは違う、青い光が見えたような気がした。

光は数秒で収まり、ゆっくりと目を開けると、自分と蓮が、青い拳の中にいる事に気づく。どうやら、目を閉じる瞬間に視界に入ってきた青い光の正体はこれのようだ。

「た、助かったよ…。サンキューな」

「最高の防御を維持できる範囲と広げる時間を考えて、安全圏に入れられたのがお前だけだったのが悔やまれるよ。七罪は一体何を…」

そこまで発したところで、足に何かがぶつかった感覚がする。ミルクかと思いつつ顔を下に向けると、ダボダボのパジャマを引きずった小さな女の子がいた。引きずっているパジャマとその顔は、十香のものに見えるのは気のせいではないだろう。

「レン、どうしたのだ！随分と背が伸びたではないか！」

蓮を見上げながら驚きの声を上げる十香を無視して、周りを見渡すと、眠っている五人以外の人物は、小学校三年生ほどの姿になっており、皆、小さくなった身体に四苦八苦ししていた。

「ふふ、ふふふ、あんたたちみんな、ずっとちびすけのままでもいいのよ……！」

そんな捨て台詞を吐くと、七罪は部屋の天井に穴を開け〈贗造魔女〉に跨って飛んで行ってしまふ。土道が制止するような声を出す、当たり前ながら止まる事は無かった。

(悩みの種は尽きないな……)

一難去ってまた一難。七罪の問題も解決したとは言えないというのに、また別の問題が出来てしまい、蓮は頭を抱えた。

## 50話

今の日本を悩ませている社会問題の一つに、「待機児童」というものがある。待機児童とは、保育園や幼稚園が定員オーバーにより行けない子供達のことだ。一応この問題は、託児施設を増やす事によって解消する事が出来るが、子供の声による騒音問題などが原因で近隣住民からの反発があり、難しい問題となっている。

「なあ、土道。いつその事、託児施設でも始めないか？社会問題の解決に貢献できるぞ」

「この状況で、その冗談は笑えないからやめてくれ…」

朝の五河家、そのリビングには七人の小さなモンスター<sup>子供</sup>がいた。そして、その子供達はどこかで見た事がある容姿をしている。

「レン、だっこしてくれ！」

「しどう、おしっこをてつだってほしい。いつしよにきて」

「あの…ごめんなさい…わたし…うう…」

「み、みんな、ちよつとおちついてちようだい！」

「ゆけ！わがけんぞくよ！ゆづるにわれのいげんをしらしめるのだ！」

「びしよう。くすぐりたいです」

「だーりん！だーりん！」

小さくなつた十香は蓮に抱っこしてくれと催促し、折紙は土道をトイレに誘う。四糸乃は今にも泣き出しそうな様子で、琴里は皆を落착かせようと頑張る。耶具矢は、何やら指示を出し、夕弦は、耶具矢の命によって向かってきた猫、ミルクに顔を舐められてる。最後の美丸は、だーりん、だーりんと何やら訴えていた。

「とんだ置き土産を残していったな。七罪は」

服を引つ張られながら、事の元凶である七罪を思い出す。十香達が子供になったのは、七罪の天使〈贗造魔女<sup>ハニエール</sup>〉の変身能力が原因だった。身体が子供になっても、幼児退行したり蓮や土道の事を忘れてしまった訳ではないようだが、これだけの人数の世話を二人だけで見切れるものではない。

この子供化は、時間経過が元に戻るか、それとも七罪が解除しなければ一生元に戻らないか…、いや、おそらく後者だろう。

(こうなるんだったら、DEM時代に子供の世話の知識も身につけておけば良かったな)

やけくそ気味にそう思いながら、服を引っ張る十香の頭を優しく撫でるのだった。

—————

騒々しい日曜日が終わり、誰もが嫌う月曜日がやってくる。その日の朝から、蓮は制服とカバンを持って五河家に来ていた。

「悪いな…朝から来てもらって…」

「気にしなくていいよ、何しろ状況が状況だ。十香達の朝食の用意も大変だろうしな」

キッチンに立った二人は、十香達の朝食を作りながらそんな会話をする。一人と二人とでは、仕事量と心の余裕がこんなにも違うのかと十香は泣き出しそうな気持ちになる。

「しかし、昨日の令音さんスゴかったな…」

「ああ、あんなに騒いでた十香達を大人しくさせたんだ。解析官殿、独身らしいけどな」

昨日、世紀末状態だったリビングに、令音が入ってくると見事なテクニクで十香を大人しくかつ、静かに落ち着かせたのだ。あれは見ていた二人も驚いたものだ。

「解析官殿、他にも色々な事が出来るみたいらしい。…まさかと思うけど、宇宙人やUMAだったりしないよな？」

失礼な事を言っているが、確かにミステリアスな雰囲気という面から見ると、十香も蓮のいう事は何となく分かる。しかし、世界を滅ぼすと言われている精霊と、剣で打ち合える奴が何を言っているんだと思ってしまうのは仕方のないことだ。

『ねーねー、今日のご飯はなあに？』

「いいにおいが…してきます…」

「もうすごしでできるとおもいますよー。ですから、そのじかんつぶしにわたしのひぎのうえに…」

「みく、しよくじのばなんだから、ぎようぎよくしてなさい」

キッチンで料理をしている後ろで、四糸乃、よしのん、美九、琴里がテーブルで待っている。折紙以外の他のメンバーはまだ二階で夢の中だ。

(…どんなに小さな事でも、こうやって楽しみに待つてくれる人がいるって幸せな事なんだな)

そんな当たり前の幸せを蓮は感じながら、本日の朝食の材料である食パンを二つに切った。

「それじゃあ、耶具矢たちが起きてきたら、朝ごはんを温めてやってくれ。それと、一応インカムはつけていくから、何かあったら連絡をくれ」

「帰ってくる途中に何か甘いものでも買ってきてやるから、大人しくしてるんだぞ」

「だから、こどももあつかいしないでっ！」

「いつてらっしやい…です」

「だーりんとれんさん、きをつけていつてらっしやいですー」

自分の扱いに不満げな様子の琴里の頭をポンポンと撫で、四糸乃と美九に見送られて五河家を出る。

学校に行くと言っても、別に授業を受けに行く訳ではない、ただ、七罪の件の被害者である殿町、亜衣、麻衣、美衣、珠恵の様子を見に行くだけだ。一応、子供化している訳ではないのだが、七罪の天使の中に閉じ込められた以上、問題無い状態か確認する必要がある。

学校へ移動している道の途中、土道の隣を歩く蓮が、携帯端末を取り出し何やら操作しながら歩く。普通なら注意すべきものだが、あの蓮が歩きながらもする必要があるという点が土道は気になった。

「何してるんだ？こんな所でそんなもの取り出して…」

「いや、もしかしたら、七罪の現在地を知る事が出来るかもと思ってな」

それは、今土道たちが求めているだった。画面をタッチしながらその詳細を土道に説明する。

「七罪の存在はASTを通じて、DEMにも伝わっているはずだ。なら、DEM社にある俺のユーザーアカウントを使ってその情報を見る事が出来るかもしれない。もし交戦中なら、今すぐそこに飛んでいくつもりだか…」

土道がすごいと思うのは、この敵ですら利用しようとする考え方だ。自分の立場などを利用して信用できる情報を手に入れる、それに卑怯や泥臭さなどは気にしない、ただ、勝つために行動する。

英文だらけで何が書いてあるのかは土道には分からないが、蓮は迷う事なく操作しての画面を進めていく。やがてユーザーIDとパスワードを入力するような画面となり、まずはパスワードの欄をタッチする。

「あつ、俺、少し向こうを向いてるから…」

当然、土道はパスワードを知つても悪用するつもりなどないが、入力する所を見るのは褒められる行為ではない。なので、顔を背けようとするが、それを言い終わるより早く、蓮の指が画面を叩き始める。

迷う素振りを見せる事なく、アルファベットや数字が混ざったものが欄に入力され、すぐに隠される。その速さは目で追えるものではなく、見てる土道の方が困惑するレベルのものだ。

三十字はあろう、長いパスワードを入力し終わると、指をパキパキと鳴らしながら土道に顔を向ける。

「で、なんか言ったか？」

「いえ、何でもありません…」

何でこうも人間離れしているのだろう。目を背けながら土道が思ったその疑問に答えるものはいない。続いてユーザーIDの欄に触れて、アルファベットを入力する。

ユーザーIDは、パスワードと比べて入力し始めるが、それはすぐに終わった。まあ、ユーザーIDはどんなに短く、覚えやすいものにしてとあの長いパスワードを入力しなければならぬ難易度を考えると、気にするほどでもないだろう。

一体どんなにIDなのかと思い、横目でチラリと見てみる。やはり、IDは短くすぐに覚えられるようなものだった。

## 『NERO』

一瞬見えたその文字は、蓮が『long in』と記されている箇所に触れる事で消え、画面中央に『connecting』と表示される。

(えっ!?!確かにNEROって…)

テレビを見ている土道は、その名前を知っていた。世界的有名な技術者、その知名度にも関わらずその本名、顔すら秘匿されている人物。その非難と共に、世界が依存している存在だ。

いわば、生きる伝説とも言われている人間。たしか、その人物もDEMインダストリーに所属していたはずだ。となると、蓮はそのIDとパスワードを知っている存在、もしくは…

そこまで考えた時、画面に赤い表示とともに、何やら英文が出てくる。それを見た蓮は舌打ちをし、乱暴に端末の電源を切る。その行動に若干の苛立ちが混じっていた。

「お、おい。どうしたんだよ」

「このIDのアクセス権は九月三十日二十四時0分0秒に剥奪されています、その為、使用出来ません。だってさ。多分、あの人達がやっただろうな」

それが誰の事を言っているのか、土道にはすぐに分かった。アカウントが使えないと、DEM内の情報を閲覧する事が出来ない。蓮はどうしたものかと悩み、頭を抱える。

「今まで何回か自分の行動に枷をつけられた事はあるけど、アカウント停止はさすがに初めてだな。悪い、力になれなかった」

「あ、いや、気にしなくていいよ…」

土道が事態を理解しきる前に蓮が謝罪してくる。それにとりあえず気にするなど答えて、二人は学校へと向かう。その途中も、土道はユーザーIDの事が頭から離れなかった。

—————  
精霊という存在を知らない五人がいる教室。そこにはいつも通り

の雰囲気があった。

(まあ、こんなもんだよな。精霊によって自分は幽閉されてたなんて結論、普通は出てくるものじゃないし…)

蓮が被害者である四人を見て、思った感想はそれだった。殿町は、士道に『寝ていたらいつの間にか三日間も寝ていた』と興奮気味に説明し、本人はそれを宇宙人の仕業だと騒いでいた。精霊の存在が秘匿されていて良かったとこんな所で感じるとは、何とも言えないものだ。

他に亜衣、麻衣、美衣の三人とも話したが、自分が閉じ込められていた事より、珍しく蓮が話しかけてきたという事に驚いていた様子だ。そんな事に驚く事ができる余裕があるなら問題は無いだろう。

やがて、聞き慣れたチャイムが教室に響き渡り、それを聞いた生徒が自分の席へと戻っていく。最後に珠恵教諭の様子を確認し、問題なければ早退して家に帰る。それから七罪の捜索だ。

(俺が一人の女を、文字通り追いかける事になるとはねえ…)

今までは圧倒的に追いかけられるケースが多かった。別にそういう事に対するこだわりは無いのだが、初めてのその行動に不思議な気持ちになる。それは自分が浮かれているのだとは気づかない。

しばらくして、クラスの前担任岡峰 珠恵教諭が入ってくる。見た感じ、どこか異常なようには見えない。だが、それとは別に何やら動揺しているような雰囲気だ。その視線は士道に向いている。

「えっとお…五河くん、お客さんが来てるんですけど…」

「きや、客ですか？俺に…」

こんなタイミングで来る来客など、心あたりがない。だが、すぐにある可能性に考えつく。蓮の方も既に来客が誰か予想出来てるらしく、真剣な顔で目を合わせてくる。

考えられる可能性としては、DEMインダストリーか、精霊である七罪。どちらも一筋縄ではいかない相手だ。

(……でやる気か…)

精霊の七罪もそうだが、顕現装置リアライザは世間の目に触れてはいけない秘匿技術となっている。だが、もしそれを覚悟で来たのなら、



目撃者を全員消すという思惑と共に来たのなら、かなりマズイ事になる。

「その客は、どこに…」

「あ、はい、職員室の方に…」

普通に来ればいいものを、行儀良く職員室で待っているなどおかしいと疑問を感じる。一体誰かと聞こうとした瞬間、教室に小さな影が入ってくる。それを見た途端、蓮は身体の色を抜いた。

「おおーふたりともここにいたのか！」

その正体は、五河家で寝ているはずの十香であり、土道と蓮を見つけると嬉しそうな顔でこちらに走ってくる。その姿はとても可愛らしい。

「ああっ！職員室で待っててくださいって言ったじゃないですかあ！」

珠恵を無視し、小さな身体を動かして寄ってくると、蓮は十香の頭を撫で抱っこする。

「ふふつ、いっしょにねていたシドーがいなくなつてびっくりしたぞ。てつきりまいごになつていたのかとおもつたのだからな」

蓮に抱きつきながら、笑顔で言ったその発言に、クラス中から土道に視線が集まる。当然ながら、いい意味が籠つたものではない。

「よしよし、心配させたな。朝ごはんはちゃんと食べたか？結構自信作だったんだが」

「うむーとてもおいしかったぞー！シドーとれんがつくつたのなら、まいにちいえにきてくれ！」

笑顔で蓮の首に抱きつく十香。クラス中からは微笑ましいものを見るような視線がくるのだが、土道には、『こんな純粋な子供を…』と言った非難の思いが向けられる。

「ほほお、われではなくけんぞくであるとおかをかかげるとは、ようしやできるものではないぞ」

そんな声が教室の入り口から聞こえ、顔を向けるとそこには家にいるはずの耶具矢、夕弦、そして昨日家に帰った折紙がおり、三人は人目を気にせず入ってくる。それに、珠恵は困つたという顔をしてい

る。小さな来訪者に、クラス中がわいわいと騒ぎ出す。

「ちかいみらいのあるじとなるのはこのわれだ！ならば、われをかか  
げるのがどうりというものだろう」

「ようきゆう。つぎはゆづるのぼんです」

「.....」

耶具矢と夕弦は蓮に、折紙は土道の方に行く。今日は幼児との触れ  
合い行事などには無いはずなのにと頭を悩むクラスメイトを無視し、蓮  
は耶具矢と夕弦の頭を優しく撫でる。

「よしよし、今やってやるから」

「なっ!?!なぜわたしをおろすのだ!?!」

催促に答え十香を下ろし耶具矢を持ち上げると、腕を組み満足そう  
な表情になる。一方、下ろした十香から不満の声が上がり、慌てて空  
いている片手で十香を持ち上げるが、残った夕弦は不満そうに蓮を見  
ており、慌ててフオーする。

そして、土道はというと、折紙に『パパ』と呼ばれそのせいで教室  
中に変な噂が流れ始めていた。

「ちよつと待て!この子たちは：親戚の子共たちを預かってるだけな  
んだよ!だから、パパとかはその：あだ名みたいなものでさー!」

黒い噂が流れ始める教室に、土道はそう弁明する。多少の強引さがあるが、本人がそういうのなら追求のしようがない。こんな歳で子供  
がいるわけがないというところから考えて、一応は納得する。

「ふう：とりあえず、ホームルームが終わったらすぐ行くから、ちよつ  
と職員室で待ってくれ」

小さくなつた四人にそう言いながら、蓮が抱っこしている夕弦を床  
に下ろす。最後に抱えていた十香に触れた瞬間、それは起きた。教室  
の窓の外で何か光ったかと思うと、突然目の前にいる十香の衣服の  
縫製がハラリと解けてしまった。それにクラス中から驚愕の声が漏  
れる。

だが、驚きに包まれる教室で、蓮だけがそれに冷静に対処した。ま  
ず衣服が解ける十香を上になんか軽く投げ、両手を空かせる。上に上が  
り、落ちてくるまでの間も、バラバラとなった布が十香の身体から離

れていくがその間に自分の上着であるブレザーを脱ぎ、裸体が晒されるその瞬間の十香を包み込む。

「よっと、十香、大丈夫か？」

「うむ、たすかったぞ」

蓮の首に抱きつきながらそう答える十香。教室では衣服が解けた以外に、蓮の行動を見たざわめきも加わった。

「えっ!? 今何が起きたの？」

「神代くんがどこかの黒い執事みたいな事をしたようにしか!」

これ以上この場を混乱させるのは望ましい事ではない。そのため、早く立ち去ろうとするが、また窓の外で何かが光ったかと思うと今度は土道の視線の先にいた、亜衣、麻衣、美衣の服装がハラリと解ける。

「きやああああ!!」

「ちよっと! 何すんのよ!!」

「身ぐるみ剥いでやるからなああ!!」

三人共に必死に身体を隠し、土道に怒りの籠った視線を向ける。服が解けるこの現象、土道と蓮はすぐにこれが七罪の仕業だと理解した。

「お、おい…やり過ぎだぞ五河…」

「馬鹿! こつちに来るな!!」

蓮の忠告も虚しく、近づいてきた殿町の服装もバラバラになる。いきなり全裸となった殿町は仰向けに倒れこんだ。こうなってしまうと教室中がパニックと土道への非難に満ちる。

「いや、違うんだ! これは…」

必死に弁解を考える土道だったが、そうしている間にも教卓に立った珠恵の服装もバラバラとなる。本人は土道への非難の眼差しと共に出席簿で胸元を隠す。それを見た蓮は、ASTにいる自分の後輩に対して罪悪感にかられる。

「ここにいても被害者が増えるだけだ! ここは引くぞ!」

「あ、ああ! 七罪の仕業だ、これは!」

急いで小さくなった十香、夕弦、耶具矢を無理矢理抱え込み、土道と共に教室を出て行く。下手に暴れられない以上、今はそうするのが

最善の選択だろう。とんだホームルームになったと蓮は心の中で皮肉を思うのだった。

## 51話

教室でクラスメイトの服装を剥がされるといふ事件を始め、そこから執拗に七罪の嫌がらせは始まった。その日以来、土道と蓮は可能な限り一緒にいるようにしたのだが、ひとたび買い物に出ると土道の服装が変化したり、周りを歩いていた通行人が変身するなど事件が連発した。

極め付けは、五河家が大人のホテルや風俗店のようになるという笑えないものだった。

「あああああ……おとおお……」

リビングのソファで死体のように寝ている土道の口から意味のない言葉が漏れる。それは数日間の疲労が原因だった。

「シドー、だいじょうぶか？」

「気持ちに分かるが、すっかりしろ。気力を失ったらそこで終わりだ」となりに座っている蓮が、膝に乗せた十香と共に労いの言葉をかけてくる。その後ろでは折紙以外の精霊達が心配そうに土道の事を見つめている。

「ああ……大丈夫だ。蓮も悪いな、お前がいなきやもつと大変な事になつてたと思うし……」

街中だろうと容赦のない嫌がらせが土道を襲ったが、それを助けたのが蓮とヘラタトスクだった。土道が社会的に抹殺されそうな状況になると、素早く蓮が美九の〈破軍歌姫<sup>ガブリエル</sup>〉から生まれた盾と剣へマクイルを展開、周囲の人間を音で支配下に置く。

本音を言えば、あまりこのような使い方はしたくないのだが、贅沢は言えない。そうやって人の目を避け、土道を安全な場所にまで連れて行った後、その後処理をヘラタトスクがやる。これがここ数日の流れだった。

不思議なのは、土道への嫌がらせは山ほどあるのに対して、一緒にいる蓮への直接的な嫌がらせが一つもない事だ。

「確か、ヘフラクシナスの方で七罪の行方を追ってるんだっけ？もうすぐで七罪の霊波の反応を掴めそうって解析官殿が言ってたじゃん。

あと少しの我慢だ」

「そりゃあそうだけど…なんで七罪の行動を待たなきゃ計測できないんだ…。他に方法があるような気もするんだが…」

「まあ、狩猟においても困ってものは役に立つんだよ。当然、その意図を相手に知られないようにする必要はあるが」

十香の頭を撫でながら、士道に今の重要性を解説する。そういうものかと思い、士道はなんとなく窓の外に顔を向ける。すると、その視線の先で何かキラリと光る。それは「贗造魔女」の変身能力発動のしるしだった。

それに士道が目を見開くと同時に、リビング、士道、十香達の姿が淡く発光して姿を変ええる。光が止んだ時、士道は貴族のような煌びやかな服装に変わっており、その手には鞭を持っていた。そして十香達はバニーガールのようなレオタード姿と網タイツとなって、頭とお尻には様々な動物の耳と尻尾がついてある。

室内でこうなったのなら、まだマシだったのだが問題は家の壁が動物園にあるような檻へと変わっていて、室内の惨状が外にいる人間に見えるようになっていたのだ。檻の上には『僕だけの動物園』とあり、警察まったなしの状態だった。

「な、なんだこれは…!?蓮!どうにかしてくれ!」

変態臭が漂うこの状況から、助けを求めるように蓮の姿を探す。その人物は外から見えないリビングの外から申し訳なさそうに士道を見ていた。

「悪い士道…、流石にこれはどうにもできない…」

「れええええん!!!」

頼りにしていた人間の、まさかの裏切りに思わず叫んでしまう。その時、士道がつけていたインカムに通信が入る。それは「フラクシナス」にいる令音からだった。

『…シン、七罪の居場所が分かった。そこから約一キロ先の建設中のビルだ』

「そんなところから…。蓮!令音さんの言っていた場所に一緒に…」

士道はそこまで言いかけて言葉を止める。なぜなら、蓮がさっきま

でいたはずの入り口には、誰もいなかったからだ。

人気の無い山中、そこには数人の人影があった。そのうち、二人は地に降り、残りは空に浮いている。いや、地に降りているという表現は間違っではないが、二人の内の一人は地に這いつくばっているという言い方が正しいかもしれない。

「さて、どうしましょうか。私としては、生け捕りでも構いませんが……」

地面に立つ十八歳ほどの少女、エレン・メイザースが手の持った剣と共にその言葉を、目の前にいる女性に向ける。その女性は、二十代の中盤ぐらいの年齢で、スラリと伸びた手足、小さく、魅力的な顔と街を歩いたなら誰もが振り返る美貌だ。

「……ッ！だア……す……け、て……、死に……だぐ……な……い……」

だが、今の状態なら、見惚れるよりも救急車を呼ばれる方が先かも知れない。今、彼女を守るはずの霊装が切り裂かれ、胸部から腹部の傷から血が噴き出しているからだ。その傷を負わせたのは、目の前にいるエレンだった。

「執行部長殿、どうしますか？」

上空で待機していた魔術師達ウィザードがエレンからの指示を求める。

「生かして連れて行きましょう。この傷なら問題無いと思いますが、〈ウェイッチ〉は面倒な能力を持っています。念のため四肢を落としておきましょう」

エレンは〈ウェイッチ〉：七罪に向けた剣を上振り上げる。この剣が降り下ろされれば今以上の痛みが七罪を襲うだろう。その痛みに耐えるように七罪は思わず目を閉じ、奥歯を噛みしめる。

七罪のその行動を合図のように、エレンが剣を振り下ろそうとした瞬間、彼女の左目の視界の端に、キラリと何かが光った。反射的と言っているいい反応で、素早く剣をそちらに向け防御の構えを取る、同時に何かが構えた剣に当たり上に弾き飛ぶ。

「ッ!? 一体何が……!」

事態が分からなくとも、エレンはスラスターを稼働させ、素早く部

下の魔術師たちと合流する。そのエレンと入れ替わるような形であ  
る人物が七罪の前に立つ。ただ、エレンとは違い七罪には背中を向け  
ていた。

「あ…あなた…は…」

いつまでも来ない痛みを不思議に思い、目を開けた七罪がそんな声  
を漏らす。白い髪、白い肌、そして、両手に装備された青と白の金属  
質な輝きを放つ籠手。

「かの有名なアーサー王は、自身に仕えた円卓の騎士であり、息子でも  
あるモルドレッドの叛逆により滅びた。まるで俺とあなたのようにで  
すね。この運命は…」

それこそ、物語でも読んでいるかのようには彼は笑う。それを見たエ  
レンは、目を細め鋭い視線でその顔を見る。

「…ですが、最後の最後に勝つのはアーサー王で、敗れ去るのは  
モルドレッドです。そんな昔話のように、今は甘くはありませんよ、  
ジエイク」

そう言うのと手に持った剣を地上にいる蓮に向ける。それを見た蓮  
は両手を前に差し出す、するとそこに二つの短剣が降ってきて手中に  
収まった。この短剣は、さつきエレンが弾き飛ばしたものであり、そ  
れが落ちてきて持ち主の元へ戻ってきたのだ。

「未来は誰にも分からない。それこそ、俺とあなたの結末など神すら  
も分からないと思いますね」

人間を超えた力を持つ両者の視線がぶつかる。互いに容赦などし  
ない、相手を倒す事を目的とした闘いが始まる。

「エ、エレン様、私たちはどうしたら…」

思いもしない乱入者に、エレンの部下の魔術師たちが狼狽える。そ  
んな彼女達にエレンは顔を向けず、声だけで答える。

「あなた達はこの場で待機しててください。あれはあなた達の手  
に余る存在です。あと、命が惜しいなら手出しをしないように、邪魔と  
なるなら私はあなた達も切り捨てるつもりですの」

迷いなく淡々と答えるエレンに、魔術師達は怯える顔をする。その



間に、蓮は顔をエレンに向けたまま数歩後ずさり、右手を七罪の傷口に近づける。

すると、傷口に赤色の氷が張り付き、出血を止める。傷口から出ている血を凍らせて塞いだのだ。ある意味、血液に負傷時の役目をさせたとも言える。

「な…にを…してエ…」

「少し待っててくれ。あの人を倒して、すぐに治療してやる」

七罪は突然止まった出血と、傷口に感じる冷たさに疑問の声を出す。それに答える事なく、待ってろと言う。だが、伸ばした右手に何かが触れる感触がし、顔を向けると七罪が弱々しく蓮の右手を掴んでいた。

「ダメ…あい…つはア…つよ…い。あな…たもオ…ころさア…れ…る…」

見た事のない七罪の必死の訴え。顔を横に振り、戦うなど言う。そんな七罪に掴まれている右手を、蓮は装備している籠手越しに握り返す。

「大丈夫だよ、俺も強いから。そこでショーでも見る気分で待ってろって」

「おね…が…い…にげエ…て…。あなた…に…しんでエ…ほし…く…ないイ…」

「嬉しい事言ってくれるねえ。だけど、七罪が死んじや意味がないだろ」

七罪を安心させるように小さく笑うと、手を振りほどき前に出る。エレンは、空中にいたのにも関わらず地に降りてきた。高さというアドバンテージを捨てても勝てるという自信の表れだろうか。

「その余裕…後悔しますよ…」

どうやら、自分の評価は最後に会った時から変わっていないらしい。額に青筋を立ててそう言うのと、エレンは目を少し開き、意外そうな表情になった。

「おっと、珍しくミスをしました。私が同じ地に立つなど、あなたには贅沢過ぎましたね」

「fuck you!!!」

右手の剣を素早く逆手に持ち替え、エレンに対する話し方も忘れて二つの剣で斬りかかる。蓮は：いや、ジエイクは煽るのは良いが、煽られるのは嫌いだった。それを知っているエレンは、手に持つ剣で苦もなく攻撃を受け止める。

「本当に相変わらずですね。それでは私に勝てないと、何度も言っているでしょう！」

受け止めた剣を押し返し、蓮の体勢を崩すとその脚に向かって迷いのない斬撃を走らせる。蓮は、これをジャンプして回避、目の前にあるエレンの頭部目掛けて蹴りを放つが腕で防がれた。

「ちいーあなたも相変わらずですね！」

人間という粹組みの中で、最強の個体だと言っても過言ではない力だ。その事に悪態をつきながらも着地後、姿勢を低くし、右アッパーのように剣を走らせる。だが、エレンは僅かに後退し避ける。その結果エレンの目の前には空振りした右腕が晒された。

「その右手！もらいます！」

右手の籠手にエレンの鋭い一撃が入る。その一撃をもらった籠手は、傷口からヒビが広がり、やがて全体へと達してバラバラに霧散し消えてしまう。右腕の籠手が消えた事により、右手に握っていた剣も消える、つまり、右手には何もない状態となった。

「これで終わりです。所詮、あなたはモルドレッドでしたね！」

エレンは、無防備な身体の右側に向けて剣を振り下ろす。左手を動かして防御させる隙も与えない速さだ。そのまま蓮の身体に縦の傷口が刻まれるかと思いきや、その剣は途中で止まる。

その理由は単純。へバスターに変貌した右手が、エレンの剣を掴み止めているからだ。

「：美しくありませんね。敵の得物を素手で掴むなど」

「死んで美を語れるかってんですよ。最終的に勝った奴が正義ですからね!!」

掴んだ剣を強引にエレンの前から退かし、正面をガラ空きにしたと同時に左手に握った短剣を捨て籠手だけの左腕をエレンに伸ばす。

その途中、籠手が稼動し隠されたブレードが出現する、その狙いは当然、エレンの頭部だった。

「っ!?!くっ!!」

時間にして三秒もない必殺の一撃。普通の魔術師<sup>ウィザード</sup>では反応すらも出来ないであろう一撃に、エレンは反応して見せた。鋭い反射神経で素早く顔を右に動かす、結果、ブレードはエレンの左頬に一筋の傷をつけ通り過ぎた。

「チッー」

結果を見る前に感覚で避けられたと感じ、素早く後ろに飛んでエレンから離れる。その二秒後、いた場所にエレンの剣が通り過ぎた。蓮が離れたのを確認したエレンは、自分の左頬に触れてその手を目の前に持つてくる。指先には赤い液体が付着していた。

「…私の顔に傷をつけるとは、高くつきますよ」

「跡が残らないと良いですね。女性の顔に傷をつけるのは良くないとあなた相手でも思いますんで」

顔に傷をつけられ、怒りに震えるエレンと彼女を挑発する蓮だが、内心舌打ちしたい気分だった。氷を操る籠手へウィトリクは能力の他に籠手にある隠し武器が長所の武器だ。その武器の長所…切り札を一つ使つて与えたダメージが頬の傷だけなど笑えない。

(せめて、耳を削ぎ落とせてたらなあ…)

未練たらしくそう思いながら、蓮は左腕の籠手と剣、右腕のへバスターを解除し、光へと還す。しかし、これは降伏を意味しているのではない。すぐに蓮の背中が光だし、生み出された粒子が左右の腕に集まり形を作る。

光が止んだ時、左手には腕までを覆い隠す大きさで表面に金色の模様が刻まれている銀色の盾、右手にはその対をなすであろう銀色の剣。新たな武器へマクイルの出現にエレンは目を細める。

「私の見たことのない武器…。良いでしょう、あなたの持っている隠し玉を全て暴いて見せます。その時があなたが地に伏せる時です」

その宣言に不快感を感じながら、蓮は盾を前に突き出しエレンに向かう。盾が前に出されている以上、それを退かす事から始まる。そう

考えたエレンは、蓮のバランスを崩す事も考えて剣で盾を大きく打つ。

急に来た大きな力に蓮は足を止めると予想したが、動きを止めたのはエレンだった。何故ならエレンが盾を叩いた瞬間、盾から大音量の音が発生し顔を響めさせると同時に動きを硬直させた。そのタイミングで蓮は右手に持った剣で斬りこむがエレンは剣で受け止めて防ぐ。

だが、防がれても蓮は攻撃を止めない。最初の一撃を始めに鋭い連続攻撃でエレンを追い詰めていく。時には盾でエレンを押し込んだりと一つしか剣がないのにも関わらず、二つの剣を持っているような戦い方だ。

「不快ですね…あなたに追い詰められるとはっ!!」

今の流れが気に入らないエレンは、それを断ち切るかのように横に大きく振り払う。剣が薙ぎはらわれたたった一瞬、その一瞬のうちに蓮の姿は目の前から消え、宙に浮く盾と剣だけが残される。

「っ!?!何が…」

消えた蓮は、いつの間にか倒れている七罪の側に立っているのが見える。だが、すぐにそれを気にする余裕はなくなった。何故なら、宙に浮いていて、誰も持つてない盾と剣がエレンに攻撃をしてきたからだ。

「くっ…さっきから小細工を…」

まるで透明人間がいるような〈マクイル〉の連携に苛立ちを露わにするエレン。少しの間エレンの相手をした〈マクイル〉は、フィニッシュにエレンの剣を上打ち上げて、体勢を崩したところで蓮の元へと戻っていく。

「…おかしな手品はここまでです。今度はこちらから行かせてもらいます」

剣先を蓮に向け、踏み出そうとした時、エレンの前に小さな女の子が飛び込んでくる。その少女は身の丈ほどの剣と淡く輝く霊装を纏っており、その少女の正体は子供になった十香だ。十香の乱入にエレンは背後に飛び、距離を取る。

「れん、いまだ！そいつをつれていけ！」

エレンの注意を十香が引いてくれている。その隙に、蓮は七罪をお姫様抱っこすると、人間離れした跳躍力で山から飛び出す。飛び出す瞬間、蓮の耳に勇猛な雰囲気と、周囲の気温が急激に下がるのを感じた。

それを見て自分がいなくとも問題ないと思った瞬間、蓮と七罪が上方に引っ張られる。ふと七罪の方を見てみると目を閉じ、ぐったりとしていた。死んではいない、気を失っただけだ。それを確認すると同時に、七罪の身体が淡く発光して形を変えていった。

## 52話

七罪を救った蓮は現在、組織へラタトスクンが所有する地下施設の廊下を歩いていた。カツンカツンと足音が響き、その音が止んだ時、蓮の目の前にはドアがあり、開けると白衣を着た三十代ほどの男女数人が忙しそうに動いており、その中央には酸素マスクをつけられた少女がいた。

エレンの襲撃によって、重傷を負った少女：七罪は、蓮が救出した後、ヘフラクシナスから組織の所有するこの施設に送られて治療を受けていた。蓮は移送について来ていたのだ。

「ちよ、ちよつと君！ここは医師以外の立ち入りは禁止されてるわよ！」

蓮に気づいた女性の医師が、出て行くように言うが、それを無視し部屋の中に踏み入ると全員に聞こえる声で話し出す。

「悪いが、この部屋にいる医師は今すぐ出て行って欲しい。彼女の治療は俺一人でする」

その言葉に、室内にいる皆がざわざわと騒ぎ出す。予想外過ぎる発言に呆気にとられていた医師だったが、すぐに我にかえると、蓮に突っかかってきた。

「あなた、何言ってるの!? 一体どんな権限があつてそんな事：つていうか、どう見てもあなたが医者に見えないんだけど！」

まあ、当然の反応だろう。医者に患者を投げ出せと言う蓮の方が異常なのだ。そのプライドを刺激されたからか、怒り心頭と言った様子で続けてくる。

「それに！傷は<sup>リアライザ</sup>顕現装置で治せるとはいえ、その後も処理する事があるの。それを一人でするなんて無理よ！」

「それは心配しなくて結構。<sup>リアライザ</sup>顕現装置は使わない、それよりもノーコストで時間のかからない治療法があるから」

まさかの回答に相手も顔に動揺が浮かぶ。現代で<sup>リアライザ</sup>顕現装置は『魔法』と呼んでも過言ではない技術だ、それを蓮は否定した、それより良いものがあると。

「…一応聞いておくけど、その方法ってどういうもの？詳しいやり方を教えてくれないかしら？」

「悪いがそれらは教えられない。言えるとしたら、俺を信じて欲しいくらいかな」

「…話にならないわね」

もはや呆れも通り越したと言った様子だ。これ以上は時間の無駄と考え、自分の仕事に戻ろうと背を向けるがその背中に向かって『ストップ』と蓮の声がかかり、足を止める。

「あなたは根本的な部分から勘違いしているようだから言っておくが、あんた達への退室命令は、ヘラトスクン上層部から下された命令でもある。これが証拠だ」

そう言って、蓮は一枚の書類を取り出し見せる。そこには確かに自分達の退室を命じる内容と、ヘラトスクンの最高意志決定機関である『円卓会議』の議長のサインが入っている。普段、自分達には来るはずのないトップからの命令に目を見開く。

「なんであなたが…そんなものを…」

「へえ、やっぱり、かなりの権限がある奴からのサインらしいな。これをとってきた司令官殿の評価を改めなくちゃな」

不満がないと言えば嘘になる。だが、自分も組織に属する人間、ならば私情で命令を拒否する事は出来ない。悔しそうに歯を噛みしめると、室内のスタッフ全員に告げる。

「みんな、聞いていたでしょ？上層部からの命令で私たちはここを退室するわ。あとは彼に任せましょ…」

どうやら目の前にいる女性は、この場の責任者だったらしい。すんなりと事が通って良かったと感謝しつつ、部屋を出て行く医師たちを見送る。そして、最後に責任者である彼女が残った、目を見るだけで分かる、不安と悔しさが混ざっている様子だ。

「気休め程度だが、一応言っておく。ちゃんとあんた達の仕事を完遂するよ、まあ、その方法は言えないが」

それは相手を安心させたいという本心からの言葉なのだが、彼女は、蓮を睨んだ後ドアの方へ歩いていくがその途中で口を開く。

「あと、これはアドバイスなんだけど…あなた、年上に対しては敬語を使いなさい」

負け惜しみとも言えるような言葉を残して部屋を出て行った。一人だけとなった蓮は、大きいため息をした後額に手を当てる。なぜ自分は相手を怒らせてしまうのだろう。昔はもつと上手く話せていたような気がするの。だが、医療チームを退室させたのにもちやんとした理由がある、彼女達も人を救うのを使命としているなら、必要な事だったと我慢してもらおうしかない。

部屋の中央では酸素マスクをつけた本当の姿の七罪が眠っている。そばにあるモニターには心電図が表示されており、見た限り命に関わるほどの重傷ではないようだが、それは放置する理由にはならない。蓮は歩みを進め、七罪が寝ているベッドの脇まで来るが、治療する前に部屋をぐるっと見渡す。その理由は部屋に設置されているであろうあるものを探しているからだ。その予想は的中し、部屋の天井端で視界が止まる。

そこには赤いランプが光っている監視カメラがあった。やはりこれほどの組織だったら顕現装置リアライザのある部屋にカメラを設置していると考えていた。

（これからする事は、ヘラタトスクあんたらに見られると都合が悪いんだ。そのカメラ、潰させてもらう）

そう心の中で呟くと、蓮は青い瞳でカメラをジッと見つめる。すると、カメラ本体に冷気を放つ霜が張りついていく、霜の侵食はどんどん広がっていきレンズを完全に覆い尽くし赤いランプが点滅し、やがて消える。

「そのカメラの修理費は、七罪の治療でチャラってことで。精霊を救う事が目的のヘラタトスクにとつては願ってもない事だろ」

カメラが完全に止まったのを確認すると、蓮は右手をへバスターへと変貌させ、酸素マスクを外した後、その指先を七罪の傷口に触れて意識を集中する。すると、へバスターの光が糸のような形を作り、傷口に吸い込まれていく。それはまるで傷口を縫うかのように動き、光が止まった時には傷はまるで最初から無かったかのように消えてい



た。

七罪の傷の治癒と同時に、蓮の身体に立っていられないほどの脱力感が襲い床に膝をつく。それに舌打ちしながら、近くにあったイスにしがみつきぎこちない動きで腰掛ける。

「はあ……この身体は一体なんなんだ……」

ずっと気になっていた疑問、それを言い、左手で服越しに背中に触れる。自分の正体を知る、それは蓮が生きる上での目標のようなものだった。その一環でヘラタトスクへに入ったはずが随分と遠い回り道をしているものだ。

「本当に俺は一体何だろうな、本当に……」

人間が死ぬのは宇宙が決めたから、そう考える蓮は人間が生まれるのにも理由があると考えている。もしその通りなら自分が生きているのにも意味があるという事となる。だが誰の腹から生まれたかも知らず、お世辞にも普通とは言えない身体の自分にその説は通用するだろうか。

そこまで考え、蓮はハツとなつて誤魔化すように勢いよく首を振る。

（何を言ってるんだか……それじゃあ十香達や目の前にいる七罪に生きる資格が無いって言ってるようなもんだろ……）

普通では無い存在への疑問は、自分だけでなく十香達精霊への疑問にもなってしまう。それではヘラタトスクにいる資格など無いと考える。

（まあ、何にせよ自分が出るのは十香達精霊の為、剣を振る事ぐらいだ）

人を理解出来ないなら、十香達を守る為戦う事しか思いつかない。他者を救う為に剣を持つ、自分を納得させる言い訳にしては悪く無い内容だ。身体に力が戻り始めた頃、目の前で寝ている七罪から声が漏れる。

「づうん……あああ……」

そんな苦しそうな声と共にゆっくりと目を開ける。目覚めて数秒、ぼんやりと宙を見ていたが急に目を見開き覚醒すると素早く身体を

起き上がらせ蓮を見た。その顔は動揺している。

「随分と落ち着かない目覚めだな。もう少しゆっくりしても良いと思うが…」

「あ、あんた…なに…わたし…なんで…どうなって!」

混乱で七罪の口からは支離滅裂な言葉しか出てこない。そして、今の自分の姿がモデル体型のお姉さん姿では無いと気付いた時、その動揺は頂点となった。

「ッ!!ハッ!〈贗造魔女〉!!」

反射的とも言つていい動きで手を宙に掲げ、天使の名前を叫ぶ。おそらく天使の力でこの状況を切り抜けようと考えたのだろう、しかし、七罪のその考えを否定するように〈贗造魔女〉はその手に現れなかった。

「〈贗造魔女〉!そんな…どうして…」

「たぶん、傷が治ったばかりで天使を使えるほどの体力が身体に無いんだよ」

七罪の疑問に答えたのは蓮だった。七罪を治療する時、命を第一に考えていたので傷は治っても失われた体力の回復にまで手が回らなかった。つまり、傷は無くなっても七罪の身体はエレンに傷を負わされた時から回復していないのだ。

そう説明すると、七罪は歯を噛み締め近くに掛けてあった毛布をひたたくるように掴むと、部屋の角へ走り出し、手にした毛布で自分の姿を隠してしまう。別に礼を言っただけで欲しくて助けたわけでは無いのだが、この反応は流石に傷つく。

「別に取って食おうってわけでも無いだろうに…」

七罪の治療の時とは別の疲れが出てくるのを感じながら、部屋の隅っこで小さくなる七罪に近づく。すると、七罪は毛布から目だけを出し、隠れ潜む兵士のような格好で蓮を見る。

「なっ何よ!この不細工な顔をもっと近くで見たいと思っただけ!?私だって好きでこんな顔している訳じゃ無いんだから!」

こちらは何も言っていないのに聞かずに、そんなマイナス発言をして蓮を睨みつける七罪。改めて見てみると、不健康そうな生白い肌と

小さい身長、手入れの行き届いていないヘアースタイル。確かに、今の七罪は魅力的とは言えないが、髪は切り揃えて整えれば良くなるし肌もメイクで綺麗なように見せる事も出来る。

完璧な女性などそうそう居ない。美しい白鳥が水面下で必死にバタ足しているように、この世の女性は陰で綺麗になろうと努力しているものだ。

「はあ……とりあえず、まだ安静しておかなきゃならない状態だから暴れるのはやめておけ。あとその姿でも魅力はあると思うぞ」

主に副艦長殿の好みにストライクだよな……。それを口に出さず、ベッドに戻そうと右手を伸ばす。だが、それは七罪の右手によって弾かれた。

「ふんっ！お世辞なんて言わなくてもいいわよ！素直に言ったらどう？見るに堪えない顔だって！あんたみたいな整っている顔の奴から見たら、私なんてそんなもんでしようよ！」

蓮の言葉を聞き入れず、ひたすら拒絶の二文字だ。そんな七罪の態度のため息を一つした後、ブンブンと動き回る七罪の手首を右手で掴む。その行動に七罪は続いていた言葉を止め、『ひッ！』と声を出した後、蓮を怯えた様子で見る。

「日本には『となりの芝生は青い』という言葉がある。自分より、他人の方が良く見えるという意味だ。だが、七罪、お前は違う。いい加減に他人の見たいたいところだけを見るのはやめろ。こっちが不愉快になる」

声を荒立てること無く、鋭い瞳で七罪を睨みつける、その目に七罪は動けなくなつた。七罪は顔や声、仕草、性格など外側だけを見ていたらしいが、それだけでその人物を理解したつもりになっているとしたらそれは大間違いだ。

七罪とのゲームの時、七罪は『蓮の姿でこちらを楽しむ』と言っていた。しかし、蓮には因縁の相手としてエレンがいる。彼女と蓮の姿となつている七罪が対面したらどうなっていただろう、恐らく本人ではないとバレたら問答無用で首を切り落とされて終わっていた。もつともこの事は七罪をさらに怯えさせる事となる為、言わないでお

く。

「分かっていると思うが、お前は危機一髪のところを士道たちに救われたんだ。自分自身をもっと大切にしてくれよ」

「ぜ、善処するわ…」

NOとは言わせない雰囲気に七罪はそう答えるしかない、その答えを聞いた蓮は七罪をお姫様抱っこして抱えると、ついさつきまで眠っていたベッドにまで連れて行く。後は琴里たちに七罪の目が覚めたという事を伝えればいい。

部屋にある電話でそれを伝えようと歩き出すが、その背中に七罪の声がかかる。

「ねえ…なんで私を助けたの?」

その言葉を聞いて蓮は振り返るが、七罪は蓮の方を向いておらず俯きながら、膝にかかった毛布を握りしめている。

「まさか、助けてくれない方が良かった…なんて言い出すんじゃないだろうな」

「ち、ちがうわよ…。ただ…なんであんな危険な目にあっても私を助けてくれたのかなって…」

小さな声で控えめな言い方で七罪はそう聞いてくる。なんとも返答に困る質問だが、無視するところなくさつきまで座っていた椅子に戻る。

「私、色々と酷い事したじゃない…。あんたに至っては〈贗造魔女〉の中に閉じ込められたのになんで…」

改めて聞かされると確かになんで助けたのか疑問になる。精霊を助ける事を目的とした組織〈ラタトスク〉に所属しているからと考えられるし、ただ状況に流されただけでも言える。しかし、助けた時の自分の気持ちを思い出してこう答えた。

「まあ、別に深い理由なんてない。強いて言うなら”何も死ぬ必要はない” そう思ったからかな」

そうとだけ言うと言うと、蓮は立ち上がり部屋にある電話まで歩き、どこかにかけて始める。七罪は、そんな蓮の姿をジッと見つめていた。

## 53話

蓮のお陰で傷が完治した七罪はその後、同施設の隔離エリアに移された。隔離エリアと言っても七罪の病室も兼ねてあり、ストレスを感じさせるような部屋ではないのだが、意外にもその部屋に移される途中の七罪は不思議と大人しかった。

道中、蓮のお姫様抱っこをされながらも、天使が使えない今どんなに抵抗しても意味がないと悟ったのかも知れない。

そして今、六月に力を取り戻した琴里が入れられていた場所とよく似た構造となっている隔離エリアの扉が横にスライドして開いた。

「七罪ー、入るぞー」

そう言っただけで入ってきたのは湯気の立つ皿をお盆に載せた蓮だった。だが、扉が開くと同時に眉を顰めた、なぜなら部屋の床には枕やクッション、ぬいぐるみなどが散乱しており、ベッドの上にいる七罪は『はああ…はああ…』と息を乱していた。

「どうしたんだ？そんなに疲れた様子で…ていうかこの部屋の惨状は…」

「いや…なんでもないの…。ちよつと色々あつてね…」

ちよつとなのか色々あつたのか分からないが、とにかく聞かれない事なのだろうと悟りこれ以上聞くのはやめておく。とりあえず部屋がこんな散らかっているのは気に入らないため、お盆を右手で持ち、空いた左手の人差し指をまるで杖のようにクルリと振るう。

すると、室内に小さな竜巻が無数に発生し、床に散らばったぬいぐるみや枕などを巻き込み、元あつたベッドの上に戻し、枕やクッションは七罪の腕の中に移動させる。ひとりで戻ってきたぬいぐるみや枕に七罪は少なからず驚いている様子だ。

「さて、腹減ってるだろ？胃と体に優しい雑炊を作ってきたから」

七罪の驚きを気にもせず、手にしたお盆を彼女の目の前に置く。皿から立ち上がる湯気が七罪の鼻に当たり、同時に食欲をそそる香りを感じさせる。それに七罪はゴクリと喉を動かす。

「べ、別に空腹ってわけじゃあ…」

そう言い、顔を料理から背ける七罪だが、顔を背けつつもチラチラと雑炊の方を見ているのに蓮は気づいていた。そんな可愛らしい行動に微笑を浮かべていると、七罪のお腹から『グウ』と胃袋が抗議を出した音が聞こえ、顔が真っ赤に染まる。どんなに言葉で否定しようとも身体は正直なのだ。

そんな恥ずかしさを誤魔化すようにお盆から皿とレンゲを素早く掴むと、勢いよく口に雑炊をかき込む。だが、湯気を放つようなものを一気に口に入れるとどうなるか予想つくだろう。

「あっちゃあああ!!」

そんな声とともに七罪は口に入れた雑炊を吹き出し、ゴボツゴボツと咳き込む。蓮はそれに驚きつつ、七罪に水の入ったコップを渡し、部屋にあるティッシュ箱から数枚のティッシュを取り出し、飛び散ったご飯粒を掃除する。

「誰も取らないから、そんなに焦って食べるなって…」

「くっく…こんな料理ツ…こうしてツ…!!」

そんなわけの分からない事を言いつつ、七罪は雑炊と水を交互に口に入れていく。やがて、皿の中身は何も無くなり、水の入っていたコップをお盆に置く。エネルギーを補給するための食事だったはずなのに、なんだか逆にエネルギーが消費された気がするの不思議だ。

「そんな風に豪快に食べられる力があるなら、すぐに良くなるな」

「な、何よ…。分かってるわよ、品のない食べ方だとも言うんでしょ。でも…」

顔を俯け、蓮に聞こえない程度の音量でブツブツと何やら呟く。その内容は自分自身への恨みごとで満ちているのだろう。相変わらずの七罪にため息が出てくるが、ふと思いついた遊びでそんな思いは吹き飛ばす。

「なあ七罪。前にお前の天使の〈贗造魔女〉に吸い込まれた後、謎の場所を漂ってたんだよ」

独り言のように言ったその言葉。七罪はそれを聞いた瞬間、ビクツと身体を震わせ狼狽した様子で顔を上げる。その顔を文字で表すな

ら”驚愕”と表現するのが適切だろう。

「身体が動かなくて、目も開けられなかったから具体的にはどんな場所かは分からないんだが、ある時、漂ってた俺に誰かが触れてきたんだ。動けない俺をぬいぐるみみたいに弄んでな、触られた感触からして女って事は分かってるんだが、誰か記憶にない？」

「そんな…〈贗造魔女〉の中では意識は無いはずじゃあ…」

そこまで言いかけて気づいた七罪は、ハツとなって慌てて口を手で塞ぐ。だが、そこまで言いかけてはもう遅い。蓮はニヤリと笑うとまるで蛇を思わせるような動きで七罪の背後に回り、ギョツと抱きしめる。

「〈贗造魔女〉は七罪の天使だから一番詳しいよな？誰が俺を好き放題してたか教えてくれるか？別に怒ったりしないから」

耳元で囁かれた言葉が耳から入り、脳を震わせるような錯覚を感じ拒否することが出来ない。顔を赤く染めた七罪の口が、自分自身への意思とは関係なく、勝手に動き出す。

「あの…その…そ、れは…わた、…わたし…」

言ってしまったという後悔から、顔がさらに熱くなる。その自白を聞いた蓮は、『へえ…』と呟くと、右指で七罪の顎をクイッと上げ、耳元にさらに口を近づける。

「やっぱり犯人はお前<sup>七罪</sup>だったか。なら、聞かないわけにはいかないな。あれだけ危険視していた俺に何をしていたか言ってみろ」

「えっと…あの…肩に触ったり…顔に…ふ、触れたり…」

「それから？」

「ふ、服の中に…手を侵入…させたり…肌を…な、ななななめ…って！  
言えるかああああ!!!」

さつきまでの恥ずかしがっていた態度はどこへいったのか、七罪は大声とともに立ち上がると、自分の髪を乱暴に掻き乱す。その様子から限界というものを越えた先へと行きかけたのだろう。

(ちよつと遊びすぎたか…)

一応病人である七罪に悪い事をしたなど、蓮は反省し、ベッドの上で奇声を上げる七罪を落ち着かせにかかるのだった。

「あの二人は何をやっているのかしら…」

七罪の隔離部屋兼病室に設置された監視カメラで、別室から部屋の惨状を見ていた琴里はそんな声を漏らす。その隣には愛想笑いを浮かべる土道と、いつもの眠たそうな顔をする令音が立っている。気になるのは五河兄妹共々、顔に引つ掻き傷がある事だった。

「…シン、七罪の命が無事だった事を喜びたい気持ちは分かるが、我々にはタイムリミットがある。あまりゆっくりしてられない」

「タイムリミット？なんですかそれ？」

「七罪の体力が完全に回復する時間。正しくを言えば、天使が使えるようになる時間かしら」

土道の疑問に答えたのは琴里だった。今、七罪がこの施設で大人しくしているのは、エレンに負わされた傷が原因で一時的に天使が使えなくなっているからだ。言い方を変えれば、天使が使えるようになったらこの場所を出て行ってしまおうだろう。

「タイムリミットは長くて二日。この間に七罪のコンプレックスを解消して、打ち解けないと…。そうしなきゃ、霊力を封印出来てもすぐに逆流しちゃうわ」

「でも、霊力を封印するにしても、七罪は俺と話すのも嫌がつてるしな…」

七罪と打ち解けるには、強烈なコンプレックスを解消するにはどうしたらいいか。土道と琴里は兄妹揃って、頭を悩ませる。そんな中…。

「…これは…」

部屋に備え付けられたモニターを見た令音は、目を見開き小さく驚きの声を出した。

「なあ、七罪。今日は少し部屋の外に出てみないか？」

次の日の朝。朝食を食べている七罪に、蓮はそんな事を聞いた。それを聞いた本人はパンを咀嚼しながら顔を顰めごつくんと口の中のものを飲み込む。返答を聞かずともどんな心情がなんとなく伝わ



る。

「べ、別に出なくてもいいわよ…。部屋の中にいる方が落ち着くし：それに、私がここを出るなんて許されないでしょうし…」

『許されない』と言ったあたり、キチンと自分の境遇を理解しているようだ。だが、蓮は優しく微笑むと首を横に振った。

「いや、七罪が部屋を出る事はちゃんと許可が出てる。それに、部屋の外に出るって言っても外の空気を吸いに行く訳じゃない。あくまでこの施設を歩かないかってことだ」

外を歩いてまたエレンなどの襲撃されてはたまらない。そうならない為、〈ヘラタトスク〉が所有するこの施設内を少し歩こうという訳だ。

「まあ、本音を言うと七罪に来て欲しい場所があるんだ。そこに運動も兼ねて一緒に行こうって意味」

「どこに連れて行くの…？まさか…私を鍋にでも放り込んで食べるつもりじゃあ…」

怯えた様子でそんな事を口走る七罪を見て、蓮は思わず笑ってしまった。それを見た七罪は、蓮はそんなつもりで自分を誘っているのではないのを理解すると同時に、自分が勝手に一人相撲をしていたと認識し、顔を赤くする。

「違う違う。何かは行ってみたらのお楽しみだ、だけど絶対に損するようなものじゃないっていうのは保証するよ」

それをいう蓮の様子からは嘘は感じられない。そう思い、七罪は渋い顔をしながらもコクリと頷いた。

綺麗に清掃され、天井の電灯を反射する廊下を蓮と七罪は歩く。今歩いている廊下は一般人から見てもなんの変哲も無い場所であるのだが、堂々と歩いている蓮と比べ、七罪はまるで地雷が埋まっている場所を歩いているのかと思うほど周囲を警戒し、ビクビクと怯えている。

そして施設の廊下を歩いているのだから、当然この場所に勤めている人間とすれ違う。その度、七罪は慌てて蓮の後ろに回り自分の姿を

隠していた。まあ、それが逆に見られる理由となっていたのだが。「もつと堂々としてればいいだろ。大人の時の姿のあの余裕はどこに行っただよ」

「いや…あれは精神的な余裕からあなるっていうか…本来、私…注目されるの苦手だし…」

大人の時の様子を言われると弱いのが七罪だ。言い訳っぽく本来の自分を説明している途中で、蓮は七罪の頭を優しく撫でる。

「七罪、この世界には自分の事を見て欲しくても誰も見てくれない、見られる機会も与えられない奴もいるんだ。それと比べたら七罪の悩みは贅沢なもんさ」

蓮が自分を叱っているというわりにはどこか儂げな雰囲気を感じさせる言葉だった。その真意を理解出来なかった七罪は首を傾げたが、やがてもしかしたらという様子で口を動かした。

「ねえ…蓮、あんた、もしかしたら…」

それが言い終わる前に、蓮の足が止まり、それにつられて七罪も歩みを止める。そこには大きなドアがあり、どうやらここが蓮の言っていた自分を連れて行きたい場所だったと察する。どうやらそれは当たるらしく、蓮はドアに手を掛けた後七罪を見る。

「この部屋には七罪の自分自身の見方を大きく変える出来事がある。だから…逃げないでチャレンジしてほしいんだ」

「私の方を変えて…一体何が…」

「まあ、それは自分の目で確かめてくれ」

そう言つてドアを開ける。一体何があるのかと不安八割の心で部屋の中を見ると、室内は暖色系の明かりで照らされ、花のような良い香りが辺りに充満していて、中央には一人が横になれそうなベッドが設置してある。そのベッドの傍らには看護師のような格好をした見知った少女が立っている。

「はぁーい、一日限定サロン、『サロン・ド・ミク』へようこそー！」

ベッドの傍らに立ち、笑顔でそう言った美丸を中心に、室内には士道、十香、琴里、四糸乃がいる。どういう状況なのか理解出来ない七罪だが、五人から注目されている現状に耐えられず、素早く蓮の後ろ

に隠れる。

「な、なによ…何なのよこれ…!」

「何って、さつき美九が言っただろ、エステサロン。肌を綺麗にするんだよ」

そう答えたのは、前に出てきた土道だった。蓮の背後から顔を出し、土道を睨みつけていた七罪だが、急に自傷気味に笑いながら唇を動かす。その言葉の内容は大方予想出来た。

「は…ははっ…なるほど、よく分かったわ!私の醜い姿を明るい場所で見つくり見て、笑いたいわね…。あんたもなかなか捻くれてるじゃない…」

「またそんなマイナスな事を…。土道はお前に対して話してるんだから、ちゃんと姿を見せろ」

そう言つて、蓮は七罪の前から退いて部屋の壁まで歩いて行つてしまふ。自分の姿を隠す盾が消えて狼狽える七罪だったが、開き直ったように再び土道をキツく睨みつける。

「ああ、もうっ!いいから早く横になりなさい。この後の予定も詰まってるんだから」

「嫌よ…なんで笑われると分かっててそんな事しなきゃ…」

いつまでも動こうとしない七罪に、琴里がベッドに横になるように言うがテコでも動かんと言った様子だ。そんな七罪を見ていた土道が口を開いた。

「じゃあ七罪、こう言うのはどうだ?俺たちは今日、考えつく限りの方法でお前を『変身』させる。それが成功したなら、俺たちの話を面と向かって聞いてほしい。でも、何一つ変わってないと思つたらもう自由、好きにして構わない」

「…好きにっつてどういふことよ?」

「そうだな…外に出してほしいとか、できる限りの望みを叶えるつていふのはどうだ?」

思いついた様子で言っている土道だが、できる限りという条件は、簡単に口にはできるのに対し具体性のないかなり危険な言葉だ。特に『できる限り』などを好意的ではない精霊に言うのは危ないだろう。

だが、もう言ってしまった以上は撤回する事は出来ない。目を細め、俯きながら顎に手を当てて思考している様子の七罪を見ながら、せめて無茶振りのない内容であるようにと願う。やがて、何を言うのか決めたのか、顔を上げる。

「あんたの言った事…本当？だったら…」

そう言いながら、七罪は腕を動かしかしある方向を指差した。偶然かその指し示す先には蓮が立っている。

「あれを…、蓮を頂戴…」

『…………ええええええええ!!?!』

小さく呟いた言葉だが、この場にいる全員の耳に届いていた。そして、数秒の沈黙後、驚きの声が室内に響き渡る。美九は目を輝かせ、十香と四糸乃、土道と琴里は互いに顔を見合わせ、蓮も目を見開き、少なからず驚いていた。

「蓮が欲しいって…七罪、あんたもしかして…」

「べ、別に大きな意味は無いわよ!!ただ、この場で一番力があるのはどう見たって蓮じゃない!そいつを手に入ればこんなところすぐに逃げ出せると思っただけだから!!」

顔を赤くしてそう叫ぶ七罪。だが、今一番困っているのは、そんな内容を了承して良いのか分からない土道だ。首を縦に振るべきか横に振るべきか悩んでいると、壁側にいた蓮が動き、七罪の前までやってくる。蓮は七罪の前でしゃがみ、彼女を見上げるような状況にした後に口を開いた。

「ああ、分かった。もし、ダメだったらその時、俺はお前のものだ。どんな命令でも従うよ」

嘘があるとは感じさせない、優しい言い方だった。それを聞いた七罪は、顔をさらに赤くして、美九が近くに立つベッドに歩いていく。七罪が蓮からある程度離れたタイミングで土道は当人に近づく。

「お、おい。できる限りって言った俺が言うのもなんだけど、本当にそんな条件を受け入れていいのか?そりゃあ、七罪を綺麗にチェンジさせる案はあるけど、絶対成功するってわけじゃあ…」

「あそこはああ言わなきゃ本人はOKしてくれなかっただろ。それに

…」

蓮はベッドに歩いていく七罪の後ろを見て、小さく微笑む。土道には、この微笑みの意味が分からず顔を顰める。

「それに、どんな複雑な境遇な奴でも変わるっていうのをこの目で見たかったんだ。初めは自分を否定しても、そこからゆっくり前に進んでいけるっていうのを…」

そうだけ言うと、蓮は部屋の出口に向かって歩いて行ってしまおう。土道にはその言葉の意味は分からなかったが、蓮は自分達を信じて身を賭けてくれているのだ。失敗は出来ないと考え、喉をゴクリと動かした。

## 54話

「なあ、狂三。狂三は自分の人生は何と一緒だと思う？」

八月のある日の夜。一緒のベッドに入っている少女、精霊である時崎 狂三に蓮はそう問いかけた。それを聞いた狂三は自分の胸元にいる蓮を一瞥するとその頭を優しく撫でる。

「人間ではないわたくしにする質問としては、なかなか興味深いものをお聞きしますわね。自分の人生について…ですか？」

人間を超えた力を持つ狂三にこんな事を聞くのは、自分はただの人間と同じ尺度で測られているように感じてしまい、不快かもしれないと思ったが、幸いにも狂三はそうは感じなかったらしく素直に話してくれた。

「わたくしはある大きな目的のために動いていて、それを達成するに より多くの力を求めていますの。わたくしの天使、ザフキエルは他者の時間を吸い上げ、それを糧とする…。故にわたくしは：他人の命を奪う事と共にあり続けなければならない。そう思いますわね」

蓮はその目的が何かとは聞かなかった。どうせ聞いても正直に答えてくれるはずのないと思っていたが、本当はそれを聞いた瞬間に狂三とのこの関係が終わってしまう、それを無意識に恐れていた。

自分の全てを知り、全てを理解した上で受け入れてくれた狂三との関係を終わらせたくない。心を惚けさせる声、人の視線を集める美しい容姿、そして、蓮を包み込む狂三の体温がそう考えさせる。十香や士道達ももちろん蓮にとって大きな存在だ、だが、二人は自分の全てを理解しているとは言えない。

「…俺の人生は、人の欲望と自分自身に対する恐怖と一緒だと思う」  
狂三の背中に腕を回し、強く抱きしめた蓮はそう言った。その言葉に蓮の頭を撫でる狂三の手がピタリと止まる。

「本当は他人となんか関わりたくなかった。自分の知らない場所に行くのはいい、だが、知っている場所でも見ず知らずの人間と会うのはどうしても好きになれなかった。そう思っていたら、そのうち軽口や

皮肉を言つて他人と距離を取るようになったんだ」

顔が見えないため、どんな表情をしているのかは分からない。蓮は顔を見せぬままそれを始めに、蓮は今まで溜めていた自分の気持ちを吐き出し始める。狂三はそれを黙って聞く。

「自分自身が怖い奴が、他人を好きになんてなれない。俺は、自分に恐怖している。記憶の無い自分に、普通の身体じゃない自分に……」

人間が恐怖するもの、それは未知だ。自分と違う存在、自分の手に負えないものを人間という生物は恐れる。ASTが精霊を殺そうとするのも同じような理由だろう、精霊という未知を理解出来ず、ただ、自分達の害となる空間震を引き起こす事を理由に消そうとする

「狂三……もし、俺に記憶が無いのも、普通の身体じゃないのにも意味があるなら……何か大きな使命や、やらなければならぬ事のようなものがあったとしても、それを忘れていたり、知らなかったら、無かった事に出来るんだろうか？」

それに狂三はすぐに答える事が出来なかった。それから数秒、室内を沈黙が支配するがその沈黙の中で狂三は胸元にいる蓮の顔に触れると、優しく上を向かせ自分の顔を見させる。

「蓮さん、わたくしはあなたの上はあなた以上に知っていますの。そんなわたくしが言いますわ、何も不安に思うことなんてありません。自分が信じられないというのならわたくしを……わたくしの言葉を信じてくださいまし」

見る者を虜にさせるような優しい表情、安心させつつも力のある言葉で狂三はそう言う。それを聞いた蓮は、ゆっくり目を閉じ、再び狂三の胸元に顔を寄せ寝息を立て始める。狂三はそんな蓮をいつまでも抱きしめていた。

――  
神代 蓮の人生は、命をかけた戦いと……多くの出会いと一緒だ。

始まりは今年の四月十日。気まぐれと好奇心で起こした行動で、偶然出会った一人の少女。それを見ていた少年が最初だった。それから少女のような存在を救う組織に気まぐれで入り、手にしている剣と力で戦い、多くの出会いを経験して行く。

(なーんか、小説のあらすじのような内容だな…)

廊下の壁に背を預けながら、今での出来事を思い返し、蓮はそんな感想を抱く。別にふざけている訳ではない、ただ、このように思い返してみると気まぐれとはいえ自分らしくない。そう思ったのだ。

(昔、エレンあの人に他者に心を許すなっていう意味を込めて、童話を聞かされていたな。確か内容は…)

そこまで考えたところで目の前のドアが開き、誰かが飛び出してくる。それはぜえぜえと息を切らしながら出てきた七罪だった。

だが、最後に見た時の七罪と今の七罪は別人と言っていていいほど違っている。癖毛で乱れていた髪は綺麗に纏まり、病人かと思ってしまうような肌は艶を持ち、化粧され綺麗になった貌と可愛い服で見事な変身を遂げていた。まあ、服と髪は走ってきた所為か、多少乱れてしまっていたが。

「可愛くなったじゃないか、やっぱり士道達に任せて正解だった」

「えっ…蓮!?これはその…色々あって…」

顔を赤くし何やらゴニョゴニョと呟く七罪を無視して、蓮は彼女の髪や服の乱れた箇所を直しにかかる。七罪が身につけている服は、触ってみるといい生地を使った高級品だというのが分かる。ヘラタトスクンはメイクや服の用意に掛かった費用はどこから出しているのだろうか。

「これで良し。しかし、本当に可愛くなったな。お人形さんみたいだぞ〜」

あまりの可愛さに蓮は七罪に抱きつき頭を撫でる。そう行動した後、自分がまるで美九のような事をしているのと、七罪自身の気持ちが無視しているのに気づき身体を離す。

「わ、悪い七罪。つい興奮して…」

謝りながら七罪の顔に目を向ける。しかし、本人はその言葉に反応せず、依然顔を真っ赤に染めながら口をパクパクと動かしている。さすがにここまでくると、蓮も不安を感じてくる。

「おい!七罪、どうしたんだ?」

「蓮…さっき…私になんて言ったの…?」



そう聞く七罪だったが、彼女の目は目の前にいる蓮すら見ておらず、どこか別の場所を見ているようだった。それでも、質問に答えな  
いのは七罪に失礼だ。心配しながらも答える。

「えっと…可愛いつて言ったけど…」

「かつ！可愛いつ！可愛いつて言われ…言われっ…！」

七罪はその言葉を聞くと、蒸気が出ていると錯覚するほど顔を赤くし、直立の体勢のまま後ろに倒れる。彼女が床に後頭部をうつ直前に蓮は彼女の身体を支える。

「七罪？さつきから変だぞ、体調でもわる…」

「むきゆうう…」

そんな声を漏らしてそれつきり動かなくなる。一体どうしたのか  
と思い、七罪の顔を見るとなんと彼女は気絶していた。そんな状態で話しかけても返事が返ってこないのは当然だろう。

「…はい？」

意味もわからず七罪を抱える状態となった蓮には、疑問の声とばかりにそんな言葉が出てきた。

「やっぱり、無理矢理すぎたかな？あんなに嫌がっていたし…」

「でも、自分に自信を持たせるにはやっぱりああるしか無かったと  
思うわね。問題はそれがダメだった以上、次は何をすべきか、だわ」

七罪を隔離スペースに連れて行くのを蓮に頼み、土道と琴里は令音  
と共に別室で次の対策を考えていた。具体的な課題は、『七罪が自  
分に自信を持たせるためにはどうするか』だ。

「そうは言ってもあれがダメとなると、他に何をすれば…」

「…いや、そういうわけでもなさそうだ」

口を挟んできたのはダブレット端末を弄っていた令音だ。彼女は  
自分の手にある端末を二人に見せた。画面には七罪の顔と様々な数  
値が表示されている。

「七罪が変身した自分の姿を見て以来、精神状態、好感度などの各数値  
が最悪の状態から脱している。…まあ、封印までは程遠い状態だが

ね」

「そ、そうなんですか？ てつきり、嫌がっていたのかと…」

可愛くメイクやオシヤレさせても、七罪は頭を掻き毟り、大声をあげて部屋を出て行ってしまったので士道は嫌な事をさせてしまったと思っていたが、そうでは無かったらしい。では、一体何が原因だったのか、令音がそれを説明してくれた。

「…彼女は、変身を嫌がっていたわけでは無い。今まで〈贗造魔女〉で変身していた姿で賞賛を浴びてた為、本当の自分が褒められるのに慣れて無いんだ。どうやら七罪は他の精霊と比べて頻繁にこちら側に来ているらしい。…こっちは本当の姿の七罪を誰も相手してくれなかったのだろう」

「難儀な事ね」

肩をすくめながら言う琴里だったが、そこ声音には若干、同情のようなものが混じっていた。同じ女である琴里には士道よりその苦しみのようなものが理解出来るのかも知れない。

「でも、そんな承認欲求があるならまだ手はあるわ。これからも自分に自信を持たせるような作戦で、こちらの言う事を素直に受け取ってもらえるようになってもらいましょ。そうすれば、好感度を上げるのも難しくないわ」

「自分に自信を持たせるって、具体的にはどうすれば…」

「それを今から考えるのよ。もしかしたら、また士織ちゃんの出番もあるかもしれないわね」

「うわっ！ それは嫌だ!!」

二人で様々な計画について話す傍ら、令音は室内にあるモニターをジッと見ていた。その画面には、隔離スペースで、蓮が七罪の前でリノゴの皮を剥きながら何やら話していた。別に隔離スペースに蓮がいることはおかしな事ではない。だが、令音はそれを見て目を細める。

「…やはり、故障というわけではなさそうだ…。そうなるか…」

その一言は、同室にいる士道と琴里には聞こえなかった。

「でさー、結局、その知り合いの魔術師<sup>ウィザード</sup>、逆上して銀行の金庫を犯人ごと吹き飛ばしちゃったんだ。そのせいで銀行の前に金庫の中身の紙幣が舞う事態になって、警察が鎮圧するほどになったんだよ」

慣れた手つきでリングの皮を果物ナイフで剥く蓮は、懐かしむようにそんな話を七罪にしていた。待っている七罪が退屈だろうと思いつ話し始めたのがきっかけだったが、思い返してみるとなかなかの笑い話だと思う。

だが、当の七罪は笑っている訳ではなく、相変わらずの不機嫌そうな表情で蓮を見ていた。

「あれ、つまんなかったか？俺の中では結構インパクトのある思い出だったんだけど」

「あつーいや、別につまんなかった訳じゃないわよ…。まあ、いろいろぶっ飛んでいる内容だったけど…」

つまらなかつたかと聞かれた七罪は、慌ててそうではないと否定する。蓮はそれを聞いて自分にも人を楽しませることが出来るのだと安心すると同時に、七罪が何か考えているのを感じた。意外にも、それを言い出したのは七罪自身だった。

「…ねえ、蓮はどうして私に構ってくるの？私なんか、あなたと違って見せるような顔してないし、面白い話が出る訳もない。得なんて何も無いのに…」

「人間っていう生き物は、全てを損得で考えているのか？」

顔を俯け、暗い声で言った七罪にそう質問し返す。それを聞いた七罪が顔を上げると、一口サイズにカットされたリングに乗った皿を持ち、微笑んでいる蓮がいた。

「そんな風に考えてたら、自分と群れの事しか考えない動物と一緒にだ。俺が来ているのは七罪と会いたいから、理由はそれだけさ」

蓮は皿にあるリングにフォークを刺すと、それを七罪の前まで持っていくと促す。だが、七罪は口を開けず顰めつ面だ。そんな七罪を見た蓮は、クスリと笑うと『白雪姫<sup>童話</sup>じゃないんだ。毒なんか入ってないよ』と言う。

それを聞いた七罪は、疑心暗鬼になっている自分が恥ずかしくなりそれを誤魔化すようにリングに食らいつき咀嚼する。

「モグモグ：ゴクン。…本当にいい性格してるわね、学校でも人気者で大変でしょ？」

それは七罪の口から出るにしては珍しい内容だった。実際、七罪自身もらしくないと思いつつ口にした皮肉で、一種の照れ隠しみたいな意図を込めたものだ。しかし、当の蓮は肩を竦める。

「そうでもないさ。学校だと、土道達以外に友達いないし…」

その一言で七罪は自分が地雷を踏んだと感じた。学校という場で、くっつく相手がいないのはかなり精神的にくる。一番最悪なのは周りがわいわいと騒いでいる中での一人。そしてペア決めるときにあぶれることだ。

「ご、ごめん！別にそう言うつもりで言った訳じゃなくて！その…なんて言うか…」

言い訳になってない言い訳を語る七罪に気にしてないとばかりに笑う。それを見て落ち着いた七罪は、なぜか悲しそうな顔を作った。

「私、あなたは良い奴だと思うの。別に答えたくなければそれで良いけど…なんで、たまに人間を見限ったような目をするの？」

今度は蓮が驚く番だった。七罪には優しく接し、私情を出さないようにしていたつもりだったが、それを七罪は見抜いていた。変身した人物の癖や仕草を真似る観察眼を持つ彼女を甘く見ていた。

「あなた、私に言ってたじゃない、自分と同じ匂いがするって。それに、私を部屋から連れ出して歩いてた時もそんな目をしてた。なんで…ムグッ」

そこまで言ったところで七罪の台詞は中断された。なぜなら、蓮の人差し指と中指が七罪の唇を塞いでいたからだ。

「俺の事情なんて知らない方がいいんだ。知ったところで何もできないし…同情なんていらなからな」

だが、それは自分に話せない事を隠すために誤魔化しだと七罪には理解出来た。手を伸ばせば触れられる目の前の少年、それなのにも関わらず、実際はもつと離れているように錯覚出来る。

だが、今、自分の唇に触れる二本の白い指。それはとても暖かった。

## 55話

「何なの…何なのよ…」

ベッドの上で体育座りをし、布団をすっぽりとかぶりながら、七罪はブツブツと呟く。七罪が理解出来ないのは士道達が何故自分を良くしてくれたかだった。〈贗造魔女〉で変身したお姉さん姿なら分かる、現に今まで出会った人間達は、そんな自分に様々な美辞麗句を並べ立ててくれた。

だが、今の七罪を綺麗に変身させ、可愛いと言ってくれた人間は今までいなかった。混乱する七罪の脳裏に蓮の言葉が再生される。

『人間って生き物は、全てを損得で考えているのか？』

それを思い出し、もしかして…という考えが一瞬出てくるが、それを振り払うように頭を掻き毟る。

「…いや、ありえないわ。どうせ、私を笑い者にでもさせようと悪巧みしてるんだわ…そうに決まってる…」

七罪は、手を胸元に掲げ、『〈贗造魔女〉…』と小さく呟く。すると、手のひらに鏡のようなものが出現する。それを見た七罪は、目を見張った。どうやら、天使を出せるぐらいにまで体力が回復していたらしい。

七罪は手にした鏡を今乗っているベッドに向け、『自分が通れるほどの穴が空いたベッド』に変身させる。続いて近くにあつたぬいぐるみを自分の寝ている姿に変身させ、布団の下に置く。これは、自分が消えた事を気付かせないためのダミーだ。

ぬいぐるみを置いた後、七罪はベッドに空いた穴の中に潜り込み、入り口を閉じてから、まるで地面を掘るように床、壁の中を〈贗造魔女〉で変身させて進んでいく。

その途中、七罪はピタリと動きを止める。何故なら、七罪の頭の中にある人物が浮かんだからだ。

(…そういえば、世話してもらったのにお礼も言っただけじゃなかったわ)

怪我人である自分の世話をし、優しく微笑みかけてくれた少年。彼と何も言わずに別れてしまうのを考え、一瞬、戻るべきかとまで思わ

せた。七罪は自分の唇に触れる。かなり時間が経っているというのに、触れられた時の熱と感触を忘れられないでいた。

(何なの……この気持ち……)

一度、彼のことを思い出すとまるで濁流のように今までの記憶が流れ出てくる。エレンに重傷を負わされ、絶体絶命の状態だった自分の目の前に現れ、戦い、救ってくれたこと。少しの時間だったが、喫茶店で二人で話して珍しく自分が笑ったこと。

そして、次に来るときは飼い猫を連れて来ると言った部屋を出て行った彼を見て、僅かな不安と心細さを感じたこと。

「何考えているのよ……あの部屋にいたら何をされるか分からないじゃない……これで良い……これで良いのよ……」

頭をブンブンと振り、自分にそう言い聞かせた後再び進んでいく。そして数分後、七罪は人気のない廊下に出た。

「よし……次はどうやって移動するか……かしら」

出てきた壁を元に戻した七罪は、ここから脱出するためにどうやって移動するか思考する。やはり、怪しまれないように行動する事を考えたら、誰かに変身するのが一番だと考えつく。

七罪は誰かに変身するのか決めると、ハニエルの鏡を自分にかざす。変身する対象は、七罪自身を悩ませ、混乱させている彼だった。

—————

「七罪の奴、寂しがってるかな」

独り言をつぶやいて廊下を歩くのは蓮だ、その胸元には飼い猫であるミルクを抱いている。ミルクは蓮が一人っきりの病室で寂しいだろうと思い、遊び相手として連れてきたのだ。ミルクは、七罪と前会った時に頬を舐めている。それは七罪の事を気に入った証だ。

ミルクと七罪が一緒にいる絵を考えながら廊下を歩いていると、背後からバタバタと足音が聞こえ振り返る。そこには十香を始めとした琴里以外の精霊五人が立っていた。

「みんな勢揃いでどこに行くんだ？ 確か、食堂は反対側の方向だったはずだが」

皆で食事にも行くのかと冗談混じりでそう言ったが、精霊たちは

皆、戸惑いや疑問といった表情を浮かべた。その理由を口にしたのは一番前にいた十香だった。

「む？何を言っているのだ。さつきまで話していたレンが、急にただならぬ様子で走り出したから心配して追いかけてきたのだぞ」

「首肯。ヒステリックでも起こしたような様子でした。もしかしたら体調でも悪かったのですか？」

十香と夕弦以外にも、四糸乃、よしのん、耶具矢、美九が各々心配するような言葉を投げて来る。しかし、さつきまでも何も蓮は今来たばかりで十香達と会ってなどいないのだ。まるで自分ではない自分がいたような言い方だ。

そう思った瞬間、ある可能性が浮かんできた。

「ツ！十香、ミルクを持っててくれ！」

押し付けるといふ表現が合うかのように、胸に抱いていたミルクを十香に渡すと蓮は一直線に走り出す。

「レン!?いきなりどうし…おお！肉球がプニプニだぞ！」

「指摘。蓮がどこかに行つてしましますが」

蓮が向かった先は七罪がいる病室だ。部屋に到着すると、素早くナンバー入力と手のひらを当て認証を済ませて部屋に入る。室内には七罪の姿はなく、ベッドが膨らんでおり蓮は乱暴にかけ布団を取っ払う。すると、そこには眠っている七罪がいたが、本人ではない偽物だった。

「…やるな。誰も気が付かないわけだ」

この場にはいない七罪への賞賛の言葉を送ると、室内に備え付けてある電話を手に取り番号を入力する。どこに向けての電話かは言わずとも分かるだろう。

「…司令官殿、緊急事態だ。七罪が部屋から逃げ出した。もう外に脱出しているかと思うが念のため、施設内の捜索をしておいて欲しい。俺は外に出て七罪を捜す」

一方的にそう告げた後、電話を放り投げ部屋から出る。状況の詳細が分かる説明とは言えないが、して欲しい事とその理由だけは伝えることは出来た。



(あと、七罪はどこに行ったかだな。行きそうな場所と言ったら…)

「あれ？蓮じゃないか。どうしたんだ？そんな息を乱して」

部屋を出た蓮にそう話しかけてきたのは、七罪の着替えや日用品を持った士道だった。彼は部屋から慌てた様子で出てきた蓮を不思議そうに見ている。

「…士道、マズイことになった。七罪が部屋から逃げ出したんだ、きつと天使の力を使ったんだろう」

「七罪が逃げたって!?!外に行ったらDEMやらに狙われるのに…」

士道の言葉には驚きと疑問の声音が混ざっていた。DEMから七罪を救った実績がある以上、どんなに嫌われていようと自ら外に出て行く事はないと思っていたのかも知れない。そんな士道に蓮は首を横に振る。

「どうやら七罪には、ヘラタトスクもDEMも大差のない存在だったらしい。施設内の探索は司令官殿に頼んである。俺は外を探してみる、けど、まあ、そんな期待しないでほしいが…」

蓮は七罪という少女の事をまだ詳しくは知らない。蓮が外に出ても探し方は思いつく場所を回って行く…いわゆる風潰しとなってしまう。それでもやらないよりはマシだと考えるしかないが。

とりあえず今は時間が惜しい。家に一度帰り手にした日用品を置いてきた後、七罪の搜索を手伝うという士道の言葉を聞き、蓮は再び廊下を走り出す。

(頼むから無事でいてくれよ…)

エレンに七罪が殺されかけてた場面を思い出し、胸の中でそう祈った。

「施設内の監視カメラをチェックして、少し前に蓮の姿を見つけてちょうだい！あとはその動きを追って外に行っただかまだ施設内にいるか把握するわ」

〈フラクシナス〉の艦橋で、椅子に座った琴里が乗組員に指示を出していた。蓮から地下施設内の搜索を頼まれた以上、一先ずまだ七罪が中にいるかチェックするところから始まる。

「それにしても、誰かに化けて堂々と脱走するなんてやってくれるわね。ご親切にダミーまで残して時間を稼ぐなんて」

チュツパチャプスの棒をピコピコと動かしながら、琴里は引き攣った笑みを浮かべる。コツソリ逃げ出すならまだしも臆する事なく廊下を歩いて行ったという事にやられたという悔しさを感じていたのだ。

「あの…司令。ふと疑問に思ったのですが、七罪はなぜ蓮くんの姿に化けて出て行ったのでしょうか？」

そんなピリピリした琴里に対し、疑問の声を上げたのはクルーの一人である〈藁人形<sup>ネイルノックカー</sup>〉椎崎 雛子だ。椎崎の質問に琴里は眉を顰める。「なぜって…蓮が私たちの仲間で施設内を怪しまれる事なく歩くことが出来るからに決まってるじゃない」

「それはそうですね…でも、どうせ化けるなら司令に化けるほうが都合が良いと思うんですよ。現に一番大きな権限を持っているのは五河司令ですし…」

椎崎の言葉を聞いて、他のクルーも『そう言えば…』という表情で顔を見合わせる。琴里も確かにと思い、考え込んでしまった。そんな時、艦橋のドアが開き、一人の人物が入ってくる。眠たそうな目と隈が特徴的な令音だ。

「…その事について、ある仮説が立ったんだ。これを見て欲しい」

琴里達の会話を聞いていたであろう令音は端末を操作し、正面に巨大なウィンドウを展開させる。画面には七罪の顔写真と共に折れ線グラフがあり、線は表の最下部で微妙に上下していた。

「これって、七罪の好感度のグラフじゃない。これがどうしたのよ？」  
「…まあ、見ててくれ。ここからが重要だ」

琴里の質問にそう答えると、令音は表を右に動かして進めて行く。折れ線は相変わらず下の部分を低迷していたのだが、ある瞬間、それは異様とも言える角度で上に向かって急上昇していた。それを見た琴里達の顔は驚愕に染まる。

「ちよ、ちよっと！何よこれ!? 一体いつこんなに好感度が上がったっていうの?」

「…それは今から説明する。この急上昇はこの先も数回あり、最後に至っては霊力の封印可能なレベルまで達している。…これら全ては共通して、ある状況で計測されたんだ…。それは…」

この場にいる全ての人間の視線が令音に集中する。しかし、当の令音はそんなものを気にもかけない様子で言葉を続ける。

「レンと一緒にいる時。つまり、七罪はレンに恋をしていたんだ」

『ええええええええええ!!!!』

令音のその言葉に、艦橋が驚きの言葉で響き渡る。一番動揺しているのは琴里で、身体をわなわなと震わせ、目はせわしなく動いている。

「ちよつと待つて令音…、七罪は蓮にデレていたってどういうの?」

「…私はこれを見た時、てつきり機器の故障かと思っていたんだ。だが、調べても壊れているところはなく、偶然、レンと話している時だけ好感度が上がるような故障なんてあり得ないだろう…。…いつから好きになったのかは分からないが、もしかしたら一目惚れという可能性もある…」

まさに空いた口が塞がらない思いだ。遠い道のりだと思っていたものが、すでに達成されていたと知ったらこうもなろう。そして、数秒後、この事を蓮に伝えるべきか悩む事になるのは当然の結果だった。

七罪の搜索を開始して三十分後、辺りは夕陽が沈み、暗い空が広がっている。

「クソっ…どこにいるんだ…」

人気のない住宅街を歩きながら、蓮は一人、頭を悩ませていた。この三十分の間でした行動は思いつくような場所に行ってみる事だった、七罪を救った建設中のビル、学校、とにかく少しでも気になるような場所だ。

だが、七罪は見つかる事は無かった。琴里からも『七罪を見つけた』という連絡が来てない以上、まだ確保出来てないらしい。

とにかく、今の自分が出来る事は七罪を探す以外に無い。もう一度思いつく場所に向かおうと思った瞬間、ポケットに入れていた携帯端

末が震えてたのを感じる。

(まさか、見つけたのか…?)

そんな期待を胸に、画面を見るとそれはメールだった。しかも、琴里からではなく土道からのものだ。メールを開くとそこにはこう書かれている。

『五河宅にて待っている』

その文を見て、蓮は違和感を感じた。土道が自分の家を示す言葉にしては妙な言い回しなのに加え、今は何を優先すべきか土道も分かっているはずだ、七罪のことでも無いことに自分を呼び出すのはおかしい。

一体どうしたのかと思い、土道の携帯電話の番号を入力して電話をかける。数回のコール音の後にガチャっという音が聞こえて繋がる。

『…さすがですね。文章から違和感を感じ、電話をかけてくるとは』  
聞こえて来たのは土道ではない女性の声。その声の主を蓮は知っていた。思わぬ不意打ちを受け、自分の身体が震え、鳥肌がたったのを感じる。だが、動揺を悟られないように平然とした声音を意識する。

「…俺が電話をかけたのは土道に対してです。何であなたが出てくるんですかね…」

『それが知りたければ、五河 土道の自宅まで来てください。遅れては、本人の命は保証できませんよ』

そう言うと、電話がブツンと切れる。まるで小悪党のような事をすると内心吐き捨てながら、土道の家に走り出した。

「これ、貸してくれた事に感謝します。五分も経たずにあの子はここに来るでしょう」

エレンは五河宅のリビングにあるテーブルに携帯電話を置く。土道はソファに座りながらそれを忌々しげな表情で見ている。携帯をテーブルに置くと、エレンは土道の向かいのソファに腰を下ろす。

「…言っておくが、蓮は七罪がどこにいるかなんて言ったりしないぜ。俺が話してないんなら尚更な」

不器用な笑みを浮かべ、士道は言う。本当は士道はおろか、蓮すらも七罪がどこにいるかは知らない。だが、ヘラタトスクの庇護下にいると思わせるだけでも七罪を危機から遠ざける事が出来ると考えての言葉だ。しかし、エレンはそれを気にする様子も無く、士道をジッと見ている。

「かなりあの子の事を事を理解している様子ですね。となると、私との関係も…」

「あ、ああ、知ってるさ！あんたとは母子の関係で、本当の名前はジェイク・メイザースって事も」

吠えるように答える士道だったが、その心は少しの驚きがあった。親子である事を忘れてしまうような命をかけた殺し合いをして来たエレンとジェイク。そんな関係であるエレンが、蓮に興味を持っているような質問をして来たからだ。

「なるほど、それをあの子の口から聞いたのなら、あなたはただの他人ではないという事です。ですが、それだけではジェイク・メイザースの理解者にはなれない」

「どういう事だ？何を言ってるんだ…」

エレンの失望したような言葉の意味を、士道は分からなかった。蓮はジェイクという名を告げる時、自分と十香に『誰にも言うな』と注意されていた。士道はてつきり、それでジェイクという友人を理解できていたと思っていたが、それは思い込みだったらしい。

まだあるのだ、ジェイク・メイザースには他人に言うことの出来ない心の闇が。

「ヘウィツチの居場所に関しては、当然あの子にも聞いてみるつもりです。ですが、あなたの言う通り、ヘラタトスクの神代、蓮はそれを言う事はないでしょう。ですが、DEMのジェイク・メイザースなら必ず言う…そういう事です。…どうやら来たようですね」

混乱する士道に不敵な笑みを浮かべるエレンがそう言うと同時に、リビングのドアが開き息を少し乱した蓮が入って来る。蓮はまず、士道の無事を確認すると、素早く向かい合って座るエレンに視線を集中する。

「…どうやら、住居人の許可をとって入って来た訳じゃないさそうですね」

「待ってましたよジエイク。久しぶりに親子の会話でもするつもりでしょう」

鋭い目で見る蓮とは反対に、余裕の笑みを浮かべたエレンが挑発するかのように言った。

## 56話

住宅街に建っているとある家、そのリビングに異常な空気が張り詰めていた。それは家の住人である土道の友人である蓮と、その母、エレンの間に流れる殺意だった。だが、蓮が恨みのこもった視線を向けても、エレンは気にする様子はない。

（距離は二メートル、ヘレツドクイーンで一振りすれば十分に届く：だが…）

それは出来ないと否定する。なぜなら、この部屋：いや、この家全てがエレンの随意領域テリトリーの範囲だと理解しているからだ。どう考えても、剣を出して斬りかかるよりも、エレンが考え蓮の動きを止める方が速いだろう。

「それで…何で俺を呼び出したんです？断れないように土道を人質にとつてまで」

「あなたにへウィッチの居場所を教えて頂きたい。その対価に、ヘプリンセスへイフリートへハーミットへベルセルクへディーヴァの安全を保証します」

「俺にその条件を言うって事は土道が言わなかったのでしょうか？じゃあ、俺が言う訳にはいきませんね」

まさに想像してた通りの言葉に、土道はこんな状況だということに安堵の笑みを浮かべる。だが、エレンはそんな返事は予想してたとばかりに言葉を続ける。

「それに加え、特別な条件をつけます。我々の望むへウィッチの居場所を言ったのなら、あなたがDEMに帰還する事を認めましょう。無論、私に牙を向けた事も不問とします」

それを聞いて、土道は顔を強張らせると同時に、さつきエレンが言っていた言葉の意味が理解出来た。『DEMのジエイク』とはそういう意味だったのだ。しかし、蓮はその条件を鼻で笑い、一蹴する。「そんな事を言い俺を呼び出したんですか。甘く見られたもんですね」

エレンの間合いの中にいるというのに不敵な笑みを浮かべる。そ

の行動はまさに蓮らしいものだった。いつだって自分たちを驚かせ、誰も考えないような事をする。だが、エレンはそれすらも分かっていたというような顔をし、ソファから立ち上がると蓮の前まで歩いていく。

「私も流石に、DEM内であなたを冷遇し過ぎたと反省したのです。あなたのいた地位に必ずあるべきものを我々は用意しなかった。今、戻って来るなら、あなたが望んでいた秘書官を用意します。もちろん、我々が十分に信用出来ると判断した人物を。…あなたはどのような娘が好みですか？」

まるで言えば用意出来ると言わんばかりの言葉だ。この人は変わらない…いや、変わったのは自分なんだと理解した。昔の自分だったら、ラツキーだと思っただけで頷いていたかも知れない。しかし、今は違う、そんなもので自分の心は動かない。

一方士道は、疑問を感じていた。蓮は、自分は会社内では一般社員だったと言っていた。DEMは、一般社員にも秘書をつけるような企業ではないということは高校生である自分でも分かる。

「待てよ…蓮は自分は一般社員だったって言っていた。エレン、お前は どうして蓮にこだわるんだ？」

エレンは自分の身内だからと言って、優遇するような人間だとは思えない。それゆえ生まれた疑問だった。それを聞いたエレンは、顔を士道には向けず、蓮を見たま言う。

「…どうやら五河 士道はあなたの本当の姿を知りたがっている様子ですね。これを機に私が真実を伝えてみましょうか？」

その時、エレンは悪魔の笑みを浮かべていた。蓮はそんなエレンを睨みつける、その目は語っていた『やめろ』と。それを理解しながらもエレンは口を開き真実を口にした。

「私はあなたに、再びDEMで活躍して欲しいのです。世界から憎まれ、疎まれている暴君、皇帝NEROとして」

蓮が言うかと願った真実。エレンはそれを容易く口にした。

士道はNEROという人物の名前を何回も耳にした事がある。古



代ローマの皇帝と同じ名前のその人物の事はテレビを見れば知る事が出来るが、良い情報を聞くのはとても稀だった。良い事などほとんど報道されず、NEROのせいで相場が崩れただけの、顔を見せない所為で信頼がないだのマイナスな事ばかりだ。

そんな訳で、土道も良い印象を抱いていたわけではない。だが、嫌っていたわけでもない。テレビを見ても全ての人間が主観的な意見を抱くわけでもないだろう。所詮は別の世界の人間、土道はそう思っていた。だが…

「それ…本当なのか…？」

目の前にいる友人は、今までそう思っていた人間だったのだ。土道の質問に気まずそうに顔を逸らす、それが何よりも分かりやすい答えであった。

「人の秘密を勝手に暴露してのお願い…ですか。昔に言いましたよね？それはあくまで自分の活動資金の入手と、会社への恩返しが目目的だつて。もうその目的は達成してると感じてます、これ以上皇帝になる理由はありませんね」

「では、あなたはこれから戦士として生きていくつもりだとも？」

エレンは蓮の拒絶に食らいつく。人の考えや決意の中にズガズガと踏み込んでくることに不快感を感じながらも、エレンの言うことに間違いがないと思ってしまうのが悔しい。

「戦士として生きる…それも悪くはないでしょう。この私が認めます、あなたは私が知る中で間違いなく最高の戦士です。その戦闘センスは私すら越えるかもしれない。ですが、それゆえあなたは戦いから離れる事は出来ない、戦う事でしか自分を表現する事が出来ないからです」

蓮はその言葉に僅かな嬉しさを感じた。今までエレンは自分の事を酷評しても、賞賛する事は一度も無かったからだ。

「その力は、我々の元では役立てる事が出来ると約束します。アイクや私なら、存分に力を振るえる環境を作り出せる。強敵との戦闘を望むのなら、その力で精霊の首の一つでも取ってきて構いませんよ？」

「ツ！それはウエストコットやあんたの都合だろうが!!」

声を上げ、立ち上がったのは士道だった。その顔は怒りに染まり、エレンを睨みつける。それを聞いたエレンは士道の方に顔を向けるがその目はとても冷たかった。

「あなたは黙っていてください。これは私たち二人の問題で、他人であるあなたが口を挟むような事ではありません」

「蓮はそんな人間じゃない！お前は普段、蓮が十香達とどんな風に触れ合っているか知ってるか!?精霊である事なんか気にもしてない様子で！まるで本当の家族のように微笑んでる。それを想像することもなく、勝手な暴論を押し付けるんじゃないよ！」

感情的になる士道とは反対に、エレンは冷静な顔を崩さない。それが士道をさらに苛つかせる。息を乱すほどの大声で叫んでも、結局、エレンの表情は変わる事は無かった。ぜえぜえと乱れた呼吸をする士道をエレンは冷めた瞳で見る。

「それは、人間に心を開けないこの子の唯一の愛情だったからです。人間を信じられなくても、精霊という別の生命体になら怯えず、接する事が出来る。夜刀神 十香も、所詮その対象の一つにしか過ぎません」

「何を……」

蓮だけでなく、十香までも道具のように言うエレンの言葉を聞いて強く拳を握る。これ以上聞いてるとエレンに殴りかかってしまいそうな様子だ。そんな士道を冷静にしたのは、皮肉にもエレンだった。

「五河 士道、あなたには理解出来ないでしょう。人間を信じられず、自分もまた人間ではない。そんな者の苦悩が。そして、唯一心を許せる人物と出会った時、縫ってしまうその気持ち」

鋭い瞳から言われたその言葉に、士道は何も言えなかった。自分より、蓮を理解しているエレンが言ったのもあるが、『人の悩みを知った気であるな』彼女の目がそう語っていた気がしたのだ。

「ジエイク、あなたは仏教の世界観で、一番美しいものは何か知っていますか？」

「…あいにく、その辺りの分野は学び損ねてましてね」

「それは蓮の花らしいです。つまり、あなたのことです」蓮、あなたの魂は美しい」

そんな事を言うと、蓮の目の前に右手を差し出して来る。まるで握手でも求めるように。エレンの顔を見ると、優しい微笑みを浮かべていた。

「あなたにはもう一度、我々の元では美しく咲いてほしい。どうか、お願い出来ますか？」

言葉が上手いな。そう思いながら、エレンの差し出す右手に自分の右手を伸ばした。エレンの後ろでは土道が不安そうな顔でこちらを見ていた。それを知りながらも、手を伸ばす。そして…

パン！！

リビングに乾いた音が響き渡る。その音の正体は、蓮がエレンの手を払いのけたものだ。美しく咲き誇る蓮の花は持たない筈の棘で、触れようとしたものの指を刺した。その事実を認識し、エレンは微笑んだ顔から変わり、冷たいものへとなる。

「…理解出来ませんね、いつか後悔しますよ。待遇を良くするのに加え、へウイツチの場所を言わなかったことを。一を犠牲に九を救える。それほど好条件の取引を蹴り飛ばした事を」

「二を守れずに九は救えない！そんな事、子供でも分かる！それに後悔なんて無い！あるとすれば、もつと早くこうしていれば良かったという思いだけだ!!」

いつもの丁寧な話し方もせず、怒鳴るような勢いで蓮は話す。エレンはそれに『そうですか』と無感情に答える。

「これをもって、交渉は決裂しました。後は何をするか…あなたには分かりますね？」

ネズミを甦る猫のような笑みを浮かべたエレンが取り出したのはナイフの柄のようなものだ。それが何なのか蓮は理解していた。その予想を裏切る事なく、柄からは淡く輝く光の刃が出現する。

「蓮…逃げろ！」

そんな叫び声と共に土道は立ち上がり、エレンに突っ込んでくる。

背後からタツクルをかまして逃げる隙を作ろうとしたのだろう。だが、その動きは途中でピタリと停止し、土道の口から『ぐっ…!』と苦悶の声が漏れる。

人体の構造からはあまりにも不自然な急停止。エレンの随意領域テリトリに動きを止められたのだと理解出来た。

「さて…私との訓練で多少の痛みには慣れているあなたには、どうするのが効果的ですか?」

「痛みには慣れても、そういう趣味はしてないのでお気にせず」

「減らず口を…。まあ、まずは前菜オードブルからといきましょう」

嘲るような声で言う蓮に苛立ちながらも、その頬にレーザーエッジを添える。エレンが少し押し押し込めれば白い皮膚に赤い血が流れるだろう。

「これが最終通告です。へウイツチの居場所を…」

「さっさとやったらどうです? 同じ事を何度も言われるのは嫌いなんで」

こんな状況だと言うのに、あろうことかエレンを挑発した。この場で少しでも自分を挑発するのが、せめてもの抵抗なのだと考えての行動なのだろう。

「…分かりました。ではそうさせて頂きます」

最後の脅しにも屈する事なかった。血を流さずにいれられたのはここまでだ、こうなるとあとは拷問で聞き出すしかないだろう。エレンはそう判断し、レーザーエッジを頬に押し付けるようとしたその瞬間。

テーブルに置かれた土道の携帯電話が軽快な着信音を鳴らせ、この空気を破った。それによって、エレンの意識が僅かにそちらに向いたのを察した蓮は、身を屈め、エレンの膝部…丁度関節部に足払いをかけるような蹴りを当てる。

「ぐっ!」

完全に不意をついたその蹴りをエレンは避ける事が出来ず、バランスを崩し床に仰向けに倒れこむ。そのエレンの上に覆いかぶさると、蓮は左手でエレンの身体を掴み、固定する。そして右腕に籠手へウイ

トリクゝを装備、それと同時に手首部から隠しブレードを出してエレンの頭部に向かわせる。

しかし、それは剣先があと一センチというところで止まる。蓮が止めたのではない、エレンが随意領域テリトリイを操作して止めたのだ。

「ちいっ！相変わらずの集中力ですね…」

「私に泥をつけるとは、高くつきますよ。あと、あなたはどこを触っているのか分かっているんですか？」

エレンの目線は蓮の左手に注がれている。それにつられてみると、自分の左手はエレンの右乳房を鷲掴みしていた。エレンに動かれなないように掴んだ場所が偶然にもここだと、今気づいた。

「結構硬いんですね。俺のいたAST部隊の整備士の友人は、もっと大きくて、柔らかかったんですが」

「…あなたには、女性と目上の人間に対しての話し方を教えた方が良いでしょうね」

額に青筋を立て、底冷えするような声でエレンは言う。エレンは敵で、同情するような相手ではないと考えている土道も、これは流石に蓮の方に非があると思ってしまうた。

(こりゃあ、ナイフで刺されるぐらいじゃ済まないかな)

蓮がそう思った時、今度はエレンの携帯電話が低い振動を鳴らし始めた。エレンは今の体勢のまま平然と電話に出た。

「はい、私です。どうかしましたか…：…なんですって!?!それは本当ですか？」

電話に出たエレンの顔が急に険しくなった。数年間共にいた蓮が見た事もないような表情だ。

「…ええ、分かりました。こちらで対応します」

そう言っつて電話を切ると、蓮の下から抜け出し、横を通ってリビングの出口まで歩いていく。

「運がいいですね」

エレンのその言葉と共に随意領域テリトリイが解除され、急に支えを失った土道は、床に倒れるが蓮は踏み止まる。なぜ解放したのか、それを聞くうとして顔を向けるがそこにエレンの姿はない。家を出て行ったと

考えるべきだろう。

一体電話で何を言われたのか気になるところだ。だが：

「本当…なのか？ エレンが言った事…」

そう聞いてくる土道を見て今はこっちが先だと判断する。説明する手間を考えたため息を一つした後、蓮はソファに腰を下ろした。

## 57話

誰にも人に言えない秘密というものがある。それ自体は十人十色で、皆それぞれ知られたくない事を胸に抱えて生きている。土道もそれぐらいの事は理解していた、なにせ自分の知られたくない秘密を義妹に暴露されたのだから当然だろう。

しかし、その秘密はあくまで自分個人の問題という範囲で片付くものがほとんどだろう。自分を含めた複数人に関わる隠し事ならまだしも、世界で知られ、世界を巻き込んだ秘密などはそうそうありはしない。

「本当…なのか？ エレンの言っていた事…」

だが、目の前にいる友人は、その世界を巻き込んだ隠し事を秘めている人物だった。その事実が土道を困惑させる。蓮はそんな土道の様子を見てため息をした後、ソファに腰を下ろす。

「イマイチ信じられないって様子だな。…いいよ、今だけはお前の質問に全て答えてやる。何が知りたい？」

蓮にしては珍しいヤケになった言い方だ。普段なら適当に誤魔化してただろうが、この事を告げたのが世界一の魔術師であるエレンなのだ。説得力が違う。

「エレンの言っていたのは真実なのか？ そりゃあ、お前は普通と言える訳じゃないけど…これ以上の秘密なんてないって思ってたから…」

自分の妹が精霊だった時もとても驚いた。だが、土道が驚いていたのは蓮が抱える秘密の数と大きさだ。普通の人間では無い事、エレン・メイザースの息子、そして、世界に名を轟かせる皇帝NERO。一人の少年が抱えるには何もかもが大きすぎる、スケールも数も…。

どうもエレンの言った事が信じられない様子だと察した蓮は、ポケットからあるものを取り出した。それは手のひらに収まる程度の大きさの水晶のようなものだった。色は半透明な水色で、正方形の形をしたそれは淡い輝きを放っている。

オブジェのように見えるそれを見て、『それは何だ』と土道が聞こうとした時、蓮は手に持った水晶を手首をきかせて軽く振る。すると、

チリンと鈴のような音を鳴らせて、空中に立体ウィンドウを展開した。それに驚いた土道は『うわっ!?!』と声を出す。

「これは俺が作った電子機器の一つでな。出回ってない特注品だ。これを持つてるのは俺と社長さんと、あの人だけだ。まあ、本当は別の奴を渡したんだけど、あの人が『普通のデザインじゃ嫌だ』って駄々をこねたからこんなデザインになったんだけど」

そんな説明を聞きながら、土道は空中に投影されたウィンドウに恐る恐る指を触れさせる。すると、土道の指に反応したウィンドウがスクロールして画面が下に動いた。

「これで俺が本物だって信じてくれたか?で、次の質問は?」

再び軽く振ると、表示されてたウィンドウが消滅し、水晶をポケットに入れると投げやりな態度でそう聞いてくる。どうやら、本当に自分の質問に全て答えるらしい。そう考えた土道は、一番気になっていた事を質問する。

「…NEROってテレビとかだとその…良くない噂とか…はみ出し者だとか言われてるけど、どうして公の場に顔を見せなかつたんだ。そりゃあ有名になるのは良い事ばかりじゃないって事は理解してるけど…」

自分でもかなり性格の悪い質問をしていると感じる。どうやら蓮にも都合が悪かったらしく、土道を細目で見てきた。

「お前…かなり突っかった質問してくるな」

「わ、悪い…どうしても嫌なら答えなくても…」

「いや、全部答えるって言ったのは俺だ。キチンと全部答えるさ、ただ、二度とお前に『何でも』等の言葉は言わないからな」

そんな負け惜しみ(?)を言うと、蓮はうーんと悩み始める。それは土道に言うべきか悩んでいるのでは無く、どこから話したら良いのか分からないという様子だ。

「そうだな、世界的に知られているNERO俺だが、最初は有名になんかなるつもりは無かったと言っておくよ。あくまでバイトのような感じで、DEMで働いて必要な金が入れば良いと俺は考えてたんだ」



世界的な大企業で、バイト感覚で働くなと言いたくなくなった土道だがそれは口に出さない。今、変に話の腰を折るわけにはいかないからだ。

「元々能力はあったから、DEMの出す電子部品の自分の作ったものを紛れ込ませて収入を得ていたんだけど、ある日、それが人の目に止まってな。騒がれるようになったんだ」

それを話す蓮の顔と声音が語っていた。それは自分の望んでいた事ではないことと、そこから歯車が狂い始めたことを。

「たいした物を出していたわけじゃないのに、一躍有名になってな。作った奴の顔を出せだの、他企業からの勧誘が山ほど来るようになった。だけど、俺は名を売ったかったわけでもないし、多くの人間と関わり合いたくないなんて思わなかった」

「他人と関わり合いたくないって、そりやなんで…?」

蓮は人見知りするようなタイプの人間でもないし、顔も良く万人受けすると思う。土道には他人との繋がりを拒否する理由が分からない。

「…俺は小さい頃、DEMに拾われた。会社に関わる以上、金持ちの子供やエリートが受けるような英才教育を受ける事になったんだ。それを受ける前に、あの人からある童話を話された」

「あのエレンが童話を?」

あの無感情で冷血なエレンが話した童話は、どのようなものなのか気になる。土道のそんな気持ちを汲み取った蓮は懐かしむような顔で話し出す。

「昔、あるところに身体が大きすぎて群れから疎外されたクジラがいた。群れから追い出されたそのクジラは、孤独で長い航海の末に仲間だと勘違いして、潜水艦に恋をしたんだ」

「潜水艦に…?」

「ああ、潜水艦はクジラを追い払おうとするが完全に懐いてしまっても離れない。クジラは一途にも様々なアプローチを続けける」

クジラという単語から繋がれた潜水艦という異質なワード。ここまで聞いても、エレンが蓮にこんな童話を話した意図が分からない。

「大戦中でな、潜水艦は敵国の駆逐艦に発見されてしまう。潜水艦が沈められようとした時、クジラが身をもつて爆雷から潜水艦を守り抜いて死ぬんだ。クジラの血で辺り一帯が赤く染まる、それでも愛する者を守れたクジラは幸せだったって話だ」

「何だよ…それ…」

幼い子供にするにはあまりにも残酷は内容の話だ。それを聞いた士道は拳を強く握る。

「勉強をサボってばかりいた俺だが、その話だけは今でも覚えている。そして、あの人は俺にこう言った『あなたは愚かなクジラにはならないで下さい、人間は騙し利用する存在で、精霊は抹殺するだけの対象ですから』てな」

それはまるで洗脳だった。蓮がこの世界を学ぶ前に、エレンは『そうあつて欲しい』という価値観を押し付けて縛り付けののだ。

「人と関わろうとすると、その話を思い出す。自分を愛してもいなかった潜水艦を守って死んだクジラになるのが怖かった」

士道は、蓮の学校での様子を思い出した。休み時間中にたまたま蓮に話しかけて来る生徒は数人いた、一見すると蓮もその生徒たちも楽しそうに喋っている。だが、次の休み時間から、その生徒たちが蓮のところに来る事は無かった。

今なら分かる、それは蓮自身が心の中で他人と壁を作り、拒んでいたのだ。それと比べ、十香達精霊への溺愛は異常だった。行き場のない愛情を十香達に向けていたのだろう。

「話を戻すが、どれだけ顔を出したくないって言っても、そうは言ってもらえない状況がいくつかあった。ボイコットしたら、会社全体に影響が出るような場面がな」

「…それでどうしたんだ？」

「仕方なしに交渉人を差し出す事にした。まあ、それは“俺”だったんだが」

「はあああああ!?!」

士道は思わずそんな声を上げてしまう。今までテレビでは顔を出してないと報道されていたため、すでに素顔を出していたという言葉

があまりにも衝撃的すぎた。

「代理の人間なんかを向かわせたら、金を握らされて何を喋るか分かったもんじやないだろ。信じられるのは自分だけだったんだ、まあ、この情報すらも一般的には出回ってないけど」

本物をただの交渉人という偽物のボールで包んで姿を現わす。まさに想像の遙か上をいく考え方だ。

「初めて人目に姿を見せた時はとても騒がれたよ、そして、いろんな人間に会った。『臆病者の使いつぱしりが！』などの罵声を浴びせる奴、あるいは下心満載で褒めて来るような奴。親に捨てられた俺からしたら、人間という生物の株価が暴落した瞬間だったよ」

士道はその話を聞くだけでも胸が締め付けられるような感覚を感じる。話を聞くだけでこれなのだ、実際に自分だったら、今の蓮のようにまともでいられるのかすら分からない。それほど重さだった。

「まあ、これが俺が世界から嫌われる皇帝になった経緯だ。何か他に言いたい事は？」

「それでも…それでもお前は蓮だよな？」

士道のその言葉を聞いて、蓮は顔を上げる。『どうにでもなれ』という投げやりな説明を聞いたにも関わらず、士道はいつも通りの馬鹿正直で真っ直ぐな目をしている。

「たとえエレンの息子だろうと、世界から嫌われていてもお前はお前だろ？十香達との日々が無くなるわけでもない。そうだろ？」

「ああ、そうだな」

せっかく話したのに、いう事がそれかと笑ってしまう。しかし、士道は自分と違い、過去ではなく現在を見ているというのが理解出来た。これで話は終わりだと言わんばかりにソファから腰を上げる。その時、テーブルに置かれた士道の携帯電話が再び振動し始めた。

画面を見ると、そこには琴里の名が表示されている。

(司令官殿が…もしかして七罪を確保できた知らせか?)

そう思いつつ、携帯電話を持ち主である士道に渡す。電話に出て、少し話した後、士道の顔色が変わった。

「なっ!?それ本当か?ああ…近くにいるよ…分かった、すぐにそうする…」

早口でそう言うのと電話を切る。土道の様子からして良いニュースが知らされたとは思えないが、聞かないわけにはいかない。

「良い知らせとは思えない様子だな。それで、何を言われたんだ?」

「…今から数十分後にここに…人工衛星が落ちてくるって…琴里が…」

「冗談にしては笑えない内容だな」

今はエイプリルフルではない事を考えると、信じられない内容だが、それは真実なのだろう。さつき、慌てて出て行ったエレンもそれと同じ報告を知らされたのだろう。そう考えるとつまり…

そこまで考えた時、外に耳障りな警報が響き渡る。それは空間震の発生を知らせる空間震警報だ。それを聞いて、蓮の予想が確信に変わる。

「空間震!?こんなタイミングで精霊が…」

「いや、これは九月の時と同じ、DEMが意図的に鳴らしたものだ。恐らくは人工衛星の被害を全て空間震の所為にするための」

「でも、エレンは…!」

土道も先ほどエレンが出て行ったのを見て、知らされていないかったと予想したのだろう。それに対する答えも蓮はすでに分かっている。

「確かに、これほどの大きな作戦をするのは、DEM社、裏の執行部長であるあの人の耳に入らないのはあり得ない」

「なら、別の可能性が…」

「だから俺は、これは社長の命を狙ったクーデターだと予想するね」

人工衛星を街に落とし、大きな被害を出すこれはDEMという一つの枠組みの中での出来事であると言う。それを聞いた土道は困惑した様子だ。

「社長さんって、会社内で結構恨まれてるんだよ。今までは俺がそいつらを抑えてただけで、それが無くなって溜まりに溜まった怒りが爆発したって感じかな。それこそ、確実に殺すためにこんな事するぐ

らいに」

「へ、へえ、DEMの中でもそういうのがあるんだな…。て、こんな事を呑気に話してる場合じゃねえよ！へフラクシナス」で回収するっていうから外に…」

「悪いな、俺はパスだ。七罪を探さなくちゃならない」

その名を聞いて、土道は街にいてであろう精霊の事を思い出す。彼女は人工衛星がこの街に落ちてくる事など知らないだろう、そうなる又何としても保護しなくては。

「土道、お前はへフラクシナス」に回収してもらえ。七罪は俺一人で探す」

七罪を探しに行こうとした瞬間、蓮のその一言で土道は足を止める。今の状況でそんな事を言われれば当然だろう。

「きつと、司令官殿は人工衛星が地上に落ちないように何かするつもりだな。そうになると、地上にその破片が落ちてくる可能性が高い、だからへフラクシナス」に回収しようとしてるんだ。俺ならそれから七罪を守る手がある。ここでお別れだな」

そう言うのと、土道を置いてリビングの出口に向かう。土道はその背中に声をかけた。

「お前、それ嘘だろ」

さつきまでの狼狽えた様子とは違う、正解を射抜いたそれに蓮はピタリと足を止める。振り返った蓮の目は聞いていた、『なぜ分かったのか』と。

「お前のその腕…守る範囲が広がれば能力が落ちるって言ってたよな。二人を守った状態で落ちてくる人工衛星の破片なんて防げるのか？もし、防げないってお前は判断したらきつと…」

どちらを守るかは、七罪を探しに行くという言葉から理解出来る。普段は鈍いくせに、どうしてこういう時に限って鋭くなるのか、『土道お前も十分変わっている』と心の中で思う。

「…どうやら、俺は昔ならないと決めていた、潜水艦を庇って死んだクジラになっていたらしい。今なら分かるよ、他人のために自分を犠牲にする気持ちは。ただの自己犠牲じゃない、自分がどうなっても相

手を守りたい心が」

「お前はもう一人じゃない！〈フラクシナス〉に回収されるのは俺と、お前と、七罪の三人一緒の時だ！」

絶対に譲らないという条件を言うと、土道は蓮よりも早く家を出て行ってしまう。蓮はそれを呆気にとられた顔で見ている。

他者と違いすぎて、群れから追放されたクジラは、やがて一つの群れと出会う。その群れは、シャチ、イルカ、サメ、と纏まりのないものだった。だが、その群れはクジラを優しく迎え入れてくれる。その暖かさに触れたクジラは、いつか自分も誰かの孤独を癒したいと思うようになったのだった。

—————

「はあ…はあ…七罪が見つからない…どうする？」

空間震警報によって、人のない住宅街を二人で走り続けて数十分、七罪はみんなは見つからず、蓮の隣で息を乱す土道が、ぜえぜえと疲れながら聞いてくる。

「…仕方がない、こうするしかないようだな」

出来ればしたくなかったという様子で、蓮は目を瞑り、しゃがみみコンクリートの道路に指を触れさせる。その瞬間、二人がいる場所を中心に音が響き渡る。

『七罪、これをしっかり聞いてほしい。もうすぐ、ここに巨大な人工衛星がここに落ちてくる。だが、俺たちなら七罪を安全な場所に連れて行く事が出来る。…別に好きになってくれと言ってるわけじゃない、だが、今は俺たちの前に出てきてほしい』

聞こえる声は蓮のものだ。だが、蓮本人が口を動かして喋っているわけではなく、かといって拡声器があるわけでもない。不思議なことに言葉がまるでテレパシーのように伝わってくる。

話し終え、蓮が立ち上がって数十秒が経過した。しかし、七罪が二人の前に姿を現さない。その事実には蓮は『うーん』と声を出す。

「もしかしたら、声の届かない場所に隠れてるのか？もう少しポイントをずらして…」

「お、おい！蓮！あれを見ろ！」

土道が慌てた様子で空を指差した。そこには雲の隙間から小さな影がこちらに向かってくるのが見える。目を凝らすと、それは巨大な鉄の塊：落下してくる人工衛星だった。

「破片じゃない…司令官殿がしくじったってことか!? いや、何か不測の事態があつたのか…?」

蓮は頬から汗が落ちるのを感じる。これでは事情がかなり変わる。空間震は地上、海上、空中で発生する事が多いため、シエルターは地下に設置されている。しかし、あの人工衛星が地上に落ちれば、地上だけではなく、地下にもその衝撃が伝わり、中にいる人間にも影響を及ぼすだろう。

「ッ！うおおおおお!!」

隣にいた土道が突如走り出す。その手には淡く輝く巨大な剣、サンダルファン塵殺公が握られており、土道がそれを落ちてくる人工衛星に向けて一閃する。その太刀筋をなぞるように斬撃が飛ぶが、それは不自然に向きを変え、空に消えていった。

「ぐっ！な、なんで…」

「土道！次はタイミングを合わせる」

攻撃が曲げられた事に疑問の声を出す土道だが、今はそんな事を考えている時間はないとばかりに蓮がサンダルファン塵殺公に酷似した剣、ヘトラウイスを持つて隣に立つ。

一人でダメなら二人で…そう考え、土道は蓮と共に剣を振るう。人工衛星に飛んでいく二つの斬撃だったが、一回目と同じく、斬撃は逸らされ、空に消えていった。

「まさか、テリトリ随意領域で…やってくれるな…」

もう一度、土道と共に斬撃を放とうにも、土道はサンダルファン塵殺公の力を振るった代償でとても動ける状態では無い。一人でやろうにも結果は一度目と同じになるだけだ。こうしてる間にも人工衛星はぐんぐん迫ってくる、その時。

周囲に冷たい風が吹き荒れた。季節にしては異常な冷風は上昇気流のように吹き上げ、人工衛星をギリギリのところまで止めた。

「土道さん…蓮さん…大丈夫ですかっ!?!」

「くく、何をしてるのかと思えば、随分と派手な事をしておるではないか」

「不満。夕弦達も呼んでほしかったです」

そんな声と共に空から降りてきたのは、巨大なウサギの人形のようなものにしがみついた四糸乃と、限定霊装を身に纏った八舞姉妹だった。

「それは悪かったな……。へフラクシナスは今何を？」

「琴里なら、敵の空中艦と事を交えておる。そこで我らが助太刀にきたというわけだ」

耶具矢から、へフラクシナスの今の状況を聞き終わった直後、三人に少し遅れて淡い光のドレスを身に纏った少女二人が到着した。

「シドー！・レン！無事か!?!」

「もう二人とも！無茶しすぎですよー!」

もしかしたら、士道達より慌てた様子の十香と美九を見て、蓮と士道は力無く笑う。十香の手には士道の持つているものと同じ剣、サンダルファン塵殺公が握られていた。二人でダメだったのなら、十香を含めた三人ならなんとかなるだろう。

あとは士道の回復を待てば良い、そう思った時、士道達のいる場所で突如爆発が発生し、道路に穴を開けた。

「今度はなんだ!?!」

ただでさえこんな状況だというのに、邪魔するような出来事に蓮は苛立ちながら空を見上げる。そして、舌打ちを一つして憎々しく睨みつけた。空にはC R ユニットを装備した機械の人形、へバンダースナッチが一目見五十機以上浮かんでいた。

おそらくへフラクシナスが戦っている空中艦から出てきた機体だろう。人工衛星を落とそうとしている犯人は、何としても作戦を成功させたいらしい。

空に浮かぶへバンダースナッチ達は、空中で展開すると、一斉にマイクロミサイルを発射する。

「チッ！気をつけろ、数が多いぞー!」

蓮がそう叫ぶと、空に浮かんでいた四糸乃、耶具矢、夕弦がミサイ



ルを回避しようと動く。普段なら難なく回避できる攻撃、だが、五十機以上から放たれるミサイルの数はあまりにも多い。回避しきれなかった三人にミサイルが命中し、黒煙が広がる。

「きやつ!!」

「ぬわっ!」

「苦悶。くっ!」

霊力を十分に出せないとはいえ、彼女達は精霊だ。ミサイルごときで致命傷になることは無いが、問題はこれによって人工衛星を止めていた冷風が弱まり、再び落ちてきた事だ。

「ツ・させるかよっ!」

蓮はそう叫ぶと右腕にへバスターを顕現させ、落ちてくる人工衛星に腕を伸ばす。青い光が形を作った巨大な右手は人工衛星を下から支えた。ひとまず落下を防げているのを確認すると、ヘトラウイスを放り投げ、空いた左手で地面を殴る。

(頼む、上手くいってくれ!)

心の中でそう願いながら、意識を集中させる。すると、蓮の周囲と、立ち並ぶ住宅の屋根に冷たい空気が集まり、人工衛星に向けて巨大な柱を作っていく。計五本の氷の柱は人工衛星の表面に突き刺さり、動きを止める。

「…はあっ!!はあ…はあ…やった…」

まるで息を止めていたかのような荒い呼吸をする蓮。これほどのものを短時間で創造するのに加え、水辺もないこの環境でやるのは目に見える疲労を残した。そんな蓮に鞭を打つかのように、視界の端にある景色が見える。

それは塵殺公サンダルファンの反動で動けない土道にへバンダースナッチが手に持ったレイザーブレードを振り上げている場面だった。

今度は悪態を吐く暇すらない。後先考えず、蓮は土道のもとに走り出した。

「大丈夫…大丈夫だわ…そうに決まっている…」

土道達七人が、落ちてくる人工衛星を止めようと戦っている。それを隠れて見ながら、七罪はブツブツと自分にそう言い聞かせた。『自分が出て行かなくても大丈夫』、『あの面子なら心配はいらない』『そう思い込んでも、七罪はそれから目を離せないでいた。』

「蓮が戦っているのよ…別に心配する事なんてないじゃない…」

いくら自分にそう言い聞かせても、なぜか身体の震えが止まらず、手は汗ばんでいる。それが人工衛星が落下してくることに對する恐怖ではないと七罪には分かっていた。だが、具体的に何かと聞かれれば答えられない、そんな感情だった。

見ている戦場では、蓮が巨大な青い手を伸ばして人工衛星を支え、その隙に地面に巨大な氷の柱を作って表面に食い込ませる。やはり自分には必要ない、そう思った直後、蓮が走り出す。その先には動けない土道に對してへバンダースナッチがレイザーブレイドを振り上げていた。

土道を助けるつもりだと察するが、その手に武器は持っていないかった。それに疑問を感じたのと、土道の前に蓮が立ったのは同時だった。蓮は左手にへレツドクイーンを出現させ、へバンダースナッチを切り裂こうとするが遅かった。

レイザーブレイドは蓮の右肩から腹部にかけてを切り裂き、真っ赤な血を吹き出させる。そのタイミングでへレツドクイーンがへバンダースナッチの腹部を届いて上半身と下半身を真っ二つにした。  
(えっ……………)

七罪は目の前の光景が理解出来なかった。蓮が力無く地面に倒れる。それに続いて土道の彼の名を呼ぶ叫び声、そして『美九！蓮を頼む！』という声が聞こえ、美九が蓮を守るように近くに寄る。

七罪には分からなかった、蓮が斬られたという現実が。蓮が倒れた瞬間、自分の心に大きな苦痛が走った事が。そして、その光景を自分は何かするわけでもなく、なぜ呆然と見ているのかが。そう思った時、七罪は足を動かし、一步を踏み出していた。

目を開けると、そこには青色が広がっていた。周りには青いクリスタルが連なり、空中には青い粒子が舞っている。なぜかそれを見ると安心した気持ちになる。

「……は……」

蓮は、倒れていた身体を起こしてそう呟く。なぜか自分が何をしていたのかが思い出せない、自分がどういう名前かすらもだ。立ち上がり、周囲を見渡すと、自分が青い光を放つクリスタルに囲まれているのに気づく。見える地平線に永遠と連なっている光景だが、その中で目を引くほどの大きさの柱と呼べるようなものが天に伸びていた。

「これは……」

近づいて見てみると、クリスタルの中に剣が埋め込まれているのが分かった。青いクリスタルの中にあっても、白い輝きを放つその剣は

：

「……へトラウイス」

無意識にその剣の名を呟く。もう少し歩いてみると、同じような柱をまた見つける。その中には機械質な籠手が埋め込まれており『へウイトリク』と呟いた。

それから歩き続け、計六つの武器を見つけた。なぜか自分の名前も分からないはずなのに全ての武器の名前を全て言うことができたのだが、武器があるはずの大きさにも関わらず、何も入ってないクリスタルも無数にあったのに疑問を感じる。

無意識に歩き続け、足の裏がクリスタルのせいで血だらけになった頃、天に向けて伸びる青い光の柱を見つめる。近づいてみると、その中には”日本刀”のような剣が浮かんでいる。

「何かが……足りない……」

初めて見るはずのそれを見て、抱いた感想はそれだった。刀は今までの武器とは違い、光の柱の中に浮いているだけなので手を伸ばすと簡単に掴むことが出来た。蓮は右手に収まったその刀をジッと見つめる。

（もつと……もつと……力をー）

強く願った瞬間、手にした刀が青色の輝きを放つ。その光を前に蓮は静かに目を閉じた。

「〈贗造魔女〉——【千変万華鏡】!!」

七罪が手にしている天使、〈贗造魔女〉を掲げると、箒自体が色と形を変化させていき、土道と十香が手にしている剣、〈塵殺公〉へと変化する。それを見た土道は目を丸くした。

「二人とも！ タイミングを合わせて同時にやるわよ！ 三人の攻撃が重なれば！」

七罪のその言葉に、土道と十香は互いに頷き剣を構える。そして、七罪が振り抜いたのと同じタイミングで土道と十香は剣を抜く。しかし、そこで予想外の事態が一つ起きた。

「ぬわっ!!」

空中で耶具矢達と交戦してる〈バンダースナッチ〉の流れ弾であるうミサイルが、剣を抜く直前の十香の足元に着弾したのだ。それによって十香のバランスが崩れ、狙いから僅かにズレる。それによって、随意領域が破れず、三つの斬撃は空に消えていった。

「くそっ…もう一度…うあっ！」

もう一度だけ三人により斬撃を放とうとする土道だが、〈塵殺公〉を振るったダメージにより、膝をついてしまう。それと蓮が作った氷の柱が決壊するのは同時だった。それによって、人工衛星は再び地上に落ちてくる。

「そんな…どうしたらいいのよ…」

二つの〈塵殺公〉では随意領域を突破することは出来ない。その事に絶望し、七罪は後ずさる。その時、七罪の背中を青い光が照らした。(えっ?)

後ろを振り向くと、そこには光に包まれた蓮が立っていた。身体が依然然出血しており歩ける状態では無いはずなのに、痛みなど感じていないようにこちらに歩いてくる。七罪はその光景に…美しさに心を奪われた。

青い光に包まれた蓮、土道はそれを九月に見たことがあった。反転した十香に腹部を刺し貫かれ、瀕死状態だったところから蓮は光とともに復活し、十香と精霊三人を圧倒した。右手に日本刀を持ち、立つ姿はそれを思い出させる。

「っ！美九、蓮から離れろ！」

土道は慌ててそう叫ぶ。蓮を庇いながら戦っていたため、美九が蓮から一番近い場所に立っている。だが、美九は自分の方に歩いてくる蓮を見て、目を見開き、怯えていた。九月に感じた恐怖を思い出して動けないのだ。

そんな美九の目の前まで歩くと、左手を彼女に伸ばす。土道の脳裏に肩を掴まれた後、腹部を貫かれる美九の姿が浮かぶ。そうはさせまいと動こうとするが、身体が言うことを聞かない。蓮の左手が美九の右肩に触れる、そして…。

「えっ?」

なんと、美九を自分の胸元に引き寄せた。その瞬間、美九のいた場所にレイザーブレイドを持ったヘバンダースナッチ<が飛び込んでくる。もし、あのままだったら美九は斬られていただろう。それを確認して、美九はそんな声を出した。

蓮は目の前にいるヘバンダースナッチ<の脚部に右手に持つ日本刀を突き刺し、地に張り付ける。次にレイザーブレイドを持っている右手を左手で掴むと、その剣先をヘバンダースナッチ<の頭部に向ける。もちろん、ヘバンダースナッチ<もそうはさせまいと抵抗するが、それを無視してるかのような圧倒的な力に意味はなかった。

やがて、関節部から黒煙が上がり、ショットしてしまう。それによって、抵抗という足掻きすら奪われたヘバンダースナッチ<の頭部に自身が持つレイザーブレイドが突き立てられ、機能を停止した。

「美九を…助けたのか?」

九月の時とは違うその行動に、土道は戸惑いの声を出す。美九を助けた蓮は再び、土道達の方に歩いてくる。その途中、青い粒子が蓮を包むと服の上に霊装が作られる。だが、それは前に見た時と比べて輝

きが淡く、小さい。まるで”限定霊装”というように見えた。

そして、歩く蓮の背後に粒子が集まり、あるものを形作る。闇が覗く目元に浮かぶ、青い瞳。耳まで裂け、鋭い歯が並ぶ口。身体の表面を人間のものとは思えない、硬い甲羅のような皮膚が覆う。同じ九月の時に見た、人間ではない巨大な魔神だった。だが、こちらも前に見た時と比べて輝きが小さく、持っている武器も右手に持つ剣のみだった。

「見るのはこれで二回目、だが、前回と比べると”不完全”そんな印象を受ける姿だ。」

「?????!!!!」  
蓮の背後に現れた魔神は、空に咆哮を飛ばす。すると、その周囲に青い光を放つ剣を発現させた。その刃先は全て外側に向いており、それは一斉に空に飛んでいく。

「まずい……四糸乃！耶具矢！夕弦！」

剣の飛翔先である空には、ヘバンダースナッチと戦っている三人がいる。土道のその声に四糸乃達は飛んでくる剣の存在に気づいたらしく、各々衝撃に備える。だが、剣は四糸乃達に命中する事はなく、戦っていた全てのヘバンダースナッチに正確に命中して爆発と共に鉄屑へと変えた。

「レンの奴……もしや、四糸乃達を助けたのではないか？」

九月の時を知らない十香から出た、客観的に見た感想を聞いて、土道はその事に気がつく。今の援護といい美九の時といい、間違いなく蓮は自分たちを助けたと感じた。

蓮は負傷しているせいか、足を引きずるような動きで息を乱しながら土道達の元まで歩いてくる。三人は蓮が何をするつもりか察して、左右に避けて落ちてくる人工衛星への道を開けた。

「蓮……あなたは……一体……」  
「……………」

七罪がそう聞くがまるで聞こえてないかのように無視する。人工衛星は、もう地上に落ちる寸前だ、それに対して蓮は姿勢を中腰にし、右手に持った刀の刃先を下に向ける居合のような構えを取る。背後

の魔神もその動きにシンクロするかのよう同じ構えを取った。  
「……!!!」

魔神は動物が相手を威嚇するかのような声を上げると、下に向けて  
めた剣を振り上げる。それと同時に蓮は刀を横に一閃し、十字形の斬  
撃が塵殺公のように飛んでいく。

飛んだ斬撃は、人工衛星を守る随意領域とぶつかる。塵殺公すら  
防いだものだったのにも関わらず、随意領域は一瞬で破られ、斬撃は  
人工衛星に命中した。しかし、それは勢いを止める事なく進んでい  
き、何と人工衛星を綺麗に四つに切断して大爆発を起こさせた。

「なんて威力なの……〈贗造魔女〉!」

人工衛星を容易く破壊した威力に驚きつつも、七罪は素早く天使の  
力を使い、落ちてくる破片全てをブサイクなぬいぐるみへと変身させ  
る。それで被害は無く安心……そう思った直後。

蓮の背後にいた魔神が空気に溶けるように消え、右手に持っていた  
刀も右手と一体化するように無くなると、彼が地面に倒れたのだ。

「レン!? どうしたのだ!」

いきなり倒れた蓮に驚いた十香が駆け寄る。十香を最初に他の六  
人も急いで寄ってくるが、全員蓮の容体を見た瞬間、顔を青くした。  
何故なら、倒れた蓮の身体から血だまりが広がっており、危険な量の  
出血だと理解したからだ。

「蓮! おい蓮! しっかりしろ!!」

士道を含めた六人が必死に呼びかける。歯痒い事に医療の専門的  
な知識が無い士道達には、傷口をハンカチで押さえて意識が戻るよう  
に呼びかけるぐらいしか出来る事がない。〈フラクシナス〉が来るの  
を待っていては、どう考えても間に合わない状態だ。

士道の頭に、エレンが話したという童話が浮かんでくる。クジラは  
潜水艦を庇って死んだ、まさにその話通りの展開だ。そんな結末にさ  
せるわけにはいかない。

皆、涙ながらに蓮に語りかける中、七罪はそこの中に入る事も出来ず  
大きな後悔を感じていた。もっと早く自分が出ていればこんな事にな  
らなかつたという思い。そして、苦しんでいるのがなぜ自分では無

く、優しくしてくれてくれた蓮なのかという怒り。

(何か…なにかしなくちや…助けなきや…)

そう強く思った時、七罪の身体が勝手に動き、士道達の中に入り込む。そして、倒れている蓮の唇に自分の唇を重ねていた。騒然とする周りを気にもせず、七罪は強く願った。

(お願い…！私はどうなってもいい…だから、この人を死なせないで!!)

ただひたすらに望む。すると、自分が何かと繋がるような奇妙な感覚と共に、七罪が纏っていた霊装が弾けるように消滅する。

「七罪…！お前、霊装が…!？」

隣から士道の驚きの声が聞こえるが、今の七罪は自分が裸になった事など気にならなかった。今、目の前では瀕死状態の蓮に刻まれた傷口が緑色の光に包まれ、塞がれたからだ。

「はあ…やった…やったわ…」

なぜ自分はキスしたのか、どうして蓮の傷口が塞がれたのかは分からない。だが、それによって蓮が助かったという現実が重要なのだ。最後の確認とばかりに蓮の胸に耳を当てる。すると…

ドク…ドク…と心臓が動いている音が聞こえる。それを聞いた瞬間、七罪の目から涙が溢れる。今まで流してきた涙とは違う、喜びと安堵の涙だった。

人工衛星から街を救った次の日、士道達は「ヘフラクシナス」の艦内を歩いており、その中には七罪もいる。

「それ本当なのか!?七罪の霊力が封印されてるって…」

「ええ、こっちで調べてみたけど、霊力が封印された時にできる経路パスのようなものが計測されたわ。その相手は蓮だったんだけどね」

琴里は信じられないと言った様子で語るのを、七罪は黙って聞いていた。士道も七罪の霊装が消えるのを見て、まさかと思っていたが、本当に霊力が封印されているとは思いつかなかった。

「しかし、あの時はビックリしたぞ。何しろ七罪がいきなりキスをしたのだからな」



「驚きました…けど、蓮さんが治って…良かったです…」

『そうそう、これは、七罪ちゃんの愛が蓮くんを助けたって事なのかな？うーん？』

「我を呆気にとるとはなかなかよ。のう、夕弦？」

「首肯。まるでおとぎ話のような出来事でした」

「あーん！とてもロマンチックだとおもいますう！」

それぞれがあの中の時の感想を言い出し、それを聞いた七罪が顔を赤くし『いや、それはその…助けたたいと思って…』と呟く。恥ずかしがってはいるものの、嫌がってはいない。そんな様子だ。

「でも、どうして蓮が七罪の霊力を封印出来たのかは不明のままなの。士道は何か知らない？今回の事に関する片鱗を見たとか」

そう聞かれて思い出すのが、九月に精霊、狂三が蓮の能力を説明してくれた時だ。狂三はあの時、『蓮には自分の力を相手に移す事が出来る』と説明した。それが可能なのなら逆に『相手の力を自分に取り入れる』事も可能なのではないかと思う。

「いや、特に無いな…。蓮が霊力を封印したのも初めて見たし…」

しかし、士道はその事を琴里には伝えなかった。あくまでこれは自分の予想という範疇を抜け出していないため、下手なことを言って変に混乱させたく無いと思っただのだ。琴里もやっぱりといった様子で『そう』と答える。

「それじゃあみんな、蓮はここにいてくれぐれも静かにね。一応怪我人なんだから」

琴里はあるドアの前で足を止め、精霊達にそう注意した。蓮はあの後、〈ヘフラクシナス〉の中で一応の検査を受けると琴里は言っていた。検査と言っても大事に至らないかを確認する程度のもので心配は要らないらしい。

ドアは自動らしく、士道達が近づくと勝手に開いた。室内はテレビにベッド、テーブルなど普通の病室と同じようなものだった。だが、奇妙なことにベッドに蓮の姿は無く、乱れている布団があるだけだ。

「疑問。蓮がいまませんがどうしたのですか？」

「あれ？おかしいわね、トイレにでも行ってるのかしら？」

すると、ベッドの上にある布団にある小さな膨らみがモゾモゾと動き出す。それに気づいた八人の視線が集中するが、膨らみの大きさからして蓮の可能性はない。布団から顔を出したのは予想もしなかったものだった。

「ワンっ！」

布団から出てきたのは生後一年も経過してないであろう子犬だった。犬種は柴犬で柔らかそうな毛並みは思わず触りたくなる。

「い、犬？なんで病室に…？」

「おお！犬か！私も触りたいぞー！」

布団から這い出てきた子犬を見つけた十香は、頭を優しく撫で抱っこする。それを見た他の精霊の面々も触ろうと寄っていくが、土道と琴里は呆気にとられたままだ。

「おかしいわね、その子犬、どこから入ってきたのかしら？」

「確かに、そうだよなあ」

眉を顰めながら言った琴里の疑問に、土道は室内を見渡した。部屋にあるドアは自動だが子犬の大きさに反応するとは思えないし、通気口があるわけでもない。その事を疑問に思っていると、十香の腕の中にいた子犬が、腕を登って肩まで行くと隣にいる四糸乃に向かってジャンプした。

すると、空中で子犬の身体が輝き始める。それは四糸乃の肩に着地する頃には止んでいたが、その時の姿は子犬では無く小さな三毛猫へと変わっていた。それに一同は眼を見張る。

「ちよつと待って…。さつきまで子犬だったわよね？どうなってるの…」

まるで夢でも見てるような気分になる出来事だ。四糸乃の肩に乗る子猫は、四糸乃の頬をペロペロと舐めた後、左手にいるよしのんを踏み台にして空中に飛び出す。その際、よしのんが『ふにゃ！』と奇妙な声を上げた。

空中に飛び出した子猫の身体は再び輝き、翼のある小鳥へと変化する。そのままパタパタと飛び、驚いている琴里の頭の上に着陸した。

「もしかして、新しい新種の動物…とかは無いやな？」

「何よそれ、エイリアンの間違いじゃないかしら」

不機嫌そうに言う琴里に、土道は愛想笑いを浮かべる。それからも耶具矢、夕弦、美九という順番に飛び移り、子ウサギ、子リス、ハムスターという順番に姿を変えていった。ただ、最後の美九の時は、足を滑らせ、胸の谷間に落ちてしまい、ジタバタともがいていた。美九はそれを『くすぐったいですう』と笑いながら見ていた。

そして、そこから脱出したハムスターは、誰もいないベッドの方に飛んだ。そしてまた身体を輝かせるとそれは人の形へと変わって行く。光が止んだ頃、そこには白い髪の毛、白い肌、そして整った顔が特徴的な人物がいた。

「よおみんな、一日ぶりぐらいかな？」

陽気な挨拶をする少年、蓮はニツコリと微笑む。そんな挨拶を土道達は開いた口が塞がらない思いで聞いていた。そして、全員が同時に理解する、今までの動物は全て蓮だったのだと。

「今の…全部蓮だったの？もしかして、それって私の天使の…」  
「ああ、目が覚めたら出来るようになってたんだ」

七罪の疑問に蓮は自分の耳にかかっている髪を上げて、緑色の宝石が埋め込まれている銀色のピアスを見せる。

〈クリームル〉

思い描いたものに変身する事が出来るピアス。

変身したものの姿形はもちろん、匂いまでを完全に真似ることが可能。

さらに、触れたものを別の性質に変えることが出来る。

「死にかけていた俺を助けてくれたのは七罪だって聞いたぞ。ありがとうな」

そう言うと、蓮は七罪をギュツと抱きしめた。それに七罪は『はわわ…』と顔を赤くし、他の六人は気恥ずかしそうに見ている。ただ、美九だけは目を輝かせていたが。

「それでさ、もし、七罪が良かったらでいいんだけど、俺…と…一緒に

…」

そこまで言いかけたところで、蓮はまるで眠ってしまったかのように意識を失い、七罪が慌てて身体を支える。心配そうな目で見る一同に琴里が、やれやれという様子で説明する。

「やつぱり、まだ疲労が残ってるのよ。みんな、悪いけどベッドの上に寝かせるのを手伝ってくれない？寝かせてあげましょ」

みんなで協力して、蓮をベッドに寝かせる。ここで騒いで起こしてしまうわけにもいかなかったため、琴里は外に出るのを進言するが、七罪だけが椅子に座ったまま動かない。

「あの…私ここにいるわ。もちろん！うるさくしないって約束するから！」

「え？でも、待ってるんだったら外で待ってる方がいてっ!?!いきなりどうし…た…?」

話してる途中の土道の脇腹を琴里が抓った。非難を込めた目で琴里を見るが、『何も言うな』という目で黙らされる。

「分かったわ。蓮が目を覚ましたら伝えて頂戴。さあ、みんな行くわよ」

「いたた、分かったから抓るのをやめてえ！」

引きづられるような形で土道は部屋を出て行かせられ、二人に続いて六人も出て行く。琴里はドアが閉じる直前、部屋の中に視線を向ける。そこには寝ている蓮を、優しい笑みで見ている七罪がいた。

そこから数十分後、目覚めた蓮が七罪に『一緒の家に住まないか』という提案をし、七罪は恥ずかしそうに…だが確実にコクリと頷いた。

## 58話

「うーん、何が出来るかしら…」

ある部屋の一室で一人の少女が悩みの声を出していた。身体は普通の少女と痩せ気味で暗そうな顔が印象的だ。そんな見た目の少女は、一般宅と比べものにならない広さのリビングで、これまた普通の家にあるのと比べて高価そうなソファに腰掛けて、精霊、七罪は悩んでいた。その膝の上には一匹の猫が欠伸をしている。

先日、霊力が封印された精霊である七罪が悩んでいる理由は、自分と一緒にこの家に住んでいる同居人についてだ。同居人と言っても、七罪が今いるこの家は元々その人物のものであり、七罪は居候という身なのだ。

その同居人の名前は、神代 蓮。同時に七罪が想いを寄せる人物でもあった。

「ああもう…なんで私がこんなに悩まなくちゃ…」

そんな八つ当たりのような事を言いながら、乱暴に髪を掻きまわす。七罪が蓮をいつ好きになったのかは、七罪自身も分からない。だが、恋なんてそんなものだろうと自分に言い聞かせる。気づいたら目で追っていてもつと彼のことを知りたいと思っていた、それでいいと思う。ただ、自分が蓮に魅了された瞬間には心辺りがあった。

それはエレンから自分を救ってくれた瞬間。自分に背を向け、強敵に正面から挑み互角の戦いを繰り広げた時だった。数種類の武器を使い、相手のペースを乱しながら戦う、その光景は忘れられないような美しさがあったと感ずる。

「どうすれば蓮の役に立てるか…」

そんな七罪が悩んでいる理由にも、蓮が関係していた。別に蓮と七罪の間に何かがあったという訳ではない、どちらかと言うと七罪が勝手に悩んでいるという表現が合っているような内容だ。

七罪の霊力が封印されて数日。その間の蓮の言動を思い返して見る。

『七罪、ビスケットを焼いたんだ。おやつにしないか?』

『七罪、洗濯物を出してくれ。まとめて洗うから』

『七罪、今日の夕飯は何が食べたい？なんでも良いはダメだぞ』

そう、蓮は七罪に対して過保護とも言える世話を焼いていたのだ。それに加え朝、昼、おやつ、晩、と全ての食事は蓮が作り、それは文句のつけようがないほど美味。七罪がしていた事と言えば、今のよう  
に飼う猫、ミルクを愛でていた以外に無い。

「それにしても意外だわ…蓮があんな世話焼きだったなんて…」

勝手な想像なのだが、蓮は尽くされるタイプだとばかり思っていた。あんな見た目なのだ、多くの女は彼の気を引こうと躍起になり、多くの物を貢ぐに違いない。でも、実際は自分の決めた相手に尽くすタイプだった。そう考えると、なんとも言えない嬉しさが湧いてくる。だが、すぐに我に帰ると顔をブンブンと横に振る。

「と、とにかく！このままじゃただのヒモだわ！なんとかして蓮の手助けをしないと！」

拳を握り、そう決心する七罪。だが、膝に座るミルクは、不安そうにニヤアと鳴いた。

夕方、七罪はリビングから繋がるキッチンに足を踏み入れる。その姿は髪を纏め、エプロンと気合いの入っているのが伝わってくる。キッチン…と呼ぶには設備が充実しすぎてる場所にはすでに良い香りが充満しており、その中心には一人の少年がいる。

「あれ？こんなところに来てどうしたんだ？夕飯はまだ先だぞ」

七罪の存在に気づいた蓮が意外そうな様子で声をかけてくる。それに七罪は身体をビクッと震わせると、喉をゴクリと鳴らし声を出す。

「きよ、今日の料理！私も手伝うわ！何かやる事はない!？」

もちろんここで『一人で大丈夫』や『必要ない』などと言われてしまう可能性がある。そんな七罪の不安を知ってか知らずか、蓮は小さく笑った。そして、自分の隣を指差す。

「それは助かるな。じゃあ七罪は野菜を切ってくれ。俺はルーを作るから」

一先ず最初の壁は突破出来た、その事に内心ガッツポーズをしつつ、七罪は小走りで蓮の隣に立つ。そこにはまな板と包丁、ジャガイモ、人参、鶏肉、玉ねぎと複数の野菜と肉が置いてある。それを見て、七罪は今日の夕飯は、カレーが良いとリクエストしたのを思い出した。

「こ、これを一口サイズに切ればいいのね…」

すでに皮の剥いてあるジャガイモを手にとるとまな板の上に置き、震える手で包丁を握る。言葉といい表情といい七罪が緊張しているのは見てとれた。それもそうだ、流れで来たものの、七罪自身は料理などした事がないのだから。

（一口サイズに切る…一口サイズに切る…あれ、一口つてどんな大きさだっけ…どういうふうに切ったら…）

どうしていいか分からず、混乱する七罪の手を後ろから優しく掴む手があった。その正体は蓮で、不思議な事に蓮に触れられた瞬間、七罪の手の震えはピタリと止まる。

「落ち着け七罪。食材を掴む指は先を丸めるんだ。手を切らないようにな」

耳元で言い聞かせるような安心する声で蓮は言う。七罪の緊張が取れたのを感じると七罪の手を動かし、ストーンストーンとジャガイモを切っていく。これが切り終わる頃には七罪の手の震えは消えていた。「うまく出来たじゃないか。その調子で後は頼むよ」

「あの…残りは本当に私が切っているの？蓮みたいにな上手く切れないのに…」

不安そうな顔で七罪は遠慮気味に言う。普段、蓮が作った料理の食材は食べる者の事を考え、食べやすいサイズで切られていた。それを自分がやっていいのかと聞く。すると、蓮は困ったように頬をポリポリと掻いた。

「まあ…俺のは気にしなくてもいいよ。癖みたいなものだし。それよ、七罪が食べやすいと思う大きさをやってくれば、それでいい」

その一言で気持ち became 楽になった気がする。七罪は『よしっ！』と心の中で気合いを入れると、他の野菜を掴む。数分後、七罪は全ての野

菜を切り終わり、ふうつと息を吐くと包丁を置く。

「ん？ああ、終わったか。お疲れさん」

「ええ、蓮のと比べて形が不揃いになっちゃったけど…って、何やってるの…？」

すぐ隣に七罪が顔を向け、眉を顰める。蓮は加熱している鍋に入っているルーをおたまで混ぜている最中なのだが、その側には小皿が数枚あり、そこには粉のようなものが盛ってある。蓮はそれを口に運んでいた。

「気になるなら食べてみる？身体に悪いものじゃないから」

何かとは言わず、粉末をひとつまみすると、それを七罪の前まで持ってくる。害はないと言っても、一応警戒して匂いを嗅いでみるが、その瞬間、七罪は驚きとばかりに目を見開いた。

「何これ…すごいいい香りがするんだけど…」

鼻を包み込む香ばしい香り。それを七罪は夢中で嗅ぎ続ける。だが、この粉末が何なのかはまだ分からない。

「クンクン…ねえ、これってなムグウ！」

瞬間、粉末が握られている蓮の指先が七罪の口にねじ込まれる。何をされたのか理解する前に七罪はある刺激によつて声を上げる事となった。

「か！か、からあ!!水!!みずうく!!」

口の中を駆け巡る辛味に、七罪は顔を赤くし声を出すと大急ぎで蛇口まで行き、水をがぶ飲みする。その様子を蓮はイタズラが成功した子供のような顔で見っていた。

「ゴホッ！な、何よそれ…？すんごい辛かったんだけど…」

「ごめんごめん、そんなに辛かったか？」

涙目で見えてくる七罪に、クスクスと笑いながら謝る。そんなに七罪に、蓮は粉の正体を教えた。

「これはカレーのルーに入れる香辛料、スパイスだ。このスパイスの配合に色、辛さ、香りが変わるんだよ」

そう説明しながら、蓮は七罪の口に突っ込んだ手を今度は自分の口に入れて舐める。それを見た七罪は辛さとは違う理由で顔が赤く



なってくるのを感じ、顔を俯けた。

「七罪は辛いのが苦手らしいから、甘めの味付けにしとく？」

「こ、子供扱いしないでよ…」

非難じみた声を出す七罪だったが、蓮のこういうところにドキツとしていてのを感じていた。戦う時の鋭い雰囲気と今のような無邪気な一面。これがギャップ萌えという奴だろうか。しかし、それゆえ七罪には分らないところがある。

(どっちが本当の蓮なのよ…)

脳裏に焼き付いている勇ましく剣を振るう姿と今のように自分と談笑しながら料理を作る姿。どちらが本当の姿なのか七罪には判断出来なかった。だが、そんなのも楽しそうに鍋を混ぜる蓮を見ていると気にしなくてもなってくる。どっちであろうと蓮は蓮なのだ。

七罪の切った野菜を鍋に入れて煮詰める。ルーの水気がなくなつたのを確認した蓮は、皿にある香辛料をひとつまみするとそれを鍋の中に入れる。それを最初に次々と香辛料をルーと混ぜ合わせる。一見すると、適当のように見えるが、組み合わせと量を頭の中で計算しているのだ。

そんな光景を見ていた七罪は、ある疑問を感じ、おたまを回している蓮に聞いた。

「思ってたんだけど、どうしてカレー粉を使わないの？そっちの方が早いし、手間もかからないじゃない」

蓮が元からこういう風に手間をかけるのは知っていたが、なぜこんな回りくどい事をするのが七罪には分からなかった。それを聞いた蓮は、うーんと声を出す。

「もちろん、そういう便利なものが市販されてる事は知ってるぞ。だけど、それらを使って楽するなんて許されなかったからなあ。それが今みたいに落ち着いたんだとおもう」

「…完璧主義な友人が？」

「へえ、その話覚えてたのか。関心、関心」

理解が早くて助かるといった様子で頷くと、蓮はルーを口に含み味見をする。それが問題ないと判断したら、隣にいる七罪に顔を向け

る。

「七罪、その棚から盛り付ける皿を取ってくれ」

「え？う、うん」

蓮が指差した棚で皿を取り出す七罪を見た後、鍋の加熱を止めホツと息を吐く。その時、キツチン内に大きな音が響き渡る。そこに顔を向けると、元は皿らしき破片の前で膝をついている七罪がおり、ブルブルと震えていた。

（あ、ああ……ああ……）

やってしまったという思いが七罪の胸の中を満たす。七罪の目から見ても、割ってしまった皿は綺麗な装飾が光を反射させており、明らかに高級品である事が理解出来た。いや、それ以前に蓮が食事にごだわりを見せる以上、安物の皿を使うはずがないというのが分かっていた。

そんな失意の七罪の耳に、自分の元に歩いてくる足音が聞こえる。怒られる……！そう思い身体を強張らせた。

「大丈夫か!?怪我は!?」

しかし、現実を自分を心配する声と共に両手を触られるだけだった。蓮は割れた皿など眼中になく、ただ七罪だけを心配して気にしている。

「な、なんで……?こんな高価そうなものダメにしたのに……なんで私を怒らないの……」

「なんでって……こんな皿、金を出せばまた買えるんだぞ?それより七罪の方が心配って、指先切ってるじゃないか」

その言葉で七罪は自分の指先から血が出てる事に気付く。怒られるという緊張感のせいで怪我をしていた事が分からなかったらしい。蓮は何を思ったのか、血が出てる七罪の人差し指をパクツと啜え、舌で傷口を優しく舐める。

「ひゃっ!?にゃーにゃにゃしてるのよー!」

口の中の心地よい暖かさと、指を舐められている事の緊張感で、顔は赤くなり呂律が回らなくなる。そんな七罪を無視し、蓮はしばらくの間指を口に含む。一分ほど経って、蓮は指を口から離した。その時

の自分の指に銀色の橋がかかる光景と、ゾクリと身体を駆け巡る感覚に七罪の身体が震える。

指先の出血が止まっているのを確認した蓮は、絆創膏を持ってきて傷口に巻く。これで処置は完了だ。

「これでよし、皿のことは気にしなくていいよ。俺は皿の破片を片付けるから、七罪は新しい皿にカレーを盛っておいて」

自分に背を向け、掃除に入る蓮の姿を見た七罪は罪悪感のようなものを感じてミスした自分を責めなくなる。だが蓮は怒る事なく、気にするなど言った。本来怒るべき人間にそうされなかった以上、七罪は自分を責める権利すら無いのだと感じた。

結局、食事に入れたのは蓮が一人で作業していた時と比べて、約三十分遅れた時だった。その時の食事中に言われた、『また手伝ってくれると嬉しい』という蓮の悪意無き言葉が、七罪の胸にグサリと突き刺さった。

## 59話

「あ、あれほど私が役に立たないなんて…むしろ足を引つ張ってただけだったわね…」

カレーを手伝った次の日、休日の優しい日光が差し込む廊下を七罪は自己嫌悪の顔で歩いていった。その腕にはミルクを抱いている。昨日のカレー作りを手伝った後も、七罪は何か自分が助けになれる事はないかと蓮を観察してみた。

だが、食事の後片付けはもちろん、掃除、洗濯などを一人で苦もなくこなしてしまい七罪の手伝う隙が全く無かったのだ。それに加え、カレーの一件で自分が手伝っても手間の掛かる事を起こしかねないという恐怖もあり、なかなか動き出す事が出来なかった。

「こうなったら、本人に直接聞くしかないわね…。何か手伝えることがあるかどうか…」

よく考えると、最初からそうすればよかったという言葉が出てこなくもないのだが、そんな事はどうでもいい。たしか、蓮は中庭にいると言っていた気がする。その事を思い出し、七罪は足を進める。

(中庭なんかで何をしてるのかしら…)

その七罪の疑問はすぐに解消された。この家の中庭、普通の家の中庭とは比べものにならない広さのその場所には、七罪の記憶通り蓮はいた。ただ、庭の真ん中で椅子に座っている彼の周りには、十以上はあるであろう野良犬、野良猫がいたのだ。その内の一匹であるふくよかな体型の黒猫が蓮の膝の上に居座り、目を細めリラックスしていた。

「何これ…？ど、どういう状況なの…」

目の前の光景に混乱する七罪だったが、それより早く動き出す存在があった。それは七罪と共にいたミルクで、蓮の姿を確認した瞬間、腕の中から飛び降りると、蓮の元に一直線に向かう。そして猫らしい身軽な動きでジャンプすると、蓮の膝の上に乗る、先にいた黒猫を蹴落とした後ニャアと鳴いてすり寄ってきた。

「わあお…」

決まった相手にとことん寄生する猫という動物が目の前で見せた、

野心の一面にそんな声が出てしまう。『そいつではなく、自分に構え』そんなミルクの要求に蓮は従い、人差し指で首筋辺りを撫でてやると、気持ちよさそうに欠伸をする。

ただ、そのすぐ下では蹴落とされた黒猫が、ミルクに毛を逆立て、『シャァー!』と威嚇をしているのが気になる。

「ちよつと蓮!それはどうなってるの!?!」

「ああ、七罪か。まあ、とりあえず座れよ」

立っている七罪を見た蓮は、自分の隣にある椅子を指差しそう言う。七罪は言われた通りそれに座り、周りを見渡した。庭にいる大量の犬猫の一匹一匹の過ごし方はバラバラだった。蓮が用意したであろう小皿に注がれた牛乳を飲んでいる猫もいれば、ビーフジャーキーを噛んでいる犬もいる。そして、無防備な格好で寝ているものもだ。

「…いつからここは保健所になったのよ」

「そう言うなって。これにはそれなりの理由があつてな」

苦笑いを浮かべながらそう言うと、自分の足元で毛を逆立てる黒猫を抱え上げると膝上にのせる。黒猫は同じ膝の上にいるミルクに威嚇の声を出しているが、当のミルクはプイツと顔を背け知らんぷりだ。そんな様子を見かねた蓮は、ポケットから猫用のボーロを一つ取り出し、黒猫に食べさせる。

「この家に住み始めた頃、この庭に野良猫やら野良犬やらが来るようになったんだよ。ここはどこを気に入ったのか知らないけど、とにかくトイレされたり、我が物顔で居座られたりと好き放題やられてる有様だな」

黒猫がボーロを咀嚼し、イライラが無くなったのを確認した後、その隣にいるミルクにもボーロを食べさせる。七罪はそれをジツと見ながら話を聞く。

「最初の内は追い出したりしてたんだけど、ある日ガリガリに痩せて傷だらけの猫がやって来たんだ。いつも通りに追い出してもよかったんだけど、そうしたら道端で野垂れ死ぬか、車に轢かれそうな様子で追い出せなかった」

「それで…蓮はどうしたの?」

「ミルクみたいに飼う気は無かったけど、数日間だけ面倒を見たんだ。傷が治るまで待つて、栄養のある食事を与える。三日か四日ぐらいで完治したかな、動物の治癒力は高いから」

懐かしむように語る蓮。この家に住み始めたのが今年の三月の終わりか、四月の始まりだった筈だから、約半年前という事になる。まだ一年も経過してないのに、もう何年も前の出来事のような気がして来る。

「傷が治った後は、普通に自由にさせたんだけど、それから一週間後ぐらいに猫の群れがここに来た。今までとは違う、明らかに秩序や社会的順位がある集団だった。その真ん中には俺が助けた猫がいた、つまり、そいつはここらの猫のボスになってたんだ」

「え、それ、本当の話？」

作られたような話の内容に、七罪は疑問の声を上げるが、蓮は『勿論、本当』と頷く。その様子を見るからに、嘘をついている様子はない。

「群れで餌をねだりに来たらしい。一応、餌付けしたのは俺だし、毎日来るって訳じゃないから、来た時こういう風に餌を与えてるんだ。まあ、いつからか野良犬まで来るようになったのは誤算だったけど。動物の間でも噂話みたいなものがあるのかね」

犬語、猫語が理解出来ないから、分からないけどとおかしそうに言う。両手でミルクと黒猫の首筋を撫でてやる。すると、二匹は気持ち良さそうに目を細め、なうーと声を出す。

そんな光景を七罪は微笑ましく見ていると、そんな穏やかな雰囲気壊す『ワン！ワン！』という鳴き声が庭に響き渡った。二人が顔を向けると、そこには一つのビーフジャーキーの両端を咥え、逆方向に引つ張る二匹の犬がいた。蓮は鼻屑する事なく、食べ物を与えていたつもりだったが、その意図は犬たちに伝わらなかつたらしい。

「ちよ、ちよっと！あんた達、やめなさいよ!!」

それを見た七罪が、二匹を宥めようと席を立った瞬間、庭中に笛のような高い音が響き渡る。その音に、喧嘩していた二匹は勿論、寝ていた個体までもが目を覚まし、音の元へ顔を向ける。そこには指をく

わえた蓮れがおり、笛のような音は彼の出した指笛だったのだ。

「separate…」

指笛や二匹の争っていた音がと比べたら明らかに小さいその一言。だが、それを聞いた二匹は身体をビクビクと震わせながら、ビーフジャーキーから口を離すと、それを挟むように横に並んだ。その姿は自由に生きる野良犬のものとは思えない。

その姿を見た蓮は、二匹の内の片方を指差すと、ポケットに腕を突っ込みビーフジャーキーを一つ取り出し、その犬の目の前に放る。

「ok. go」

その命令で、二匹は新たに投げられたビーフジャーキーと、求め争っていたビーフジャーキーをそれぞれ加えると、そそくさと歩いて行き、庭を出て行った。その二匹が消えると他の犬猫はまるで何もなかったかのように昼寝へと戻った。

誰もが平然と過ごした時間、そんな時間を唾然とした様子で見っていたのは七罪ただ一人。

「えっ!? えっ!? 今、何が起きたの!?!」

「あの二匹に今すぐここを出て行くように命令したんだ。互いが納得するように」

蓮はミルクを撫でながら、平然とした様子で答える。その様子は七罪の様子とは対照的と表現するのが正しいだろう。

「二応、ここを提供しているわけだけど、トイレとかを好き放題されたらたまらないからな。あんな風に躰をしたんだ、さっきの指笛は命令を出す時の合図」

「躰たつて…みんな野良なのよね…?」

「別にうるさい事を言っているつもりは無いさ。ただ、トイレ、交尾、喧嘩はここでするなって教えてある。これを守れない奴は追い出す、それがルールだから」

さも当たり前のように言うその姿には、一種のカリスマ性のようなものを感じた。それに似合わないような欠伸を一つすると、膝の上に乗っている黒猫を地面に下ろした後、ミルクを抱っこし、七罪へと差し出す。

「俺はしばらくここにいて、全員が庭から出て行くのを待つてるから、七罪はミルクと一緒に家に戻っててくれ。こいつだと、さつきみたい誰かに喧嘩を吹っ掛けそうだし」

「確かに、それもそうね…」

納得してミルクを受け取った七罪は、家に戻る途中、チラリと背後を振り向いた。そこには誰も使っていない空の受け皿を回収して行く蓮の姿があり、その足元には数匹の野良猫、野良犬がおり、彼に甘えていた。

家に戻った七罪が、蓮の元に訪れた理由を思い出したのはそれから数分後、ソファの上でミルクを愛でている時だった。

太陽が沈み、闇に包まれる夜。七罪はパジャマ姿で薄暗い家の廊下を歩いていた。その表情は決意に満ちている。

（家事も手伝えず、料理もダメだった…。そんな私が蓮の助けになれる事はもう…。これしか無い…）

七罪は闇の中で僅かに照らされる自分の身体を見下ろす。不健康そうな肌に痩せている手足、放っておいたらくせつ毛で荒れてしまう髪の毛。十香や美九などとは比べものにならないほど劣っている自分の身体。

（だけど…変身した私だったら…）

七罪の天使、〈贗造魔女〉で姿を変えた自分だったら蓮の役に立てる…、最悪、その身体を生かして…。その事を考えると、顔が熱くなり、顔を俯けてしまう。だが、同時にそうでもしなくちゃ役に立てない自分が惨めに思えてくる。

蓮の事が好きだ、愛していると表現してもいいほど。しかし、たまに自分が彼に恋する資格があるのか悩む時があった。その原因の一つに家の中で役に立てない事があり、それに耐えられなくなりこんな事をしているんだと七罪はうつつすら考えていた。

（たしか、今は書斎にいるはず…。そこで…私の意思を伝えなきゃ…）

その時のことを考えると、手に汗が滲み、喉が乾いてくる。それでも、七罪は足を動かし目的の部屋のドアの前まで来ると、大きく息を



吐き出してドアノブを掴み、開ける。

たくさんの本が並ぶ室内、そこはオレンジ色のランプの光で照らされて安心するような雰囲気を放っていた。その部屋の真ん中、複数のソファと机が設置してあるそこには彼はいた。

「七罪？どうしたんだ、こんなところに」

思わぬ来客に目を丸くしている蓮。その手には分厚い本があり顔には眼鏡をかけてあり、七罪が部屋に入って来る瞬間まで読書中だったのが理解できる。

「あの！蓮、私…」

「珍しいな、こんなところに来るなんて。今、お茶を出すよ」

七罪が言おうとした瞬間、蓮は明るくそう言い、立ち上がる。そんな様子に勢いを削がれ、言いよんどんでしまう。

(ま、まだ大丈夫よ…、焦る必要なんてないじゃ無い…)

出鼻をくじかれたが、別に一分一秒を争うような緊急の用事というわけでは無い。急ぐ必要はない、そう自分に言い聞かせた七罪は、蓮が座っていたソファの隣に腰掛ける。

数分後、ティーカップを持った蓮が戻って来る。ティーカップからは、白い湯気の他に安心する香りが出ており、それをソファの前に置くと、蓮も七罪の隣に座った。

「美味しい…」

「アッサムをたつぷりのミルクで淹れたミルクティーだ。牛乳にはリラックス効果があるんだよ」

その説明通りかは分からないが、紅茶を一口飲むと緊張で固まっていた全身がほぐれていくのを感じる。この状態の今しか話せない、これを逃したら言えずじまいだと七罪は考えて、カップを机に置く。

「あの！私、蓮に話したい事があって来たの！」

「話したい事？ああ、明日のおやつは洋梨ようなしとブラックベリーのコーンミールケーキを予定してて…」

蓮自身は悪意など無く、ただ明日の予定を伝えようとしているだけだ。だが、その話を逸らそうとするその言葉が七罪には腹立たしく感じた。

「違うの!!ちゃんと話を聞いて!!」

気付いた時には、立ち上がり部屋中に響き渡る声を張り上げていた。その声に言葉を中断された蓮は、立ち上がり行きを乱す七罪を唾然とした表情で見ている。そんな様子を見て、七罪はハッと我に帰ると、その気まずさを誤魔化すように蓮の胸元に飛び込んだ。

「違うの…違うのよお…私が言いたい事は…こんなことじゃ…」

「…ごめん、七罪。昔からこんな風に人の気持ちとかを考えるのが苦手で…」

「ううん…蓮は悪くない。勝手に悩んでいたのは私だから…」

胸元に飛び込んで来た七罪を、蓮は優しく抱きしめる。七罪が発するその声には涙声が混じっていた。そんな七罪の感情に気づけない自分を責めつつ、優しく彼女の頭を撫でる。七罪が蓮の胸元から顔を上げたのはしばらくしてだった。

「改めてもう一回聞くと。七罪、話ってなんだ?何か七罪に悪い事したっけ?」

「…私、蓮の世話になってばかりで何もしてないって感じたのよ…。それで何か役に立とうと思って…手伝ったけど…足を引っ張ってばかりで…」

七罪は涙ながらに語った。蓮に手伝いたいと考えて行動したのだが、結果的に手間を増やしただけだった事。そのせいで自分が蓮を想うことさえ疑問を感じて来ていること。そして、自分が考えうる役に立てる最後の手段を。蓮はそれを黙って聞いていた。

「〔贗造魔女〕で変身した私だったら、少しは蓮の役に立てると思うの…。私、蓮になら何をされてもいい…だから…こんな私を役立ててほしいの…」

言い終わると、七罪は目を瞑り、霊力逆流の準備へと入る。他の精霊と比べてメンタルの弱い七罪は、ネガティブなシーンを想像すると少しだけ霊力を使う事が出来た。だが、霊力が封印された今、その状態を常に維持するのは楽な事ではない。それでも蓮の役に立てればという一心での行動だった。

しかし、それは再び蓮に強く抱きしめられる事によって妨げられ

た。

「ダメだ。そんな事したら、前の七罪に戻ってしまう。俺はそんな無理を強いるつもりはない」

「でも…でも、そうでもしなきゃ役に立てなくて…」

抱きしめから解放された後、七罪は霊力逆流の妄想をやめ、ゆっくり目を開ける。そこには困ったような表情を浮かべつつ、微笑んでいる蓮の顔があった。

「七罪は根本的な部分から勘違いしているな。俺が家の中の事を一人でやりくりしてるのは“癖”のようなもんだ。これは七罪が家に来る前からそうだったし、来たから変わったってわけじゃない。…だけど、それが七罪を追い詰めていた事には気づけなかった。ごめん…」

七罪の頭を撫でながら、目を伏せて謝る。顔を伏せる直前、七罪の目には蓮の悲しみの顔が映った。笑っている顔は何度か見た事があったが、その切ない表情。そんな顔も笑っている時と同じような魅力があった。笑う顔と悲しみの顔、その二つが似合う人間なのだ、蓮は。

「それともう一つ。俺をそんなに神聖視するな。これは謙遜じゃない」

その言葉は七罪の予想外のものだった。いつも堂々とし、弱点など無いように思っていた者から出た弱音。それが信じられなかった。どうやら七罪は無意識にそんな顔をしていたらしい、蓮は何やら迷うような素振りをした後、口を開いた。

「俺には血の繋がらない母親がいる。いや、”居た”っていう表現があっているのかな。何年も前に肉親がいなかった俺にその代わりとなってくれた女性、名前はカレンっていうんだ」

懐かしむように語られる話に、七罪は自分がここに来た目的など忘れて聞き入った。それだけ蓮が自分の事を語る事が無いというのもあるがその話を聞き逃してはいけない。そんな気がしたのだ。

「無愛想で、変な事ばかりを話す人だったけど、俺はカレンの事が大好きだった。もしかしたら、親がいない寂しさをその人で紛らわせていただけだったのかもしれないけど」

カレンの事を話す蓮はとても楽しそうな様子だ。それを見た七罪の胸に、カレンに対しての悔しき…いや、嫉妬のような感情が渦巻いていく。

（何よ…随分と楽しそうな様子じゃない…。そのカレンとかいう女の方が私より色々立派だったんでしょ…）

ネガティブモードに入っていく七罪。小さい頃に会っていたカレンと、出会って一ヶ月も経過してない七罪とではレベルが違うという事も理解していたが、納得出来るものではなかった。だが…。

「だけど、ある日。何も言わずに俺の前から消えちゃったんだ。本当に突然…」

さつきまでとは変わり目を伏せて、悲しそうに言ったそれを聞いた瞬間、七罪の頭はまるで冷水でもかけられたように冷静になった。

「ある日、目が覚めたら、まるで幻のように居なくなってた。今では生きてるか死んでるかすら分からない」

囚われているのだと感じた。目の前の少年はカレンという一人の女性を忘れる事が出来ない、そうでなければそんな表情を浮かべられないだろう。

「俺を笑えばいいさ。こんな歳になっても、未だ母親から離れる事が出来ない奴だって。それには何も言い返せないし」

「出来るわけないじゃ無い！そんな…大切な人が居なくなったあんたを、笑う事なんて…」

自傷気味に笑う蓮に、七罪はそう叱咤すると両腕を広げ、蓮の頭を抱きしめた。それはついさつき蓮が七罪にしたのと同じ行動。

「大丈夫…大丈夫よ。人は変わっていいける…あんたが私を救って変えてくれたみたい…。だから…だから…！あんたの…その苦しみも…いつかは…！」

「なんで七罪が泣くんだよ…せつかくの美貌が崩れるぞ」  
「グズっ…ばかあ…」

顔を見ずとも、嗚咽で泣いているのだと分かった。今日は七罪を悲しませてばかりだなと感じ、小さく笑う。

「な、なによ…、そりゃあ、変身した私の方が胸元が豊かで心地いいで

しようね…」

「いや、このままでいい…このままがいいんだ…」

オレンジの光が照らす室内で、二つの影が一つになる。この平穏という水面に、すぐに波が立つというのを二人はまだ知らない。

## 60話

ジェイク・メイザースの朝は一人で寝るには大きすぎるベッドか、机に座りながら迎えていた。前者は大きすぎて孤独感を感じ、後者はそもそも眠るところではないという論外な場所だ。だが、どちらでも共通した事が一つある。

それはどちらで起きようとも憂鬱な気持ちで起きていた事だ。その後、朝の世間話をする人間がいるわけもなく、一人で身支度を整えて、一人で朝食を食べる。静かなのは嫌いじゃないが、この生活が何年も続けば誰だってウンザリするに決まっている。それでも、このような朝はいつまでも来る。そう思っていた。

「ううん…あんっ…」

そんな色っぽい女性の声が今日の目覚まし音だった。それによって意識を覚醒した蓮はパチリと目を開ける。何時もなら天井が入って来るはずの視界は肌色に埋め尽くされており、石鹸のような芳しい香りが鼻をくすぐる。

「ああん…もう…朝からだいたん…なんだから…」

その声が出た方向…上側に顔を向けると妖しく口元を緩め、頬を染めた女性が自分の寝ているベッドに寄り添うようにいた。年は二十代中頃、豊満な胸元、モデル顔負けのプロポーシオンを誇る美女で、さらに下着姿と思春期の男子には刺激的すぎる姿だ。

さらに問題なのは、自分がその美女に抱きつき、豊満な胸を掴んでいる事だ。こんな時、普通の人間なら慌てて飛び退け距離を取ろうとするだろう。だが！ジェイク・メイザースは違った！なんと、逆に！

「ふああ…朝か。おはよ、七罪…」

美女の背中に腕を回して、自分の身体を密着させた！豊満な胸の谷間に自分の顔を埋めるといっておまけ付きで。

「ふふ…おはよう、蓮くん。お姉さん、どうせならおはようのキスもして欲しいわ」

七罪は色っぽく唇を舐めて、蓮を誘う。それを見た蓮は胸の谷間から顔を離し、七罪の顔に自分の顔を近づける。七罪は目を瞑り、唇を

強調するように前に出すが、蓮の顔は唇を飛び越え、その額に口づけを落とした。

「すぐに朝食の準備をするから、二度寝しちゃダメだぞ」

触れていた人肌の温かさを惜しみつつ、蓮はベッドから出て、リビングへと向かって行く。ベッドには目を瞑り、キスを待つ姿勢の七罪だけが残された。

今日一日の天気と、ニュースがテレビから流れる居間。その机には焼いたトースト、サラダ、目玉焼き、フルーツが並んでおり、蓮は優雅にコーヒーを口に運んでいた。ただ、いつもと違うところがあつた。それは…

「ありえない…ありえないわ…まさかあそこで…スルーするなんて…」

蓮の座る席と向かい合った位置にいる七罪が、手元の一点だけを見つめてマーガリンをトーストに塗っている事だった。別にマーガリンを塗ることは構わないが、目を見開き、ブツブツと呟いてる姿は少しホラーだ。姿も性格も全く違うこの少女が、朝から蓮を誘惑してきた美女と同じとは誰も予想出来ないだろう。

「どうしたんだよ、朝っぱらからそんなブツブツと」

「どうしたって、せつかく誘ったのに蓮がスルーしたのが原因に決まってるじゃない！まさか、あの姿で朝から奇襲したのに、動揺一つしないなんて…」

あわあわと身体を震わせる七罪。七罪の精神状態は不安定でちよつとしたことで霊力を逆流してしまうのは知っていたが、あの自信満々の姿で軽く受け流されたのがとてもショックらしい。

「まあ、朝から見る七罪も新鮮で良かったぞ。色っぽくて可愛かったし」

「…やっぱり私、あの姿でいた方がいいかしら？」

様子が変わり、自信なさげに七罪は聞いてきた。何を言うつもりなのか察した蓮は、コーヒーの入ったカップを置く。

「私が蓮の手伝いになれる事なんてその…何も無いから。せめて視覚

的に楽しませる事が出来たらって思うの。だから…やっぱり変身した姿の私の方がいいかなって…」

つまるところ、家の家事などを手伝えない七罪は、せめて蓮を癒すため素晴らしいスタイルのお姉さん姿でいると言っている。そんな七罪の提案は予想通り過ぎて蓮はクスリと笑ってしまった。

「どっちの七罪だろうと気にしないさ。俺にとってはどちらの七罪も”本物”だと思ってる。本当の姿だからってガツカリする事もないし、変身した七罪だからってその姿でいる事を怒る事もない。まあ、流石にさつき見たいな誘惑をされたら困るけど」

「ああああああああ!!」

ネガティブモードの今の七罪に自信たっぷりだった大人の時の話をするが、どうやらトラウマをえぐり返したらしく頭を押さえ、奇怪な叫び声を上げた。別に悪意は無かったのだが、悪い事をしてしまったと思う。

「そういえば、十香達とは仲良くなれたか？」

話題を変えようと蓮はそんな事を七罪に聞いた。七罪は十香達を自分の天使の中に閉じ込めたという前例があるため、ちゃんと馴染めるかが不安だったのだ。それを聞いた七罪は、顔を露骨に逸らす。

「…私は別に…蓮がいてくれれば…いいのに…」

「嬉しい事言ってくれるけど、十香達とはこれから会うことになるから、早めに仲良くなって方がいいぞ。時間が経てば経つほどどんな顔して会えばいいか分からなくなるから」

そうは言っても、最近は七罪の引越しや日用品の買い物などで忙しかったのも事実だ。もう馴染んでくれてたら嬉しいと思っていたが、そう上手くは行ってないらしい。

「そこでだ、今日の昼過ぎに四糸乃がこの家に来る。俺が昨日、七罪にこの周辺の道案内を頼んでたんだ。これを機に仲良くなってくれればと思う」

「ちよ、ちよっとーそんな、勝手に…」

「そりゃあいキナリだと思うけど、無理矢理でもこうした方がいいかなって思うんだ。大丈夫、四糸乃は優しいから仲良くなれるって」



そう言われると七罪は何も言えなかった。蓮は自分がみんなと馴染めるように気を使つての行動なのだ、それを考えもせず拒否することは出来なかった。

「そ、そうね、蓮も一緒にいてくれれば変な空気にもならないでしょうし…」

口下手で内気な自分でも、蓮がいてくれれば臨機応変な話題を振ってくれて話すことが出来るだろう。そう思っていたのだが、それを聞いた蓮は『え?』と疑問の声を出した。

「悪いが二人きりだぞ。俺は学校があるし、一日中家には居られない」その一言で七罪の安心は霧散し、大きな不安と絶望が襲ってきた。さっきまでの様子はどこにやら、狼狽した様子で机をバンツと叩いた。

「どうした? マズイこと言ったか?」

「ふ、二人きり!? 蓮と一緒にいてくれるんじゃないの!」

「なんだ、その事か」

七罪とは反対に、蓮は冷静に言いたい事を察すると『ミルク!』と声を出した。すると、床で牛乳を飲んでいた飼い猫、ミルクが反応し身軽な動きで蓮の膝の上まで来る。蓮はミルクを抱っこすると七罪に見せた。

「大丈夫、ミルクもいるから。何を話せば分からなくなったらこいつを撫でれば何とかなるよ」

「私のして欲しい事と違うんだけど! お願いだから一緒にいて!」

「そりゃあ心配じゃないって言ったら嘘になるけど、どうやって仲良くなるか考えるより実際に接する方が早いし良いんだよ」

この話題は食事が終わっても続き、七罪はずっと一緒にいて欲しいと懇願するが、蓮は首を縦に振らなかつた。やがて蓮は学校の制服を着て、これまた学校指定のカバンを持って玄関に立つ。

「それじゃあ行ってくる。あ、紅茶と茶菓子の置いてある場所は分かるな? しっかり頼むぞ」

「お願いいい! 一人にしないでえええ!!」

涙目でそう叫ぶ七罪だったが、残酷にも玄関のドアは閉められる。

その閉まる直前の隙間から、抱っこされているミルクが嬉しそうに七罪の頬をペロペロと舐めているのが見えた。

十一月にしては暖かい気候の中、学校へと向かう。一年前はまともに通つてすらいなかった場所、そんな場所に馬鹿正直に通っている自分を不思議に思いつつ自分の教室の開ける。すると、その理由ともなっている少女が出迎えた。

「おお、来たか！おはようだぞ！蓮！」

「おはよう、十香。今日も可愛いな」

蓮は恥ずかしがる様子もなく十香にそう言った。すると、聞いた十香の方が恥ずかしそうに頬を染め、蓮に抱きついてくる。

「あ、朝からそんな事を言うな…。恥ずかしいではないか…」

「別に今日が初めてってわけじゃないぞ。良い加減慣れるよ」

朝にこのような事を十香に言うのは珍しい事ではない。だが、十香はそれを聞くといつもと照れ隠しとばかりに抱きついてくるのだ。そんな十香を小動物を撫でるように愛でると、後ろから土道が苦笑いを浮かべながら歩いてくる。

「おはよう蓮。今日も相変わらずだな…」

「よお土道。これが俺流のスキンシップなんでな」

十香の首筋を指で撫で、十香は目を細めて気持ち良さそうな表情をする。そんな男女の付き合いと言っても良いか分からない光景に土道は何とも言えない様子だ。

「あ、そうそう。昨日、四糸乃が言ってたよ『七罪と話すのは緊張するけど、楽しみ』って。七罪の方は四糸乃と会うのはどうだった？」

「七罪は俺を含めた三人が良いって言ってたけど、それは無理って言うておいた。気まずい雰囲気にならなきゃ良いけど…」

それを言う様子からも自分が場においておきたいという気持ちが伝わってくる。たとえ自分が不安でも本人達の事を考え、自分の感情を押し殺すのはらしいと思った。

多少のイベントを交えつつも変わらない、いつも通りの日常。今日も変わらず同じで楽しい毎日が始まる、そう思っていた。

「ええつと…鳶一さんが、急な都合で転校することになってしまいました…」

その予想は、ホームルームに珠恵教諭から告げられたその報告によつて、容易く裏切られた。それを聞いた土道は思わず立ち上がり、十香は目を丸くし、蓮も驚いた表情を浮かべ、誰も座つてない折紙の席を見る。

「お、折紙が転校するってどういうことですか!？」

「わ、私にも詳しい事情は分からないんですよ。ただ、鳶一さんから電話がかかつてきて、転校することと必要書類を後で送るとだけ伝えられて…」

クラス中から視線が集まっている事など気にもしてない様子で、土道は質問を投げるがなぜ転校するのかは分からなかった。

「それで…一体!どこの学校に転校するって言つてたんですか!？」

「そ、それがですね…イギリスの学校とだけ…」

縦るような気持ちで聞いてもそのような答えが返ってきた。突然過ぎる別れに失意の底に沈む思いだ。そんな土道のポケットに入っている携帯電話が僅かに震える。画面を開くとメールが届いており、その差出人は蓮だった。

『気になるんだろ?行つてこい。十香達は俺が面倒を見るから』

それを見た後、蓮の方に目を向ける。土道的心情を察してるらしい蓮は、コクリと頷いた。それを見た土道は、心の中で『悪い…』と呟き、走つて教室を出て行つた。

(イギリスの学校ねえ…まさか…)

騒然とするクラスで、蓮だけがある可能性を考えて顔をしかめていた。イギリスは自分の育つた国であると同時に、「あの会社」がある場所でもある。そこに行くという折紙の行動には何か意味があると感じられずにいられたかった。

## 61話

「ふん、早退きとは軟弱よ。少し我が鍛えてやらねばなるまい」

「首肯。貧弱貧弱うです。耶具矢と夕弦で鍛える必要があると感じます」

「そう言わないでやってくれ。きつとシドーにも事情があるのだ」  
「……………」

朝とは違い、今にも雨が降りそうな曇天に空の下で耶具矢、夕弦、十香、蓮は精霊マンションへの道を歩いていった。今はすでに放課後、一日学校で過ごしても士道は折紙を探しに行つたつきり、戻ってくるどころかメール一つ寄越す事はなかった。

「分かつておる我が眷属よ、冗談だ。そういえば、折紙が転校したと小耳に挟んだぞ。それは誠か？」

「うむ…それを聞いた後、シドーはいなくなってしまった。何か関係あるのかもしれない…」

「とりあえず、家に帰っている可能性もあるから、そこに行つてみるつもりでついてきたんだが…」

心配そうにする十香の手を他の二人に見えない角度で握りながら説明する蓮。それになるほどと耶具矢と夕弦は頷く。

「納得。なるほど、分かりました。しかし、今日の蓮は何か変ではありませんか？何か警戒でもしてるように感じます」

「そ、そうか？いつも通りだと思うが…」

正直に言うと、夕弦の言葉は見事に当たっていた。別に決定的な理由があつた訳ではない、ただ、「嫌な予感がする」そんな理由だった。しかし、それを十香達に伝えて怖がらせてはダメだ、あくまで平常心で水面下でその目を光らせようとしますがそれが上手くいかない。

それを隠そうと適当な話で誤魔化してるうちに、目的地である精霊マンションが見えてきたのだがその隣にある士道の家の前に見覚えのある少女が立っていた。

紫紺の髪にセーラー服姿の背の高い少女、その愛らしい容姿はつまらなそうに曇っていたが、四人の姿を捕捉した瞬間さつきまでの顔は

どこえやら、顔を明るくすると両手を広げてこちらに走ってくる。

「みなさああああん!!待ってましたよおおお!!」

まるで闘牛の牛のように突っ込んでくる少女、美九を見て十香、耶具矢、夕弦は横に動いて突進を避けるが蓮だけは動かず、結果、美九に強く抱きしめられる事となった。

「あああん、みなさんひどいですよお。私の溢れる想いを受け止めてくれたのは蓮さんだけだなんてえ」

「疑問。なぜ蓮は避けなかったのでしょうか?」

「フツ、簡単な答えよ。蓮は自分までもが避けてしまつては、後ろにある電柱に美九がぶつかつてしまうと考えたのだろう」

「理解。なるほど、さすが蓮です」

蓮が美九に抱きつかれている光景を見て、そんなどうでもいい事を話し合う二人。ひとまずため息をして気持ちを落ち着かせた後、蓮は自分を抱きしめる美九の腕を優しく解いていた。

「美九、悪いが後にしてくれ。俺は家にいる土道に聞きたい事があるんだ」

美九が居たのは予想外だったが、それでもやる事は変わらない。しかし、それを聞いた美九は何やら思い出したかのようにああ!と声を出した。

「そうそう!そうですよ!学校が終わつたからダーリンのお家まで来たのに誰も居なくて、暇だったんですよ!お隣のマンションを訪ねても誰もいないらしいですしい」

「シドーは家に帰ってない…のか?」

ここで美九から意外な事が告げられる。誰も居なかつたと言う事は土道はもちろん、琴里も家にいないらしい。その事実には美九以外の四人は互いに顔を見合わせる。

「これは、なんだか陰謀の匂いがしてきおつたわ」

「首肯。マスター折紙に関する事案であると思います」

「ちよつとお!何の話なんですかあ!?!説明して下さいよお!」

何か知つたような会話をする二人に、置き去りな状況の美九が説明を求めてくる。そんな美九に蓮は『実は…』と今日の事を話した。折

紙が転校すると言う事、それを知った土道が折紙を探しに行ったきり戻ってこない事。それを知った美九は何かを感じたらしく、好奇心に満ちている様子だ。

「ほうほう…それは確かに怪しいですねえ。これはダーリンに危機が迫っているのかもしれない！」

「ふーん、どんな危機？」

聞いている三人が息を飲む中で、蓮だけは大して期待もしていない様子でそう聞いた。すると、ノリノリの美九は待つてましたとばかりに語り出した。

「ダーリンは折紙さんを追いかけて行つたうえに、家に帰ってないどころか、連絡一つない…。それはつまり！逆に折紙さんに捕まってペロペロされている可能性があるという事です!!」

美九の推測にな、なんだってー!!という空気が流れるが、蓮だけはそれに納得出来ずにいた。学校は折紙にとって土道と同じ場にいられる数少ない場所だ。それを餌にしてまで土道呼び出すのはどうかと思う。しかし、相手はあの変態女である折紙なのだ。決してあり得ないと言えないのが悲しい。

「こうしてはいられません！早速ダーリンを探しに行きましょう！」

美九がそう言うて拳を振り上げると、他の三人も『おー!』と右手を掲げる。まあ、美九の予測が正解であろうとなかろうと、ここには土道はいない、ならば探しにいくのがベストだろう。そう思ったその時。

辺りにけたたましいサイレンの音が鳴り響く。そのサイレンが何かは、聞いた瞬間理解できた。

「む、これは…」

「空間震警報だな、なんてタイミングの悪い」

土道を探しに行こうとした矢先の空間震警報に、一同は顔を顰める。だが、八舞姉妹の二人は興味ありげに顎を撫でていた。

「ふむ…新しい精霊が現れるというのか」

「興味。どのような精霊か気になります」

放っておいたらシエルターに避難せず、現れた精霊を見に行つてし

まいそんな様子だ。そんな二人に美九はブンブンと首を横に振る。「駄目ですよー。空間震警報が鳴ったらちやんとシエルターに避難しない」と

美九の年上らしい一言に二人は渋々頷く。そんな美九の行動に感動しつつ、蓮は居場所の分からない土道について考えていた。あのお人好しの事だ、空間震警報が鳴ってしようと折紙を探し続けるだろうし、折紙に監禁されていたとしても、折紙が土道を解放し二人仲良くシエルターへ、なんて展開も考えにくい。

(やつぱり、探した方が良いかも知れないな…)

当然、四人をシエルターまで送った後の話になる。蓮は別に土道の貞操が折紙に破られようと興味は無いが、折紙には転校の真意も聞きたいところだ。と、その時。

「その必要はない」

五人の背後から静かな聞き覚えのある声がかげられる。振り向くとそこには今朝転校を知らされた折紙が立っていた。

「鴛一 折紙…？ 貴様、なぜこんなところに？」

「あー、折紙さーん。ダーリンは一緒じゃないんですかあ？」

十香や美九はもちろん、耶具矢と夕弦も口々に質問の言葉を向けるが、折紙は何も答えずただ、凍るような冷たい視線で睨みつける。そんな折紙を見た蓮は目を細める。

「避難が必要ないってというのはどういう事だ？ 空間震が起こるから警報が鳴ってるんだろ？」

この付近では警報を聞いた住民が家から飛び出し、最寄りのシエルターに避難していく。それらが居なくなるまで暫し待つと、口を開いた。

「この警報は私が要請して鳴らしたもの。実際には精霊もASTも現われない。…神代 蓮、私はあなたをも巻き込むつもりは無い。今すぐここを離れて、事が終わるのを待っていてほしい」

「悪戯にしては度が過ぎてるな。こんな事をして何が目的だ？ お前を追いかけて行った土道はどこにいるっ？」

「今から十秒間だけ待つ。この間に出来るだけ遠くに行つてほしい」

「こつちの質問に答えろ！ 鳶一 折紙!!」

自分の質問に答えず、淡々と要求を告げる折紙に蓮は怒気の籠った声を出す。それを聞いた折紙は十香達に向けていた冷たい視線を蓮にも向けてくる。それにはとにかく蓮を言う通りにさせたいという意図が感じられるが、そうされると尚更離れる気は失せる。

「質問。この警報はマスター折紙が鳴らしたと言いました。なぜそんな事を？」

二人の間に流れる険悪な雰囲気を感じ取ってか、夕弦が折紙にそんな質問をする。すると、折紙はポケットからドッグタグのようなものを取り出す。それを見た瞬間、蓮は目を見開いた。

「それはーあなたたちをこの場で…倒すため」

折紙が手にしたドッグタグを額に当てたのと、蓮の右手に三つの刃を持った剣「エカトル」が握られたのは同時だった。瞬間、折紙の身体が発光し、その身にC R Yユニットが装着される。鈍色の輝きを放つ先鋭的なフォルム、X字に展開されたスラスタと腰元にある巨大な兵装が特徴的だった。それは折紙の右手を前方にかざす動きに合わせて変形し、その手に握られる。

その間に蓮は手に持つ「エカトル」を地面に叩きつけるように投げる。「エカトル」は地面に当たらずその直前で止まり、目に見えぬスピードで回転を始める。蓮はそばにいた十香と美九の腰に手を回し二人が離れないように掴む。

折紙の右手に装着された巨大な魔力砲、彼女が引き金を引くのと「エカトル」が風を巻き起こし、五人を空中に吹き飛ばすのはほぼ同時だった。

「ぬわっ！」

「きやつ！」

魔力の奔流は五人のいた地面をえぐりその衝撃に十香と美九は悲鳴を出す。結果、折紙から真っ直ぐの線を刻み、その範囲にあったものは全て吹き飛ばされた。こちらが無防備だったとはいえやつてくれる。そう思いながら、蓮は地面に降りた後、掴んだ二人を離し、左手に「レットクイン」を握り剣先を折紙に向ける。



「その装備、ヘメドラウトだ。それをどうやって手に入れたか俺は心当たりがある。：お前、魂を売ったな」

「私は夜刀神　十香たちを：精霊を倒す。そのためにここにいる」  
銃口を向け、迷いなく語る折紙。それを聞いた十香と美九は息を飲み、どうすれば良いか縋るように蓮を見る。その視線を感じつつ、蓮は無感情に折紙を見る。

「私の目的は精霊であり、その中にあなたははいない。今、ここから離れると言うのなら手出しはしないと約束する」

「俺だけ仲間外れかよ。大人になつた今じゃ、そういうのは笑えないと思うぞ」

この場に似合わないおちゃらけた言い方だが、自分は動かないという意思を折紙は感じた。自分の今まで生きてきた理由に関わるこの場で、その発言は折紙の神経に触れる言い方だ。

「私の両親は、精霊に殺されその仇を求めて私は今まで生きてきた。そのためASTに入り、それに全てをかけてきた」

「ああ、前に聞いたな。それがどうした」

「私には精霊が殺す理由がある。そのため今までの自分に戻る理由も…」

いつもの折紙らしくない、饒舌な喋り方だった。無口という印象があつた折紙がこんな風に自分の事を語るのは初めて見たかもしれない。それを聞きながら蓮は理解する。折紙も顔はいつも通りの無表情でも平常心でこのような事をしているのではない、少なからず”動揺”しているのだと。

「あなたが私を止めるため前に立つつもりなら、あなたにその資格はない」

「へえ、その理由は？」

「私の復讐心は自分で生み出したものに対し、あなたの夜刀神十香達を守ろうとするその心は自分で生み出したものではない。世界を殺す存在である彼女達を救った士道を見て、自分も誰かを救い、救われたいと思つたに過ぎない」

折紙は蓮が十香達を守ろうとする心を士道が十香達を救つたのを

見た”憧れ”だと言う。だが、あの折紙にしては悪くない内容だと蓮は思う。これらの事を言い終わっても、折紙の口は閉じず話し続ける。

「私のしようとしている事は間違っていない。空間震の原因である精霊を殺し、世界を平和にして二度と私のような人間が出ないようにする。それを邪魔するならば、あなたは悪となる」

自分の復讐が世界を平和にする。そう語る折紙の姿は実に滑稽だった。蓮から言わせてもらおうと表現するより、迷っている自分自身に語るような意思が伝わってくる。それを聞き終えた蓮はヘレツドクイーンを目の前の地面に突き刺す。

「自分の両親の仇をとって世界の平和を守るか……。お前がこんな事した理由とそれを邪魔する俺が目障りだというのは分かった。そんなお前に聞くよ、十香達が殺すっていう世界はどんな顔してるんだ？」

その質問に折紙は目を見開き、十香と美九も互いに目を合わせる。「お前が守ろうとしている平和とやらもだ。男か？女か？良いやつなのか？ムカつくやつなのか？俺は見た事ないからな、教えてくれよ」  
「.....」

蓮の質問にさっきまでとは打って変わり折紙は沈黙する。その反応を見て、予想通りとばかりにため息をした。

「お前は死んだ両親と、仇の精霊とやらのため今日まで生きてきたんだろ？それと同じように目に見えないし、触れることの出来ないようなもののために、俺は頑張れないな」

それを隣で聞いている十香は、自分の右手が握りしめられる感触がして目を向ける。すると、自分の右手が蓮の左手に握りしめられていた、その力はとても強く、二度と離さないと言わんばかりだった。

「ちゃんと見れて、触れることの出来るから頑張れるんだ。それこそ、命を賭けてもな」

「そう：ならば、あなたは私の、いや、世界の敵となる」

折紙は十香達に向けていた銃口を蓮へと向ける。たとえば複数の精霊を相手にしても、この場で一番警戒しなければならぬ人物は誰かを理解しているらしい。蓮は目の前に刺さっているヘレツドクイーン

ンを蹴り、空中に弾き飛ばすと落ちてくる剣を掴み、グリップ部：柄を捻る。

すると、エンジン音のようなけたたましい音と同時に刀身から炎が噴き出す。それはまるで獣の威嚇する声にも聞こえた。

「この戦いすらも世界の掌の上の出来事。そんな考えるとムカつかないか？」

世界を守るためと言った少女に、蓮はそんな質問をニヤリと笑いながらした。

## 62話

蓮と折紙、二人に譲れない思いが…意志がぶつかり合う。それを行動に移したのは蓮が先だった。姿勢を低くし、爆発的な瞬発力で折紙との距離を縮めにかかる。しかし、それを見た折紙は魔力砲の引き金を向かってくる蓮ではなく、その上に向けて引いた。

その理由は分かっている。どうやら折紙も、空中から降りてこない二人を忘れるほど動揺してないらしい。

「くく、よく気づいたな」

「感心。さすがです、マスター折紙」

「二人は美九と十香の近くに！俺が時間を稼ぐ！」

発射された魔力の奔流を、限定霊装を顕現させ紙一重で避けた耶具矢と夕弦に十香と美九の場所に行くように言うと、ヘレッドクイーンへの柄部を捻り、折紙に斬りかかる。一方、折紙も魔力砲を可変させ巨大な刃を持つレイザーブレイドを持ち、ヘレッドクイーンを受け止めた。

「お前がこんな事をした理由は分かった。だが、それと出来る出来ないは別の話だ。精霊四人に加えて俺のいる正面から来るとは流石におごり過ぎたんじゃないか？」

「…私はこの時のため、血の滲むような努力をしてきた。このヘメドラウトがあれば…殺せる…。精霊を、そしてエレン・メイザースから教えを得たあなたすらも…」

底冷えするような冷たい声とともに折紙はレイザーブレイドを持つ手に力を入れる。それに抵抗して蓮も剣を押し返そうとするがゆっくりと押され続ける。

（くっ！なんて力だ…）

随意領域で強化していると分かっているにもかかわらず、向かって来る力は予想以上のものだった。蓮は今持っている剣の柄部を捻り、剣にパワーと推進力を集める。そして、エンジン音のような音と共にそれを解放するが、それでも互角なだけで押し返すまでは至らなかった。

（この女！俺を押し来るとは…）

今の状況はマズイ。そう判断し、力づくでレイザーブレードを弾き飛ばすと後ろに飛んで折紙と距離を取る。それを見た折紙は逃さないとばかりに剣を振るつたがそれは空を切った。

「…十香、美九、耶具矢、夕弦。急いでここから離れる。司令官殿と合流するんだ」

折紙には聞こえず、近くににいる四人にだけ聞こえるような音量で蓮はそう言う。それを聞いた四人は『えっ!?!』という声と共に顔が驚きに染まり、視線が集中する。

「質問。夕弦たちが逃げたとして、蓮はどうするつもりなのですか?」「お前達がここから逃げても追いかけられちゃ意味がない。そうされないようにするんだ、殺す気だな」

「あんた!もしかして折紙を殺す気なの!?!」

いつもの話し方も忘れた耶具矢のそれを聞いて、まだ自分たちの危機を理解してないと察する。それを愚かというつもりは無い、DEMという会社の…ましてはC R Yユニットに詳しくない耶具矢にとつては気になるのはそこだっただろう。

「今、この場で最重要に考えるのはお前達四人の命だ。それを手加減出来ないようなレベルの奴が狙っているとすると、そうなるかもしれないな」

いつもと違い、ふざけた様子はかけらも感じさせない話し方だった。蓮は、今の折紙は相手のことを考えて戦えるような相手ではないと言う。その事実には四人は息を呑む。

「もし、そうなった場合、その時は俺を恨めばいい。だから…今だけは逃げて欲しい…早く…」

声を殺し、必死に頼み込む。それほど折紙が十香達を殺すなどという結末は絶対に避けたいものだったのだ。だが、そんな願いとは裏腹に四人はこの場を離れない、さらに、隣に立つ美九がクスクスと笑いだした。

「ふふ…蓮さんったらまるでダーリンみたいな事言うんですね」

「微笑。助ける人数に夕弦達以外に自分が入ってないところがそっくりです」

逃げろと言ったはずなのに、耶具矢、夕弦を始め、美九と十香が霊装を身に纏い前に出る。

「理解。今のマスター折紙が蓮にとっても油断出来ない相手だというのは分かりました。ですが、何も一人で戦う必要はないと感じます」「我らの力添えが必要だと言えばよかろう。まあ、その意図を汲み取ってやるのも主である者の役目であろう」

「鳶」折紙とは話したい事があるのだ。それをレン一人に押し付けたりはしないぞ」

十香は〈塵殺公〉サンダルフォンをその手に持つ。そんな四人を見て本当は”早く逃げろ”と言いたかった。しかし、今はそんな事を言い合っている暇もないのに加え、折紙の真意を知りたいのは皆一緒だ。結局、蓮は自分のいう事を聞かなかった四人に怒ればいいのか、礼を言えばいいのかすら分からない。

(悪いな…お前達を巻き込んで…)

こんな事は自分一人で片付けたかった。そう思ってもDEMは：いや、エレンとウエストコットはもはや蓮一人で止められるような存在ではなかった。その事を心の中で詫びて前を見つめる。

蓮、十香、耶具矢、夕弦、美九の五人は互いに目を合わせると同時のタイミングで動き出す。耶具矢、夕弦は再び空に飛び、蓮、十香は左右に分かれて折紙を挟み込む。そして、美九だけはその場を動かさず両腕を大きく広げる。

「〈破軍歌姫〉——【輪舞曲】！」

美九が天使、〈破軍歌姫〉ガブリエルの光の鍵盤を弾き鳴らす。すると、〈破軍歌姫〉ガブリエルから発された音が折紙の身体を縛り、動きを止めた。

「折紙さんの動きは止まっています！今のうちに！」

美九のその言葉を合図に、空中にいる八舞姉妹と地上にいる十香、蓮が同時に折紙に向かう。三方向からの同時攻撃、並みの魔術師<sup>ウィザード</sup>だつたら碌な抵抗も出来ない状況だったが、折紙は違った。

折紙は自分の周囲に随意領域<sup>テリトリイ</sup>を発生させ、四人の動きを鈍らせる。その時間はたったの三秒。その三秒の間に折紙は、空中で向かってきている耶具矢と夕弦にレイザーブレイドの一撃を食らわせて吹き飛

ばした。

「くはっ！」

「痛恨。うぐっ」

二人を吹き飛ばした折紙は、レーザーブレードを横に振り払い、周りにいる十香と蓮を攻撃した。二枚抜きを狙ったであろうその剣に、十香と蓮は手にした剣を前に出して防ぐ。

「ぐっ…！」

「クソッ！」

どうか防御は間に合ったが、それにより二人の姿勢が崩され攻めに向かう勢いが削られる。そして、姿勢が崩れたそのチャンスを見逃すはずなく、折紙はブレードの剣先を十香に向けて突きを出す。

「っ！やらせるかよ!!」

蓮は自分も崩れた姿勢なのにも関わらず、ヘッドクイーンへの刃を十香の前に出し、ブレードを弾いた。それによって十香への攻撃は防ぎ、蓮と折紙が少しよろめく。十香を守れたことに一先ず安堵する蓮だったが、攻撃を防がれた折紙の顔にはほんの僅かな笑みがあった。

それに蓮が気がついたのと同じタイミングで折紙は動いた。自身もよろめいているなか、ワイヤリングスーツの腰部に装着されている電子機器に手を伸ばす。それはまるで手錠かガントレットにも見えるもので、緑色のランプが付いている。

「おごっていたのはあなたの方。それが自分の足元をすくう」

折紙は腰についていた“それ”を掴み、投擲した。その狙いは蓮の左手首。蓮自身はなんとか避けようとするが、今の体制ではまともに動けない。投げられたガントレットは、折紙の狙い通り、蓮の左手首に命中し手錠のように装着される。それと同時に緑色のランプが赤色へと変わった。

「何を、ぐっ!？」

何をしたのか、そう聞こうとした瞬間、左手が…いや、左手首にある機器がまるで重りへと変わったように重くなり、蓮は左手首を起点に地面に縛り付けられた。なんとか動こうとしても立ち上がることすら出来ない有様だ。

「レン!? どうしたのだ!？」

「十香! こっちは気にしなくていい! 前を見ろ!!」

後ろから聞こえてきた十香の声にこう答えると、他の三人にも『十香を助ける』と目で伝える。今の蓮の体勢では後ろを向く事が出来ず、剣の打ち合う音だけが聞こえる状態だ。

(あの女あ…本当にやってくれる…!)

戦闘の音だけが聞こえ、自分は何も出来ない。そんな状況を作り出した折紙に恨み言を述べ、蓮はこの状態を脱出する方法を模索し始めた。

~~~~~  
こんな筈じゃなかった。ジェイク・メイザースは今の状況を見てそう思った。

正体の分からない腕に剣。これを始めて手にした時、ジェイクはこれらを内心嫌い、恐れた。怖いから嫌って、分からないから怖い、そんな子供じみた理由で。だが、もしも…この力を使うとき…これらを使わざる得ない状況になった時、絶対に後悔しないと決めていた。

たとえ、この力で誰かを殺すことになっても、知り合いの誰かにこの腕を見られ、自分を見る目が変わっても。結果に後悔だけは絶対にしないようにしていた。その筈なのに。

「クソッ! クソッ!」

この場に縛り付けられて数分後。蓮は必死の形相で、手首に装着されたガントレット機器を右手に持ったヘレッドクイーンで斬りつけていた。最初は回路を弄って電源をオフにしようとしたが機器の装甲を外す事が出来ず、仕方なしに力尽くで破壊しようとするが上手くいかない。

最初の作業で感じた事だが、今装着されているこれは外からの衝撃に強い設計になっているのだろう。現にヘレッドクイーンで何回も斬りつけているのに対し、少しの傷がついた程度の損傷だ。

(こんな事してる場合じゃないんだ…。十香達が…)

背後では十香達と折紙が命を懸けて戦っている。その音を自分はまだ聞いているだけ。その事実が蓮の心に焦りと苛立ちを生んでい

た。何も出来ないでいる、それが許せない。

とはいえ、このまま斬りつけていても壊す事ができるのはかなり先になる。その時にはもう戦闘は終わっているだろう。そこまで待つてられない。

(どうすれば…どうすればいい…)

顔を動かして、この状況を脱出できる方法を模索する。すると、その視界に縛り付けられている左手首が入る。それを見た瞬間、蓮の頭に一つの方法が浮かぶ、それは文字通り身を削る策だった。

(十香、お前は罪な奴だ。俺にここまでさせても守りたいって思わせるなんて…)

小さく笑い、蓮はヘルツドクイーンを振り上げると、力一杯振り下ろす。その狙いはガントレット機器ではなく、僅か横にズレたものだった。

「鴛…折紙!」

正面にいる折紙の名を、十香は憎悪を込めて呼ぶ。今、傷だらけの身体で膝をついている十香の後ろには、十香以上に傷だらけの美九が倒れている。その少し右には耶具矢、反対側には夕弦が倒れていた。三人とも死んではいないものの、裂傷や打撲の痕と満身創痍な有様だ。

「私は取り戻す…今までの自分を…精霊を憎み、倒す事に全てを捧げていた私を…」

正面に立つ折紙は、十香にそう言うと言いつつレーザーブレードを構えて飛び出す。十香は咄嗟に塵殺公を構える。この場を動く事が出来ない以上、そうするしかなかった。そして、折紙は手に持つブレードのリーチまで近づいた時、視界の端に何かが自分の方に向かってくるのが見えた。

「ッ!」

反射的にブレードを縦に構え、防御の姿勢をとった。同時にブレードに凄まじい衝撃が走り、折紙は大きく吹き飛ばされる。

「一体…何が…！」

受け身を取り、前を見た折紙は自分の目を疑った。そこには十香を守るように前に立つ蓮の姿があった。ただ、息は大きく乱れ、鬼の形相で折紙が睨んでいる。

「…あり得ない…一体どうやって…」

あの状態からどうやって脱出したのか、折紙はさつきまで蓮のいた場所に目を向ける。しかし、それより早く十香には理解できた。蓮の左腕…数分前には制服の裾から出ていたはずの左手が無いのを見て。

「レン…まさか…そんな…」

その事実を見た十香は、目を見開き、悲しみの表情で身体を震わせる。折紙も現場に残されたものを見てどうやって脱出したのか理解した様子だ。

「…私はあなた土道と同じ、この事に巻き込またくない人物だったが、あなたはそんな代償を払ってでも私の前に立つ…。その痛み以上に、何を恐れているのかが私には理解出来ない…」

「…痛覚と出血は傷口を凍らせて止めてある。だが…折紙…お前が十香達を殺したっていう痛みには慣れそうに無いな…」

十香達が死ぬのが最大の痛みだと蓮は言う。暗闇にいた自分に見えた、たった一筋の光。それを守りたいという気持ちは、家族を殺され、復讐心に駆られた折紙にすら理解出来ないだろう。そのためには全てを捧げる覚悟も。

63話

今まで、誰かを大切に思う気持ちなんかとは無縁だと思ってきた。自分が誰かに慕われ、想われる事はあってもその逆はあり得ない。そんな考えも気付かない内に解け、変わっていった。

(なるほど…セシル、お前達の気持ちがあつと分かった…)

折紙^敵が目の前にいて、左手首を切断したというのに蓮はある事を思い出していた。約半年前に、蓮と折紙のいたA S T駐屯地を襲撃してきたイギリス出身の三人の魔術師^{ウィザード}。セシルとはその三名の内の一人名前だ。最初はA S Tの部隊と衝突していた彼女達だったが、蓮はある時三人の戦う理由を知った。

セシル達の親友とも言える魔術師^{ウィザード}がD E Mの反ウエストコツト派の幹部の策略により、昏睡状態にさせられそれを目覚めさせるために駐屯地を襲撃したという。結果、蓮を含めた三人の人物の協力で、その魔術師^{ウィザード}は昏睡状態から目覚め、セシル達との再会を喜び合った。

D E Mに対してたつた三人という絶望的な戦力差なのにも関わらず、戦う事を選んだセシル、レオン、アシュリー。狂信とは違う誰かを守りたい、助けたいというその思い。その美しい心を蓮はようやく理解出来た。

「理屈じゃないんだな…。俺の苦手なタイプの奴だ…」

小さく呟くと、蓮はいきなり、右手に持つ「レットクイーン」を折紙に向けて投擲した。予想もしなかったその行動に折紙は珍しく表情を変え、素早くブレイドを構えをとり剣を弾き飛ばして防御する。「一体何を考えて…!」

自分の手にあつた武器を捨てる理由が分からず、疑問の声を発すがそれはすぐに理解できた。「レットクイーン」が弾き飛ばされた場所…折紙の正面に蓮は剣が地面に落ちる前に、再び右手に剣を収めた。

「死ね…!死ねえ!!」

剣をとつた蓮は、守りの体勢のままの折紙に容赦のない剣撃を叩き込む。それは折紙の命を消す事が目的のものだった。

(さっきまでとは違う…雰囲気が変わつた…!?)

攻撃に転じる事ができず、苦悶の表情で守りに徹する折紙。ブレイドから伝わるヘッドクイーンへの衝撃はさつきと比べて早く、そして重い。その剣を振るう蓮の目は、ただ折紙だけを見つめ殺意に満ちていた。

それはまるで野生動物に似た状態だった。野生では普段は穏便で大人しい草食動物がライオンなどの肉食動物に立ち向かう時がある、その時は自分の子を救う場面。自分の大切な存在を守る時は命を顧みず、全てをかけて挑む。

「消えろ！死ねえ!!」

今の蓮はまさにそれだった。自分を目覚めさせてくれた光を守るため、躊躇い、恐怖、戦いにおいてマイナスとなる感情を捨て、精神の爆発とも言える力を解放させている。自分への真つ直ぐな殺意、これを感じた折紙の背筋が冷たくなるのを感じた。

随意領域^{テリトリー}で動きを封じようと考えてるが、この状態の蓮にはそんな隙すら命取りになるような気がした。その迫力に押され、折紙は後退し続け、その歩数分、蓮が進んでいく。

(私が押されている…！あなたは一体何者…！)

その疑問に気を取られた事がミスを生んだ。ゆっくりと後退する折紙は、地面にあった瓦礫に足を引っ掛けその場に尻餅をついてしまう。当然、蓮はその隙を見逃すはずがなかった。

「死ねエええええ!!」

蓮は確実に折紙の息の根を止めるため、剣を大きく振り上げる。しかし、折紙も攻撃の止んだその隙を見逃さなかった。確実に攻撃の来ないと確信したそのタイミング、そこで随意領域^{テリトリー}を操作、蓮の動きを止めると同じく随意領域^{テリトリー}で強化した蹴りで蓮を目の前から吹き飛ばす。

「はあ…はあ…危なかった…」

乱れた呼吸の中、頬を伝う汗を拭う。吹き飛ばした蓮を見てみると、折紙から数メートルの場所でヘッドクイーンを杖のように使い膝立ちの状態で折紙を睨みつけていた。今、蓮には膝立ちどころか十香達、精霊すら倒れ伏すほどの重力が襲っているというのにそれに

屈しないその姿は、随意領域テリトリで拘束してるのにも関わらず、折紙を警戒させる。

とはいえ、動けないようにさせているのは確かだ。折紙は立ち上がるとその視線を倒れている十香達に向ける。

「長かった…これでようやく始める事が出来る…。世界の精霊は私が倒す…二度と私のような人間が生まれないように…」

自分に言い聞かせるようにそう言うと、十香達のいる方角に歩いていく。その姿は十香には鈍色の輝きを放つ死神に見えた。だが突如、殺伐としたこの場に合わない笑い声が響き渡る。

「くく…はははははっ!!」

その笑い声は蓮が発したもので、折紙はこの状況で気が狂ったのかと思っただけが蓮は自分が笑った理由を話し出す。

「まだそんな綺麗事言ってるのかよ…！正直に話したらどうだ？十香達は自分の親を殺した仇に向かうやる気を思い起こさせるための踏み台…道具にしか過ぎないって！」

折紙の理念を笑うその言葉。それを聞いた折紙は、蓮を鋭く睨みつけその方向に歩みを変えた。自分の方に向かって来る折紙を見て、蓮は内心ほくそ笑んだ。

(そうだ…こつちに来い…。十香達から…少しでも遠ざけるんだ)

自分に怨みが向けば、その間は十香達が安全になる。そう考えての発言だった。それを知ってか知らずか、折紙は蓮の前まで来ると胸ぐらを掴み、蓮を上に向かせる。その行動にゴホッゴホッと蓮は咳き込む。

「さっきの言葉を…撤回してほしい…」

「殺しあう場で嘘をついてどうすんだよ…。そんな自己犠牲の台詞も聞き飽きて…があ…！」

蓮が話している途中なのにも関わらず、折紙は蓮の喉を掴み締め上げる。それによって、蓮の表情は苦しみに染まり、まともに呼吸が出来なくなる。だが、それを見て動いた人物が二人いた。

「蓮を離せええ!!折紙いいいい!!」

「激昂。マスター折紙といえどそれは許しません！」

全身の至る所から夥しい量の血を流しながらも、目を血走らせ、悪鬼の表情で折紙に槍先をむける耶具矢と、傷だらけで大量の痣を浮かべた痛ましい姿で珍しく声を張り上げる夕弦。その手にはペンデュラムが握られている。

「くっ…」

耶具矢と夕弦。二人の不意打ちは随意領域テリトリを抜け、それぞれC R ユニットの一部を傷つける。しかし、折紙が眉を寄せると同時に二人の身体は地面に落ちた。見えない手に押し付けられるような力の中、這ってでも動こうとする二人だが、身体を持ち上げる事すら出来ない。

「耶具矢はともかく…夕弦は、お前の事…尊敬してたよな。そんな奴を…そうする、なんて随分と…情がない奴だな」

喉を絞められながらも、蓮は折紙の事を嘲笑う。それを聞いた折紙は、歯をギリイと噛みしめると蓮の顔を右手で殴る。随意領域テリトリで拘束しながら何度も。

「黙れ…！黙れ…！黙れ!!」

一心不乱に殴り続ける折紙に対して、蓮はされるがままに殴られ続ける。

「やめろ！やめろ！レンは関係ないだろう!! 鳶一 折紙!!」

「折紙!! 蓮を離せて言ってるんでしょ!」

「制止。もうやめてください、マスター折紙。それは以上は蓮が死んでしまいます」

十香達三人の声が聞こえてないのか無視しているのか、折紙は止まる事なく殴り続けた。その腕が止まったのは、折紙も肩で息をし、蓮の白い肌が赤く染まり、口内を切ったのか口の端から血を流した時だった。

「ゴホッ…効き目のないパンチは何発も、重ねても無駄だ…。勝負は一発で決めるもんだ…」

そんな言葉と共に蓮は血の混じった唾を吐き出し、折紙の頬に当てる。その瞬間、折紙は我を忘れた。衝動のまま左手にブレイドを持つと、それを蓮の右脇腹に突き刺す。傷口から吹き出した血が、蓮の着

ている制服を真っ赤に染める。

「ぐあああああ!!」

蓮でもブレイドが身を貫く痛みを噛み殺すことは出来なかった。苦痛の声を上げ、傷口を抑えながら地面に横たわる。縦になった世界には、涙を流しながらも自分に何かを言う耶具矢と夕弦。そして涙目で必死に身体を動かそうとする十香が見える。

そして、ブレイドを逆に持ち、剣先を自分に向ける折紙の姿も。

(か……ぐ……や……ゆ……づ……る……)

ハッキリしない視界に映る瓜二つの姉妹。そして、自分を変えてくれた少女に目を向けようとした時、その少女の身体が目映く輝き始めた。気絶している美九以外の全ての視線がそこに向けられる。

(と……お……か……)

蓮はその少女の名前を思いながら、先のない左腕を光に伸ばす。そこには紫色の甲冑と、淡い輝きを放つスカートを纏った”姫”がいた。

その姿を見たのは今年の四月が最後だったと思う。先ほどまで纏っていた限定的なものとは違う、見るものを圧倒する絶対的な威容に満ちたその姿。霊力を封印される前の完全な霊装を身に纏う十香がそこにいた。

(ああ……そうか……。そういうこと……か)

十香がなぜその姿になったのか、それを理解した蓮は目を閉じ意識を闇の中に沈めていった。意識を失うその瞬間、近くに立っていた折紙が自分から離れていくのを感じながら。

—————

誰かが呼んでる気がする。はっきりしない意識の中、蓮はそう感じた。自分が気を失ってどれほど立ったのだろう、一分か、それとも一時間か。それほど時間の感覚が曖昧だった。

「……を……ませ……。お……る……だ!」

その声のおかげで、自分がどういう状態なのか思い出してくる。なんとか重い瞼を開けると、倒れている自分を覗き込むように見ている四人の少女の顔があった。その四人は共通して、傷だらけなのと、今

にも泣き出しそうな表情だった。

「とお…か、かぐ…や…、ゆ…：…づ…：…る…、み…く…：」

蓮が自分を見つめる少女たちの名前を呟くと、悲しみの表情から変わり、喜びの混じった顔になり各々呼びかけてくる。

「歓喜。蓮の意識が戻りました！」

「レン！しっかりしろ！私達の事が分かるか!？」

「気をしっかり持ってください！目を閉じちゃだめですよ!!」

「もう…心配させんじや…グス、ないわよ！生きてるなら…早く起きろつての！」

最後の耶具矢は、涙を流し、つつかえながらの言葉だった。それを微笑ましく思いながら十香に気になった事を聞く。

「大丈夫。意識がはつきりしてきた…。十香、折紙はどうなった？」

「あいつは剣の腹で思いっきり切り殴りつけてやった。だが、死にはするまい。それより！今心配すべきはお前の方だぞ！」

今の蓮は顔の殴打、左手首の切断、さらに右脇腹からの出血とこの場にいる誰よりも重傷だった。なのにも関わらず見る者を安心させるような笑みを浮かべる。

「よかった…見た感じ、俺より重傷な奴はいなさそうだな。悪い、お前たちを…守りきることが出来なくて…」

「何を言っているのだ!!レンは守ってくれたではないか!!こんな状態になってまで…」

十香の瞳から溢れた涙が、蓮の頬に落ちる。溢れ落ちるそれを一本だけとなった腕の指で拭い、頬に手を添えた。

「泣くなよ、十香、耶具矢も…。可愛い顔が台無しだぞ…」

こんなボロボロになっても軽口を言うのが何とも蓮らしかった。それに各々が安心する笑みを浮かべる。

「提案。一先ず琴里の元へ向かうのが良いと考えます。蓮の傷は夕弦達の手に負えるものではないと思いますし」

「で、でもお…今の蓮さんを動かして大丈夫なんでしょうかあ？まだ血も止まってないのに…」

蓮の腹部から出る血を見た美九が心配の声を出す。傷口からはま

だ少量だが出血が続いていた、そんな状態で蓮の身体を動かす事に不安を感じたのだろう。それを聞いた蓮は右手を掲げる、すると、その手に一つの剣が握られる。薙刀のようなものの柄頭が合わさり、両剣のような形をした剣、ヘトナティウだ。

「疑問。そんなものを取り出してどうしたのですか？」

「強引だが…仕方がないか…」

蓮はヘトナティウを操作、剣の柄を縮ませる。結果、剣の全長は短くなった。それと同時に刃の部分に陽炎が揺らめき始める。この場にいる蓮以外の全員がその意図を理解出来ない。

「誰か、腹部の傷口を見えるようにしてくれ。制服を破つても構わないから…」

蓮の頼みに顔を見合わせる四人だったが、十香はその頼み通り、制服を破き傷口が見えるように露出させる。そこは赤黒く染まっており見るのも痛々しい状態だった。

そんな状態の傷口に蓮は何を思ったのか、熱を放つヘトナティウの刃を押し付けた。

「うううう!!ぐああああ!!」

「驚愕。何をしているのですか!？」

「みんな!やめさせるぞ!!」

蓮の苦しみの声と肉が焼ける音、そして、鼻に付く独特な臭いが充満する。その行動を四人は大慌てで止めさせた。十香が傷口と刃とを離し、三人が腕を抑え、剣を取り上げる。蓮の手から離れたヘトナティウは光へと還り、消えた。

「はあ…はあ…原始的な方法だが、傷口を焼いて塞いだんだ…。消毒も兼ねてな…」

歯を食いしばりながら言う蓮の傷口は真つ赤だが確かに出血は止まっていた。自分が原因で動けないなら、その原因を何とかすれば良いと考えての行動だったのだが、十香達はそんなの知ったことかという様子だ。

「もう!蓮さんは無茶しすぎなんですよお!!」

「首肯。美九の言う通りです。血を止めるなら他の方法もあると思

ます」

そんなお説教をもらいながら、蓮は肩を借りて立ち上がる。こんな状態の身体だが、どうにか歩く事は出来そうだ。

「三人とも、蓮をへフラクシナス」に連れて行ってくれ。私は鳶一 折紙を連れてくる。一人では身動きが取れないと思うからな」

そう言ったのは十香だが、蓮も内心、折紙から話を聞きたいと思っていた。だが、こんな状況でそんな事を言っても迷惑な我儘にしかないだろう。そうなると、今は大人しくして、後で聞いた方がいい。そう思った瞬間、蓮の背筋に悪寒が走った。

「危ない!!伏せろ!!」

蓮は自分を支えていた耶具矢を横に突き飛ばし、正面にいる十香に覆い被さり無理矢理伏させた。その直後、蓮が背を向けていた方向から光の粒のようなものが飛んできて、十香と蓮のすぐ上を通過、少し先の地面に着弾した。

「レン!? 一体何が起きて…」

何がどうなったのかが分からない十香は、自分に覆い被さる蓮にそう聞くが蓮は答えずある方向を睨みつけていた。それにつられて他の三人もそちらを見る。そこには、天使”が浮かんでいた。

ウエディングドレスのような形をして、大きく広がる白いスカート。そして頭部を囲うように浮遊したリングから伸びた、光のベール。それもまた白い。目が覚めるような純白で構成されたドレスのような霊装、それを身に纏っているのは…。

「鳶一…折紙…」

灰色の雲に覆われた空に浮かぶ”天使”。その顔はさつきまで人間だった少女、鳶一 折紙だった。

64話

仄暗い空間に一条の光が差し、その中に浮かぶ一人の少女。その少女に疑問の声を上げたのは蓮ではなく十香だった。

「鳶一 折紙、貴様！その姿は…」

その声を聞いた耶具矢、夕弦、美九も眉を潜めながら目を見合わせた。

「やつぱり…折紙よね？」

「確認。やはり耶具矢にもそう見えますか」

「ですねー…でもあの姿って…」

だが、そんな事も言ってられなくなる。なぜなら宙に浮かぶ折紙が右手を掲げ、その天使の名を呼んだからだ。

「〈絶滅天使〉…」

折紙のその言葉に応ずるように、暗い空から折紙を囲うように光が降り注ぎ、やがて実像を帯びていく。そして、それぞれが無機的な細長い羽のような形をとる。それは折紙が掲げた右手を握るとその頭上で王冠のように円状に連なった。

「〈絶滅天使〉…【日輪】」

折紙が静かに告げると、頭上に浮かぶ王冠が回転し、周囲に夥しい量の光の粒を振りまく。それは、さつき十香と蓮のすぐ上を通過したものと同じものだった。

「何が、どうなってるんだよ!!」

蓮は予想も出来ないような出来事の連続に苛立ちの声を上げると同時に右手をへばスターに変貌させ、地面を殴る。すると、青い光を放つ巨大な拳が五人を包み込み、光の粒から守った。

「懸念。あまり無理は…」

「大丈夫…大丈夫だ。これくらい…」

夕弦の不安の声に問題ないと答える蓮。五人がいる場所以外は靈力の塊の光が降り注ぎ、破壊されていく。見慣れていた景色が一瞬で変わっていく事からその威力は想像出来た。

数十秒後、光による蹂躪は止まり、付近に土煙が舞う。その中で青

い拳に包まれ無傷な五人を見た折紙が忌々しそうに顔を歪めるのが確認できた。それを気にせず、蓮は「バスター」を解除すると周りにいる耶具矢、夕弦、美九を見た。

「耶具矢、夕弦、美九。今度こそここを離れる。俺と十香はあいつと戦う」

「反論。ダメです、蓮も一緒に連れて行きます」

精霊となった折紙は強大な力を持っている。夕弦もそれは理解出来たが蓮自身までこの場に止まる理由が分からなかった。どうやらそれは他の二人も一緒らしい。

「馬鹿！ 私たち以上に重傷なのに何を…」

「そうですよお！ 十香さんも連れてみんなまで…」

「…多分、折紙はこのまますんなりと逃してはくれない。今、この場で勝てそうなのは十香ぐらいだ。俺はそれを手伝わなくちゃならない」

十香はすでに立ち上がり、手に持つ「サンダルファン塵殺公」を折紙に向けて構えている。蓮はさつき、折紙の攻撃を防ぎきった。蓮以外にそんな事が出来るのは、この場では完全に霊力を取り戻した十香ぐらいだろう。悔しいことに耶具矢、夕弦、美九にはそんな事できる自信がなかった。

「理解。分かりました、…ご武運を…」

「…なんでこういう大事なところで…役に立てないのよ…私は…」

「え、ちよつと二人とも！ 蓮さんと十香さんを置いて…きやつ!？」

さつきとは違い、今は言い争っている余裕もない。耶具矢と夕弦は納得出来ないと言った様子の美九を両脇から抱えて、そのまま身体に風を纏わせ凄まじいスピードで空に飛んで行った。折紙はそちらに興味を示さなかった。

「夜刀神…十香。倒す、私が…」

「…っ！ 折紙…貴様…」

今の折紙は、もう十香の知っている折紙ではない『精霊』という存在となった。その実力も目の当たりにして油断の出来ない相手だと理解した。『怖い』今の十香はそんな心境だった、だが…。

「十香、落ち着け。折紙の天使の能力が少しだけ分かった。俺がお前を守ってやる」

隣から聞こえた冷静でありながら、聞いた十香を安心させるその声。隣でしゃがんでいる蓮の言葉だった。今の自分は一人ではない、それが十香に恐怖を吹き飛ばす勇気をくれた。

「レン、教えてくれ…。私はどうしたらいい…」

「俺はこの場から動けない。だから十香、お前に動いてもらおうしかない。十香が近づいて折紙の顔をぶん殴る。分かったか？」

「…うむ！よく分かったぞ！」

元気の良い返事と共に十香は折紙に向かって飛び出していく。地面を走って向かってくる十香を見て、折紙は右手を掲げ、先ほど同じ霊力のこもった光の粒を雨のように十香に降らす。前から向かってくるそれを見ても十香の走る速度は変わらない。

当然、真つ直ぐに十香へと向かうのだが、十香に当たる直前、不自然に曲がり十香のすぐ横に着弾した。当たり前だが折紙がそうするようにした訳ではない。

「攻撃が曲げられた…！今は…」

十香が向かってくるのも忘れ、攻撃が曲げられた事に動揺する折紙。そして、彼女は気づいた。十香の周りにキラキラとまるで見えないう鏡のようなものが光を反射しているという事に。

「まさか…！」

折紙の頭にある可能性が浮かび、ある方向に顔を向ける。そこには、さつきと変わらない位置に蓮が膝立ちでいる。ただ、その右手に籠手を装着し、十香の事をジツと見つめている。

（〈絶滅天使〉の攻撃を…逸らした…！）

十香の周りに浮かぶ光るものの正体は、蓮が空気中の水分を集めて作った”鏡”だ。蓮が折紙の〈絶滅天使〉の攻撃が”光”で構成されているものだと考え、ならば反射して軌道を変える事が出来ると考えたのだ。防ぐのではなく”逸らす”。それによって自分にかかる負担を小さくするのも目的に。

「うおおおお！！！」

蓮に守られた十香は光の弾幕の中を恐れる事なく進み、大きく飛ぶと手に持った〈塵殺公〉で折紙に斬りかかる。だが、剣が触れる瞬間、

折紙は光となって消え、数メートル後方で出現した。これには十香と蓮だけでなく、折紙自身も驚いていた。

「…怪物…！」

折紙は嫌悪した表情でそう吐き捨てると、右手を上空に突き上げる。

「マルアウ【天翼】！」

その言葉で〈メダトロ絶滅天使〉が再び折紙の元に集結すると、背中で翼のような形を作る。そして、その翼を羽ばたかせ、後方に離脱すると同時にその先端からいくつもの光線が迸り、十香に襲いかかる。

（攻撃のパターンを変えてきたか…！）

さつきまでとは明らかに威力が違っていると判断し、十香を守る鏡に対応させる。しかし、対応させても鏡が防ぎきれないものの中には出てしまいそれを十香が〈サンダルファン塵殺公〉で打ち払うのだが、それでも捌き切れないう数発が十香の身体に命中し、顔を歪ませた。

（あれは完全に防ぎきれない…。どこかで十香が攻めるチャンス…）

防御しきれないのでは、守りに徹するのはまずい。そこで蓮は折紙から飛んでくる一つの光線に目をつける。それが十香に当たる直前に鏡を生成、軌道を変える。さらにその軌道の先で再び鏡を作り、光線をコントロールする。

この量の中で光線の一つが他と違う動きをしているなど、折紙ですら気づいてないだろう。数回の反射で光線を折紙の背後まで回り込ませると、そのがら空きの背中を狙って向かわせる。

もちろん、さつきのように身体を光にして避けられる可能性もある。しかし、その時は避けられなかったとはいえ、知覚していたのに対し、今度は知覚すらしてない不意打ちならどうかという考えだ。

その思惑は見事に上手くいった。突然の背後からの衝撃と苦痛に折紙は呆気にとられた表情と共に身体を前に仰け反らせる。

（神代…蓮！！）

何かするのを見ていたわけではない。ただ、折紙はこんな事をするのがこの場では蓮以外思いつかなかった。警戒すべきなのは、霊力を

完全に取り戻した十香以上に、蓮だった。そう認識を改めると、今十香に飛ばしている光線の狙いを動けない蓮に向ける。

「はあああああ!!」

十香は折紙が蓮に狙いを定め、攻撃が止まった瞬間を見逃さなかった。走った勢いそのまま大きく飛ぶと、横を向いている折紙の顔面を素手で殴りつける。その衝撃で吹き飛ぶ折紙だったが、同時に〈絶滅天使〉の翼から光線が放たれる。その狙いは蓮だった。

「レン！逃げろ！」

折紙が誰を狙つての攻撃か察した十香は、そう叫ぶ。だが、誰かに肩を借りなければ歩くこともままならない蓮が、急なその攻撃を身軽に避ける事など出来るはずがない。

「ちいっ…動け…」

傷だらけで重い身体に鞭を打って這つてでも動こうとするが、なかなか言う事を聞かない。仕方なしに蓮は右腕で身体を支えると、前方に身体を乗り出させて移動させた。動けた距離は僅かだが、どうか急所に当たらないようには出来た。しかし、〈絶滅天使〉は腹部：傷口のあった右脇腹部を抉っていった。

「うあああああ!!」

身体中を駆け巡る苦痛に、蓮は傷口を押さえて倒れこむ。痛みで視界が滲むなか、自分の右手を見てみると血でべっとり濡れていた。一度塞いだ傷口だからこそ、大量の血が出てきたのかもしれない。そのせいでついには身体に力が入らなくなってきた。

(十香を…守るんだ…意識をはつきりさせろ…！)

苦痛のせいで十香を守っていた鏡が消えてしまったのを感じ、急いで復元させようとするがまるで脳が揺れてるかのような錯覚のせいで集中出来ない。地に倒れて、その事に悪戦苦闘していると、自分の目の前の空から落ちてくる人影を見つける。

「ぐ…がはっ!!」

それは最後に見た時以上の傷を負った十香で、顔は苦悶の表情だった。おそらく蓮が鏡の防御を消してしまったせいで折紙の攻撃を防ぐ事が出来ず、落とされてしまったのだろう。

「くそっ…十香…!」

蓮は最後の力を振り絞って身体を動かすと、落ちてくる十香を受け止めた。それによって腹部に鋭い痛みが走るがそんなものは無視する。

「レン…お前…血が…」

「それより…十香は折紙を…」

傷口を見て心配の声を出す十香に、自分に構うなど言っただけで顔を上に向ける蓮だったが、その視界は光に埋め尽くされた。その理由は、動けない二人に折紙がいくつもの光の雨を降らせてきたからだ。

(やられる…!)

蓮は直感的にそう理解した。彼の戦いの勘のようなものが、自分の状態、十香を抱えている事などを見て避けられないと告げていた。その瞬間、蓮の心にある思いが強くなる。

(ここで…終わるのか…?自分が何かも分からず…十香を守ることも出来ないで…。こんな無情な世界に呑み込まれて…)

それはある意味戦いにおいても最も重要とも言える気持ちだ。蓮は今までの戦いでそれを心から思う事は無かった。だが、今は違う。

(嫌だ…まだ終わりにたくない!)

強く思った瞬間、蓮の視界は“青い光”に埋め尽くされた。

〈^{メタトロン}絶滅天使〉の光を吹き飛ばしたのは、蓮の身体から爆発のように発せられた青い光だった。その勢いに、空に浮かぶ折紙も腕を顔の前に出し、後ろに後退する。

「一体…何が…」

間違いなく仕留めたと思った。十香を受け止めて動けない蓮二人に向かって〈^{メタトロン}絶滅天使〉の一斉掃射。霊装を纏った十香ですらひとたまりもないものだっただろう。だが、青い光によって全て防がれるのが結果だった。

「…!?!」

光が収まり、腕を退けて前を見た折紙は目を見開く。そこには蓮と

十香を守るようにいる”魔神”がいた。上半身だけで大きさは五メートルほどであろうそれは、蓮の背後から出現していた。

青い光の粒子によつて形成されたそれは、形は人型だったものの姿は全く違う。肌はまるで甲殻類の殻のような硬さを印象づけ、顔は闘牛にあるような攻撃的な一対の角がある。目は吸い込まれるような闇の中に明らかな意志を感じさせる青い光が浮かんでいた。

そして、腕：蓮の持つ「バスター」と全く同じそれには、巨大な”日本刀”のような刀が握られている。魔神が持っている日本刀は、本体である蓮の「バスター」となった右腕にもいつの間にか握られていた。

「レン：お前は…」

「大丈夫だ：…ここで終わらせない：終わらせてたまるか…」

呆気にとられる十香が、疑問の声を発するのに対し、言い聞かせるようにそう言う蓮の身体にも変化があった。折紙にブレイドと光で挟まれた腹部の傷口。そこが青い光で包まれると傷を負う前の健康的な肌に戻った。それは自らが絶った左手首にも起きる。

左袖の中が光ったかと思うと、袖から左手の形をした光が姿を見せる。それが消える頃には、切り離れたはずの左腕が蓮の思い通りに動いていた。その手で十香の手を強く握る。

それ以外にも折紙から受けた切り傷、打撃跡などが肌から消える。そんな蓮を包むあるものを見た瞬間、折紙は全身の血が沸き立つような感覚がした。

「神代：蓮：…お前も：…お前も！精霊だったのかつ!!」

十香と比べて淡く、不完全なものだったが、蓮の周りを確かに青い光を放つ霊装が包んでいた。自分の邪魔をした存在が、倒すべき敵だった事に怒りの声を出す折紙に対し、蓮は冷静だった。

「…そうだったらしいな」

自分の身体を見下ろし、まるで他人事のように言う。実際、自分の正体がどうだったなんて興味なかった。ただ、十香を守れた。それだけが何より嬉しかった。

折紙はまた「絶滅天使」で十香と自分を攻撃する未来が予想出来る。

ならば、この力で守る、そう心に決めた。

「……ッ!!」

蓮の思いを理解したのか、魔神は折紙に対して威嚇とも見れる咆哮を飛ばす。向かい風のようなそれを受けた折紙は、自分の肌に鳥肌が立つのを感じた。

(精霊が恐怖してる…この殺意は…)

蓮が精霊だとして、あの背後に存在する魔神が十香の〈塵殺公〉のような存在だと折紙は思っていた。だが、飛ばした咆哮には明らかに折紙への殺意があつた。十香や他の精霊からは感じなかったもの、本当に自分を憎んでるような”天使”。

「^{カドゥール}光剣！」

その恐怖を紛らわすように折紙は叫んだ。同時に〈絶滅天使〉散り、それぞれが独立した意志を持つかのような動きで空を駆けまわり、十香と蓮に光線を放った。

「……ッ!!」

向かってくる光線に反応したのは魔神だった。大きく叫ぶと右手に持った刀で光線を一闪、攻撃全てをいともたやすく打ち払った。

「なっ…!」

その事に折紙が驚くと同時に、魔神の周囲に青い光を放つ剣が出現する。その本数は空に舞う〈絶滅天使〉の数と同じ。剣は爆発するよな音と共に発射され、それぞれが光線を放つ〈絶滅天使〉へと向かっていく。

折紙はそれらを迎撃するように〈絶滅天使〉に指示するが、剣は意志を持っていくかのような動きで光線を避ける。結局、一回も攻撃が当たる事なく、全ての剣が同時のタイミングで〈絶滅天使〉とぶつかり、空に爆発の花を咲かせた。

(くっ…実力は…同じ…)

折紙はそう考えた、いや、精霊の折紙がそう考えさせたのかもしれない。しかし、その予想はすぐに覆る事になる。なぜなら、爆発の中から、再び蓮の飛ばした剣が出現したからだ。その数はさつきと変わっておらず、真つ直ぐ折紙に向かっていく。

「何っ!? 〈絶滅天使〉!!」

折紙は〈絶滅天使〉を自分の所に戻すと、向かってくる剣に向かつて光の粒を降らす。どうにか手数で勝負しようとしての考えだったのだが、剣はそれをものともせず向かっていく。

剣はそれらをかいくぐり、折紙に剣先を突き立てようとするのだが、その直前で折紙の身体は光と消える。その折紙がいた場所を他の剣が虚しく通り過ぎて行った。

そこから少し離れた場所に折紙は再び現れるのだが、折紙が消えて、攻撃が外れても剣は戦う意志を捨てなかった。直角的な動きで方向を変えると、光が集まる場所に向けて飛んでいく。そして、姿を現した折紙の目の前に剣先を見せたのだった。

(これでも…避けられない!!)

そこで右手を前に出したのは咄嗟の行動だった。折紙の前に〈絶滅天使〉が盾のように連なり、剣から守る。しかし、それはその場しのぎの行動にしかならなかった。

次々と〈絶滅天使〉の盾に剣が突き刺さっていく。二本目、三本目と重ねるたび、盾にダメージを重ねさせる。そして、四本目でそれは起きた。剣が刺さった瞬間、盾がバラバラに砕け散り、その後の攻撃を許してしまう。

五本目…六本目以降が霊装を砕き、折紙の身体に傷を刻んでいく。全てが通り過ぎた後、折紙は全身から血を垂れ流し、肩で息をするほどに消耗している状態だった。

「あなたは…私が殺す…神代 蓮!!」

「させないさ…お前の好きなようには…」

折紙は〈絶滅天使〉を王冠型に戻すと、その先端を蓮達に向けてくる。それに対し、魔神は居合いのような剣先を下に向ける構えをとる。互いが勝負を決める一撃を出そうとしているのだ。

「折紙! 私たちとお前は…本当に分かり合えないのか!」

「…ツ…何をいまさら…」

声を上げたのは蓮の隣にいた十香だ。それを聞いた瞬間、折紙は顔を悲壮に歪めながら返した。

「私の意志は変わらない…。精霊は全て、私が否定する！」

「…十香、後ろに下がってろ。あれが折紙の答えだ」

もはや話し合いで解決する事は出来ない。蓮は十香を後ろに下がらせる。同時に魔神の持つ剣に光が収束し、解放を訴えるかのように刀自体が震える。これを抜いた瞬間、溜めた力が折紙に向かっていくだろう。

「俺の守りたいものはお前の壊したいものでもある。それが変わらない限り、和解はあり得ない。そうだろう？」

静かに言う蓮に、折紙は同じとばかりに頷くと、両手を前に掲げる。すると、^{メタトロン}〈絶滅天使〉の先端に純白の光が集まる。天と地の二つの大きな力が放出されるその瞬間。

「やめろおおおおおッ!!!」

場に聞き覚えのある声が響き渡る。声の聞こえた方向に目を向けた折紙、蓮、十香は、目を見開いた。

「土道…!?!」

「土道…今までどこに…」

「シドー!」

そこには行方不明になっていた土道の姿があった。その後ろには四糸乃と七罪の姿も見える。

「なんで…なんでこんな事になってんだよ…!折紙!蓮!」

土道は顔をしかめて悲痛に満ちた声を上げるが、蓮はそれでも折紙が向かってくるなら、力の解放を止める気はなかった。だが、折紙は土道から顔を逸らすと、^{メタトロン}〈絶滅天使〉を翼型に組み替え、どこかに飛んで行った。

そして、この場には折紙の名を叫ぶ土道の声だけが響き渡る。

(結局…こんな…終わり方かよ…)

飛んでいく折紙が、目視出来ないところまで飛んで行ったのを確認した瞬間、蓮の全身がとてつもない疲労感のようなものに襲われる。同時に背後の存在する魔神は霧散して消滅し、右手に持つ刀も右腕と一体化するように消える。

両膝をつき、地面に倒れようとする蓮を近くにいた十香が慌てて支

える。

「おい！しっかりしろ！レン！レン！」

睡魔にも似た感覚に意識がぼやけてくる。最後に自分に呼ぶ十香と、こちらに走ってくる土道、四糸乃、七罪の姿が見えた。

65話

気を失った蓮が、目覚める時に最初に感じたのは消毒液のような独特の香りだった。その匂いで意識が薄っすらと覚醒し、ゆっくり閉じていた瞼を開ける。最初に目に入って来たのは真っ白な白い光、それが蛍光灯の光だとすぐに気づく。そして、それが見えるということは自分が今、横になっている事にも。

(とりあえず、死んではいなさそうだな…あの世にも蛍光灯が無ければ…)

少し疲労の残っている身体を起こし、周りを見渡すと自分の寝ている場所…ベッドは白いカーテンに囲まれ外の様子は分からない。

(ここは…病院か?この消毒液の匂いやカーテン、ベッドといい…)

そう考えるが、カーテンをスライドさせて外の様子を見れば分かることだ。カーテンを掴み、勢いよく横に退かず。そして見えたのは、椅子に座る土道と、包帯に包まれ、ベッドにいる十香、耶具矢、夕弦、美九の世話をする四糸乃と七罪だった。皆は蓮の姿を見た瞬間、驚きと安心が混じったような表情を浮かべる。

「蓮!良かった、目が覚めたのか!」

「寝起きで頭が痛いんだ。あんまり大きな声を出すなよ土道」

喜ぶ土道にそんな軽口を叩いた後、首や腕、身体のいたるところを動かしてみる。痛みや違和感を感じる箇所はない、出来れば折紙が精霊になったという事も無かった事にして欲しかったが、目の前にいる包帯に包まれている四人の少女の存在が嘘では無いと言っている。

「それで、十香、耶具矢、夕弦、美九…だよな。まるでミイラみたいな有様だ」

折紙との戦いで軽くない傷を負った四人は身体中を包帯と湿布で覆われ、かろうじて誰か判別できる程度のもだった。それが可笑しく、クスリと笑うと四人は不満そうに頬を膨らませる。

「む、むう、笑うな…」

「べ、別にもう治ってるし!もう元気に走れるんだから!」

「アイドルにとってお肌は大切なんですけどねえ」

「反論。蓮の方もボロボロじゃないですか」

夕弦の言葉を聞いて、蓮は自分の身体を見下ろしてみる。すると、傷は無いものの、着ていた制服は右脇腹部が大きく破れており、それ以外にも血や土などで汚れている。こんな姿で道を歩いていたら間違いなく警察が呼ばれる状態だ。

夕弦の反論に、『それもそうか』と笑みを浮かべながら頷くとベッドから立ち上がり側にあつた椅子に腰掛ける。それには慌てた反応をしたのは七罪だった。

「だ、ダメよ！もう少し寝てなきゃ！」

「いや、もう十分寝たと思うし、身体に違和感を感じる場所もないんだけど…」

ボロボロの服を掴み、必死の形相で言う七罪の迫力に押され、引き気味に答える。さつき時計を見たが、現在の時刻は午後十時を回っていた。学校帰りの放課後に蓮は気を失つたのを考えると、休憩としては十分だし、実際休めていると感じていた。

それを見ていた土道が、何か言いたげに頬をポリポリと搔く。

「いや、蓮…あのな。実は蓮がこの病院に搬送されて、ベッドに寝かされた時から七罪はずっと付きつきりで見てたんだ。それくらい心配してたから気が気で…グフア！」

話してる途中なのにも関わらず、七罪は素早いフットワークで踏み出すと、座っている土道の腹部に蹴りを入れた。その顔は赤く染まっている。蹴りをくらった土道は、奇妙な声と共にバランスを崩し、派手な音と共に床に倒れこんだ。

「べー別に！おかしなところが無いならそれでいいのよ!!ただ！少しでも無茶してないか心配しただけなんだから！」

椅子から落とした土道に追い打ちをかけるように叫ぶ七罪。だが、当の土道は後頭部を抑え込み、『ぐおおお!』と苦痛の混じった呻き声を上げており、七罪の言葉は耳に入っていない様子だ。そんな土道に四糸乃が心配そうに駆け寄る。

そんな七罪を見て、寝ている間も心配かけたんだなと感じ申し訳な

い気分になる。

「心配させて悪かったよ。けどもう大丈夫だ。それと、後頭部強打は命に関わるからやめた方がいいぞ」

蓮は苦笑いを浮かべながら、床で呻き声を出す土道に近づくと、四糸乃と協力して身体を起こさせる。寝起きの人間扱いが荒い場所だなど頭の片隅で思いながら。

「いたたた…、けど、元気ならいいんだ。そうだ、みんな、喉が渴いてないか？飲み物買ってくるよ」

土道の言葉に、皆が頷く。実際、蓮も起きたばかりで喉が渴いていたのも事実だし、他の者も同じだったようだ。だが、蓮と十香達怪我人グループに加え、四糸乃と七罪の数を入れると買ってくる飲み物の数は六本になる。とても土道一人で持ちきれぬ数ではない。

「あの…土道さん以外に…私と七罪さんで持てば一人二本ずつになるので…お手伝いします」

「いや、手伝うんだったら俺がついていくけど…」

「い、いえ！蓮さんも病み上がりで動くのは良くないと思いますし…ここで待つてください」

手伝いを名乗り出ても、四糸乃に慌てて止められる。大丈夫と言っても、自分がまだ怪我人扱いされていられない。そんな扱いに不満を感じるが、我慢し病室を出ていく土道、四糸乃、七罪を見送った。これで室内にいるのは蓮、十香、耶具矢、夕弦、美九だけとなる。

そんな状況になると、蓮は十香のいるベッドに向けてゆっくり歩き出した。その様子が真剣味が帯びている。

「どうしたのだ？まだ痛いところがあつたのなら寝てた方が…」

ただならぬ様子で近づいてくる蓮に、十香が心配の声を上げる。他の三人も、蓮を心配そうな目で見ている。その歩みは十香のベッドの側で止まる。そして、十香を抱きしめたのだった、怪我の事を考えて優しく、包み込むように。

その行動に耶具矢、夕弦は目を見開き、美九は『あらー』と目を輝かせる。そして十香は混乱などの感情で顔を真っ赤にし硬直してしまっていた。

「すまない…本当にすまない…。十香達を巻き込んでしまつて…」

そんな蓮は十香達が見た事がないほど弱々しく、儂い。そんな様子で十香から離れると、耶具矢、夕弦、美九に向けて頭を下げる。

「えっ!?なんであんたが頭を下げるのよ!？」

「狼狽。頭を上げてください。私達を守つた蓮がなぜ謝るのですか?」

「なんだか、こつちが申し訳ない気分になつちやいますー!」

頭を下げているのは蓮なのに、それを見ていた三人の方が気が気でない様子だった。三人の言う通りに顔を上げる蓮、その青い瞳からは一筋の雫が頬に向けて伝っていた。

「俺が…無力だった。もつと力があれば、みんなを守り切れたのかも知れない…だけど、ダメだった」

折紙の襲撃は、蓮がDEMを見張っていれば止めることは出来なくても、予測する事が出来たかも知れない。そうすれば十香達はこんな傷を負うことも無かつただろう。全ては暖かい日常に浸つて、警戒するのを忘れた自分の責任だ。

「結局、折紙を止めることも出来ず、命が助かったのは偶然に近い…。正直、自信が無くなったよ、これから十香達を守っていけるか」

ウエストコットの脅威は、エレンなどで理解していたつもりだったが、今回の襲撃はまさに奇襲だった。その戦闘を超えての自信の喪失、それに蓮は悩みと悔しさを感じていた。それを聞いていた美九は『うーん』と声を出した。

「思つたんですけどお…蓮さん、幾ら何でも完璧主義過ぎませんか?」

「首肯。美九の言う通りだと思います。少し肩の力を抜いてみては?」

「てゆうか、私たちに出来ない事を平然とやるあんたが言うなしつ! 嫌味にしか聞こえないから」

「む?む?そ、そうだな、無理はしない方が良いぞー!」

その一言に、耶具矢、夕弦が同意とばかりに頷く。ただ、十香だけが頭の上に『?』を浮かべていたが皆に同調して頷く。その反応を見

て、今度は蓮が啞然としてしまった。

「完璧主義…完璧主義か…。ふふつ、あはははは!!」

すると、蓮は急に顔に手を当てて笑い出した。四人の驚きと心配の視線が集まる。だが、そんな事を気にもせず蓮は笑い続ける。その理由は、自分と違うと思っていたあのエレンと、少なからず同じようになっっていた事に気付いたからだ。

(何があの人と違うだよ…。同じだったんじゃないか…成功やトップしか許さないあの人の考え方に…)

敵であるエレンと思考が同じなど笑える。それに気づかせてくれたのは十香達であり、自分だけでは絶対に気づかなかった事。今度は笑いで出た涙を拭い、顔を向ける。

「ああ、そうだな。その通りだ。少し気が滅入ってたのかも知れないな」

「よくわかりませんが、蓮さんはいつも通りで大丈夫ですよ。今回の事でも変な責任を感じる必要は無いと思いますしい」

「折紙とも、いつか和解の印を結ぶ時が来るであろう。クツクツ、その対価は何にしてやろうか…」

「何かあったのなら言って良いのだぞ。レン一人で抱え込む必要は無いのだからな!」

なんだか、怪我人である十香達に慰められる結果となってしまう。その事に苦笑いしていると、さっきから顎に手を当てて、何か考えていた夕弦が、顔を上げて蓮の方を向いて来る。そして、確認するよきな様子で話す。

「質問。よく分かりませんが、夕弦達は蓮の助けになれたという事ですか?」

「ああ、かなり助かったよ。夕弦達のおかげで」

「確認。つまり、夕弦達は蓮に何かをしてあげたという事ですね」

夕弦の質問の意図が分からない十香他二人。だが、蓮はそれがなんとなく理解し、微笑を浮かべると夕弦の望む回答をしてやる事にする。

「そうだな、俺は受けた恩は返す主義だから、お礼をしなきゃな。何か

して欲しい事とかあるか？」

「懇願。ならば、さつき十香にしたみたいに夕弦をギュッと抱きしめて欲しいです」

夕弦のその一言に『えっ!?』という声と共に視線が集まる。蓮も僅かに目を見開く。だが、夕弦本人は冗談を言っている様子には見えなかった。そして、両腕をゆっくり広げ、蓮を受け入れる体勢となる。

「注意。怪我が痛むので優しくお願いします。さあ、早く」

「え? あ、ああ…」

言われるがままに、夕弦の寝ているベッドに寄ると腕を広げている夕弦を、正面から力を入れずに抱きしめる。それを十香、美九は照れつつも目を逸らさずに見ている。しかし、耶具矢だけは顔を真っ赤にし、あわわわ…と身体を震わせていた。自分の半身とも言える夕弦のあまりに大胆な行動に動揺しているのだろう。

「恍惚。蓮に包まれていると不思議と落ち着きます。こんな身体にした責任を取ってください」

「…変な言い方しなくても大丈夫だ。お前は十分大人だよ」

そこから数秒は平和な時間が続いたのだが、蓮はある異変に気づく。身体のことを考え、優しく抱きしめていた夕弦が逆に蓮の身体を強く抱きしめてきたのだ。それにより、夕弦の豊満な胸が蓮の身体に押し付けられて形を変える。挙げ句の果てに、蓮の首筋の匂いを嗅ぎ、舌を這わせきた。

「おい。何してんだ」

「溜息。土道ならこれでイチコロなのですが、さすが蓮です。これぐらいでは息も乱しませんか…」

残念そうな夕弦の声を聞いた後、蓮はゆっくり彼女から離れる。その行動にまったく呆れていると、内心穏やかで無い耶具矢を見た夕弦は、嘲笑のようなものを浮かべる。

「提案。耶具矢も蓮に抱きしめられたらどうですか? とても良い気分になりますよ」

「なっ!? なななな、何言ってるのよ! おかしいんじゃないの!？」

「否定。おかしくなんてありません。これは耶具矢にも与えられた権

利だと思えます」

動揺する耶具矢に、夕弦は平然と返す。その当たり前だと言わんばかりの反応に、喉をゴクリと動かした。

「ほ…本当に私、していいの…?」

「首肯。蓮も士道と同じ、耶具矢と夕弦の共有財産となる人間です。夕弦がした事、された事は当然、耶具矢にもされる権利があります」まるで洗脳のように語る夕弦の言葉を、耶具矢はふむふむと聞き入っていた。それに口を挟もうとは思わない、たとえ抱擁を拒否されようと本人達の意思だと考えているからだ。夕弦の説得(?)を聞いた耶具矢は、数秒考え込むと、夕弦と同じように両腕を広げた。

「よ、良からう…。蓮、お主を我が腕の中に包まれる許可をやるわ…!」だ、だが、わ、我が力に魅了さ、される事が覚悟出来てるの、のであればな!!」

耶具矢は、少しでも威厳のようなものを出したかったのかも知れないが、言葉をつつかえているのに加え、本人が心配になるほどの動揺ぶりだった。そんな耶具矢に苦笑いを浮かべた蓮は、ガシツと彼女を正面から抱きしめる。

その瞬間、耶具矢の口から小さく『きやつ!!』という可愛らしい声が出た。それを聞かなかった振りをする。だが、抱きしめて数秒後、蓮を抱きしめる耶具矢の腕の力が、夕弦の時のように急に強くなり、耶具矢の身体に押し付けられた。

「耶具矢…、無理しなくてもいいぞ。そんな風にしても胸の大きさは誤魔化ないし、ただ苦しいだけ…」

「は、はあ!?!無理してないし!別に夕弦のを意識している訳でも、ひいん!!」

胸を強調するように身体を押し付けていた耶具矢は、そんな声と共に蓮の身体を離すと、自分の腹部を抑えて身悶えた。その目の端には涙が浮かんでいる。身体に無理な力を入れたせいで、傷が響いたのだろう。

なんとも締まらない、耶具矢らしいところだ。無理した耶具矢の頭を撫でつつ、蓮は美九に顔を向ける。美九はニコニコと蓮を見てい

た。

「美九は…止めておく？一応アイドルだし、こういう事をするのは良くないと思うから」

「あーん、私だけお預けなんてひどいですう！ちゃんと皆さんにした事をして下さい！」

断られるかと思っただが、意外にも美九はウエルカムとばかりに催促し、腕を広げる。蓮は本人が良いならと思いい、抱きしめる。その行動に美九は満足気だ。

「ふふふ、蓮さんのお肌って、シミや日焼けもなくて本当に綺麗ですねえ。私が吸血鬼だったら、首筋にカプツとしちやいそうですう」

「おお、怖い怖い」

美九のダイナマイトボディが身体に直当たりするが、慌てる事なく平然と対処する。数秒の抱擁後、蓮は美九から解放されフツと息をつく。これで全員と抱擁を交わした事になる。なるのだが、ここである事に気付いた。

「むむむ…」

最初に抱きしめたはずの十香が、何故か不満気な様子で蓮を見ていたのだ。

「ええつと、十香、どうしたんだ？」

「…レンは、私にだけしてくれろと思っただ事を、美九や耶具矢達にもするのだな…」

そうとだけ言うと、顔をプイッと背けてしまう。そんな反応の十香を見た蓮、耶具矢、夕弦、美九は互いに顔を見合わせる。そして、理解した、十香が嫉妬しているのだと。

それを理解した耶具矢達三人は、小さく笑うと、耶具矢は十香を指差し、夕弦はガシツと抱きしめるようなジェスチャーをとった。最後に美九は幸せそうに自分の両頬に手を当て、身をよじる。

その行動を見て、蓮は肩を竦める反応をみると、顔を背けている十香に近づき、不意打ちに抱きしめた。その行動に十香はビクツと身体を震わせ、緊張した表情となった。

「そうだったな、じゃあ十香には特別に二回で…」

「いや、違うぞー！私は、その…そのような意味で言ったんでは…」

そんな拒否するような反応をして顔を伏せる十香だったが、言葉には隠しきれない歓喜のようなものがあり、俯いている顔の口元は緩んでいた。それに十香自身が気付いているのかは分からない。

「思えば、十香が俺の中の始めだったな。十香が居てくれたおかげで、今までの自分から変わる事ができたのかも知れない」

「むう？何を言っているのだ、変えてくれたのはレンとシドーではないか。私は何もしてないぞ…」

妙な事を言うなどばかりの反応に、蓮は『そうだったけ？』と返し笑う。いつからだろう、こんなにも臆病になったのは。最初から何もなければ、失う悲しみも無い、そんな考えで自分の事を誰にも知ってもらおうとせず、他者の事も知ろうとしなかった。

そんな停滞状態の自分を変えてくれたのは十香や士道達だった。やがて、それらが言葉に出来ない大切なものになると同時に、失うのが怖くなった。

「その…無理はするのではないぞ？レンが何かに耐えている姿を見ると…何故か私も辛くなるのだ。だから…何かあったら言えばいい、うん！それがいいのだ」

「ああ…十香…」

十香らしい不器用な言葉を、照れながら言うその姿。それを見た瞬間、蓮の心に慈しみの思いが生まれ、怪我のことも忘れて十香を抱きしめる。目の前にいる一人の少女、十香を守るためだったら何だつてする決意が湧き立つ。エレンやウエストコットに対する恐怖もその前には無かった。

「十香達は絶対に守ってやる…、俺が…どんな代償を払ってでも…必ず…。だから、安心していい…」

「レン…レン…」

二人が抱きしめ合うその光景に、耶具矢、夕弦、美九の視線は釘付けになり、言葉も発する事が出来ない。男と女の心が一つになったと表現するその光景に、自分は異物だと感じ、それを見守るべきだと理解した。ただ、誰かが鳴らした喉の音、それが自分たちのこの場での

存在アピールなのだろう。

「十香…十香…」

「レン…レン…」

二人は熱に浮かされたように互いの名前を呟き、顔を見つめ合う。そして、蓮が十香の頬に手を添え、動かないように固定すると自分の顔を十香の顔に近づけていく。その行為の意味は分かりきっている。

それを見た十香は、目を閉じ、美しい唇を前に突き出す。それが十香の意思だった。蓮の顔が十香に近づけていく途中、室内は沈黙が支配していた。もしかしたら、皆が呼吸まで止めていたのかもしれないほどだ。

数秒が何時間にも感じる空間で、二つの唇が一つになる。だが、その時、部屋のドアを開ける音が雰囲気崩した。

『…ツ!?!』

部屋にいた一同がその方向に注目する。そこには右腕でペットボトルを抱え、左手につけたパペット『よしのん』の口でドアノブを掴んでいる四糸乃がいた。その顔は真っ赤に染まり、ワナワナと震えている。

「あの…その…わ、私…何も見てませんので…」

蚊の鳴くような声でそう言うと、羞恥のあまり目の端に涙を浮かべながらどこかへと走って行ってしまふ。それを見て、我に返った五人、そのうち、自由に走れる蓮が、素早く四糸乃の後を追う。この後の十香にどう接すれば良いか悩むところだが、誤解とも言えないあの状況をどう説明すれば良いか悩むところだ。

(だけど…嘘じゃない。本当だからな、十香。この気持ちも…)

夜の病院内の廊下を走り、四糸乃の後を追う。蓮が四糸乃の肩に手を置いたのは数秒後の事だった。

66話

「はあ、生き返るーちょうどカフェインが欲しかったんだよ」

椅子に座りながら、土道が買ってきたコーヒーをグビグビと中毒者のように飲み干した蓮は、元気な声でそう言った。それを聞いた土道は缶コーヒー一気飲みという荒技に引き気味に笑い返す。土道と蓮以外も、それぞれが買ってもらったペットボトルを手に持ち、ホッと一息ついている。

飲み物を飲んで、ある程度落ち着いた頃、蓮は真剣な表情となり口を開く。

「土道、司令官殿とは…ヘフラクシナスには折紙の事は伝えたか？お前も見ただろう、あいつがどうなったのか」

「いや…それが、さつきから何回も連絡してるんだが、出なくて…。なあ、教えてくれ、折紙に…一体何があったんだ？」

土道は緊張が帯びた声で折紙と戦った五人に質問する。それに五人は難しげな顔を作った。

「いや、詳しい事は分からぬのだ。一度あやつを吹き飛ばしたのだが…戻ってきた時にはああなっていた」

「折紙からは、凄まじい力を感じ取ったな。一体、何があったのか、我には予想がつかぬ…」

「首肯。とてつもない威圧感でした。夕弦達が生きているのは霊力が完全だった十香と、自分の身を削って庇ってくれた蓮のおかげです」
「…うーん、私は見てないんですけど、もしかしたら、折紙さんも神様に出会ったんですかねー」

分からないと口々に言う十香、耶具矢、夕弦。しかし、何か思い当たるように顎に指を当てながら美九が言った『神様』という単語に蓮は耳を動かす。それは土道の義妹である琴里と美九を精霊に変えた〈フアントム〉と呼んでいる存在だった。人間だった折紙が、精霊となった事に、その存在が思い当たるのは当然だろう。

「…誰よりも精霊を恨んでいた奴を、精霊にする…。〈フアントム〉も何を考えてそんな事をしたんだか…」

「…ッ！もしかして、蓮は見たのか!? <フアントム>を!？」

小さく呟いたその言葉に、土道は驚きと期待が入り混じったような声を上げるが蓮は無情にも首を横に振る。

「期待に応えられなくて悪いが、その時、多分俺は気を失ってたと思う。次見た時は折紙は精霊になっていた」

「そ、そうか…」

その言葉を聞いて、土道は隠しきれない落胆の色を浮かべた。蓮の方も話せるものなら話してやりたいと思うのだが、残念ながらそれは叶わない。

今、折紙はどこで何をしているのか、蓮はそれが無性に気になった。全く予想できない折紙自身の行動と思考、精霊となった自分を嫌悪して、自傷行為に走ってなければ良いのだが。

そんな心配事を考えていたが、それは誰かが両手に触れた感覚によつて中断される。顔を上げると、目の前にはいつの間にか七罪がおり、自分の膝の上にある両手を握っていた。それ以外にも土道や十香達、六人の視線が自分へと集まっている事に気付く。

「…?どうしたみんな、俺の顔に何かついてるか?」

『……………』

自分へと注目が集まっている理由が分からず、そんな言葉で場を和ませようとするが誰もそれには答ええない。そんな重苦しい場で、言いつらそうに口を開いたのは目の前にいる七罪だった。

「蓮、誤魔化さないで答えて欲しいんだけど…精霊になった折紙と対峙してた…あの、巨大で青い奴はなんなの…?」

七罪が、自分たちの間で禁断となっている質問を蓮にした。

—————

精霊になった折紙と互角以上の力を見せたあの青い魔神。それを見せたのは今回で三度目だった。九月に、反転した十香に瀕死の重傷を負わされた蓮が、蘇生と同時に発現した時が最初になり、二回目は十一月に土道をへバンダースナッチから庇って負傷しその時に現れ、街に落ちてくる人工衛星を破壊した後に消えた。

これらの後は共通して、蓮自身は気を失い、次に目覚めたのはベツ

ドの上となった。目覚めた後は蓮は何も変わらず、いつも通りの様子だったのだが、士道達にはあの魔神が何だったのかという疑問が胸の中に残った。

「私と士道、四糸乃と十香は見たのよ…。だから…正直に言っただけのよ…」

耶具矢と夕弦、美九の名前は出さず、あくまで今回初めてその存在を知ったように七罪は聞く。最初の時こそは士道達に恐怖を与えた存在だったが、二回目は士道達を救った。その為、ただの悪では無いというのは理解していたが、それ以上にその事を聞いて、蓮が変わったり、どこかに消えてしまう事が怖かった。

士道達、目撃者は蓮自身が話してくれるまでこの事は聞かないと皆で約束していたのだが、それは今までとは違う、蓮が明らかなき意識がある状態で士道達に目撃された事により必要なくなった。見たため、気になって本人に聞く。それは当然の流れだろう。

「うーん、何なんだろうな。俺にも分からない」

真剣な七罪の質問に対し、蓮の回答はそんな軽く、投げやりなものだった。それには七罪は勿論、他の者まで呆気にとられた。

「ただ、殺されそうになった瞬間、ここで終われるかって強く思ったら出てたんだ。初めてなのに不思議とどうすれば良いか分かって戦えたけど」

『初めて』その言葉に皆が違和感を感じた。最初はともかく、二回目の時はここにいる全員が魔神の姿を見ていた。なのにも関わらず、それを隠そうとするには明らかなき無理がある。そんな事は蓮が一番分かっているはずだ。

「ほ、本当に…本当に何も知らないの？本当に…？」

「本当だよ…けど、どうしたんだ？まるで見た事があるみたいなのに聞き方だけ…」

「えっ!? いや…知らないなら仕方ないわね…」

あまりに踏み込んだ聞き方に、蓮は疑問の声を上げるが、七罪が慌ててそれを誤魔化す。何も分からないと言った蓮だったが、二つの姿を持つている自分の右腕をまじまじと見つめ、嘲笑なようなものを浮

かべた。

「まあ、色々気になるところはあるけど、あの怪物については、今まで命の危機が何回もあったにも関わらず、腰の重い相棒だなくらいにしか思わないかな」

そんな軽口に、夕弦、美九などがクスリと笑う。その様子からは嘘、偽りは無いと土道は感じた。当然、それは土道から見た感じなのだが、それを信じてやるのが友人としての自分の役目だ。その時、室内にグウ〜という可愛らしい音が響き渡る

音の音源の方に顔を向けると、ベッドに座る十香が恥ずかしそうに顔を赤く染めていた。

「むう…お腹が減ったぞ…」

どうやらそれは、十香の腹の鳴った音らしい。そう言った十香は、何か期待するような目で蓮を見つめてくる。そんな目で見られて、困るのは蓮自身だ。

「えつと…流石に病院が厨房を貸してくれるとは思えないし…。悪い、何も出来ない」

言いづらそうに言ったそれに、十香は分かりやすい落胆を見せた。よく見ると、それを聞いていた他の精霊達、全員が少なからずガツカリした様子だった。どうやら、蓮は無意識に精霊達に餌付けをしてしまっていたらしい。

それを見た土道は、苦笑いを浮かべながら立ち上がる。

「…ったく、仕方ないな。けど、もう遅いしコンビニでゼリーでも買ってくるよ」

それを聞いた蓮以外のメンバーが嬉しそうな声を上げる。それぞれの注文を聞いた土道は今いる病室を出て行く。その瞬間、蓮は肺の中にあつた空気を一気に吐き出すと、ベッドにばたりと寝転んだ。

「蓮、どうしたの!?! やっぱ痛いところか…」

心配性となっている七罪が、不安の声を上げるが、蓮は手のひらを前に出し大丈夫とアピールする。実際、苦痛でベッドに倒れた訳では無いからだ。

「大丈夫…ただ、疲れただけさ。今日一日色々あつてな…」

本当に今日は、肉体的にも精神的にも疲れる一日だった。いや、たくさんの事が起こりすぎたと言わなければならない。だが、これからは今日以上に苦勞する事になると確信出来る。弱音を吐く暇も無いのかもしれない。

それを理解し、身体を起こして立ち上がる。同時に、さつき出て言っただけの土道が病室に戻ってくる。つい先ほど出て言っただけのなのにも加え、その手には何も持っていない。コンビニに行つて帰ってきたという訳では無さそうだ。

「早いお帰りだな。何か問題があったのか？」

「いや、問題ってどうか…。部屋を出た直後、琴里から電話があつてな。なんかヘラタトスクの地下施設への迎えを出すから出発準備を整えておくようにって言われたんだ」

「え？は、はい。分かりました…」

「準備って言っても、ほとんどする事ないけど…」

それを聞いた七罪と四糸乃がせっせと動く。十香達も自力で動けないほどの怪我ではない為、移動で苦勞する事はないだろう。そんな中、蓮は土道に手招きし、部屋の隅へと移動した。その理由は、皆の前では聞けない事を土道に聞く為だ。

「土道、司令官殿は、どうしてヘフラクシナスで回収しに来ないんだ？わざわざ迎えなんかを出して」

その質問を聞いた土道は、さつきまでとは違う、何か言いづらそうな顔を作る。部屋の隅に移動してかつ、小さな声で聞いたのは精霊達の不安を配慮しての行動だった。蓮は、迎えを出すという指示を聞いた時、何か不吉な予感を感じたのだが、土道のその反応でそれは確信へと変わる。

「それが…ヘフラクシナスは修理中らしいんだ…。琴里はDEMにやられたって言った。多分…」

「それをやったのは…あの人のだろうな…。恐らく、折紙の戦いを邪魔しないようにする、露払いだったんだろ」

そこまで言った土道の言葉を繋げたのは蓮だ。ヘフラクシナスを足止めするならまだしも、修理にまで追い込めるDEMの魔術師はウィザード一

人しか思いつかない。それが誰かは名前を言わずとも分かる、本当に面倒な事をしてくれたと舌打ちしたい気分だ。

「とりあえず、琴里達がいる施設になら、十香達の怪我を治せる医療用顕現装置メデイカルリアライザがあるって言ってたし、念のため、蓮もそこで診てもらったらいいんじゃないか？」

「いや、さつきから異常は無いって言ってるけど…」

大丈夫だという事が信じて貰えず、ため息をつくと同時に、窓の外からエンジン音が聞こえ、救急車ではない車が数台病院の側に停まったのが見えた。

「ああ、多分、あれが琴里の言っていた迎えじゃないか」

車を見て、そう言う土道に対し、蓮は夜になり真っ暗となった空を見ていた。見つめる空には黄色の光を放つ満月が浮かび、吸い込まれそうな美しさを醸し出している。

（いつまでも病院にいるわけにもいかないし…一先ず、移動する先があるならそこでいいか…）

折紙の事も琴里と相談したいだ。とりあえず落ち着いて話し合える場所があるならそこに向かおう。そう考え、満月から目を離そうとした、まさにその時。

月に黒いヒビが入り、割れた。

「っ…なんだ…あれ…」

それは比喻でもない、言葉通り、月に一直線のヒビが入り、綺麗に両断した。

「どうなってるんだ！月が…一体何が起きて…！」

すぐに土道もそれに気づき、疑問の声を上げた。それで、蓮だけが見ている幻覚という可能性は消える。

「いや、違う。あれは月に何かが起こったんじゃないかって…何かが月の前に出て遮ってるんだ…」

「遮ってるって…一体何が…」

土道の言葉を否定した蓮だが、そこに何がいるかまでは答えられなかった。そんな事をしている間にも月に入った黒いヒビは広がっていき、夜空を覆い尽くしていく。まるでそれは硝子に衝撃と共に刻

まれた、蜘蛛の巣を彷彿とさせるものだ。

そして、空に広がる闇は、生物のような蠢動をしたと同時に、黒い光線のようなものをまるで雨のように降らす。それは、精霊となった折紙の天使へ絶滅^{メタ}天使^{ロン}の攻撃にも似たものだったが、今の蓮にはそんな事を考える余裕はなかった。

なぜなら、空から降り注いだ闇の奔流が、今いる病室の天井と床を突き破り、下のフロアへと向かって行ったからだ。

「ぐっ…！」

「きやつ!!」

「なっ、なんですかあ!!」

天井を突き破った闇の奔流に加え、病院を大きな地震が襲い、精霊達はパニック状態だ。再び窓の外を見ると、今と同じようなものが絶え間なく降り注ぎ、町の形を変えていく。この地震はもちろん、月を両断し、夜空に広がっていく闇はどう見ても自然災害などではない。

いつそのこと、怠惰で愚かな人間に神が天罰を下したと説明された方が納得できる状況だ。だが、生憎、蓮は神など信じてないし、本当にいたとしたら、その顔に唾を吐きつけてやりたい気持ちでいるのは仕方のない事だろう。

「うわわ！蓮！どうすれば…！」

「とりあえずここは危険だ！みんな!!ここを出るぞ!!」

こんな状況でも全員の耳に入るような大声でそう叫ぶと、右手をへバスターへと変身させ、さつき月を見ていた窓である最寄りの壁を思いつきり殴りつける。すると、まるで爆弾でも爆発したかのような音と共に壁は吹き飛び、人が通るには十分の穴が空いた。

同時に両手に、飛翔する二つの剣、へエカトルへを出現させると、それを力無く放る。それは耶具矢と夕弦の周囲をクルクルと回る。

「わっ!?って、何よこれ!?!」

「疑問。これは一体…！」

「それはパラシュート代わりだ。その状態で飛び降りれば落下スピードを減らして安全に着地出来る。十香は土道連れて飛べ！七罪は

四糸乃と一緒に。美九は俺が連れていく！七罪、出来るか!？」

「え？う、うん。それくらいなら…」

蓮は素早く指示し、それに問題がないか確認する。それを聞いた精霊達はこんな状況だというのにパニック状態を脱し、落ち着きを取り戻していた。

「よし！シドー行くぞ!!」

「え？と、十香!?う、うわああああ!!」

最初に飛び出して行ったのは十香だ。完全の形を保った霊装を纏うと、穴の前にいた土道を掴み飛び降りる。落ちる途中に土道の絶叫が聞こえてきたのは無かった事にしてやる。次に飛び出したのは耶具矢と夕弦の八舞姉妹だった。

「催促。耶具矢、早くしてください。後ろがつかかえています」

「わ、分かっているしっ！ああ、もう！何がどうなってるのよ…」

二人は怪我に響かない程度の速さで走ると、全くの躊躇いを見せず、同時に飛び降りた。さすが風の精霊、高いところは慣れているらしい。次は七罪と四糸乃ペアなのだが…。

「だ、大丈夫!?怖くない!?怖いんなら私の手をしっかり握ってて良いのよ!？」

「私…平気です。七罪と…い、一緒ですから…」

四糸乃のその言葉に、七罪は顔を赤くすると、二人は手を繋ぎ小走り走り出す。その先が脱出のための飛び降り場所であれば、とても微笑ましい光景なのだが、とても残念だ。四糸乃と七罪が飛び降りたのを確認すると、残った蓮は怪我人の美九をお姫様抱っこする。

「さて、俺たちも出るぞ。しっかり掴まってるよ」

「はい。なんだかドキドキしますう」

笑顔でそんな事を言う美九に苦笑いを浮かべると、勢いよく走り出し、真つ暗な外に飛び出す。それと同時に、背後で何かが崩れるような大きな音が聞こえる。二人は重力に従って地面に落ちて行くが、その直前、虚空に現れた巨大な青い手が地面を殴り、スピードを殺した。

無事地面に着地し、美九を立てさせた後、後ろを振り向くとそこには予想通り瓦礫の山へと変貌した病院があった。

「ふふ、まるで映画のワンシーンみたいでしたねー」

マイペースな美九に対し、気が気ではないのは士道だった。崩れた病院に大急ぎで寄ると、両手で山積みとなっている瓦礫を掴み退ける。

「く…みんな、手を貸してくれ！これをどけ…うわっ！」

だが、その言葉は蓮が士道を突き飛ばし、中断させた事によって止まる。地面に倒れた士道は、作業を中断させた事に対する非難の目を向けるが、ついさつきまで自分がいた場所に病院を破壊したものと同じ、闇の光線が着弾したのを見て変わる。

「こんな状況で救助活動は無理だ。それぐらい分かるだろ！」

「で、でも…瓦礫の下敷きになってる人が…」

「俺たちがするべき事は！救助じゃなくてあの元凶を何とかする事だろ!!」

あれを放っておいてはこれからも被害が増え続けるだろう、なら、それを止める必要がある。今、自分たちにしか出来ない事を叫んだ蓮は、破壊を振りまく闇のいる空を指差す。士道は蓮が指差す空を悔しそうに見るが、その顔はある一瞬を境に、呆然とした表情へと変わった。

「折、紙…」

「何だって!?!」

士道が呟いた少女の名。それを聞いた瞬間、蓮も驚愕の顔へと変わり、空を見る。その視線の先には膝を抱え、顔を隠すように蹲った少女が漂っていた。闇を具現化したような霊装を身に包み、地上とは隔絶されたような場所にいるその少女の顔は見えないが、それは間違いなく鳶一 折紙だった。

「な…、あれが鳶一 折紙…なのか？」

「戦慄。マスター折紙と、同一人物とは思えません…」

皆一同に空を見上げ、言葉を失っている。そんな中で最初に行動したのは蓮だった。周囲に黒い光線が降り注ぐ中を堂々と歩くと、士道の腕を強く掴んだ。その痛みに士道は現実を意識が戻される。

「行くぞ士道。こんなところでボーツとしてる余裕はないからな」

「行くって…どこに？」

「どこによって、決まってるだろ。折紙あいつに会いに行くんだ。一緒に来い、お前が必要だ」

その言葉は土道に向かって言った言葉なのだが、それを聞いた十香達までもが土道をジッと見つめる。

「鴛一 折紙に何があつたのかは分からん。だが、あやつを正気に戻せるのはシドーだけだろう…」

「…ああ、そうだな」

土道の返事を聞いた精霊達は、限定霊装を顕現し、身に纏う。そんな中、蓮は耶具矢、夕弦、美九に不安の視線を向ける。まだ怪我也完治してない状態で無理をさせていいのか心配なのだ。そんな蓮の気持ちを感じた三人は、そんな不安を吹き飛ばすように笑った。

「ふっ、心配には及ばぬぞ。こんな怪我で音を上げるほど、我らは軟弱ではない」

「首肯。むしろ、今の八舞は完璧では故に、完璧以上なのです」

「大丈夫ですよー。無理はしませんって」

「そうか…ならいいんだ」

心配の目を向けたものの、今の状況では三人の助けも必要となってくるだろう。そんな矛盾に悩みながら、蓮は小さく笑うと、地面に浮遊していた〈エカトル〉を手元に回収し、自分の周囲に纏わせる。これによって八舞姉妹と同じように空を飛べるようになった。

「ち、地上は…私たちに任せてください…。〈氷結傀儡ザドキエル〉の結界で、少しは防げると思います…」

「わ、私は役に立てないと思うから、四糸乃と一緒に地上で手伝いをしてるわ…。だからその、気をつけて…」

四糸乃も七罪も、心配でたまらないと言った様子だ。そんな二人の頭を撫でた後、蓮は風に包まれ空に浮かぶ。その隣には完全に力を取り戻している十香が〈塵殺公サンダルフォン〉を手に並んでいる。

「よし、夕弦、土道。我らも行くとするか」

「呼応。耶具矢、夕弦の流れと合わせてください」

土道の両脇に立った耶具矢と夕弦が、手をかざすと辺りに風が渦巻

き、土道の身体を浮かび上がらせた。

「俺と十香が前に出る。耶具矢と夕弦はその後ろで土道を守ってくれ」

この場でのキーマンである土道を第一にと言った後、蓮と十香は空に向かって飛んでいく。その後ろを耶具矢、夕弦、土道は前の二人を追い越さない程度のスピードでついて行く。土道は空を飛ぶという慣れない感覚に四苦八苦しただが、何とかついて来ていた。

だが、そんな土道を見れていたのはここまでだった。その理由は空を飛ぶ五人に、大量の光線が向かって来たからだ。量からして、偶然流れてきたものではなく、明らかに狙ってきての攻撃だった。

「やっぱり、このまんますんなりとは行かせてくれないか！」

蓮は自分の左手を横に大きく振る。その腕には水と氷を操る籠手、
〈ウイトリク〉が装備してあり、その瞬間、前方に氷の壁が出現し、光線を防いだ。だが、蓮の顔は苦悶の表情だ。

「く…一撃が重すぎる…」

折紙からの攻撃は、昼間の時と比べ明らかに威力は上がっていた。その証拠に今張ったばかりの壁には早くもヒビが入り、崩れる直前だ。付近に大きな川か、海でもあればもう少し強固な盾をつくれたのだが、環境に發揮出来る力が左右されるのがこの籠手の弱点だった。作ったばかりの氷の壁は、十秒も経たない内に砕け散り、殺意を持った闇の突破を許した。それは真っ直ぐ蓮に向かうのだが、その前に十香が立ち塞がる。

「はあああああ!!」

蓮を庇うように前に出た十香は、手に持った剣を一閃する。その太刀筋をなぞるように斬撃が飛び、砲撃を相殺させた。

「レン！今のうちだ！さっきの奴を頼む！」

「と、十香、悪い！」

十香に礼を言った後、意識を集中させ、先ほど壊された壁と同じようなものを前方に出現させ攻撃を防ぐ。だが、攻撃は壁を容赦無く抉り、削っていった。

(本当に…これで折紙の近くまで行けるのか…?)

蓮はそう思わずにいられなかった。ここから進んでいけば当然、攻撃はもつと激しくなっていくだろう。その場でこの盾はどれだけ持ち堪えるだろうか、恐らく五秒も持つまい。

そんな不安が頭に浮かぶが、状況はさらに最悪の道を辿る事となる。前を見つめる視界の端で、見覚えのある光が迸った。それを視認したと同時に蓮の身体は動く。

「三人ともーそこを離れる!!」

身体の向きを変え、後ろにいる士道達の元へ向かっていく。その途中、空いた右腕に〈ヘッドクイーン〉を出現させ、夕弦のすぐ横に剣を突き出す。同時に〈ヘッドクイーン〉に何かが当たり、その軌道を変える。それは魔術師ウィザードが使うレイザーブレイドだった。

「…良いところを邪魔してくれましたね。やはり、あなたは敵にいると厄介です」

「最強だったら、不意打ちじゃなくて、堂々と来たらどうですかっ!!」
蓮がブレイドを抑えている間に、三人は距離を取り、その位置から夕弦の命を狙った相手を見る。だが、士道は相手が誰か見ずとも理解していた。レイザーブレイドと声に加え、蓮がそんな話し方で会話する相手は限られている。

「エレン…メイザース…!」

急に現れ、蓮と剣をぶつけ合っているのは、白金のC.R.Uユニットを纏ったDEMの魔術師ウィザード、エレン・メイザースだった。こんな状況で奇襲してくるエレンに、士道が何か言おうとするが、それより早く、蓮が口を開く。

「士道…この人は俺が引き受ける!お前は早く折紙の場所に行け!」

十香にはもちろん、士道を守っている耶具矢、夕弦にエレンは危険すぎると判断しての言葉だった。それを聞いた十香、耶具矢、夕弦は互いにコクリと頷くと、折紙に向かっていく。士道もやりきれないような表情をするが、顔を折紙に向ける。

「良いのですか?全員で向かって来なくて。そうすれば私に一矢報いる事が出来るかもしれませんよ」

「…あなたを倒す事は目的じゃない、そこに向かうための障害に過ぎ

ませんからね。余計な人員を割く訳にはいかないでしょう！」

夕弦を助けた時のように再びレイザーブレイドを強く弾くと、後ろに後退し、エレンとの間合いを作る。そして、仕切り直しとばかりに右手に持つヘレッドクイーンへの剣先をエレンに向けた。だが、エレンは構えをとる事もせず、蓮をジッと見ている。

「…理解に苦しみます。あなたが私に勝てない事など、誰よりも一番あなた自身が分かっている筈です。なのに何故向かってくるのですか」

そんな事を聞くエレンの言い方は、小馬鹿にするわけでもなく、純粹な疑問を思つての言葉だった。自滅とも言える戦いに何故挑むのか、エレンにはそれが理解出来ない。それに対する蓮の答えはシンプルなものだった。

「だからって、あいつらを見殺しにする訳にはいかないでしょう。十香達の笑顔の為だったら、あなたも社長さんも…」死”すらも怖くない。そう言えます」

あまりに青臭い言葉。それを聞いたエレンは、気に入らないとばかりに目を細める。予想はしていたが、やはり共感出来る回答ではなかったらしい。

「…堕ちたものですね。全てを合理的に考え効率的に行動していた機械マシーンのような昔のあなたを、私はとても気に入っていたのですが、今は見る影もありません」

「どうぞ、好きなように思うがいいですよ。もしかしたら、この気持ち”愛”や”恋”って奴なのかもしれませんね。まあ、あなたには一生理解出来ない感情かもしれないませんが」

ようやく芽生えて来た人間らしい感情を否定したエレンに、嫌味を込めてそう言つてやる。これに怒つたエレンが向かってくるかと思つたが、意外にもその場から動くどころか、未だ剣すら構えない。ただ、その顔は目を見開き、耐え難い怒りを溜め込んでいる雰囲気を放っている。

「愛、ですか、忌々しいものです。昔にそのような事をぬかし、我々の誓いに背を向けた裏切り者がいましたね」

「裏切り者？…誰ですか、それ？」

ただならぬ様子のエレンの様子が気になり、そう質問する。だが、エレンはそれに答える事なく、目の前から姿を消していた。

「それは、あなたが知る必要のない事です」

背後から聞こえたエレンの声。瞬間、右手に持ったヘレッドクイーンを背中に背負うように背後に回す、すると、剣から何か重い感覚が伝わってきた。恐らくエレンのブレイドを受け止めたものだろう。（不味い…後ろを突かれた！）

背後に回られては勝負にならない、剣で受け止めたブレイドを振り払うとその隙にエレンのいる背後に振り向く。だが、同時に素早い剣筋が飛んで来て、右手に持ったヘレッドクイーンを弾き飛ばす。剣は、瓦礫だらけの地上に落ちていく。

剣が消えたのを確認したエレンは、籠手を装備した蓮の腕をなぞるようにして、ブレイドを首筋に向かわせた。今、蓮の右手には何も握られてなく、防御出来るであろう左腕のすぐ上を這うようにすれば防げないと考えたのだ。

しかし、その考えは、籠手の装備された腕から垂直になるように飛び出して来た、二枚の鉤爪にブレイドが止められる事により否定された。思わぬものの登場に警戒したエレンは、スラスターを吹かし、後ろに退く。

「まだ、そんなものを隠し持っていたのですか。往生際が悪いですね」「はあ…はあ…。まだ終われない…」

籠手から飛び出した鉤爪は、カチツという音と共に手の方に倒れ、手首部から飛び出すようにスライドした。何とか危機を脱する事に成功したが、それはこの場しのぎにしかならない。ここでの対決は蓮が不利な環境だからだ。

エレンは熟練された随意領域操作^{テリトリー}で、装備のスラスターを思考と同時に動かす事ができるのに対し、蓮は自分の周囲にいる（エカトル）に自分の移動を命令し、実行させるのにどうしてもラグがある。たった数秒の時間差なのだが、エレンとの戦いにおいて、それは致命的な一瞬になりかねない。

「さあ、どうしました？このまま嬲られ続けるつもりですか」

「チツ：そんな趣味ありませんよ！」

そうは言っても、多方向から素早い斬撃を仕掛けてくるエレンに、蓮は守りに徹することしか出来ない。やはりこのままでは不味い、一旦距離を…、そう考えて、〈エカトル〉の操作に思考を割いたその時。

蓮のすぐ上にエレンが現れ、頭部に向けて随意領域テリトリで強化したであろう蹴りを放つ。直撃すれば気を失いかねない危険な一撃だ、だが、この場を動けず避ける余裕もない蓮は、左腕を腕に出して防御した。

「ぐうああ!!」

腕で蹴りを防いだ瞬間、籠手はバラバラに碎け散り、蓮は地上に叩き落とされた。蹴りの威力自体は何とかなったがその勢いは殺せなく、それに吹き飛ばされた蓮は、建物の倒壊後であろう瓦礫に突っ込み、砂埃の中に姿を消した。

蓮を隠していた砂埃は、数十秒後に消えたが、その後の景色を見てエレンは眉を顰める。何故なら、叩き落とした筈の蓮の姿がどこにも見当たらなかったからだ。

67話

「ふう…助かったよ狂三。お前がいなきや、あのまま追撃されて終わってたと思う」

「ふふ、お礼は結構ですわ。わたくしは蓮さんを影の中に隠しただけですのよ」

折紙が生み出した闇とは違う闇が支配する空間。息をつく蓮の前には一人の少女が優雅に微笑んでいた。黒と赤のドレスを纏い、左右不均等に結われた髪と、時計の文字盤が刻まれた左目が特徴的な美しい少女だ。

彼女の名前は時崎 狂三。十香達と同じ精霊であり、蓮が十香達とは違った愛情を抱く少女である。

「それにしても…本日の蓮さんは随分と刺激的なお姿ですわね。クスクス、とてもお似合いですわよ」

笑みを浮かべながら狂三はつま先から頭の上までじっくり見る。昼間の折紙との戦闘から変わっていない、ボロボロの制服のため、腹部、脚部、腕部などの肌を露出している格好となっている。知ってか知らずか、狂三も夕弦と同じことを言った事となる。

「…俺だつて好きでこんな格好してるわけじゃないんだ。分かつてると思うけど」

「ああん、そんな目でわたくしを見ないでくださいまし。身体が熱くなつてしまいますわあ」

分かりきつた事を言われ、ジツと責めたような目で見ると、狂三は恍惚とした顔で自分の身体を抱え、身を攀じる。そんなくだらぬ会話をしている間も蓮は自分の手足を動かして異常がないか確認していた。エレンの蹴りを防御した左腕には鈍い痛みが走っているが、骨折はしてないだろう。

「助けてくれたばかりで悪いが外に出してくれ。俺はまだ戦わなくちゃならない」

「あら、折角レディが話し相手を求めているというのに、放置してどこかに行つてしまいますのね…。もしかして、わたくしにはもう飽きて

しまいましたの…」

身を攀じる行為から一変、しおらしく崩れると、『ヨヨヨ…』と自分で言いながら口元に手を当てる。その目からは雫が溢れ、狂三の頬を伝う。男の気を引くであろう、見事な演技だ。だが、それは暗に『自分はこのころ出す気は無い』と言っている事になる。

「…悪いが今は話し相手をしてやれる余裕がない。今度お茶にでも付き合うから今は勘弁してくれ」

狂三に背を向け、周りを見渡す。狂三の影の中には詳しいわけでは無いが、もしかしたらどこかに外に出れる出口があるかも知れない。それを探そうと歩き出した矢先、その足を止める事となった。

その理由は、蓮の背後に狂三が抱きつき、ほぼ強制的に足を止めさせたからだ。

「狂三…？何を…」

背中に女性特有の柔らかさと甘い香りを感じる。そして、狂三が強く自分を抱きしめている事も。それこそ、まるで蓮を逃さないようにするかのよう。

「…今、外はとても危険ですわ。折紙さんはもちろん、あなたも知っているあの方までもが彷徨っている状況。そこに向かおうとするのは勇敢ではなく、無謀と言うのが正しいでしょう…」

狂三の言う通りだ。今、外には最強の魔術師^{ウィザード}、エレンと反転した折紙がいる。命を尽くし、強敵であるエレンを万に一つ倒せたとしても、そんな手負い状態で折紙と戦わなければならない。その勝利がどうしても想像出来なかった。

「そうだな、反論の余地もないよ。でも…だからと言って士道や十香を放っておけない。だから、行くんだ…」

「命を失う事になっても…ですの？」

「いいや、そうなる事はあり得ないな。その確信がある」

見栄やハツタリを感じない、堂々とした言葉。その根拠が何か狂三が聞こうとした瞬間、自分の手が強く握られた。

「だって、狂三がいるからだ。一人で勝てなくても、お前の協力があればあの人はおろか、今の折紙すらも余裕だろ」

(とても狡い人…そんな風に言うだなんて…)

自分の協力を勝手に決めつつ、その力を評価している言い方に狂三は惹かれた。そう言われては絶対に協力したくなる…協力しなければいけないくなる、そんな心の攪りに狂三は蓮の身体を離し、解放する。「…変わりましたわね。前の蓮さんはまさに傍観者でした、自分の損得と気分でしか動かないそよ風のような人。でも、今は自分の事を捨てても、他人の為に動くのですわね…」

「そう…だな、俺もそう思うよ。狂三は前の俺の方が良かったと思うか?」

試すような口振りでそう聞いてみると、背後にいた狂三は歩き出し、蓮の前までやってくる。そして、立っている蓮に自分の身体を押し付け、胸に細い指を這わせた。

「本音を言えば、前のようにわたくしだけを見て欲しいと思いますわ…。きつと前の蓮さんなら、こんな状況でもわたくしと共に過ごし、危機が去った後に動いていたでしょう。ですが、そんな我儘は言ってもらえないらしいですわね…」

顔を伏せ、悲しげに言う狂三に罪悪感が出てくる。『最悪の精霊』だと言われている彼女でも、自分の全てを知る数少ない理解者なのだ。それこそ、出会った直後は警戒していたものの、やがて剣を向けずに話すようになり、今では一晩を過ごした相手ともなった。

そんな彼女に、こんな恩を仇で返すような真似をしていいのか。そう悩んだ矢先、狂三の指が蓮の顔を挟み、強引かつ優しく前に向けた。その先には妖艶な表情の狂三が舌なめずりをして待ち構えている。

「で…すが。こんなわたくしを放置して、新しい精霊さんを家に居座らせる理由を説明してくださいまし。もちろん、わたくしが納得出来るものを」

「えっ…いや…狂三?」

まるでカエルを絞め殺す蛇にも似た表情を浮かべ、逃さないとはかりに強く言う狂三。そんな雰囲気と返答に迷い、顔を逸らし一歩後ろに後ずさる。だが、狂三はその一歩を前に踏み出し前進した。

「フフ…確か、七罪さんとおっしゃいましたか。あの方は何故蓮さん

のお宅に住んでおりますの？十香さんと同じ集合住宅に住まわせても問題はありませんかでしたわよねえ？」

「それはその…怒ってるのか…？」

狂三らしからぬ圧力を感じ、顔を引き攣らせながらそう聞いた。すると、狂三は可愛らしくニコニコと微笑み『いえいえ、そんな事ありませんわよ』と言う。だが、目は全く笑ってなかった。

「蓮さんは、わたくしが心を惹かれるような素晴らしい殿方ですもの。他の女性が恋い焦がれるのは何の不自然な事ではありません。しかし、同居するのは話が変わってきますわねえ…。あろう事か、毎日同じお部屋で就寝なさっているとならば特に…」

「それは、七罪には俺と近いものを感じて…。一緒にいてあげた方がいいかなって思ってます…」

それは嘘偽りない本心だった。自分の姿、性格を隠していた七罪には自分と同じものを感じ、それ故に出来るだけ一緒にいたいように思っていた。それを聞いた狂三は、不満気に口を尖らせる。元が良いだけに、その行動もとても絵になっていた。

「蓮さんがそう考えたのなら、わたくしはこういう言う事は出来ませんわ。あそこは蓮さんのお宅なのですし。しかし、まるでわたくしを忘れたように放置したのは酷いですわ。そのせいでわたくし…欲求不満ですよ…」

最後の言葉は耳元で囁くように言った言葉にだった、続いて唾液のピチャピチャという音が聞こえる。狂三の言動に蓮は、自分の心臓が大きく鼓動するのが聞こえる、だが、それは顔には出さない。ここで動揺しようなら、このまま狂三にペースを持っていかれかねないからだ。

「ああ…七罪さんが居られるせいでわたくしを呼べないというのなら、深夜の寝静まった時間帯にお隣の部屋でわたくしとの情事に励むなんてどうでしょう…。起こさせないように声を咬み殺す蓮さんは、さぞかしわたくしの心を攪るはずですよ。もし、それに満足できなくなったら、すぐ隣で…」

「ストロップ、そこまでだ。それ以上は言わなくて良い」

これ以上続けければ、官能小説へとなりかねない狂三の妄想をやめさせる。それに何やら不完全燃焼気味な様子の狂三だったが、それに従い、言葉を止めると蓮の身体から離れる。

「最近放つたらかして悪かったよ。その謝罪も今回のお礼と一緒にさせてもらうから、今は協力してほしい」

右手を前に差し出し、話を切ると同時に早急に助力を取り付けようとする。この話題を続けるのは時間の無駄と蓮の精神をゴリゴリと削っていく事間違いないだろうからだ。だが、狂三はその手を取ることはしなかった。

「ええ、もちろん協力はさせてもらいますわ。ただ、今の折紙さんに挑むより、根本的な問題解決の手段がある…と申しましたらどうしますか？」

「何だつて…？」

優雅な笑みを浮かべ思わせぶりな様子で言ったその言葉に、蓮は興味を引かれる。それは、もしかしたら悪魔の囁きなのかもしれない、だが、この場での希望の光でもあるものだった。そんな様子の蓮を面白がるかのように狂三は続ける。

「蓮さんも知つての通り、わたくしの天使〈ザフキエル刻々帝〉は時間を操る力がありますわ。その力の中に対象を過去に送り込む、時間遡行の弾がありますの。それを使えば、この現状を覆せるでしょう」

「いわば、タイムスリップの弾か…、それは凄いな。だけど、それがどうして今から抜け出す事になるんだ」

「ああ、そう言えば蓮さんには言っていないでしたわね。少し前、精霊となった折紙さんがわたくしの元に来られましたの。その手には分身体のわたくしを掴んでましたわね」

「なっ!? それ本当か!? 攻撃されたんだったら、遠慮せずに言え! 俺が治すぞ!!」

蓮は慌てた様子で狂三の腕、胸、腹、腰など身体の至る所を触り、負傷箇所がないか確認する。精霊化した折紙の戦闘能力の高さは蓮自身に染みて理解していた、その力が無関係な狂三に向けたのなら一言二言謝つたぐらいで済まされない。狂三が自分で怪我を治せる

ことも忘れて、傷を探し回るが、その手を狂三が掴んで止めた。

「もうっ！そんな慌てないでくださいまし。折紙さんは別にわたくしと戦いに来たのではないと仰ってましたわ。ただ、誰にも言っていないはずの時間遡行の弾、それを自分に撃て、そう申しましたの」

「あいつがそんな事を…、それで、いつに戻りたいって言ったんだ…？狂三は…それを了承したのか？」

「ええ、わたくしも使ったことのないその実験体という事で、折紙さんに撃って差し上げましたわ。そして、戻ったのは五年前。自分のご両親を手にかけて精霊さんを殺し、無かつたことにすると申してしましたわね」

過去の改変。それを聞いた瞬間、蓮は自分の身体が震えたのを感じた。それはまさに神の領域、いや、その神ですら許されない行為かもしれない。一度流れた時を巻き戻し、未来を変えろという行動に折紙は走った。その事実には恐怖したのだ。

「折紙さんがああなつてしまったのは、わたくしが戻した五年前で何があつた…、何か知ってはいけない真実に触れたのが理由でしょう」

「…つまり、折紙が戻った五年前にああなる原因があつたってことだよな。それって…こうなつたのはお前が理由って事か…」

引きつった笑みを浮かべた蓮は、物知り顔で説明していた狂三の左右の頬を両手で摘み引つ張る。それによって狂三の整った顔と綺麗な頬が横に広がった。

元々は狂三が折紙を過去に送り込まなければ、今のように街が破壊される事は無かつた。当然、狂三もこうなるとはいえ思わなかつたんだろうが、それで許せるほど今の蓮には余裕がないのだ。

「たら、確らかに、仰るとおりですわ。ですが、わたくしはただ折紙さんの願望を叶えただけであつて、わたくしはただおりらみさんの願望を叶えただけであつて…」

「その願望を叶えた結果がこれか…？」

ある意味こうなつた元凶の頬を引つ張るが、数秒後、ため息と共に指を離して解放する。狂三は引つ張られた頬を涙目とともに摩っていた、指の間から見える頬は少し赤い。

「うう…乙女の肌を傷物にされてしまいましたわ…これはもう…」

「自業自得だ。それで、五年前に起きた事を知って、解決すべきだと？」

「その通りですわ。つい先ほど士道さんを過去に戻った折紙さんが現れる少し前の時間帯に飛ばしましたの。蓮さんもあちら側で士道さんと合流し、手を貸して差し上げてくださいまし」

「…もう士道を原因究明に向かわせたのか。仕事が早いな」

誰にも知られてはならないスニーキングでの行動だというのに、もう問題の解決に重要人物である士道をおかわせた行動の早さに、賞賛の言葉が出てくる。とりあえず、狂三からこれからするべき事を聞き、理解したとばかりに蓮は両手を広げる。

「オーケー、分かった。早速その時間遡行の弾を俺に撃つてくれ。早く士道を助けに行つてやりたい」

それを聞いた狂三は、スカートの裾を掴み、優雅にお辞儀すると背後に巨大な時計の文字盤を出現させる。それが出現した瞬間、蓮の身体がそれと引き合うような奇妙な感覚を感じる。〈ザフキエル刻々帝〉、狂三の持つ時間を操る天使だ。

その時計にセットされていた短針と長針…の役目を果たしている二挺の歩兵銃のうち片方が時計から外れて狂三の手に収まった。だが、その銃口を蓮に向けず、まるで見せびらかすようにクルクルと細い指で回す。

「はあ…次は何だ？何をすればいい？」

何かあるんならさっさと見えと見えとばかりにストレートに聞く。いい加減、回り道も飽きてきたところだ。それを聞いた狂三はペロリと唇を舐める。

「ふふ…わたくしも蓮さんを過去に向かわせたいのは山々なのですけど、それには大きな問題がありますの」

「問題？なんだそれ？」

「この時間遡行の力…〈ザフキエル刻々帝〉…」ユッド・ペート「二の弾」にはまだ弾丸が装填されてませんの」

その言葉の意味は直感的に理解出来た。蓮らしく言う『刃の無い

柄』、それでは剣としての意味を成さないのと同じく、弾丸の無い拳銃は”何も出来ない”と言う事を。

「一二の弾」はとも消費靈力の大きい弾なのですわ。それこそ、外部からの靈力供給が必須と言っているほどに。さて、わたくしはどうすればよろしいのでしょうか…」

顔に手を当て、悩んだような声と仕草をする狂三だったが、蓮はその狙いは何かもう分かりきっていた。悩むような振りをして、チラチラと自分を見ているのがその証拠だろう。

「分かった、そのエネルギーは俺が払うよ。やり方はアレでいいんだよな?」

確認するように聞いたそれに、狂三は自分の持っていた短銃に軽くキスする事で答えた。どうやら正解らしい。イエスと言った蓮に狂三は両手を後ろに回すと、目を瞑り唇を前に差し出す。その姿は蓮が息を呑むほどに美しい。

(落ち着け…今は見てる場合じゃないんだ…)

ずっと見ていた誘惑を、首を振って断ち切ると、狂三の綺麗な顔を両手で掴み、その唇に自分のを合わせる。口に暖かいものを感じると同時に、蓮の意志とは関係なく、勝手に「バスター」が右手に顕現すると、青い輝きを放ち闇の空間を照らす。

それはまるで、狂三へと送られる力の鼓動のようだった。

「はああ…」

「ぶはああ…」

数十秒の長いキスを終え、口を離れた瞬間、二人は色っぽい息を吐き出す。瞬間、狂三の右腕に蓮とは違う赤と黒の光を発する「バスター」が現れ、力が無事に渡った事を伝える。

「はああああ…このまま感じる暖かさに心と身体を沈めたいですわあ…。やはり、このまま二人で…」

「狂三…いいから早く俺を過去に飛ばしてくれ!!」

また話が脱線する予感がし、夢心地の狂三の目を覚ますように名前を叫ぶ。すると、ビクツと身体を震わせ我に返った狂三は、気恥ずかしそうにゴホンと咳払いをした。

「で、では、始めますわよ。〈刻々帝〉——【一二の弾】」

狂三が変貌した右手で銃を掲げると、〈刻々帝〉の文字盤にあるX I Iから濃密な影が飛び出し、銃口に収まる。それと同じタイミングで狂三の〈バスター〉も一層強い輝きを放ち、エネルギーを消費しているのを見せていた。

「まず、あちら側に着いたら土道さんと合流してくださいまし。その後の指示は追って伝えますわ」

「追って伝えるって、どうやってだよ」

「まあ、それはすぐに分かりますわ。行つてのお楽しみと思つてくださいまし」

可愛らしくウインクすると、狂三は右手に持った短銃の引き金を引く。銃口から放たれた弾丸は真つ直ぐ蓮の胸に向かっていき、当たった瞬間、弾丸の回転に巻き込むように身体を歪ませる。そして、その歪みは蓮の身体全体に広がり、空間から消し去った。

「ふう…この力もだいたい身体に馴染んできましたわね…」

〈バスター〉となった自分の右腕を撫でてのその言葉は、狂三だけの空間となった影の中に響き渡ったが、それは他の人間の耳に入る事なく闇に飲み込まれて消えた。

自分の身体とその周囲に暖かいものを感じる、同時にミンミンという昆虫の鳴き声も。つい昼寝でもしたくなるが、するには騒がしい環境であるし、周りの温度は暖かいと言うより、暑いと言う方が正しい事に気づき、閉じていた瞼を開ける。

「ここが…狂三の言っていた五年前の天宮市か…」

目を開いて蓮は自分が今、大きな交差点にある植木に持たれて寝ていた事に気付く。今いる現在地は分からない、確か前に土道が五年前に起きた大火災で街の形が大きく変わったと言っていた気がする。もしかしたら、そうなる前の天宮市の形なのかも知れない。

「とりあえず、同じように過去に戻った折紙と土道を見つけるのが先か…?」

狂三の力で過去に戻り、変貌して現代に現れた折紙と、その原因を見つげに来た土道のどちらかを探すのを決めて立ち上がるが、周囲を見渡していると、交差点を歩く人々の視線が自分に集中している事に気付く。

「えっ?何あの人…」

「夏だからって流石にあの格好はちよつと…」

「もしかして、何が事件に巻き込まれたんじゃあ…。警察に連絡した方が…」

注目している人間が大勢だが、なかには蓮を見てヒソヒソと何かを小言で話している人間も少数いる。それは自分の今の姿を見下ろして納得した。

「ああ、そう言えば格好はそのまんまだったな…」

自傷気味に笑い、一人で納得出来た。蓮の今の服装は狂三にからかわれた時と変わらない、ボロボロの制服姿だったのだ。これをファッションと言い張るのには明らかな無理があるし、見ている人間も変人にしか見えないだろう。

「目立つのは不味いな。とりあえず目立たない服装にならないと…」

自分を見る目から、逃げるように今いる場所から走り出し、人気の

ない暗い裏路地に入り込む。そして、自分を見ている人物がいらないのを確認した後、意識を集中させる。瞬間、蓮の耳元にキラリと緑色の光が発されたかと思うと、身に纏っていた制服が全く別の私服へと変わる。

「初めてだったけど、上手く出来たな。…もつと早くこうすればよかったんだな」

変身能力を持つ〈ヘクリームル〉を使い、見た目を変えさせた制服を見て、小さな満足感と後悔が出てくる。見た目は別物でもその正体はボロボロの制服のままなので、能力を解除してしまえば元に戻ってしまう。その為、制服を直すというより、注目される事なく移動するための処置と言う方が合っているかも知れない。

「さて、折紙の家はどうやって探すか…」

折紙が過去に來た目的である両親の救済、その目的を知っているであろう土道もそこに向かっているはずだ。その救うべき相手である二人は、この頃に住んでいた家に行けば会えるだろうが、残念な事に蓮は折紙が小さい頃に住んでいた家の住所などは知らない。

(地道に聞き込みで調べるか…)

今はのんびりしている余裕は無いだろうと何となく感じているが、そうする以外に調べる方法がない。出来るだけ早く見つかる事を願って住宅街に向かおうと裏路地から足を踏み出した瞬間、飛び出して来た何かに当たり、よろめいた。

「うわっ!!」

「うおっ！何だ…?」

蓮はよろめくだけで済んだが、ぶつかった相手はそんな声と共に尻餅をついたらしい。身体に感じた衝撃から考えると、相手は走って、そして年齢は蓮より下の男だろう。声を聞けば分かる。

「す、すみません。前を見てなくて…」

「いや、こっちもこんなところからで…て…」

地面を踏みしめた後、ぶつかった相手を見た蓮は言葉を失った。目の前で尻餅をついていたのは青髪と幼きながら中性的な容姿の男の子だった。手には鞆を持っており、倒れている状況にも関わらず、大

事そうに握っていた。その少年は…

「し…どう…？」

蓮の知っている姿より、身長が小さく、幼い顔つきをしているが間違いない。これから五年後に精霊を救うための戦いを共にくり抜ける友人、五河 士道だった。

「あの…すみません。俺の不注意でぶつかったのに、飲み物をご馳走になって…」

「別に気にしないでいいよ。俺も考え事してて前見てなかったし」

裏路地出口から場所は変わって近くの公園。そのベンチに座りながら、蓮は缶コーヒー、士道はジュースを手に持って話していた。ぶつかった後、蓮が『ぶつかった詫びがしたい』と言って移動したのだ。二人以外にも公園には主婦や子供がおり、大いに賑わっている。「しかし、お前みたいな小さな子供がそんな鞆を持って、走るなんて塾や習い事にでも向かったのか？最近の子供は忙しいんだな」

「えっ？いや、俺、妹への誕生日プレゼントを買った帰りだったんですよ。妹と言っても血は繋がってないけど…」

嬉しそうに士道が語ったそれを聞いて、琴里が精霊エイフリートンとなった日、士道がプレゼントを買いに行ったのを思い出す。そのプレゼントが琴里のつけている黒いリボンだということも。

「へえ…、その妹さんが大切なんだな。誕生日プレゼントを買いに来るなんて」

「はい！二つ下の奴なんですけど、家にいるときも『お兄ちゃん、お兄ちゃん』って甘えに来る可愛い妹でして…」

楽しそうにシスコンぶりを語り出す士道だが、まさか、そんな風に可愛がっている琴里が自分の黒歴史を容赦無くえぐり出す強気のスーパーDな女へと成長するなど思いもしないだろう。ここまで来ると哀れみすら感じさせる。

だが、士道の琴里への愛情は本物だろう。兄弟のいない蓮だが、士道のようにいたとしてもこのように大切に思い、愛す事が出来るか怪しい。五年前の自分と言えば、会社内に引きこもり、必要な時以外外

の出る事はしなかった。当然、誰かへのプレゼントを買った記憶など無い。

「ま、まあ家族を大事に思う事は良いことさ。…俺には出来ない事だし」

「そうですか？でも妹の喜ぶ顔が見たくて、大急ぎで駅に走ってたせいであなたとぶつかってしまっただけですけど…」

「駅…だって？ここは天宮市じゃ無いのか!？」

形相を変えた蓮が聞いたその質問に、土道は戸惑った様子でコクリと頷く。

「は、はい…、天宮市は隣町ですよ。俺もそこに住んでいて帰ろうとしてたんですけど…」

「なんてこった…。なんて間違いを…」

蓮の今いるここは天宮市では無かったらしい。通りで周りの景色にまったく見覚えが無かったはずだ。こうしてはいられない、蓮は手に持った缶コーヒの空き缶を離れたゴミ箱に向かって投げる。綺麗な放物線を描いて、空き缶はゴミ箱の中に入った。

「悪いな、ここでお別れだ。お前と話せて楽しかったよ」

「えっ!?ま、待ってください!」

ベンチから立ち上がった蓮は、そうとだけ言ってこの場を去ろうとするが、土道の声に呼び止められる。

「あの!俺、五河 土道って言います!あなたの名前を教えてくださいませんか!」

「な、名前…?」

名前を聞かれて迷うのが、ジエイクという人間だ。もちろん、蓮という名前を言ってもいいが、相手は土道だ。それでは自分の本当の名前を言ったな意味がない。蓮は少し悩み、こう答えた。

「ここで言わなくても、そのうち分かるさ。じゃあな土道、元気でな」
そうとだけ言うと、蓮は走り出し、曲がり角を曲がり見えなくなってしまう。土道はその後を慌てて追いかける。

「ま、待ってください!それってどういう…」

蓮が消えた曲がり角を見た瞬間、土道は言葉を止めた。なぜならそ

こは見晴らしのいい一直線の道路、なのにも関わらず、人影は一つも無かったからだ。

「ここは天宮市じゃ無かった…。折紙が来るまで間に合うか…」

焦るように言う蓮の目の前には、空を指すビルと青空が見えており、そのビルのてっぺんより上の高度を猛スピードで進んでいた。時間が惜しい蓮は今、タクシーや電車を使う事なく、ヘカトルの風で空に舞い上がり隣の天宮市に向けて飛び進む。当然、この移動方法は人の目に触れる可能性もある。それでもとにかく今は時間が惜しかった。

(まったく…狂三は何をしてるんだか…)

自分を過去に送った少女にそんな恨み言が漏れてしまうのも仕方がないだろう。恐らく、自分がここにいるのは狂三にとっても予想外の事故なはずだ。いや、そもそも狂三がこの時間遡行の力に不慣れなのかもしれない、それでもなければ折紙を実験体として過去に送り込んだりもしないはずだ。

いくつかのビル群を越えると、やがてさつきまでいた町とは違う街並みが見えて来る。空には一時停止を促す信号もなければ、他の飛翔者もないため、スムーズに移動できた事に安堵するが、すぐにそんな気持ちは吹き飛んだ。

目の前に広がる昼間の穏やかなはずの住宅街は、火の海に包まれ、人々の悲鳴とサイレン音が響き渡っていたからだ。それを見下ろした蓮は息を呑む、この炎は確か、琴里が精霊になった時に起こしたものだど記憶している。ならば、いるはずだ、この辺りに…。

「あれは…見つけたぞ、折紙！」

真っ赤な住宅街の空に煌めく白い光。翼の形の光を背中に収束させた折紙が、地上に向かって破壊の光を放っていた。その様子は殺気や憤怒に満ちており同じ空を飛ぶ蓮にすら気づく事なく、何かを追い回すように動いていた。

精霊化し、過去に戻った折紙が追い回しながら攻撃していたもの。それはノイズがかかったように年齢も性別も容姿も分からない『何

か』だった。

「あれが…〈フアントム〉…」

琴里と美九、そして折紙を精霊にした謎の存在。美九の証言ではモザイクがかかったように顔も分からなかったと言っていたが、その言葉の意味をようやく理解できた。確かにそれこそ存在にモザイクでもかかっているような何も分からない相手だ。

「何なんだ、あいつは…」

過去にきた目的である折紙の事も忘れ、蓮の視線は〈フアントム〉へと集中した。〈フアントム〉の事が知りたい、自分の目でその存在を見た時、そんな欲求が蓮の心を満たした、まるで魂が求めているかのような強い興味心が。

一瞬、折紙の前に立ち塞がるなんて事を考えたが、すぐにそんな考えを捨てる。〈フアントム〉はとても気になる存在だが、味方という確証はない。もしかしたら、守ろうと背中を向けた瞬間、後ろから刺しに来るかもしれないのだ。

だが、かと言って折紙の方に参戦するわけにもいかず困っているとその折紙が大きく動いた。動き回る〈フアントム〉を光の檻に閉じ込めると、王冠型に形成した〈絶滅天使^{メタトロン}〉の先端を向け、今までのとは比較にならない極大の光線を放った。

「正気か!?…ここは住宅地なんだぞ！」

大火災の現場とはいえ、まだここから逃げている住民もいるだろう。そんな人間らの存在を忘れたように行った砲撃を見た蓮は、驚愕の表情を浮かべ地面に着地し、〈バスター〉を展開、衝撃に備える。

そして、折紙が砲撃の着弾点を中心に凄まじい衝撃が発生し、それと共に吹き飛ばされたコンクリート片などが〈バスター〉の防壁にぶつかり碎け散る。もし空にいたままだったら、飛んで来たこれらが身体に命中し、大怪我を負っていたかもしれない。

「どうなったんだ…〈フアントム〉は死んだのか…」

あれほどの大火力の攻撃は、蓮だったら手元にある武器の能力をフルに使い、防御しなければ安心出来ないほどの威力だった。それを受けた〈フアントム〉がどうなったのかがただ気になる。しばらく待ち、

衝撃が止むのを見計らった後へ「バスター」の守りを解除し空を見上げる。

そこには空に浮かび、天を仰いでいる折紙がいた。普段無表情の彼女が長年の夢を達成した陶酔感に浸っている無防備な姿。過去に戻るといふ禁忌を犯してまで求めた行為が報われたのだ。

「まさか、これで終わり…なんて事はないよな」

喜びに満ちている折紙に対し、蓮の目は冷やかだった。蓮とて、他人の祝い事や努力を祝福する程度の器量はある、特に過去に戻ってまで達成したとなれば尚更だ。だが、これでは満月の前に現れたあの黒い折紙の原因が分からない。まだ何かある、そう思わずにいられなかった。

その予想は見事に当たった。喜びに打ち震えている折紙だったが、ある方向を見た瞬間、喜びがそのまま恐怖へとすり替わったかのように身体を震わせた。見ている方向は偶然か、ついさつき折紙が砲撃を撃った場所だ。

「なんだ…何があつたんだ？」

まさに天国から地獄、あるいは魔界にでも落ちたかのような様子の変わりように疑問が出てくる。向きが悪いため見えないが、折紙はどんな表情をしているのだろうか。その顔を見れば何が起きたのか察する事が出来るかも知れない。

だが、そんな望みは折紙が空気に溶けるように消えてしまい、叶わずに終わる。へ「ファントム」は死んだのか、折紙は何を見たのか。それを確かめるために蓮は走り出す。

「ッ…あれはまさか…！」

そして、蓮は攻撃の着弾点付近であるものを見つけた。それはまだ幼い少年の背中姿だ。彼と別れた時からまだ一日も経過してない短い時間、だが、同一人物ではないという明らかな確信があつた。自分と折紙以外に鍵を握るもう一人の人物であると。

「どこで何があつたのか、真実を教えてもらおうか…」

合流したら、真っ先に聞くであろう事を呟き、走って接近すると背後からその小さな肩に手を置いた。

69話

〈エデンの園〉

アダムは男、イヴは女。彼らは神が最初に生み出した人間のひとつがいであり、神が作ったエデンの園で不自由なく永遠の命を持って暮らしていた。

主なる神は、楽園のあらゆる果実を二人に許したが、たった一つ、善悪を知る木の実だけは絶対に食べてはならないと言った。しかし、狡賢い蛇に騙されたイヴはその禁断の実を食してしまい、アダムもイヴを真似して実を食べた。すると、お互い裸でいる事が恥ずかしくなり、イチジクの葉で腰を覆い隠したという。

これを知った神は怒り、二人をエデンの園から追放した。これにより永遠の命を失い、その子孫たちは悪魔の誘惑に悩みながら、信仰に励まなくてはならなくなった。

〈イカロスの翼〉

ミノス王の怒りを買ったダイダロスは、息子のイカロスと共に塔に幽閉される。

だが、優れた名工だったダイダロスは鳥の羽を蠟で固め、空を飛んで脱出する事を思いつく。そして、作った羽をイカロスにも付けさせ飛び方を教えた。『飛ぶ時は必ず中空を飛ぶように。低すぎると海のしぶきで羽が重くなり、高すぎると太陽の熱で蠟が溶けてしまう』
そう忠告して二人は飛び立つが、血気盛んなイカロスは、空を飛ぶ嬉しさのあまりその忠告も忘れて空高く飛んでしまう。太陽に近づいた事により、蠟が溶け出し、イカロスは羽を散らしながら海に落ちて死んでしまった。

この二つの物語は、神の言いつけを守らなかった罪人と、身の程を知らない若者の暴走を示す内容だ。だが、もし、神がアダムとイヴを被害者と捉えたなら、イカロスに本当の翼があつたのならこれらの結末を避けられたのか。

そう考える事はあっても結局許さなかったのか。それこそ、この世に実在するかも分からない神のみが知る事だろう。そして、神の怒りの恐ろしさを知ってても、人は禁断の蜜の香りに誘惑され、禁忌を犯してしまう生き物だ、いや、人間で無くともだろう。

自分と比べて、小さすぎる背中に近づき、相手に気付かせるために肩に手を置く。その行動に少年はビクツと身体を震わせると、慌てて背後を振り向く。蓮の姿を見た少年は目を見開き、驚いた表情を作る。

「お前は本物だな!? 身体は小さいが、五年後から全てを知っている士道だな!」

「れ、蓮…? どうして…五年前の天宮市になんでお前が…?」

士道は戸惑った様子を見て、蓮はやはりとばかりに確信する。この姿の士道と別れたのは隣町、そこから全速力で飛んでこの天宮市に来たのだ、なのにも関わらず、ここにいるという事は別人だと考えるしかない。これで一先ず協力者である士道と合流できた。そう安堵する矢先、頭の中に声が響き渡る。

『きん…て…ます…、蓮さん、聞こえていますか?』

頭の中に響き渡る声。それは蓮を過去に送った張本人、狂三のものだった。最初はノイズでもかかったように途切れ途切れのものだったが、やがてはつきり聞こえるようになり、狂三のものだと分かるようになる。蓮は周囲を見渡しその姿を探した。

「狂三!? どこにいるんだ?」

「蓮も狂三の声が聞こえるのか? じゃあ、お前も…」

士道の言動を見ると、どうやら彼にも狂三の言葉が聞こえているらしい。だが、周囲を見渡しても狂三の姿などどこにもない。その事に眉を顰めていると、聞こえて来る狂三の声が反応した。

『ああ、ようやく繋がりましたわね。いくら探してもわたくしの姿はそこにはありませんわよ』

「でも狂三の声が聞こえて来るぞ」

『それは、^{ザフキエル}「九の弾」^{デット}の力ですの。異なる時間軸にいる

人間と意識を繋ぐ事が出来まして、今、蓮さんが見ておられるものも
しつかり見えておりますわ』

【九の弾^{テット}】…でもそんなもの撃ってもらったか？」

記憶にある限り、狂三からもらった弾は時間遡行の力がある
【一二の弾^{ユッド・ベース}】しか撃ってもらってないはずだ。それを聞いた狂三はよ
くぞ聞いてくれたとばかりにクスクスと笑う。

『ふふ、実は蓮さんから【一二の弾^{ユッド・ベース}】を撃つための源を受け取った際、
コッソリと【九の弾^{テット}】の弾を送り込んでおきましたの。ただ、さつき
まで蓮さんの意識が伝わって来なかったため、心配していたのです
が、何処におりましたの？』

「ああ、ついさつきまで天宮市じゃない隣町にいたんだ。幸い、妹思い
な子供に教えてもらったおかげでここに来れたけど。さあ、これはど
ういう事だ？狂三…」

それを聞いた途端、狂三の様子が少なからず動揺したのを感じた。
やはり、蓮が天宮市ではなく、その隣町に現れたのは予想外の事だっ
たらしい。

『そ、そんなはずはありませんわ…わたくしは確かに…、で、ですが、
もしかしたら間違えてしまっていたのかもしれないわね…。手間
を掛けさせてしまい、申し訳ありませんわ』

狂三の謝罪を聞き、まったくとばかりにため息をした後、背の小さ
い土道を顔を見下ろし、見つめる。その目を見て、大切な話をするの
だと察した土道は、汗ばんだ手を握りしめる。

「俺はさつき、折紙を見た。俺らと同じように未来から来て、精霊化し
た状態の折紙だ。あいつがこの時代が消える直前の様子を見たか？
折紙は何を見てあんな震えていた？知っているなら教えてくれ」

「お、折紙は…あれを見たんだ…」

自分より近くで折紙を見ていたであろう土道にそう聞く。すると、
土道は痛ましい表情を浮かべると、震える手である方向を指差す。そ
こには肩口をくすくすぐるぐらいの髪をした小学生くらいの女の子がい
た。

利発そうな顔立ちをしたその少女は身体中黒く汚れ、その場に座り

込み何を考えているのか分からない目で、空を見ている。そして、その前には巨大なクレーターがあり、そこには人間であつたらう『パーツ』、元人間の『部品』が無残に転がっていた。

こんな住宅街に自然にクレーターが出来るわけがない。何より、蓮にはクレーターがある理由に心当たりがあつた。そして理解出来た、折紙が消える間際の様子の原因が、今泣いている少女の正体とその理由が。

「まさか…あれは…。両親を殺した精霊の正体は…」

それを目の前で見たであろう土道に顔を向けると、コクリと頷く。この世界にとつては、常識に逆らつた折紙の行動すら全て計算通りだつたのだ。言い返せない皮肉、宇宙が与えた鳶一 折紙という少女の誕生と、その人生。それが分かつた。

だが、その思考は火災によつて倒れた家の大きな音を聞いて中断させられる。あまりの出来事に忘れていたが、この辺りは火の海と化しており、炎が燃え移つた住宅が崩れている。それは少女が座り込んでいる場所にも発生し、燃えた建材が倒れ込んで来た。

「ヤバイ！逃げ「折紙っ!!」」

蓮が何かするより早く、隣にいた土道が動いた。猛ダツシユで走り出すと、折紙に飛びつき強制的に場所を移動させる、その瞬間、さつきまで折紙がいた場所に建材が倒れ込み、土煙と火花を出した。

「まったく…無茶する奴だ…」

腕を振り、建材が巻き起こした土煙を払いながら蓮は呟く。このままここに居続けるのは危険だ、どうやら土道も同じ考えらしく折紙の手を握りながら燃える建材越しに、どうすればいいかと聞くような視線を送ってくる。

蓮は上空から見た景色を思い出し、まだ火が回つてなかつた方向を指差し、そつちに走れとジェスチャーで伝えた。どうやらそれは正しく伝わつたらしく、土道は頷くと、折紙の手を引っ張り指差した方向に走り出す。

『蓮さん、お二人を追いかけてくださいまし』

「ああ、分かつてるさ」

土道と蓮とを分けていた建材を飛び越し、二人の後を追おうとするがその前に数分前まで折紙の両親であった『もの』に顔を向けた。常人なら嘔吐してしまいそうな光景、蓮はそれに対し目を瞑り、黙禱を行う。数秒後、目を開き、火の回っていない安全な場所へに向かうため、赤く染まった道を駆けていく。

『皮肉なものですわね。折紙さんが長年追い求めていた復讐相手が、過去に戻って来たご自分だなんて』

「俺もそう思うよ。これも全てを作った宇宙が決めた事なのかもしれないな」

『宇宙が…決めた事？』

二人を追いながら言った蓮の一言に、狂三は疑問とばかりに聞き返す。

「禁忌を犯した者の末路は狂三も知ってるだろ？ある者は楽園を追われ、ある者は翼をもがれて地に落ちた。折紙もそれらと同じ、世界か、或いは宇宙が決めた事に逆らい、罰を受けたんだ」

『敢えて、神が決めた事…とは言わないのですのね』

「俺は自分の目で見えたものしか基本信じない。神とやらもこの目で見えるまでは存在しないも同じだ」

そう言い終わった直後、蓮は足を止めた。自分の位置から少し先に土道が泣きじやくる折紙を抱きしめているのが見えたのだ。その邪魔をしないように道の脇まで寄るとそこから二人の姿を見守る。

「しかし…本当にどうして場合によって自分自身なんだろうな。五年間、溜まりに溜まった恨み、悲しみの感情が跳ね返って、折紙はあんなったのか…」

『想いをぶつける相手も無く、ただ後悔だけが残っただけでしたわね。蓮さんはいつそのこと、憎む相手が実在していればあのようになる事も無かったとお思いになりますの？』

「どんな相手だろうと、殺して満足感を得る事が出来れば良いんだ。後悔が残る復讐劇なんて…三流以下さ」

『……………』

吐き捨てるように言ったその言葉に狂三は無言になる。だが、すぐ

に蓮の考えを探るように質問をして来る。

『…蓮さんには、過去に戻ってやり直したい出来事はありますか？または、どうしても確かめたい事はなどが…』

それは人間なら一度は思いつく事だ。結果を知った上でそれをやり直し、より良いものになりたいと考える。だが、蓮は首を横に振ってNOと答えた。

「そりゃあ、今まで俺から離れていったものはたくさんある。だけど、そうなたたには何か理由があるはずだろ、どんな理不尽なものだろうと。なら、追いかけるだけ無駄さ、取り戻そうと掴んだ瞬間、指の間から逃げていくと思うから」

『…とても無欲ですわね。誰もが一度は思い願うもののはずですわ。とはいえ、折紙さんのように叶えられる者はほぼ皆無でしょう』

「そうだな、だから俺には折紙の事を”愚か”だと笑う権利は無いと思う…」

やがて土道に泣き縋っていた折紙は、土道の服から手を離しその場に立ち上がると袖で涙を拭う。その目は真っ赤に充血していたが涙はもう引っ込んでいた。これから一人の少女の復讐が始まる、その瞬間を見て蓮は小さく呟く。

「過去に戻って叶えたい願いも無ければ、戻りたいと考えた事も無い。傍観者であるジェイク・メイザースという存在には…」

立ち上がった折紙は、土道に何かを言った後歩き去った。土道はその背中を追いかける事なく見つめていた。やがてその背中が見えなくなるると土道も立ち上がり、蓮の方に歩いて来る。その表情はとても暗い。

「あいつはお前に何て言ったんだ？その様子じゃない事を言われた訳じゃないようだが」

「折紙は…自分の感情を全て俺に預けるって。絶対に、どんな手を使っても…両親の仇を取るって…」

震える声で語る土道を元気づけるようにその頭をポンポンと優しく叩く。こんな事をして土道が元気になるとは思えなかったが、そうせずにはいられなかった。

「あいつには言ったのか？自分の両親を殺したのは、未来から来た自分自身だつて事を」

小さな少女には、あまりに残酷な真実だが、この場で何よりも重要な事だった。それを知っていればこんな悲劇は防げただろう、その問いに土道は顔を横に振る。

「悪い…言えなかつた…」

「…まあ、そうだよな。言えるわけないよな」

それをもっともな事だ。しかし、これによって皆の知っている世界、さつきまで生きていた世界へと変わった。結局、過去へ戻っても何も変える事が出来なかつた。これからどうするべきか、そう悩んだ時、目の前にいる小さな土道の身体が発光したかと思うと、段々大きく形を変えていき、成長した高校生の土道へと変わった。

「うわっ！…何だ、七罪の天使の力が切れたのか」

「七罪の天使？ああ、〈贗造魔女〉の力で変身してたのか」

土道の言葉を聞いて、さつきまで幼い姿だった理由を理解する。七罪の霊力は蓮が封印したのだが、蓮はその霊力の一部を右腕を介して土道に渡していた。DEMなどの敵や、今後も精霊と出会う事を考えると、手札は少しでも多い方が良いと思つての行動だったのだが、その力を使つたという事はそうせざる得ない状況があつたという事だ。「やっぱり良かったな、霊力を渡しておいて。どうやってその力を使つたんだ？」

土道には、自分のように霊力を自分の扱いやすい武器にして、力を使うという事が出来なかつたはずだ。なのにも関わらずどのようなに使つたのか蓮は興味があつた。そう聞かれ、土道はどう答えたら良いか分からないと言つた表情と呻き声を出す。

「いや、どうしたかつて聞かれてもな…がむしやらにやつたら出来たつて言うか。多分、さつきみたいにもう一度やれつて言われても出来ないと思う」

「ッ!?もう一度…さつきみたい…戻る…」

顔を背け、気恥ずかしそうに言つた土道のその言葉を聞いた瞬間、蓮の頭にある案が浮かんだ。それは、全てが終わり、手詰まりとなつ

ている今の状況から抜け出す事が叶うものだ。だが、その作戦には一つの壁があった、これがダメだったらそれを実行出来ない。

「狂三！狂三！聞こえているか!？」

『ええ、聞こえておりますわ。そのような声を出されてどうなさいましたか?』

「五年前のこの日。狂三はこの付近にいたか？頼むから近くにいたと言ってくれ!」

その質問の内容に狂三だけでなく、土道も眉を顰める。その問いの意味が分からないが、狂三は蓮に聞かれたのなら答えないはずにはいかず、この時の事を思い出して答えた。

『え、ええ、確かその街を訪れていたはずですわ。これほどの火災に精霊さんが関わっていると考えましたからね』

「よし！場所はどこに!？」

『火災現場近くのビルの屋上に…ああ、そういう事ですよ。面白い事を考えますわね、流石蓮さんですわ』

狂三も蓮の考えを理解した様子だ。その口ぶりから、不可能な事ではないという確証も得れた。

「もつと詳しい場所を教えてください！今からそこに向かう!」

そう言って、蓮は土道の腕を掴み走り出す。この場でただ一人何をしようとしているのか分からない土道は、引っ張られながら質問を投げかける。

「向かうって、どこに何をしに行くんだよ!？」

声を上げた土道に、前を走る蓮が顔を向ける。その顔には隠しきれない歓喜、あるいは希望のようなものと共に微笑が浮かんでいた。

「行くんだよ、五年前の狂三の元に。そこでもう一度時間逆行の弾を撃ってもらって、折紙が自分の両親を殺す前まで戻るんだ!」

それは、詰んでいるこの場から脱出出来る、まさに逆転の策だった。

70話

炎が広がり、木を家を人を燃やして行く。なんの前触れもなく起きたこの大きな火災、それが起きた住宅街は、反転した折紙が天宮市を破壊する光景を彷彿とさせるものだった。いや、この地獄の再来が五年後の天宮市で起きたという方が正しいかも知れない。

ここでは誰かを助けようとした誰かすら、皆死んで行くだろう。そして、ここでは蓮が知る限り二人の少女の運命が捻じ曲げられた。一人は五河 琴里。謎の存在へファントムによって精霊という人外の存在へと変貌させられた挙句、そうなった際のこの地獄を作り出してしまふ結果となった。

もう一人は鳶一 折紙。まだ幼かった折紙は、自分の両親を殺した存在への復讐心を抱えながら生き、五年後に精霊へとなった彼女は時を操る力を持つ精霊、時崎 狂三の手を借り、親を殺された今日へ舞い戻ってくる。だが、自分の父と母を殺したのは五年前に戻ってきた自分自身だった。それに絶望した折紙は、世界を滅ぼす厄災へと変わってしまった。

(本当に、なんで……こうなったんだろう……)

目の前に広がる地獄を見て、蓮は無意味と理解しつつもそう思わざる得なかった。二人の少女は、昨日まで誰とも変わらない存在だったはずだ。なのに、今日という一日で一人は人間で無くなり、一人は未来で爆発する復讐^{爆弾}心を胸に背負う結果となった。宇宙はすべての生物に平等の命を与えても、運命は幸福に出来ないのか、ならばどうして命はこの世に生まれ落ちるのか、それが分からない。

『蓮さん！蓮さん！どうしましたの？』

そんな思考も、脳内に響き渡る狂三の声で中断させられる。それを聞いて我に返った蓮は気分を入れ替えるように深呼吸をした。

「悪い、ボーッとしてた」

『しっかりして下さいまし。五年前のわたくしはすぐ後ろのビルの屋上にいたと思いますわ。もう土道さんは先に入ってしまったわ

よ』

後ろを振り向くと、狂三の言う通り目の前にはオレンジ色の光に照らされたビルがそびえ立っていた。ビルと言っても周囲がこんな環境では皆避難し、中には誰一人いないだろう。そうなると、廃ビルと表現するのが正しいのかも知れない。

「土道は階段を上って行ったのか。時間と労力の無駄だな」

狂三の時間遡行の力でこの時代に留まれる時はそう長くない、それにこんなビルの階段を駆け上がって体力を消耗するのはまっぴらだ。

「距離は…大丈夫だな。よし…」

蓮は左手を前に伸ばすと、籠手へウイトリックを出現させる。その手のひらから、パシユツという音と共にアンカーが射出され真っ直ぐ飛んで行く。アンカーの先端は屋上の手すりに引っかけかり、蓮とを結ぶ。

結ばれたアンカーを数回引っ張り、しっかりと固定されているのを確認した後、それを巻き取り自分の身体を地面から離れさせる。階段を上って行くのと比べて圧倒的に早いスピードで屋上に到達すると、アンカーの先端を回収し、空中でクルリと前方に回転した後屋上に着陸した。

「ふう…やっぱり空は良い。人間の性から解放されている気持ちになれる」

鬱陶しく揺れる前髪を掻き上げながら、蓮は前を見つめる。そこには二人の人物が立っていた。

一人は先にビルに入り、屋上に辿り着いたであろう土道だ。突然現れた蓮に、驚きつつも不満ありげな顔でこちらを見ている。だが、土道には悪いが彼には興味は無かった。

重要なのはもう一人、土道に古式の短銃を向けている少女。背丈は知っている姿と比べ大差はないものの、レースとフリルで飾られたモノトーンのブラウスにスカート。髪は括っておらず、少女の綺麗に揺らめいている。

だが、一番目を引いたのは記憶と大差ないその顔だった。人外の美しさを放つその顔の左目には、なぜか医療用の眼帯があった。

(眼帯…？怪我でもしてたのか？)

そんな呑気なことを考える蓮とは反対に、少女は自分の目が信じられないと言った顔で蓮を見つめている。そんな少女は蓮は足を揃え、スカートでも摘んでいるかのように両手を上げると、行儀良く頭を下げる。それはまるで、狂三が挨拶するかのよう。

「お初にお目にかかりますわ。わたくしの名は神代 蓮、またの名をジエイク・メイザース。時崎 狂三さん、本日は貴方様に手を貸していただきたい事があります。ここに参りましたの」

こんな状況でも、蓮は悪ふざけか狂三を真似た喋り方で自己紹介をする。それに反応したのは当然ながら少女だった。

「あ…あなたは…」

放心気味にそう呟くと、土道に向けていた短銃を下ろし、おぼつかない足取りで蓮に歩いて行った。

「あなたは何者ですの？ここにどのような用事？」

息を切らしながら階段を上がった土道を屋上で待っていたのは、姿の違う五年前の狂三だった。そして現在、まだ自分を知らない狂三が短銃を向け警戒の色を示している。それを感じた土道は緊張で固まる。

「いや、その、違うんだ！敵対する気は…」

銃弾を撃ち込まれないように、両手を振ってそう言う土道だが、こんなところまで来た初対面の人間を警戒するなど言っても信じられない訳がないだろう。その予想通り、土道の足元に銃弾が炸裂し、穴を開ける。

「わたくしの許可なく動かないで下さいまし。いくつか質問をしますわ、正直に答えなかった場合、命の保証はしかねますわよ」

それは脅しではない。今の狂三を見ればすぐにわかる事だ。マズイ事になった、今の自分たちの境遇を話して協力を得ようにもタイムリミットがあるのだ、それに加え今の狂三が協力してくれるかも別の問題だ。

(こ、こは…蓮に頼むしかないか…)

この状況では自分が話すより、蓮が話した方が簡潔かつ、狂三を信頼させられる事が出来るかもしれない。そんな希望と共に眼球運動で隣にいるであろう蓮を探すが、その姿を見つけられず愕然とした。

(蓮は…どこにいるんだ…!?)

ビルの前まで一緒に来たのは覚えている。だが、階段からここまでの道のりのどこかではぐれてしまったのか。何にしろ今、自分の近くに蓮は居ない、それを確認した瞬間、土道の手に汗が滲み、背筋がゾクリと震える。そんな様子に狂三は目を細める。

「さつきから挙動不審なご様子ですけど、一体何を探しておられますの?」

「えっ?!いや、大した事じゃ…」

だが、狂三はそんな土道の返答を信じていないらしい。胸元に向けていた銃口を土道の頭へと向けた。

「答えて下さいまし。一体、何を探してますの?」

「ひいいい!!」

答えなければ間違いなく自分の額に風穴が開くことになるだろう。それを感じ取った土道は、最後の希望とばかりに視覚を共有している狂三に語りかける。

「く、狂三、どうすれば…」

『あらあら、昔のわたくしは随分と慎重ですわね。大丈夫ですわよ、土道さん。どんなに慎重であろうと、”あの腕”を見ては有無も言えなくなりませう』

今の土道に対し、狂三の答えはとても落ち着いたものだった。いや、何か楽しみとすら見ている様子すらも感じる。それが何なのか聞こうとした時、屋上に金属同士がぶつかるような音が響き渡る。その数秒後、手すりを飛び越えて誰かが屋上に乱入して来た。

軽い身のこなしで屋上に着地し、揺れる前髪を鬱陶しそうに掻き上げたのは、土道が探していた蓮だった。突然の乱入者に土道だけでなく、狂三の視線も向けられる。

(か、階段を使わないで一気に上がって来たのか…)

いきなりの登場に驚きつつ、今までどこにいたのかという非難を込めた目を蓮に向けるがスルーされる。その反応に、土道は内心ため息をした。

（なんて言うか……こんなに捻くれてるけど、十香達には優しいんだよな……。本当に何でなんだか……）

ここまですぐと最早病気の域だろう。だが、こんな行動をしても根はいい奴だと土道は知っていた。でなければそもそも、こんな所にならないのだから。そんな疑問も蓮が狂三に視線を向けた事で霧のように消えた。

銃を向けている狂三を見た蓮は、何を考えたのかまるでスカートでも摘むような仕草をした後、行儀良く頭を下げた。

「お初にお目にかかりますわ。わたくしの名は神代 蓮、またの名をジエイク・メイザース。時崎 狂三さん、本日は貴方様に手を貸していただきたい事がありましたの」

それは狂三の喋り方を真似た自己紹介だった。それを聞いた土道は、今にも叫びたくなる心情となる。

（この狂三とは初対面なのに！そんな煽るような言い方はマズイだろ!?）

自分たちを知っている未来の狂三だったら、笑って許してくれる（蓮に限って）かもしれないが目の前にいる狂三は土道はもちろん、蓮の事も知らないのだ。見ず知らずの他人に、小馬鹿にするように自分の真似などされたら怒るに決まっている。

だが、土道の予想は裏切られる。狂三は土道に向けていた銃を下げると、まるでその存在すらも忘れたように蓮の姿に釘付けとなった。

「あ……あなたは……」

唯一見える右目に蓮の姿を映したまま、フラフラとおぼつかない足取りで蓮に歩み寄って行く。土道はその姿を固唾を飲んで見守る。蓮も剣こそ構えていないものの、警戒した目で近づいてくる狂三を見ている。そして……

「その腕は……あなたは、あなた……」

狂三は、蓮の目の前まで近づくと、自然な動きで抱きつき、顔を埋

める。その行動に蓮はもちろん土道も目を丸くする。

「ああ…感じますわ。この中に流れる力の存在を…。身を沈めたくなくなる罪深き誘惑を…」

目を細め、熱い息を漏らす狂三に、他の二人は戸惑う。何度も感じた狂三の感覚、女性らしい甘い香りと魅力的な身体。だが、今はそれを味わっている時間も無く、土道もそれをただ眺めている訳にはいかない。

「あの、その…。狂三、話を聞いて欲しいんだ、俺たちは…」

パン!!

そう言いながら狂三に近づいた土道の足元に銃声と共に穴が開く。それは蓮に抱きついていている狂三が放った銃弾が、土道の立っている足元に命中したからだ。ただ、狂三自身は依然と蓮を抱きしめており、右腕だけを伸ばして射撃していた。

「はあ…はあ…、もっと…もっと、わたくしを…感じさせてくださいまし…」

驚く事に狂三自身は放った銃弾や撃った相手である土道の事を、全く気にもしてない様子で息を荒くしている。まるで身体だけが土道に反応し、攻撃したかのような現象。だが、それで土道は歩みも話しかける事も出来なくなった。

それもそうだろう。今のが威嚇と捉えると、次近づいたら、銃弾は頭に飛んでくるに違いない。蓮は動けない土道とアイコンタクトで領くと、自分を抱きしめている狂三の顔を掴み、優しく自分の顔に向かせる。その表情を見た蓮は息を飲んだ。

「ああー…ああ…はあ…」

狂三の目、口が放心気味に開かれており、瞳はどこを見ているのか分からず、口からは意味の分からない言葉と共に涎が唇から流れている。蓮が狂三と出会ったのは間違いなく六月頃のあの雨の日だったはずだ。しかし、狂三は明らかに蓮のことを知っている様子だった。（俺が一体…お前に何をしたんだ…？何が、お前をそこまで狂わせる…）

その事を狂三に聞きたいところだが、今は時間が無い。焦点の定ま

らない狂三の目を見つめ、語りかけた。

「狂三！時崎 狂三！俺の声が聞こえるか!？」

「ふええ…あああ…」

彼女らしく無い気の抜けた返事。それを聞いてダメかと舌打ちする。すると、頭の中に目の前にいる狂三とは違う、別の狂三の声が聞こえてくる。

『手間をかけさせて申し訳ありませんわ。やはり、五年前の未熟なわたくしでは、今の大きな力を持つ蓮さんに飲み込まれてしまいましたわね』

「飲み込まれた？」

『大きな力は小さきものを取り込み、その力を上げる。それだけですわ。仕方がありません、わたくしから言ってみましょう。…聞こえていますの？気をしっかり持ってくださいまし、わたくし』

その声を聞いた狂三の目に、理性が戻り、焦点が定まってくる。数秒後、身体を震わせていたが、大きくビクツと痙攣し正気を取り戻した。

「ああ…この声は、わたくしの…。一体何が…、この感覚は…」

『今、ここにいる蓮さんと土道は、わたくしが未来から過去に送った存在ですわ。どんなに逃すまいと捕まえていてもいずれ消えてしまいますのよ。それより、あなたにはして頂きたい事が…』

狂三は、これまで起きた事を簡潔に説明した。過去を改変しようとして、失敗し、それにもう一度挑むため今の時代の狂三の力を借りたという事を。それを説明してる途中、土道が不安そうな目でこちらを見てくる。

何とか説明は上手く行っているが、それを狂三が受けてくれるかくなれないかは話が別だ。その事を心配しているのだろうが、蓮はそんな土道に大丈夫だとも言おうようにコクリと頷く。それと同時に狂三への説明は完了する。

「なるほど、事情は理解しましたわ。微力ながらお力添えをさせていただきますね」

「…本当に良いのか？大切な弾を、出会ったばかりの俺たちに撃つて

…」

頼んでいる蓮が言うのもあれだが、出会って一時間も経過してないであろう自分と土道に切り札と言えるような時間遡行の弾を使ってくれるとは思えなかった。もし、自分が狂三の立場だったら使いはしないだろう。そんな言葉を聞いて、狂三は妖しく微笑む。

「未来のわたくしからの頼みなんですもの。断る訳にはいきませんわ。それに…、これから先で出会う蓮さんに器量の小さいようなところをお見せ出来ませんし…」

小さく呟いたそれに、蓮はなんとも言えない表情で肩を竦める。こういうところは五年前から相変わらずであるらしい。狂三は数歩下がりがりながら、踵を床に当て、トン、トン、と音を鳴らす。すると、その背後に巨大な文字盤が姿を現す。狂三の持つ、時を操る天使、^{ザフキエル}〈刻々帝〉だ。

「ただ、霊力は蓮さん自身から、徴収させていただきですけど、よろしいですわね?」

「もちろん、最初からそのつもりだったし」

そう言うと、蓮は右腕を狂三に触れさせようと前に歩き出す。だが、蓮が前に一歩進むと狂三は一歩後ろに下がってしまう。

「…?」

「クスクス…」

その行動に眉を顰める蓮に対し、狂三はその反応を楽しんでいるかのような顔だ。試しにもう一度前に一歩進むが、また一歩下がって遠くなる。それを見て、お手上げとばかりに両手を広げた。

「蓮が霊力を渡そうとしてるのに、なんで離れるんだ?分かってると思うが、俺たちにはあまり時間が…」

土道のその意見と全く同じ疑問を蓮も抱えていた。それに、狂三は当たり前だと言わんばかりの言い方で答える。

「どうやら、あなた方はまだすべき事があると察しましたわ。それなのにも関わらず、その霊力の譲渡の仕方は良い判断とは言えませんわね。未来のわたくしから聞いておられるはずですよ、デメリットの無い、力の渡し方を…」

ペロリと唇を舐めた狂三は、今度は自分から蓮に近づいてくる。そして、両手を後ろに組み、目を瞑ると唾液で光る唇を前に突き出す。その姿勢で要求している事など知れている。

「えっと…、俺は後ろを向いているから…」

困ったように頬をポリポリと搔いた土道は、せめてもの配慮とばかりに後ろを向く。蓮も人に見られながらキスをするような性癖は無いが、その心遣いが今は心にくる。だが、狂三の言うことは正しかった。右腕を使つての譲渡は、蓮自身に目に見える疲労を残してしまふ。そんな状態で活動するのはマズイだろう。

そんな誘惑に蓮は左手を伸ばし、狂三の頬を撫でゆっくりと顔を近づけていく。すっかり慣れてしまった狂三とのキス、だが大勢の人を殺めた狂三との行為を、蓮はもはや辞める事も、悪しき事とも捉える事が出来なくなっていた。身体と共に自分の気持ちも大きく変わつていつている、それに対する恐怖すらもない。

蓮と狂三の顔はゆっくりと近づいていく。そして、その唇が一瞬触れ合う、その瞬間。

『ダメですわ!!すぐに離れてくださいまし!!』

頭の中に響いた狂三の声。それによって現実に戻された蓮は、思わず狂三との距離を離してしまう。その声は目の前の狂三にも聞こえていたらしく、不満そうな雰囲気を放っていた。

『それ以上は見てられませんわ。わたくしの目の前で自分以外の女性と唇を交わすなんて!』

「いや、自分以外の女とつて、目の前にいるのも狂三…」

『そ、そうですね!別にわたくしの時のように数年前にまで戻るという訳ではないのですから、そのくらいの霊力は、五年前のわたくしがご自分で出してくださいまし!』

つまるところ、狂三は過去に戻る霊力は蓮からもらうのでは無く、自分から出せと言う。しかし、それを聞いて不満の声を上げるものがあった、当然ながら、それは五年前の狂三だ。

「あらあら、せっかくのお楽しみ時間を壊して随分な事を言いますわね、未来のわたくしは。こんな機会、二度と来る事は無いでしょう、

ならば、未来のわたくしも同じ行動をしたのではなくて？」

『くっ…、ですがもう彼はわたくしのものですわ！その間に何人たりとも入れる気はありませんわ！たとえ過去のわたくしであろうと！』

余裕の表情の狂三に対し、頭から聞こえる狂三の声は明らかに動揺している。そんな精神状況では、誰かを言い負かす事など出来はしないだろう、それが自分自身なら尚更だ。そんな狂三を嘲笑うように、五年前の狂三は蓮に密着すると、その耳元で囁き始める。

「どうやら、未来のわたくしは随分と器の小さい女らしいですわね。蓮さん、よろしければ今のわたくしに鞍替えしませんこと？未来のわたくし以上に、愛して差し上げる自信がありますわよ…」

『聞こえていますわよお！五年前のわたくし！！』

そのまま、今と昔の狂三の言い合いが始まる。普段なら、どうなるのか呑気に観察したいところだが、今はそこまで待っている時間的余裕はない。ため息を一つすると、蓮は二人の討論の間に割り込む。語りかけるのは未来の狂三に対してだ。

「狂三、今は耐えてくれよ。せつかく昔の狂三がやってくれるって言うんだ、そのチャンスを私情で台無しにするわけにはいかないだろう？」

『グスツ…ですがあ…わたくしの蓮さんが…』

狂三の声はいつの間にか涙声になっており、いつもの余裕そうな様子は片鱗も感じさせない。年相応な少女と言った感じだった。そんな狂三を安心させるように語りかける。

「大丈夫、気持ちが変わらないさ。俺の…数少ない理解者だから」

『蓮さんが…そう仰られるなら、わたくしは何も言えませんわ…』

渋々ながらも、狂三の了解を得る事は出来た。とりあえず、その事に安堵する。

「ふう…、何とか狂三のOKしてくれたから、こっちも早く…ムグツ!？」

そう言いながら前を向いた瞬間、狂三が不意打ちと言える動きで蓮と唇を重ねた。その行動に蓮は目を見開いて驚く。その隙に狂三は

左手で蓮の後頭部を押さえて離れられないようにし、自身の右手で左手とを恋人つなぎをする。強引に蓮を襲う狂三の瞳には、歓喜が映る。

『ああ…わたくしだけの蓮さんの濃いものが…どんどん吸われて…』

頭の中に、そんな狂三の悔しそうな声が聞こえる。だが、まるで自分を貪るような積極的な接吻に、反応する余裕がない。混ざり合った二つの唾液が、強引に奪われ、または与えられる。その味はまさに美酒と言うのが正しい。

最初こそは驚いていたが蓮だが、その快感に身を任せ、目を細める。そんな中、激しく光る右手を動かし、気になっていた狂三の左目を隠す医療用眼帯に触れる。そして、静かにズラし、隠されていた左目を見た。

(良かった…怪我をしていた訳では無いんだな…)

そこには、時計の文字盤が刻まれた左目があった。蓮が知っているのと何も変わらない、いつも通りのものだ。その事に安心し、蓮は眼帯を元の位置に戻すと、眼帯越しに左目を撫でる。まるで慈しむように。

「ぶはあ…」

「はああ…」

譲渡を終えた二人は、唇を離すと同時に大きく息を吸い込む。その生理的な行動が、キスを終えたという何よりの証拠だった。名残惜しそうに離れた狂三は何も言わず、ただ、可愛らしい微笑みを浮かべている。

「さあ、〈刻々帝〉。仕事の時間ですわ。【一二の弾】！」

狂三が上に掲げた銃に、〈刻々帝〉の時計盤から溢れた濃密な影が集まる。その間に、蓮は自分たちに背中を向けている土道の元に歩いて行き、その肩を叩く。

「終わったぞ。もう後ろを向いて大丈夫だ」

「お、おう…。なんかブツブツと言いつ争ってたみたいだけど、何を話してたんだ？」

土道のその、悪意なき質問は何とも返答に困るものだ。それにうー

んと声を出す。

「まあ、何と云うか、自分は一人だけで十分って事かな」

「…?」

何を言っているのか分からないと言った様子だが、そんな土道の背中を強引に押して狂三の前に立たせる。

「では、土道さんの方をお先に…。健闘を祈りますわ」

「あ、ああ。ありがとう…」

銃口を向けられ、身体を強張らせながら土道はそう言う。ニコリと狂三は微笑むと、狂三はカタカタと震える銃の引き金を引き、土道に向けて銃弾を発射する。放たれた弾は、土道の胸に命中するとその回転に巻き込むように、形を歪めさせ、姿を消した、

「さあ、もう一度。【一二の弾】」

再び出てきた影が、銃口に収まる。狂三の準備が出来たのを確認した蓮は、気恥ずかしそうな様子で口を開く。

「えっと…、これから五年後に狂三は俺と会うとおもうけど、その…、その時の俺は少し尖ってて、狂三に剣を向けたり色々言ったりするけど、今みたいに愛してやってほしいんだ」

この時代に居られる時間はほとんどないだろう、なのに何を言ってるんだろうと自分でも思う。そんな矛盾した気持ちの中で言葉を繋いでいく。未来で目の前にいる少女、狂三と出会い、ジェイク・メイザースが変わるために必要な事であると感じたからだ。

「心配には及びませんわ。女は、殿方に拒まれたれば拒まれる程、相手を振り向かせたいと思うものなのですわ。その瞬間を楽しみに、蓮さんに向かっています」

狂三は嫌な顔一つせず、大丈夫だと言ってくれた。それを嬉しく思いつつ、狂三の目の前に立つ。

「最後に一言…。その眼帯、似合ってるよ。元気でな」

『…っ!』
「お褒めに預かり、光栄ですわ。どうか、あなた方の目的が達成される事をお祈りしてます」

聞いた瞬間、頭の中の狂三が息を詰まらせる。それとは反対に、狂

三は嬉しそうな顔でお礼を言うと引き金を引き、銃弾を発射する。それと同時に蓮は目を閉じ視界を闇に閉ざした。

71話

身体に感じた違和感が消えたタイミングで、蓮は閉じていた目をゆっくりと開ける。最初に目に入ったのは燃え上がる前の住宅街の街並みだった。その事から、自分は空を飛んでは居ないにしろ、そこそこの高さの場所に居る事を理解する。

『どうやら、ちゃんと戻れたご様子で。まあ、蓮さんの口づけをもらったのですから、当然ですけれど』

「…ああ、まあ、そうだよな。土道はどこに…」

頭の中に響く狂三の言う、口づけをしたのにも関わらず、ミスをした時を操る精霊が居たと思うのだが、蓮はその言葉を飲み込み、仲間である土道を探す。もし、また別々の場所に飛ばされたとなれば少し、いや、かなりマズイ事となるのだが、そんな不安は自分の横で仰向けに倒れている土道を見て無くなる。

「土道！起きろ！呑気に寝ている時間は無いぞ!!」

「ううん…蓮…そうだ、時は戻ったのか!？」

あと数秒起きなかつたら、蹴りを入れていたであろう時に土道は目覚めると慌てた様子で周りを見渡す。その事に内心舌打ちした後、土道を立ち上がらせ、自分も周りを見渡す。

「ここは…狂三がいたビルの屋上だな。街も燃えてないし、ちゃんと戻れたみたいだな」

「そうか…。よし、世界を変えに行こう…」

そう言うと、土道は身体の向きを変えて、非常階段へと向かっている。その背中を見つめた蓮は、その決意に水を差すようで気が引けるが、気になった事を口にする。

「そう言っても、どうやって変えるんだ?」

それを聞いた土道は、ピタリと歩みを止めるとまるで油の切れたロボのようなぎこちない動きで首をこちらに向ける。その表情は引きつっていた。

「えつと…蓮が折紙を追いかけながら呼びかける?」

「あいつの飛ぶスピードは、かなりのものだ、天使にそれ専用の形態が

あるほどにな。後ろを追いかける形じゃまず追いつけない。それに加え、復讐を果たすのに必死な折紙が、声を聞いてくれるとも思えないし」

「じ、じゃあ、折紙が親を殺す一撃を放つ前に間に入れば…」

「それ、本気で言ってるのか？背中を向けているへフアントムが無害な存在だとも限らないんだぞ。万が一、何もしてこなくても、あの折紙だったら、俺ごとへフアントムを撃ってくる可能性もある。こんなギャンブルはナンセンスだな」

何とか絞り出した案は、ことごとく論破される。もう一度過去に戻るようなチャンスは無い、この状況でやるべき事は確実にとは言わなくとも、あの結末を繰り返さないようにするための行動だ。闇雲には動けない。

「そ、そうだ！折紙の両親を安全な場所に連れて行けば!!」

「………」

「えっ、何その反応…」

妙案とばかりに声を出す土道だが、それとは反対に蓮の視線は冷ややかなものだ。それに疑問の声を上げると同時に、土道の頭の中に狂三の声が響き渡る。

『土道さん、折紙さんのご両親がどんなに素晴らしい方だとしても、高校生二人が家に来て、ここは危険だから逃げろと言って信じてくださるでしょうか？それが火災の中ならまだしも、いつも通りの昼下がりの中で』

「いや、それは…」

『それとも、原因を説明されますか？「もう少しで成長したあなたたちの子供が、ここにやって来て、それに殺されてしまう」と』

改めて聞くと、とても胡散臭い内容だ。そんな事を言ってもただのイタズラぐらいにしか思われないだろう。必死に頭を悩ませる土道だが、それは蓮も同じだ。折紙自身や両親の方を動かそうとしても成功する確率は低い。なら、他に何を動かせるか考える。

「さて、どうするべきか…」

そんな思考の海の中から抜け出すきっかけになったのは、狂三の一

言だった。

『そうですね。折紙さんにご両親を殺した犯人が自分である事に気がかせない、というのはいかがですか?』

「は……何言ってるんだよおまえ!」

その提案に叫び声を上げたのは土道だ。だが、蓮は僅かに目を見開き、考え込むように俯いた。

『あら? 存外理に適っていると思いますけれど。折紙さんがあなっってしまったのは、ご両親の仇だと思っていた相手がご自分だと知ってしまったからでしょうか? なら、それを隠せば問題無い筈ですわ』

「そりゃ、そうだけど! それじゃ折紙が両親を殺しちまった事実は何も変わらないじゃないか! 蓮の方も何か言ってる……」

そう言いながら、蓮が立っている方向に顔を向ける土道だったが、その方向を向いた瞬間、目を丸くしてしまう。

「れ、蓮? どこに行っただよ……」

ついさっきまでいたはずの蓮は、そこには無く、周囲を見渡すとその姿を確認出来た。土道が向かおうとしていた、非常階段に向かう蓮の姿を。

「お、おい! どこに行くんだよ!」

狂三への怒りを忘れて、その背中を追いかける。慌てた様子の土道に振り返った蓮は、腰に手を当てて話し出す。

「どこについて、狂三の言った事をやりに行くんだよ。折紙から真実を隠すっていう考え方は無かったな。これなら、折紙にも両親にも干渉しないで事を済ませられる!」

そう言った直後、土道は蓮の胸ぐらを掴むとそのまま押し込み、非常階段の扉横の壁に押し付けた。その表情は、憤怒に満ち、心底蓮の言ったことが気に入らないと言った様子だ。

「ふざけんぞ! それじゃ、あいつの復讐心は誰かに向いたままだ! そんなの、認められる訳ねえだろ!」

折紙の平和を祈る土道は、狂三の提案とそれを実行する蓮が認められないらしい。感情のままに吠える土道に、蓮は静かにある疑問を投げかけた。

「なあ、士道。お前は何のために五年前に戻ったんだ？」

その質問で、士道の頭は冷水でもかけられたように冷静になった。いや、当たり前すぎる事を聞かれて戸惑っていると表現するのが正しいだろう。そんな様子のまま、士道は話し出す。

「何のためって、折紙を…」

「俺は、あの破壊を振りまく折紙の原因を確かめてそれを防ぐためにここに来た。お前はそうじゃないのか？」

蓮の言う通りだった。狂三の力で過去に戻り、ここが五年前の天宮市だと知った後はそれを目的に動いていた。だが、その目的は、折紙という少女の真実を知って、無意識に変わっていた。

「でも…折紙の両親を助ければ…全て解決するだろ！そうすれば…大丈夫なのに…」

「その方法が思いつかないから、さつき俺たちは悩んでたんだろ？両親の救済は、方法の一つであって目的じゃない。不可能なら他の手順を探すだけだ」

「だけど…だけど…。違うんだ、それじゃあ…」

士道の表情は、いつの間にか悲愴なものに変わっており、胸元を掴む力も弱くなってる。そんな士道にダメ出しとばかりに蓮は口を開く。

「お前が救おうとしていた親御さんも俺たちの知る世界では故人、死んだ人間だ。そんな人たちに囚われて行動の本質を見失うな」

感情的で、人間らしい士道とは反対に、冷静で機械的な考え方をする蓮。蓮も折紙の事を憎んだり、軽視している訳ではない。ただ、折紙という一人の少女と、十香達と街にいた人間全員の命を天秤にかけたのだ。その結果が今の発言と行動となる。

「…分かった。じゃあここから先は別行動しよう。いつまでもこんな事してるのは時間の無駄だ。お前はご両親を救うために必要だと思ふ事をすればいい。その間に俺は色々やる事をさせてもらうから」

自分の胸ぐらを掴む手を外し、扉へと歩いて行く。その途中で蓮は背後を振り返り、その場に崩れ落ちている士道の姿を見た。それが何かが籠った視線を向けると、再び顔を前に向け口を開く。

「こんな俺にも、折紙の両親に対する気持ちのように会いたいと願う人はいる。もつとも、生きてるか死んでるかすら分からないけど」
「……」

「結局、会えなければ死んだのと同じだと思ってたけど、違うらしいな。死んだ人間に、こんな気持ちは抱かないとおもうから」

そうとだけ言うと、蓮は扉を開けて階段を降りて行く。その結果、ビルの屋上にいるのは土道だけとなった。

「…はは。なんだよ、そりゃあ…」

ヤケクソ気味に笑う土道の声は、蟬の声にかき消されて消えた。

「…少し、言い過ぎたかな」

『あら、土道さんに仰った事。後悔しておりますの？』

薄暗い階段を降りながら、蓮はため息をつく。土道の言う事を蓮も愚かだと言うつもりはない。だが、それでは過去に戻って来た折紙と同じ目的となってしまう。それと差別するには、やはりこのような選択が必要だとだった。

『わたくしは、蓮の仰った事は正論だと思えますわ。蓮さんは折紙さんのご両親を死の運命から救うために、時を超えて来たのでは無いのですから』

「だけど、土道の言うやり方も方法の一つだった。だけど、俺にはミスする事なくそれを成し遂げる自信が無かったな。一発勝負だって言うんなら、尚更な」

その結果、人道的な行動よりも無難な事を優先してしまった。その事を少し悔やみながらも階段を降り続け、真夏の住宅街へと出る。ジリジリと暑い気温と日光が蓮を照らす。

「さて、その為の下準備と必要な事は…」

『…蓮さん、どうやらそれは必要無いらしいですわ。後ろを向いてくださいまし』

これからどうしようかと考えるが、急に狂三からストップがかかる。その言葉に従い、背後に振り向き目を細めた。何故ならそこには土道が立っていたからだ。肩で息をしているところから、走って階

段を駆け下りて来た事が見て取れる。

「よお士道。一分ぶりの再会か？その様子だと何か閃いたらしいが、期待していいか？」

「ああ…、そのためお前が必要になるかも知れない…」

「へえ、どんな作戦？」

「つまりだ…折紙が現れた時にその場に敵が居なきやいいんだろ？」

士道は、蓮を出し抜いたとばかりに不敵な笑みを浮かべた。

「真夏の炎天下の下、男二人で日光浴かよ。その片方が子供を見つめてるって世も末だな」

「うっせ…、こうするしか思いつかなかつたんだから仕方無いだろ」

『くすくす、まるで変質者ですわね』

五分後、二人は公園の植え込みに隠れるようにいた。蓮は退屈そうにあくびをして空を見ているのに対し、士道はブランコの方を凝視している。そこには髪を二つ結びにした少女が一人座っていた。七、八歳ほどのその少女の顔は憂鬱そうに歪み、つまらなそうにブランコを鳴らしている。それは五年前の琴里だった。

それを見ている士道の拳は強く握られていた。まるで何かを我慢しているかのように。

「士道、今飛び出して行くのは…」

「ああ…分かってるさ…、今は我慢だろ…」

口ではそう言いつつも、士道は身体を震わせ、今にも飛び出して行きそうな様子だ。それを必死に堪えている、蓮はそれを側から見ながら思う。

（人は言い訳が欲しい生き物なんだな。妹が人で無くなる瞬間を見て見ぬ振りをする理由が…）

自分の家族が精霊になる瞬間を必要な事だとして見過ごす。それは士道にとってかなり辛い事だろう。蓮は別に平気というわけではないが、割り切る事ができれば耐えられるレベルのものだ。そんな気持ちを持ちを誤魔化すように蓮は話を振ってやる。

「しかし、よくへフアントムを追い払おうだなんて思いついたな。破

壊の種火を無くそうって考えか？」

「え？ああ、出来れば話をしてみたいんだが…ダメだった時は、頼むぞ」

小さく呟いたそれを聞いて、蓮は目を細める。

「それは…実力行使で俺がへファントムを追い払うってことだな。しかし、話がしたいだなんて物好きだな」

小馬鹿にするように言ったその言葉。だが士道はそれを気にする事なく口から言葉を漏らす。

「自分でもそう思うさ。でも、俺たちはへファントムについて何も知らないんだ。そんな段階で全て決めてたんじゃ十香達をただの災害としか見ない奴らと同じじゃねえか」

精霊を狩るDEMにいた人間にそれを言うかと内心思う。すると、そんな心境の蓮を面白がるかのように狂三がクスクスと笑う。

『フフ、どうも一本取られましたわね。おそらく士道さんはそこまで意識してないと思いますけれど』

「…まあ、良しさ。俺もへファントムとかいう存在には疑問があったんだ。どんな奴かは興味があるし」

無理矢理士道の行動を合理化させると再び青い空と白い雲、そして太陽が輝く上を見上げる。そろそろへファントムが現れて良いはずだが、そう思った直後、身体が奇妙な感覚を感じ取る。それが何かと考える前に蓮は士道が見ていた幼い琴里を凝視する。

「…来た」

「来たって、へファントムがか？」

『はて？こちらからは何も見えておりませんが…』

狂三の言う通り、今見えている景色にはブランコを揺らしている琴里以外誰もいない。だが、蓮には分かる、ここに普通では無い何かが出来た事だ。

その瞬間、琴里の近くに奇妙な来訪者が現れる。背丈も年齢も性別も、モザイクのようなもので隠されて分からない『何か』。それは琴里と何か言葉を交わし始める。その光景を蓮はジッと見つめている。

「大丈夫…お家…帰る…、なんで…そんな…」

「えっ？なんだ、それ…？」

耳元でブツブツと呟かれる言葉に土道は疑問の声を上げるが、蓮は顔を向ける事なく、視線をそのまま答える。

「司令官殿の唇の動きを見るとそう言ってる。ただ、距離だけに断片的にしか分からないし、肝心なへファントム∠の言ってる事はさっぱりだ」

そんな事をさも当たり前にやってしまう蓮に驚嘆しつつ、土道も琴里の方に目を向ける。そこでは琴里に向かって何か赤い宝石のようなものを差し出す。それに琴里が触れた瞬間、身体が淡く発光する。

「あ、あ、ああああ…っ！」

琴里が苦悶の声を上げる。それと同時に琴里を中心に凄まじい熱波が巻き起こり、渦を巻くように炎が屹立する。精霊へイフリート∠が誕生した瞬間だった。その熱波に二人は姿勢を低くして耐える。

「来たか…土道、掴まってる」

「くっ…琴里、すまん…！」

琴里への謝罪を口にし、キツと視線を鋭くする土道の横で蓮は謎の存在へファントム∠をただ見つめていた。何故なら琴里を精霊にした直後なのにも関わらず、そのモザイクはせわしなく動いていたからだ。それはまるで周囲を見渡しているようにも見える。

(なんだ…何をしている…)

「…おい！！」

目の前で炎の爆発が起きてるといふのに、その周りを気にしているのが蓮の心に引つかかる。だが、土道が植え込みから飛び出し、へファントム∠の後ろに立った。

(ちっ…もう少し見たかったんだが…)

そのタイミングの悪さに心の中で舌打ちしつつ、土道の後を追って蓮も植え込みから飛び出した。

72話

「おい!!」

「……………ん?」

植え込みから飛び出し、喉を震わせて張り上げた土道の声に、ヘファントムは男とも女とも取れない声を響かせる。それと同時にモザイク状のシルエツトが僅かに動く。それに合わせて土道はヘファントムの顔に当たるであろう箇所を睨みつける。

「会いたかったぜ…、ヘファントム」

人間を精霊に変える謎の存在と対面した土道はそう言った。その言葉に嘘偽りは無い、琴里、美九。そして折紙を精霊にし、破壊を振りまく厄災へと変えた元凶。それに土道は因縁めいたものを感じていたのだ。

「……………え?」

そんな土道に対し、ヘファントムはそう小さく声を発し、微かに身体を揺らした。外から見たらモザイクが少し動いただけだが、土道にはそれが狼狽とも見て取れる。それを疑問に思うと同時に背後から音が聞こえ、青い光が目の前に立った。

「俺より前が出るやつがあるか!」

土道を守るように前に立った蓮は、土道にそう怒鳴る。それを聞いて土道は自分がどれだけ迂闊な行動をしたのか理解した。自分達は人間を精霊にした瞬間を見た。つまり、ヘファントムが口封じの行動をしてくる可能性もある。

「そ、そうだな…悪い」

「……………」

蓮も今の状況を理解してるのか、これ以上何も言っただけで来なかった。ただ、目の前にいるヘファントムに警戒の目を向けている。

(さあ…どうする?ヘファントム…)

ここから先のヘファントムの行動は、蓮も全く予想出来なかった。ただ、目撃者を消すとして向かってくるならこちらもそれ相応の対応をしなければならぬ。ただ、ここで殺してしまっただけでは未来が変わっ

てしまう。つまり、半殺しに留めなければならない。

(いや、そもそも手加減して戦える相手なのか…)

一秒が長く、何分にも感じられる。その間〈フアントム〉から一瞬も目を離さない。そんな緊張感の中、〈フアントム〉は動いた。

【嘘…ありえない…。その腕…君達がどうして一緒に…ここに…】

目の前に現れた二人に驚くような事を呟くと、それから遠ざかるように後ずさる。自分の事を目撃された事に対する驚きでは無く、明らかに土道と蓮がここに現れた事に対する驚愕の言葉だ。

(こいつ…俺たちの事を知っている…?)

記憶を探っても蓮の知り合いに全身モザイクの奴はいない。おそらくそれは土道も同じだろう。その事を考えていると、〈フアントム〉はノイズに覆われた身体を動かすと、そのまま地面を滑るように逃げていった。

「〈フアントム〉が…!」

『このまますんなりとは逃せませんわ。追いかけてくださいまし』

「俺もそう思うよ。行くぞ、土道!」

逃走する〈フアントム〉を追って、二人は公園の外に向かう。その途中で自分と同じ方向を向いていた土道の視線がどこかに逸れたのを感じた。この状況で他に見るべき場所など見ずとも見当がつく。

「余所見をするんじゃない!!前を見ろ!!」

「…ッ!ああ、分かっている!」

一瞬、驚きのように息を詰まらせたが、まるで開き直すように声を出す。どうやら、ビル屋上で言った事の意味をキチンと理解しているらしい。公園から出ると、依然滑るように逃げる〈フアントム〉の姿が見える。それを見た蓮は上等とばかりに笑う。

「そうかよ…じゃあこっちも同じ土俵で追いかけてやる」

両手に〈エカトル〉を顕現させ、風を纏わせた後自分と土道の周囲を回らせる。それによって、二人の足が地面から離れるが、飛ぶと言うより浮いていると思うほどのものだ。それを確認した蓮は命令を発し、浮遊した状態で〈フアントム〉の後を追う。

「〈フアントム〉はどっちに行つた!?!」

「た、たしか、右の方に曲がったはず…」

土道の言葉に従って、右に曲がると特徴的なT字路があり、ヘファントムはすぐにそこを曲がってしまい、姿が見えなくなる。このまま見失うのは絶対に避けたい、そう考えた蓮は移動スピードを一気に上げて突っ込む。当然ながら目の前には壁が迫ってくる。

「わわわっ!!蓮!前前!!」

「ちゃんと見えてるよ!隣で大きな声を出すな」

パニックになる土道にそう言うと、蓮は空中で姿勢を変える。そのまま壁に進むと、蓮はぶつかる壁を足蹴にし、無理矢理な方向転換を成し遂げそのまま進んで行く。

(あいつ、どこまで逃げるつもりだ…)

琴里のいた公園から離れてくれるのは好都合だが、このまま逃走されて見失うリスクもある。複雑な住宅街の曲がり角を進みながら、蓮は考え隣にいる土道に話しかける。

「土道、ヘファントムはお前を…いや、俺たちを知っていた様子だ。一応聞いておくが、知り合いか?」

「いや、俺の知り合いに全身ノイズがかかっているような奴はいねえ…」
「そりやそうだよな。俺も同じだ」

さも期待していなかった様子でそう答える。それを聞いた狂三はふむと考え込む。

『妙ですわね。先ほどの反応から、あの方は五年前なものにも関わらず、土道さんを知っておられるというのは。少なくとも今が初対面という様子ではありませんでした』

「何故かは、あいつから聞き出せばすぐに分かるッ!」

ヘファントムが見晴らしの良い一本道に出た瞬間、蓮は動いた。身体をフワリと高く浮かせると、周りを飛んでいる二つのヘエカトルをヘファントムに飛ばす。だが、ヘエカトルはヘファントムの頭上を通過し、少し先の地面に当たり突き刺さる。当然ながらワザとそうしたので。

万が一にもヘファントムは殺してはならない事を考慮して外したのだが、蓮の目論み通り目の前に突き刺さったヘエカトルを見た

〈フアントム〉は足を止める。その隙に二人はすぐ後ろまで接近する。蓮はその手に〈レットクイーン〉を握り、剣先を向けた。

「鬼ごっこはここまでだ。話し合いの時間といこうじゃないか」

「…っ、〈フアントム〉！」

後ろから聞こえた声に反応して、〈フアントム〉はゆらりと身体を動かす。どうやら二人の方に振り向いたらしい。

「〈フアントム〉…私にはそう言う名前がついたんだね。…先に謝らせてほしいな。ごめんね、突然逃げたりして。彼女の前では無い方が良いと思ったんだ」

〈フアントム〉の言う彼女が、琴里の事を示しているのだと理解出来る。確かに、〈フアントム〉の言うとおりあのままでは幼い頃の士道と、精霊となった折紙が現れるので離れてくれた方が都合が良かった。

「その気遣いには感謝してるさ。だが、俺たちもお前をすんなりと逃せなくてな。強引な引き止め方をさせてもらった」

口ではそう言ってるものの、蓮の話し方はどう見ても言葉ほどの感謝などしてない様子だ。だが、〈フアントム〉という謎の存在の反応を見るためのものだというのは士道も理解していた。すると、〈フアントム〉はクスクスと笑い声のようなものを漏らす。

「大丈夫、私は別に気にしてないよ。しかし…」

〈フアントム〉は士道と蓮を交互に見比べるような仕草を見せる。それに合わせて〈フアントム〉を覆っていたモザイクのようなものが、霧のように消えて行く。

「なっ…」

「……ッ！」

ノイズの中から現れたのは一人の少女だった。慈母のような優しい顔、これを見て警戒心を立てる人間などそうはいないに違いない。しかし、蓮はそれを見てさらに注意深く〈フアントム〉を睨みつける。

「不思議な光景だよ…。私の知っている君達が、並んで私の前に出てくるなんて…」

「へファントム…その姿は…」

「この姿は仮のものだよ。せつかく話が出来るというのに障壁越しと
いうのも味気ないからね」

「仮の姿…」

蓮は少女の姿となったへファントム<のつま先から頭の上まで一度
じっくりと見上げる。声は姿を隠してい時と比べて、透き通った少女
の声だ。桜色の唇に、同じく桜色の髪、優しそうな表情で見る者を安
心させるものだ。

「ふふ、これは仮の姿だけど、気に入ってくれたかな？」

自分を見る視線に気づいたへファントム<は微笑みながらそう聞い
てくる。だが、警戒した顔の蓮の顔は変わらない。

「いいや、何を考えているのか分からない奴の薄っぺらい微笑みは、俺
の神経に障る一番嫌いなものだ」

「…そう、気に入ってくれたら嬉しかったんだけどね」

蓮の辛辣な言葉に、へファントム<は残念そうな顔を浮かべる。仮の
姿だと理解していても、微笑んだ顔といい悲しそうな表情といい、感
情豊かだと思わざる得ない。それはまさに、人間と同じレベルのもの
だ。

「…さて、君達はどれほど先の未来からきたの？その姿を見るに、五、
六年後つてところかな？」

「なっ…！」

「時間遡行のことを…知ってる…!？」

『……………』

へファントム<が自分たちの事だけでなく、狂三の時間遡行の事までも
知っていると分かり、蓮も驚きを隠せない。 ”何なんだ、こいつは”そ
んな疑問だけが頭を支配する。そんな二人に対して話を聞いている狂
三は静かだ。

「お前、何者だ？少なくとも人間じゃないんだろ？精霊…って言えば
いいの…？」

「その判断は任せるよ。…ねえ、君の名前は何て言うの？」

「こちらの質問に曖昧な返事をしたへファントム<は、聞いてきた蓮

の名前を聞いてくる。土道と目を見合わせ、言っつていいか悩んだが（表面上は）悪意の無さそうなへファントム〉の表情と、聞いてばかりもいられないという思いから答える。

「…ジエイク、ジエイク・メイザース」

「ジエイク…メイザース…。そうか、いい名前だね。君にピッタリだ」その姿が気に入らないという蓮の言葉を意識してか、へファントム〉は心からそう思っているような顔でそう言う。その感想を聞いて、蓮は呆気にとられたような目でへファントム〉を見る。今まで生きてきて自分の本当の名を、褒めてくれた他人はいなかった。この名前にあつたのは、ただ、『トップであるべき』というエレンのプレッシャーだけだったのだから。

「それで、ジエイクと君は私と会うためだけに過去の戻ってきたのだとしたら、贅沢な『時間』の使い方をしたね」

「…俺達はへファントム〉、お前に用があつてここに来た。…今すぐここから消えてくれ」

そう言つたのは隣にいた土道だった。土道はもつとへファントム〉から聞きたい事があつた筈だ、現に蓮も同じ気持ちなのだから。だが、ここに来た目的を忘れずに。

「それは、私を殺すつて言う意味？まあ、未来で君がそのような考えに至つてしまう可能性もあつた。彼はそのための武器つて訳かい？」

それを聞いたへファントム〉は物憂げに息を吐くと、蓮を…正しくはその右腕をジツと見つめる。その行動に蓮は咄嗟に右腕を自分の後ろに隠すが、へファントム〉は何やら興味深そうな顔をしている。「…いろんな力が集まり、一つになつているのが見えたよ。見た感じ、かなりの数のものを取り込んでいるみたい。それなら、私を殺せると考えたのも納得かな」

「…ッ…こいつにはそんな事を頼んでないし、そんな事をさせるつもりも無い…。お前には一刻も早く身を隠して欲しいだけだ。お前は隣界つてところに行けるんだろ？」

土道が話している途中に、蓮は先ほどいた公園の上空に目を向けるが、まだ精霊化した折紙は現れてない。今すぐ身を隠してもらえば間

に合うだろう。土道の頼みを聞いた〈ヘファントム〉は目を細める。

「ふうん、どうしてそんな事を私に頼むのか、聞いていいかな？」

「それは…」

〈ヘファントム〉の質問に土道は答えず、渋い表情を浮かべる。自分達は〈ヘファントム〉について知らなすぎる、そんな相手に未来から来る折紙の事を話して良いのか悩んでいるのだろう。そんな劣勢な状態を見て、〈ヘファントム〉に剣先を突き付けながら蓮が一步前に入る。

「お前は勘違いしてるようだから言ってやる。俺たちはお前には頼んでいるつもりはない、『今すぐここから消えろ』これは命令だ」

「へえ…、これは私に命令してるの？」

この場に似合わない大胆な発言に、土道は目を見開くが、〈ヘファントム〉は動揺や怯えらしきものを片鱗も見せない。

「命令…か。もし私が嫌だと言ったら？」

「一応、こっちはお前に死なれたら困る身でな。だが、それなりの事はさせてもらうっ!!」

そう言うと、蓮は不意打ち気味に剣先を〈ヘファントム〉の右肩部へと突き立てる。どうせ言葉の脅しを通じるような相手ではないのだ、ならば行動で分かせてやるしかない。しかし…

「ッ！嘘だろ…」

「チツ…、マジかよ…」

「やれやれ…、随分と横暴な子になっちゃったね。脅しとはいえ、こんな事をするなんて…」

〈ヘファントム〉は〈レットクイーン〉の剣先を右手の親指と人差し指で挟んで止めていた。さも当たり前のように。それを見た蓮は、慌てて剣を手前に引き戻そうとするが、指だけで押さえ込まれている剣はピクリとも動かせない。少女の華奢な身体からは考えられないほどの異様な力だった。

逆に〈ヘファントム〉が剣を引くと、蓮の手をスルリと抜けてその手に収まった。その光景を見た二人が警戒の色を濃くするのに対し、〈ヘファントム〉は〈レットクイーン〉をマジマジと見つめる。

「うん…良い剣だね。大切にしなきゃダメだよ、この剣も…その腕の

輝きも…」

満足そうな顔をしたへファントムは、奪った剣を自分の両手に乗せて蓮に差し出した。丁寧な事に刃を自分の方に向けて。それをひったくるように蓮は奪い返す。

「さて、君たちの命令についてだけど、それには従えないな。私にはまだする事があるんだ」

「ま、待ってくれ！もうじきここに…！」

「土道？どうした？」

へファントムに土道が泡を食って話していたのだが、不自然なタイミングでその言葉が止まる。その事を妙に思い、不安の声と共に蓮が顔を向けるがその隙にへファントムはノイズを纏うと地を蹴って上空に飛んでいく。

それ気づいた蓮はへバスターで捕縛しようと考えてるが、すぐにその射程外へと逃げられてしまう。自分も空を飛んで追いかけるかと考えるが、土道一人をここに放置する事も出来ずその姿が消えるのを見守るしか出来なかった。

「く、は…ゲボッ！ゲボッ！」

そのタイミングで土道は前方に倒れるように膝を突き、咳き込む。その背中を蓮は撫り、落ち着かせる。

「どうしたんだ？急に言葉を止めて…」

「なんか…急に動けなくなって…息まで…」

途切れ途切れで説明するが、空に一条の光線が流れたのを見て、言葉を中断し、二人は空を見上げた。そこには光り輝く純白の霊装、破壊の光を振りまく折紙がそこにいた。折紙は同じように空を飛ぶへファントムにいくつもの光線を放っている。

「時間切れだ！これからどうする!？」

これからの行動を土道に投げかけるが、土道は拳を握り黙ったままだ。

(こうなったら、俺が二人の間に入って…)

一度は否定したその案を執行するかと考える、当然、成功率はかなり低い。だが何もしないよりはマシだろう。その時。

「繰り返させて…たまるかよ…ッ！」

小さく呟くと、何処かへと向けて土道は急に走り出す。唐突なその行動に、蓮は声を上げた。

「何をする気だ!? 土道―！」

『土道さん…!?』

その質問にも答えず、土道は走り続ける。蓮も咄嗟にその後を追う。折紙が自分の両親を殺してしまうまで時間は無い、こんな時にどこに行くのかと思っていると、やがてある場所へとたどり着く。そこは折紙の両親と、五年前の幼い折紙がいた場所だった。

「うおおおおおっ!!」

喉が潰れんばかりの大声を出しながら、土道は三人の元に走って行くが、その上空では折紙が〈ヘアントム〉に向けて渾身の一撃を放とうとしていた。残念な事に土道が三人の元に辿り着くより、それが二人を焼き払うのが早いと確信出来る。

「あの馬鹿!! なんて無茶を…」

土道が何をするつもりか察した蓮は、片手に〈エカトル〉を握ると、ある指令を命じるとそれを土道の背中に向けて投げる。別に土道を止めようとしている訳ではない、蓮も目的を見失ってはいなかったからだ。

瞬間、視界いっぱいを白い光が焼き、思わず目を瞑る。結果、出した命令が上手くいったか分からないまま、蓮の意識はそこで途絶えた。

73話

「ううん…」

地獄絵図だった街並みから変わって、心地よい微睡みの中で蓮は目を覚ました。寝ていたのは自宅の寝室にあるベッドの上、窓から入り込む朝日から、今は早朝だという事が把握出来る。結局あの後どうなったのか、世界は変わったのか考えながら重い身体を持ち上げる。

その動きに反応して同じベッドに寝ていた飼い猫ミルクが、耳をピクリと動かした後に起き上がり、ニャアと小さく鳴く。

「ミルクっ！お前なんだな!?怪我はして無いか!？」

今の現実を確認するように、語りかけるがミルクは不思議そうに首を傾げる(当たり前だが)だけだ。すると、蓮が寝ていたすぐ隣のシートがモゾモゾと動くと、中から緑色の髪が這い出てくる。

「もう…何よ…?朝っぱらから騒がしいわね…」

気だるそうに出てきたのは、蓮と同じ家に住む少女、七罪だった。寝ていた彼女を起こしてしまったのは悪いと思うが、今は何より重要な事を確認するため、その両肩に手を置いた。

「な、七罪!?今日が日付を教えてくれるか!？」

「ふ、ふえ?」

寝起きの時、必死な様子でそんな事を聞かれればそんな反応ももつともだ。しかし、七罪は目覚めたばかりの働かない頭で昨日の日付を思い出すと、戸惑い気味に教えてくれた。

「た、確か、昨日が七日だったから、十一月の八日だと思う…」

「十一月の八日…」

その事実を脳に理解させるように復唱する。十一月八日、それは、折紙が街を破壊した日の次の日だった。それを認識した蓮は、今の状態から七罪を引き寄せ、その胸に強く抱きしめた。朝から過激なスキンシップに、抱きしめられた七罪は目を白黒させ、慌てた声を出す。

「え!?え!?、な、なな何なの!?どうしたのよいきなり!？」

「…いや、なんでも無いんだ。ただ、こうして抱きしめたくくなって…」
自分達の苦勞を、誰かに話そうと思わなければ、理解してほしいと

も思わない。ただ、歴史を変え、悲劇を防いだという達成感だけが蓮の心を満たしたのだった。

「それじゃあ、七罪、ミルク。行ってくる」

「え？もう行くの？まだ三十分以上時間があるじゃない」

朝食を食べた後、蓮は素早く身支度を整えると、学校の制服を着て、鞆を手に玄関に立った。その事を疑問に思い、同じく玄関に立つ七罪はそう質問する。それに蓮は靴を履きながら言葉を返す。

「ちよいと士道に用事があつてな。学校の前にあいつの家に行かないきゃならないんだ」

「ふーん、その用事って何？」

「この世界を変えたって話をしに行く」

「…ゲームの話でもしに行くの？朝から…」

真実を話しても、当然ながら信じてはくれなかった。頭上に？を出している七罪に苦笑いを浮かべると、顔を近づけ、その頬に口づけを落とした。

「……え？」

「何かあったらいつも通りヘフラクシナスに電話してくれ。ミルクも大人しく待ってるんだぞ」

最後に七罪の抱えるミルクの頭を撫でると、ドアを開けて家を出た。そのドアがパタリと閉じた瞬間、七罪は顔を真っ赤に染めその場に座り込んだ。

「士道…いるか!？」

五河家の玄関を、”鍵を使わず”開けた蓮はそんな声と共にリビングの扉を開ける。リビングでは士道と琴里が朝食を食べていた。突然の乱入者に、士道は目を見開き、琴里は目を細め責めるような視線を向けてくる。

「あら？住居人がいる時に鍵をこじ開けて入ってくるなんていい度胸して…」

「悪い！司令官殿！二度としない！だから少し静かにしててくれ！」
「え、ええ？」

蓮の急いでいる様子とまさかの返しに、琴里は戸惑いの声を上げるが、それを無視して土道に向かい会う。土道の方も蓮が何故来たのか理解している様子だ。

「一応聞いておくが…お前は覚えているな？白い精霊を？」

蓮が放った精霊という単語に、琴里は耳を動かす。だが、蓮の言う通り、何も言う事なく大人しくしていた。

「…っ！ああ、覚えてる。どうなったんだ…あいつは…」

自分が何を話しているのか土道はちゃんと分かっているのを確認した蓮は、一先ず気持ちを落ち着かせるように一呼吸おいた。その後、上の方を指差す。

「食事中の時に悪いが、上でその事を話し合いたい。出来るか？」

「ああ、内容が内容だしな…」

真剣な様子でその事に応じる土道。今すぐ二階で話し合うという事に不満気な様子を欠片も見せないのを見ると、事の重要性は蓮も土道も変わらないらしい。先に土道がリビングを出て行き、蓮もそれに続こうとした時、黙っていた琴里が口を開く。

「まったく、朝から男二人で何を話し合うつもりなのかしら？」

「…鍵の件は謝るよ。さつきも言ったけど二度としない。だから今は…」

「それはもういいわ。なんか話を聞いてると、精霊絡みの事らしいじゃない」

それを聞いた蓮は足を止め、琴里の方を見た。その顔、その目はへフラクシナスの艦長、五河 琴里のものだという事が感じられる。

「さつき土道に話していた事、私にも教えてくれないかしら。精霊ならへフラクシナスの出番でしょ？」

「いや、土道一人で十分だ。司令官殿は何も無かったように食べててくれ」

「それは、蓮自身がそう判断したの？」

「ああ、俺がそう判断した」

迷いのない答えを聞き、琴里はため息をもらした。一応、元DEMという経歴を持つ蓮だが、その能力は琴里も十分認めていた。そんな人物が必要ないと言ったのなら、きつとそうなのだろうと考えてしまうほどに。

「分かったわよ。土道と二人だけで話してらっしゃい」

「悪い、朝から怒鳴り込んで来て…」

「そう思うのなら、今度何か甘いものでも奢ってちょうだい。最近、糖分が恋しくなってきたのよ」

そんな琴里の愚痴に、蓮は失笑を浮かべると土道を追ってリビングを出て行く。一人残された琴里は呆然と宙を見つめた。

「…まさか、精霊絡みでヘフラクシナスが必要無いなんて言われる日が来るなんて、思いもしなかったわ」

精霊と接触する二人を助けるのが自分の仕事であるはずなのに、それが出来ないとは何のためのヘフラクシナス艦長なのかと、自傷気味の笑みを琴里は浮かべるのだった。

「最初から確認しておくが、お前は狂三の力で過去に戻って、折紙を救おうとした事を覚えてるんだな？」

「ああ…どうやら蓮も…って、覚えてるからうちに来たんだよな」

二階の土道の部屋に集まった二人は、お互いに過去に戻った事を覚えてるか確認し合っていた。過去を改変するという大仕事をしたのだ、互いに記憶の食い違いなどが無いかチェックするのも必要だろう。その検査は、自分達が行なった行動を追って行くというシンプルなものですぐに終わり、記憶に違いがないことは確認出来た。

「よし、とりあえず俺もお前もちゃんとして来た事は覚えているみたいだな。司令官殿の様子はどうだった？見た所、違和感を感じなかったけど」

ベッドに腰掛けた蓮は、続いて琴里の様子を訪ねた。世界が変わったのだ、自分の知る人物に異常が無いか気になったのだが、土道は首を縦に振る。

「大丈夫、いつも通りのあいっだった。七罪の方も…」

「とりあえず、大丈夫だと言わせてもらう。怪我や病氣してる様子もなかったし」

それを聞いて、士道も安堵のため息を出した。二人が大丈夫なら、十香達も何もなかったかのように元気だろう。そう考え、蓮も大きく息を吐く。そして、そこから皮肉を含んだ目で士道を見る。

「これも、終わり間際で誰かさんの無茶な行動のお陰かねえ。あれには驚かされたよ」

「いや、咄嗟の行動っていうか…」

何かを含んだ言葉と視線を感じ、顔を引き攣らせ気まずそうに逸らす。ここで士道が困っていたのは、蓮が褒めているのか馬鹿にしているのが判別出来なかったからだ。その感じ取り方を間違えたのなら、色々と言われるに違いない。

士道が顔を背けたのを見て、蓮はジリジリと言うようなイントネーションから、いつも通りの真面目な口調で聞いた。

「でも、悲劇は避けられたんだし、お前のあの無茶な行動が報われたんだろうな。そこは称賛しなきゃいけないところだな」

「そう言ってくれると嬉しいよ…でも、正直二人までは届かないと思っただけけど、急に背後から強い風が吹いてきて、俺を二人のところまで連れてってくれたんだ…」

「ふーん、変な風だな」

不思議そうに語る士道に、何とも適当な返答を返す。とはいえ、これで折紙が街を破壊するという現実は無かった事になった、それを理解し蓮はベッドから立ち上がるとドアに向けて歩く。

「それじゃ、俺は家の外で待つてるから、準備が出来たら出てきてくれ」

「あつ、ちよつと待つてくれ」

あくび混じりにそう言った蓮を、士道は引き止めた。

「その…ありがとう。今回に限った話じゃねえけど、危ない事を手伝ってくれて」

「礼なら狂三に言えよ。俺はただ、お前の冒険に同行しただけだし」

感謝を意にも返さない様子で、部屋を出ると階段を降りていく。そ

んな蓮を、土道は何とも言えない顔で見送るのだった。

(これで、本当に何もかも終わったのか…)

自分達が苦勞をして掴み取った今。それを、蓮はまだ信じられずにいた。目的であった、折紙が世界を破壊するという悪夢は乗り越え、無かった事になっている、それは折紙という少女の過去を変えたからだ。

しかし、過去を変えれば未来も変わるのは当然の流れとも言える。つまり、折紙の復讐心だけが都合よく消えた世界などやってくるのかという事を疑問に思っているのだ。

「世界はそんなに優しくないよなあ…」

その声は、秋を感じさせる冷たい風のかき消された。上を見ると、晴れ渡った綺麗な空が見える。今は美しく、心地よい世界が恐ろしく、残酷な牙を見せるのはいつなのか、ボンヤリと考えた。

「はい、殿町くんは出席、と。…じゃあ次は、中原さーん」

そして、その牙は、その日の学校のホームルーム時、珠恵教諭の出席確認の際に姿を見せたのだった。

「えっ…うせ、先生…!」

珠恵教諭のその言葉を聞いた土道は、周りの目が集中するのも構わず、立ち上がる。その中で、蓮だけは土道の左隣の席を見つめる。前は折紙が座っていた席だが、今は誰も座っていない無人の座席となっている。

「あの…!折紙は…どうしたんですか…?」

「折紙…さん?それって、一体どなたですか?」

土道の緊張味の帯びた表情に対し、珠恵教諭はキョトンとした顔で、ドン底へと突き落とす事を言った。それを聞いた土道は呆然と目を見開き、助けを求めるような様子で蓮に顔を向けてくるが、今出来

る事と言つたら、『現実を受け入れろ』と言わんばかりに顔を横に振る事ぐらいだろう。

それを見て、ようやくこの世界を理解したらしい。自分の勘違いだったと珠恵に言つた土道は、崩れるように椅子に座る。右隣に座っている十香が、そんな様子の土道を心配してか、色々と声を掛けている様子だが、慰めにもなっていないだろう。

(何だ、この気持ち。これで良いはずなのに…)

珠恵が、折紙とは誰だと言つた瞬間、蓮の胸にも奇妙な感覚が走つた。それは後味の悪い、いつまでも頭の中にへばりつくような気味の悪いものだ、そんな感覚に眉を顰める。

(これで良いんだ、別にあいつを助ける事が目的じゃ無かつたはずだろ…)

別に普段から特別仲が良かった訳でも無ければ、最後に殺し合いを演じた女だった筈だ。なのに、折紙がいなくなった事にどうして自分がこんなに後味の悪い思いをしなければならないのか、それが分からなかつた。

「…ねえ、今日の土道、どうしたのかしら？ さつきから、ずっとあんな様子だけど…」

「さあ、妹様の勘違いじゃない？ いつもあんなもんだろ」

学校終わりの放課後、蓮は五河宅へと来ていた。その理由は単純、この世界の折紙の消失を知つた土道の様子を心配したからだ。折紙の事を知つた土道は、お世辞にもいつも通りと言えない一日を過ごし、現在、エプロンをつけてキッチンで夕飯の準備をしているのだが、その手際は危なっかしいものだ。

そんな様子に気づいた琴里は、同じソファに座つて七罪とチェスに興じていた蓮に理由を聞くが、そんな風に適当に返される。

「別に司令官殿が気にするような事じゃないさ。放つておいて大丈夫」

気にするなと言いつつ、蓮自身もチラチラとキッチンに立つ土道に

目線を向けている事に琴里は気づいていた。なのにも関わらず、そんな事を言うのはどう考えてもおかしい。その事に琴里は、ある仮説を立てた。

「もしかしてだけど…あんた、土道があんな風になっている訳を知ってるの？その事を相談されたとか？」

何も知らないと言うような態度でありつつ、土道を心配するような態度。そんな蓮を見て、琴里がそう考えたのは無理も無い事だ。何か悩んでおり、相談されたのなら不要に理由を話せないのにも納得できる。

慎重そうな言い方のそれを聞き、蓮は黒い駒を一つ摘むと、それを白のキングの前に置く。その後、ため息と共に琴里に顔を向けた。

「…まあ、相談されたっていうか、あんな状態の訳に心当たりならあるけど」

「やっぱり…その事について教えてくれないかしら？」

「やだ」

妹として、土道の事を心配し、力になりたいと考えているのは分かっている、だが、その助けを蓮は無情にも断った。力になれるのではないの問題ではない、それよりもっと根本的な問題がそこにはある。

自分の願いを即答で（しかも二文字で）断った蓮に、琴里はジツと鋭い目を向けるが、彼女が何かを言うよりも、蓮とチェスをしていた七罪が遠慮気味に話す方が先だった。

「土道も変だけど、あんたも今日は変じゃない…？私と勝負して、こんなに苦戦するなんて…」

七罪が言っているのは、チェス盤の駒の数についてだった。チェックメイトで勝利したゲームだったが、白も黒も互いに駒の数は少なく、かなりの接戦だった事が見て取れる。その事を指摘され、ヤケクソ気味に背もたれに寄り掛かる。その蓮の手をふわふわの髪と青い瞳が特徴的な少女、四糸乃が握った。

「もしかして…蓮さんも、土道さんと同じ事で悩んでるんですか…？できれば…私たちにも話して欲しいです…。悩んで苦しんでるお二

人を見るのはその…とても辛いです…」

『三人寄れば文殊つて言葉もあるじゃーん。あれれ？四人だから四人寄ればになっちゃうねー』

四糸乃とよしのんの気遣った言葉と、元気を与える微笑みに琴里は小さく笑い、七罪はまるで天使を見るような救いの表情をする。だが、蓮はそんな四糸乃の頭を撫でると立ち上がり、キッチンに立つ土道の元へと向かっていく。

「本当にどうしたのかしら？土道もそうだけど、蓮も…」

「何かに悩んでいるのは確かそうね…、学校で何かにあったとしか…」

「もしかして…お友達と喧嘩してしまった…とかでしようか…」

『うーん、自動販売機でお札を入れたけど、何も買えなかったとか？あれは落ち込むよねー』

わいわいと話し合う三人と一匹だが、正解にたどり着く確率はほぼ皆無だろう。それは、会話を聞いてない蓮にも理解出来た。

「土道、そこをどけ。今日の夕飯は俺が作るから、お前は休んでろ」

「蓮…悪い、そんなに危なっかしかったか？」

野菜を切っていた土道に、蓮はそう言うとはぼ強引にまな板の前からどけさせた。そして、手慣れた動きで土道の行動の続きをやるが、僅か数秒でキャベツの千切りの山が、まな板の上に誕生した。

「強いんだな、お前。俺なんか折紙の事が気に掛かっちゃって…」

自分はこの作業だけで何度も指を切りそうになっていたのに対し、動揺を片鱗も見せない蓮に、土道はそう言う。すると、蓮は顔だけをくると向けた。

「それは、あれだけの事をしたのに元気そうな様子についてか？それとも折紙がいなくなっても平気に見える事についてか？」

「あつ、いや！別にそういう意味を込めて言った訳じゃ…」

土道も、別にそういう意味を込めて言った訳では無いのだが、流石に無表情でそんな事を言われるとこちらが悪いような気がしてしまい、大慌てで否定する。すると、蓮は本日何度目かも知れぬため息をした。

「…悪い、今のは笑えないものだったな。一応言っておくが、別に平気って訳じゃない。朝からずっと、なんか不快なものが頭から離れないんだ」

「不快なもの？」

蓮が、この様な感情的な事を言うのは初めてのため、戸惑ってしまふ。それが、偶然か、折紙が居なくなり自分が動揺しているタイムミングであるのなら尚更。

「これで大丈夫なはずなのに、後味の悪さっていうか、あいつがいなくなった事に納得出来ない俺がいる。この気持ちが無か知ってるか？」
いつも助けられてばかりいるため、こんな時は是非力になりたいものだ。士道は顎に手を当てしばらく頭を悩ませる。

「たぶん…だけど、それって…」

「ふ、二人とも、手伝えることはない？」

士道の言葉を遮ったのは、背後から聞こえた琴里の声だった。その声に振り返った蓮は思わず『は？』と声を出してしまう。

それもそうだろう、そこには琴里と四糸乃の二人が居たのだが、二人は知っている姿から数年経過したであろう大人の魅力溢れる姿になっていた。それに加え、今の二人の装いは季節外れな水着の上にエプロンと、ヘッドドレスというよく分からない服装だ。

二人とも、子供から卒業する時期特有の美しさがあるのだが、いかんせん、服装と恥ずかしそうな顔をしているのが謎過ぎてそんなものは目に入ってこない。

「…まあ、三人も居れば大丈夫だよな。何かあったら教えてくれ」

普段は出たところ勝負の性格だが、それが泥舟と知って乗り込む気などなれない。ハプニングが目に見えている状況に、蓮はそう言うとせつせとキッチンから出て行く。背後から士道の悲惨な叫び声が聞こえてくるが聞こえないフリをして乗り切る。

キッチンから出て、ソファに腰掛ける蓮に一人の少女が近づく。

「れ、蓮は…こういうの…嫌い…？」

恥ずかしそうな様子で言ってきたのは七罪だった。琴里と四糸乃を变身させたであろう七罪の身体も、高校生ほどまで成長していた

が、刺激的な水着メイドスタイルの二人とは違い、普通のメイド服だった。だが、照れながら聞いてくる破壊力は抜群だった。

「ありがとう、慰めてくれるのか?」

「えっと…その…迷惑だった?」

「いいや、ちつとも」

自分達を気遣つての行動に、お礼と共に微笑ましいものでも見るような目で七罪を見る。純粹に心配しての行動、それを容易く無下になど出来るだろうか。答えは否だ。蓮にはその気持ちがとても心地いいものを感じる。

「どう?いつものあんたに戻ったかしら?」

メイド服姿の七罪を観察していると、キッチンの方から琴里、土道、四糸乃が歩いてくる。琴里も四糸乃も文字通り身体を張つて、元気をくれたと理解出来たのだが、相変わらずの水着エプロン姿と、土道が何やら鼻の頭をタオルで抑えているのが気になるところだ。

「まあ、少しぐらいは。司令官殿がそんな格好してるのに、元気になるやないと悪いでしょ」

「くっ…わ、分かったのならいいのよ。いつまでもそんな様子じゃ他の精霊達が不安がるでしょ。特にあんたには強敵である〈デビル〉を預けてるんだから、しっかりしなさい」

「〈デビル〉?!?」

恥ずかしそうな様子で琴里の言った異質なその単語に、蓮と土道は同時に疑問の声を出す。その反応に琴里は怪訝そうに眉を寄せる。

「えっ? 精霊狩りの〈デビル〉よ。まさか、忘れた訳じゃないわよね? 特に蓮は何度も戦ってるじゃない」

「その精霊狩りっていうのは一体?」

「何って、そのまんまの意味よ。〈デビル〉は必ず、単独では出現しないの。絶対、他の精霊が現れたタイミングで出現して、その精霊に攻撃を仕掛けるのよ。って、その相手をしていたのは他の誰でもない蓮じゃない。本当にどうしたのよ」

琴里が、さつきとは違う心配の目を蓮と土道に向ける。それを気にもせず、何か考え込むような仕草をした蓮は、顔を上げ、ある事を琴

里に頼んだ。

「ちよつと、その〈デビル〉の画像か動画が見たいな。準備出来る？」

「は？動画が見たいって、蓮は直接〈デビル〉と対峙して…」

「いいから。早く！」

「わ、分かったわよ。少し待ってて頂戴」

蓮にしては珍しい、急かすような言い方に琴里は驚きながら、リビングを出て行く。そしてすぐに、自分の部屋から映像端末を持ってくると、それをテーブルに置く。

「これよ。見て」

琴里が映像を再生すると、滅茶苦茶に破壊された街が映る。周りから爆音や煙が出ている事から、戦闘は続いているらしい。その中に〈デビル〉はいた。正しくは闇を纏ってたかのようなそれらしきシルエツトが。

「これが〈デビル〉…」

「ええ、全てが謎に包まれている正体不明の精霊よ。ヘラタトスクも一度も接触出来てないわ」

琴里の解説を聞きながら、土道と蓮が画面を凝視する。辛うじて人型と判断出来る〈デビル〉は顔も闇に覆われ見取る事が出来ない。だが、その周囲には羽のようなものが浮遊しており、その名前通りの見た目をしている。

「…ツ！まさか…あれって…」

「多分…お前も俺と同じ事考えてるな…」

背後から土道の震えた声を聞いて、蓮は確信した。その〈デビル〉は、世界を変える前に見た街を破壊していた折紙の姿そのものだった。おそらく、その正体も…。

（まだだ…まだ、終わってない！）

乗り越えたはずのものが、再び姿を見せた。その事に恐怖しなければならぬはずなのに、何故か蓮の心は言葉に出来ない歓喜のようなものが支配し、同時に「闘志」のようなものが湧いて出てくるのを感じた。

74話

真つ暗の室内を、机にあるパソコンの光だけが照らす、その机の前に座っているのは家の主人の蓮だ。時計の針が十一時を指している現在、部屋の明かりもつける事なく、顎に手を当てながら、彼の視線は画面だけに注がれている。

「やっぱり、司令官殿の言っていた以上の情報は無い…まあ、ASTのデータベースだとそんなもんか…」

画面に映し出されているのは、精霊化した折紙…いや、正体不明の精霊、〈デビル〉についての情報だった。昼間に琴里から聞き、家での事についての調査をしているが、〈デビル〉については不明な点ばかりで目を惹くような事はまったく言っていないほど無かった。

(DEMだったら、ここよりは多くのものがあると思うが、アカウントは凍結されてるしな…)

椅子の背もたれにもたれかかり、大きく息を吐く。今は折紙について少しでも知りたい、一体どうしたもんかと考えた時、部屋のドアがコンコンとノックされる。

「蓮、紅茶を淹れたんだけど、その…どうかしら？」

「七罪…？ああ、鍵は開いてるよ」

ドア越しに七罪の声が聞こえ、蓮はパソコンの画面を消した後、その声を出す。すると、ゆっくりドアが開くのだが、部屋の電気がついてないのを見た七罪のため息が聞こえてくる。

「ちよつと…また明かりをつけないで…」

室内に明かりがついてないのを知った七罪は、慣れた手つきで明かりのスイッチをパチリと押した。すると、暗闇から一転、白い光が室内に溢れ、蓮は思わず目を瞑る。数秒後、部屋の明るさに慣れてきて目を開けると、そこには可愛らしい緑色の可愛いパジャマを着た七罪が、トレイを片手に立っている。

「暗い部屋で画面を見ると目を悪くするわよ。ただでさえ、本を読むときに眼鏡をしているのに…」

「悪い悪い、昔ながらの癖みたいなもんで…」

七罪はまるで親のように説教しながら、トレイを机に置き、側にあつた椅子を持つてくると蓮の隣に腰掛ける。蓮は苦笑いを浮かべ、軽く謝つてから、ティーカップを持つと中身を口に含んだ。それを七罪は緊張した顔で見つめる。

「ど、どう？茶葉はそこら辺で売つてるものだけど…、ま、不味かつたら無理に飲まなくてもいいわよ！」

慌てた様子の子の七罪とは反対に、蓮は静かにティーカップを見つめる。そして、口に含んだ紅茶を飲み込むと、優しく微笑み、満足そうに頷いた。

「うん、とても美味しい…。市販されてるものだけど、お湯の温度や、淹れ方もちゃんとなつてるな。でも、なんで家にあるやつを使わないで、わざわざ買いに行つたんだ？」

「それは…、あんな高級そうなものをダメにしたら大変だし…だったら安物でやつた方がいいかなつて…」

目を逸らしながら、失敗するのが怖かつたと七罪は言う。それを聞いて、そんな事かと肩を竦める。

「大丈夫、ちゃんと出来てる。このレベルなら、高いものを使つても問題は無いさ」

静かにそう言うと、カップにもう一度口をつける。本人は普通に飲んでるつもりだと思ふが、カップの持ち方や仕草は綺麗で、蓮の生きてきた環境を感じさせる。そんな姿を、七罪は何やら思いつめた様子で見ている。

「やつぱり…何か変よ。普段の蓮なら、軽口の二つや二つが入つてる所じゃない。ガラでもなく、何に悩んでるの？」

「え？そんなもんだつたか？」

真剣な七罪の言葉に、蓮は珍しく怯んでしまう。その隙を逃さず、七罪はグイツと顔を近づけてプレッシャーをかけてくる。普段の彼女らしくない、あまりに大胆な行動だ。

「そりゃあ、あんたが悩むような事だから、私なんか力になれないかも知れないわ。でも！一緒に考えるぐらいは出来るわ！だから、一人で悩まないでほしいの…」

真つ直ぐ目を見た必死の頼み。だが、蓮は無情にもそれから目を逸らし、首を横に振る。

「その気持ちは嬉しい、とても嬉しいよ。だけど、悪い…言えない」「どうして…そんなに難しい悩みなの？」

「言っても信じられないと思う。俺自身も、未だ現実の出来事だと思えないから」

自分と士道は過去に戻り、様々な事を行い、今いる世界は改変後の世界だ。そんな事を言っても士道と狂三以外は誰も信じないだろう。それを言うと、七罪は拳を握り、悔しそうに俯いてしまう。

それを見て、罪悪感のようなものを感じる蓮だが、そこである事を思いつく。七罪の協力が必須である、ある事なのだが、果たしてそれはやっていい事なのか、その判断がつかないまま、口を開く。

「えーと…でも、七罪が力になれる事…っていうか、七罪の助けが必須な事ならあるけど…」

「本当!? 何何!? 何をすれば良いの!?!」

沈んでいた様子から一転、嬉しそうな様子で顔を上げた。さつきまどとはまた違う圧迫感に頬を痙攣らせるが、本人が協力的のため、あまり気は進まないが言ってみる事にする。

「えつと…士道の家で話したへデビルに七罪は襲われたんだよな。それについて聞きたいんだ」

「えつ…?」

まさに予想外の質問とばかりに目を丸くする。蓮は、七罪がへデビルに襲われたという事を琴里が言っていたのを思い出し、聞いて見た次第だ。

「で、でも、私を助けるために、蓮が戦って…」

「あー、いや、七罪から見た雰囲気を知りたいんだ。どんな些細な事でも良いから」

おそらく、七罪は、自分を助けるために蓮が戦ってくれたため、自分より詳しいはずと言おうとしたのだろうが、それでは七罪に聞いた意味が無い。あくまで七罪自身から見たへデビルの様子という風に聞き直した。

その質問に、七罪は唸り、難色を示している様子だ。それもそうだが、命の危機であった現場と自分を殺そうとした相手を思い出せと言っているのだ、ケロッと答えられる人物はそうそういないだろう。

「…ああ、やっぱり今言った事は忘れてくれ。怖い瞬間を思い出させたな」

やはり、そのような瞬間を思い出させるのは七罪の心境的に良くないと考え、やめるように言うが七罪は首を横に振った。

「だ、大丈夫よ。それで…どんな奴だったか…でしたっけ？」

「え？ああ、出来ればどんな行動をして来たとか、その辺りを教えてくれると助かる…」

「本当に…本当にいきなりだったわ。音もなく、いきなり現れたかと思うと、飛んでいた私に攻撃を仕掛けて来たの。その奇襲をもろに食らって、地面に落ちたわ。それでも、容赦無く攻撃を続けて来て、私はただ逃げ回る事しか出来なかった。あいつとは初対面の筈なのに、まるでずっと恨んでみたいな殺意だった…」

「七罪を…ずっと恨んでいたような…容赦のなさ…」
精霊

七罪はガタガタと身体を震わせ、〈デビル〉の事を話す。それを聞いた蓮は、初対面の七罪に、容赦のない攻撃を加えたという点が気になった。それはまるで、改変前の世界の折紙にも似た考えだと感じたからだ。

「必死に逃げ回ったけど、それも限界になって、やられるって思った時に蓮が目の前に立ちはだかって戦ってくれたの。そうね、主に中々遠距離で戦ってたと思うわ、手に持った短刀を投げつけたり、斬撃を飛ばしたりで…。そうして戦ってるうちに、十香達が増援に来てくれて助かったんだけど…」

「そうか、辛い事を思い出させたな。うん、だいぶ助かったよ」

何か大きな事を得たような、満足気な表情で七罪への感謝を述べてから、紅茶をまた口に含む。そのタイミングでカップの中身は空になり、それをトレイの上に戻した。

「本当に…蓮の力になれたの？こんな事、蓮も知ってるはずじゃあ…」

「いや、大きなヒントになったよ。ありがとう、七罪」

そう感謝を述べると、蓮は立ち上がり、右手でトレイを持ち、左手で七罪の手をギュツと握る。その顔は少し笑っていた。

「怖い事を思い出させたから、今日はベットの途中で抱き合いながら寝ようか。そうすれば身体の震えも治るだろうし」

「えっ?! ええええ!!」

驚きの声を上げる七罪だが、抵抗することが出来ず、蓮のされるがままに引つ張られ、二人は部屋を出て行く。その夜、七罪が眠れない時を過ごしたのは言うまでもないだろう。

—————

「ほい、一応、これを見ておいてくれ」

「ん?なんだ、これ?」

次の日の学校。ホームルームが始まる前の時間で、蓮は土道にホツキキスでまとめた数枚の紙を手渡した。それに疑問の声を出す土道に、欠伸混じりに答える。

「ASTのデータ内にあった〈デビル〉についての情報だ。今朝、プリントして持って来たんだ。でも、特別目を引くような情報は無かったよ。DEMにならもつとあるかもしれないけど、今は何も出来ないからな」

「あ、ありがとう…助かるよ…」

「あと、昨日の夜に七罪から〈デビル〉について聞いて見た。話を聞いた感じ、折紙と〈デビル〉が同一人物である可能性が濃くなったよ」
「や、やっぱりか…蓮がそう思うのなら、そうかも知れないな…」

周囲に目を配りながら言う蓮に、土道は戸惑い気味に頷く事しか出来ない。これが裏の世界の王か…そんな気迫に頬を痙攣らせながら感服する。だが、当の本人は何やら踏ん切りがつかない様子だ。

「頑張ってみたが、まだ折紙本人であるという証拠は見つからなかったよ。どうしたもんか…」

「はっ? いや、どう見たって〈デビル〉は…」

何を言ってるんだとばかりに眉を潜ませた土道は、昨日見た〈デビル〉の映像を思い出す。あの時の顔は間違いなく折紙だったはずだ。しかし、蓮はそうじゃないとばかりに顔を横に振る。

「別に同一人物じゃないって言ってる訳じゃない。むしろ、八割九割は当たり前だと思う。だが、その一割二割に落とし穴がある可能性もある。折紙本人だと思っただけ口説いたら、別人だったなんて全く笑えないからな」

それを聞いて、土道は蓮の言うことが分かった。つまり、蓮は〈デビル〉が折紙である確定的な証拠が欲しいのだ。回りくどい事だが、全ては自分の安全と霊力封印の事を気にかけての考えらしい。

「じゃ、じゃあ、どうすれば…」

「一番ありがたいのは、〈デビル〉本人が目の前に現れて、『私の名前は鳶一 折紙です』って言ってくれる事だな」

「ええ…、それは流石に無理だろ…」

精霊狩りの〈デビル〉に、そんな転校生のような自己紹介をしてもらうなど、自分が総理大臣になる以上に難しい事だろう。どうすれば〈デビル〉が折紙である確証を得られるか、考えていると、教室にホームルーム開始のチャイムが響き渡った。

「まあ、今すぐ思いつく必要も無いだろうし、いい考えが浮かんだら教えてくれよ」

「あ、ああ、あんまり期待しないでほしいけどな…」

その言葉を最後に、土道と蓮は自分の席へと戻って行く。蓮に渡された資料を見ながら土道は、取り敢えず、今日の学校が終わったら、改変前の世界で折紙が住んでいたマンションへと向かってみようと考えてるが、折紙がこのクラスに居ない事を考えると、そこで生活している可能性は限りなく低い。

(どうしたもんか、いつそのこと次に戦った時にでも〈デビル〉本人に聞いてみるのは…)

蓮の方もどうすればいいか、頭を悩ませる。〈デビル〉という謎の存在にどうすれば近づけるかを。だが、良い案は全く出てこない。そんな現状にため息をした後、机に頬杖をつくとき目を閉じ一眠りしようとするのだが…。

「鳶一 折紙です。皆さん、よろしくお願いします」

教室に響いたその自己紹介を聞いた瞬間、蓮の意識は一瞬で覚醒

し、弾かれるような勢いで教卓方面に顔を向ける。そこには端正な顔の少女が立っていた。身体の線は細く、背中を隠す髪の色は色素が薄い
ため、まるでお姫様のような雰囲気を醸し出している。

その容姿は人目を引くものだが、蓮が驚いたのはそれだけが理由ではない。その顔は映像で見た△デビル△と瓜二つのものであったのだ、そして彼女が名乗った名前、鳶一 折紙。

たった今、△デビル△が鳶一 折紙だと自己紹介したのだ。その衝撃が抜けきらないうちに、折紙は珠恵教諭の指定された席、土道の隣の席へと歩いて行く。それを目だけで追っていると、その中に少なからず驚いた様子の子道の顔が映る。だが、面識の無いはずの折紙も、土道を見た瞬間、僅かながら動揺したような雰囲気を発したのを蓮は見逃さなかった。

折紙は、その驚きを誤魔化すように土道に軽く会釈すると、指定された席に腰を下ろす。角度が悪かったせいで顔は見えなかったが、あの時、折紙の顔にも何かしらのアクションが起きていたに違いない。ホームルームが始まる中、蓮は次に何をすべきか、人知れず思考するのだった。

75話

『はあっ!?今なんて言ったの!』

「分かった、もう一度言うぞ、今度は聞き逃さないでくれよ司令官殿。
…〈デビル〉が俺らのクラスに転校してきた」

折紙が学校にやって来て数時間後、現在、学校は昼休みとなり様々のクラスの生徒が行き交う中、蓮は一人で人気のない場所で電話をしていた。その相手は土道の義妹で、ヘフラクシナスの艦長でもある琴里だ。

『そんな事分かってるわよ。でも〈デビル〉は顔すら確認出来てない精霊なのに、どうして本人だって分かるの!?そもそも転校だなんて、狂三じゃあるまいし、何で…』

「俺だって訳が分からないんだよ。ただ、〈デビル〉本人であると言う確証はある。そんな奴と同じクラスメイトでお勉強だなんて、隣に不発弾置いて過ごすようなもんで落ち着かなかったよ」

詳しい状況の説明を琴里から求められるが、蓮にも分からない事を他者に説明する事など出来ない。一先ず〈デビル〉の転校は本当に急な出来事だったと理解した琴里は、息を大きく吐いて落ち着くと、冷静な声音で聞いてくる。

『なるほど…、とにかく〈デビル〉の登場は突然なものだったという事は分かったわ。でも、今朝来たんなら、もつと早く教えてほしかったわ、何で昼頃に連絡したのかしら?』

琴里の言い方は、別に蓮の事を責めているものでは無かった。琴里が聞いているのは、何故〈デビル〉の事をすぐに伝えず、昼まで待ったのかという事だ。

「午前中の時間を使って、〈デビル〉の事を観察してたんだ。あいつがどういう奴で、どんな性格をしているか興味あったからな」

『へえ、それで蓮が見た感じ、どんな感じだった?』

蓮の言った内容に、琴里も興味深そうな様子だ。それもそうだろう、ずっと謎の存在だった〈デビル〉についての情報だ、精霊を救うヘラタスクの一員である琴里には、無視出来ない情報だ。そんな琴

里を焦らす事なく、見た感じの感想を述べた。

「はつきり言うよ…いい奴過ぎたな。虫も殺せないような性格で、本当に〈デビル〉本人かと疑ったぐらい」

午前中に〈デビル〉を観察して抱いた感想がそれだった。休み時間中に転校生特有の質問責めにあつた折紙だが、全ての質問に笑顔で返し、分け隔てなくクラスメイトと接してた。改変前の世界の折紙は、蓮からしたら無表情で無愛想なイメージ（まあ、実際そうだったのかも知れないが）だったのだが、今の折紙がその折紙と同じ人物とは思えない。

『へえ、その〈デビル〉は今何をしているの？時間が時間だし、教室でランチタイムかしら』

「いや、土道が人気のない場所に呼び出して二人きりで話してるんじゃないか。本人から詳しい話を聞きたいって言ってたし』

『はあ!?あの〈デビル〉と二人きりになるなんて何考えてんのよ、あのバカ土道！そして、蓮の何で止めなかったのよ!』

「…頼むから電話で大きな声を出さないでくれよ…」

危険人物である〈デビル〉と土道が一緒である事を知って気が気ではない様子だ。それを表すように琴里の大きな声が電話から飛び出し反射的に電話を耳から遠ざける。電話から聞こえる殺人ボイスが収まったタイミングで再び電話を耳につける。

「その怒りはごもつともだよ…。でも本当に本人からは危険性を感じなかったんだ、それこそ二重人格かと思つたぐらいにさ」

今の折紙は、〈デビル〉の残虐的な行動とのギャップがあり過ぎた。それ故同一人物かと疑つてるわけだが、言い方を変えれば今の〈デビル〉に危険性がある状態ではないのだ。ならば、今のうちに相手から情報を引き出したいところだろう。

『…分かったわよ、その判断を信じるとしましょう。それで、〈デビル〉は何て名乗つたの？その名前でごっちゃからも調べてみるわ』

「ああ、頼むよ。名前は鳶一 折紙」

『鳶一 折紙ね。鳶一…って、もしかしてASTの鳶一 折紙?』

折紙の名前を聞いた琴里の、まさかの反応にスッと目を細める。前

の世界では色々あつた琴里と折紙だが、今は何も面識のない他人のはずだ。それなのに、琴里が知っているというのはどういう事なのだろう。

「もしかして、司令官殿の知り合いか？ASTに俺以外の友達が居たとは知らなかったな」

『別に友達って訳じゃないわよ。ただ、ASTにそんな名前の隊員が居た気がしてね。でも、少し前に退職してるはずよ』

「退職…か…」

そう言えば、折紙がDEMの装備で自分たちと戦つた時も、手続き上はASTを退職した事になっていた事を思い出す。違う世界だと言うのに変なところをなぞっているなと笑つてしまいたくなる気分だ。そんな蓮に琴里は思い出したようにある事を聞いてくる。

『つて、よく考えたらあんたもASTにいたじゃない。この鳶一折紙に関して何か知ってる事はないの？』

「いや、記憶にないな。俺は昨日より前の事は忘れる性格だから」

しれつと嘘をつく蓮だが、実際、自分がこの世界に生まれ落ちたのは昨日なのだ。それより前のことは記憶がなく、そもそも覚えていたら〈デビル〉という存在にあそこまで驚く事は無かつただろう。その事実を知らない琴里は、呆れたようにはあつとため息をつく。

『まあ、いいわ。その鳶一折紙に関しては調べておくから、その間は出来るだけ〈デビル〉に近づかないで頂戴』

「オツケー、土道にもそう伝えておくよ」

その会話を最後に、通話を切ると電話をポケットにしまい、壁に背を預ける。その視線は意味もなく宙を彷徨っていた。

「元AST…か」

折紙がASTに入隊した理由は、両親を殺した精霊への復讐だった。だが、土道がそれを変えて無かつた事にしたはずだ。ならば、何故折紙はまたASTに入ったのだろう。そして、どうして最近になって退職したのか。結局、謎は深まりばかりだ。

その日の放課後、下校時刻となり人気のなくなった廊下で、蓮はメ

モ帳を手にした内容を見ていた。そこには昼頃に士道が聞いた折紙についての事が記してあり、彼女についての要所がまとめられている。しばらくはそれに目を向けていた蓮だが、ため息とともにそれを閉じ、胸ポケットにしまうと、気分転換とばかりに窓の外を見る。

十一月となり、日の入りが早くなった空には美しいオレンジ色の夕陽が輝き、青い瞳を照らす。だが、蓮の心は夕陽ほど綺麗でもなければ、明るいものでは無かった。

「折紙から見た、『士道の死』。それが理由か」

昼の折紙と士道の会話。そこで士道は蓮が求めていた情報を見事に手に入れてきてくれた。だが、それはこの世界の残酷さを示している内容でもあった。

「結局、折紙にとっては『両親の死』とそのまますり替わっただけなんだな…」

自虐気味な笑みを浮かべる蓮。そう、この世界の折紙が、精霊を殺す事が目的の組織、ASTに入った理由は折紙の父と母を助けるため、光の中に飛び込んだ士道にあった。その時、確かに両親を救う事には成功したが、その時幼い折紙の前で起きた『士道の死』が今度は精霊を憎む理由となってしまうのだ。

「しかも、本人は目の前にいる士道の事を、死んだ奴の弟と勘違いしてららしいし…どうすれば…」

あまりにも複雑な事情が絡み合い過ぎている。もはや、『死んだと思っていた士道の兄は、今も生きている』などと言っても解決しない現状だ。それに加え、〈デビル〉へとなった事にも謎が残っている。(やっぱり、歴史の改変っていう出来事に無知なのが痛いな…)

夕陽に当たる蓮の顔が曇められ歪む。未だに歴史を変えたという事の認識がはつきりしておらず、自分たちが行なった事はこの世界にどのような影響を与えたのか分からない。こんな状態では次の手など浮かんでこないだろう。やはり、ここはその道のプロに聞くほかない。

そう考えた蓮は、窓側から離れ、廊下のど真ん中に立つと数歩進む。周りに人がいない静寂のため、足音が響き渡る。ある程度進んだとこ

ろで歩みをピタリと止めると自分以外誰もいない場で口を開いた。

「狂三…どうせ見てるんだろ？出てきて欲しい」

静かな廊下に響いたその言葉。すると、背後の夕陽が差し込む場所の真ん中に黒い影が発生し、そこから狂三が姿を現わす。その格好は霊装ではなく六月に見たのと同じ、来禅高校の制服だった。蓮がゆつくりと振り向くと狂三は頬を染め、美しい笑顔で迎えた。

「蓮さんの方から求めてくださるとは、とても嬉しいですね。まあ、大方要件は分かっておりますが、一体どのような要件でしょうか？」

狂三は何を言いたいのか分かっていると云いながら、その内容を聞いてきた。知らない人間が見たら矛盾してると思う言葉だが、蓮は狂三の狙いが分かっている。狙いと言っても、自分が狂三を求めている姿が見たいという小さな事なのだが。

「ちよつと、狂三に聞きたい事があつて…」

気になっていた歴史改変の事について聞こうとしたのだが、その言葉を途中で止めると腕を組んだ後、蓮は狂三の姿をつま先から頭の上まで観察する。今の狂三の姿は狂三が転校してきたのと全く同じ、冬服のブレザーに黒タイツの姿であり、それを見た時ある事を思い出したのだ。

「…狂三は今、どんなパンツを穿いてるんだ？」

そんなセクハラ百パーセントの質問が響き渡る。だが、蓮本人はいたって真面目そうな様子で、羞恥など感じてない様子だ。その質問を聞いた狂三は、しばし呆然としていたが、やがてクスクスと笑い始めた。

「フフ…まるで土道さんのような事を仰いますわね」

当然、狂三も分かっているそんな事を言っているのだろう。そうして笑っていた狂三だが、すぐに自分のプリーツスカート裾をきゅつと掴む。それは数ヶ月前の再現でもあった。

「いい…ですわ…。わたくしのすべて…あなたにならお見せしても…」

頬を赤くし、小さな唇で囁くその姿は男なら思わず生唾を飲み込むレベルのものだ。狂三は両手で掴んだ裾をゆつくりと捲き上げてい

く。今回は邪魔など入らない、二人だけの空間だ。その予感通り、狂三は自身のスカートを上げきり蓮には白い下着が晒された。

「ああ…わたくしのこの姿は、満足いただけるものでしょうか？」

「もちろん…だ。綺麗だよ、とても…」

恍惚とした顔で言う狂三に優しく微笑んだ蓮は、もう一度今の彼女の姿をじっくりと見てみる。以前、神無月に『黒タイツと越しのパンツは人類の至宝』と言ってその良さを力説された事があったが、確かにこう見てみるとそれが理解出来るような気がする。

一通りその良さを確認した蓮は、歩みを進め狂三の目の前まで来ると、右手を狂三の左太腿に、右手をその頬に添えた。そして、右手を動かし、タイツ越しの肌を優しく撫でる。素肌を撫でた時とは違う感触に加え、ほんのりと伝わって来る体温が心地良く、ずっと触つていられる気がしてくるほどだ。

「はあ…あつ！ああ…ダメ…ですわ…。そんなに優しくしては…」

タイツ越しに肌を撫でられ、くすぐったいのか狂三は熱い息をこぼす。そんな乱れている姿に蓮は加虐心が擽られ、もつと狂三を喘がせて見たいと深い笑みを浮かべる。

無限に続くかとも思えるこの状況、それを破ったのは意外にも狂三だった。

「ああ…もう…、我慢出来ませんわっ！」

ついに限界を超えたとはばかりの声を出した狂三は、スカートから手を離し、目の前にいる蓮の両肩に置くとそのまま押し倒した。そのあまりに突然の行動に反応する余裕のない蓮は、抵抗できず床に倒される。

「ああ…ああ！愛しておりますわ…、ずっと…どれだけ時が過ぎよう…と…」

「おいおい…ここですか？」

一応、自分たちがいるのは視界の通る廊下だ。今は夕方では居ないが、誰かがこちら側に来る可能性もゼロではないのだ、万が一にも濃厚に絡み合う自分と狂三を見られては面倒な事になるだろう。しかし、狂三はその話を全く聞かず、蓮の身体に自分の身体を擦り付け

ていた。

(そういえば、欲求不満だつて言つてたな…)

完全に発情している狂三になんとも言えない表情を浮かべる。とはいえ、狂三を放つておいた自分にも責任があると感じ、NOとは言わない。ただ、このままという訳にもいかず、中指で狂三の顎をクイツと上げ、強引に自分の顔を見させた。

「分かったよ、ただし少しだけだ。終わったらちやんと俺の質問に答えてもらうからな」

「はいっ！はいっ！分かりましたわ！」

本当に理解しているのか怪しい返事だが、嬉しそうな狂三の表情を見てるとまあ、いいかと思つてしまう。そして、『あと…』と付け加え、一番近くの教室を指差す。

「するのはあの教室の中でだ。流石にこんなところじゃ気分が乗らない」

「あなたがそう仰るなら、それに従いますわ。ただ…これだけはこの場で…」

これだけは譲れない、そんな雰囲気だ狂三は目を閉じると、唇を前に突き出し顔を近づける。蓮も狂三が何を求めているのかすぐに察し、目を閉じると自分の唇を合わせキスをする。だが、これはまだ始まりに過ぎないのを蓮は忘れていなかった。

「変えた結果である今の世界は、恐らく前の現実とそんな大差は無いと思いますわ。それが宇宙のルールとも言える事ですので」

「へえ、そういうものなのか」

場所が変わつて教室内。そこで、蓮は一度脱いだワイシャツを着直しネクタイをしめる。目の前には白いブラと下着、そして黒タイツだけを穿いている狂三が美脚を組んで机に座っている。事が済んだ今、狂三から歴史改変という出来事について教わっているのだが、狂三本人も何でも知っているという様子では無さそうだ。

「実際蓮さんから見て、鳶一さん以外の大きな変化は見られましたか？その答えは否でしょう」

「一応、聞いておくけど、その根拠は？」

そう聞きながら、蓮は近くの机に置いてあった狂三のシャツを掴むとそのまま狂三の背後に行き、袖を通して着させる。狂三自身も、それを嫌がる様子もなく人形のようにされるがままにさせた。

「過去を変えれば未来が変わる…その言葉を否定するつもりはありませんわ。ただ、それこそまるで物語のように全てを理想とする形で収めるには、強大な力と緻密な計算が必要だと思いますわね。残酷な世界が付け入る隙のない、完璧な計算が…」

「…それを持ち合わせてなかったから、結果は変わらずともこんな歪んだ形で収まったわけか」

折紙の前で土道が死ぬ（ような）場面を見せてしまったため、精霊への恨みを消す事が出来なかったのは完全なる計算ミスだ。シャツのボタンを止めながら、その悔しさのようなものに歯を噛み締める。その手を狂三は優しく握った。

「いえ、土道さんと蓮さんは頑張っていたと思いますわ。鳶一さんのご両親を助けたおかげで、前の世界ほど精霊を憎悪しているようには見えませんでしたし」

「だけど、その一年後に二人は交通事故で死んじゃったらしい。結局死んじゃうんなら、何のため助けたのか分からなくなるよ…」

「そうですよ…残酷なものですわね」

後ろにいるためその表情は見えないが、今狂三はどんな顔をしているのだろうか。この現実には悲しみのようなものを抱いているのだろうか、いや、そんなのは狂三らしくないと思い、小さく笑う。

シャツのボタンをすべて止め終わると、次に制服のスカートを手に狂三の前に立った。

「狂三、スカートを着せたいから足を上げてくれるか」

「あら、それでは失敬して…」

ペロリと唇を舐めた狂三は、タイツに包まれた足を伸ばしそのつま先からスカートを通すと、太腿部まで移動させる。そして、狂三の腰を掴み、優しく床に立たせると腰部までスカートを引き上げ止める作業をし始める。

「でも、それだけならまだしも折紙は前と同じように精霊へと変わってた。その理由は一体…」

「それについてはわたくしも分かりませんわ。ただ、土道さんが鳶一さんのご両親を助けた時から、今までの間に何かあったのは確かですわね。今はそうとしか言いようがありませんし…」

こればかりは流石の狂三も分からないらしい。ではどうするべきかと考えながら、スカートを止め終えた蓮は最後にリボンを手を持つと狂三のシャツの襟に通し結んでいく。普段とは違い、向かい合っている体勢だというのに手慣れた動きで行き、一分も立たぬうちにはにそれを終える。だが、狂三は頬を膨らませ不満げな様子だ。

「…？何か不満げだが、どうかしたか？」

「むう…着させていただいてる最中にも何かしてくださると思っっていましたわ…。なのに本当に何もしてこないだなんて…」

親切心で着させた制服だが、狂三から見たらその行為を建前にまだ何かしてくると思っっていたらしい。そんな狂三に蓮は呆れるように顔を顰めると、顔を近づけ、その頬に口づけを落とす。

「こ、これだけではまだ満足してませんのよ…」

不貞腐れたように言う狂三だが、その口元が僅かに歪んでいるのを蓮は見逃さなかった。とはいえ、いつまでもこうしてる訳にもいかず、次にするべき事を考え出す。

「とりあえず、土道と合流して三人で今後の事を考えよう。あいつはまだ学校内に残っていると思うし」

「あらあら、それはいい考えですわね。ですが…フフ、土道さんがわたくしを見たら怯えてしまうのではないのでしょうか」

その時の事を考えたのだろうか、口元に手を当ててクスクスと笑う。怯える土道の姿を見て笑うとは良い性格してるなーと内心思うが、蓮自身も遠からず同じような性格だと気づき、これ以上何も言えなくなる。

「まあ、俺と一緒になら土道も大して警戒せずに話せるだろ。まずは土道を探さなくちゃならないけど…一緒に来る？」

「もちろんですわーご一緒にさせていただきます」

狂三は笑顔で蓮の腕を抱きしめると、二人はそのまま教室を出ていく。だが、教室内には蓮のブレザーだけが脱ぎ捨てられるように置かれていた。

76話

秋の夕方。空が綺麗なオレンジ色に染まる時間帯に土道は目を覚ます。現在、土道がいる場所は学校の屋上、どうやら考え事をしてる内に眠ってしまっていたらしい。

「あー、ついうたた寝しちゃったか…」

やべえと声を出し、身体を起こすと反省するように、頭を抑える。今の現状でする考え事と言ったら当然折紙の事についてだ。過去を変え、全くの別人と言っても過言ではない状態で現れた折紙。だが、今の彼女には精霊になっていたという不可解な謎があった。

「今度のデートで、その謎を探らなきゃならないんだよなあ…」

その、何とも言えない不安に声が沈んでいく。折紙とデートするのは前の世界で何度かやってきたため、初めてという訳ではないのだが、今は状況が状況だ。今までとは違う不安が浮かんでくる。なのだが…

「いい夢は見れたか？随分と深い眠りだったらしいが」

「えっ…?」

自分の真横から聞こえてきたそんな声にそんな不安は消え、間拔けな声を出してしまう。当然だが、寝る前は屋上にいたのは自分一人だけだ。その事を思い出しながら、声の聞こえた方向に顔を向ける。

「夕焼けの太陽で日光浴か？変わった趣味だな」

「うふふ、可愛らしい寝顔でしたわよ」

「うおっ!?!いつの間にッ!?!」

そんな言葉と共に居たのは、数秒前の土道のように横になり、顔を向けている蓮とそれを膝枕している狂三だった。まるで幽霊のごとく現れた二人に、土道は驚きの声と共に後ろに飛び退いた。

「いつの間にと申されましても…土道さんがお目覚めになった時からおりましたわ」

「お前を探してたら屋上で寝てたからさ。起きるまで待ってたんだよ」

ふああと気の抜けたあくびをする蓮を見て、それなりの時間待たせたようだ。だが、蓮も土道の気苦労を理解して休ませてくれたらしい。その事の礼を言おうとした直後、何を考えたのか蓮は自分の枕となっている狂三の太ももに手を添え、リラックスするように息を吐き出した。

「あああ…、狂三の太ももは何でこんなに落ち着くんだろう」

「あらあら、今度は蓮さんが眠ってしまいますの？」

土道と入れ替わるように目を細め、眠りへと入っていきそうな蓮の頭を狂三は面白がるかのように撫でる。太ももの感触を確かめるかのように撫でている蓮だが、そのせいで狂三のスカートは乱れ、かなり大胆に黒タイツに包まれた足を露出してしまっていた。下手すれば、絶対領域のさらに先が見えそうなほどだ。

「そ、それで、二人は何の用で俺を探してたんだ？」

スラリと伸びた足に見入りそうになった土道だが、はっと我に帰ると慌てて顔を逸らしそんな事を聞く。その反応を見て、いたずらが成功したような笑みを浮かべながら蓮は立ち上がり、狂三もそれに続くように立った。

「何って、こんな状況で話し合う事って言ったら、あの事しか無いだろう？」

「あの事って、折紙の事か？って、事は狂三もまさか…」

その話題を話し合う場に、狂三がいる事を理解して、驚きの表情で見る。その疑問に狂三は微笑みの表情を浮かべる。それが土道の疑問に対する答えだった。

「ああ、ちゃんと今までの事を覚えてるって。今の折紙がおかしいって事も分かってるよ」

「そ、そうか…、でも狂三は…その、大丈夫なのか？」

土道は狂三に強張った顔と警戒の目を向けながら、蓮に耳打ちする。その不安も何となく察する事が出来る、一応協力してくれた存在とはいえ、まだ警戒の色が無くなった訳では無いらしい。そんな不安を感じ取ったのか狂三は口に手を当て、上品に笑う。

「クスクス、わたくし、そこまで節操が無い訳ではありませんのよ？無

防備な背中を向けてる土道さんを襲うなんて事しませんわ」

「本人はああ言ってるし、問題ないだろう？今のところ、現状を理解してるのは俺たち三人だけだし寂しい三人衆としてやっていこう」

そんな適当な返事を返されるが、話し合うのに頭数が欲しいのも確かだ。それが時を操る精霊であるのなら尚更だろう。

「安心させるんならもつとマシな言葉をくれよ…。ていうか、さつきから不思議に思ってたけど、お前は何でそんな格好なんだ？」

注目を狂三から、蓮の身なりへと移す土道。その理由は現在の服装がワイシャツとネクタイとズボンだけで、上着のブレザーが無いからだ。少し前に衣替えがあり、制服は冬服へと変わったはずなのだがどういう事だろうか。

「ブレザーはどこにやったんだよ？たしか、朝来るときは着てたよな？」

「ああ、上着ね。ちよつと汚れたから教室に置いてきたんだよ」

そんなよく分からない理由を聞いた土道の頭上には？が大量に浮かんでいる事だろう。そんな土道の横に立つ狂三の頬が僅かに朱色に染まっているのを蓮だけが気づいていた。

「まあ、そんな事はどうでもいい。せつかく集まったんだ、もう少し実のある話をするぞ」

両手をパンパンと叩き、そんなもつともな意見とともに脱線していた話を戻す。この言葉から、話し合いは蓮が指揮する形で進むように決められたらしい。

「この場にいる全員が気になることは共通してるよな？前の世界で防いだはずの『折紙の精霊化』についてだ。しかも、〈デビル〉とか言われている異常な姿になっていた事」

まず最初に知りたい事と今起こっているイレギュラーの出来事について確認する。それについては土道はともかく、狂三からも何も無かった事から、異議はないらしい。

「とりあえず今は、今の折紙についての情報が欲しい。土道…、お前、昼休みにあいつと話してたよな？何か気になった点は？」

「えっ?! 気になった点って言われても…」

一先ず、会話の話題をこの中で唯一折紙と会話した士道へと振る。遠目で見えていた自分と比べて、直接話した士道の方が何か気づいていたかも知れないという思惑が理由なのだが、その反応で大方察する事が出来た。

「そりゃあ、折紙本人が精霊になつてる事に気付いてないっていう変な部分はあったけど、それ以外は特に普通だったっていうか…むしろ、前の折紙の方が異常だったとおもうんだが…」

『普通』、これほど便利で反応に困る言葉があるだろうか。まあ、気付いてないのに言えというのも理不尽なので、頭を悩ませる士道に『分かったよ、それはお前から見たら嘘をついている様子では無いと受け取っとく』とフォロー（？）しておいた。

「さて、他に今のあいつを知る方法は…」

顎に手を当て、じつくりと考え込む。今自分たちが知りたいたいのには戸籍情報と言ったらデータ上の情報ではなく、精霊になった時についてののだ。そもそもそれを確認する手段などあるのだろうか、そう考えるとどれだけ難易度が高いかよく分かる。しかし…

「今の折紙さんについて、知る方法がないでもありませんわよ」

そう言ったのは蓮と士道とは違い、余裕の表情をしている狂三だった。この場において、聞き捨てならない一言に二人の視線が集まる。

「へえ、その具体的な方法は？」

そのやり方に興味ありとばかりにそう問いかけると、狂三は笑い、今いる屋上の床に踵を打ち付ける。すると、彼女の足元の影が身体にへばりつき、赤と黒の霊装を形作る。それを見て、その方法を察する事が出来た。

「ああ、なるほど。天使の力を使うのか」

「ご名答ですわ。私の〈刻々帝ザフキエル〉には、撃つた対象の過去を知る事ができる【十の弾ユツド】がありますわ。これを折紙さんに撃てば、望む情報は手に入ると思いますわ」

霊装を身に纏った狂三が右手を掲げると、影から一挺の短銃が飛び出しその手に収まる。後は折紙の元まで行きその弾を撃てば悩みは解消されるだろう。

【十の弾】…そうか!」

狂三の説明を聞いた士道も理解したらしく、興奮気味にそう言う。「頼むっ!力を貸してくれ!それがあれば折紙が反転している理由が分かるんだろ?」

「さて、どうしましょうかしら」

狂三は、士道の願いにYESと答える訳でもなく面白がるかのように銃口に唇を触れさせる。実際、狂三も面白がっているのだろう。しかし、今はその答えは都合が悪い。そこで行動したのは蓮だった。

「くうるうみい、そう言わず協力してくれよお」

「ひゃっ!?蓮さん!?何をっ!」

狂三が士道の方を向いている間に蓮はその背後に回り込むと、そこから飛びつき両脇から腕を通し両手で胸元を揉みしだく。その行動に狂三は余裕そうな表情から一変し、甲高い声と戸惑いの顔となった。

「狂三はき、強いし可愛いから絶対協力してくれると思うんだよ、な?」

「わ、わたくしはっ、そんなお言葉で操られるほど、安い女ではありませんわよっ!あんっ!そんなに乱暴にしてはっ!!」

そんな言葉を合図に狂三の胸を掴む手の動きは派手になっていく。だがこんな現場で一番困っているのは、そんな光景を見せられている士道だった。

(えっと…これは止めた方がいいのか?)

一応人道上は止めるべきだろうが、ここで狂三にNOと言われて困るのは自分たちだろう。そう考えると狂三には悪いが見て見ぬふりをすることにした。今の士道に出来る事といたら狂三の服装が霊装のドレスの下で形を変える胸元から、気恥ずかしそうに目線を逸らす事ぐらいだろう。

「わ、分かりましたわっ!!手を貸しますので、これ以上は!!」

結果、先に根を上げたのは狂三だった。普段の彼女らしくない余裕のないリタイアを聞き、その背後に立つ蓮はニヤリと笑うと震える狂三の耳元に顔を近づける。

「協力してくれるのか…、じゃあ、これはご褒美だ」

そう囁くと、その耳にカリツと甘噛みをする。瞬間、狂三は目を見開き『ひんっ!!』を声を上げた後、息を乱しながら崩れ落ちるかのよう座りこんだ。

「うう…：こんなの…：酷すぎますわ…」

「よし、これで前に進める」

「お前、本当にえげつないな…」

目に涙を浮かべる狂三と、背後から抱きついている、彼女をそんな状態にした元凶に土道は引きつった顔でそう言うが、本人に鼻で笑われ一蹴される。とはいえ、このような手段を使ったものの狂三の性格から考えると、口約束だろうと約束したものを取り消すなんて事は無いだろう。

「それで、その弾をいつ折紙に撃ち込むかは…」

蓮がそこまで言いかけたところで、屋上の入り口からキイと扉を開けるような音が耳に入る。その音につられ三人が顔を向けると、そこには一人の少女が顔を俯かせながら立っていた。

「あれ…折紙？」

「俺からもそう見えるな。やっぱり」

顔を俯かせているため、すぐに分からなかったがその少女は鳶一折紙だった。彼女がなんで屋上に来たのか謎だが、この場で彼女の乱入はハプニングでしかない。

「えっと…折紙、これはだな…：その…」

折紙に対して、汗を垂らしそんな言葉になってない言い訳を言う土道は元ASTの折紙に精霊と一緒にいる場を見られて戸惑っているのか、それとも下手すれば強姦とも見て取れるような現場にいる事について狼狽しているのか定かでは無いのだが、折紙はそんな土道に何も言わず相変わらず顔を俯けたまま、両腕をだらりとさせたまま、まるでゾンビのように歩いてくる。

（様子が変だ…何を…）

「…蓮さん、土道さんと共にわたくしから離れててくださいまし」

どうやら、蓮が違和感を感じたタイミングで狂三も何かがおかしい

事を感じたらしい。その言葉に従い、狂三の両胸から手を離し、ゆつくりと土道の近くにまで寄る。

「この世界では初めまして…になりますかしら？折紙さん？まあ、もしかしたらどこかでお会いした事があるかもしれませんけど…」

「精、霊…」

それは自己紹介というより、相手の反応を確認するための言葉だったのだろう。その途中で折紙は小さな声で狂三の正体を呟く。やはり、狂三の事を知っている、冷静に分析出来たのはその時までだった。

瞬間、折紙の身体を中心に蜘蛛の巣のように闇が広がった。まるで夕焼けを塗りつぶすかのように光景に目を細め戦闘の姿勢をとった。

「お、折紙!?! 一体何がどうなって…!」

「喜べよ、あいつが〈デビル〉という確定的な証拠だ…」

まさに予想もしない出来事に、説明を求めて顔をこちらに向ける土道にそう言うと、制服の襟首を掴み、無理やり後ろに下がらせる。その間に折紙の周囲に発生した闇は、彼女の身体に纏わり付き喪服のような霊装を形作る。それは反転した後の闇の衣だった。

(これは…少しヤバイか…)

頬を垂れる汗を感じながら冷静に考える。自分たちの命もあるがここは学校の屋上なのだ、まだ校内に残っている生徒がいる可能性を考えると、ここを戦場にする訳にもいかない。しかし、ここまできて見なかったフリは通用しないだろう。

「…〈救世魔王〉…」

だが、今の折紙はそのような事を配慮してくれるはずもない。その名を呟く折紙の周囲にポツポツと幾つもの闇の塊が出現し巨大な羽のようなものを形作る。それは雨のように光線を降らし、街を破壊し尽くした天使の姿だ。

来るか…そう感じ、〈バスター〉を出現させようと右手に意識を集中させる。しかし、狂三がそれを手と言葉で制した。

「この場はわたくしにお任せ下さいまし。それより土道さんと共にもつと後ろに」

そう言うと、人間離れた脚力で上空に飛び上がると、狂三は手にした短銃の引き金を引き、銃弾を折紙に発射する。だが、それらは折紙の周囲を漂っていた羽が壁のように変化し防がれる。その後、反撃とばかりに残った羽の先端から放たれた光線が狂三へと向かう。

「そんなに容易く防がれては、わたくしの自信が壊れそうですわね」

呆れた様子でそんな事を述べる狂三に折紙からの攻撃が襲う。空中ではそれを避けるため大きく動く事も出来ず、その言葉を最後に身体中を光線が貫き、狂三の命を奪う。そして、さつきまで少女だった骸が降り注ぎ、床に触れると同時に炭のように崩れ落ちた。

「狂三!!狂三が……!」

「見れば分かる!お前はジツとしてろ!俺より前に出るな!!」

土道の叫びももつともな反応だが、今は他人を気にして余裕などない。何しろ目の前には街を破壊し尽く程の力を持った存在が立っている。考えるべき事は次の手だ。

(手持ちの武器で勝てるか…だが、こいつを放置する訳にも…)

そんな八方ふさがりな状況に、皮肉のような笑みが浮かんで来る。それと同時に目の前にいる折紙の身体がピクツと動きそれは警戒の表情へと変わった。

「……ッ!」

来る、そう思い身体中に力を入れる。だが、そんな蓮に対し、折紙は力無くその場に膝を突くと周囲に出現していた羽が粒子状となって消え、身に纏っていた霊装も解けて先ほどの制服姿に戻った。

「え……?」

「……?」

予想もしなかったその行動にそんな声が出てしまうのも無理はないだろう。その理由を理解出来ずにいると、折紙はその体勢のままゆっくりと顔を上げる。そして…

「…あれ?五河くん?何してるんですか?こんなところで」

狂三を殺した後とは思えないそんな声でそう言ってきた。いや、その事だけでは無い、精霊の自分を見られた後の反応としてはあまりに思いきった行動だろう。そんな反応に蓮はもちろん、土道も戸惑い

の様子だ。

「えっ!?何をしてるって聞かれても…」

「あつ、そうですね。ごめんなさい!…もしかして、また…」

まるで記憶喪失の患者のような様子の折紙は、変な事を聞いたと謝りながら、膝をはたきその場に立ち上がる。だが言葉の最後に気になる事を呟いた。それは土道も聞こえていたらしく『聞いたか?』と言わんばかりの目を向けてきた。

「また?…な、何がだ…?」

「え?あ、その…実は少し前から、たまに意識が途絶える事があるんです。多分貧血か何かだとおもうんですけど…」

ばつの悪そうな様子で言う折紙の話を聞きながら、蓮は頭の中でその事を整理する。まず、折紙の言う“貧血”がさっきの精霊状態の事を言ってるのは間違いないだろう。だが、それを貧血など言ってるのは明らかに噛み合わない。秘密を守りたいのであれば、自分たちを殺すのが間違いなく正しい行動だっただろう、まあ、後日ニュースにはなるだろうがそれで折紙個人が疑われる事はあるまい。

要するに、あの状況で貧血のような事が起きて意識がないは明らかに通用する言い訳では無い。しかし、折紙はそれを分かってなどいない…愚かとは違う様子だ。

(本当に…何がどうなってるんだか…)

今の折紙は先ほどの危険性はないと判断し、混乱する頭を抑えながら少し気分を落ち着かせようとリラックスする。昼間の土道との会話からも自分が精霊であると分かっている様子だった。だが、実際そんな事があり得るのだろうか。

「あのっ…もしかして、神代 蓮さんですか!?!」

そんな思考も自分の名前を呼ぶ声によって中断される。こんな場で自分の名前が呼ばれるとは思っておらず、少々驚いた様子で、自分の名前を呼んだ者…折紙に顔を向ける。

「やっぱり…朝、教室で見た時、まさかと思ったんですけど、あなた、蓮さんですよ?ASTで同じ部隊にいたんですけど、覚えてませんか!?!」

「は？俺？」

胸元で手を握り、何やら興奮した様子で聞いて来る折紙に、少し押されるもすぐにペースを戻し、コホンと咳払いした。

「ああ、折紙ね。覚えてるよ。人のブレザーの匂いを嗅いだり、映画館でノーブラでやって来る折紙だろ」

「えっ？ええ！私、そんな事しませんよ！誰と間違えてるんですか！？ていうか誰ですかそれっ!？」

異常とも言える行動の数々に、折紙は驚きと羞恥の混ざったような顔で声を上げるが、蓮は思わず『お前のことだ』と言いたくなるが寸前で飲み込む。おそらく隣で苦笑いを浮かべている土道も同じような心境だろう。

「ま、まあ、そんなよく話すような関係じゃありませんでしたから仕方ないですよね…。私、同じASTの戦闘部隊に居たんです。そこであなたの整備した装備をいつも使っていたんですが、いつも一点のミスもなく、とても助かってたんです。いつかお礼を言いたいと思ってたんですが、なかなか機会が無くて…」

「へ、へえ。そうか」

まるで憧れの人間を見てるように饒舌になる折紙に、終始圧倒されっぱなしだ。まあ、蓮自身がそんな目で見られるのが苦手という理由もあるかもしれないが、まるで機械のような折紙にこのような事を言われるのは違和感しかない。

「部隊のみんなが蓮さんに会いたがってましたよ。たまにで良いので顔を見せてあげてください」

「…まあ、気が向いたらそうする」

そんな適当な返しに折紙はニッコリと微笑むと二人に頭を下げ、早足で屋上を去ってしまう。折紙の姿が視界から消えた瞬間、蓮は大きく息を吐き出して手すりに寄りかかる。土道も呆然として呆気にとられたような様子だ。

「…貧血ねえ。随分と寝癖の悪いことで」

「折紙は…自分がやった事を知らないのか…?」

命を奪った後とは思えない彼女の反応に、土道もその答えに至った

ようだ。信じられないと言う顔でこちらを見る土道に蓮は首を竦める事しか出来ない。そうしながら、蓮は屋上の床をコンコンと打ち鳴らす。

「折紙ならもう行った。もう出てきてもいいだろ」
「え？」

蓮と自分しかいないこの状況で一体誰に言ったのかと聞こうとした瞬間、床からさつき殺された狂三がニョキッと顔を出す。彼女の登場に土道は多少息を飲んだものの、それだけの反応だった。

「…さつきの狂三は分身体だったのか。また、使い捨てるようなやり方を…」

「まあ、それが狂三とその分身体との関係なんだろう」

そう答えたのは狂三に向けて手を差し出す蓮だった。それは働き蟻と女王蟻との関係に近いだろう。働き蟻は女王蟻に尽くし、命すら顧みない、なぜなら女王蟻の死はその巣の崩壊を意味してるからだ。分身体達もそれを理解し、本物の狂三の為に行動し最悪の事態を防ぐ。そこに他者が口出しする要素などない。

屋上の床に立った狂三は、折紙の消えた先を視線を向ける。

「今の折紙さん、どう思われまして？」

「どうって聞かれてもな…」

狂三の質問に、土道は顎に手を当て困惑の表情で考える。そんな中、声を上げる者が一人いた。

「一つ、分かった事がある」

「ツ!?なんだ？何が分かったんだ」

隣でそう言った蓮に、土道は待つていたと言わんばかりに顔を向ける。後日、折紙とのデートを取り付けてある土道にとって今の折紙に対する情報は封印の手がかりと同時に命綱ともなり得るものだ。それを聞くと、蓮は勿体ぶることなく答えた。

「今の折紙、俺は“苦手”だな」

「…は？」

「ふふ…」

情報と言うより、主観が入りまくった“感想”に土道の表情が固ま

り、狂三が口元を押さえて笑う。そんな二人を無視してそこからさらに言及を続ける。

「元々あんな優等生タイプは嫌いなんだが、今のあいつはそれに加え、前とのギャップの差が見えててはつきり言ってる気持ち悪い」

「あら？でしたら前の折紙さんの方がよろしいのですか？」

「まあそんなところ。あっちの方が言いたい事をハッキリ言えてたし、言葉で傷つける事なんて考えなくて良かったから」

どうやら狂三にはウケている様子だが、土道は固まった表情のままその場に崩れ落ちる。時によっては自分も苦笑いぐらい浮かべてたかも知れないが、何故こんなタイミングで真面目な顔でそんな事を言うのか。期待してただけにそれが憎らしい。

「しかし、あんな折紙さんでは、【十の弾^{ユツド}】を使用しての情報収集は難しいですわねえ」

「いや、そう言わず何とかならないか？もちろん、タダでしろとは言わないから」

そう言いながら蓮は右腕の袖を捲り、腕を露出させる。その瞬間、右腕にバチバチと稲妻のようなものが走ったかと思うと、腕は一瞬でその姿を変える。それはもう一つの右腕である「バスター」だった。

その変化した右腕を狂三へと伸ばしていく。今のままでは難しくとも、自分の力を与え、能力を上げた状態ならば難易度は緩和されるかも知れないと考えたのだ。だが、その途中で蓮は自分の両足の感覚が不意に消える。

(あ…れ…?)

一瞬だけ自分の足が無くなったように感じ、その身体が前のめりに倒れていく。その光景をスローモーションに見ながら何があったのか考えるが、その答えは出てこない。そんな事をしている間にも転倒へのコースを辿っていくが、その間に狂三が割り込むとその身体を受け止め倒れるのを防いだ。

「…?なんだ、何が…」

「意識をしつかり持ってくださいまし。あなたは大丈夫ですわ」

急に起きた身体の異常に珍しく困惑するような声音で呟くが、狂三

はそれに被せるかのように大丈夫という。それを言う狂三は、どんな表情か確かめたいと思うが彼女の胸元に顔があるせいで上を向く事が叶わない。

「ゆっくり…ゆっくり両足に力を入れて立ち上がってくださいまし。焦らなくても結構、とにかくご自分のペースで…」

それに従い、まるでリハビリでもするかのように蓮は自分の足に力を入れて立ち上がる。そうしてみるとさっきの消失が嘘のように感じ、ちゃんと自分の力で立つ事が出来た。それを見た狂三は安心したような様子だ。

「どうしたんだ、急に倒れて…」

近くにいた士道も、何か変だと思ったようだ。そう聞かれても自身も理由を理解していないため答える事が出来ないのだが、狂三はそれについて何か知っている様子だ。

「その症状はその腕の力を使い過ぎた副作用のようなものですわ。少し休めば平気ですのでご安心を」

「副作用？力を使い過ぎた？」

「…まず、わたくしの〈刻々帝ザフキエル〉にある時間逆行の弾、【十二の弾ユッド・ペイト】はその能力ゆえに消費するエネルギーの量は他の弾とは比べてものにならないほど大きいんですの。それを蓮さんは三人分もの量をお一人でお支払いになりました、それではそうなるのも無理はありませんわ」

狂三の説明を聞きながら、自分の右手を見つめて理解する。一度、五年前に戻るのに一人分、その先でもう一度やり直すために五年前の狂三に渡したのが一緒にいた士道の分を含めた二人分。これで三人分支払った事になる。その結果を見て自分が思ってた以上の力を消費していた事に気がつく。

「悪い事は言いませんわ。今はご自分の休養に集中した方が賢明な判断ですわ」

「でも、あいつを放置するわけには…」

「今の折紙さんは、前と違って街をただ蹂躪するなんて事はするようには見えませんわ。ならば、今すぐにしなければならぬという訳で

もないでしょう?」

目を細め、狂三のいう事も一理あると考える。今の折紙の状態なら、そこまで急ぐ必要もないと考え、〈バスター〉を引つ込めた後『それもそうだな』と答える。それに狂三は満足した様子だ。

「それでは、【十の弾】^{ユツド}を折紙さんに撃つというお話は、蓮さんの力が全快した後という事でよろしいですね。では…またお会いしましょう…」

そう言うと狂三はお辞儀した後、足元の影の中に消えていった。蓮は、改めて自分の身体を見下ろす。狂三は全快したのちと言っていたが数日後に折紙と土道のデートが控えている。それまでに元の状態に戻れるだろうか。

「そういう訳らしい。まったく、不便な身体だよな」

「いや、なんでそんな他人事みたいに…」

自分の事を言ってるとは思えないそんな様子でため息をつく。そんな蓮に土道はこんな状態にしてしまった責任と心配の目を向けるが、本人はそれを一蹴した。

「こんな状態だからってやる事は変わらない。俺は数日後のデートのいざという時に備える。お前はまあ、いつも通りで」

「え? あ、うん…」

それだけを伝えると、屋上の出口兼入り口へと歩いていく。その途中、何かを思い出したような声を出すと、クルリと土道の方に向き直る。

「あと、今の俺の状態は司令官殿には言うなよ。どんな嫌味言われるか分かんないから」

「言うなって言われてもな…その前に時間遡行の事を説明しないと…」

「ああ、そういやそうだな」

本題の前に大きなハードルがあったと理解し、笑いながら歩いて行ってしまふ。だが、土道にはそれが嘘だと分かっていた、蓮が一番気にしているのは、それを知られ十香達を心配させてしまう事だろう。そして、折紙とのデートで力になれない事…。

「本当に…悪い。お前ばっかりに負担をかけさせちまって…」

蓮の働きに対し、土道は感謝と謝る事しか出来ない。そんな自分が出来る事は折紙とのデートを蓮に負担をかけさせずに成功させる事。それに気合いを入れさせようと両手で自分の頬を叩く。

「よしっ！いつも頼りっぱなしなんだ、いつまでもこんなんじゃないよな…」

いろいろあったが、デート当日への気合いへ繋がったのは幸いだろう。それを心に刻みながら、蓮の後を追うように出口へと足を進める。

77話

「ねえ、○○は僕の事。好き？」

「ええ、あなたは変なところがありますけれど、大切に思ってますわよ」

周りが木に囲まれた場所で、二人の人物のそんなやりとりがされる。そこは多くの木が並び立ち、その枝の隙間から地面に暖かい日光を降り注がせるそんな場所。そこで一人が自分を膝枕してくれているもう一人にそう聞くと、女性のそんな声が返ってくる。

「うん…、僕も○○の事が好き…」

その回答に満足の笑みを浮かべ、後頭部にある太ももに全てを預け、目を閉じる。自分の全てを託せるようなそんな不思議で暖かい状況に眠りたくなるが、それに抗い、僅かに目を開ける。

そして、今現在、自分を膝枕しながら、頭を撫でてくれている人物に顔を向ける。だが、その顔は逆光効果のせいでハッキリと見えにくい。

「……………」

見えないなら、せめてこの手で触れて確かめようとその顔に右腕を伸ばす。無言のその行動に相手は疑問を口にする事なく、ただクスリと笑うだけだった。ゆっくりと近く自分の掌がその頬に触れようとするその瞬間。

ピピッーピピピピッ!!

「ッ!？」

突如鳴り響いたその音に、蓮は目を覚ます。目覚めたと言うより叩き起こされたという表現が正しいような目覚めだ。鳴り響く音の中でため息と共に自分の頭を抑える。

「ああ…寝てたのか…」

今自分がいるのは、自宅の隠し部屋。数台のパソコンと大量の電子部品で支配された領域で、椅子に座って居た。学校から帰って来て、この部屋に入ったものの別に寝るつもりは無かったのだが、これも狂

三の言っていた副作用の一つだろうか。

そんな事をボンヤリと考えながら、自分を叩き起こしたもの：机の上で音を立て続ける携帯電話を手取る。画面には『司令官殿』と表示されている、電話をかけてきたのはどうやら彼女らしい。どんな内容でかけてきたのか大方察しがつくのだが、通話を選択しそれを自分の耳に当てる。

『あ、やっと繋がったわ。さっきから何回も電話かけてたのに、なんで出なかったのよ』

「あー、司令官殿？さっきまで寝てたから気づかなかったんだと思う」
向こう側からは怒りが半分、心配が半分といった様子の琴里の声が聞こえてくる。何回も言っていた辺り、帰ってきてからの短時間で随分と深い眠りに入ってしまったらしい。昼寝などらしくないと自分でも思う。

『昼寝してたって事？まあ、何でも良いけど、そのせいで鳶一 折紙の今後の対策についての会議が欠席になっちゃったのよ？まあ、大雑把な事は私の口から言えるけれども…』

「そんな細かい事は言わなくて良いよ。俺は今後どうすればだけ言ってくれば」

『え？分かったわ。蓮には、今週の土曜にある士道と鳶一 折紙とのデートで、二人の近くで控えて貰うわ。まあ、やる事はいつも通りだけど、相手はあの〈デビル〉だから十分に注意してちょうだい』

普段の蓮らしくない、大雑把な言葉に琴里は少し戸惑ったものの、話し合いで決まった今後の行動を伝える。それを聞きながら、自分を心配するような事を聞かれるわけでもなく、いつも通りの様子から士道は今の自分の状態を話してないと確信する。

『でも、〈デビル〉に対する推測とかはちゃんと聞いてほしいから、明日にでも家に来てちょうだい。それじゃあ…』

「あつ、まだ切らないでくれ」

『ん？何？何か聞きたい事でもあるの？…』

琴里を呼び止めた所で、何故自分がそんな事をしたのか理解出来なかった。別に何か分からない事やどうしても聞いておきたい事が

あつた訳でもない。まるで口が勝手にそう言ったかのように喋っていた。

「え？いや、その…」

どうしてもそんな事をしたのか、蓮自身も理解出来ず、無意味に視線を泳がせ部屋中を見渡した。呼び止めておいて何も聞かないのも失礼だろうと思い、必死に何か話題を探す。そこで蓮の視線が部屋内のパソコンのデータをまとめている親の端末に目が止まった瞬間、どうしてそんな事をしたのか察した。

(もしかして…俺は俺自身のことを知って欲しがっている…?)

今は、自分の正体や本当の名前を知って貰う良い機会だろう。琴里なら、その事実を変に広げる事なく十香達へと伝えてくれるだろう。それに気づき、少し上擦った声音で話す。

「いや、その…俺…実は…えっと…」

頭では理解している筈なのに、言葉にしようとする喉に石が詰まっているかのように言葉が出てこない。出てくるのは意味の無いものばかりで、言葉として成立しなかった。

『どうしたのよ？何か言いたい事があるんじゃないの？』

「いや、やっぱり何でもない。明日、そっちの家に行くよ…。それじゃあ…」

琴里の問いに、逃げるようにそう答えると通話を切る。再び一人だけとなった部屋で蓮はため息とともに机に突っ伏した、その胸にあるのは『言えなかった』という後悔だ。

「何で言えなかった…。十分に信用出来る相手だっただろうに…」

それは間違いない真実であつたと自分自身に確認する。ならば、何が自分を止めたのか、その背後にあるヘラタトスクという組織の存在か？あるいは、他者を見る時の自分のアドバンテージ…優越感か…。

「まさか…それが…」

それが頭に浮かび、顔を上げた蓮の視界にキラリと光るものが映る。それは一見、正方形の形をした水晶だった、しかし、見た目はそう見えても中身はパソコンに匹敵するスペックを持つ携帯端末。そ

れが室内の明かりを反射させ光っているように見えたのだ。

「…ツ!!」

蓮はそれを見た瞬間、歯をくいしばるとそれを掴み部屋の壁に向けて投げつける。そこそこの力を込めたのだが、端末は壁とぶつかり大きな音を響かせるだけで傷一つつくこともなく、乾いた音と共に床に転がる。

「他人を見下して…何様のつもりだ…!隠し玉を持ってて…安心して
るお前は…」

床に落ちたそれを睨みつけ、拳を強く握る。その言葉は全て自分へと戻ってくるものだど理解している。丸腰になるのが怖くて、何か武器を隠し持っていけないと日々生きていけないようなそんな臆病者。そんな自分にただただ呆れ怒りが湧いてくる。

「もう…終わりだ。皇帝は…」

小さく息を吐いた後、電話中に視界に入った室内全てのパソコンの統制をしている端末の電源を入れる。そして、十桁以上のパスワードを入力し、操作出来るようにする。

そこからキーボードをカタカタと叩き、最後にキーを叩いた瞬間、画面が真っ赤になるとそこに八十秒のカウントダウンが表示される。
「……………」

それを0になるのを見届けることなく、目を伏せた後、蓮は室内の明かりを消し部屋を出て行く。もう訪れる事のないであろうその部屋に未練などカケラも残さないように真っ直ぐに。

無人となった部屋で、その端末の画面だけが光を放つ。そのカウントが0となった瞬間画面には『NO DATA』と表示されその画面は自動的に消える。

これで世界を騒がせていた”皇帝”は死んだ。これから先、何かを生み出すことはなくなった人々の記憶から消えゆくだけの存在へとなった。結局、ジェイク・メイザースは誰かに秘密を打ち明ける事はなく、消去し忘却するという形で処理した。秘めていたものを伝えるのではなく、その必要を無くさせて口を閉ざしたのだ。

いつか壊れて、自分の真実を漏らすと予想していた事は片手の指の

数で数えきれただけの人物だけが理解し、闇へと葬り去られた。その瞬間に立ち会ったのは世界で一人だけだ。

そして、来るべき週末の土曜日。天気は晴天、デート日和としては文句のない環境だ。そんな日の天宮駅前への道を歩きながら、土道は耳につけたインカムで会話をしていた。相手ははるか上空にいるヘフラクシナスの艦橋に座っている琴里だ。

『にしても、随分早くない？まだ約束の四十八分前の時間じゃない』
「いや、折紙だったらもう来ててもおかしくない。いなくても待たせちまうよりはマシだろ」

折紙との待ち合わせは十一時なのに対し今の時間はその四十八分前、十時十二分だ。インカムで会話しながら携帯でそれを確認しても土道はそれを早すぎるとは言わずに、相手はもう来るとすら言う。それに琴里は『ふーん』と意味ありげな声を出す。

『随分と詳しいのねえ、ただのクラスメートの割には』
「うっ…いろいろあつたんだよ。それより、蓮は今どこにいるんだ？もう駅前広場で待ってるのか？」

このままでは自分が不利な話題になると察し、話題を切り替えを含めた疑問点を聞く。いざという時に動いてもらう蓮とは朝に会ってるわけでもなく、行く途中に顔を合わせる手筈という訳でもない。折紙の事を考えると出来るだけ近くにいて欲しいものだが、琴里からは意外過ぎる答えが返ってきた。

『ああ、蓮なら家を出た瞬間からついてきてるわよ。今も土道を見ているでしょうし』

「えっ!?!どこから…」

慌てて周囲を見渡すが、今いる周りには人っ子一人居なく、自分を見ている誰かがいるだなんて言われなければ何もしないで歩き続けに違いない。必死に首を振る滑稽な土道を鼻で笑った琴里は、答え合わせとばかりに蓮の居場所を教える。

『右後ろの方向にある茂みの中。よく見ると黒猫がいるでしょ?』
「茂みの中…?ああ、確かにいるな…」

指示に従い、背後を振り返り茂みの中を見ると、見事なまでの黒い毛並みをした猫が隠れていた。毛の色が黒なものもあり最初から探す気で見ないと気づかないだろう状態だ。

『あれが蓮よ。ずっと家から見えたのよ』

「あ、あれがか？どうやって…」

『少し前に七罪の天使によく似た力を蓮も手にしたじゃない。あれを使ったらしいわよ』

そう言われて、土道は思い出す。精霊の一人である七罪の天使、〈贗造魔女〉^{ハニエル}の力を別の形でものにしていた。その力で別の生き物になるのをこの目で見ていたのだ。

土道はその黒猫に、挨拶がわりとばかりに手を掲げると、『ニャア』という返事が返ってくる。それは『安心しろ』という意味なのか、それとも『さっさと歩け』と言ったのかは本人以外分からないだろう。

『こんな風に蓮は土道と鴛一 折紙とのデートについて行くわ。もちろん、ずっと黒猫が追いかけてくるのも怪しまれかねないから、臨機応変に姿を変えて行くから安心しなさい』

「お、おう。それは安心だな…」

『なんで引いてるのよ。あんたが』心配だから出来るだけ近くに待機させて欲しい』って言ったんじゃない』

「ま、まあそう言ったけど…それはいざという時の時のためって意味で…」

ここまで来ると安心というより恐怖というものを感じる。それに頬を引攀らせるが、自分がそう言ったのは事実なのでやり過ぎなどという事を言える訳もなく歩き続ける。少し歩き、曲がり角を曲がる瞬間、土道は黒猫がいた茂みに目を向けるが、そこには黒猫の姿は無かった。

駅前広場の噴水前で、約東の三十分以上前だというのに合流する土道と折紙。それを上から見下ろしている存在があった。

(今の所は折紙に異常は無し…、こう見ると普通なんだけどなあ)

周囲にある電灯の上に止まる一匹の鳩。街中にいたとしても気に

すら留めないであろう存在に変身している蓮は、緊張しているのか士道とごちなく話す折紙を見下ろしてそう考える。そして思い出す、数日前に琴里から言われた事を。

『鳶一 折紙は、精霊の姿を見た瞬間、” 前の世界の記憶を取り戻す”』

あくまで仮説という前置きをした後に言われた言葉だが、折紙は精霊を見た瞬間に〈デビル〉という精霊へ変化するスイッチが入るといふ。だから、あの時霊装を纏っていた狂三が殺され、一緒にいたというのに自分たちには攻撃して来なかった。

結論から言うと、鳶一 折紙は自分が〈デビル〉という事を隠しているつもりなど無かったという事だ。

(随分と歪な世界になったな…、やっぱりそんな都合良くはいかないのか)

自分たちは過去に戻り、行ったのは折紙の過去を変えようとしたが悲しい部分だけを綺麗に無くそうなど都合が良すぎたのだろ受け止める。ただ、その後始末をなぜ自分が鳩になど変身してやっているのだろうか。…まあ、上司である琴里からの頼みであつたからなどと言ってしまうばそこまでな疑問なのだが。

そんな事をボンヤリ思っていると、見ていた士道と折紙が歩き出し移動を始める。行き先は〈フラクシナス〉の命令か、今話し合つて決めたのかは分からないが二人を視界にキープし続けるため、羽を羽ばたかせて空へ舞い上がった。

「だ、大丈夫か？体調が悪いのなら少し休んで…」

「ううん…大丈夫…。今日の私どうしたんだろ…？」

デート場所の一つであつた洋服店を後にした折紙と士道だったが、店を出てから折紙は何やら苦しそうに額を抑え、士道はそんな彼女を心配する素振りを見せていた。折紙がこんな理由なのは、さっきの店で士道が少し目を離れた瞬間に、折紙がスク水に頭に犬耳のカチューシャ、お尻に犬尻尾のアクセサリー、そして首に革製の首輪とアブノーマルな格好をしていたからだ。

それを見られた折紙自身は、最初は恥ずかしそうに顔を赤らめた
が、その後何故か苦しそうに顔を歪めたのだ。そんな状態の折紙と共
に今は歩いている。

「ま、まあ、気分が悪くなったのならすぐに言えよ？無理しないでさ」
「ありがとう…、でも、私、さっきはなんであんな格好を…キャッ!？」
話の途中で折紙はそんな短い悲鳴と共に尻餅をついた。それと同
じようなタイミングで折紙とは違う驚きの声が聞こえた事から、どう
やら誰かとぶつかってしまったと土道は理解した。前を見ると、折紙
のように倒れている人物がいる。

「いやいや、ごめんなさいねえ。うっかり前を見てなかったもんだか
ら…」

そう言いながら立ち上がったのは、杖をついた老婦人だった。髪型
は白髪のベリーショートで、装いは真っ青なりブタートルネックニツ
トに、Aラインのロングスカート。そして歩きやすそうなウエッジ
ソールの黒いブーツを履いていた。杖をついていたが、その背筋は
シャンとしており、その必要性を感じさせないものだ。

そんな不思議な雰囲気を持つ貴婦人は、折紙の前まで歩いてくる
と、心配そうな表情と共に手を差し出してくる。折紙もその雰囲気
に呆然としていたが、我に帰り、『だ、大丈夫です』と言って立ち上がる。
「わ、私の方こそ、前を見てなかったので…、えっと、お怪我はありま
せんか？」

「私は大丈夫よお。こんな年齢だけど結構頑丈ですからね」

折紙の心配を吹き飛ばすように微笑む。まるで物語から出てきた
ようなそんな感じを受けさせる人物だ。そんな老婦人は土道と折紙
の顔を一回ずつ見ると、まるで微笑ましいものを見るような表情をす
る。

「あらあら、もしかしてお二人は恋人同士かしら？どうやらデートの
お邪魔をしちゃったようねえ」

「……っ、恋人ですか!？」

「デートってどうか、なんと言うか…」

土道は困ったような表情で頬をポリポリと掻く。まあ、デートして

いるのは間違いないためどう反応していいのか難しいところだ。それより、隣にいる折紙の動揺っぷりが凄まじいのが問題だ、見てて心配するほど顔を真っ赤にすると『恋人』という単語を何度も呟いている。そんな折紙を見て、老婦人は口に手を当てて上品に笑うと『若いっていいわねえ』と言う。

「さて、要らない年寄りはこの辺りで退散しようかしら。お二人共、楽しい一日を過ごしてくださいねえ」

そう言うと、ペコリと頭を下げ士道たちとすれ違うように逆の方へと歩いていく。不思議な人だなあと思いつつ折紙を見ると、何やらモジモジと恥ずかしそうに下を向いていた。どうやら、自分たちが他から見たら恋人に見えるという事を気にしているらしい。

そんな折紙を見てどうしようかと悩む士道は、ある事を考え口を開く。

「あの…さ、俺たち他の人から見たらそう見えるらしいぜ。折角だからその…手、繋いでみるか？」

「えっ!? えええ!?」

その言葉にさらに狼狽する折紙。それを見て流石に急すぎたかと思いい、慌ててフォローを入れる。

「あついや、もちろん折紙が嫌なら良いんだ! 変なこと言っちゃまって悪い!」

折紙の反応を見て、慌てて手を振り謝る士道。流石に急過ぎたかと思っただけ、折紙は緊張気味に手を差し出した。

「べ、別に嫌だったとかじゃないよ…? ただ、ちよつとびつくりしちゃって…。確かに、人も多いしはぐれたら大変だよね…。だ、だから…士道くんの言う通り、手を繋いだ方がいいよね…」

恥ずかしそうに顔を逸らす折紙は、側から見ても無理しているのが分かる。一瞬、自分が言っておきながら本当に握っていいのか悩んだが、ここで引いては攻略など出来ないだろう。そう考え、差し出された右手をギュツと握る。

「ひゃっ!?」

「よ、よし、じゃあ行くかうか…」

折紙の甲高い声が聞こえてきたものの、状況が進展したのは確かだ。その手応えを感じつつ、土道は歩みを進める。その時、チラツと折紙の顔を見るが、恥ずかしがっていたもののまんざらでもなさそうな様子を見てホツと息をついた。

『へえ、やるじゃない。流石ね』

「お、俺だって何回もデートしてるんだ。これぐらい出来るようになるさ…」

そこから歩いてしばらく歩いた先にあつた公園で、折紙がトイレに行つて居ない間に土道はへフラクシナス<に居る琴里とインカムで話し、彼女からの賞賛に小さく胸を張る。手を握る瞬間、動揺してたのは確かだがそれを気にしないのが男の意地という奴だろう。だが、琴里はその意地に対して『ん?』と疑問の声を出した後『ああ、そういう事ね』と納得のいった事を言う。

『別に土道の事を『流石』つて言ったんじゃ無いわよ。ただ、あの場でそういうムードに持つていったあの老婦人がすごいって言ったの』

「…琴里、もしかして…もしかしてだがあの人つて…」

琴里の妙な言い回しに、乾いた笑みと共に頭にまさかという可能性が浮かぶ。それは1%に満たない可能性だったのだが、現実的にはあり得なくないものだ。会話先の琴里も土道がそれを察したのを感じたらしく、笑っているのが見える。

『あら、珍しく鋭いじゃない。あれも蓮の変装よ。いい仕事するわね』

「ああ……」

乾いた笑みから一転し、泣きそうな表情へと変わると座っているベンチで、燃え尽きたボクサーの如く項垂れる。同時に心の中で今日一日、親切な人間には絶対に心を無防備にしないと誓うのだった。

78話

ある街の道端に一人の少年がゴミのように捨てられていた。道の脇で蹲りながら座り、虚ろな目でどこかを眺め、周囲の寒さからその身体は青白くなっている。側から見たら死体のように見えかねない状態だが、呼吸で僅かに揺れる胸と口から出る白い息がまだ生きてる事を証明している。

だが、その瞳から光が消えるのも時間の問題でしかない。この状況から助かる宛てがあるわけでも無く、まだ十代にも満たないであろう小さな命はそのまま世界から消えるのが運命というものなのだろう。だが、そんな少年に手を差し出す者達がいた、それは悪魔の誘惑だったのかもしれないが、少年は偶然、自分を拾ってくれた者達の元で無から少しずつ物事を積み上げてきた。そうしようという考えに至ったのもある意味、当然の流れだったのかもしれない。

ようやく人らしく生き始める事が出来て、最初に感じたのは自分の境遇。家族はなく、友達もいなければ恋人もない。そして自分が居ていいと思える場所さえも…。

ならば、自分がその場所を作ろう。そうすれば血の繋がりは無くとも家族が出来る、共に笑いあえる友人が出来る、自分の全てを知っても愛してくれる恋人も出来るだろう。そして、自分で築き上げたその場所なら、自分の居場所になる…。

そう信じた少年は、見事偉業を成し遂げた。それにより、少年の手元には地位、名声、金と全てが入ってくる。外の世界では自分の名前を叫んで喜ぶ人間がいる、札束をレンガのように重ねて頭を下げてくる金持ちがいる。だが、それを見ても少年の心には僅かな達成感など生まれはしなかった。

地位が欲しかったわけでもない、金持ちになりたかったわけでもない。欲しかったのは自分の居場所、自分の立場を気にせず笑ってくれる友、そして自分の全てを受け止めて微笑んでくれる女性。それを求めて進んできて、その為なら全てを投げ出しても惜しくはない、そうとすら考えて進んできた。その結果は…

十一月となり、日の入りが早くなり、街は闇夜に沈む。土道と折紙がそんな街を一望できる高台の公園へと訪れているのを木の枝の間から観察する蓮は、ホッと息をつく。

今日一日、二人を観察したわけだが概ね平和的なデートだったと言える。まあ、時々折紙の奇行があったものの、今いる公園で二人つきりというシチュエーションは願っても無い状態だ。そんな場で土道は折紙の手をギュツと握る。そうしながら彼女に何やら言っている様子だったが、流石にそれまでは聞き取れない。

そんな時、折紙が公園の外縁部に設置されていた手すりから身を乗り出し、何やら空を興奮した様子で指差す。その先では暗い空に流れ星がキラリと横切ったのが見える。

この辺りで珍しいと思ったのも束の間、折紙が身を乗り出していた部分の手すりが老朽化してたのか、メリツと音を立てて崩落したのだ。当然、折紙もそのまま放り出されるように落ちていく。

それに目を見張ったが、幸い土道が手を掴んでいたためその途中で折紙の身体を引っ張り上げる。何とか折紙を救出し後方に倒れこむ土道だが、その上に折紙が覆い被さるように乗りかかる。予想外のイレギュラーがあつたものもはや天がキスをしろと言っていると錯覚するほどの流れだろう。

(……でいくか……)

そんな状況を見て、蓮も手に汗を握る思いだ。だがそれはすぐに危機感へと変わる。暗闇の中で土道の左腕に炎が揺らめくのが見える、それは琴里の治癒の力だ。

(不味い……！)

今の折紙は、精霊と認識できる現象を見ると〈デビル〉となる。目の前にいる折紙がそれを見過ごす訳はなく、土道を押し倒すような体勢からゆらりと立ち上がる。同時に蓮は翼を羽ばたかせ、木から飛び出した。

「琴里！琴里！！」

『きゃあ！！』

インカムから琴里の悲鳴が響き渡る。一心不乱に妹の名前を叫ぶ土道の目には、上空を浮遊していたヘフラクシナスが随所から煙を出してそのダメージを露わにしながら高度を下げていく、そんな光景をインカムを抑えながら見ている事しか出来ない。

「……………」

そして、ヘフラクシナスを落とした元凶である折紙は胎児のように身体を丸め、周囲に漂う”羽”の先端を土道へと向ける。ヘフラクシナスの横槍が入ったとはいえ、滅ぼすのは土道であると考えているようだ。

「お、折紙……………」

反転した折紙の圧倒的な力の前に土道は動くことができない。こんな状況でも説得をすべきかと考えるが、今の折紙にその声が届くとは思えなかった、結局、土道に何をすべきか考える時間もさせる余裕も与える事なく、折紙は無情にも漆黒の光線を放ちそれは真つ直ぐに土道へと向かっていった。

しかし、それと同じタイミングで近くの木からガサガサツと何かが飛び出し、土道と折紙の間に入る。それは折紙が向けた殺意と同じ色をした、真つ黒な鴉だった。瞬間、鴉の身体が光り輝くとその形を人型へと変える。

「そういうプロポーズは遠慮願おうか！」

光が止んだ時、その場にいたのは今日一日土道と折紙を追跡していた蓮で、その右腕にヘバスターを素早く顕現させ光線を弾き飛ばす。その後、慣れた動きでローリングすると土道の前へと移動した。

「デートはここまでだ。土道は下がれ！」

「あ、あいつを…折紙を止められる算段があるのか？」

どうするのかと言わんばかりにそう聞く土道だったが、ため息をしながら細目で睨んできた蓮の反応が語っていた。『そんなもの、俺が知りたい』と。だが、戦う方法が無いわけではない。蓮は左腕に銀色の金属質な輝きを放つ籠手、ヘウイトリクを装備すると、その腕を折

紙に伸ばす。

(俺はあいつと中距離で戦っていた…)

七罪から聞いた過去の自分の判断を信じ、籠手を稼働させる。腕に装備された籠手はカチャカチャと音を発しながら動き、縦に小さな弾丸のようなものが連なったマガジンを露出させる。それらは上から順に低い音を立てながら発射され、折紙へと向かっていく。

「……………」

折紙はそれらを見ても回避することではなく、後部から銀色の粒子を噴出させた弾丸は次々折紙へと命中し、白い煙でその姿を隠す。計八発の弾丸が全て命中し、辺りには季節だけではないヒンヤリとした空気が漂う。

折紙を隠した煙は次第に晴れ、隠していた部分を明かしていく。それらの地面では霜が張り付き、草木も完全に凍りつきまるでガラスのようにバツキリと砕け、生命活動を終えている。しかし、そんな中でも、折紙は何もなかったかのようにうずくまり、存在していた。

「なっ……」

「ああ……なるほど……」

折紙が平然としていた事も驚いたが、彼女を守るように出現している霊力の障壁を見て引きつった笑みを浮かべざるえなかった。直接攻撃だけでなく、周りの環境からも防御したと考えるとかなりのものだろう。そして、同時に理解した。自分は遠距離で戦っていたのは有効だからでは無く、あれがあったからだ。

「あれをどうにかしなきゃ折紙に近づけない…、何か方法は…」

文字通り折紙との壁を目にし、土道は何か探すように辺りを見渡す。それに対し蓮は折紙だけをジッと見つめ小さく息を吐く。同時にその右手に赤色の粒子が集まり武器を形作っていった。

「何か方法だっ？…そんなもの…」

光が収まった時、その手に握られていたのは柄頭が繋がりに両手剣の姿となっているヘトナティウだった。ただ、その刃は今まで見た薙刀状では無く、槍のように先端の尖った刺突に適している形となっている。

「一点突破しかないだろうッ!!」

愚問とばかりに叫ぶと、左足を強く踏み出し剣を折紙に向けて投擲する。人の手で投げられたとは思えない音とスピードで投げられたそれは、折紙とを遮る障壁に激突し派手な音と火花を散らす。

「すげえ……これなら……」

「チツ……予想以上だな……」

障壁とぶつかり、互角の戦いが起こしているへトナティウへに驚きと希望の表情を浮かべる土道に対し、蓮は目を細め舌打ちをした。何故なら最初こそは障壁に突き刺さり削っていたへトナティウへだったが、ゆつくりと壁に押し返されるのを見たからだ。時間経過で勢いが落ちたのもあるかもしれないが、それ以上に折紙を守る障壁が硬すぎる。

一点突破力が最強のへトナティウへですら突破するのは不可能。そう判断した瞬間、障壁とぶつかっている剣がオレンジ色に輝いたかと思うと、爆発し辺り一面に黒煙を振り撒いた。

「ゲホッ！ゲホッ！な、何が……」

いきなり起きた出来事に煙に咳き込みながら疑問を口にする土道だが、その手を誰かが掴み『こっちに来い』と言わんばかりに引つ張る。いや、青く輝く手で引つ張る人物など考えなくても分かるだろう。

「お、おい！どうしたんだよ！何とかなるそうだったのに！」

「いやーもう押し返されていた！予想以上に守りが硬すぎる！」

蓮は反論許さないとばかりに叫ぶ。ではどうするのかと土道が聞く前にそれに続けて話し出す。

「もう手元の武器じゃどうにもならない！一先ずこの黒煙に紛れて折紙から姿を隠す！あいつがへデビルへから元に戻るのを待つんだ」

精霊を目撃してへデビルへとなる折紙が、精霊を見失うと元に戻る可能性を考えての作戦だった。折紙が元に戻ったのを確認した後、土道が何食わぬ顔で合流すればいい。その間、蓮もへフラクシナスへのクルーの救助に行けばいいだろう。

だが、これは『もう作戦がない』と語っているのと同じだ。それに

折紙が二人を探して周囲に攻撃を始める可能性もある。とはいえ、どちらにしろ姿を隠して動向を見守るのが先決だ。蓮に引かれるがままに走る土道だったが、いきなりその手が下に引っ張られるように沈み動きが止まる。

「うわっ！ど、どうしたんだ？早く逃げなきゃ…」

「まさか…こんな時に…」

いきなり下に腕を引かれた事に驚きつつ、疑問の声を上げる土道。蓮も動揺と苦しみの混ざった声を煙越しに発する。下に引かれた事から考えると、横たわっていないながらも、膝をつき動けないのだろう。何か攻撃を受けたようには見えなかった。すると何故と考えた土道に数日前の出来事が思い起こされる。

これは数日前に学校で起きた時と同じだ。狂三は『力を使い過ぎた副作用』だと語っていたが、もう平気だと思っていたものがこんな夕イミングで来るとは予想出来なかった。それは蓮も同じだろう。

「くそっ…！しっかりしろ…！ここから離れるんだろ!?!」

動けないと理解した土道は、蓮に肩を貸し無理矢理動かし進む。しかし、力に關しては一般人の域を出てない土道にはゆつくりと引きずるようにしか動かす事が出来ない。ノソノソと動きなか、蓮は口を開いた。

「俺の事は良いから、お前は逃げろ。自分の身ぐらいは守れるから…」

「そんな事出来るかよ！急いで隠れなきゃ…」

「いい加減にしろ！二人とも死ぬぞ！」

いくら言っても手を離さない土道に蓮は声を上げる。だが、それでも土道は自分を引っ張り続ける。どこで頑固になってるんだかど内心苦笑いを浮かべるが、黒煙を数本の光線が貫き、二人の生命線とも言える目眩しを晴らした事でそんな事も出来なくなってしまった。

「もう手遅れだ！お前だけでも！」

「ダメだ！捨ててなんか行けねえよ！」

煙幕が消えた今、折紙から見たらノソノソと動く二人は格好の的だろう。今度は外さない、そう言わんばかりに彼女の周囲に漂う”羽”がその先に靈力を集中させる。最悪、土道だけでもと思いい、横に突き

飛ばそうと蓮がその肩に触れた瞬間。

「はああああ!!」

上空からそんな声が聞こえてきたと共に限定霊装を顕現させた十香が、巨大な剣を振るい漆黒の”羽”を吹き飛ばす。

「無事か!?二人とも」

「十香!」

「いいタイミングで来てくれた、感謝するよ」

士道は少女の名前を叫び、蓮はナイスとばかりに親指を立てる。なんともたくましい増援に安堵する二人だが、援軍は彼女だけでは無いらしく、巨大パペットの背に乗った四糸乃、光の鍵盤を体の周囲に出現させた美九、空には風を纏う八舞姉妹の姿がある。そして…。

「ああ!どうしたの!?何か大きな怪我でも…!!」

そんなヒステリックな様子で、大人の姿となつた七罪は地に降り立つと、蓮を士道から引き剥がすように自分の胸元に引き寄せると怪我がないか身体中を触り始める。大人姿の性格らしく無い、狼狽した様子の彼女に蓮は落ち着けと言わんばかりに手で制す。

「大丈夫。怪我をしたわけじゃ無い。でも、少し身体に支障が出ててね。立ち上がる事が出来ないんだ」

何時もと比べて力無い様子が七罪を不安にさせたらしい。確かに普段の自分らしく無いと我ながら思う。そんな七罪に怪我をしてないことと、今の自分の状態を伝える。それを聞いた七罪はホツと息を吐くが、すぐに鬼の首を取ったような得意げな表情を浮かべる。

「へエ、今は自由に動けないの…。なら、お姉さんが抱っこしておいてあげるわ。これなら大丈夫でしょ?」

一本取ったとばかりの様子で強く抱きしめる。その時豊満な二つの塊が身体に押し付けられる、普段、手玉に取られてるので仕返しのつもりだろうか?全くとばかりにため息をすると折紙を指差す。

「それは助かる。それで、鳶一 折紙、あいつはどうする?」

「鳶一 折紙…?あれがああの転校生なのか?」

その一言で皆の意識が折紙へと向いた。圧倒的な威容は放ちながら降臨するその姿。それを見た十香は確かめるように聞き返し、士道

と蓮は首を縦に振る。そう聞きたくなる気持ちも分かる、〈デビル〉が昼間に一緒に教室で過ごしていたクラスメイトなど信じられないし考えられないだろう。

「みんな、あいつを…折紙を助けるのに手を貸してくれ…」

土道のことだ、本当は皆に逃げてくれとでも言いたかっただろう。だが、そうしたところで自分一人に折紙をどうにかする事は出来ない。それを理解し、申し訳なさそうに発した言葉に精霊たちはキョトンとした顔をする。何やら呆氣にとられた様子だ。

「何を言っている。私たちは二人を助けるためにここに来たのだ。シドーがダメだと言っても手伝うからな」

「私とよしのんもお力になりたいです…」

「もう！ここで『逃げろ』だなんて言われたら、私たちが何で来たか分からなくなっちゃうじゃないですかー」

「年下の男の子二人が頑張ってるんだから、お姉さんとしても手を貸さない訳にはいかないんだから」

「かかか！よかろう！その覚悟に応え、我ら八舞が力を貸すとしよう！」

「請負。空は夕弦と耶具矢に任せてください」

上空にいる八舞含めて、皆が協力の意思を言う。そんな中、七罪に抱きしめられている蓮は自身の右腕を見つめる。今は衰え小さな青い輝きを放つそれは蓮の今の状態を表現していると言えるものだった。

（足りないからこそ…足りない者同士が身を寄せ合い、成功に向かうとする…。俺は…）

暗い冬場の空を、三つの影が飛び交う。その正体は耶具矢、夕弦の八舞姉妹。そして天使〈贗造魔女〉に乗った七罪と蓮だ。それらは複雑な軌道で空を飛翔し、そのすぐ後ろを複数の黒い光線が通り過ぎる。

「地上は無視して、空を一点狙い…か」

「そうね、奇襲を恐れてかしら？」

飛んでくる光線を避けながら、それを飛ばしてくる折紙を観察する。現在折紙は地上の十香達を気にもとめず、空にいる者達に向けて一方的な攻撃を繰り返していた。それらを耶具矢、夕弦、七罪は見事な動きで避け切っているものの、苦戦しているのには違いない。

足を動かせない蓮は、地上では機動性が皆無だ。それをカバーするため七罪が〈贗造魔女^{ハニエール}〉が乗せて共にいてくれているというのに、執拗と言える攻撃の巻き添えにしてしまうとは申し訳ない気分になってしまう。

「くく、奴とて宙を舞う我的存在は無視できぬ脅威と感じてるようだな！その判断褒めてやろうではないか！」

「思考。恐らく地上にいる十香達から攻撃を受ける心配が無いので夕弦達を狙っているのではないでしょう。厄介な方を最初に攻撃しているだけです」

「え？そうだったの!?私、ただ勘違いしていた恥ずかしい奴じゃん!!」
羞恥で顔を赤くしていても、きっちり回避をこなすのは流石の八舞姉妹と言えるだろう。そんなやりとりを聞きつつ、地上に目を向ける。そこには攻撃しているものの全てあの障壁に拒まれ、道を開けずにいる十香達が見えた。

（うーん、土道くん達に攻撃がいかないのは助かるけど、苦戦している以上助けに行かないとダメね…。だけど…）

七罪は心の中でそう思いつつも、心配の目を蓮に向ける。今の彼はいつもと違い無理が出来ない状態だ、そんな状態で折紙に立ち向かってでも守りきれぬ自信が無かった。八舞姉妹の助けでどうにか凌げている現状で、これ以上の無茶は危険だろう。しかし、折紙はそんな事を考慮してくれるはずはなく、攻撃はどんどん熾烈になっていく。

単純な光線だけでは落とせないと考えたのか、折紙本体から新たな”羽”が複数出現し、それらは彼女から離れ七罪達のいる空へ向かっていく。蓮はそれらには見覚えがあった。あれは折紙から離れ単独で攻撃してくるタイプのものだ。

「七罪！耶具矢！夕弦！あの羽は個々が独立して攻撃してくる！死角に注意しろ！」

「は？独立ってどういう、きやつ!!」

最初は蓮の言った事を事を理解出来ない様子の耶具矢だったが、飛翔する”羽”の先端から発射された光線が真横を通過するのを見てそんな女の子らしい悲鳴と共に、その意味を理解した。地上からの攻撃に加え濃くなつた弾幕に七罪はキツと歯を噛みしめる。

「蓮くん！落ちないようになりっかり掴まって！」

七罪のその声と共に、〈贗造魔女〉はスピードを上げ、光線の合間を駆けていく。地上でも空で起きている異常を知つたらしく、避け続ける二人に耳に戦っている十香の声が聞こえてきた。

「大丈夫か!?二人とも！今、助けに…」

「いえ…こっちの事は気にしないでいいわ！十香ちゃん達は目の前の事に集中してちょうだい！」

そう言ったのは七罪だ。ただでさえ火力不足の現状で、十香達の手をこちらに割く訳にもいかないだろう。それを聞いた十香は悔しうに顔を俯かせ、その思いをぶつけるかのように折紙を守る障壁に剣を叩きつける。そんな光景を横目で見た七罪は自虐気味の笑みを浮かべた。

「ごめんなさい、強がっちゃって…」

「確かにらしく無いな。まあ、今の俺程じゃ無いけど…」

避け続ける今の状態で本音を言えば、助けが欲しかっただろう。それぐらい一緒にいる蓮にも分かっている。しかし、それを迷惑とは感じない。そんな事を言つてはバツタリと七罪にくつついている蓮の方が邪魔な存在となつてしまう。そんな心情を察した七罪は額に汗を垂らし、小さく笑う。

「本当は、あなたみたいにも何でも一人でこなして見たかった…でもそう上手くはいかないわね。今の私に出来るのはこんな強がりという事ぐらい…」

「誰かのために嘘をつけるのは恥じゃないさ。気にしなくていい」

そう言いながら、蓮は自分の身体を七罪に密着させる。激しく動き回るなか、振り落とされないようにするためかと思つたがそこから言葉が続ける。

「でも、俺はそれに存在意義を見出してしまった…。他人を邪魔者扱いして、一人で全部やって…」

小さな声だった筈なのに、それは一字一句逃す事なく七罪の耳に入ってきた。普段の様子からは思えない、暗く公開の籠った声だった。その雰囲気異常に思い、自分にしがみつくと蓮を七罪は見つめる。

「蓮くん…あなたは…な『注意。二人とも後ろです！』ツ!?」

七罪の声を遮るように夕弦の音が聞こえ、二人は背後を振り返るとそこには先程から二人に攻撃をしている自律飛行型の”羽”があり、その先端を向けていた。会話に夢中だった二人は夕弦の声でそれに気づき、動揺を露わにする。

「颯風騎士」ラフアエル「穿つ者」エル・レム！」

だが、瞬間、耶具矢の天使の名が聞こえると共に強風が巻き起こり、”羽”の狙いを中央から僅かにズラす。そのタイミングで先端から発射された光線は二人のすぐ横を通過し消えて言ったがそれによって発生した衝撃が二人を揺らした。

「きゃっ!!」

「ツ…」

衝撃で揺れる〈贗造魔女〉ハニエール。それを掴み必死に耐える七罪だが、蓮のその衝撃で七罪から手を離してしまい天使から投げ出されるように吹き飛ばされた。その現実に七罪は目を見開く。

「っ！手を伸ばして!!」

「七罪!!」

ほぼ反射的と言える動きで七罪は腕が千切れると錯覚するほどに腕の前に出す。蓮の方もその手を掴もうと右手を伸ばすが、惜しくも二人の手は指先が僅かに触れ合っただけで終わり、蓮は地上へと落ちていく。今いた高さからの落下は人間を即死させるのには十分だろう。

「クソ…!」

普通なら風を操る〈エカトル〉を出現させれば体勢を立て直せるよ
うな状態だが、今の蓮にはそれをする事は不可能だ。落ちながらも何

か手は無いかと考え、地面に顔を向ける。さつきまで公園の上空を飛んでいたため、運良く木の上にも落ちれば死ぬ事は免れるかもしれない。そう思い自分の落下先を確認すると、丁度よく枝だけの木が自分の真下に生えていた。しかし、それを見ても安堵の気持ちにはなれなかった。

「嘘だろ…」

命を助けてくれるであろう木と、落下する蓮との中間地点であろう場所に、黒い”羽”が待っていたと言わんばかりに浮遊しており、その先端は上を向いていた。今は落下している状態であり、待ち構えるように”羽”は存在している。これでは回避のしようがないだろう。その現実を理解しその死神を呪うように睨みつける。

「ダメよ!!」

だが、聞き覚えのあるその声でその意識は空へと向けられる。そこには蓮の落下しているルートをなぞるように七罪が急降下し、蓮に向かっている。七罪にも待ち構えている”羽”に気づいているだろう、それでも七罪は自分の恋する少年を救うために我が身を危険に晒している。

(な…つみ…)

自分の落下速度以上のスピードで接近してくる彼女に自然と右腕が伸びる。七罪からも伸びた手がそれを掴んだのは、”羽”から光線が撃たれたのとはほぼ同時だった。七罪が蓮を胸元に引き寄せる頃には光線は二人の目前にまで迫っている。ここから体勢を立て直し、離脱する時間は無い。

(絶対に死なせない!!)

七罪はその光線から蓮を守ろうと強く抱きしめる。咄嗟の行動なのか、それとも霊装があるからそうしたのかは分からないが、今の限定的な霊装では完全に防ぎ切ることとは出来ない。そんな七罪の腕の中から前を見る蓮の視界は闇に覆い尽くされた。

—————

閉じていた瞼をゆっくり開くとそこは青い輝きが広がっていた。視界に広がるのは青い水晶のようなもの、それらが地面に広がり地平

線の彼方まで広がっている。そんな場所でたった一人、ポツンとその場に立ち尽くしている。

「……」

そんな状態で何かをするわけでも無く、果てしなく続く空を見上げる。自分は誰なのだろう？何でこんな所にいるのか、そんな事をまるで他人事のように考えていると、周囲の水晶が何やら光り始め、周囲に変化を及ぼす。

「……？」

周りの水晶は自身と同じ青い光を発すると、その表面から青い粒子を放出し始める。まるで花が花粉を撒くのにも似たその現象。瞬く間に周りにその粒子が漂う。それらは突如、一箇所に集まり始め人の姿を形作った。

一糸纏わぬ姿であるその者の瞳は真紅とも言える赤。髪型はカジュアルな雰囲気を感じさせるロングで、その長さは腰まで届いておりその髪色は茶色だ。それらが目を引くポイントだが、一番気になったのはその容姿だった。恐ろしいほど中性的だったのだ。

美少年と見ようとすればそう見えるし、美人と見ればそうとも見える。まるで『ルビンの壺』を見ているような不思議な見た目をしている。しかし、隠す事なく晒された裸体のラインは丸みを帯びているもので、胸元の二つの膨らみがその者の性別を教えてくれた。

『僕はあなた…、あなたは私…』

頭の中に響いてきたその声、まるでテレパシーでも受けているような感覚。それに不快感に頭を押さえながら、目の前に立つ少女を睨みつける。

「お前が俺だと？意味が分からないな」

「……俺の瞳の色は青だ。赤色じゃない。」

「……俺の髪はそんなウザったく伸びてない。」

「……俺は男だ。女じゃない。」

目に見える情報全てを否定する。だが、相手は首を横に振り否定の意思を表すと、空中を浮遊しながらこちらに近づいてくる。

『僕はずっと見てきた、君の中で。そして狂三は君と出会った…』

「狂三…」

目の前にいるこいつが何故狂三の名を知っているのか、そんな驚きを顔に出す事なく、警戒を続ける。少女は目の前まで接近すると右手を前に伸ばし始めた。

『君はやがて、私と同じ最後を迎えるかも…。でも、それは今じゃない。そうならない為…少し、借りるよ』

それはどういう意味か聞こうと口を開いた時、その手は額に触れる。瞬間、少女の身体は弾け、粒子へと戻る。それらは自分の身体へと一体化するように入っていく。同時に地面に膝をつき両手で頭を押さえた。

「があっ…い…くう”う” ああああ!!」

自分が自分じゃなくなるような感覚、あるいは何かが頭に入ってくるような苦しみに目を強く閉じ、歯をくいしばる。そんな状態は少し続き、やがて苦しみは収まり両手を力無く下ろす。そして、目覚めるかのように閉じていた瞼を開く。

開いた目が映る床の水晶。そこには青以外の赤色の輝きが鈍く反射した。

七罪は閉じていた目を慎重にゆっくり開く。来るであろう激痛や衝撃は無く、身体は健康そのものの状態だ。無論、それらを感じる暇もなく即死した可能性もあるが、それにしても何か起きてもいいだろう。怯えるように目を開きながら、顔を上げ前を見してみる。そこには青い光が広がっていた。

(えっ?…これって…)

自分たちを包むように存在する青い光、それは「バスター」が生み出す巨大な青い手だ。これが二人を守ってくれたのだろう。だが、これを出したであろう蓮は、戦える状態ではなかった筈だ。だとしたら何故これを出す事が出来たのだろうか。

「もしかして、もう動けるようになったの?だとしたらこんな戦況も覆せるわ!」

「……………」

喜ぶ七罪に対して蓮はまるで無視してるかのように何も言わない。その視線は圧倒的存在感を放つ折紙へ向けられている。

「蓮くん…?」

流星に七罪もそれに違和感を感じ、不安そうな声音で彼の名を呼ぶ。瞬間、二人を包んでいた〈バスター〉がその手を開くと、そこに柄のない巨大な剣が出現し握られる。それをついさつき光線を放った”羽”を薙ぎ払うかのように横に振る。

一閃の剣

まるで空間が震えたような音と共にそれは振られ、”羽”を綿埃のように吹き飛ばし粉碎する。

「こ、これって…」

衝撃で揺れる〈贗造魔女〉にしがみつきながら、七罪は見覚えのあるそれに驚きの声を出す。その力を見たのは十月、街に落ちて来る人工衛星を破壊したものを思い出させる力、いや、形こそ違うがそれと同じものだ。そういう確信がある。

「…あれ、気に入らないね。何とか潰したい、協力してくれる?」

「えっ…?えっ?」

一瞬、自分に話されていると理解出来ず、そんな声を漏らしてしまう。蓮の言う”あれ”とは折紙の事を示しているのだろうが、今の蓮は話し方や雰囲気人が別人と言っているほど違った。そんな彼に戸惑っていると、左手が七罪の左頬に添えられ、強引に蓮の方向を向かされる。それで初めて七罪は気づく、彼の青い瞳が真っ赤に染まっている事に。

「協力してくれるの?くれないの?どっち?」

「え…ええ、何をすれば良いの…?」

拒否は許さないとばかりに見つめられ、それに屈した七罪。その返答に満足とばかりに顔を折紙に向ける。しばしの間それを観察した後、口を開く。

「あれを強襲したい、方法は上から突っ込む。何とか近づいて欲しいけど単純な動きは避けて、不規則な動きでお願い」

「わ、分かったわ…」

言われた事を頭で復唱し、七罪は〈贗造魔女〉を操作し動き出す。そのタイムミングで耶具矢、夕弦についていた”羽”が二人に向かっていく。折紙もこの異変を感じ、処分しようとしてるらしい。

「安堵。二人とも無事でしたか。ですが、それは…」

「耶具矢ちゃん！夕弦ちゃん！巻き込まれないように二人は離れてて！」

助けに入ろうとする二人に、七罪は声を上げ離れるように促す。今、全ての”羽”が二人に集中し、弾幕を張っている。取り敢えずは耶具矢達に攻撃が行く事はないが、そのせいで折紙にまともに近づけず、避け続けるのが精一杯だ。そんな状態に蓮は目を細める。

「…邪魔だな」

鬱陶しくそう言うと、〈バスター〉が手に持った剣を振るう。それにより複数の”羽”が文字通り消えた。腕は破壊を振りまく剣を容赦なく振るい破壊する。五回も振る頃には、二人への攻撃は折紙の地上からの攻撃のみとなった。

「これなら…真上から突っ込むわ！掴まって!!」

攻撃が緩んだのを好機と見た七罪は、折紙の真上へと移動すると急降下し距離を縮めて行く。これを逃したら折紙は新たな”羽”を出現させるに違いない。流星にこれ以上攻撃を避けきる体力は残っていない七罪は、このアプローチに全てを賭ける。

決死の覚悟で突き進む七罪。しかし、折紙からも突っ込んで来る二人は狙いやすいのも事実だ。さつきと比べ狙いが向上した光線は、進む二人の真正面から向かって来る。避けきれないと思ひ、〈バスター〉の持つ剣がその形を崩し始めるが、七罪は読んでたとばかりに横に移動し、光線は空へと消えて行く。

「そんな単純なもの、いくらお姉さんでも当たってあげられないわよ!!」

左右へ移動し避けながら接近して行く。そして、折紙が剣のリーチ内になった瞬間、その剣先を折紙を守る障壁に突き刺す。凄まじい音と共にぶつかり合う剣と障壁。それにより障壁全体が大きく乱され、

脆くなる。その障壁にさらに二つの影が近づく。

「はああああ!!」

「ん・・・ツ!!」

十香と四糸乃、二人が脆くなった障壁のさらに一点を狙い、サンダルフォン〈塵殺公〉を、ザドキエル〈氷結傀儡〉を振るう。それにより、障壁に隙間をこじ開ける。

「シドー!」

「土道さん…今です…!」

「ああっ!」

その機を逃す事なく、土道は折紙に会うべくその隙間に身体を潜り込ませ進んで行く。

「やったわ! きやつ!!」

七罪がそれを確認し喜びの声を上げた瞬間、障壁を揺るがしていた〈バスター〉が突如消え、周りにいた十香、四糸乃、七罪、蓮は吹き飛ばされた。特に蓮は〈贗造魔女〉から投げ出され、地面を転がる。

「蓮くん!!」

七罪は急いで立ち上がり地面に横たわる蓮に近づき、呼びかける。万が一という不安が胸の中に燦るが、蓮は苦しそうな呻き声と共に自分の身体を起き上がらせる。

「大丈夫…生きてるよ。どうにかだが」

「良かった…、心配したんだから…」

「気に入ってた服が汚れたらけだ。俺はそっちが落ちるかが心配だよ」

ここで話し方がさつきまでとは違うことに気づき、七罪はコツソリその目を見してみる。すると、そこにはいつも通りの青い目があり、さつきまでの赤眼は嘘のように無い。一体どう言う事なのか。

「で、どうなった? 土道は…」

「えっ? 土道くんなら、中に入って行ったのが見えたわ。あなたのおかげで障壁に隙間が作れたの」

「俺のおかげ…? ああ、そうだったかな…」

まるで忘れてたように呟いたそれに、驚きと疑問の混ざったような

顔をやる。なんだか会話が噛み合っていないような気すらするのだが、その疑問は凄まじい霊力を放つ〈デビル〉の闇が、純白に染まっ行って現象によって意識がそちらに向けられる。

「あれって…」

「…土道がやってくれたみたいだな」

急激な変化に驚きの声を出す七罪に、事の理由を静かに告げる。それに続いてその白い霊力はキラキラと軌跡を残し消えて行く。恐らく純白に埋め尽くされた向こうでは、半裸の折紙が土道と共にいるのだろう。そんな事実を想像し、呆れるようにため息を吐く。

しかし、消えて行く霊力の中に、他のように消えず漂うものが存在した。それらはゆっくりと蓮の元へと向かって来ると、右腕に吸い込まれるように入っていく。恐らく今までのように何か新たな力が手に入ったのだろうか、だが今はそれを確かめる気力は無かった。

それが起きたのと同じタイミングで霊力は消え去り、そこには土道とそれに身を委ねている半裸の折紙が存在していた。まさに想像通りの絵面にここまで来るとため息すら出てこない。それに対し七罪はクスリと小さく笑う。

「ふふ、折紙ちゃんったら…」

その言葉に違和感を感じ彼女の顔を見つめる。この世界で七罪に折紙の顔と名前を教えた記憶は無い、なのに何故彼女は折紙の事を知っているのだろうか。

「七罪…、お前、折紙の事を知っているのか？」

「ん？ええ、勿論よ。でも何だか忘れてたような気がするのだけれど何でかしら？」

あれ？という感じで首を傾げる七罪を見て静かに考える。何の理由もない偶然にしては出来過ぎたタイミングだ、だとすると折紙の霊力が封印された事がトリガーとなっていてのが考えるのが普通だろう。そして、七罪だけに発生した訳ではなく、精霊全員にも同じ事が起きていると予想出来る。

「…はあー」

まあ、正直理由なんて今は考えるのも面倒だ。もう動かないとばか

りに七罪の抱きつき、その腕を首元へ回す。

「疲れた…とにかく疲れた…」

「…そうね。いつも以上に今回は大変だったわ」

その意思を汲み取った七罪は、蓮を背負い皆が集まりつつある土道達に歩いていく。微笑みを浮かべながら歩くその姿は、まるで弟を慈しむ姉にも似ていた。

折紙の霊力封印から三日後である十四日の朝。学校の下駄箱で上履きに履き替えながら、蓮は今日が何の日かを思い返す。間違っていないければ、今日は検査を終えた折紙が学校へ登校してくる日だ。

（あいつはもう教室にいるかな…。いや、何を考えてるんだか…）

階段を上りながら、人知れず浮かれたような気分でそう思う。だが、ハッと我に返り何を思っているんだと頭を振る。自分にとって、折紙など変態で、無愛想で、思い入れなど何もない女だったはずだ。しかし、そう考えると何であんな危険な事までして救うのを手伝ったのだろうか？同情か、それともへフラクシナスでの自分の役目だと割り切ったからか。

気分を落ち着かせようと缶コーヒーを買った後、それを飲みながら自分の教室の扉前まで立つ。折紙が居ても居なくてもいつも通りだ。そう言い聞かせ扉を開ける。

「ん？なんだ、蓮か。おはよう」

「おはよーだぞ。レン」

扉から最初に見える真ん中の位置にいた土道と十香が挨拶をしてくる、蓮もそれに「おはよう」と答える。

「何だとはご挨拶だな。その様子だとあいつは…まだ来てないか」

「あ、悪い…っというっかり。琴里からは今日から来るって言われてたもんだから…」

「司令官殿からか。そういうえば、元気？大怪我はないって聞いたが」

その質問に土道は力無く笑う。折紙に攻撃されたへフラクシナスだったが、どうにか船員全員に大きな怪我もなく、全員無事だったらしい。ただ、へフラクシナスは激しく損傷し、今は動かせない事を琴

里は大変ご立腹な様子らしい。

「うむ…やはりレンも折紙とまだ会ってないのか？」

「ああ、俺もまだ会ってないかな。って、十香はいつの間に”折紙”だなんて呼ぶようになったんだ？」

十香といえば、折紙とは犬猿の仲で彼女の事はフルネームで呼んでいた筈だ。まあ、自分もいつの間にかそう呼ぶようになっていたため、人の事を言える立場ではないのだが、何とも意外な事だ。おちよくるように言われたそれに、十香はハッと目を見開き、慌てながら返す。

「べ、別に深い意味はないぞ…。何となくだ…」

「そうか…そういえば、こっちも聞きたい事があったんだ。まあ、相談みたいなものだけど…」

「む、レンからの相談だと…？」

相談とは珍しいと思っただらしい二人は、興味津々とばかりに身構えた。そんな二人を焦らすように手に持った缶コーヒートを呷った後、口を開く。

「何で折紙を助けたんだろうなって…。別にあいつとは仲がいい訳でも無かったのに」

何とも抽象的というか、ハッキリしていない疑問だ。そんな相談に、十香は「むむむ…」と声を出し考えている様子だ。すると、確かめるように蓮の方を向く。

「うーむ、レンは折紙を助けた事を後悔しているという事か？」

「いや、そんな事はないさ。ただ、危険があったのに何でそんな事をしたのかなと」

ここまで考えると、哲学の部類まで入ってしまいそうな気すらする。考えるたびにまるで底なし沼にハマっていくような疑問の数々。十香もそれには的確な言葉が見つからない様子らしく頭を悩ませている。そんな状況で言葉を発したのは意外にも士道だった。

「そういうえば、前にも似たような事を聞いて来たよな。なんか気分がスツキリしないとかなって…」

士道の言う”前にも”の時とは彼の家で〈デビル〉の映像を見た時

を示しているのだろう。確かにあの時そのような事を聞いた気がする、ただ、その後で琴里達が乱入して来たので返事は聞けずじまいだったのだが。それを思い出し「そういうえばそんな事を聞いてたな」と返す。

「その時言おうと思ってたんだが、納得出来てないってことは、蓮も何やかんや言いながら折紙の事を大切に思ってたんじゃないのか？十香達みたいにな」

「大切に思ってた？俺があいつを？」

冗談にしては中々のものだが、土道の表情は真剣でジョークなどを言っている様子では無かった。何より蓮自身がそれを聞いてもピンと来ないのだ。あり得ないとばかりにその答えを鼻で笑うと、近くにいた十香に正面からぎゅつと抱きしめた。

「まあ、お前が言った事が事実だとしても、愛でるのは十香の方に変われないからな。こんなに可愛いし」

プイツと不貞腐れるように言うと、抱きついた十香に身体を密着させ、髪や首筋などに顔を近づけクンクンとその匂いを堪能し始める。その行為に恥ずかしさと擦ったさを感じた十香は顔を真っ赤に染めるものの、振り払おうとはせずされるがままだ。

「ふう、ぐ馳走様。十香は相変わらず抱きしめ甲斐がある」

「あわ…あわわ…」

気のせいかな満足気な蓮に対し、十香は赤くなりフリーズしてしまった様子だ。蓮が十香にこう言った過激なアプローチは毎日のようにしているが、相変わらず十香の方は慣れないらしい。そんな光景に力無く笑う。

十香をクラツシユさせ、ひと息つこうと手に持った缶コーヒーを再度叩る。だが、そうしても口の中に癖のある苦味と香りが広がらない。それを不思議に思い中身を見てみるとコーヒーは残ってなかった。どうやら、質問前に飲んだのが最後だったらしく飲み干してしまったのに気づかなかったようだ。

とりあえず空き缶を捨てにいくと一言言った後に教室を出て廊下を歩く。登校してくる多くの生徒とすれ違いながら、土道の言っ

た言葉について考えてみる。

(大切に思ってた…それは、俺が”あの人”に抱いてるものと同じなのか?)

あの人とは、自分の全てと言える女性だが、それは十香や狂三の事ではない。自分の起源でありDEM内で生き残る知識を授けてくれた人。エレンの妹である、カレン・N・メイザース^{ノイラ}。彼女はこの世で一番尊敬してると言っても過言では無い人物だが、折紙と同じ見方が出来るかと聞かれれば答えは否だ。

「ちっ…何なんだか…」

分からない、人を大切に思うとは何か。恋とは、愛とは。それが無いなら何故自分はある危険な事に身を投じ続けているのか。そのイライラをぶつけるかのように見えたゴミ箱に空き缶を投げる。そこそこ力を入れて投げた空き缶だが、惜しくもゴミ箱の手前で下に落ちていく。その瞬間、突如発生した小さな”竜巻”が空き缶を巻き込みもう一度上に吹き飛ばし、中に入れる事に成功させた。

その結果を興味ないとばかりに横目で見届け、来た道を戻り始める。優等生と言える折紙ならそろそろ教室に到着してもいい時間帯だろう。教室の扉に手をかけると、室内から何やら騒がしい雰囲気を感じる。やはり、折紙はもう到着しているらしい。そう確信し室内へ踏み込む。

「…は？」

最初の第一声がそれだった。教室内には隣クラスの耶具矢と夕弦がおり、二人も折紙の様子が気になってこちらに来たのだろう。だがそれ以上に気になる事はちょうど正面に立っていた折紙だ。長かった髪は肩口で切り揃え、顔は無表情のよく知っている姿に戻っていた。そして、オマケとばかりにその両手には犬耳カチューシャ、尻尾、革製の首輪が握られている。どんな事情であろうと学校に持つてくる物ではないだろう、予想通り周囲では何やら変な噂が囁かれているらしい。

そんな事を気にもせず、教室に入って来た蓮を見た折紙は、手に持ったそれらを足元にあった鞆に戻し、無表情で目の前まで歩いてく

る。どうやら身体に支障はない様子だが、こう向き合うと気まずい：というか、何を話していいのか分からないのが本音だ。

何とも話題に困った蓮は、取り敢えず無難な話題で切り出してみ
る。

「髪型：元に戻したんだな。俺は前の方も好きだったけど」

「……………」

そう言っても折紙は何も言わず、ただジッと蓮を見つめてくる。一体何をしているのか思っていると、自身の右手を前に差し出す。

「あなたに謝罪と感謝がしたい。あなたを含めた皆に私は救われた」

「あっそう…」

別に礼を言ってくれるのはいいが、真顔で感謝などと言われても怖いだけだろう。特に折紙という少女に限っては何とも言えない不気味さを醸し出す。それに少々引き気味で返答し、その手が握手のために差し出されたものだど理解する。

「今までとは違い、十香達とはともかく、”蓮”、あなたとは親密な関係でありたいと思う。望むのなら、十香にしているよう私を好きに撫で回しても構わない」

今までフルネームで呼んでいた折紙が、初めて下の名前で呼んだ。その事実にも少眉を揺らす。その後、蓮はやケクソ気味に差し出された手を握り、握手をした。

「いや、遠慮しておくよ」

「そう…とても残念」

多少期待してたらしい様子だが、ハッキリとした拒絶に無表情で答える。それを見て蓮は確信した、『やはり、解析官^{令音}ほどじゃないけど、この女はイマイチ好きになれない』と。

番外編

番外編 1話

四糸乃の霊力の封印が終わり、真那が天宮駐屯地にやって来た数日後：もう一人の兵士が駐屯地へとやって来ていた。

「ほ、本日付でここ、陸上自衛隊天宮駐屯地に配属になりました。岡峰美紀恵二等陸士です!!ヨロシクお願いします!!」

もし漫画だったらばんつと効果音が付いていそうな紹介をした少女は明らかに緊張している様子で硬くなりながら敬礼をした。

来禅高校の制服を来た少女は背の低さと髪型がツインテールという外見の所為か、高校の制服を着ているのにも関わらず幼く見えてしまっている。

「アハハ、そう緊張しなくても大丈夫よ。入隊テストだとすごい結果を出したって聞いているから期待してるわよ」

そんな様子の美紀恵を見て、天宮駐屯地の隊長、燎子は苦笑いしながらそんな新兵に向かって言う。その時、部屋のドアが開き、一人の少年が入室して来た。

「隊長さーん。頼まれていた資料なんですけど…って誰？この小さいの」

白髪の髪に青色の瞳をした少年、蓮が入ってくるなり美紀恵を見てそんな事を漏らした。その言葉に美紀恵は挨拶も忘れて「小さくないですよー!」と頬を膨らませる。

「紹介するわ。こちらは岡峰 美紀恵二等陸士で今日からここに配属されるわ」

「配属って転属して来たとかじゃなくて新兵ですか？大丈夫かねえ…」

最近、天宮市は精霊の出現が頻発している。医療用顕現装置リアライザがあるとはいえ、下手すれば命の危機がある仕事だ。それに新兵なのになぜこんな激戦区の場合に来たのか不明な事がたくさんある。

「まあ、頑張れ。俺の名前は蓮、神代 蓮。整備士をやってるから何か

あつたら気軽に来いよ」

美紀恵の頭をポンポンと叩きながら自己紹介する。美紀恵も慌てて挨拶し、頭を下げた。

「それじゃ俺はこれで。資料はここに置いておくんでチェックは任せましたよ。美紀恵も頑張つてな」

机に数枚の書類を置き、部屋を出て行った。美紀恵は出て行く蓮の背中を不思議そうに見つめていた。

「ふえ…なんか、不思議な人ですね。容姿といい性格といい」

「蓮も四月にここに来たばかりなんだけど、あつという間にここに馴染んでね。少し変な所もあるけど、整備の腕は確かだから信用しても大丈夫よ。さて、あなたはここの実戦部隊だから、早速その力を見せてもらおうよ」

燎子は美紀恵を連れて廊下を歩いていく。

これはASTの中で起こったとある事件の始まりの瞬間だった。

—————
(あの新人…岡峰つていう名前だったな…)

格納庫へ向かう途中、蓮の頭にある気になる事が浮かんだ。美紀恵の姓である岡峰、この名前は確か企業である岡峰重工と全く同じであったのだが、もし社長令嬢ならなぜASTなんていう命の危険がある場所に来たのか分からない。

まあ、なにかしら理由があると思ひ、それ以上詮索するのは止める。誰にも知られたくない事はあるものだ。

「おーい、頼まれていた書類、渡してきたぞ」

「あつ！助かりましたよー。蓮」

格納庫への扉を開けて最初に出迎えたのは作業服の上に大きめの白衣を羽織り、眼鏡を掛けた金髪碧眼の容姿をしたミルドレット・F・藤村、通称ミリイと呼ばれている少女だ。蓮に対してはとても好意的であり、ここで再会した時にはジャンプハグをして来た人物だ。

「しかし、蓮がこんな雑用するなんて珍しいですね」

「まあ、偶にはこんな事するのも悪くない」

今までは命令を下したり、設計などばかりしていたため、企業に属

しながらも雑務どころか書類一枚を上司に届けたりする事も無かった。それゆえ、このようなパシリのような事でも新鮮味というものを感じ、実際に働いているという達成感を得る事が出来た。

そんな謎の達成感の中、机の上に置いてある、後で飲もうと思っていたコーヒーマグのマグを掴み、口に黒い液体を含もうとした時、ある違和感に気づいた。別のコーヒーマグそのものに異常はなく、変な色をしているという訳ではない。

(あれ?なんか軽いな)

普段、コーヒーマグを飲む時、ピツタリ同じまでとは言わないがある程度決まった量をマグに注いでいる。これは意識しているという訳ではなく、分量の問題で一番好みの味を作るための癖のようなものだ。いつも飲んでいるため、手に持った感覚でなんとなく分かるのだが、なんだか軽く感じたのだ。

「なあミリア。誰かこれを飲んだ奴がいるか?」

こんな所に放置したのは自分なので、誰かがもしうつかり飲んでしまつていても責める気はないが近くにいたミリアに一応聞いてみる。彼女は蓮が書類を燦子に届けている間もずっとここに居たはずだ。

「ええ?いいや、ミリアは知りませんよ!」

なにやら狼狽した様子で答えるミリアを不思議に思いながら、もう一度マグを傾ける。マグが口に触れそうになる時、ミリアがなにやらこちらを凝視しているのに気づき手を止める。

「なんだ?コーヒーマグを飲む俺がそんなに珍しいか?」

「えっ!?いや、何でもないですよ!何でもないですよ!」

狼狽というレベルを超え、パニックという言葉が似合いそうな様子で顔を真っ赤にしながら言うミリアを妙と思ひ、マグを机に置き、ミリアの目の前まで歩いていく。

「えつと…せつかく作ったのに、冷めちゃいますよ…?」

「ミリア…少し、口を開けてみる」

「ええっ!?いきなり女の子に口を開けるなんて…」

モジモジするミリアの言葉を無視し、両手で頬を挟むように抑え、グイッと押しして無理矢理口を開かせる。予想通りコーヒーマグの香りが

する。かなり濃い、それこそ、ついさつき飲んだとばかりに。

「お前が犯人かつ！」

「きやうつ！」

そう叫び、ミリイの額に頭突きを繰り返すと女の子らしい声を出して床に倒れる。

「はうう…：せつかく蓮に間接キスするチャンスだと思いましたがのにい…」

これを聞いて蓮はため息を一つした後、机まで戻り、置いてあるカップを手に持ち何も無かったように飲んだ。それを見てミリイは驚いたように目を丸くしたがすぐに嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ん？なんだこれは…」

蓮は机に置いてある資料に目を向けた時、『Ashcroft』と聞き慣れない言葉が書いてあった。見てみるとそこには顕現装置らしきものの説明があり、DEM社という単語も目に入る。

「DEM社…？ミリイ、何これ？」

「へへ…それは三日後に搬入される新型顕現装置の説明書ですよ。リョウコは『これがあれば私達は活躍出来る！』って張り切ってたけどねー」

ニヤニヤと笑みを浮かべながら説明するミリイを見ずに資料に視線を注ぐ。アシクロフトは普通の魔術師でも精霊を殲滅できるほどの能力を引き出すとあり、これが燎子の自信の理由なのだろう。

だが、蓮はこれを見た時、何か根拠がある訳ではないのに不吉な予感を感じずにはいられなかった。

—————

そして、その予感のアシクロフト搬入の二日前に起こった。

折紙の家の家が何者かに爆破され、一緒にいた美紀恵が折紙を守るためワイヤリングスーツ無しで随意領域を展開してしまい、丸一日昏睡状態になってしまった。

次の日、目覚めた美紀恵は折紙から隊長の燎子も自分と同じように襲撃にあったと聞き、「見舞いの必要はない」と言う折紙を無理矢理引きずりながら燎子のいる第二特別室に向かう。

「あれ？美紀恵、もう身体は大丈夫なのか？」

「え？蓮さん、どうしてこんな所に…」

部屋の前で何故か蓮とバツタリと遭遇した。何故か右手にはトレイを持っており、中にはくまの顔をした可愛らしいクッキーが置いてある。

「隊長さんが襲撃されたって聞いたから祝いとしてクッキーを焼いてきたんだよ」

「そ、そんな…こんな時に不謹慎過ぎますよ！」

同じ仲間が襲われたと言うのに、それを茶化す蓮の行動に美紀恵は非難の言葉を向けるが本人は気にもしない。

「大丈夫だって。こんなんで負ける程度の人がASTで隊長なんてやってないさ」

ほぼ確信とも言えるような言い方をして、ドアを開ける。そこには怪我など無く、ピンピンした燎子、壁に背中を預けている真那、そして、両手を後ろに拘束され椅子に座っている目つきの鋭い女性があった。

「あれ？隊長さん面会拒絶じゃ…」

「そんな事一言も言っていない」

「だから言っただろ。大丈夫だって」

一人驚く美紀恵に対し、折紙と蓮は先走りした彼女にまったくばかりに呆れる。

「今入っちゃダメって言ったんだけど…まあ、いいわ。あんたらも入りなさい」

燎子の言葉に従い、三人は部屋の中に入る。蓮は真那に事情と椅子に座っている女性の事を聞こうとする。

「真那、椅子に座っている奴は誰だ？」

「隊長を襲撃してきた犯人らしいですよ。まあ、見事に返り討ちしちまったらいいですけど、ASTの隊長なら当然じゃねーでしょうか」

当然といった様子で言う真那。確かにASTの隊長をしている以上、実力がなければならぬが美紀恵ほどではないにしろ、少しは無事だった事を喜んでは良いのではないかと思ってしまうが、それが真

那の考え方であり、信頼の形なのだろう。

「さて…ずっとだんまりもそろそろ飽きてきたんじゃない？」

燎子は尋問を再開して一枚の写真を見せる。そこには蓮と比べて少し年下のような印象の少女が写っている。

「元英国SSS隊員、アシユリー・シンクレア。あんた、この子の仲間よね？」

燎子の聞き慣れない言葉に美紀恵は蓮の側に寄ってきて耳打ちでこっそりと質問してきた。

「蓮さん、SSSって何ですか？」

「Special Sorcery Service、英国のASTスペシャルソサライサーって言ったら分かりやすいか？」

「イギリスの!?なんで同じ対精霊部隊なのに私達を…」

「それを今、隊長さんが聞いているんだよ」

冷静に言うが、蓮にもなぜ襲撃したのかが全く分からない。イギリスのSSSと日本のASTとの仲が悪いという訳ではないし、問題を抱えている事もない。なのになぜこちらに危害を加えるのだろうか。「私達になんて危害加えるのかな?お願いだからそろそろ喋ってほしいんだけど…?」

言葉と表情は優しいが指をベキベキと鳴らしている事がすべて台無しにしている。これではお願いというより脅しという表現の方が正確だが、これに対しての相手の反応は。

「こ、怖い…助けて…アシユリー…セシル…」

さつきまでの鋭い雰囲気はどこにいったのか、目に涙を浮かべ、ガクガクブルブルと怯える彼女を見て、折紙を除く四人が心の中で『弱っ!』と叫ぶ。

襲撃犯とは思えない弱々しい姿に、蓮の心に『なんだ、こいつは』という疑問が出てくる。

「…そうそう、クッキー焼いてきたんでよかったですら食べません?」

とりあえず場を落ち着かせようと思い、手に持ったトレイにあるクッキーを差し出す。最初にそれを摘んだのは真那だった。

「こんな所で何考えてやがるんですかって…あれ?めちやくちやう

めーじやねえですか」

文句を言いながらも食べた真那は意外な美味しきで目を丸くする。ほかの三人も真那の言葉に釣られ、食べるがとても美味しいと感じたらしい。

「さて…よかつたらお前も食べる？」

探りを入れるのと相手を落ち着かせる意味を込めて、襲撃犯にもクッキーを勧める。すると、急に目を輝かせた無邪気な様子へと変化した。なんとというか、感情の変化がコロコロよく変わるのが少し面白い。

「俺は蓮っていうんだけど…お前の名前は？」

「れ、レオノーラ…レオノーラ・シアーズ…」

「レオノーラっていうのか。それで、これは挨拶の握手の代わりだ」

レオノーラは両手を後ろに回されているため、食べる事が出来ない。蓮がクッキーを摘んで彼女の口に持っていく。レオノーラはクッキーをハムスターのように頬を膨らませながら幸せそうな様子で咀嚼する。

「蓮、そいつは私を襲ってきたのに、なんで食べさせるのよ」

それを見た燎子は意義ありとばかりにそう言ってくる。レオノーラは捕虜であるのでこのように甘やかすのはあまり褒められた行為ではない。なにより、こんな事しては燎子は命を狙われた身としては不満だろう。

「大丈夫ですよ。隊長さんの事ですから、身体が真つ二つにされても別々の個体になって復活しますから」

「人をプラナリアみたいに言わないかしら」

「まあ、それは冗談で。隊長さんの事ですから無事って信じてましたよ」

結局、作ってきたクッキーの三分の一をレオノーラに食べさせた。食べ終わった頃にはすっかり落ち着きを取り戻し、泣き出すなんて事はもうないだろう。

「それじゃ俺はここらで帰らせてもらいます。尋問に関しては無知で役に立たない思うので…」

そう言っただけかとも思えるが、相手の名前を聞き出す事で尋問への糸口を作り出す事が出来た。

「SSSか…、本国で何が…」

彼女たちが、何を目的に海を渡ってきたのかはまだ分からない。ただ考えられるのは母国であるイギリスに何か起きていたかも知れない推測ぐらいだ。

一人、廊下を歩く蓮には、まだ事件の真実は分からない。

番外編 2話

その後、レオノーラはなぜASTの隊員を襲撃した理由をすぐに自白した。それは明日空輸されてくる新型顕現装置^{リアライザ}アシクロフトを輸送機ごと強奪するため、護衛のAST隊員を減らすのが目的だったらしい。

アシクロフトを強奪する事が目的ならその考え方は別に間違っている訳ではない。しかし、蓮にはどうしてもその考え方が浅はかに思えてしまっていた。聞いてみると、痛みによる尋問をした訳でもないし、アシクロフト強奪の細かい計画を聞き出したという事でもない。

痛みによる尋問は爪を剥いても何も喋らない人間もいるが、流石に敵の情報の鵜呑みはどうかと疑問も覚えてしまう。

だが、戦闘隊員でもない蓮は口出ししようとは思わなかった。

そうして、強奪が起きるその日。真那と燎子が輸送機の護衛に勤めている頃、蓮は呑気にも資料室で紙と睨めっこをしていた。

(うーん…やっぱり、修理費が重くなってるな)

真那と折紙の模擬戦で、CRユニットの修理費が大きな負担になってるのが悩みの種だ。

最初の模擬戦で装備を大破させたのを注意して以来、壊す事はもうなくなっただが、少なくとも損傷を毎回装備に与えてくるので修理費が大きくなってきてしまう。

(しかし、手加減して戦えなんて言えないし、どうしたらいいか…)

資料室を退室し、予算書を見ながらどう言うべきか考えながら、日の差し込む通路を歩く蓮を見つめる人間がいた。

その人物は向かいの建物の屋上からスナイパーライフルを構え、^{スコップ}照準器越しに捉え続けている。

その正体は特別室から脱走したレオノーラであり、蓮の姿を見つけると下唇を噛んだ。そのまま進まれてしまうともうすぐ突入してくる仲間のセシルとアシユリーの姿を見られる危険があるため、排除す

るのが望ましいのだが、相手は非武装。しかも多少の恩がある相手となると躊躇してしまう。

だが、このまま進ませる訳にはいかないので仕方なしに照準を肩に向けた。肩なら死にはしないうえに足止めも出来ると考え、引き金を引く。

バン！と大きな音を立てて弾丸が空気を裂きながら蓮に向かって飛んでいく。

当たったか確認するため、もう一度照準器スコープを覗くが、次の瞬間レオノーラは眉を顰めた。

確かに蓮の足は止まっていた。しかし、表情には苦痛の様子はなく、平然と書類に目線を向けていた。しかし、一番気になったのは右手が何かを掴んだように空中で握り締めていた事だ。

蓮はレオノーラの疑問が通じたようにゆっくり右手を開くと開いた右手からは小さな鉄の塊がこぼれ落ちる。小さな弾丸が。

レオノーラは自分の心臓が大きく跳ねたのを感じた。そんな事はないと。しかし、それは目の前の光景とは矛盾していた。

息を詰まらせ、二発の弾丸を蓮に向けて発射する。恐怖や動揺を抑えるための反射的とも言える行動だったのだが、蓮はまるで見えているように右手を素早く動かし指の間に弾丸を挟んでいた。

(最初は肩狙いで一発。次は乱射とも言える狙いで二発か…)

そしてレオノーラの動揺はすっかり蓮にも伝わっていた。それが分かっていながらあえて通路を逆戻りした。非武装である自分を撃ってきたという事は戦闘隊員でなくてもここから先に行かれたら困る事があるという事だ。

指に挟んでいた弾丸を捨て、通路を引き返していく蓮をレオノーラは恐怖のあまり涙目で見ていた。

—————

結局、空輸されてきた四機のアシクロフトの内三機が強奪され、その圧倒的なまでの性能にピンチに陥ったが駆けつけた美紀恵が最後のアシクロフトである『チェシヤ・キャット』を起動させ、ほかの隊員を救った。

だが、他のアシクロフトの奪還は出来ず敵の逃走を許す事となり、それは天宮駐屯地の信用を暴落させる結果となってしまった。

「これが最後だ。どうだミリイ、認証出来たか？」

「ふええー、やっぱりダメですよー」

蓮とミリイは美紀恵が守った最後のアシクロフト、『チェンジャー・キャット』を起動させようと基地の隊員全員が試しているのだが結局誰も動かす事が出来なかった。

「認証機能を制御している所はあるらしいのですが、アクセスを拒否されたらミリイにもお手上げです」

両手を上げ、降参というポーズをとるミリイの脇から蓮は画面をジッとみつめる。

「アクセスを拒否されたら流石に何も出来ないか」

「蓮がそんな事言うなんて珍しいですね。ミリイの中では何でも出来るようなイメージでしたのに」

珍しく弱音を吐く蓮をミリイは目を丸くし意外そうに見る。

「俺にだって出来ない事ぐらいあるさ。後始末はやっておくから、ミリイはもう休憩してていいぞ」

「はい、じゃあお言葉に甘えて休ませてもらいますよー」

身体をクネクネ動かしながら最後に認証した隊員と共に格納庫を出て行く。これで残ったのは蓮一人だけとなる。

周囲を見渡し自分以外誰もいないのを確認した蓮は机の上に置いてあるノートパソコンを持ち、コードで『チェンジャー・キャット』と接続する。

端末が繋がっているのを確認した後、キーボードをピアノストのように指が凄まじい速度で叩き始める。画面ではたくさんのウィンドウが出現と消滅を繰り返しており、蓮は画面だけを凝視して手元は一切見ない。

（自分専用の端末を使ってないとはいえ、これほどのロックの厳重さは異常だ…）

網の僅かな隙間を狙うような集中力を使う作業に瞬きすらも忘れ

そうになる。時間の感覚すらあやふやになってきた時、同じ光景を表示していた画面に突如変化が現れた。

『私とこれほど互角に渡り合えるとは、貴方はすごいですね』

急に画面に出現したメッセージに蓮は驚きとも警戒とも言える表情になった。

『お前は何者だ。どこからメッセージを出している?』

『自己紹介します。私は『チエシャー・キャット』に搭載されているナビゲーションAI、『ベル』という名前です』

『アシユクロフトにAIが搭載されているとは知らなかった。それじゃ他のアシユクロフトにもお前みたいなのがいるのか?』

『いえ、AIが搭載されているのはこの機体だけです。私は装着者の戦闘をサポートするのが役目です』

AIのくせに随分とこっちの聞きたい事を効率よく答えてくれる。AIということは美紀恵と共に戦い、彼女の命を救ったということになるので警戒する必要はないだろう。

『私が貴方にこのように対話したのは頼みたい事があるからです。どうか他のアシユクロフトを奪った三人を救ってほしいのです』

『救ってほしい?…他の三人っていうのはレオノーラ達の事か?』

『それを知っているのなら話は早いです。どうか頼まれてくれませんか』

『救うにしろ倒すにしろ、ただの整備士に力仕事を依頼するのは人選ミスってやつじゃないのか?』

『私もそう感じます。しかし、理屈が無いのにも関わらず、あなたに頼む事が正解のような気がするんです。だから…どう…か、あの子…たちを…』

画面に表示された文字が、なんの異常もないにも関わらず、途切れ途切れになる。一体なんだと思い、蓮はキーボードを叩くが、そのメッセージを最後に、いくら呼びかけても反応は無かった。言いたい事を言った後は完全スルーなど、人間らしい行動をするAIがいたものだ。

相手が答えないのを感じ小さく舌打ちをした後、『チエシャー・

キヤット』の前に立ち、ゆっくりと右手を触れさせる。

そのベルというAIは信じていいのかわからない灰色の存在だが、救ってくれという言葉がずっと頭の中に残っていた。

それから数日はアシクロフトを巡った争いもなく、美紀恵も真那の特訓を受けゆっくり『チェシャー・キヤット』の戦い方に慣れていった。その間も隙を見つけては、あの時のように機体にアクセスをしているが相手が反応したのはあの時だけで今は何も言っていない。

(ふああ…暇だな…)

やることも無く、大きな欠伸をしながら蓮は理由なく通路を歩いてきたある日。何か面白いことが無いかと考えながら一つの扉の前を通り過ぎた瞬間。

「いい!?最後のアシクロフトである『アリス』は絶対にあの三人には渡せないわ!何としても護衛任務を成功させるわよ!!」

部屋の中からドア越しでもはつきり聞こえるほど、燎子の大きな声が聞こえてくる。それを聞いた途端、さつきまでの退屈な気持ちは消え去り興味心だけが心に浮かぶ。

ドアを開けると奥の机に燎子、手前に折紙、美紀恵、真那と立っている。

「何やら面白そうな話をしてるようですね。よかったら俺も混ぜてくれませんか?」

「蓮、あんた、聞いてたの?」

「あれだけ大きな声出されたら嫌でも聞こえますって。それで…話の内容はアシクロフト関連ですよ?最後の機を守るための護衛任務」

アシクロフトは全部で四機だと思っていたのだがまさかもう一機あったのは意外だった。燎子達も最後の機をみすみす見逃すつもりはない様子だ。もちろんそれは蓮も同じだ。

「俺も連れて行ってくれませんか?最後のアシクロフトにも興味がありますし」

「はあ?!当日襲撃がある可能性があるのに整備士のおんたを連れて行

ける訳ないでしょう！」

「怪我をしても自己責任で構いません。それに…俺を連れて行って後悔はさせませんよ」

綺麗に整った顔をニヤリと歪め悪魔のように微笑む。燎子はそれを見て何故かダメだとは言えなかった。

「ほおお…ここが岡峰重工特別イベントホールでやがりますか！めちゃくちゃ広いじゃねえですか」

「真那、あんまりキョロキョロするな。素人だと思われるぞ」

白いドレスに身を包んだ真那が珍しそうに周囲を見渡すのを、タキシードを着た正装姿の蓮が注意する。

しかし、真那がそうしてしまふ気持ちはなんとなく分かる。今までこんな所に来たことすらないのだから驚きがあるのだろう。

後ろには真那の他に折紙、燎子、美紀恵がおり、全員ドレスを着ている。だが、美紀恵だけが気のせいか元気のないように見える。

「蓮は気になんねえですか？こんな所、もう来れないかもしれねえんですよ」

「世界は広いんだからこんなのでいちいち驚けないさ」

少しも興奮の様子を見せないで『AST後一行様』とあるテーブルに腰掛ける。他の三人も腰掛けるが美紀恵だけが嫌がっている様子だ。

「当会場へようこそいらっしやいましー！イ、イギリス産、ブランデーなどがいかがでしょうか…」

席につくとやけに前髪が長いウェイトレスが恥ずかしそうにしながら酒を勧めてくる。

「ああ、この子ら未成年だし…グアバジュースを「ああ、頼むよ」って蓮！あんた未成年でしょ！」

燎子の言葉を遮って、ブランデーを注文したのは蓮だった。

「お恥ずかしながら少なくともジュースよりは飲み慣れているものなので」

「つつこみたい所がいろいろあるんだけど、日本じゃ未成年は酒は飲んじやいけないの！」

大きな声で注意する燎子を無視してウエイトレスはグラスにブランデーを注ぐが、その手つきは危うく明らかに手慣れていないのが分かる。

さらにブランデーは手のひらで温め、香りも楽しめるようにブランデーグラスというものに少量のブランデーを注ぐのが一般的だが、入れ物は普通のグラスだし、液体を半分以上注いでしまっている。これでは温まるのに時間が掛かる。

役目を終えたウエイトレスは逃げ出すようにこの場を離れる。その行動を横目で見ながらブランデーを少し口に含む。

香りを楽しむのは諦めているが味は自分の祖国を思い出させる懐かしい味だった。

「あのー私ちよつとトイレに…！」

さつきから落ち着かない美紀恵がそう言って席を立ち駆け出すが前を見てなかったせいで人と衝突して床に尻餅をつく。

「いたた…すみません。前をよく見てなかったもので…」

そう言つて顔を上げるがぶつかった相手の顔を見た途端、美紀恵の驚愕に染まった。

「お父様…!?!」

「…何故お前がここにいる?」

美紀恵のぶつかった相手は眼鏡をかけた三十代ほどの男性なのだが、すごい威圧感があり、美紀恵のような気の弱い人間なら睨みつけるだけで竦ませる事が出来るほどのプレッシャーを放っている。

「しよ…紹介します…。この方は私の実の父…岡峰重工代表取締役社長…岡峰虎太郎です…」

ガタガタと震えながら紹介する美紀恵の怯えようは、明らかに家族に向けるような態度ではないと蓮にも分かる。そんな美紀恵に追い打ちをかけるかのように虎太郎は問いかけた。

「お前が何故ここに…? 岡峰の関する場所には近づくなと言ったはずだ」

「あの…お父様…私…私…ASTに入隊したんです！人の役に立ちたくて…！それで今日は護衛の任務で！」

「ASTに入隊しただと…？」

大声を出している訳ではない。しかし、そんな事をしなくても目つきを鋭くしただけで美紀恵を涙目にしてしまった。

「どこへなりと行けと言ったが、ここまで愚かな娘だったとはな。よりによってそんな役立たずの部隊に…」

「役立たずなんて…！聞き捨てならないわ！この子も含めて全隊員が命を懸けて任務に当たっています！」

平然と言った虎太郎の言葉に燎子が食ってかかる。命を懸けているというのに役立たずと言われればそうもなるだろう。

「ほう、我々の血税を浪費しながら精霊打倒の成果を何一つ挙げてない部隊が役立たずではないと？」

そう言われてしまうと燎子は何も言えず悔しい顔をする。社会は結果を求めてくる。その結果に答える事が出来なければ役立たずと言われても仕方のない事だろう。すると、ずっと座っていた蓮が動き出した。

「ASTが役立たず…という言葉は受けましよう。結果を出せていないというのは真実ですから。ですが、ご自分の娘さんにそこまで辛辣な言葉を言う必要はないのですか？」

倒れていた美紀恵に近寄り、手をとって立たせる。虎太郎が自分の姿を見た途端、僅かに表情を変えたのを蓮は見逃さなかった。

「君は…？」

「自己紹介します。私は神代 蓮という名で美紀恵さんの同僚です」「レン…だと…」

蓮は美紀恵と違い、威圧感などには全く怯えず自己紹介をしてお辞儀する。

「結果を出せていない以上、ASTは役には立っていない。そんな所に入隊した美紀恵もだ。過程など問題ではないという事ぐらい君も分かるだろう」

そう言つて虎太郎は背中を向けて離れていく。美紀恵は父のいう

事に何一つ反論出来なかった。本当は燎子の言った事は自分が言わなければならなかったはずなのに。

「美紀恵、お前は父親に会いたくなかったから…」

「…父の数々の暴言失礼しました。蓮さんもすみません。では私、お手洗いに行つてきます」

涙を拭きながら走り去る美紀恵の背中を蓮はジツと無言で見つめていた。

（あれほど似ない親子もいるのか…。でも、俺とあの人程じゃないな。親子つていう結果だけを追求すると）

笑える状況ではないのは理解してる。だが、何故か二人に対して変な意地を張ってしまうのが不思議なところだ。

番外編 3話

(美紀恵：帰ってこなかったな…)

会場が消灯し、皆の視線がステージに集中してる中、蓮の視線は一つ空席の椅子を見ていた。

美紀恵と虎太郎の間に何があつたかは知らないが、実の親子の間にこのような深い溝があるのがとても切なく思えてくる。親の存在が必ずしも子の幸福とも限らないが、蓮のような本当の親を知りもしない人間にはそれが勿体無く思ってしまう。

ステージではスポットライトに照らされた最後のアシクロフト『アリス』を見せながら虎太郎が性能を説明している、そのデモンストレーションに移ろうとした瞬間。

スポットライトの電気が消え、会場が完全な暗闇に包まれ会場がさわめく。どうやら会社の演出という訳でもなさそうだ。

(相手が手を打ってきたか…)
行動を起こそうにもこの暗闇中ではどう動いたら良いかが判断出来ない。

すると、ステージの方から大きな音を立てた後、電気が復旧する。そこには『アリス』を確保し、アシクロフトを纏ったレオノーラ、写真で見たアシクリー、そして見た事のない茶髪の女がいた。

アシクロフトを身につけていた所から考えると彼女が強奪犯の最後の一人、セシル・オブライエンだと蓮は推測した。

『アリス』は貫つていくぜ！ちよろいもんだなASTも！

会場がパニックになり、他の人間が我先にと出口に向かう中、アシクリーは勝利の雄叫びとばかりに笑い声を響かせる。

だが、彼女達が勝利を確信するのはまだ早かったようだ。

動いていたのは彼女達だけではない。真那、折紙、燎子は素早く対応し、三人を『アリス』から引き離す。

「美紀恵！あんたも早く来なさい！蓮！あんたは岡峰さんを安全な所に！」

「は、はい!!!」

「了解!!」

燎子はようやくトイレから帰ってきた美紀恵に戦列に参加するように言い、蓮には虎太郎を避難させるように言ってくる。

美紀恵は『チェンジャー・キャット』を装備して、燎子達の所に向かい、蓮も虎太郎のいるステージに向かう。

「岡峰さん、ここは危険です。彼蓮と共に安全な場所に避難を…」

『アリス』はDEMから預かった大切な機体だ。責任者の私が簡単にここを離れるわけにはいかん」

「…分かりました。では被害が及ばぬように離れていて下さい。蓮！岡峰さんの護衛をお願い」

意外にも虎太郎は危険を承知でここに残ると言い、燎子の警告を聞かない。美紀恵と同じで言っても聞かない性格なのだろう。本意では無いが蓮もそれに従い、虎太郎を守るように背中に隠す。

「…やはり君だったか。何故君ほどの人間がASTなんかにいるのだから？」

燎子達が戦闘を始める中、近くにいる蓮にしか聞こえないほどの声の大ききで話しかけてくる。その言葉に後ろをちらりと振り向き少し驚いたような顔をする。

「私の事を覚えていたんですか？会った時の反応を見て、まさかと思いましたが…」

「忘れられないさ。周りが大人だらけの中、君のような子供がいればな」

「そうですか…ここにいる理由は些細な事です。長い休暇のためですかね」

「君ほどの人間なら、ASTなんて無駄な組織よりも行くべき場所があったのではないか？」

さつきは虎太郎から『ASTは役立たず』という言葉を受けた蓮だったが心の底からそう認めたわけではない。燎子達は本当に頑張っている事は整備士である蓮がよく知っている。そんな事言うのは結果報告の書類に書かれた文字しか見ていない人間だけだ。

「無駄なんかではありませんよ。美紀恵も頑張っています。今は満足

いく結果は出ていませんがそのうち…」

「いや、無駄だ。あれを見てみるといい」

顔を前に向けると燎子達四人は床に膝をついていた。負けたのではない。セシルの纏ったアシクロフト、『ジャバウオック』の能力により随意領域テリトリーの展開を阻害されているからだ。

魔術師ウィザードが随意領域テリトリーを展開出来なくなるとともに動く事すらままならない。

四人を制圧したセシルは『アリス』へと歩みを進める。それを見て虎太郎は呆れたようにため息をついた。

「やはり、ASTは能無しだったか…」

「いいえ、まだ…まだ終わってませんよ。ここには私がいますから」

蓮はそう言うのと虎太郎から離れ、『アリス』へ近づいていく。その途中、上着とネクタイを脱ぎ捨て身軽に動けるようになる。

「何をするつもりだ？ 愚かな事は止めろ」

「大丈夫ですよ。ああいう人間を相手にするのは初めてじゃありませんから」

恐れなど微塵も抱いてない様子で蓮は『アリス』を守るようにセシルの前に立ち塞がった。

「…そこをどいてくれるかしら？」

立ち塞がった蓮にセシルはニコニコと笑みを浮かべながら言う。相手はCRユニットを装備してはいない。警戒する要素は皆無だった。しかし、蓮は腰に手をあて、微動だにしない。

「悪いがこれも仕事なんぞな。『はい、分かりました』って道を譲るわけにはいかない」

「蓮！ 何しているの!? 早く岡峰さんを連れて退避しなさい！」

自分の事にすら余裕がないというのに、燎子はこちらの事に気を回してくれるという所はさすが隊長というべきだろうか。しかし、そんなに狼狽してしまっただけは隊長としての敬意をなくなってしまうそうだ。

呑気にもそんなに事を考えているとセシルが蓮の目の前まで歩い

てきて顔の頬に触れる。やはり蓮を脅威にすら思っていない様子だ。
「セシル！待って！彼は普通じゃない！」

レオノーラは蓮の本当の正体は知らないが、普通ではない事は知っているため、セシルにそう警告する。しかし、セシルはどう受け取ったのか余裕そうな態度を崩さない。

「大丈夫よ、レオ。ふふ：前に出てきた行動は普通なら出来ない事ね。顔も結構私のタイプだから、心が痛むんだけど：邪魔をしてくるなら仕方ないわね！」

頬から手を離れた瞬間、セシルは素早く左脚を動かして蹴りを放つ。セシルの目的は殺害ではないので当然手加減はしているが、一般人が受ければ膝をつき、動けなくなるほどの威力はある。が：

「心が：なんだって？」

蓮はしれつとした表情で右脚を使い蹴りを受け止める。これを見た瞬間、さすがのセシルも笑みを崩す。

随意領域テリトリで身体能力を強化した蹴りは普通なら反応する事すら困難なのに、目の前の人間は反応し防いだからだ。

「生憎、こっちはこれよりもっと早くて重い蹴りを見ているからな。これぐらいなんとかなるんだよ」

焦ったセシルはすぐに左脚を戻すと右脚で攻撃を繰り返す。今度は手加減無しの全力で顔を狙っていくが頭を下げ避けられる。

（彼：：反射神経が普通じゃない：）

隙間開けずに攻撃するが全て避けられ、掠ることすらしない。セシル自身も高い動体視力をもつゆえどのように避けているかが全て見えていた。

（なんでこんなに正確に避けられるの：？本当に人間なの：？）

機械のように一寸のミスもなく、次はどこを攻撃するかが分かっているように無駄のない行動はもはや芸術と言つていいほどの鮮やかさがある。

「セシル！何やってんだ！ただの人間だぞ！さっさと倒しちまえよ！」

顕現装置リアライザを装備していない一般人相手に手こずっているセシルにア

シユリーは喝を飛ばす。しかしその言葉がセシルを焦らせてしまう。そして、焦りは行動を雑にする要因の一つだ。

そんな僅かな隙を蓮は見逃すほど甘くなかった。決定的なタイミングを見つけ、前に乗り出してセシルの両目の直前に人差し指と中指を突きつける。あと一c mも前に進めれば目を潰してしまう、そんなギリギリな距離だ。

「戦闘ではどんな時も冷静にしているよ。こういう場ではミス＝死だからな」

自分の知らない未知の人間に対する驚きと恐怖でセシルは数歩後ずさる。その時、アシユリーの声が会場に響き渡った。

「おい！お前！これを見ろよ！」

視線を向けると、倒れている美紀恵の首筋にアシユクロフト『ユニコーン』の装備のランスが突きつけられていた。

「あんまりこういう事は好きじゃねえけどよ、お前はイレギュラーすぎるからな。これぐらいの事はさせてもらうぜ」

これは脅しではないだろう。多くの人間と出会ってきたから分かる。この状況をひっくり返すには『バスター』か『レッドクイーン』などを使うしかないが、あれは人に見られてはならないものだ。

(ちい…、面倒な事をしてくれるな…)

仲間がピンチだというのに我が身の可愛さのせいで何も出来ない事が悔しく、奥歯を静かに噛みしめる。

こんな場面で感情的になってしまったら美紀恵が危険だ。仕方なしに両手を上げて降伏するという意思を見せる。セシルは警戒しながらその横を通り、『アリス』へと向かう。

『アシユクロフト』『アリス』認証を開始します。パスワードを入力してください』

「はあ？パスワードだって!？」

セシルが『アリス』の認証箇所を手をおくと機械音声でパスワードが求められる。アシユリーのこの反応を見る限り、三人はパスワードの答えどころか、存在すら知らなかった様子だ。

『アリス』はパスワードを入力しない限り認証は受け付けん。諦めて

大人しく帰るのだな」

認証をしなければ『アリス』は動かせない。セシル達にとってこれは「詰み」の状況なのだが、セシルはまだ諦めたわけではないようだ。

「そのパスワードを知っているのはあなただけらしいわね。教えなければ痛い目にあう…なんて脅しが通用する相手じゃなさそうだけど…これならどうかしら？アシュリー！」

美紀恵を押しさえつけていたアシュリーが彼女の足に向けて踵落としを落とす。苦痛により美紀恵の顔が歪む、それを見て彼女達の目的が何かすぐに理解した。

「パスワードを話さなきゃ、あなたの娘が痛い目に合う。っていうのはどうかしら？」

「…何をしても話すつもりはない。そんな事で私の口は割れん」

それを聞いたアシュリーは美紀恵を蹴り飛ばしたりして傷つけていく。

なんとかかできるだけの力があるのに見てるしかできない。それがとても歯痒い。

(チェシャー・キャットには回復処理能力があるが、それは随意領域テリトリーを使った能力であるため、それが妨害されたこの状況では使えない…なんて無力な…)

「まだ話す気になれないかしら？なら、次は腕の一本でもへし折ってみようかしら」

美紀恵は彼女達にとって人質ではない。今は腕の一本と言っているが、最悪殺してしまう結果になってもセシル達にはなんのデメリットもない状態だ。

アシュリーが美紀恵の右腕を後ろに回して徐々に力を入れる。その度に美紀恵の顔が苦痛の表情に染まっていく。

「やめろ、パスワードは教えてやる。娘を離せ」

会場に響き渡る声。感情的でない言葉だったが、虎太郎の توسطで苦渋の決断だったことがわかった。それを聞き、セシルは得意顔になる。

「その言葉を待ってたわ。彼女を離す前にパスワードを教えてくださいましよるか…」

「待ってください!!」

声を上げたのはボロボロで満身創痍の身体である美紀恵だ。これだけ絶望的はずなのにまだ彼女は諦めていないようだ。

「もういい…この状況はどうにもならん。ASTも私も無能だったということだ」

「ASTは…ASTは無能ではありません!!私も…お父様も…。まだ…まだ、終わってませんから…」

「その子の言う通り。何があっても私たちは勝つ」

そう答えて飛び出したのは折紙だ。

その姿はワイヤリングスーツを解除して、ドレス姿になっている。『ジャバウオック』が阻害できるのは随意領域テリトリーだけであり、人体の動きを妨げる効果はない。

だが、CRユニットを前にしてその行動は無謀すぎることだ。

「てめー正気か!?!生身であたしの攻撃を受けたら、死体すらまともに残んねえぞ!!」

あまりに大胆過ぎる行動にアシユリーが驚きの声とともに、手に持ったランスを折紙に向けようとするが、真那がアシユリーに向かって装備のヘムラクモの射撃を当て、注意を引き寄せる。折紙はその隙に近くにいた美紀恵を回収し、『アリス』に向かった。

しかし、まだ、『アリス』の近くにはセシルがいる。

「その勇気をすごいけど、ここから先はっ!?!」

蓮もその僅かな隙を逃すわけなく、相手が後ろを向いた瞬間、鋭い回し蹴りを無防備な脇腹にいれ、横に吹き飛ばして折紙のための道を開く。

どんなにすごい動体視力を持っていようと見えない場所からの攻撃には対応出来ないのだ。

折紙は美紀恵を抱えたまま、蓮の作った道を突破し『アリス』のそばまで到着した。

「まったく…無茶するな、お前は…」

「あなたほどではない」

そんな皮肉を聞き流して、傷だらけの美紀恵の容体を見る。ボロボロだが、重体には至っていない。右腕も骨折まではいつてない、これも虎太郎の決断が早かったからと言える。

「折紙さん…流石です…蓮さんも…すみません。私が足を引つ張つてしまい…」

「俺の事なんか気にしなくていいさ。お前のほうが頑張ったよ。こんなになるまで…」

美紀恵の危機を救うことには成功したが、戦いに勝利したわけではない。ワイヤリングスーツを解除した折紙と蓮以外は随意領域テリトリーの展開すらままならず床に手をつけて動けない。

「どうするんだ？美紀恵は助けたが、絶体絶命の状況には変わらないぜ」

「…方法ならある、『アリス』を使えばこの危機を脱することができる」

「へえ、『アリス』ねえ…」

予想通りとばかりの様子で、箱型の待機状態となっている『アリス』に目を向ける。

最後のアシクロフトである『アリス』は外部からの干渉を遮る防御特化の機体。その能力があればセシルの『ジャバウォック』の妨害を受けずに戦うことが可能だ。

そして、その認証パスワードを知る人物は…

「パスワードを教えてください」

折紙は平坦な声でパスワードを虎太郎に聞く。それを聞いた虎太郎はなんとも言えない様子だ。

「…出来るのか？お前達に…」

「残念ながらそれは無理ね。この一撃で終わるのだから！」

折紙と迷う虎太郎の会話、セシルも黙ってそれを見ていたわけではない。『アリス』を起動させられる前に折紙を倒すべく飛び出し、得意の蹴り技を繰り出す。

だが、その蹴りは蓮が繰り出した蹴りによって軌道がずらされて折紙に当たらない。

「いいところなんだから水を差すなよっ！」

それから派生した回し蹴りでセシルを牽制し、折紙のための時間を稼ぐ。

「…言葉だけでは人は動かない…だが、証明するための機会を与えてやる必要もあるな。…教えてやる…パスワードは…」

パスワードを聞いた折紙は『アリス』の近くに行き認証処理を開始し、パスワードを言った。

「…MIKIE」

小さな声だったが、不思議なことにそれは美紀恵にも蓮にもしつかり聞こえていた。

パスワードの照合が終了し、折紙は蒼い鎧を身に纏い、前に歩き出す。

番外編 4話

アシユクロフト『アリス』を装備した折紙は圧倒的、その一言に尽きる。

『アリス』の生み出す防生随意領域テリトリは同じアシユクロフトの攻撃を完全に防御し、通さない。

この強さは『アリス』の性能だけでなく、折紙の能力の高さが相まっているのだろう。

その光景を蓮は離れた場所で虎太郎と共に見ていた。

「圧倒的ですね。あれが『アリス』の性能ですか…」

「……………」

「しかし、そんな機体の認証パスワードをご自分の娘の名前にするなんて、娘想いなんですね」

「……………」

気恥ずかしさからなのか、さつきから虎太郎は沈黙し、何も発さない。後ろを振り向いてみても、やはり無表情のままだ。

「自分から娘を突き放しても心の中ではずっと大切にしていた…。とても素晴らしいじゃないですか、胸を張っていい事だと思います」

「それでも一応賞賛しているつもりなのだが、虎太郎は何も言わない。蓮はあまり、他人を褒める事をあまりした事がないので相手にどう受け取られているのかが分からないが、虎太郎はこういう人間なのだろうと勝手に納得する。」

「私にはあなたと美紀恵のような血の繋がった親は居ませんが…あなたはとても立派な父親だと思いますよ」

その言葉を聞き、虎太郎の表情が僅かに変わった。その時、口にくぼが出来ていたことに蓮は気が付かなかった。

前を見てみると、戦闘はもう最終局面になっており、折紙は『アリス』の防生随意領域テリトリを広範囲に展開し、三人を閉じ込めるが、セシルの捨て身の攻撃により、絶体絶命のピンチに陥るが、美紀恵が攻撃し、危機を救った。

結果、アシユクロフト『アリス』の防衛に成功。奪われたアシユク

ロフトの奪還はならず、しかし、主犯格であるセシル・オブライエンの捕縛に成功。『アリス』は岡峰 虎太郎の意向により、ASTに支給されることとなった。

『アリス』護衛任務から次の日、

蓮は燎子とテーブルを挟んで話し合いを行っていた。話題は当然、捕らえたセシル・オブライエンについてだ。

「で…何か情報は引き出せましたかね？」

「尋問を続けているけど、ずっとだんまりで何も言わないわ」

お手上げと言った様子でため息をつく。蓮がこんな事を聞いた理由は簡単だ。

彼女達がアシクロフトを狙っているのは分かったのだが、なぜ狙うのかが不明なのだ。

(やっぱり待っているだけじゃ何もわからないか…)

待っているだけで手に入る情報などゴミも同然だ。価値のある情報は自分が動かなければ手に入らない事を学んだ瞬間である。

「ふむ…ちよいと会わせてくれませんか？」

「悪い事言わないから、止めときなさい。美紀恵もそう言って会ったけど、結構狡猾で、丸め込まれそうになったんだから」

「俺がそんな甘い性格だと？」

「…分かったわよ。少しだけだからね」

しゅしゅといった様子で答え、部屋を出て独房へ足を進ませる。その途中、燎子は思い出したように話題を出してきた。

「そういうえば、あんた昨日は凄かったわよ。どうやったらあんな風に身体強化している相手の攻撃を避けれるの？」

燎子が言っているのはセシルの蹴りを全て避けきった事を言っているのだろう。あまり、自分の事を喋るのは好きではないのだが、興味深々といった様子で聞いてくるので仕方なしに答える。

「知り合いに最強最強うるさい人がいましたね。その人に避け方を鍛えられたからですよ。まあ、あれが出来るようになるまで尺骨六回、上腕骨五回、肩甲骨三回、脛骨六回、大腿骨七回、その他もろもろ…

肋骨なんて何回折ったか覚えてませんけどね」

懐かしむようにペラペラと酷い怪我の歴史を聞き、燎子の顔が段々青ざめていく。そんな燎子に気が付かず、独房に到着すると扉の窓から中を覗いてみる。当然、部屋には装飾など何もなく、木製の椅子だけが置いてあり、そこに目を閉じたセシルが座っていた。

「そ、それじゃあ私はここで待っているから、用が済んだら出てきなさいよ」

蓮が入室したのを確認して扉を閉じる。目を閉じていてもセシルは扉を開けた音と足音で誰かが入ってきたのは分かるはずだが、一向に目を開けようとしなない。

「名前は…セシル・オブライエンで合っているか？」

「その声は…ふふ、美紀恵ちゃんの次は誰が会いに来たとおもったら、あなたが会いに来るとはね」

”声”と聞いて蓮はセシルが両目が見えない事を瞬時に察した。試しに正面に立ってみても彼女が両目を開けない。開けても見えないから開けないのだ。そして、立たない理由もおそらく…。

「まず自己紹介からしたいんだが…自分の顔を見られないで自己紹介はないか…」

セシルは正面から近づいてくるのを気配で感じる。そして、両瞼に指のようなものが触れる感覚があるが、指というには感触が硬く、人間味を感じさせない。

「一体何を…」

「動くなよ。ジツとしていればすぐに終わる」

セシルには、この行動の意味が理解出来なくて、少し困惑するが両目に暖かく、優しい温もりを感じて不思議と恐怖は感じなかった。

しばらくすると指が離れ、暖かさも消える。彼女にはそれが名残惜しかった。

「よし、ゆっくり…ゆっくり目を開いてみる」

言われた通りに目を開いてみると、見えないはずの部屋の壁が見える。そして、その中央には自分と年齢も変わらないような少年が安心したような表情で立っている。

その少年はセシルにとって大切な彼女とは性別も顔も違うはずなのに、一瞬、重なって見えたのだった。

「そんな…あり得ないわ…こんな事…」

「残念だが見えるのは少しの間だけだ。数分もすれば再びお前の目から光は失われる」

驚いているセシルとは逆に蓮は冷静に大切な事を伝える。

〈バスター〉の治癒能力で目が見えるように努力してみたが、目の神経である視神経の再生が出来なかつたので、一時的に刺激を与えて神経を復活させた。これは神経に”見えている”と誤魔化しているにすぎないので、時間が経てば再び盲目になってしまう。

そして、普段なら来るはずの疲労もない。これは傷を治癒するのと比べ規模が小さいからだろう。

今まで盲目の人間に対してこの力を使った事が無かつたので、セシルは実験体…というになつてしまった。このまま足の治癒をしてみたいと思つてしまうが彼女は凶悪犯罪者であるため、あまり自由に動けるようにするのは望ましくない。

「こんなの奇跡だわ…どうやったの？」

「奇跡っていうのはそこまで安売りしてないんだよ。それで自己紹介とていか、俺は神代 蓮、A S Tで整備士している。お前はセシル・オブライエンだな？セシルって呼ばしてもらってから」

「え、ええ…それで一体何しに来たのかしら？まさか、捕まった私を笑いにでも？」

「いやいや、真面目な話をしに来たんだよ。俺はアシクロフトを狙う理由が知りたい、お前達はただのテロリストじゃないな？」

国にとってテロリストの存在を認めるといふ事は、その国の中にも狙つた理由がそんなテロ目的なら納得がいくのだが、セシルは首を横に振つた。

「ええ、私達は人を殺めるテロなんて起こす気は全くないわ。そうね…あなたはアルテミシアという人物を知っているかしら？」

「アルテミシア？…ああ、知ってる。確かとても優秀な魔術師らしいが…」

アルテミシアとは真那と並ぶほどの腕の持ち主で世界最高の魔術師ウィザードの一人として数えられている女性だ。しかも性格は優しく、誰からも愛される優等生といった存在らしく、捻くれ者の蓮とは真逆なのだが、彼女はたしか…

「たしか、いつからか」消息不明」になっただが…」

それを聞いた途端、セシルの表情が歪む。そこには憎しみと悔しさといった負の感情があった。

「彼女を助け出す…それが私達がアシユクロフトを狙う理由であり、目的でもあるのよ」

はつきり言って、話が全く読めない。消息不明だというのに助け出すというのはどういう意味なのだろうか。そして、そのためにアシユクロフトが必要とは…アシユクロフトの持つ力が必要という事なのだろうか？

「ふう…少し喋り過ぎてしまったわね。話はこれで終わりよ」

そう言ってもう話す気はないとばかりに目を閉じる。そんなセシルを蓮はこれ以上何かを言わせるような気になれず、入ってきた扉に向かう。

「そうだ、俺もお前みたいな奴、結構好きなタイプだぞ。街中で会ったら、すぐに口説いてたかもしれないぐらいな」

「あら、ならそんな女性をこんな部屋から連れ出してくれてもいいんじゃないかしら？」

「気が向いたらそうしてやるよ」

その言葉を最後に扉を開け、部屋から出て行く。この会話が本心のものであったのかは本人しか知らない…。

「どう？何か聞き出せた？」

出てきた蓮を出迎えたのは壁に背中を預けた燎子だ。しっかり頼んだ通りに二人きりで話をさせてくれたらしい。その質問に対して首を横に振る。

「残念ながら、めぼしい情報は特に。彼女の処分に対してイギリスから何か？」

「今のところ何もないけど、そのうち連絡がくると思うわ。なあにそれまでに私が目的も残りの二人の場所も全部吐かせてやるから…」

指をポキポキと鳴らし、やけに張り切った様子で歩いて行ってしまった。燎子はアシクロフトを奪われた事などでかなりの対抗心や悔しさなどがあつたのだろう。

(アシクロフトを狙う理由…か)

相手の言つた事一つ一つに耳を向けるほど単純ではないが、それだけが不思議と頭の中に残り続けた。

次の日、蓮は格納庫の壁に背中を預けて座りながら小さく欠伸をしていた。

昨日、アルテミシアについて調べたが、手がかりが少なすぎるせいか、全く目に止まる事が出てこない。それを調べていて徹夜という形になった。

(そもそも行方不明の奴を”救う”って時点で噛み合っていないな…) 顔を顰め、セシルの言つていた事にそんなツツコミを入れるがその疑問には誰も答えてなどくれない。そうしてる間にも欠伸が一つ出てくる。

普段なら一日の徹夜ぐらい大した事はないのだが、睡眠はとれる時にとつておくのが望ましい。

そして、いつからか目を閉じ、寝息を立て始めていた。

「ふう…少し休憩を…って蓮！こんなところに居たんですか」

少し時間が経過した後、寝ている蓮を見つけたのは蓮の恋人(自称)でこの整備主任であるミルドレット・F・藤村こと、通称ミリイだ。「まったく、仕事中に居眠りなんて！蓮はダメですねえ！」

頬を膨らませプンプンといった様子ミリイだったが、突然、真剣な表情に変わると周囲をキョロキョロと見渡し始める。

今、二人の周りには誰も居ない、二人きり、そう、HUTARIK

IRIなのだ。

それを確認したミリイはゴクリと唾を飲み込み、ゆっくり寝ている蓮に近づき、まじまじと観察し始める。

ぴったり十秒ほど見た後、垂れている髪を耳に掛けるが、その仕草は普段のミリイからは考えられないほど色っぽい。

その後、寝ている蓮の頬に手を添えて優しく上を向かせると、目を閉じて、ゆっくり自分の顔を近づけていく。

近づくにつれミリイの顔がどんどん赤くなっていく。そして、二人の顔が一つになる、その瞬間…。

「ふふう!？」

寝ていたはずの蓮の手が動き、ミリイの頬を掴み動きを止める。急な事に驚いて、ミリイの口から変な声が漏れる。

「寝ている人間に何しているんだ？ミリイ…」

「違うんですうほほうんれふー！これは事故なんですうほれはれこなんれふうー！」

「事故って…明らかにお前の方からしてきただろ…。まあいい」

手を離してミリイを解放すると、自分の座っている場所の右側の床をトントンと叩く。

「ミリイ、ちよつとここに座れ」

「ふえ？いいですけど…」

言われた通りに床に座ると、蓮が急に上半身を倒してミリイの太ももに頭を乗せる。俗に言う膝枕をしてきた。

そんな事をいきなりされてミリイは顔を真っ赤にしてパニック状態になる。

「あわわわっ！いい、いきなりどうしたんですっ!？」

「あんまり騒ぐな。二十分経過したら起こしてくれ」

異性にこんなに接触しているというのに、まったく緊張した様子もなくそう言うと、目を閉じて再び寝始める。

どうしたら良いか分からないミリイだったが、右手をゆっくり動かし、寝ている蓮の頭を優しく撫で始めた。

番外編 5話

「うーん…スッキリ、よく眠れた」

二十分後、寝たおかげで体力回復が完了した蓮はググツと身体を伸ばしリラックスする。人間の三大欲求の大きさが身にしみてよく分かった。そして、その間蓮の枕となっていたミリイはというと…

「も、もう…蓮だったら…言ってくれればさせてあげましたのに…」

顔を赤くし、何やらモジモジといった仕草をし、独り言をブツブツと呟いており、それは外から見ると明らかに精神異常者にしか見えな

い。「どうせならベッドの上で…ああん、もう綺麗だなんてミリイは照れちやいますつて。どうせなら一緒に寝てあげますよ、あつ、そんな所触つちやもうお嫁にもらってもらうしかありませんつてえ…」

自分の世界に入り浸るミリイ。まあ、妄想や夢見る事は自由のため、水を差す事はないだろう。そんなミリイを横目で見てみると正面から見知った顔がやって来た。それは『チェンジャー・キャット』を装備した美紀恵だ。

「あれ?どうしたんだ、こんなところに?」

「蓮さん、襲撃犯の護送任務の事なんです…」

「あれあれ?あなたはたしか新人の…」

そこで自分の世界から帰ってきたミリイが会話に参加してくる。まだ二人は初対面だったらしい。

「岡峰 美紀恵です!よろしくお願いします!」

堅苦しく敬礼するが、ミリイ相手にそんなのが必要とは思えない。しかし、まあ、上下関係は大切という事だろう。

「ミリイは整備士の『ミルドレット・F・藤村』ですよ。それでご利用は何ですか?」

「襲撃犯の輸送と一緒にワイヤリングスーツも護送するから、持ってこいと隊長さんに言われました…」

少し前にセシルの処遇が決定し、イギリス本国に送還となった。その後の結末はASTの知ることではないのだが、蓮の予想では最悪の

場合は処刑、それを免れてもまともに太陽を拝むことも叶わない人生になるだろう。

美紀恵が言っているのはそれについてだ。

「護送リストにそんな物は入ってなかったはずだが…」

ミリイは別に何も疑問に思っただけでないらしいが、蓮はしつかり確認していたから分かる。セシル本人以外に何か持ってこいという命令は無かったはずだ。その言葉に美紀恵は肩を震わせたのが見えたのだが…

「まあ、そうだな。もしかしたら必要になるかもしれないし、渡しておくよ」

「あ、ありがとうございます！」

「なんでここで礼を言うんだ？命令なんだろう？ミリイ、渡していいか？」

抜けてるなど心で思いながらミリイに判断を委ねる。ミリイはこの整備主任なので彼女の許可が必要なのだ。

「へ？別に構いませんよー」

呆気なく許可が下りたことにより、蓮はセシルのワイヤリングスーツを取りに向かう。ワイヤリングスーツといっても手のひらに収まるほど小さなデバイスで見た目は軍のドッグタグに似ている。

蓮はなんとなくそれをジッと眺める。もし、これがセシルの手に渡ったら随意領域^{テリトリー}を展開し、ここから逃げるんだろうと思いつつ、渡す。

きつかり二秒後、そんな思考を中断し、それを美紀恵に渡す。

「それじゃあしつかりと渡したからな。頼むぞ」

「は、はい。ありがとうございます。蓮さん、ミルドレットさん！」

礼を言った美紀恵は小走りで格納庫を出て行く。その姿を蓮は見つめていた。

「ミリイ、ちよつと用事を思い出したから、少し抜ける」

「さつき休んだばかりじゃないですかー。これ以上はダメですよー」

「もし、許可してくれたらキスしてやるよ」

「ええっ!? 本当ですか!!」

「いや、嘘」

期待を膨らませたミリイにさらつと嘘を吐いて格納庫を出て行く。どこに行くかなどもう決まっていた。

出て行つた美紀恵の後を追つてみると、向かつた先は燎子の元ではなく、セシルの居る第二特別室だった。

鍵を開け、入室するが美紀恵は数分も経たな内に部屋から出てきた。その後はどこかに歩いて行つてしまったのだが、やはり燎子の所に向かうつもりでもないようだ。

美紀恵の姿が見えなくなると、扉を開けて室内を見てみる。すると、蓮が格納庫で渡したデバイスが落ちているのが目に入る。

そして、中央にはセシルが座っているのだが、その両目からは涙が流れ落ちていた。

「あいつは…まったく…」

新人の癖に敵に肩入れとは幾ら何でも甘過ぎる。それに対する呆れのため息混じりに出した声にセシルが反応する。

「その声は…美紀恵ちゃんは一切何を…」

状況が飲み込めないセシルは困惑した声を出す。蓮はデバイスを拾つてセシルに向かつて歩き出す。

（やっぱり俺も男なんだな…女に優しくしてカッコいい所を見せようとする…）

涙は女の武器とはよく言ったものだ。セシルの近くに寄ると手を開かせてそこにデバイスを握らせる。彼女は握つたその感触でこれが何かすぐに分かつた様子だ。

「しっかり機能するようにチェックはしておいたから、問題なく動くぞ」

「あなたはなぜこんな事を…」

「それは美紀恵に言え。俺自身はまったく何もしてないさ」

人差し指でセシルの顔の涙を拭き、部屋を出て行く。美紀恵が考えもなしにこんな事をしたとは考えにくい。

つまり、美紀恵とセシルの間に何かしらの取引などがされた可能性

がある。まあ、『可哀想だから』という理由もゼロではないが。

(さて、美紀恵がどんな考えで逃がそうとしたか：見せてもらおうか)

すぐにセシルはここから脱出するだろう。その時に顔を合わせてはマズイ、蓮はすぐにここを離れていく。自分が”傍観者”であるために：

—————

セシルの脱走はすぐに発覚し、基地の中にサイレンとセシルを発見して捕獲しろという命令が下された。

隊員が忙しくバタバタ走り回っているなか、セシルはすでに基地の敷地の外まで脱出していた。

疲労の色を見せながら基地から離れるべく走り出すセシルを、敷地を隔てる塀を飛び越えてきた美紀恵が後を追って走り出す。美紀恵本人はバレていないつもりだったらしいが、それは蓮から見たら子供騙しのレベルだ。

(なるほど、後を追ってアジトを見つけるとして事か)

計画は甘かったが、その目的は悪くないと塀に腰を掛けたまま、心の中で称賛する。走っていく美紀恵を塀から飛び降りコツソリと後を追う。

しばらく走りたどり着いた場所は人気のない廃アパートだった。セシルがその中に入っていくのを見た美紀恵はすぐに後を追うが蓮はすぐには入らず、周囲をチェックしてトラップや監視カメラなどが無いかを入念にチェックして中に入る。

すでに二人の姿は見失ってしまったのだが、地下に通じる階段から話し声が聞こえることから地下にしていると判断し、コンクリートで出来た階段を足音を立てないようにゆっくりと降りていく。

降りていくにつれ、話し声がハッキリと聞こえるようになってくる。今話しているのは美紀恵だろう。

「私は自分の一番正しいと思う行動をしました：それは、あなたを信じて：あの場から逃す事です！」

言葉から大きな決意が宿っていると感じる。少し前はオドオドと

した少女だったのに今は自分の信じる事のため、行動出来る勇氣がある。

『納得は全てにおいて優先すべき事』という言葉があるが、蓮は行動すれば褒めるほど甘くはない。

気付かれないようにコッソリ美紀恵に近寄ると頭にそこそこ力を込めた拳骨を不意打ちで落とす。痛みで頭を押さえ、一体誰がしたのかと涙目で後ろを向いた瞬間、まるで幽霊でも見たかのような驚愕した表情に変化した。

それは一緒にいたセシル、アシュリー、レオノーラも同じだ。

「れれれつれ、蓮さん!?!ど、どうしてここに!?!」

「それは結構なんだが、人の良いミリイを騙したのは感心しないな。まったく…隊長さん、怒ってたぞ」

美紀恵の疑問に答える事なく、やれやれといった様子で周囲を見渡しセシル達に視線を向ける。セシル以外は緊張…警戒した顔だ。

「どうするんだよ!?!美紀恵はともかく、アジトを知られちゃったぞ!」
蓮にこのまま帰られるのはマズイ事になってしまった。最悪、殺しても口封じを…という考えがアシュリーの脳裏を掠めた時。

「俺を殺したいと考えるなら、その前にブランドーのまともな注ぎ方でも身につけてからにしろ。前髪の長いウエイトレスさん、いや、アシュリー・シンクレアだっけ?」

つまらなそうにしながらアシュリーの考えていた事をピタリと言いつける。それだけでなく自分の黒歴史を言われて顔が羞恥で赤く染まる。

そんな事を言われてもセシルだけは冷静だった。

「なぜあなたは私を逃したの?その様子だと美紀恵ちゃんと共犯という様子じゃないらしいけど」

「テロ目的じゃないのに、アシクロフトを奪おうとする目的が気になってたんだよ。それを聞くにはそれなりの善意を見せる必要があると思った。そんな時に美紀恵がお前^{セシル}を逃がそうとしているのを感じて急遽その計画に乗った…ってところかな。これは予想なんだが、美紀恵とお前の間にもそんな取引があったんじゃないのか?」

「驚いたわね…その通りよ」

美紀恵の頭にグリグリと拳を押し付けながら、まるで見ていたかのように取引の内容を言い当てる蓮にセシルは降伏とばかりに声を出す。

（私も美紀恵ちゃんも、彼の手のひらの上で踊らされてたってわけね…）

だが、そんな彼に自分達の目的を言って、協力してくれればとても頼りになる味方になってくれるだろう。蓮には分からない事が多いが、自分の正義のためならどんな事でもする力と勇気があると感じられる。

「そうね…あなた達はしつかりとした善意を見せてくれたわ。話してあげる。私たちの目的を…」

「てめえ狂ったか!? A S Tは敵だぞ！もしかしたらこれは作戦って可能性も…」

「確かに保証は無いわ。だけど、二人は進退をかけてまで逃がしてくれた。なら、私も信じてあげなきゃダメだと思うの」

アシユリーが食ってかかるが、セシルの言葉を聞いて床に座り込む。好きにしろという意志表示なのだろう。

セシルは側にあつたアタツシユケースから、そこそこ厚みのある資料らしきものを取り出して美紀恵に渡す。少し汚れている表紙を見ると、『DEM、Ashcroft、TOP SECRET』という単語が目に残まる。

「そこにあなた達の求める事が書いてあるわ」

セシルから資料を受け取った美紀恵はページを開いてその内容に目を通していく。すると、顔色が悪くなっていた。

「…顔色が悪いわよ。内容が衝撃的すぎたかしら」

「い、いえ…だ、大丈夫…です…」

美紀恵はそう言うが蓮からは明らかに大丈夫そうに見えない。今もあまりのショックのあまり、資料を床に落としてしまった。

蓮もそれを拾い、内容に目を通していく。確かにこれほどの内容なら美紀恵がそうなるのが分かる気がする。

「それを見れば分かる通り…私達のかげがえのない友、アルテミシアを奪った組織の名は…DEM…そして…新型顕現装置リアライザアシুকロフトのコアはある魔術師ウィザードの脳をベースに作られたもの…」

「なるほど…アシুকロフトという名前はただの偶然じゃなかったわけか。五つのアシুকロフト全て…アルテミシア・ベル・アシুকロフトの脳内情報を使って作られたもの…脳情報を吸い取られたアルテミシアは昏睡状態…つまり、アルテミシアはアシুকロフトのための生贄セイジって訳か」

セシルの言葉を蓮が続ける。アシুকロフトが他の機体と比べて性能が高いのも、世界最高峰の魔術師ウィザードであるアルテミシアの脳を素材としているからなのだろう。

「アルテミシアを元に戻すためには五つ全てのアシুকロフトにメモリーされている脳情報をアルテミシアにフィードバックさせること…それがアシুকロフトを狙っている理由よ！」

セシルの言葉を蓮は資料に目を向けながら聞いていた。その理由に納得しながらも、心のどこかに彼女達が力を求めてアシুকロフトを手に入れたのではない事に安心している自分もいた。

「これで分かったはず。美紀恵ちゃん、あなたが戦いを回避し、役に立ちたいというなら…あなたの纏っている『チェンジャー・キャット』を私達に手渡すしかない…」

少し前の美紀恵だったら拒否していただろうが、事情を知ってしまったことでそれも一つの選択ではないかと思いは始めている。そんな美紀恵を見ると、次に蓮を見つめたセシルが話し出す。

「蓮、あなたも話を聞いて協力するというなら、私達と共に『アリス』を奪うのを手伝って欲しいわ。あなたなら基地を内部から混乱させる事も出来るでしょうし」

「……………」

蓮は何も言わずに無言を貫く。その間にも資料を捲ってアシুকロフトについての情報を集めている。室内を沈黙が支配する。その沈黙を破ったのは美紀恵だった。

「それは…まだできません！ですけど、アルテミシアさんを犠牲にし

たままでもいいはずがないです！」

「でもあなたはアシュクロフトは渡せないと……」

「…時間をください！私はここで聞いた事と資料を持って基地に戻ります！この事を知れば絶対に事情を理解してもらえます！」

自分の意思を必死に訴える。たった三人だけで戦っていた彼女達を…アルテミシアを救うために…そして、本当の敵を倒すために…

「私達が戦う理由なんてなかったんです…本当の敵は…DEM社…！」

「残念だが、それじゃあ百点満点はあげられないな」

美紀恵の言葉にずっと沈黙していた蓮が言葉を挟む。四人の視線が蓮に集まるが本人は澄ました顔で、相変わらず資料に視線を向けたままだ。

「それって…どういう意味なんですか？」

「このアシュクロフト計画…現取締役の許可を取っていない非公式の計画だな。まあ、あっちもそのうち裏切りの芽を摘みにかかるんじゃないかな」

「裏切り者って…どういう事なの？」

「DEMも一枚岩ってわけじゃなくてな。たまにこういう事をするバカがいるんだよ」

今のDEM社のトップに対する不満を抱えている社員は少ない。その理由に傍若無人などがあるが、蓮は無能な愚民共の民主よりも、有能な者の独裁の方が有益と考えているので不満は無かった。

分かりやすく言うと、日本には『三人寄れば文殊の知恵』という諺ことわざがあるが、蓮から言わせてもらおうと、『バカは百人集まってもバカ』それだけだ。

「随分と内部情勢に詳しいのね」

「まあ、俺もDEMの人間だからな」

さらっと言う爆弾発言に驚きの声が響くが、本人はそんなもの知ったことかとばかりにページを読み進める。すると『エドガー・F・キャロル』という名前を見つけて目を細める。それは知っている名前だったのだ。

(こいつは顕現装置開発部の統括責任者の…なるほど、こいつが元凶か。野心家っていうか、自分が一番じゃないと気が済まないような性格のおっさんだったからな)

エドガーとは、DEM本社で数回顔を合わせた事がある相手なのだが、今の立場に明らかな不満を抱えているという雰囲気を感じ取ることが出来た。それを放置したツケをここで支払う事になるとは流石に予想外だ。

ある程度中身を見終わって資料をセシルに返す。

「話を戻すが、それでも墮とせるほどDEMは簡単じゃない。真那にも勝てないお前だとな」

「そんな…証拠はここにあるのに！何事もやってみなければ…！」

「DEMには強力な魔術師がAST以上に揃っているわ。あなた達の部隊の世話になっている崇宮 真那や世界最強と謳われるエレン・M・メイザース。そして、魔術師ではないけど、裏世界の皇帝とまで言われている技術者の存在もある…。DEMと戦うならそれらとの衝突は不可避だわ」

眉間に皺を寄せて話すセシル。一秒でも早くアルテミシアを救いたいと言ったが、冷静に現状を分析出来ていた。そこには証拠があるのに大きく動けない今の悔しさを感じる事も出来る。

「俺もそう思う。負けたらそこまでだ。だがDEMもずっとお前達を放置していたわけじゃないだろう？」

「ええ…あいつらは『追手』を差し向けてきたわ。そいつに見つかる前にアシクロフトを揃えなければ…」

その直後、美紀恵達がいるビルに斬撃が入り、崩壊を始めて、瓦礫が降り注ぐ。突然の崩落にセシルはそれとは違う驚きで顔を染める。

「まさかもう…見つけたの!?!」

「その通りだ…お前達がどこに行こうと…どこに隠れようと必ず見つけ出す…。会いたかったぞ、セシル、レオノーラ、アシユリー…」

崩れたビルの柱に立ち、そう言ったのは全身褐色肌で右目に縦向きの傷痕が特徴的の女だ。

ワイヤリングスーツを着ており、右手にはブレードを持っている。

それでビルを崩壊させたのだろう。

「も、もしかしてあの人がさつき言っていた追手…はっ！蓮さん、ここから逃げ…」

美紀恵は非戦闘員である蓮を巻き込まないように離れるように言い、後ろを振り向くがその瞬間仰天した。

なぜならそこには蓮の姿がなく、まるで幻のように消え去っていたのだ。

蓮が急に消えた事に狼狽する美紀恵だったが、女が柱から飛び降りて床に降り立ったのを見て、気を引き締めざる得なくなった。

番外編 6話

「ええつと…名前は『ミネルヴァ・リデル』元SSSのナンバー二の魔術師ウィザードで少し前にDEMに引き抜かれて、現在は第一執行部所属と…
タイミング的に考えて、エドガーの使いパシリってところかな」

美紀恵達から少し離れたビルの上で蓮は手元に持つ携帯端末の画面を見ながら襲撃者の正体を確認していた。

元SSSであることから、セシル達の知り合いである可能性が高い。

(まったく…あの人は…『隙を見て、私の首を狩ろうとする部下であった方が好意を持てる』なんて言ってたけど、処理することちも身にもなつてほしいよ…まあ、そのお陰で退屈はしないが)

イギリスでこの件が片付けば苦労はしなかったのだが、日本まで追手がきた以上は自分も少なからず動かなければならないだろう。それがDEM関連となれば尚更だ。

(これ以上、事を大きくするわけにはいかない…)

この事が他の国にバレたらDEMの立場が危うくなる。DEMは自分の家だ、自分の力で守る。

視線を美紀恵達に向けると、ミネルヴァが拘束したセシルの『ジャバウオック』にメモリーカードのようなものを差し込むのが見えた。

本来アシクロフトは一度認証すると、認証した人間以外は動かせないのだが、ミネルヴァの背後にはアシクロフトを作った人間がいるのだ、その認証を解除させる解除キーのような物でも渡されていたのだろう。

(やっぱり、相手もそれなりの準備をしているか…)

ミネルヴァは認証を解除し、フリーとなった『ジャバウオック』の認証箇所認証箇所に自分を認証させて装備する。

このまま美紀恵達を皆殺しにするのかと思ったが、急に座り込み、身体を痙攣させて始めた。

これには蓮も頭の上に？を浮かべる。結局、ミネルヴァはそのままどこかに逃げていった。

(最後の状況がよく分からなかったが…解除キーを持っていたという事は他のアシクロフトも狙っているだろうな。相手の狙いは分かっているんだ、焦る必要は無い…)

最後を見届けた蓮はビルの屋上から身を投げ出す。普通の人間から見たらこれは自殺とも言える行動だ。だが、次見た時、蓮の姿は地上にも屋上にも無かった。

その後、美紀恵は周囲を搜索していた折紙と燎子によって発見され、基地に連れ戻された。彼女には捕まえたセシルの脱走を手引きした。これは処罰されるべき罪だ。

取り調べで美紀恵はアシクロフトの真実と本当の敵がDEMである事を燎子に伝えるが、それが真実である証拠はゼロだ。

その発言も虚しく、美紀恵には無期限の懲罰入りが下された。

――

「どうだミリイ、すっかり見えたか？」

「もうちよつとだけ…あ、そのまま動かないでください」

現在、蓮はミリイに肩車をしていた。その理由はミリイが美紀恵の様子が気になると言うが、懲罰室の覗き口は、扉の高い位置にあるため、ミリイの身長では届かない。そのため、肩車をしているのだ。

「美紀恵の様子はどうか？」

「うむう…結構落ち込んでますよ。まあ、こんな所に入れられたらそれも無理はありませんけど…」

落ち込んでいるという事は、美紀恵の思った通りに事が進まなかったのだらう。それもそうだ、DEMが事の元凶なんて話を証拠もなく話されても信じる人間はほとんどいないだろう。

「そこで何をしているのかしら？整備士さん」

突然の声の上にいたミリイは身体を震わせるが、蓮は冷静に顔を動かす。そこには燎子が腰に手を当てて立っていた。

「ミリイが美紀恵の様子が気になるって言ったんでその手伝いを…」

「あはは…いや、ミリイがすっかりデバイスを管理していたら、こんな事にならなかったと思いますよ…」

ミリイも彼女なりに罪悪感…、罪の意識を感じている様子だ。そんなミリイを下ろして三人は廊下を歩き始める。

「まったく…そこのお馬鹿はいいとして」

「ただただ、誰がお馬鹿ですかっ!!」

「蓮、あんたがミスするなんて珍しいじゃない」

お馬鹿という言葉に過剰に反応するミリイを無視して、燎子は蓮にそう聞く。蓮は整備場の責任者ではないが、その役職にしても問題無いような能力があり、ミスなど今まで無かったのが理由だ。

「確認するのを忘れてましてね。ミリイの許可はもらっていたので『部下の責任は上司の責任』というわけで罰は全部ミリイにどうぞ」

「ええっ!? 蓮はミリイを見捨てるんですか!? ミリイのような天才はほとんどいませんよ!? それに蓮は恋人がどうなってもいいんですか!?」
「誰が恋人だ。それでこの件について、DEMなどから嫌味の二つや二つを言われたんでしょうね」

「いえ…DEMどころか上からも何も言っていないの。不気味なほどにね。これは…何か臭うわ…」

何か腑に落ちないという様子で燎子は顔を顰める。それもそうだが、ASTのミスでセシルを逃したと言うのにそれに対する苦情も無いというのはどう考えても普通では無い。

（本社の方はこれにダンマリが。これは厄介ごとに突っ込みたくないという意思表示か…）

DEMがこの事について何も言っていないという事は、アシユクロフトの真実を知っていながら黙認しているか、本当に一部の人間だけで行われていて、会社側はこの事を本当に知らない可能性があるが、上も何も言わないとなると前者の可能性が高い。

「それは…美紀恵の言っていた事を信じている…という認識でいいですか?」

「私も証拠も無しに全て鵜呑みにするほど馬鹿じゃないわ。けど、本人には明日にはもう出してもらおう事になるかもね。あの子は迷っている…なら、その憂いを晴らして上げるのが隊長の役目。この件はしっかり調べてみるわ」

「お、おお…カツコいいです！見直しましたよ！リョウコ！ちよつと頼りない隊長だと思つてましたが！」

せつかく良いシーンだったというのに、ミリイの余計な一言が全てを台無しにしていった。これを聞くと普段、ミリイの中で燎子の株が低いか良く分かつてくる。

「あんだ殴られたいの？ていうか、あんたもDEMの社員でしようが。何か知つている事ないの？」

「いやあー、ミリイは整備士ですし、蓮と一緒にいながらCRーユニット弄れば満足なので、会社のこととかはどうでもよくて…」

社員が会社の事に無関心なのは如何なものか。だが、それを咎める事なく、蓮はこれから自分がどうするべきか思考する。

（何も言つてこないって事はDEMは介入しないという考えか…）

DEMからの増援が事態を解決、という展開はなくなつた。言い方を変えればそれだけ自分が自由に動けるということだ。

それを考えて蓮は歩き出す。これからする事は、これから相手より一歩先の手を打ちにいくのだ。

「ふあ…朝か…」

翌日、窓の外から雀の鳴き声が聞こえてくる頃に目が覚めた。自分はぐつつり眠る事が出来たが、美紀恵はしつかり眠れただろうか。これからの事を考えて一睡も出来なかつたかもしれない。

蓮が今、自分の家のベッドで寝る事が出来ているのは、美紀恵が取り調べの時、一緒に話を聞いていたはずの蓮の名前を出さなかつたお陰とも言える。もし、名前を出していたら、無期限とはいかなくても数日の懲罰入りが決まっていたかもしれない。

人間はどうしても理解されない事があると、理解者を探すものだが、美紀恵は理解者よりも、迷惑を考えて罪を認めた…これはなかなか出来る事ではない。

ぐぐつと身体を伸ばしリラックスする。その時、机の上に置いてあつた端末が、ピピピツと音を立て始める。

それを聞いて蓮は悪魔のような笑みを浮かべる。この音は鼠が罠

に掛かったサインだ。そして、捕まった鼠の運命など想像難くない。

天宮市の外れにある遊園地跡、そこにはアシユクロフト『ジャバウオック』を装備したミネルヴァがいた。

当然、彼女も理由もなくここににいるわけではない。そこに三人の人影が歩いてくる。

「来たか…歓迎するぞ。わざわざアシユクロフトを奪われに来てくれたのだから…」

「ここに私たちを呼び出すなんて、随分自信があるじゃない…もしかしたら、奪われるのはあなたの方かもね…！」

セシルは軽口を叩くが、その表情は緊張している。それは後ろにいるレオノーラとアシユリーも同じだ。

「来たのはお前たちだけか？てつきりあのチビ（美紀恵）も来ると思ったのだが…」

「ASTの人間なら来ないわよ…彼女にいたっては今頃監禁されてるでしょうしね…」

「なるほど…それと、お前たちのほかに男がいたはずだ、あの時はドサクサに紛れて逃げたようだが…」

三人の顔が僅かに強張る。ミネルヴァの言っているあの男とは蓮の事だろう。

「蓮は関係ないわ！それに、彼はあなたと同じDEMの人間なのよ！」

必死に訴えかけるセシル。自分たちを狙ってくるのは構わない、だが、非戦闘員である蓮までも巻き添えにさせるのは彼女のプライドが許さなかった。だが、ミネルヴァはそんな事知ったことかとばかりの様子だ。

「だからこそだ。私もそれだけなら放っておいた。だが、そいつはアシユクロフトの正体を知ってしまった。だから口封じしなければならぬ。私の目的のためにあんな石ころ一つに躓くわけにはいかならんぞいな」

セシル達は反逆者だ。そんな人間のいう事は誰も信じない。美紀

恵と折紙はASTだが、物的証拠がないので心配の必要がない。だが、蓮はDEMの人間だ。同じ会社の人間となつては万が一という可能性がある、それがミネルヴァが蓮を殺害する理由だ。

「ミネルヴァ：あなた、性根まで人間じゃないわ…」

拳を握り、歯を噛みしめるセシルが漏らした一言。ミネルヴァはそれを鼻で笑い飛ばす。

「ふん、恨むのなら、そいつを巻き込んだ自分自身を恨むのだな。お前が余計な事をしなければそいつは死なずに済んだのだから」

「…どうやらあなたを倒さなくてはならない理由が一つ増えたみたいね…」

覚悟を決めた顔の三人に向かって、ミネルヴァは猛スピードで襲いかかった。

『…はい！ミリイですけど、こんな朝からどうしたんですかー？』

『朝早くから悪いな。今、基地にいるよな？折紙と美紀恵がどこにいるか知っている？』

『いいえ、オリガミもミキエも、少し前に任務もないのにデバイスを持ってどこかに行つちやっつたんですよ。しかし、なんでそんな事を聞くんですか？』

『いや、そんな大した理由はないさ。でもあえて言うなら…ちよつとした駆除作業かな』

「全滅!!ゲームオーバーだ!!ハハハハッ!!」

廃園となつた遊園地にミネルヴァの声が響き渡る。その周囲にはセシル、アシュリー、レオノーラ…そして、美紀恵と折紙が地面に倒れこんでいる。その状況は誰が見ても彼女の勝利、そう思うだろう。

「さて…ではアシュクロフトを頂いていくとするか…」

ミネルヴァは倒れている仲間の所へ歩み寄っていく。セシルはそれを虚ろな意識の中、ただ見ている事しか出来ない。

(私たちが負けたら次は彼が…誰でもいい…その際、悪魔でも構わな
いわ…誰か…ミネルヴァを…止めて…)

今まで神という存在を信じていなかったセシルだが、この時は心の
底から祈った。しかし、現実はそのなにごくはないというのは今までの
人生の中で十分に理解していた。その時…

「まったく…朝っぱらから騒がしいな」

小さな呟き…誰に向けての言葉でもない独り言…だがそれは静寂
の中に響いた音のようになりと聞こえてくる。

ミネルヴァはすぐにその声の聞こえてきた方向に顔を向ける。セ
シルもそれにつられて顔を向けると、近くのジェットコースターレ
ールに誰かが腰掛けている。

その顔は太陽を背にしているせいで影に隠れてよく見えない。だ
が、その声は聞いた事があった。

「good morning、DEM第一執行部所属、ミネルヴァ・
リデル」

流暢な英語で、その場に似合わないほど陽気にそう言った蓮は、
レールから飛び降りて地面に着地する。

「貴様…いつからそこにいた…?」

「つい三秒ほど前から、それにしても随分と楽しそうな様子だったな
?」

ミネルヴァから飛んでくる殺気など物ともせず煽るように話し
かける。精霊と正面からぶつかった経験があるのだ、いまさらこの程
度で緊張を感じるほど蓮は可愛くない。

「まさか、貴様の方から来るとはな…なぜここが分かった?」

「セシルがアシクロフトに関する資料を見せてくれた時、そこに通
信性能に関する事を通しては特別に目を通していた。戦闘性能は高かったが、アシユ
クロフト同士の通信に対しては特別な技術やパーツを使っていない。
だったら、盗み聞きするくらいは簡単さ。お前は思った以上に単純に
動いてくれたからな」

「ほう…だが、丁度いい。アシクロフトを奪った後は貴様を始末す
る予定だったんだ。自分から来てくれるとは楽になったよ…」

目を見開き、獲物を見るような視線を蓮に向ける。そんな目を向けられても、本人は怯むどころか面白い冗談とばかりにミネルヴァを小馬鹿にするような笑みを浮かべた。

「お前が奪おうとしているアシユクロフトそはDEMから正規の手続きが行われて搬入されたものだ。その事に関しては執行部の下っ端のお前が口を出す事じゃない。分かったら汚い尻を向けながらイギリスに帰りな。そんでエドガーにこう伝えろ『お前じゃ千年かけてもあの人の首は取れない』ってな」

「黙って言わせておけばペラペラと：アシユクロフトを手に入れてからにする予定だったが：今始末してその減らず口を叩けなくしてやる!!」

ついに堪忍袋の緒が切れたのだろう。ミネルヴァの顔に屈辱の表情が浮かぶとまっすぐ蓮に向かって飛び出してくる。セシルは彼を助けようとするが、ミネルヴァに与えられたダメージのせいで身体が思うように動かない。

「死ねエエ!!」

狂気といった様子のミネルヴァが狙うのは首の頸動脈。躊躇などまったくない。ミネルヴァの右手が迷いなく首に向かって近づいていく。このまま皮膚を突き破り、鮮血が溢れ出す：はずだったが：「まさに獣だな。特にそうやって何も考えずに向かってくるところは」

ミネルヴァの右手は蓮の青い手：へバスターンによってピタリと止められていた。どんなに右手を動かそうとしても少しも動かない。とてつもない握力と力で押さえつけられている。

「このまま帰れば、太陽を拝めなくなる生活で済んだっていうのに：これを見られたんじゃあ、このまま帰らせるわけにはいかなかったな」

警告はした。それでも向かってくるといふならそれは誰であろうと自分の”敵”だ。その敵にこの腕を見られたというなら、相手をまともな状態で帰すわけにはいかない。

番外編 7話

「その腕…お前人間じゃないのか…」

「このまま大人しく帰っていけば、これを見ずにいられたのに。こういうのを日本では『自業自得』って言うのかなっ！」

右手を掴んだまま、身体を動かし遠心力を加え、ミネルヴァを放り投げる。突然の出来事に驚きながらも彼女は受け身を忘れるような間抜けではなかった。だが、まだ自分の目が信じられなく、現実味を感じてないといった様子だ。

それもそうだろう。ほんの五秒前まで普通の人間だと思っていた相手が普通でなくなったのだから。それは当然、ミネルヴァだけでなく、見ていたセシルも同様だ。

「セシル…これがお前の目に光を取り戻した”奇跡”の正体だ。これは奇跡なんてもものじゃない…ただの手品だよ。種の分からない…」

奇跡はその原因が分かった瞬間、手品という偽りの奇跡に成り下がる。だが、今の蓮はその偽りの奇跡の力を使い、観客を救うマジシャンと言ってもいいだろう。

（俺が知り合って間もない奴のためにここまでするのは…どこかの誰かさんの影響かな…）

脳裏に浮かぶのは世界を殺すとまで言われている存在と対話し、手を差し伸べた超のつくほどのお人好しの少年だ。

そんな存在を見て、自分も誰かを救ってみたい…そんな感情を抱いたかもしれない。

「貴様ごときの雑魚に…私の目的を…アルテミアになるのを…邪魔されてたまるかあ!!」

ミネルヴァは猛犬のごとく吠える。

人間はどうしても自分の思い通りにならない事があると、心理の防衛機制というものが働く。

その例を上げると、幼児期に逆戻りする事や自分の行動が正しいと思いつむなどがある。

ミネルヴァはそれらのうちの一つ、同一化というものの行き過ぎて

いるタイプらしい。

これは相手の特性を取り入れて自分と同じと思えばいい込む事だが、ミネルヴァの場合はアルテミシアに対する強烈な劣等感コンプレックスがこれほどの行動を起こさせているのだ。

「くだらないな」

蓮は小さく呟くと、左手を前に突き出す。すると、左手に光が集まっていき、機械質な籠手を作り出す。四糸乃の天使に擬似した力を持つへウイトリクゝだ。

その左手で何かを下げるような動作をした瞬間、空から何かがミネルヴァの左頬を擦り地面に突き刺さる。

セシルとミネルヴァが視線を向けると、それは鋭く尖っているナイフのようなものだったが、色は青色が入った半透明で水晶のように美しいそれは芸術品といってもいい物だが、ベツトリと付着している赤い液体がそれを台無しにしている。

「……それは……」

ミネルヴァは震える手で自分の頬に触れるとなにやら濡れている感触がある。手を目の前に持つてくると指先が真っ赤な液体：自分の血で濡れていた。

「自分が無敵と信じたアレクサンダー大王は、何千と降ってくる矢の中を平然と歩いたらしいが……お前はどうかかな？」

その言葉を合図にミネルヴァの周囲の上空からさつき降ってきたのと同じ、美しい刃が大量に降り注いだ。

すぐに刃を弾き防御するが、一度に何百という数で隙間なく向かってくるのだ。アシクロフトを装備したミネルヴァといえど、この数は捌ききれない。ガードを抜けた刃が彼女の全身を傷つけ、突き刺していく。

「ぐっ……ぐうう!!」

この数を防ぐのは無理と判断してミネルヴァは回避に専念する。ただ、この殺気を孕んだ雨から逃れたい。その一心で。

そこでとった行動は後ろに飛んで距離を開くことだった。刃が降り注いでいたのは自分の周囲、離れれば安全と判断したからだ。

「殺してやる…殺してやるぞ…貴様…」

全身が傷だらけの血まみれなつてもその瞳には蓮への殺意に満ちていた。しかし、そんな物を向けられても本人は動じる様子もない。「まだ安心するのは早いんじゃないか？殺すって言葉は言った時にはすでに終えてるんだよ、ボンクラが」

自分を嘲笑う蓮の言葉。それを聞いた時、ミネルヴァは右肩に激痛を感じた。ゆっくりと視線を向けるとさっき降ったのと同じ刃が突き刺さっていた。

「そんな…バカ…」

それを最後まで言わず、またミネルヴァに向けて大量の刃が降ってくる。蓮はミネルヴァをとことん追い詰めるつもりだ。

「こんな…こんな事があ!!」

「四機のアシクロフトを一度に手に入れたいだなんて欲張るからそうなるんだよ。大量のAST隊員にでも囲まれていれば、少なくともこんな惨い目に遭わなくて済んだんだ」

いつでも欲張り者は損をするものだ。すると、またミネルヴァが大きく動いた。無駄な事にまたはどこかに逃げようとするかと思ったが、その逆で蓮の方に突っ込んできた。

その理由は大方予想がつく。どうせ、近くにいけばこの攻撃は自身も巻き込んでしまうので、止めざる得なくなる。その隙をつけばミネルヴァは勝てると考えたのだろう。

今の攻撃範囲は半径三メートルほど、近づかれれば巻き添えを食らうので攻撃を止めるしかない。

攻撃が止んだのを好機をみたミネルヴァはもはや飛びかかると言っつていいように襲いかかる。だが、ミネルヴァはあの悪夢から解放された喜びと蓮を殺せる嬉しきですっかり忘れていた。〈バスター〉の存在を…

蓮の頭に向かってくる手を首だけ動かす最小限の動きで回避すると、空を切るその腕を右手で掴み、そのまま地面に叩きつける。

その衝撃は地面が陥没し、ヒビが入るほどだ。

「ガハッ!!」

その衝撃にミネルヴァの顔は苦痛に染まり、口から血を吐き出す。そのまま地面にもう一度叩きつけ、観覧車を支える支柱へと投げつけた。

廃園となり、錆びていたせいか支柱へ当たった瞬間、観覧車が音を立てて崩れ始め、ミネルヴァは瓦礫の中に消えていった。

終わったと思いい、へウイトリクを解き後ろを向いた瞬間、観覧車の瓦礫が凄まじい音を立てて吹き飛び、鬼の形相のミネルヴァが這い出てくる。

「よくも…よくもよくもよくも!!楽には殺さん!!苦痛は与えて殺した後!チリも残さないほどバラバラにしてやる!!」

「驚いたな…骨折してもう動けないと思ったんだが…」

これは皮肉ではなく、本心からの言葉だ。今のミネルヴァは全身傷だらけの状態でありながら向かってくる。この執念に驚いたなのだ。

その執念は恐ろしいが今のミネルヴァにこの状況を打破できるほどの切り札はない。

そのはずの彼女が右にある、あるものを見た途端、ニヤリと不気味な笑みを浮かべる。

視線の先には回復処理を行い、立ち上がった美紀恵がいた。

蓮がまさかと思った瞬間、ミネルヴァは美紀恵に向かって全速力で走っていく。ミネルヴァは美紀恵を状況打破の”人質”にするつもりらしい。

距離的に今から走っても追いつかない。先ほどのようにへウイトリクゝの能力で氷の刃を降らせる方法もあるが、この力は手に入れて日が浅い。ミネルヴァだけを狙って攻撃出来る自信が無かった。

仕方なしに地面に転がっていた鉄パイプを蹴り上げ、右手で掴み狙いを定める。それでもミネルヴァが美紀恵を捕らえる方が早い。

この状況に心の中で舌打ちを漏らす、美紀恵が近くに落ちていた『アリス』のブレードを拾い、ミネルヴァを見事な剣さばきで攻撃する。

だが、その構えは両手を上に構える特徴的なもので、その構えといい剣さばきといい、新兵である美紀恵らしくないものだ。

蓮には見た事がないものだだったが、ミネルヴァとそれを見ていたセシルは驚いた様子だ。彼女達には見覚えがあるらしい。

「まさか…お前が装着者の身体を乗っ取り…復活してくるとは…」

あり得ないという顔のミネルヴァ。美紀恵はそんなミネルヴァに静かに話し出す。

「ミネルヴァ…言ったはず。もし私の仲間を傷つけるような事があれば…私はあなたを許さない…」

「どこまで私の邪魔を…今度こそ！私は！お前になる!!」

凄まじい瞬発力で飛びかかるミネルヴァだったが、美紀恵はそれを冷静に回避し、すれ違いの時に素早い剣撃を繰り出し、ミネルヴァを斬る。その傷口からは血が吹き出し、地面を汚した。

「くっ…そっ…がああああ!!」

その痛みに耐えながらもまだ諦めず、再び向かってくる。次の瞬間、美紀恵とミネルヴァの間に蓮が割り込み、ミネルヴァの顎にへばスターの強力なアツパーを食らわせた。そのパワーにミネルヴァの身体が宙に飛び上がる。

「そんな…私は…アルテミアにやりたい…なる…んだ…」

「お前には無理だ」

そのまま右腕を手前に引いて力を溜める。すると、へばスターから光が溢れ出し、巨大な青い右腕を形作る。

ミネルヴァが前に落ちてきた瞬間、右腕を突き出すとそれにシンク口するように巨大な右腕がミネルヴァは殴り吹き飛ばした。

その凄まじい威力にミネルヴァは吹き飛ばされ、数回弾んだ後に地面に倒れる。

「ふう…で、お前は何者なんだ？」

へばスターを引つ込め、美紀恵ではない何者かにそう問いかける。相手はただ申し訳なさそうな顔をするだけだ。

「あなたにも…私のせいで迷惑をかけてしまった…。ごめんなさい、どんなに謝っても謝りきれぬ事じゃないけど…」

「質問に関しては無視か…まあいい、こういうのも仕事だから、謝らなくもいいよ。俺みたいな悪人には」

自虐気味に言った言葉に美紀恵は首を横に振り、ゆつくりと微笑んだ。

「いいえ、あなたは悪人なんかじゃない…それほどの力を誰かのために使ってくれた…そんな人を悪人なんて呼ばないわ。それと…私の頼みごとを聞いてくれて…ありがとう」

「っ…まさか、お前!？」

それだけ言うと美紀恵は地面に力なく座り込む。急いで近寄り、状態をチェックするが特に異常はない。気を失っているだけだった。

そして、約十秒ほど経過すると。美紀恵がゆつくりと目を開ける。

「も…どった…。って、あれ?なんで蓮さんがここに…」

目が覚めたこの美紀恵は雰囲気といい、この間いといい間違いない。美紀恵本人だ。本人に戻ったならば、自分の事を不審がられてはならない、あくまで無知であるとアピールする必要がある。

「お前こそ、朝っぱらからこんな所で何してる。こんな寂れた遊園地で童心に戻ってたのか?」

「ち、違いますよ!!あつ!そう言えばミネルヴァ・リデルはどうになりましたか!？」

「どうなったって…お前が倒したじゃないか」

親指で後ろに倒れているミネルヴァを指すと、美紀恵は安心したようにため息をする。

その二人に『アリス』を纏った折紙が近づいてくる。

「…なぜあなたがここにいるの?」

一応自分がミネルヴァを倒した現場を見られてはいない筈だが、折紙は疑いの目を向けているのを感じる。それに惚けた様子で返す。

「別に好きでここに居るわけじゃないからな。近くを通っていたら大きな音がして、来てみただけだよ」

折紙はこれが嘘だとすぐに看破した。ここは廃園の遊園地、近づくと理由がない。

しかし、これが嘘という証拠もないため、ここは黙るしかない。そんな事より今は重要視するべきか事がある。

「ミネルヴァ・リデルが倒れたんだったら、もう争わずに済みます…」

美紀恵の安心した言葉。だが、折紙は首を横に振りそれを否定する。

「…いや、それは彼女達の出方次第…」

折紙の見据える先にはセシル、アシュリー、レオノーラの三人が歩み寄ってくるのが見えた。その表情はお世辞にも友好的な顔であるとは言えない。

「…共闘、感謝するわ。私達三人だけではミネルヴァを倒すことが出来なかったでしょうから…ありがとう」

「いえ…お礼なんて…それより私達の戦いもこれで終わりですよね…？」

「いえ…まだ大事な仕事が残っているわ。そこにあるジャバウオックと…あなた達二人のアシクロフトの奪取が…」

アルテミシアを復活させるには五機全てのアシクロフトが必要。そのためには当然、『アリス』と『チェシャー・キャット』も必要だ。「ま、待ってください！もう戦う必要はありません！ミネルヴァ・リデルを連れて帰ればASTも動いてくれます！」

これ以上血を流す争いが嫌な美紀恵は必死にそう訴える。しかし、それを無にしたのはセシル達ではなく皮肉な事に仲間である折紙だった。

『アリス』はまだ渡せない。私は家族を奪った精霊に復讐するまでは…」

「その気持ち、分かるわ。私もSSSに入った理由は目と脚を奪った精霊への復讐だった…だけど、そんな私を救ってくれたのはアルテミシアだった。アシュリーとレオもそう…今度は私達がアルテミシアを救う番、悪いけど、その精霊を待っている余裕はない…」

「そう…なら、戦うのみ…」

この場を一触即発の空気が支配したのを感じる。セシル達にも折紙にも譲れないものがあるらしい。そんな中、蓮は『まったく…』と言わんばかりの目で二人を見つめる。

(…どいつもこいつも、自分の都合だけで話を進めやがって…)

この中で自分の都合も関係なしに相手を考えているのは美紀恵だ

けだった。この場の争いに善も悪も無い、ただ、自分の望みを叶えるのに夢中で相手の事を考える余裕が無いのだろう。

セシルも折紙の気持ちがかかるし、折紙もセシル達の気持ちがかつているのだろうか、正しさだけで行動出来ないのが人間という生き物だ。

「蓮、あなたは離れていて。この戦いにあなたを巻き込みたくないわ」セシルのこの言葉は、折紙に肩入れされると困るから言ったのか、それとも純粹に巻き添えにしたくないからなのかは分からない。

どちらにしろ、これに逆らって得はない。仕方なしに立ち上がり離れていく。

「蓮さん…そんなーもう戦う理由はないんですよー!」

美紀恵のこの反応を見ると、もしかしたら止めてくれるのを期待していたのだろう。そんな期待も呆気なく裏切られてしまった。

折紙はきつと美紀恵が戦いたくないと言ったら一人でも戦うだろう。

「…私は少し準備があるから、その間二人を引きつけておいて」

セシルはアシユリーとレオノーラに前線を任せて、後ろに下がる。

その行き先は再起不能となっているミネルヴァだ。

彼女が倒れて『ジャバウオック』が浮いた状態となった。それを活用しない手はない。

だが、その道には蓮が立っていた。邪魔をするつもりかと思っただが、構えていないし、〈バスター〉を出しているわけでもない。

本当に立っているだけなのだ。

セシルは申し訳なさそうな顔をして、その横を通ろうとしたが…。「……………」

すれ違う時、セシルにだけ聞こえるほどの小さな呟きを言った。それを聞き、セシルの足が止まる。

「…残念だけど、それは無理よ」

そうとだけ言い、また足を動かし始める。一方、折紙はアシユリーとレオノーラ相手に互角の戦いをしていた。

始まりはDEMの一部の人間によるものだったのに、今はDEMと

はなんの関係のない折紙やセシル達がなぜ戦っているのか、奇妙な運命だと感じる。

「待たせたわね。準備は整ったわ！一気にたたみかけるわよ！」

そこに『ジャバウオック』を装着したセシルが合流する。これで三対一、セシル達が圧倒的有利になった。

「これで三対一！凌げるかしら鳶一 折紙!!」

折紙とセシルがぶつかり合う瞬間、美紀恵がその間に割って入り、二人の攻撃を受けた。

「美紀恵!!」

これには蓮も戦闘中である事を忘れて側に駆け寄る。幸いにも急所には当たっていない。

「ど、どうして割って入ったりなんか…」

「お願いです…もう戦いはやめにして下さい…アシククロフトの中でアルテミシアさんは悔いていました…自分の力が争いを呼んでしまったと…だから…もう終わりにして下さい…」

「アシククロフトの中の世界…じゃああの動きはやっぱり…なら、尚更早く出してあげないと…」

美紀恵がこれほどの事をしてても理解されず戦いは続けられようとしている。

それを止めるため、傷ついた身体で立ち上がろうとする美紀恵に蓮は肩を貸す。

「蓮さん…すみません…」

「美紀恵、回復処理でなんとかならないのか？」

「さっきの戦いで使い切って…厳しいんですけど…絶対に止めないと…」

自分ではない誰かのためにここまでする美紀恵を蓮は止められるとは思えなかった。

しかし、その美紀恵はもうボロボロ、この意思を無駄にしたくない。こうなったら自分が力尽くでこの場を抑えようと思い始めた時。

戦っていた四人の動きがほぼ同時にピタリと止まった。今は戦闘中、こんな事はあり得ない事だ。

「今の声…みんなに聞こえたんですか…？」

「声？なんの事だ？」

「アシユクロフトに搭載されているナビゲーションAIのベルの声ですよ」

「何言っているの…アシユクロフトシリーズにはナビゲーションなんてついてない…あなたの『チェシャー・キャット』にも…」

セシルのその言葉に美紀恵は驚きを顔に出すが、蓮は知らないと思わせるために分からないふりをしているが、内心驚いていた。

ナビゲーションがついていないなら、パソコン越しに話していたあの存在はなんだったのだろう。

「それに…今の声は…アルテミシアの声…！」

何やら蓮も状況がよく分からないまま話が進んで行っている。こくなったら、美紀恵に何を話しているのかを聞くしかないようだ。

「アルテミシア…どこから話して！一体どういう事なの…：…：…：何を言うのアルテミシア!!」

「美紀恵、どういう会話をしているんだ？」

「アルテミシアさんが…もう戦わないでと言ってきてます…」

すると、周囲にガシャツという音が響く。この音も正体はレオノーラがアシユクロフト『レオン』の武装であるライフルを落とした音だ。

「私…もうやめる。その子が…頑張るのを見ていたから…私もその子を信じる…」

「私もだ…完全に信じたわけじゃねえが、アルテミシアがそこまで言うなら…やめるしかねえじゃねえか…」

アシユリーもレオノーラと同じように、武装のランスを地面に落とす。これで残ったのはセシルだけになった。

セシルは美紀恵を見つめた後、蓮をじっと見つめる。

(…あなたの言う通りになったわね…)

『ジャバウオック』を取りに行く時、すれ違いざまに言われた言葉がリピートする。

『俺たちは分かり合える』

今となつては未来すら見えていたのではないかと思ってしまうほ

どの言葉だ。

いや、もしかしたらこれは予言ではなく、蓮の願いだったのかもしれない。

「…私も美紀恵を…いえ、二人を信じるわ。以後はあなたに従う…戦いはこれで終わりよ…」

それを聞いて、美紀恵は嬉しそうにしながら涙を流す。泣くのか笑うのかどっちかにしろと思いつつながら、蓮は美紀恵の頭を乱暴に撫でる。

三人はこう言ったが、まだ一人…折紙が残っており、彼女はまだこれに同意していない。

「…私は…まだ…『アリス』を手放すわけには…」

折紙はそう言うが、その顔には迷いが見える。彼女もこの状況を見て、それが自分のすべき事…正しい事なのか分からないようだ。

そんな折紙に美紀恵が近寄っていく。

「折紙さんが復讐にかける思いは知ってます…でもその方法はアシュクロフトだけではないはずです…『アリス』は手放しましょう…私もお手伝いしますから…」

折紙は何も言わない代わりに手に持ったブレードを地面に落とすた。

「…現時刻をもって元SSSのメンバーとの戦闘を終了。彼女達は重要参考人として基地に連行し、ASTの指示に従うものとする」

そう告げた。それを聞いて美紀恵は嬉しそうにしながら折紙に礼を言う。

「まだ安心するには早い…とりあえず、彼女達連れて基地に向かう必要がある」

「あら、今度は正面から入っても大丈夫かしら？コツソリ入るのは結構しんどいもの」

セシルの冗談に苦笑いが生まれる。蓮も基地に戻ろうと歩き出すとした時。

「危ない!!」

必死の表情のセシルにいきなり突き飛ばされた。その瞬間、蓮の顔

のすぐ横をレーザーのようなものが通り、それはセシルに当たり、地面に倒れる。もし、セシルが庇わなかったら蓮にとって致命傷の攻撃になっていただろう。

その攻撃が来た方向に顔を向けるとそこには…

「させん…させんぞおお…アシユクロフトは…絶対に渡さない…」

歯を食いしばり、血走った目で歩いてくるミネルヴァがいた。

よく見ると、左手は力なくぶら下がり、右脚を引きずるように歩いている。こんな状態では歩くどころか立つ事すら困難なはずの重傷で向かってくるとは凄まじいほどの執念だ。

(この…クソ野郎がっ!!)

蓮はこれほど一人の人間を心底憎いと思った事はないだろう。だが、僅かに残った理性が『セシルの容体を見るべき』と考えていた。

ミネルヴァはいつでも殺す事は出来る。しかし、セシルは死んでしまったらそれで終わりだ。自分を救ってくれた恩人を死なせてしまったなど、絶対に許せなかった。

怒りを抑えて倒れたセシルに近寄る。ミネルヴァは美紀恵と折紙が向いているので不意打ちを食らうことはないだろう。

「セシル！セシル！しっかりしろ！」

アシユリーとレオノーラは泣きそうな顔で必死にセシルに呼びかけている。

「おい！セシルはどうなんだ!!」

「まだ脈はある！だが出血が激しすぎる。ここにはまともな医療器具がない、処置をしようにも…」

「弱音を吐くんじゃねえ！絶対にセシルを助けろ！助けてくれえ…」

粗野な性格のアシユリーらしくない、弱々しい発言だ。それを聞いて少しリスクがあるが、アレを使うしかないと判断する。

「方法はある、そのためにはお前達二人に協力してほしい事がある」

「…っ！何をすればいいんだ!?!」

「二十秒…いや、十秒でいい、目を閉じろ」

こんな事態なのに何を言っているのだろうか、アシユリーとレオノーラが思った事はそれだろうと予想する事は、二人の表情を見れば

簡単だった。

「てめえ！こんな時に何を…」

「待ってアシュリー！蓮を信じてみようよ…それしか希望がないんだから…」

レオノーラにそう言われて、アシュリーは目を閉じる。レオノーラもお願いと言った表情をした後、目を閉じる。

美紀恵がこちらを見ていないのを確認して、〈バスター〉を右手に出し、セシルの傷口に触れる。

そして、意識を集中させると、青い光が溢れ出し、セシルの身体に吸い込まれて傷が癒えていく。

それと同時に凄まじい疲労が襲いかかり、右腕は元に戻り、地面に倒れこんだ。

「セシル！お前！どうやって完治させたんだ!？」

十秒経過し、目を開けたアシュリーが驚きの声を出す。だが、すぐにそんな驚きも忘れるような出来事が起きた。

『チェシャー・キャット』以外の四機のアシクロフトが光り輝くと分裂し、飛んで行った。

周囲の瓦礫などを巻き込み、一つに集まっていき、巨大な怪物^{モンスター}へと変化した。当然だが、アシクロフトにはこんな機能はない。

怪物が大きく吠えると、怪物を中心に結界が張られて閉じ込められる。この結界は『アリス』と同じものだ。

結界で逃げられなくなった後、いきなり光る球体のようなものが周囲に浮かび上がると、そこから激しい射撃が発射される。これはレオノーラが装備していたアシクロフト『レオン』の攻撃だった。

結界によって密室になっているこの空間にその攻撃はとても脅威だ。何回も反射して美紀恵達に襲いかかる。

それは当然、蓮にも向かってくる。

(くっ!!)

セシルを抱えて逃げようにも今のまともに動けないこの身体では無理、だとしたら防御するしかない。

最後の力を振り絞り、〈バスター〉を出すと、自分とセシルを包み込

ませる。

残酷だが、レオノーラとアシユリーは守らない。守備範囲が広くなればその分耐久力がダウンするため、そこまでの余裕がないのだ。

砲撃が〈バスター〉の防壁とぶつかる。一秒が永遠とも感じられる時を過ぎ、限界を迎えたのは最後の砲撃は止んだのと同時だった。

しかし、それで終わりではない。まだ周囲には瓦礫などが舞っている。それは神のいじめか、そのうちの一つがセシルの頭に向けて落ちてきた。

〈バスター〉はもう出せない。セシルを動かすのも無理。だとしたら残された手は…

—————

セシルは自分の顔に何か生温かいものがついているのを感じる。ボンヤリとする頭で自分が最後にどうなったかを思い出す。

(…確かミネルヴァの攻撃から蓮を守って…)

そこまで思い出して、一瞬で意識が覚醒して、目を開ける。そこには蓮の顔がすぐ近くにあった。

「よお…目が覚めたか…」

「あなた…それは…」

セシルが驚いたのは、蓮の顔が近くにあった事ではない。頭から流れ落ちていく赤い血だった。その血が自分の顔に流れ落ちている。

そして、自分の顔の横には赤い液体が付着した瓦礫、セシルは自分が自分を盾にして守ってくれたと理解した。

「なんで…そこまでして…私を守ってくれたの…?」

瓦礫の大きさを見る限り、気を失ってもおかしくないし、今も意識がハッキリしていないほどの怪我らしい。

なぜ捨て身で自分を救ってくれたのか聞くと、蓮は力なく笑った。

「そりゃあ…冗談でも…笑えないからな…あれだけの力があつたのに…守れな…かった…なん…て…」

そこで限界がきたのだろう。蓮は力尽きるようにセシルの胸の上に倒れこんだ。死んではいない、気を失っただけだ。

セシルは倒れた蓮を胸の中で抱きしめた。なぜ自分がこんな事を

したのは分からない。ただ、今は無性にそうしたかった。

後日、蓮は航空機に乗り、イギリスへと向かっていた。当たり前だが、帰国が目的ではなく、セシル達三人の移送任務のためだ。

怪物：暴走したアシクロフトはアシクロフトのネットワークを利用し、すべてを自壊させる事では停止した。

それはアシクロフトすべてを壊す事になり、それはアルテミシアも例外ではない。

美紀恵とセシル達の表情が沈んでいるのもそれが理由だろう。今も折紙が美紀恵を励ましている。

(結局、この戦いで誰が何を得たのか…)

包帯の巻かれている頭を触りながら考える。

新型顕現装置リアライザを巡って起きたこの戦い、そのアシクロフトはすべて半壊の小さなチップへと変わり果てた。

それにはもう精霊を倒せる力などもう無い。

着陸した後、燎子が点呼をとり、三人の移送を確認する。三人はSSから来ている引き渡し担当者によって引き渡される流れだ。

「随分沈んでいるわね。セシル・オブライエン、久々に故郷の土を踏んだのに」

「…もうどうでもいいわ…どこに行こうとアルテミシアの笑顔は無いのだから…」

蓮は静かにそう言うセシルの車椅子を押しして担当者の元へ向かう。

「あなた達三人はこれから監視を兼ねて…私と共に生活してもらいます…」

引き渡し担当者は女性だ。

セシルと同じ車椅子に座り、栗色の髪をなびかせ、優しくそうに微笑んでいる。

蓮は彼女を見るのは初めてだが、アシユリー、レオノーラ、美紀恵は驚きに目を見開き、セシルは目が見えないので状況がうまく理解出来てない様子だ。

折紙は相変わらず無表情で、燎子と蓮は小さく笑った。

「おかえり…みんな…そして、ただいま…」

「アル…テミシア…?どうして…」

「ふふふ…どうしてでしょう?」

アルテミシアのその言葉と同時にアシュリーとレオノーラが涙を流してアルテミシアに抱きつく。

蓮はセシルをアルテミシアの前まで近づける。残ったセシルも声で誰かが分かった様子だ。

「その声…まさか…」

「セシル、最後に奇跡を見せるぞ。もうタネも分かりきっているが…必ず驚かせるのを約束するぞ」

美紀恵達からは右腕は身体の影に隠れて見えない、レオノーラとアシュリーはアルテミシアを見ていて気づいていない。

この隙に〈バスター〉を出してセシルの両目に触れる。指を離すとセシルの両目が開き、目の前の光景を映し出す。

「本当に…アルテミシア…なの…?」

「ええ…おかえり、セシル…」

セシルはアルテミシアの手を握り涙を流す。蓮の言った通り、セシルは驚き、喜び、涙を流した。

「セシル!?なんで目が…」

「きつと、神様がこの時だけは許してくれたんじゃないか?」

セシルの目が見えている事に驚く二人に蓮が冗談混じりにそんな事を言う。

「アルテミシア…でも…なんで無事だったの?アシユクロフトは全部壊れたはずじゃあ…」

「それは…彼が助けてくれたの」

そう言つてアルテミシアが見つめる先には蓮が立っている。セシル達にはこの言葉の意味がよく分からない。

「1%と生かすために九十九%を壊す…俺がよく使う手段だよ…それじゃあな、四人で仲良くな」

そう言つて離れていく蓮をセシルが何か想うような目で見つめて

いたのを、アルテミスシアは見逃さなかった。

「セシル、彼に…伝えたい事があるんでしょ？」

「えっ…いや…私は…その…」

「これを逃したら、次に会うのはかなり先になってしまうわ…大丈夫、彼はあなたを拒んだりしないわ。私が保証するから」

セシルはその言葉に小さく頷く。

「待って、最後にあなたの顔を…見ておきたいわ」

それを聞いて、蓮はセシルの前に回り込み、肘掛けに手をつき、身を乗り出すようにする。

セシルは蓮の顔を両手で包み込み、じっと見つめる。

「私達がここにいるのは、あなたのおかげ…感謝するわ…蓮…」

そう言つて、セシルは目を閉じると、自分の唇を蓮の唇に重ねた。キスをしたのだ。

これには見ていたアシユリーとレオノーラはもちろん、蓮も目を見開いて驚いた。

そんな中、アルテミスシアだけは微笑みながらそれを見ている。

（ありがとう…美紀恵ちゃん…蓮くん…いえ……………）

……………ジェイク・L・メイザース…ロウ